

---

# 史上最強のド素人

ゲレゲレ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

史上最強のド素人

### 【Nコード】

N7425N

### 【作者名】

ゲレゲレ

### 【あらすじ】

ケンイチを書いてみたい……そんな感じで書いてみました。

この話は、“ケンイチたちから見て”チートものの二次小説です、そのようなものが苦手な方はご了承ください。

最初の方の話は、まだ作者が未熟過ぎたために、文がおぼついていない感じです、その辺はご了承ください。

200万PV達成(涙)……感謝です!!

途中から、文章体が変わったりしている所が有ります。

それはゲレゲレの成長の証です。なので、あまり気にしないでも大丈夫です。

一月二十七日現在、一話からちまちまと、変な文章を修正中……  
現在、第二話まで修正完了。

## プロローグ（前書き）

ゲレゲレです。

今回の二次小説は、ただケンイチのを書いてみたいな。そんな考えで書いた感じですよ……。

ですので、現在他になのはの二次小説も書いているのですが、メインはなのは、こっちはサブ的な感じですよ。

つまりこっちの更新は完全に不定期と言う訳ですよ。

それではどうぞ。

## プロローグ

「亮平！あんだ、またうちのチームに手を出したって本当なのかッ！？」

ここは、とある高校の廊下……。

其処で今、奇抜な格好をした少女に呼び止められた少年がいた。

おにじまきやうへい 鬼島亮平。今年、この荒涼高校に新しく入学してきた新一年生だ……。

しかし、新一年生といつても、その亮平の姿を見たものは皆こぞって言う事が一つ有る。

『君、本当にこの前まで中学生だったんだよね？』

その原因は亮平の体格にあり、身長は185cmと発育良好で。体格は、着ている学ランの胸・背中・腕・足の部分がはちきれんばかりに筋肉が発達しており。傍目から見たら100kgを超えているのではないかと見えるぐらいだが……しかし、実際は92kgと見る人が見たら驚愕する数値を叩き出している。髪型は黒の髪を軽く後ろに流した髪型で。顔は初見では怖がられるものの、慣れた人間にとっては。良く見ると優しい顔立ちをしているようにも見えるとの事。

そんな少年は、今声を掛けて来た少女の方へと顔を向けた……。

「ん？……なんだキサラ姉ちゃんか。それなら勘違いだよ。実際は俺のほつが絡まれたんだよ。俺はただそれに付き合っただけだ」

亮平にキサラと呼ばれた少女……名前は南条キサラ、荒涼高校の二年生だ。

その少女の格好は、頭に帽子を被り。赤い文字Tシャツに、下は左足の付け根から下をバツサリと切ったジーンズ。そして靴は上履き等では無く、ブーツを履いている。完全に制服などを着る気が無い格好だ……。

そんな彼女は、亮平の何とも為しに言った態度が気に入らなかったのか。さらに亮平に対し、強い口調で捲くし立てる。

「あんた分かってるのか！？うちのチーム『ラグナレク』はこの辺じゃ一番規模のデカイチームなんだぞ！？幾らアンタが強いって言っても、数で押し切られたらどうにもならないでしょ！？」

そのキサラの言葉を、亮平は面倒臭そうに返す。

「大丈夫だって、キサラ姉ちゃん……。大体この前、そのチームの第二拳豪つてのを俺がボコったばっかじゃん。あの程度の奴がナンバー2だったら大した事無いって。それに、本当にヤバくなったら逃げるから大丈夫だって……」

「それでもだ！！それにあれより強いのが、うちのトップなんだから余計に危ないんだよ！大体あんた、前からうちに目付けられてんだから少しは大人しくしてろ！」

しかしキサラは尚も亮平に対し苦言を呈す。

だがそれでも亮平の態度は変わらない……。

「だったら久賀館先輩くがたかに頼めば良いだろ。あの人、キサラ姉ちゃんのチームの幹部なんだろ？」

「フレイア姉にはもう言ったよ。でもこっちにも面子ってもんがあるんだよ！だから少しは大人しくしてろ！分かったか！？」

「あゝはいはい……分かりましたよ。じゃあ、この話はもうお終いだね。じゃ遅刻だから急ぐわ」

そう言っつて亮平はこの場を後にする……。

「あッ!?!ちよ待て!?!まだ話は終わつて無いんだ!?!」

そのキサラの叫びも、最早亮平には届かなかつた……。

この二人の関係は、昔からの幼馴染と言つた関係で。何故亮平がキサラを姉呼ばわりするのかと言つと……昔、キサラが亮平に対し、自身を姉と呼ぶように言いつけていたからである。

キサラとの話を無理やり打ち切つた亮平は、自身のクラス、1 - Eの目の前で。

何だか冴えない青年と出くわしていた……。

「おゝ兼一。お前も遅刻なんだな」

「あッ!亮平君もなの?」

亮平に兼一と呼ばれた冴えない青年の名前は白浜兼一。

この青年は、亮平がこの学校に入学した際に初めて出来た友人である。亮平にとって兼一は、何と無く馬が合うと言つか。イジつた時の反応が面白かつたというか……まあ、普通の友人関係である。

「まあそんなとこ。じゃあ遅刻者同士、一緒に怒られるとしましよつか」

「はは……そうだね」

そう言つて、亮平と兼一の二人は自身の教室へと入つていった……。

それから暫く経ち、現在1-Eの廊下では、二人の対照的な青年が、両手に水の入ったバケツを持って立たされていた……。

「たくあのハゲ……。バケツ以外に罰を考えられんのか？」

「はは、仕方ないよ。悪いのは遅刻した僕等なんだから」

亮平は、そう言つ兼一に対し。先程から気になっていた事を聞く事にした。

「なあ兼一やい。さつきから気になつてたんだが……。その顔は何だ？ 朝一番だつてのにポロポロじゃないか？」

「え！これはその……」

そう言つて兼一は顔を俯かせた……。

亮平が言つた、兼一の顔は所々に絆創膏を張り、目の一部が軽く腫れている状態であつた……。

「また空手部か？あの部活つて、そんなにキツイのか？」

「ま……まあね」

兼一は苦笑いで、亮平の疑問に答えた。

その兼一の様子が明らかに変だと悟つた亮平は、一先ずこの話を切り上げる事にした。

「そうか……。まあ、そんだけ一生懸命に頑張つてるって事なんだよな。じゃあ、陰ながら応援させてもらつとするよ」



「ありがとう……（やっぱり亮平君は凄いな）。あんなに強いのに、その力を無闇に振るったりしないんだから。よし！僕も亮平君みたいにになれるように頑張ろう！」

兼一がそうやって、やる気を出している横で。亮平は思考に耽っていた……。

（それにしても怪しいな、兼一の態度は……。大体、未経験者の新入生に怪我させる部活なんてあるのか？こりゃ、一回調べてみるかな……他ならぬ友人の為に）

亮平は密かに、自身のこれからの行動を決定していたのだ……。

## プロローグ（後書き）

はい、という事でケンイチです。

前書きで書いた様に、こっちの更新は不定期です。

その辺、ご了承して下さいさると助かります。

ではノシ

一月二十七日現在、色々変な文章などを一話から修正中。

第一話 『掌鬼』（前書き）

流石にプロローグだけでは何なので……。

それではどうぞ。

## 第一話 『掌鬼』

その日の授業が一通り終わり、現在は運動部等の掛け声が学校中に響き渡る放課後の時間。

そんな放課後の時間に、亮平のクラスである1-Eの教室で。何やら怪しい雰囲気醸し出す二人が居た……。

「それで鬼島君？この新島にいしま春男はるおに何の用で御座いましょうか？」

そう言った、男の外見は一言で言えば宇宙人だ。決して……決して面倒臭かった訳ではない。

「やめる寄るな、くっ付くな気持ち悪い……。まあ用と言うよりも聞きたい事があるだけなんだが」

現在、亮平はこの学校で一番の情報源である男に。友人の兼一が所属している空手部について、何かしらの情報を得ようとしていた。この宇宙人の特性は、強いものに媚、弱いものを踏みにじる特性を持っており。正直個人的には関わりたく無いのだが……。  
しかし持っている情報量だけは馬鹿には出来ないもので、渋々といった感じで尋ねる事にしたのだ。

「聞きたい事？」

「ああ、兼一が所属している、この学校の空手部の事が知りたい。今朝のアイツの顔、お前も見ただろ？あれはどう考えても異常だ……だから教える」

「そのような事でしたら、容易い御用ですよ」

亮平の問いに、目の前の宇宙人は喜々とした表情で答えて見せた

……正直気味が悪い。

「ここの空手部の連中は血の気が多い奴等ばかりですからね。あの『フヌケン』じゃ、良いサンドバック代わりじゃないですか」

その宇宙人の言葉を聞いた亮平は一瞬表情が強張るも、直ぐに元の顔に戻り。この教室を後にしようとするが……何故か教室を出る一歩手前で、急に立ち止まってしまった。

「新島よ……次、俺の前で兼一の事をその呼び方で呼んだら……。その鼻、握りつぶすから気を付けるよ？」

その亮平の口調は何処か冷たさが感じられるものであった……。そして、亮平はそのまま教室を後にした。一方、教室に取り残された宇宙人はと言うと……。

(ふ)……流石にビビったぜ。なんせあの『掌鬼』の鬼島だもん……。なんでそんなのが、フヌケンなんかとダチに成ったのかは分からないが。これからは気を付ける事にしよう)

宇宙人はまた一つ、これからの身の振り方を学ぶのだった。

そして亮平は、空手部が練習している武道館へと向かおうとしていたが。

今朝、話を途中で無理やり切ってしまったキサラに捕まってしまったのだった……。

「亮平！アンタ逃げるのもいい加減にしなよ!？」

「今度はなんだよ?」

強い口調で捲くし立てるキサラに対し、亮平はこれまた面倒臭い感じで答えるのだった……が。

次のキサラの言葉に、態度を一変させる。

「亮平……あんた。フレイア姉の『ワルキューレ』部隊……。その髪の毛の短い子に手を出したって……本当かい？」

「!?!」

亮平の反応に、キサラが纏う雰囲気が一層冷たいものへと変わる……。

「へ〜〜……その様子だと、噂は本当だったんだ。ラグナレクに目を付けられてるって言うのに、良いご身分じゃない？で？……何処まで手を出したの？正直に言わないと……玉蹴るよ？」

そのキサラが放つ言葉は、十分に亮平を恐怖と絶望のどん底へと突き落とせる物であった……。

「いや……その……」

「その？」

「まだメルアド交換しただけ……だよ」

「そう、じゃあそのメルアドを……今、ここで消せ。ほら、早くしろ」

(毎回毎回なんなんだよ!?!いいじゃんメルアドくらい!?!いいじゃん夢を見たってさ!?!)

「なんだ?何か文句でもあんのか?」

「いえ……無いですよ?」

「そうか、じゃあ早く消せ」

そのキサラの催促に、亮平は泣く泣く折角ゲットした女の子のメ

ルアドを消す事にした……しかし、何故キサラの言う事を、こつも素直に亮平が従うのかと言うと。

前に、本気で抵抗して見せた所（言葉や態度で）。本気で、問答無用で、そのブーツのつま先部分で、男の大事な袋を蹴り上げられたからである。あの時の痛みは忘れない……。

メルアドも消し、他にもキサラの小言に対応していた亮平は、気づかぬうちに時間が経ってしまった事に気づき。自身の携帯で時間を確認した所、もう既に部活が終わってしまった事に気づく。

その事に気づいた亮平は、取り合えず用事は明日に回すことにし、目の前のキサラに別れを告げる事にした……。

「やべ、もうこんな時間じゃん……。取り合えずキサラ姉ちゃん、今日はこの辺で勘弁して」

その亮平の言葉に、キサラも時間を確認する。

「ああ、そうだね。じゃあ、今日はこの辺にしといてやるよ……気を付けて帰れよ？ アンタは、ただでさえ目え付けられてるんだから」

「わかってるよ。じゃあな、キサラ姉ちゃん」

その亮平の言葉で、この場は取り合えずの終了をみた。

キサラと別れ、暗い夜道を下校中の亮平の前に五人の厳つい男たちが姿を現す……。

「鬼島あ！！てめえラグナレクに手を出して、無事に済むなんて思ってたねえよな！？」

その一人の言葉を皮切りに、他の男たちも亮平に対し、罵声を飛

ばす。

しかし、亮平の方は至って平然としていた。

「あゝ、毎回言ってると思うが……手え出して来るのはそっちだろ？」

そう言いながら、亮平は辺りの状況を見渡す……。

現在、亮平が立っている場所は、少し狭い道で。亮平の左側には駐車場の下がブロック、上がフェンスといった、在り来りな敷地が設けられている。反対側には、この状況を見ていない振りをする者達や、野次馬達が集まり出している状況であった。

そうやって周りを見渡していた亮平に対し、目の前に居る五人のうち、バンダナを頭に巻いたドレットヘアの男が、亮平にガンを垂れながら近づいてきた……。

「ああゝ？何ボーっとしてんだてめえ！！」

そう叫びながら、男は亮平に対し、右の振りが大きい回し蹴りを仕掛けてきた……。

ガッ！

「な！？なに掴んでんだてめえ！？」

しかし、その蹴りは亮平の左手によって掴まれてしまった。

掴んだ亮平自身は、ただ手を出し、そこに来た足を掴んだだけの仕草だった……。

「今回は人数が少ないな……まあいいか」

「てめえ何言ってる……」



何やらブツブツと喋り出した亮平に対し、右足を掴まれたままの男は怪訝な表情をする。

しかし、その表情も、次に亮平が行った行動により一変する事になる……。

メキャツ！！！！！

「アアアア、ア、〇× \*¥！！！！」

亮平が取った行動は至ってシンプルな物だった……。

亮平が取った行動は握っただけ……そう、その相手の右足を思いっきり握っただけだ。

しかし、その行動が与えた被害は甚大なものだった……。

「悪いな、俺も今日は疲れてるんだ。早く帰りたいたい……」

亮平はそう言いながら、目の前で右足を押さえながらのたうち回る男を見下げる……。

その男の右足は、掴まれていた脛の部分が服越しても分かるぐらゐに潰れてしまい。もはや、先程まで真っ直ぐだった脛は其処には無く……あるのは新たな足首を得たように、脛の半分から折れ曲がった、脛だったものだけだった……。

その余りに突然に訪れた凄惨な光景に、野次馬も含めた亮平以外の人間全ての時が止まった。

「早くコイツを連れて帰ってくれないか？今ならコイツだけで済ましてやるが……どうだろうか？」

既に時が止まってしまった目の前の男たちは……その亮平の言葉に、冷や汗を流すだけしか反応が出来なかった。その様子を確認した亮平は、その目の前の男たちに笑顔を送りながら、目の前を陣取

っていた男たちを素通りし、帰宅の路へと付いた……。

## 第一話 『掌鬼』（後書き）

この二次小説の主人公は、異常な身体能力を誇る。  
偉大なる素人的な設定です。

チート物は書くのが苦手なので上手く書けているか心配ですが。

今後ともに宜しくお願いします。

ではノシ

## 第二話 転校生（前書き）

今回はあの子の登場です。

そしてこの場を借りて、亮平のイメージを皆さんに分かり辛く伝えたいと思います。

亮平のイメージは『餓狼伝』の丹波文七を高校生の様に若返らせ。そのままケンイチの世界にぶち込んだイメージです。

どうです？分かりづらいでしょ〜……すみません。

## 第二話 転校生

今日は入学以来、初めて遅刻せずに教室へと入ることが出来た日。そんな微妙な快拳を成し遂げた亮平の前には今、転校生を紹介している真つ最中である、教師のハゲが、兼一が入って来た瞬間に黒板消しを投げつけ。そのまま廊下に恒例のバケツ持ちで立たせるといった風景が展開されていた……。

「松竹林高校から来ました、ふうりんじ風林寺美羽みづです。よろしくお願いいたしますですわ」

風林寺美羽と名乗った女子転校生は、そんなよく分からない言葉遣いで自己紹介を終えた。

その女子転校生は、若干地味な格好ながらも、制服のブレザー越しからでも分かるぐらいな悩ましいプロポーションを誇っており。容姿も眼鏡に、長い金髪を一本の三つ編みにした、おでこを完全に出している地味な女子生徒みたいな感じなのだが。実際よく見ると、かなりレベルの高い美少女だという事が分かる。

そして、亮平のクラスの担任であるハゲが、その女子生徒の席を指定する……。

「あゝ風林寺君の席は……その窓際の席だな」

そう言ってハゲは、亮平の一つ前の席を指す。

現在の亮平の席は、窓際が一番後ろの席である。

そして、その風林寺と名乗った女子転校生が亮平の前の席へと近づき席についた。

思えば入学してまだ一ヶ月しか経っていないのに、もう転校してくるのは。単純に考えれば、かなり珍しい事なのだが……人それぞれ

れ事情というものがあるので、亮平はその事については気にしない事にした。

そしてそのまま、朝のホームルームも終わり、一時間目が始まるまでの間に亮平は、前の席に座っている女子転校生へと声を掛けることにした。

「風林寺さんでいいんだっけ？ 俺は鬼島亮平、これからよろしく」

突然後ろから声を掛けられた事に驚いたのか、風林寺と名乗る女子転校生は一瞬ビクッと反応するも、直ぐに冷静さを取り戻し、後ろの席に座っている亮平へと振り向いた。

「はい、よろしくお願いしますすね。鬼島さん？ と、呼びびした方が宜しいでしょうか？」

「ああ、かまわんよ。それよりも風林寺さんは何か部活とかやってたの？ うちの高校、結構部活のレベル高いみたいだから」

「はい、新体操を少々……なので、部活もそこにしようかと」

（ふん、その体でレオタードはヤバイだろ……今度見に行くかな）

亮平は目の前の女性に対し、口が裂けても言えない様な失礼な事を心の中で呟いた……しかし、そんな事など目の前の少女が気づける筈も無く。

「鬼島さんは何かスポーツなどをやってらっしゃるのですか？」

その風林寺の問いかけに、亮平は笑いながら答えた。

「いや、残念ながら何もやってないよ」

「では、何かの格闘技などでしょうか？」

「格闘技もやってないよ……てか体を動かすなんて、体育とか以外

「にやった時はないな」

その亮平の言葉に、目の前の少女、風林寺美羽は怪訝そうな顔をする……。

「それでその体なのですか……それはすごいですわね」

「まあね……あ、先生来たみたいだ。じゃあ、転校初日だけど頑張っ  
つていこうか」

「はいですわ」

転校生である風林寺との会話は、そんな当たり障りも無い感じで  
終了をした……。

そして、全ての授業が終わり、亮平は今日こそ空手部の練習場に向かおうと意気込んでいたのだが……。「ちよ〜と待ってくれないかな鬼島君？」しかしその意気込みは、教室から出た瞬間に早くも  
出鼻を挫かれる格好となってしまうた。

「なんだ？……俺に何か用か？」

亮平を教室の前の廊下で呼び止めたのは、頭にバンダナを巻いた  
小柄な少年の様な男。

その少年の格好は、バンダナの他にも耳にピアスを付け、さらに  
短パンを履いた特徴的な格好をしていた。そしてその小柄な男は、  
その幼い顔に満面の笑みを貼り付けながら亮平へ近づいてきた。

「僕は蹴りの古賀太一って言うんだ。聞いた事無い？」

「知らん。大体、なんの用だ？」

亮平のその言葉に、古賀と名乗った男の雰囲気明らかに変わった。

「なんの用ってそりゃあ君、当然昨日の事じゃないか」

「昨日？」

「そう昨日……鬼島君さ、昨日うちのチームの奴等をボコったんでしょ？」

「ああ、その事ね。ありゃ何時もの通りに、そっちから絡んで来たんだ。俺に責は無いね」

「まあそうんだけどね……こっちにも面子つてもんがあんだよ！！！」

ヒュッ！

古賀と名乗った男は突然、そう言いながら亮平の腹目掛け、右足による前蹴りを放ってきた。

しかし、その蹴りを亮平は右手で掴もうと、腹の前に右手を構えた……その仕草は前回同様、ただ単に右手を前に出しただけの動作であったのだが。

その右手で、亮平が古賀の右足を掴むかと思われた瞬間……突然、古賀の蹴りの軌道が変わり、今度は亮平の左側頭部目掛け、その右足を振りぬこうとした……。

ガシッ！

「な！？」

「悪い、この程度ならキサラの方がまだ早い」

しかし、その右足は亮平の尋常ならざる反射神経によって、先程



フェイントを掛けられた右手に、何の事も無く掴まれてしまった……。

「くそッ！」

ヒュッ！

古賀はそれでもなを、掴まれていない左足で飛び廻しを放つ……しかし。

今度は亮平が、古賀の右足を掴んでいた右手を放し……放した右手で、そのまま古賀の小さな顔を鷲掴みにする。その際、亮平よりも完全に小柄な古賀は、足が地面に届かず宙に浮く格好となってしまう。

メキッ

「ぎゃあ あ あああ @○¥ ^ !!!!!!!」

亮平は、その右手で掴んだ古賀の頭に対し、アイアンクローという、子供の戯れの様な、技とは呼べない技を掛ける……だがそれは、亮平の握力からすれば、軽く握っただけで、技などの次元ではなく必殺の次元へと様変わりする。

「古賀って言ったっけ？ 別に路上で仕掛けてくるなら構わんが……学校は止めてくれないか？ 俺は学校では穏やかに過ごしたいんだ」

「いえあ あ あああ あ あ !!!!!!!」

「やめる亮平ッ!!」

「ん?……なんだキサラ姉ちゃんか」

その二人の現場に、亮平の幼馴染であるキサラが割って入った。

ちなみに、周りの生徒達は見ていない振りをしている。

「そいつは私の隊の人間だ。それ以上は止めてくれ……」

「……分かったよ」

そのキサラの言葉に、亮平は面倒臭そうに答え、宙に浮かんだ状態で掴んでいた古賀を放す。

その際、既に気を失っていた古賀は、そのまま地面へと落つこちたが、それでも意識が覚めることは無く、深い意識の底へと沈んでいた……。

「すまなかつた亮平……今回はこの馬鹿が勝手に先走った事が原因なんだ。次からは無いようにする、この通りだ」

そう言つて、キサラは亮平へと頭を下げた。

「別に良いつて……キサラ姉ちゃんが俺に下つ端を仕掛けて来るなんて、まずありえないし。だけど、次は無いつて……それだけは、この転がってる奴以外にも言つといてくれ」

「分かった、約束する」

そして、この場はそれで一旦の終息を得た。

古賀を、キサラの隊の人間に運ばせた後、亮平はその場に残ったキサラへと口を開いた。

「あのさ、キサラ姉ちゃんよ」

「なんだ？」

「まだ、続けるつもりなのか？」

「……ああ、之だけはアンタに何て言われようが続ける」  
「そうか……じゃあ、文句は言わんよ」  
「そうしてくれ……」

この意味深なやり取りは、当然キサラのチームの事だ。  
実際、亮平はキサラの現在の状況をあまり良くは思っていない。  
しかし亮平自身、他人の行動を束縛する事をあまり好ましくは思っていないので。キサラ自身が止めると言わない限りは強制はしないのだ……。

「じゃ俺そろそろ行くわ」  
「ああ、また今度な……」

そして其処で漸く、今回の一件は本当の終息をみた。

そして現在、亮平は少し急いで空手部が練習をしている武道館へと向かっていた。

「やばいな……少し時間を掛けすぎたみたいだ」

亮平は周りの生徒が部活を終え、下校の徒に付いているのを確認しながら目的地へと進む歩みを速めた。

「ここが武道館か……けどなんだか静かだな、もう終わっちゃったのか？」

亮平はそう言いながら、目の前の武道館のドアを開く。すると其処には一人で畳を雑巾掛けしている兼一の姿があった。

「よっ、兼一、一人か？」

「あっ、亮平君」

兼一は亮平の存在に気づくも、その表情は疲れきっていた……。

「練習は終わった後みたいだな」

「うん、そうだよ……はは、見ての通りまたボロボロだよ……」

「ああ、そりゃ見れば分かるしな」

亮平はそんな兼一の姿に若干驚きつつも、兼一にある事を尋ねた……。

「なあ兼一よ。どうしてそんなに頑張るんだ？」

「どうしてって……そりゃあ」

兼一はその亮平の言葉に、若干恥ずかしそうに答える。

「僕はね、その……見ての通り、今まで何をやってもダメだったから。中学の時までずっといじめられてたんだ……」

「ああ、それは前に聞いた」

兼一がいじめられていた事は。亮平は兼一と友人関係を築いた際に聞かされていた。

「それでね、その……笑わないで聞いてくれるかな？」

「ああ、もちろん……」

「約束だよ。僕はね、誰もが、見て見ぬ振りをするような、そんな悪党どもを。片っ端からやつつけられるヒーローになりたいんだ……」

……

「そうか……なれるといいな、ヒーローに」

その兼一の言葉に、亮平は微笑みを浮かべながら兼一に優しい口調で返す……すると兼一が、突然拳動不審な態度を取る。

「どうした兼一？」

その兼一の行動に、亮平は怪訝そうな表情で尋ねる。

「いや、そのね……こういう時はその……。逆に笑ってくれた方が恥ずかしくないっていうかその〜」

「ははっ、何だ笑って欲しかったのか？ 別に構わんよ……俺は基本的に人の夢に、とやかく言うほどお節介な人間じゃないからな。

そんなに気にすることは無い。それに夢ってというのは、同時に目標でもあるんだ……叶うといいな、兼一よ」

「……そうだね。うん、そうだね！ ありがとう、亮平君。おかげでまた、やる気が出てきたよ」

「そうか、頑張れよ」

そう言っつて、亮平と兼一はお互い頷き合い。そのまま、二人はそれぞれ下校の徒に付いた……。

しかし、その現場を見ていた、人物がいる……いや、人というよりも宇宙人と称した方が、適切かもしれない。

（やべ〜、うちの学校のガクランがどんどん様変わりして行きやがる……）

その宇宙人が持っている電子手帳には、学園ランキングと書かれた所に、何故か亮平の顔写真が映し出されていた……。

(『掌鬼』の鬼島……最近ラグナレクの幹部の一人を、何の苦も無く叩きのめし。さらには現在でも、ラグナレクと一人で小競り合いを繰り返している人物。入学当初から色んな奴に目を付けられていたが……今回の古賀戦で完全に上級生の連中を黙らせやがった。ま、俺様だったら第二拳剛を倒した時点で手は出さんかな……)

そして、宇宙人こと新島春男は。

その亮平の写真が映し出されていた電子手帳を、静かに閉じたのだった……。

## 第二話 転校生（後書き）

話が全然進まない……。

前書きに書いたとおり、亮平のイメージはあんな感じですよ。

本当に分かり辛い人は、脳内変換と言う便利変換機器でイメージして頂ければ幸いです。

それではノシ

不定期と言いつつ、次の日に更新。

これぞゲレゲレ・クオリティ。

第三話 風林寺の実力（前書き）

今回は若干のご都合主義があります。



### 第三話 風林寺の実力

キサラの部隊の人間と、一悶着あつた次の日の昼休み。

そんなお昼時の時間に、荒涼高校食堂で鬼島亮平の姿を見ることが出来た。

「たつ鷹島先輩!？」

そんな亮平の前に現在、一人の女子生徒が現れた……。

「あら……あなたは確かキサラの」

「はい!幼馴染の鬼島亮平っす!」

現在、亮平が若干緊張した面持ちで対面している人物。

たかしま ちひる  
鷹島千尋、高校二年。

そしてこの女子生徒は、この荒涼高校新体操部の現エース。

少し長い黒髪を、首元で軽く結んでお下げのポニーテールにし。

整った顔立ちと、少し気の強そうな目。

そして風林寺ほどでは無いが、大きな胸と、新体操部ならではの整ったプロポーション。

そんな一つ年上の女子生徒に、実は亮平は思春期ならではの甘酸っぱい感情を抱いている。

「元気が良いわね（緊張しちゃって、外見の割に可愛いじゃない）……で、私に何か用かしら？」

「いや、用と言うかその……あ！

そうだ、最近入部した風林寺はどうしてますか？

あいつ俺と同じクラスなんすよ」

その亮平から咄嗟に出た質問に、一瞬だが鷹島の目元がピクッと動いたのを亮平は確認した。

「あゝ、あの子ね……。

中学じゃ、なかなかレベルの高い子だったらしいけど。

今は偶っこで柔軟しかしてないわね……。

それがどうしたのかしら？」

「いや、どうしたって言うかその……。

まあただ気になっただけっすよ。

それよりも先輩は試合近いんですよね？

頑張ってください！応援してるっす！」

「ええ、ありがとう……じゃ、またね」

「うっす」

そう言って鷹島は、この食堂を後にした……。

そしてその場に、何やらだらしない顔つきになった亮平の前に。

幼馴染である南条キサラが姿を現した。

「なに惚けた顔してんだ亮平……」

「ん？……なんだキサラ姉ちゃんか」

姿を現したキサラは、亮平のその惚けた顔を見るなり。何やらとてつもない怒気を孕んだ雰囲気醸し出していた。

それを確認した亮平は、その惚けた顔を元に戻し、何時も通りの態度で。

目の前にいるキサラと向き合った……。

「……つち！まあいいか。

それよりも亮平。

今日は別の道から帰れ」

「は？……なんでだよ？」

その突然のキサラの命令に、亮平は困惑する。

「今さっき入った情報でな。

どうやらアンタを狙ってる、うちチームの奴が。今日アンタの通学路で待ち伏せしてるらしい」

「は？……まだ居たのかそんな奴が。

まあ、まだ昨日の今日だし……仕方ないか。

で、そいつはどんな奴なんだ？」

その亮平の問いに、キサラは少々困った様な顔をしながら答えた……。

「辻新之助。  
つじしんのすけ

頭は悪いが、うちの幹部なんだ……。

じき、敵対グループと戦争を起こす今。

戦力をアンタに潰される訳にはいかないんだ……。

もちろん私からも強く言っけて置くから。

今日の所はそうしてくれ」

「まあ、別に構わないけど……。

ちゃんと言いつけておけよ？」

また面倒事なんて御免だからさ」

「ああ、分かってるよ……じゃあまたな」

「おう、じゃね」

そう言っけてキサラは、この食堂から出て行った……。

そして、亮平は漸くありつけた昼食である牛丼を食べながら、一つの事を考えていた……。

（鷹島先輩の風林寺の名前を聞いた時の、あの反応……なんだったんだろうか？

それよりも俺、鷹島先輩と喋っちまったよ！？

どうすんだよ！？やばいよ！？めしうまだよ！！)

別に、どうでもよい事であった……。

そして現在、亮平は放課後の下校途中。

何時もと違う道を歩いていたせいかな？……少し道に迷ってしまい。

そのせいで時間も経ち、あたりは既に帰宅途中のサラリーマンやOLなどの姿が見られ。

家に帰るのが何時もより遥かに遅くなってしまっていた……。

「ん？……あれは風林寺か？」

そんな途方も無い時間を彷徨い続けた亮平の前に、同じクラスの女子の姿が目に入った。

しかし、若干そのクラスの女子の周りの雰囲気は。

周りを歩く人達の場所とは違っていた……。

「なにやってんだアイツ？」

大体、周りにいる奴等は……なんだ、絡まれてんのか」

そう呟いた亮平の目には、一人の老人を庇いながら。

そこを囲んでいる、敵つい四人の男たちに何かを言っているクラス  
の女子の姿が目映った。

そして、その前には黒塗りのベンツが止めてあり、どうやら只事では無い事に亮平は気づいた。

そうこうしている内に、同じクラスの女子が敵つい男の一人に後ろから腕を取られ。

軽く上半身を前のめりにされて取り押さえられてしまう。

(まったく……しょうがない、助けにいきますか)

そんな光景を見た亮平の目に、さらなる意外な光景が飛び込んできた……。

(兼一!?)

「はなせ!このクサレ外道〜っ!!」

そう叫びながら、亮平の友人である白浜兼一が。

風林寺を囲んでいる敵つい四人の男の中に飛び込んでいった。

しかし、その兼一の特攻も。

足元の歩道の段差に足を引っ掛けてしまい、体制を崩した兼一はゴロゴロと転がってしまう。

そして転がった先には、風林寺を正面から脅している男の足元があ

った。

しかし兼一は男の足にぶつかるも直ぐに立ち上がり。

ぶつかった男に対し腕を一生懸命に振り回し、男の顔面に一発のパンチを当てた。

しかし、その当たったパンチの腕を後ろから現れた男の仲間に掴まれ、兼一も取り押さえられてしまう。

そして、取り押さえられた兼一に対し。

先程兼一に殴られた男が、何処からかヤクザ者特有の光物「ドス」を取り出し。

目の前の腕を掴まれ取り押さえられた兼一に、その刃物を向けた。

「やばいつ！兼一！つ！！」

その光景を目の当たりにした亮平は、そう叫びながら全力で兼一の下へと駆け寄ろうとする。

そのスピードは完全に常軌を逸したスピードで、直ぐに兼一達の下へと駆け寄れるかと思っただが。

有る光景を目の当たりにして、突然亮平の足が止まってしまった。

「はい？」

その光景は、腕を後ろから取り押さえられていた風林寺が突然。

どうやったのかは分からないが、取り押さえていた男の指を何本か折り。

そのまま開放されたかと思ったら突然飛び上がり、前で兼一を取り押さえていた男の頭を踏み台にして。

その更に前にいた、ドスを構えた男の顔面に左足の飛び蹴りをかまし。

その衝撃で上に挙げたドスを持った男の腕から、そのドスを蹴り上げ。

更に蹴りをかました、その男の顔も踏み台にして天高く舞い上がり。何回転かした後に、地上へと降り立ったのだった……。

（はッ！やばい……呆けている場合じゃ無かった！）

その光景を目の当たりにし、一瞬ボーっとしてしまった亮平は。立ち止まっている暇は無いと直ぐに立ち直り、再度兼一達の下へと向かうのだった……。

着地し、男から蹴り飛ばしたドスをキャッチした風林寺は、少々頭に来ていた……。

「おつむにきましたわ!!」

そう言って、風林寺は目の前の男たちを睨みつけた。

しかし、そこに新たな敵つい男が現れた……。



「高校生のガキに光物向けて……情けねえとは思わないのか？  
そんなんじゃ、あんたらの組の底が知れるつてもんだぜ？」

そう言いながら現れたのは、自身の後ろの席の男子生徒「鬼島亮平」  
の姿であった。

「今度は誰だ！？」

「俺か？……俺は」

そう言いながら、男子生徒は徐に、路上に止めてあったベンツのボンネットの中心に。  
その左手を置いた……。

「俺は……こついう事が出来る男だ」

グシャーンッ！！

男子生徒がそう答えた瞬間、その男子生徒の手が置かれていたボンネットが。

男子生徒の手を中心に、まるで紙を真ん中から握りつぶした様に皺を作りながら車からむしり取られた。

車からボンネットがむしり取られた際、フロントガラス側のボンネットの結合部が外へと弾け飛び。

さらには一瞬ではあったが、そのボンネットがむしり取られる瞬間。車のリアタイヤ側の車体が、一瞬だけ浮いていた事も周りの人間達は確認していた……。

「ひいッ!!」

「ば、化け物だッ!？」

「指が、俺の指がッ!!」

その光景を目の当たりにした、風林寺自身が蹴り飛ばし、意識を失  
わせた男以外の残った男達は。

目の前に現れ、人間業とは思えない現象を起こした男子生徒に対し。  
それぞれ異なる恐怖の意を示していた……。

(確か鬼島亮平さん……でしたわよね)

しかし、その光景を目の当たりにしても尚、この場で風林寺だけは  
冷静にこの現場に佇んでいた……。

すると、その現象を起こした男子生徒が、突然面倒臭そうに口を開  
いた。

「あゝ……まあこんな事も出来る俺達だが。

流石にヤクザ者のあんた達と事を起こすつもりは無い。

ここは俺と、その女の子に免じて見逃してはくれないか？」

その男子生徒の言葉に対し、残りの男たちは気を失った男を抱え。  
ボンネットが無い車に乗り込み、逃げるようにしてこの場から立ち  
去っていった……。

男達が去った瞬間に、亮平はまず兼一の下へと近づいて行った。

「兼一、無事か？」

「どこか怪我とかはしてないか？」

「……………」

しかし、その亮平の問いかけに兼一は何も答えず。ただ先程の光景があまりにも衝撃的すぎたために、驚愕の表情を浮かべたまま硬直しているだけであった。

「兼一！おい兼一！」

「起きろ！もう全部終わったぞ！？」

「はッ！……………亮平君！」

「ああそうだ、亮平だ。  
ふん、特には何も無いようだな……安心したよ兼一。  
だがしかし、兼一もやるもんじゃないか。  
あんな現場に飛び込めるなんて」

その亮平の賛辞に、事態から漸く意識が戻った兼一は恥ずかしそうな顔をしながら亮平の賛辞に答えた。

「その、もう無我夢中だったから……」

「そうか、だが格好良かったぞ兼一……」

亮平はそう言いながら、この場にいたもう一人の人間に目を向けた。

「だけど驚いたよ……」。

まさか風林寺さんがこんなに強い人だったなんてな。  
だが、無茶はするなよ？

幾ら強いからって、ヤクザ者に睨まれたら。

それはもう面倒臭い日々を送る事になるんだぜ？」

「はい、以後気をつけますですわ。

それよりも危ない所を助けていただき、ありがとうございますですわ  
すわ」

「よせやい……」。

ほっといたって自分で片付けられた癖に。

だけど、もう一回言っけど兼一共々。

ヤクザ者には今後一切手を出すなよ？

いくら風林寺さんが強いからって、数や銃で来られたら危ないんだからさ」

亮平は、その風林寺の言葉に照れながらも。

今回の二人の行動に対し、一応の注意だけを口にした。

しかし、その亮平に注意された二人は突然。

その言葉を発した亮平に対し、何かを秘めた瞳で亮平と目を合わせ、同時に揃って言葉を発した……。

「それは出来ない（ませんですわ）」

「あ………」

その二人の言葉に流石の亮平も、何かに対し呆れる他無かった……。

### 第三話 風林寺の実力（後書き）

これで漸く話を進められる……。

まあ、亮平のチートっぷりは今後も結構ありますのでご了承ください。

そして、どうしたものか……。

ゲレゲレが通う大学が何やら突然やる気を出したようでした……。

明日がまさかの新学期開始日となってしまうました。

ですので、なのは共々更新が本当に不定期になる事を此処に予め報告して置きます。

それでは、まだ書き出したばかりですが感想や意見、質問などを心待ちにしております。

ではノシ

第四話 辻新之助（前書き）

今回、ちょっとあれです。

## 第四話 辻新之助

亮平と兼一が、風林寺美羽の強さを垣間見ていたのと同じ時をして。

ここは、とあるコンクリートで出来た廃雑居ビルの一室。

そこに亮平の幼馴染で、ラグナレクの幹部でもあるキサラと。

同じくラグナレク幹部の、辻新之助の姿があった。

辻新之助は、その特徴的な長いボサボサな髪と。

時代遅れの半そでの長ランに、両腕の前腕には何やら皮で出来た様な物を巻いている。

体格は良い方で、顔は気の強そうな顔をしている。

そんな辻に対し、キサラはこの部屋に唯一備え付けられたソファーに肩肘を付きながら寝そべり。

そして、目の前に立っている辻に対し何やら怒気のような感情を露にしながら、キサラは口を開いた……。

「辻…… あんた何考えてるんだい？」

「そんなもん決まってるんだろ？」

第二拳豪を倒した男を倒して、俺がラグナレクのトップの座に座ろうって話だよ」

そのキサラの冷たい問いに対し、辻は特に気にも留めぬ言い草で言い放った。



「そんな事を聞いてるんじゃないんだよ……。」

辻、あんた今の時期がどれだけ重要なのか分かってんのかい？」

「ああ、そんなもんわかってらあ。」

そろそろ始まる敵対グループとの戦争に備えて兵隊を増やすってんだろ？」

キサラの怒気がさらに増す……。

「だったら何で『鬼島』に手を出そうとしたんだ？」

今の時期が分かってるんだろ？」

だったらそんな無駄な事なんてやってないで、少しは自分の兵隊を増やしたらどうだい？」

「はッ！べらんめえ！そんなの分かってらあ！」

なあに、そのキサラの馴染みの『鬼島』も。

この俺が叩きのめして、俺の部隊に引き込んでやるよ」

しかし、そのキサラの怒気も辻には伝わらず。

辻はキサラに対し、さらなる啖呵を切った……。だがキサラも引きはしない。

「あんたは分かっちゃないんだよ……。」

大体、『鬼島』にやられた第二拳豪の事はアンタも知ってんだろ？

『鬼島』に握りつぶされた拳はまだ砕かれたまま……。」

さらにはアイツにやられた鎖骨だって、まだ折れたままだそうじゃないか……。

そんな化け物に、辻……お前程度の実力で勝てると思ってるのか

い？」

「そんなもんやってみなけりゃ分からねえだろ？」

いいからお前は黙って結果を待ってりゃ良いんだよ。

じゃあな、俺は明日必ず『鬼島』とやるぜ」

「おい！待て辻ー！」

辻はキサラの呼び止めには答えず、そのままこの廃雑居ビルを後にした……。

そしてキサラは、寝転がっているソファーに自身の体をさらに深く預け。

誰にも悟られぬように、心の中で悲しそうに呟いた……。

(亮平をラグナレクに……)。

そんな事が出来たら私がもうやってるっての……。

ごめん亮平……私。

私……また亮平に迷惑掛けちゃった)

キサラのその悲しい声は、誰にも届かない……。

そしてその次の日の朝。

亮平は何時も通りの時間に、学校へと続く通学路を歩いていた。

そこは何時も亮平が通る通学路の、横にゴミ捨て場が置いてある一方通行の細い道……。

「おい、何時まで付いてくるつもりだ？」

しかし、こと今日に限っては何時も通りの登校とはならなかった。

「お前が俺と喧嘩するまでだよ鬼島」

その原因は、後ろを振り返った亮平の前にいる集団が関係していた。

「するまでだつて言つてもよ……。

大体、てめえは誰なんだロン毛？

それにその集団は何なんだ？

正直周りから変な目で見られてるから止めて欲しいんだが？」

「おう、そうかまだ名前を名乗つて無かったなそう言えば。

俺の名前は辻新之助、ラグナレクの幹部をやってる男だ。

そして後ろの奴等が俺の部下だ。

単刀直入に言う、鬼島、お前は俺の部下になれ！」

「一人でやってる」

亮平の後ろを付けていた男たちのリーダー、辻のその提案を亮平は呆れた感じの即答で返す。

しかし、その亮平の返しに頭に來たのか。

辻は明らかに怒気を孕んだ態度で亮平に近づいていく。

「なんだとてめえ……。」

もういっぺん言ってみろ」

「一人でやってる、この時代遅れの馬鹿ロン毛」

その亮平の言葉で辻から感じられた怒気がさらに増し。

遂に我慢の限界が來たのか、辻は目の前に突っ立っている亮平目掛け殴りかかってきた……。

そして、亮平に接近した辻は。

そのまま亮平の顔にパンチを繰り出すかと思いきや、そのパンチを囮にし。

本命の足踏みで、亮平の右足に踵を叩き付けた。

「もらったぁッー!!」

辻は亮平の足を踏みつけたまま、その自身の右拳を亮平の顔面に叩きつけようとした……が。

辻はその瞬間に突如、自身の右耳周辺の空気が圧迫されるのを感じた。

バアチイイイツ！！！！

「…………隊長ッ！！！！」「……」

その甲高いゴムの破裂音のような音と、辻の部下である男達の叫びと共に。

自身に突然訪れた、とてつもない何かの衝撃によって辻は。

物凄い勢いで、偶々横にあったゴミ置き場へと突っ込んでいった……。

「人のローファー踏むんじゃねえよ」

そう言っつて、亮平は辻が突然吹っ飛んだ原因である左の掌をぶらぶらと気だるそうに上下に振る……。

辻が吹っ飛んだ理由……。

それは、辻のパンチが自身に届くよりも速く放った、ただの亮平のビンタであった……。

そのただのビンタを喰らった辻の右耳の穴から、微かに血が流れて来ているのが確認出来た。

「これで良いんだろ？……じゃあ俺は学校に行くから」

亮平はゴミ置き場で、ゴミを撒き散らしながら倒れている辻に向かってそう言い放った。

しかし、その状態でも辻は立ち上がり。

この場から立ち去ろうとする亮平に向かって、明らかにダメージを隠しきれないその虚ろな瞳を向ける。

「まてよコラ……。」

まだ終わってねえ……。」

辻はそう言いながら、明らかにふらついた足取りで亮平に近づこうとする……。

「……やめとけ。」

どう転んだってお前は俺には勝てないよ」

しかし亮平はそんな事は気にも留めず、そのままこの場から立ち去っていった……。

「ちく……しよ……」

そして辻は、立ち去る亮平を虚ろな目で睨みつけながら、そのまま地面に倒れ伏せ、その意識を手放した……。

辻との遭遇で、思った以上に学校に遅れてしまった亮平は。またバケツ持ちかゝっというブルーな気持ちを感じながら、自身の教室へと向かっていた……。

しかしそんな亮平の目に、ある珍しい光景が広がっていた。

「おおっ、今日は風林寺さんも遅刻か。

珍しい事……いや、意外に時間にはルーズなのか？」

「ああ、おはよう亮平君。

違うよ、美羽さんは僕のせいで遅刻しちゃったんだよ」

亮平の前に広がっていた光景、それは何時もは教室の前に友人である兼一だけバケツ持ちで立っているのだが。

今日はそれにもう一人、優等生のような雰囲気を持つ風林寺美羽の姿があったのだ。

ついでに言うと、これまた珍しくバケツ無しというのもあった。

そんな二人に対して、亮平は面白そうな（意地悪な）顔で二人を弄

くる事にした。

「そうなのか、まあ皆までは聞かんよ……。  
あの後二人で一緒に帰ったみたいだし、聞くのは野暮ってもんだ  
しな」

その亮平の言葉に、風林寺は何の事か分からない顔をしていたが、  
もう一人の兼一の方は、顔を真っ赤にして明らかにうるたえ始めた。

「ち！違うよ亮平君!？」

今日は僕が美羽さんの近道で足を引つ張っちゃって！

そのせいで美羽さんも遅れちゃっただけで！その！！」

「はっはっはっは。」

何をキョドってるのかな親友よ？」

「なんの事ですか？」

その光景を楽しんでいた亮平に、その状況が何も理解できていない  
風林寺が首を傾げた。

その時、亮平達がいる廊下の向こう側から、ある女性のが近づいて  
くるのが確認出来た。

しかし、その接近に気づけたのは亮平の前にいる風林寺だけであっ  
た。

そして、その三人の下に近づいてきた女性は突然亮平の首根っこを  
掴んだ。



「ん!?!……なんだキサラ姉ちゃんか。  
ビックリさせるなよ……」

「いいから来い……」

そう言つて、亮平の首根っこを突然掴んだキサラは。  
その首根っこを掴んだまま亮平を何処かへ引き摺って行つてしまつた……。

「誰だつたんだろう……あの人?」

「さあ、ですが只者じゃないのは確かですわ」

「へ?」

「いえ、今の兼一さんには関係無い事ですわ」

「へ?はい?」

そう言つて、この場に取り残されてしまった二人は遅刻の罰である廊下立ちを再開するのであった……。

そして、突然キサラによって連れ去られてしまった亮平は。校舎裏で漸く、そのキサラの拘束（首根っこを掴まれただけ）から解き放たれた。

「で？……用件は分かってるけど。

俺に何の用かなキサラ姉ちゃん？」

「もう何度言ったか分からないが……すまなかった、亮平」

そう言っただけキサラは亮平に対して前回同様、その頭を下げた……。

「……まあ、どうせ今回も血の多い連中の独走だったんでしょ？キサラ姉ちゃんが謝る事ねえって……。

それに、一応部隊を束ねてる人間がそう簡単に頭を下げるもんじやない。

それこそ下に示しがつかねえでしょ？」

その亮平の言葉に、キサラは漸くその頭を挙げ。

亮平と改めて向き合った……。

「……そうだな、ごめん亮平。

だけど、今日の事は私が辻を止められなかったのが原因だ……。私だって不良の端くれなんだ、ケジメくらいは取らせてくれ」

「ケジメって……ヤクザじゃねえんだから。

別に良いってそんなの……」

「いや、これは私なりのケジメの付け方なんだ……。  
さあ！亮平！別に殴られる覚悟だつて私には出来てるんだ！  
煮るなり焼くなり、好きにしろ！」

そう言つて、キサラは亮平に対し、両手を広げ、胸を張りながら向き合つた……。

「好きにしろつてキサラ姉ちゃん……ぬうんツ！？」

「ん？……なんだよ、やるなら早くしろ！」

キサラは亮平が突然出したその奇妙な声に一瞬困惑するも、再び亮平を促し、今度こそ覚悟を決めその目を瞑つた……。

しかし、覚悟を決めた勇ましい姿のキサラに対し、促された方の亮平の方は少々様子が違つていた。

（キ、キサラ姉ちゃん……今まで胸が全く成長してないと思つてはいたが。

どうやらそれは俺の勘違いだつたらしい……）

その亮平の目線の先には、胸を張つたせいで、キサラの薄手の赤いシャツから二つの小振りな膨らみが現れ。

更にはキサラが今着けているスポーツブラのせいで、その小振りな二つのふくらみの先端から、二つの小さな突起物が確認出来た。

「むふー……むふー……」

その光景を目の当たりにした思春期真っ盛りの亮平は、無意識の内にその鼻息を荒くさせる……。

「ん？……おい、何だこの音？」

何時までも来ない亮平と、突然聞こえてきた空気の音にキサラは不  
振を覚え。

その閉じていた両眼をゆっくりと開けた……。

「っておい亮平！？どうしたっていかお前目が怖いぞ！？」

「むふー！むふー！」

両目を開けたキサラの前には、明らかに普段の冷静さ欠いた表情を  
した亮平の姿があった……。

「いや……来るな！近寄るなッ！！」

「むふー！！むふー！！」

その亮平の姿に、無意識の内に身の危険を感じたキサラはじりじり  
と後ずさって行く……。

しかし、もう後が無いかと思われたキサラの目が突然変わる。

「来るなっつってんだろこの変態がッ！！！！！」

ガゴンッ！！

「ふんぐッ！！！！！」

壁際に迫り、もう後が無いと思いきや。

突然キサラがその迫り狂う亮平に対し、そのブーツを履いた自慢の右足で。

亮平の股の間に燦然と輝く男の喜望峰を容赦なく蹴り上げたのだっ  
た……。

その余りの衝撃に亮平は股を押さえ、悶絶しながらその意識を手放  
した……。

「この変態！！たまに下手に出るとすぐこれだッ！！……まったく  
！」

亮平の股を蹴り上げた張本人はそう吐き捨てながら、この場から立  
ち去っていった……。

そして、この場に取り残されたのは。

思春期の悲しい性に耐え切れなかった、迷える悲しい鬼ただ一人で  
あった……。

#### 第四話 辻新之助（後書き）

亮平がどんどんただの変態になってゆく……。

まあ思春期の男なんて皆エロいんだからこんなもん……でもないかな？

皆さんはどうでしょうか？

亮平はこのままで良いのだろうか……。

そして何時梁山泊が出るのやら……先は険しいですね。

## 第五話 分岐点(前書き)

今回めっちゃ長いです。

さらには初めて一人称やらなんやらに挑戦してしまいました。

読み辛い、又は分かり辛い事が御座いましたら感想や意見などで申して貰えれば助かります。

## 第五話 分岐点

辻を一蹴し、キサラに玉を蹴られたあの日から早一週間が経とうと  
していた……。

その間に、何やら兼一の様子がおかしかったのだが、本人に聞いて  
も。

「これは僕の問題だから、亮平君は気にしなくていいよ」

そんな風に言われてしまい、結局原因を聞きだす事が出来なかつた  
……。

だが、亮平もそれだけでは納得できず、遂にはあの宇宙人に頼り。  
兼一の情報を聞き出そうとしたのだが、これも上手い具合にはぐら  
かされてしまった……。

しかし、亮平はそれでもめげず、宇宙人に対し誠意の籠った頼み込  
み（ご想像にお任せ）の末。

何とか、ある一つの情報だけを吐かせる事に成功した……。

それはどうやら、宇宙人が兼一の事について。

宇宙人は風林寺から亮平には教えてはいけないと口止めをされてい  
たとの事だ……。

それを聞いた亮平はまず、風林寺自身にその事情を尋ねようと新体  
操部の練習場に向かっていた。



【side 亮平】

「新体操部の練習場は、確かここで良いんだよな」

俺は今、風林寺にこの訳を聞きに行くために新体操部の練習場前にいる。

「しかし、ここに来るのもあの時以来か……」

鷹島先輩のレオタード……あれは良い物だ……。

ハッ！やばいやばい……危うくトリップする所だった。

そうした思春期的な思想は危険だって、前回で学んだ筈だったんだが……。

まあ俺も高校生って事が……うん、そうしておこう。

そんな微妙な葛藤を抱きつつ、俺は目の前のドアに手を掛け、その練習場に入る事にした……。

「すみませ〜ん、風林寺さんは居ますか？」

俺は練習場に入ってまず、風林寺が今居るのかどうかの確認を取った。

すると、何処からか一人の人物がこちらに近づいてくるのが見えた。

その練習場は、多分他校の練習場よりも広い作りが為されていて、一箇所の壁一面に、デカイ鏡が広く備え付けられていたり。何に使うか分からない手摺りが付いていたり、兎に角素人の俺でも分かるぐらいの設備の充実さだ。

まあ、此処の説明はさて置き。

先程の俺の問いに答えた人物が、俺に話しかけてきた。

「あら、あなたは鬼島君ね。

どうしたの？風林寺さんに何か用があるのかしら？」

そう言つて、俺に話しかけてきたのは新体操部のエースであるレオ  
タード姿の鷹島先輩だ。

眼福眼福……。

「あゝ、まあそんなところすね。

ちよつと聞きたい事があるので呼んで貰えないっすかね？」

「まあ、風林寺さんもさつきからボーっとしてるからいいけど……。  
どうしたわけ？まさか告白の返事つて訳でもないわよね？」

「まさか、俺はこんなんでも一応TPOは弁えてる方なんすよ？  
相手が部活中に、そんな事を聴きに來るほど空気の読めない男で  
はないんすよ？」

「まあちよつと、俺の友人の件で少し聞きたい事があるだけっすか  
ら」

「一応は分かっているみたいね……分かったわ。でもなるべく手短かにね、こっちも試合前の練習中だから」

「了解っす」

そう言っつて、鷹島先輩は何処かに消えていった。

余談だが、この時俺は緊張せずに鷹島先輩と話ができた事に内心ではYES!とガッツポーズをしていた。

そして程無くして風林寺が呼ばれ、こちらに近づいてきた……。

「鬼島さん、どうかなさいましたかですわ?」

「はっッ!」

「へ!?!ど、どうしましたかですわ!?!」

これは……これは、風林寺さん。

そのレオタード姿は最早凶器でっせ?

もし俺が競技の審判だったら、俺は真っ先に貴方に対してホイッスルを吹くぜ?

『君、体がペナルティ』ってな。

いや、冷静になれ俺。

「いや何でも無いって……」

俺は取り合えず冷静になって、目の前で困惑している風林寺さんに  
対し、なるべく悟られぬように、無難に返事をする。

「そ、そうですねか……安心しましたですわ」

「ま、まあ取り合えず聞きたい事があるんだけど良いか？」

「はいですわ」

「兼一の事なんだけど……宇宙……いや、新島に俺には話すなっ  
つたのは風林寺さんなんだって？」

一応新島から聞いたけど、本人に直接聞かないと信じられないか  
らな」

その俺の問い掛けに、目の前の風林寺は特に何も気にも留めず。  
普段どおりに俺の問いかけに笑顔で答えた。

「はい、それがどうかしましたかですわ？」

まあ、私も兼一さんに口止めされていたのですが」

「兼一に？……それはどうして」

その俺の言葉に反応したのか、突然風林寺さんの瞳に何か鋭い、不  
思議な何かが宿った。

「まあいいでしょう、一応私も口止めされていたので。」

「この事は兼一さんには御内密にしてくれと助かりますわ」

「ああ、約束する」

その風林寺さんの雰囲気に対応するかのように、俺自身も真剣な面持ちで風林寺さんのこれから喋る言葉に耳を向ける。

「それではお教えしますわ。

兼一さんは現在、空手部の大門寺さんと言う方と。

空手部からの退部を掛けて試合をなさっていますですわ」

「兼一が！？それはどういう事だ！？」

俺はその風林寺の言葉に困惑する……。

だが、風林寺の方はそんな俺の様子は全く気にも留めていない。

「そして兼一さんは今回の事を自分の御力で乗り越えようとなさっています。

ですから試合を申し込まれたこの一週間。

兼一さんは私と、今回の試合に勝つための特訓をなさいました」

「それが……それが何故、俺には話すなって事と繋がるんだ？」

「兼一さんは私と最初に特訓する際に、一つの事を私に御願いなさいました。

それは鬼島さんにこの事を話さない事です」

その言葉に俺は少しショックを受けた……。

実際、確かに俺と兼一の友人関係はまだ一ヶ月ぐらいしか経ってはいない。

だが、そんな自身のピンチに入学当初からの友人である俺では無く、まだ転校してきて間もない、兼一と知り合って間もない。

この目の前に立っている風林寺を頼ったのか？

その事に俺は軽くシヨックを受けていた。

そんな俺を見て、風林寺は少し焦りながら話を付けたしはじめた……。

「あ、あの別に兼一さんが鬼島さんの事を頼ってないって訳では無いのですよ？」

ただ兼一さんは、今回の事を鬼島さんが知ってしまったら。

必ずその大門寺さんという方をボコボコにしてしまうからと、そう考えての事と仰ってましたし」

その風林寺の言葉に、俺はさらに傷心していった。

「俺ってそんなに信用無いかな……。」

結構こう見えて我慢強い方なんだぜ一応？

それがよ……どうして……あははは」

「いえ！別にそんなに落ち込まなくても大丈夫ですわ！

別に兼一さんは鬼島さんの事を信用してない訳ではありませんから！……！」

その風林寺の言葉に俺は少し気持ちを上目かせ、風林寺の言葉を待

った……。

【side 美羽】

まったく、この人も以外に不器用な方ですわね……。

私は今、目の前で落ち込んでいらっしやる鬼島さんを見て、そう改めて認識しました。

「兼一さんは鬼島さんの事を信用してないのではありません。」

むしろ鬼島さんに余計な心配を掛けさせまいと、今回の事を鬼島さんに伏せていたくらいですから」

その私の言葉に、鬼島さんの周りの雰囲気少し明るいものに変わったのを私を感じました。

「だが……それを俺に直接言えば良いだけの話なんじゃないのか？」

「ふふ、それは兼一さんに直接聞いてみては如何でしょうか？」

「……そうだな、そうするとしよう」

鬼島さんはそう言って、先程とは違った雰囲気私に言葉に肯定の意を示しました。

「ところで鬼島さん？」

私、これから兼一さんの様子を見に行くのですが、鬼島さんも一緒にどうぞでしょうか？」

「そうなのか……よし、じゃ俺も見に行くとするかな」

「でしたら全は急げ、ですわ」

「おう」

その私の提案に鬼島さんはスッキリとした面持ちで答えるのでした……。

【side out】

ここは空手部武道場、そこに現在。

大門寺という体格の良い一年生と……。

白浜兼一という冴えない一年生との試合が始まるつとしていた……。



【side 兼一】

「かあくくごはいいかあくちび!？」

ルールは参ったするか気を失うまでだ!！」

目の前に佇む巨大な壁のような男は僕に向かってそう言い放った。

なぜ、僕がこの巨大な男と対峙する羽目になったのか？

それは部活中にひよんな事から、目の前の男、大門寺君の気に触つてしまい。

今日試合をして、負けの方が退部という物凄い理不尽な条件付きの試合を申し込まれた……。

大門寺君は僕と違って、体格に恵まれていて更にはボディービルのジムにも通っている人だ。

そんな恵まれた才能を持った人に、僕のような凡人以下の存在が敵う筈が無い。

最初はそんな事も考えていたが、美羽さんから武術の指南や励ましの言葉、発破かけなどをしてもらい。

どうにかして今日、戦う自信を付けて貰った……が。

僕が美羽さんから教えてもらったのは『こう歩』と『はい歩』と言う足捌きだけ……。

幾ら僕が大門寺君の突きを貰ったら一たまりも無いからといって、足捌きだけしか覚えてないのは正直心もとないにも程がある……。

だけど……僕は今度こそ逃げないって決めただ。

あの日、亮平君は僕にヒーローになれるといいなって言ってくれた。あの生まれつきの強さを持った人が、僕のような弱者の夢を笑わずに、真剣に向き合いながら応援してくれたんだ。

この高校に入るまで友達と言える存在が悪友の宇宙人以外居なかった僕にとって、美羽さんや亮平君の存在は僕を強くしてくれた……と思う。

正直、今物凄く怖いけど……あの二人のために僕は負けられない。だから今回、僕は亮平君にこの事を知られるのを避けたんだ……。

多分、亮平君はこの事を知ったらきつと心配するだろうし。

優しい亮平君の事だから、もしかしたら空手部に直接押し入って来るかもしれない……。

そうなると僕は一生、亮平君の友達として周りからも認められないし、また亮平君が応援してくれた僕の夢も叶う事が出来なくなってしまう。

それだけは絶対にさせてはいけないし、してもいけないのだ。

これは僕個人の問題として解決する。

それが今回、僕が変わるか変わらないのか？……その分岐点なんだと思う。

そんな考えの下、僕は現在決戦の時を迎えていた……。

「おう！」

僕は目の前の男、大門寺君のその問いかけに力強く答えた。

はは、僕も意識一つで強くなれるもんなんだなって、この時は思

ってました。

そして、今回の試合の審判を勤める人が、試合の開始を告げるため、その手を大きく上に挙げた……。

「それでははじめえ!!」

その言葉と共に、周りから僕に対しての野次が飛ぶ。

だがそんな事を気にせず、前にいる大門寺君だけを見据えていると突然、大門寺君の方から僕に向かって喋りかけてきた……。

「俺は、てめーみてえな軟弱者の金魚のフンが武術をやってるのが気にいらねえんだ!!」

いつもいつもあの鬼島の後ろに隠れやがって、正直ムカつくんだよてめえは!!」

だが、そんな奴が今日に限って本気で俺に挑んできやがった……。どうい風風の吹き回しか知らねえが……丁度いいぜ。

てめえには今まで本当に苛付いて来たんだ……今日は思いっきりぶっ飛ばしてやるよおおッ!!」

そう叫びながら大門寺君は、その太い左腕で僕の顎を打ち上げんと振りかぶり。

そしてそのまま、その左腕で身長差のある僕に対し、下突き気味のアップパーを振り上げてきた……。

( やっぱりだめッ!……いや、僕は変わるんだ!! )

僕はその大門寺君の突きに対し、美羽さんから教わった『こつ歩』で。

その突きを手で捌きながら、僕の前足の左足を内股にさせ、体を大門寺君の突きを捌いた勢いでそのまま右半身にさせる。

その事によって、大門寺君の突きはあたかも空を切った形となり…  
…そして。

その内股気味にさせた左足を素早く後ろに持って行き、今度は左足を奥足（後ろ足）にする事に成功した。

これも美羽さんから教わった『はい歩』で、その事によって大門寺君の左側面を取る事に成功した。

お陰で今、大門寺君の左脇腹はがら空きだ。

その隙を僕は見逃さず、僕の持てる力を自身の左拳に乗せて。

左の中段正拳突きを、大門寺君のがら空きの左脇腹に向かって繰り出した。

「せいッ！…」

ドッ！

しかし、その僕の攻撃は確かに入ったのだが。

僕と大門寺君の体格差では、その太い腹回りを貫く事が出来なかった…。

そして、大門寺君は一瞬ニヤリと笑い。

僕に向かって、その大きな足で、左の側足を繰り出してきた。

「りゃあッー！」

ドゴッー！

「うぐッー！」

これには僕も反応できず、その大門寺君の側足を腹にモロで受けてしまっ……。。

そして僕は、その攻撃によって二メートルぐらい吹き飛ばされてしまっ。

「うぐッー！……んッー！……」

僕は、その攻撃のダメージで思わず息が止まってしまい、その場に蹲ってしまった……。

「どつする下っ端……まだ続けるか？」

そこに、今回の審判である人が僕に向かって再開するかどうかの問いかけをしてきた。

「大丈夫です……まだやれますッー！！！」

「そうか、では開始線までもどれ」

そう言っつて、僕は再度大門寺君と向き合っつ……。

「はじめッ……！」

審判の人がそう再開の合図を叫び、再び僕と大門寺君の試合が始ま  
つた……。

【side out】

【side 亮平・美羽】

俺は今、物凄く困惑している……。

「なあ？……なんで俺達はこんなにコソコソしてないといけないん  
だ？」

「だつて兼一さんは鬼島さんがこの事を知らないと思つていますも  
の。」

そんな所にもし、鬼島さんの姿を見つけたら兼一さんのリズムが  
崩れてしまいますわ」

そう言つて、風林寺は俺の問いに答え、すぐさま兼一と大門寺と言  
う男の試合に目を向けた。

現在、俺と風林寺は武道館の大きな窓の直ぐ横で、体を隠しながら  
兼一の試合を見ている。

その武道館の窓は、地面から結構の高さがあり。

正直、体の小さな風林寺と違って、俺は壁に掴まりながらの観戦を  
強いられる事になっていて辛いのだ。

いや、体力的とかでは無くて、壁を壊さぬようにするのがなのだが  
……。

「鬼島さん、どうやら現在は兼一さんの方が有利みたいですよ」

その言葉に、俺は兼一の試合の方へと意識を傾ける。

「おッ！どうやら相手はスタミナ切れみたいだな」

その試合状況は現在、兼一が相手の攻撃をなにやら不思議な避け方  
でかわし続け。

そのせいで空振りが続けていた相手は体力の限界がそろそろ近ずい  
てきた所だった。

「はい、そのようですが……これは不味いですわね」

「ん？どうしてだ？」

(兼一さんが、あの歩法のもう一つの意味に気づいて無い今。  
このままでは兼一さんの勝利はありませんですわ……)

そう思考に耽っている私を、放置してしまった鬼島さんが現実へと戻してくれました。

「おい！風林寺！？どういう事が説明しろ！」

「あ、はいですわ」

そこで私は一つコホンツという咳払いをして。

鬼島さんに先程、私が言った事の説明をする事にしました……。

「あの歩法には、相手の攻撃をかわすだけではなく。

もう一つの隠された使い方があるのですわ。

そして、今兼一さんがその事に気づけなければ……多分勝機は無  
いでしょう」

「……そうなのか？」

まあ確かに兼一の攻撃は通じてないが……。

あれだったらそのうち相手が勝手に潰れるんじゃないか？」

そう言っつて、鬼島さんは兼一さんの試合の方を指差します。

「いえ、それはないでしょうね。

多分、兼一さんの方が先に潰れてしまいます。



自分より大きな相手とやるという事は、それぐらい精神的に辛い事なのですわ」

「そんなものなのか……」。

まあいい、多分兼一ならその隠された何かに気づくだろう」

(それに、俺は手を出さなって言われてるようなものだしな……)

(ふふふ……まったく、本当に兼一さんの事を信頼しているのですわね)

私は、そんな鬼島さんの様子を見ながら、兼一さんの試合へと意識を向けた……。

【side 兼一】

「このやるゝ…ハア…ハア。」

ちよこまかと逃げ回りやがってえゝ……ハア。

なんて逃げ回るのがうまい奴なんだ……アゝ」

「逃げてなんかないぞ……かわしてるだけだ」

といっても……正直僕もそろそろ限界になってきたなゝ。

「だから言ってるんだろゝ!!どんなに逃げ回っても攻撃しなきゃ勝てねえってッ!!」

そう叫びながら大門寺君は僕に対して左の突きを突きつけてきた。

(たしかに……逃げ回るだけじゃ勝てないし！)

しかし僕はその攻撃を、また先程と同じように『こつ歩』と『はい歩』で捌き、避ける。

(それにもう一撃でももらったらお終いだ……だから体力が続く限り、避け続けないと)

僕はそう考えながら大門寺君の左側面を取りる。

(こんなもやし野朗に馬鹿にされてたまるか！！こ、殺してやる！！)

しかし、大門寺君はその空ぶった突きを強引に引き戻し、僕に対して更なら追撃を仕掛けようとした。

(負けてたまるか！！)

だが僕も先程からの例に漏れず、その強引な攻撃を横に動きかわそうとする……その時。

ガッ

「うおー！！」

その時、偶然か又は必然か……。

その強引な追撃で僕に迫ってきた大門寺君は、偶々そこにあった僕

の左足に足を引っ掛け、よろめきながら盛大に前から地面に倒れた……。

「……………あれ？」

「どうした大門寺！だらしねえぞ！！」

「足にきてんのか！！」

そのこけた大門寺君に対し、周りからの野次が飛ぶ…………。

しかし、僕はそんな事よりも今起こった事に何かを感じる事ができた。

(あれ…………今の感じは、何か相手の力をずらしたような……………まてよ！？)

その時、僕の頭には以前、特訓中に美羽さんが僕に説明してくれた事を思い出していた…………。

『いいですか兼一さん？  
高度な技というものは、防御と攻撃を同時に行えるように出来て  
います』

あの時、確かに美羽さんはこの歩法から僕の事を地面に叩きつけていた…………。

あの時は、『無理っす、おいおい理解します』とか言ってたけど…。

(そうか！今やっと理解したぞ！！)

僕が何かに気づいたのと同時に、前で倒れていた大門寺君が突然ムクッと起き上がり。

僕に向かって、もの凄い勢いで突っ込んで来た……。

「てめえの血は何色だああああッ！！！！！」

そう叫びながら、大門寺君は僕に対して左の正拳突きを繰り出してきた……。

しかし、僕はその突きを先程とは少し違い、相手の体になるべくさつきよりも密着しながら、その大門寺君の左の突きをかわす。

(一週間練習した、うすうすは感じてはいたんだ！！)

そして、大門寺君の左側面にピッタリと密着した僕は。

その大門寺君が空ぶったせいで空いている左の脇から自身の右手を入れ込み。

大門寺君の左肩を挙げるようにして、左の脇から僕の右腕で押し上げる。

その際、空いた僕の左手は大門寺君の空ぶったままの状態である左腕の前腕に添えている。

(僕がここで『はい歩』によって体勢を戻す時。

さらに一步奥に体を捻じ込んで……)

僕はその体勢のまま、大門寺君の体に更に密着して。

大門寺君の左脇から捻じ込んでいる右手で、大門寺君の体を更に下に向かって押し込む。

(体全体を使って、相手も巻き込むようにして体を戻せば……)

そして僕は、その『こう歩』の形のままだった右足を『はい歩』で元の足の形に戻した……。

その時、僕に体を預けられ、その重心を後ろに崩された大門寺君は、その『はい歩』で元に戻った僕の右足に、自身の左足を引っ掛けてしまう……。

(そのまま攻撃に繋がるんだ!!!)

ドオンッ!!!

体勢を崩され、僕の体捌きによって、大門寺君はそのまま地面に後頭部から思いつきり叩きつけられてしまった……。

「かはあ……」

「おい!こいつ氣イ失ってるぞ!!!誰かバケツもってこい!!!」

そして、その倒れ付した大門寺君に審判の人が駆け寄り。

大門寺君の状態を確認してから、焦った口調でそう周りに叫んだ……。

「か、勝ったのか!？」

僕がその状況によって、安心しそうになった時。突然倒れている大門寺君が目を覚ました。

「うおおおお!!」

「うわッ!」

僕はその大門寺君の突然の叫びに、体を一瞬ビクッとさせ怯んでしまった。

しかし、その後一瞬の沈黙が訪たが、最初に口を開いたのは大門寺君の方だった……。

「今のは無しでしょ!?!あれは投げ技だ!!!」

「見苦しいぞ……負けた方が部を辞める、男と男の約束だろ?」

「あんなの空手じゃねえ!!い、いんちきだ!!俺、俺空手をやめたくないよ!!」

「!?!?」

その大門寺君の叫びに、僕は何かを感じた……。

「た、たしかに……」

「ん？」

その僕の突然の言葉に、この場の全員が僕に注目する。

「うちの部では投げ技は原則禁止でしたよね……。」

この試合、僕の反則負けですね……。」

その僕の言葉に、その場の誰もが黙り込んでしまった……。」

【side out】

【side 美羽】

「……………」

「くす」

現在、私と鬼島さんの二人は先程の兼一さんの試合の後の発言に。亮平さんは沈黙、私は少しだけ笑うといった異なった反応を示していました……。」

「どうしましたかですわ、亮平さん？」

「……いや。」

なんだかやつぱり兼一なんだなって思ってた……。

俺だったら多分、あの大門寺がダダをこねた時点で、その顔思いつきり蹴飛ばしてたと思う」

鬼島さんは少し微笑みながら、先程の兼一さんの事を話し始めました……。

「確かに先程は大変でしたわ」

私はそう言いながら、鬼島さんが先程まで掴まっていた場所を指差します……。

「あはは……これはだな」

そこにはコンクリートで出来た出っ張りがあり、一部分だけ根こそぎ筆り取られたような様を見せていました。

「ふふふ、本当に鬼島さんは兼一さんの事が心配だったのですわね」

「あ……この事は兼一には言わないでくれ、他の人間にもだぞ？」



「はい、分かりましたですわ  
それでは、そろそろ戻りましょうか」

「おう、分かった」

私と鬼島さんの二人は、そのままこの場を後にしました……。

そして、鬼島さんと別れた私は。

先程の兼一さんの事を考えていました……。

(兼一さんは確かに試合には負けましたが、実戦では勝利を収めました。  
)

多分これから武術の道突き進むのかもしれませんが……今度は  
何の武術をなさるのですかね？)

そんな考えと共に、私は途中で抜け出してしまった新体操部の方へ  
と戻って行くのでした……。

後日、兼一さんが入部なさった部活が園芸部と聞かされた時。

私が盛大にずっこけた事はいい思い出です……。



## 第五話 分岐点（後書き）

二人同時視点は二度とやらん！！

すみませんでした……。

今回、原作とほぼ同じになってしまいました。兼一君の精神を少し、亮平の御蔭で強くするといった事をやらかしてしまいました。

それと、今回の戦いで分かり辛い所が御座いましたら。原作一巻を見ながら読んでもらえると幸いです。

人それを丸投げと言う……。

追申……。

これから、なのはも含めて更新は週一・二回にしたいと思えます。ですが、予告が当てにならないで有名なゲレゲレの事です。ひよんな事から、気分で更新の回数を増やす場合もあります事を、この場を借りて書いておきたいと思えます。

ではノシ

**幕間** 昼下がりの空き教室、幼馴染は見た！！（前書き）

この話は、バイト中の接客の時んい考え付いたものです。

ですので勢いそのままって感じですよ。

それではどうも。

幕間 昼下がりの空き教室、幼馴染は見た!!

まず始めに言っておく……。

今回の俺はどうかしていたんだ……うん、きっとそうなんだ。

【side 亮平】

「あ……だる」

俺こと鬼島亮平は現在とっても退屈している……。

「……………であるからして、大政奉還とは……………」

それは何故か……決まってるだろ？

今俺は目の前で展開されている、日本史教師のハゲ……もとい安永

福次郎の授業を受けている最中なんだ。

それがどうしたって？

まゝ別に授業が分からないって事ではないんだ……ただ。

ただこつ……あるだろ？

授業中に襲ってくる様々な障害っていうのは……な？

そして現在、俺はその様々な障害との闘いの末……まあいいや。

取り合えず、今日もこの授業を聞き流してお昼時までじっとしてま  
すか……。

「はい、ここを鬼島！お前が読め」

おっと、どつやら俺を「指名」のようだ……。

「すみません安永先生……俺ちよつと忘れ物しちゃって」

「なんだと……まあいい、教科書か？」

「いえ……ちよつと違います」

「ん？……じゃあ何だ？ノートか？」

「いえやる気です」

「そうか、ではそこで立ってる」

「うす」

我ながら詰まらない事をしているな〜っと言つ事は理解できているつもりだ……。

だが、これはこれで何だかさっきの何もしていなかった時よりも、多少なりとも新鮮な気持ちがかみ上げて来たような気がする。

そんな日本史の時間が漸く終わり、遂にお待ちかねの昼食タイムがやって来た……。

しかし、その昼食タイムもある一つの放送で終わりを見てしまった……。

『一年E組の鬼島亮平君、小野先生がお呼びです至急生徒指導室まで御越しく下さい』

その放送を聴き、俺はクラスの面々から何やら訝しげな視線を送られながら。

今しがた呼び出された生徒指導室まで向って行った……。

そして生徒指導室に到着した俺はまず自分の目を疑った。

「なんでキサラ姉ちゃんがここに居るんだ？」

その原因は、生徒指導室のソファで寛ぐ幼馴染の姿であった……。

「しらねえよ……何か小野せんが私達二人に用があるってだけしか聞いてねえし」

「何時に無くやる気がなさげだな……まあいいや」

その俺の態度に、目の前のキサラ姉ちゃんは明らかに態度を豹変させる。

「へーそうかい……アンタこの前、私にやった事覚えて無いんだ。ほー、これは驚いたねえ……いいんだぜ？  
アンタが私を襲おうとしたって学校中に広めてもさ？」

「それだけはマジ勘弁して。

そんな事されたら俺もう学校じゃ彼女出来なくなっちゃうから」

「ふん！アンタに彼女なんてまだ早いつつの」

「ほっとけ！」



「おまたせ」

その俺の言葉と共に、この部屋に小野先生が到着した……。

小野京子、28歳。

俺のクラスの副担任で、国語の授業を担当している。

容姿はおよそ28とは思えない小ささと幼さで、胸はキサラ姉ちゃんよりも虚しく。

短い黒髪と四角い眼鏡が特徴的な先生だ……。

「お、ちゃんと二人ともそろってる……、先生嬉しいな……」

そんな小野先生が、どこかふんわりした雰囲気と俺とキサラ姉ちゃんを見ながら喜び始めた……。

「いや、てか先生？何で俺達は呼び出された訳？

それにキサラ姉ちゃんは口頭で、俺は放送って……どゆこと？」

その俺の言葉に、小野先生は少し顔を赤らめながら俺達に対して口を開いた。

「え……とね……なんて言うか……」

何か一週間ぐらい前に二人が校舎裏で揉めてたって噂が流れてるんだ……。

本当なのかどうか安永先生が確かめて来いって言われちゃったんだけど……。

でもキサラちゃんは女の子だし……その恥ずかしいかなって

思ったの〜」

小野先生の言葉に、俺とキサラ姉ちゃんは一瞬何の事か考えるも、すぐに答えに行き着き二人で同時に答えた……。

「ああ、それはキサラ姉ちゃんが……」

「亮平、後は任せた……」

「はあ!?!」

「え?ちよつと待ってよ〜キサラちゃん!」

そう言いながら、キサラ姉ちゃんはこの部屋のドアを開いて勝手に出て行ってしまふ……。

「あ〜……どうしますか?」

「ん〜……まあいつか。」

それで噂は本当なの?鬼島君?

キサラちゃんは女の子だからその〜……やっぱり恥ずかしかったのかなノノノ」

いや、多分それは無いと思いますよ小野先生?

とは言え、俺もこの目の前でえらい勘違いをしている大人の誤解を解かねばなるまいと。

そんな使命感に駆られ、前回のキサラ姉ちゃんとの出来事を少し端

折りながら小野先生に語る事にした。

現在説明中……。

と言う訳なんですよ  
「

「ほえ〜って事はつまり。

キサラちゃんが鬼島君にお詫びをするために〜。

鬼島君を校舎裏に呼び出したって事で良いのかな〜？」

「そうですね、大体それであってます」

ふ〜〜やつと説明できたよ……。

この先生、俺と言葉のキャッチボールする気ゼロだよ……。

まあそんな苦勞をここで言うのは野暮ってもんだから、「ここは省略してをく。」

「な〜んだ、つまんないの」

「いや詰まらないって、先生が言う事じゃ無いでしょ？」

この先生は何なんだ？……はっきりいって話の間が噛み合わなすぎる。

「え〜！！だつて高校生つて言つたら恋愛とか、そつ言つ浪漫的イックな物に憧れるんじゃないの？」

「いや、確かに期待はしてますけど……話聞いてました？」

俺ただキサラ姉ちゃんのチームの奴に絡まれた事を謝られただけですよ？

そこに血の匂いはしても……青春の甘酸っぱい匂いはしてきませんよ？」

「ん〜そつかな？」

この先生は……ん？さてよ？

「先生つてさ……もしかして恋愛に理想を持つてるタイプなんですか？」

「ん〜理想つて言うかロマンティックな恋愛がしたいだけかな？」

やっぱり……この人、理想に死ぬタイプだ。

「先生……俺が言うのも何ですけどね？」

多分先生が結婚出来ないのつて、その思想のせいだと思いますよ？」

「え〜！？なんでよ〜！？」

先生が顔を真っ赤にさせて怒りを表現してきた……だけど何かその姿に俺は不覚にも癒されてしまった。

「先生理想が高すぎるんだよ……」

「そんな事ないもん!!」

「じゃあどんな感じの恋愛がしたいのか言ってみて下さいよ?」

俺はそう言つて、目の前でプンスか怒ってる小野先生を挑発する。

「わかったよ!!……あれ?」

「どうしてんですか?言っんじゃないんですか?」

「いや……いざ言葉にして説明しろって言われるとさ。」

「なんだか説明し辛くて……」

おい国語教師!!

「あ〜じゃあ、俺が手伝うんで実演してみてくださいよ」

「分かったよ〜、それなら出来る筈!!」

俺はこの時、なぜこんな提案をしてしまったのだろうと……。

後々後悔する事となった。

ちょっと待ってね!!準備中だから!!

【side キサラ】

「あゝそうだ……あいつに言っとく事があつたんだ」

私は生徒指導室から出て行った後。

私の隊の溜まり場である空き教室へと帰っていく最中に、そんな事をふと思いついた。

まあその内容は、あいつのクラスの白浜兼一って奴の力を試したいから。

その相手である空手部の筑波の邪魔はしないでをいてくれただけなんだけどな……。

「でもアイツの事だ……多分筑波の態度が相当悪くない限りは手はださんだろ」

でも一応筑波には言っておこう……『亮平には手を出さなつて』と。

そう釘でも刺しとかなないと、多分亮平がきつと何か問題を起こす……いや多分つて言うよりは絶対だ。

そんな考えをしていた私は、先程亮平を置き去りにして出て行った生徒指導室の前についての間にか到着していた……。

「ん？……何か聞こえる」

その音はどうかやら人の話し声の様で、その話し声は当然目の前の生徒指導室から聞こえて来ていた。

私は最初、亮平が小野せんにさっきの事を説明しているのだからと考えていたのだが……。

『いけないわ亮平君！！私達の関係は教師と生徒なのよ！？』

『そんなの関係ないだろ！？俺はもう我慢が出来ないんだ！！京子が欲しいんだよ！！』

………は？

私は、その二人の声を聞いた瞬間。

人生で初めて時間が止まるといった事を経験した……。

【side 亮平】

「京子……もう、俺は躊躇わない」

あれ？……俺なんでこんな事口走ってるんだろっか？

「亮平君……だめ……だめなのよ」

そしてどうして目の前の小野先生の目が潤んでるんだろっか？

さらにどうして俺は小野先生を机に押し倒してるんだろっか？

「京子、お前だってもう気づいてるんだろ？」

俺と京子はもう戻れない場所まで来ちまったんだ……」

「亮平君……でも私達の恋愛は誰にも祝福されないのよ？」

あゝそうか、思い出した。

確か小野先生がロマンティックとは禁断の愛だ！……とか言ってるんだ。寸劇まで考え付いたんだ。

「そんなのが俺と京子に必要なのか？」

「でも……私」

ああ……なんだか芝居だって思ってたも、女性をこんな形で押し倒すと……その。

こんなにグッと来るものだとは思わなかった……。

やばい……ちょっと興奮してるな俺。



「京子……」

「だめ……」

そう言いながら俺は益々この芝居の雰囲気呑まれていってしまっ  
……。

「眼鏡……邪魔だろ？」

俺は小野先生の眼鏡をそつと外す……。

「だ……め」

小野先生はそう言いながらも、その目を閉じる……。

するとその瞬間、この部屋の扉が開かれる音がした。

「だれだ！！」

俺はそう叫びながら、扉が開く音がした方へと視線を向ける……。

「亮平……私……私」

すると其処には、何やら体を小刻みに震わせ。

その普段は気の強そうな目を弱々しく潤ませ、その目を俺へと向けて  
いるキサラ姉ちゃんの姿があった。

「ん？どうしたんだ……は！？いやこれは違うんだキサラ姉ちゃん  
！！」

「私は……私は……ッ……!!!!」

俺がこの状況を説明しようと、扉の前で佇んでいたキササ姉ちゃんに近づこうとしたその時。

そのキササ姉ちゃん自慢の右の蹴りが、俺の股の間を走りぬけ。

また再び、文字通り一直線に………。

俺は、そこで意識を手放した……。

後日、確りと反省してくれた小野先生の協力の下。

キサラ姉ちゃんに対し、事実の弁明に向かった時。

理不尽にも再び同じ所を蹴られた事を、俺はここに記して置く事にする……。

**幕間** 昼下がりの空き教室、幼馴染は見た！！（後書き）

ごめんなさい、そしてすみません。

どうしてこう……もっと変態チックに……ま〜いつか。

それよりもゲレゲレ、幕間というものを書いたのは初めてです。

出来れば感想を貰えれば幸いです。

ではノシ

第六話 俺の後ろに……いや、別に立ってもいいよ？（前書き）

いいサブタイが思いつかない。

そして週間アクセスのために投稿。

第六話 俺の後ろに……いや、別に立ってもいいよ？

あの兼一と大門寺とか言う男の試合から早三日が過ぎていた……。

その間、亮平は危うく教師との禁断の恋に堕ちそうになるだとか。その現場を幼馴染に見つかり、また玉を蹴られてしまつとか……。とにかくそんな碌でもない事ばかりやっていった。

そんな本人自身よく分かってない時間が漸く落ち着きを見たかと思えば、今度は友人である兼一の様子がおかしい事に亮平は気づいた。

「どうした兼一？最近なんだか何かに怯えてる様にも見えるんだが……」

亮平はその様子がおかしい兼一に対し、学校の休み時間に教室でその事を聞く事にした。

「あはは……なんて言うかね。

前に僕が空手部を辞めた理由を話したでしょ？」

「ああ、聞いたなそんな事も」

実は亮平は、前回の試合の事を本当は黙っていようかとも考えていたのだが。

試合の日の次の日に兼一が自身が園芸部に入った事と、あの日の試合の事を話してくれたのだ。

すると、そんな兼一が亮平に対し何やら重苦しい雰囲気で話し始めた……。

「あのね、僕が大門寺君とやった時の審判の人がね。」

あの時僕がやった技に興味を持ったらしくて……何か僕の実力を試すって言ってるらしいんだ」

その兼一が醸し出す雰囲気は既に自虐と諦めが織り交ざった何とも言えない空気であった。

心なしか、兼一が何処かのボクサーの最後の様に真っ白になっている様にも見える。

「ふん……で、そいつは強いのか？」

その俺の言葉に、兼一は怯えるかのように口を開き始めた……いや、怯えていた。

「あの人は筑波先輩って言うんだけどね……。」

あの人空手部の副将でね、素手で石割っちゃうの……。」

それでバットなんかも足で折っちゃうし、組み手だっていつも二人相手にやってるんだ」

「なんだ、それだけじゃないか。」

俺だったら石なんて指で潰せるし、バットだって片手で『挟れる』ぞ？

大丈夫だって兼一！また前の時のようにやっちゃえば良いんだよ

「！」

「その方は、今の兼一さんにはちょっと厳しいですわね」

そんな兼一と亮平の会話に入って来たのは、いつも通りの地味な格好ながら。

その本質部分は全く隠せていない風林寺美羽、その人だった。

「美羽さん……」

「どうしてだ、風林寺さん？」

亮平は、その風林寺が言った事に疑問の言葉を向ける。

「多分その方は黒帯クラスの方ですわね。」

そうすると、現状の兼一さんでは少々難しいかもしれませんね……

……

「そうなのか兼一？……俺には違いが分からんが」

亮平は、今度は兼一に疑問を投げかける。

「うん……筑波先輩は大門寺君とは別格だから。」

「どうしよう……正直、僕このままだと」

そう言いながら兼一はまた白くなって行く。



「あゝ……兼一よ、そう肩を落とすなって。  
また、前みたいに特訓でもすれば良いじゃんか……それにいざとなったら『キーンコーンカー……』」

亮平がそう言ったのと同時に、次の授業の予鈴が学校じゅうに響いた。

「時間か……兼一、この話はまた後でな？」

「あはは……」

しかし、兼一は亮平の問いかけなど聞いてはいないかのように明後日の方向を向きながら、力なく微笑むのであった……。

そして学校の授業も、午後の体育を残すのみとなった今。

亮平はその持ち前の身体能力を、外で行われているバレーボールで惜しみなく発揮していた。

「ダッシャイツー!!」

亮平が、そんな掛け声と共に打ち放ったスパイクは、誰にも反応される事無く。

もはや球技とは思えない、戦慄を覚える様な勢いで地面へと突き刺

さっていた……。

「うわ、ボールがめり込んでるよッ!？」

「てか、良くボールも割れねえな……」

その光景を目の当たりにしたクラスメイトの人間達は、その光景に  
対し各々で戦慄を覚えていた。

「ナイス鬼島!」

そんな、およそこれはバレーなのか?つという雰囲気の中。  
その現象を起こした亮平に、一人の女子が賛辞の言葉を亮平に投げ  
かけた。

「おう姫野!」

そうして二人は互いの掌を叩き合わせた、所謂ハイタッチというや  
つだ。

亮平とハイタッチを交わした女子生徒の名前は、ひめのまこと姫野真琴と言い。

亮平と同じクラスメイトで、所属部活動は薙刀部。

長い黒髪をカチューシャで止め、その活発そうな顔はスポーツ娘と  
呼ぶに相応しい顔立ちをしている。

体系も雰囲気も顔立ちも、そのどれもが普通の女子高生の枠に収ま  
っている、普通の女子高生だ。

「しかしアンタ凄いわね……。」

そんなに動けるのに、どうして部活とか入ろうとしないわけ？」

「え？だって、めんどいし」

そんな姫野の問いに、亮平は特に気にする事もなく答えた。

「ふうん、まあ良いわ……取り合えず、今でゲームも終わった事だし。」

「私達はその辺で見学でもしてましょ？」

「そうだな……ん？あそこに居るのは兼一か？」

姫野の提案に賛成しかかった亮平の目に、クラスの体育に混じらず、校舎裏の影で、体育座りをしている兼一の姿が目に入った。そして、その周りには風林寺と宇宙人の姿もあった……。

「あいつら何してんだ……悪い、ちょっと見てくるわ」

「あッ！ちょっと鬼島!？」

そう言って、亮平は兼一達の下へと走って行ってしまった……。

「……何よ、せっかく二人で話してもしてやるうと思ったのにさ」

そう言う姫野の前には、既に亮平の姿は映って無かった……。

そして亮平は、兼一達の下へと到着した。

到着した亮平は、まずは兼一に話しかけようとその歩を進める。  
そして、兼一に話しかけようと風林寺の直ぐ後ろに立った時。  
それは起こった……。

「おい兼一、何してんだ？」

「亮平君！危ない！！」

「は？」

兼一に話しかけた亮平に、突如何かしらの浮遊感が訪れた……。

「てちょっと待て!？」

そう叫んだ亮平の目には現在、地面の上を物凄い勢いで飛んで行っている光景が見えた。

その事に気づいた亮平は、どうやら自分は浮いているらしいと無意識の内に判断し、その体を捻り、地面へと何の問題も無く着地する。

「……………」

「ああッ！すみませんですわ鬼島さん！！」

着地し、何が起こったのか分かっていない亮平の下に、  
何やら焦った様子の風林寺が駆け寄って来た。

「…………ハッ！！」

「鬼島さん、すみませんですわ…………」。

私、どうしても突然後ろに立たれてしまうと、その人を投げ  
てしまふ癖が御座いますの」

(この体操着姿は高校生として健全と言えるのだろうか…………)

駆け寄り、亮平に対し謝罪の言葉を述べた風林寺だが、  
当の亮平は、その風林寺の言葉を全く耳には入れず。  
駆け寄って来た風林寺の体操着姿に目を奪われていた…………。

「あの〜鬼島さん？どうかしましたかですわ？」

「…………ハッ！あ〜いや、別に問題は無いぞ？」

「そうですね…………(何だか今の目、剣星さんに似ていたような…………)

」

正気を取り戻した亮平は、何やら訝しげな目で見てくる風林寺を後回しにし。

隅の方で、体育座りをしている兼一へと目を向けた……。

「そんな事よりも兼一、そんな所で何してんだよ？」

そう言つて、亮平は兼一へと言葉を投げかける。

がしかし、当の兼一本人は亮平のには目もくれず。

先程、亮平の事を投げ飛ばした風林寺の方へと、その普段からは想像もつかない真剣な視線を向けていた。

「み、美羽さん……」

その兼一の言葉に、亮平に訝しげな目を向けていた風林寺が、今度は兼一の方へ目を向けた。

「あなたはどうかやって、そんなに強くなつたんですか？」

「……」

「何をすれば僕もあなたみたいに、強くなれますか？」

そんな風に、突然真剣になつて風林寺に疑問を投げかけた兼一に。風林寺は無言で近づき、そほ口を開いた……。

「本気で強くなりたいのですのね……」。

確かに私、短期間で強くなる方法を一つだけ存じております」

「え!?!」

その風林寺のまさかの答えに、疑問を投げかけた側の兼一は驚きの声を漏らす。

「ある場所に行き、そこで武術を教われれば飛躍的に強くなれるですよ……ただし」

その風林寺の言葉に、兼一は息を呑む。

「生き延びる事が出来れば……ですが」

そんな体育の時間も終わり、下校の時間となったので亮平は帰宅の

徒に付こうとしていた。

しかし、そんな亮平に前の席に座る風林寺が話しかけてきた……。

「あの〜今日の体育の時間の時に、私が言った事なのですが……」

「ん？……どうした？」

話しかけて来たは良いものの、何処か歯切れの悪い風林寺。

「その場所に、鬼島さんも来て頂ければと考えているのですが……」

「ん？どうしてだ？……俺は格闘技なんてやらんぞ？」

「いえ、違うのです……」。

その、以前その場所にいる方々に鬼島さんの事を話してみたところ……。

なにやら興味を持ったそうなので、兼一さんが来られるのなら鬼島さんとも思っています」

その風林寺の言葉に、亮平は何のと無しに答える。

「ああ、別に構わないぞ」

「そうですね、でしたらこの地図を差し上げますので、明日兼一さんと共に来てくださいですの」



そう言つて、風林寺は鞆から一切れの紙を取り出す。

「了解……じゃあ明日な、部活頑張れよ」

「はいですの、それでは鬼島さんもごきげんよう」

風林寺はそのまま教室を出て、部活へと向かつて行つた……。

そして、亮平は手渡された紙切れを開くと。

どうやらその地図は女の子特有の丸文字や丸く書かれた図面のせいで、亮平では読み取れないものだったらしく。

大人しく同姓であるキサラに読み取ってもらつたために、そのキサラの元へと亮平は向かつて行くのであつた……。

そして現在、亮平はキサラと学校の廊下で先程の地図について話し合つていた。

「で？私にこのへんてこな地図を解読しろと……そういう事で良いんだな？」

「ああ、俺じゃ全く分からなかったからな」

「そうか……とここでこの地図は誰に渡されたんだ？」

「うちのクラスの女子だけど？」

「……」

「どうしたんだ、キサラ姉ちゃん？急に黙り込んだじゃってさ？」

「……他を当たれ、このクソ野郎」

「ブリッ！」

「何やってんだよ！？それ破っちゃ俺、道分からないままじゃん！？」

「知るか……！」

「おいちょっと何処行くんだよ！？」

そう言ってキサラは亮平の下から去っていった……。

そして、その場にただポツリと残された亮平は仕方ないので。

取り合えず明日は兼一に任せようと、心の中で決めるのであった……。



第六話 俺の後ろに……いや、別に立ってもいいよ。(後書き)

次回は梁山泊です。

ではノシ

第七話 梁山泊（前書き）

やっと梁山泊だ〜…アパパパパパ！！

そして、後書きにはゲレゲレからのお願いと言っか。  
我俣が書かれています。

## 第七話 梁山泊

「おゝす、おはよう……って兼一、お前大丈夫か？」

「え？……ああうん、昨日遅くまで起きててね」

とある休日の朝、兼一と亮平は昨日、風林寺に言われた場所へと向かうため。

兼一の地元のある地域で、二人して待ち合わせをしていた。

だが、どうやら兼一の目には隈が浮かんでおり、亮平はそれを心配して兼一に聞くのだった。

「……何があつたんだ？」

「いやね……昨日美羽さんに渡された地図の解説を妹とやってたら、いつの間にか朝になってさ……」

「あゝ……そうか……それは災難だったな」

亮平はその兼一の事情を聞きつつ、兼一に対し少し罪悪感を覚えていた。

だが、それも亮平の所為では無く、その地図を無言で破り捨てたキサラが悪いと。

亮平自身は考えていたのだが……実際、兼一に丸投げしたのは事実なので少し反省するのだった。

「うん、でもまあ妹が殆ど頑張ってくれたから……と、ここかな？」

「お、着いたのか？」

二人はそう言って立ち止まり、視線を互いから前に向ける。

「妹よ……本当にここなの？」

「へ〜……でかい門だな、こりゃ本当に映画みたいな武術の達人が居そうだな兼一！」

すると其処には、この住宅街には似つかわしくない巨大な門が、異常な存在感を撒き散らしていた。

その門の横には、亮平は読めなかったのだが『梁山泊』と書かれた立て札と、その門の上にも同じ文字が大きく書かれた板が立て掛けられていた……。

その異常とも思える存在感に兼一は尻込みしていたが、亮平の方は少し興奮した様子であった。

「ええい、今更ビビッてどうする!?!」

そう言つと、先程まで尻込みしていた兼一が、その巨大な門へと突っ込んでいった。

「たのもー!……ってなんだこの門、異様に重い!?!」

しかし、その巨大な門は兼一が幾ら押しても、ビクともしない……。

「きいいい〜!入れたくないんかい!?!」

「何やってんだよ兼一……ちょっと退いてみ?」

亮平はその友人の姿を見かねて、その巨大な門へと手を添える……。

「よつと」

「えっ?」

そしてその巨大な門は亮平の手によって、簡単にバンツ！と言っ  
音を立てて内側に開いてしまった。

「なんだよ、ちゃんと開くじゃん」

「いや…あはは……」

「はて？お若いの、この梁山泊に何の御用かの？」

すると、門を開いた二人の背後から何者かの声が聞こえて来た。  
二人はその声に反応し、同時に振り向く……。

「あの～その～……じつは」

「でかッ!？」

そこに立っていたのは、亮平の身長を遙かに越し。

金髪の長い髪と、それと同じ色の立派な髭を生やした、大きな威  
つい老人が立っていた。

「間違えました!！」

「あッ!おい兼一!？」

「これ、またんか」

すると、その老人の威圧感に耐えられなかったのか。

亮平の隣りに立っていた兼一が一目散に逃げていった……。

「わっぷ!？」

が、それも直ぐに、何かにぶつかって止められてしまう。

「またんか!！」



その何かは、先程まで亮平の前にいた厳つい老人であった。

「は？」

「な、にイ！！」

「君の方は何やら深刻そうな面持ちじゃったじゃないか、大丈夫かね？」

しかし、その老人は今の現象に呆けている二人を無視して、地面に尻餅をついている兼一に言葉をかけた。

「もしやあなたは、何かの武術の達人！！？」

そして、尻餅を付いている兼一の方は、何やら思いついたような顔をして厳つい老人に疑問を投げかける。

問われた方の老人は笑いながら、その自慢の髭を撫で始める。

「ほ、達人と言うほどではないがの……生まれてこのかた負けた事はないぞい」

「あ、あの……僕、白浜兼一です！！風林寺さんの紹介で来ました。よろしく願います！！」

「ほうほう、若いのに挨拶が確りしておるの。」

「で……そちらの若いのは？」

「同じく風林寺さんの紹介で来ました、鬼島亮平です」

「ほう、君があ的美羽が言っていた……なるほどのう。どれ、では二人ともついて来なされ」

そう言って、厳つい老人は二人を門の中へと誘って行った……。

「しかし広いな……」

現在、亮平達三人は、門の中に建てられている大きな一戸建ての日本家屋の様な場所に居る。

その家の広さに、亮平は一人驚くのだった……。

「あの、この道場で空手教えてます？」

「うむ、空手も教えとるよ」

そして、亮平の前を歩く二人はそんな会話をしながら先を歩いている。

ズバンツ！！ズバムツ！！！！

するとそこに、何やらサンドバックを叩く音が聞こえて来た……。

「な、何すかあれえ〜！！!?」

「ん？うわ！！敵つツ！」

亮平と兼一は、そのサンドバックの音がした方向へと目をやると、そこにはサンドバックに敵つい蹴りを入れ続ける、肌の黒い巨人が居た……。

そして、その巨人を見るや否や、兼一は驚愕の声を上げ、亮平はその凄まじい光景に素直に驚くのだった……どうやら二人には温度差があるようだ。

「ん？ああ、彼はタイ人のアパチャイ・ホパチャイ君、28歳」

目の前を歩いていた老人が、その敵つい人間の紹介を亮平と兼一に対してする。

老人の反応を見ると、どうやら何時もの事らしいと、亮平は勝手に心の中で悟った。

「キイエエエ！！」

「うおおおお！！？」

すると、そのアパチャイと紹介されたタイ人は。

今まで蹴っていたサンドバックをその蹴りで、ズバツ！と音を立てて切り裂き。

そのまま庭にあつた石作りの置物や、庭に生えていた立派な木、はてはこの家を囲む外壁まで、そのパンチや蹴りで無差別に破壊し始めた……。

「ひいひいひい！！むぐツ！」

「あまり驚かんように、喜んで調子に乗るんじゃよ。

こらーッ！！やめんかアパチャイ！！」

「はは……とんでもねえな……」

その光景に恐怖する兼一の口を押さえながら、亮平達を案内してくれていた老人がそうアパチャイに対して声を張り上げる……。

その様子に亮平は、ただただ愕然としていた……。

「滅多にこない客なんで、少々興奮気味での」

（喜んで、あれなのか……？）

（いや、それ人としてどうよ……）

そんな事をしながら、この家を歩き続けていると。

今度は兼一が何やら見つけた様で、障子扉の間に目を覗かせる……。

その様子を見た亮平は、その部屋の中に何があるのか気になり、亮平もその部屋の中を覗き見た。

(亮平君、あの娘かわいいね……この道場の生徒かな?)

(いや……あれはかわいいと言うより、綺麗かエロいのどっちかだろう?)

それに見るあの娘、背中に長物担いでるし……あの周りにあるのは何だ?)

(え?)

すると其処に居たのは、ピンクのミニスカ着物を羽織り、長い黒髪のポニーテールと、その大きな胸が特徴的な女性が立っていた。

しかし、それだけなら亮平も喜々としてその女性を見れるのだろうが……。

周りに立てられている、四本の種類が別々な刃物と。

その女性が持っている長い日本刀のせいで亮平も冷静にならざるを得なかった……。

するとその女性が、その日本刀を突然抜き、動き出す……。

「ピュッ」

その動きは亮平達の目には見えなかった程の速さで。

亮平達はその動きに気づけたのは、

その女性の周りに立っていた四本の刃物が全て綺麗に折られた時であった。

「すっげ……」

「おい！！僕に何か用があるのか？」

「あ、いえ、その……」

するとその光景を作り出した女性が、背中越しに亮平達に語りかける……と、思われたのだが。

「ならば畳の上からにしろ、馬剣星ばけんせい！！」

そう言っつて、突然その女性は自身が持っていた抜き身の刀を、自身が立っていた畳と畳の間に突き刺した。

そして、その畳の中から何やら帽子を深く被った小さな老人が飛び出てきた……。

「ホッ、いやちょっと下を通りかかったただけね、しぐれどん？用はないね……」

そう言っつて、小さな老人はこの部屋から出て行くこととする。

「さて、その怪しげな『カメラ』で何を撮っていた？」

しかし、それはしぐれと呼ばれた女性に、首に刀を付きつけられる事で阻止される……。

「パン……風景ね……！！」

そう言っつて、小さな老人はこの部屋から急いで出ようとするが。

しぐれがそれを見逃さず、その老人に懐から取り出した三個の手裏剣を投げつける……。

が、その手裏剣は老人の手と口で起用にキヤツチされてしまう。  
そして老人は再び走り出し、この部屋から出るため亮平達がいる  
方へと走ってきた……。

「わあ！！つて、おわあー！！？」

「兼一ッー！」

突然、突っ込んで来た老人に兼一が驚くも、その後直ぐに兼一の  
顔目掛け、迫って来た手裏剣を亮平が指でキヤツチする。

「あ……あはは……何ここ？」

「流石に、これは危ないな……」

「これこれ、あちこち覗いとると、危ないぞ」

「いや、それどころじゃ無いですよ……手裏剣飛んで来ましたし」

「まあそうツンツンするでない……鬼島君は確りキヤツチしとるじ  
やろ？」

「……………（だめだ……この爺、常識つてもんが無いぞ）」

亮平はそう心の中で、目の前の老人に失礼な事を言いつつも。  
兼一と共に老人の案内に従い、遂に空手の先生が居る場所へと辿  
り着いた……。

「さて、おぬしの御所望の空手の先生なんじゃが……少々気難しく  
ての」

「は、はあ……（ガタガタ）」

（この爺の基準が分からんから、何とも言えんな……）

そして、扉の前に立った厳つい老人は、その兼一の先生に成るで  
あろう人物が待つ扉を開いた……。

「おい逆鬼君、相談なんじゃが……」

……。  
厳つい老人は、その部屋の中の人物を呼びかけ、事情を説明する

「なにい〜……弟子だあ？ばつきやるー、俺は弟子はとらねー主義だ！ー」

（裸革ジャンに、ジーパン……オールバックに顔に横一門の傷。

何やら世紀末の匂いがプンプンするな……このガチムチの兄貴は）

亮平は、その逆鬼と呼ばれた、自身よりも大きな男に対し、そんな印象を持つのであった……。

「のう？」

（じゃあ先生じゃないじゃん……）

そして、その逆鬼の発言に少々困惑する厳つい老人と。

その兄貴を見て、さらに怯え始める兼一……。

すると、そんな面々を尻目に、逆鬼と呼ばれた男は持っていた酒を飲み始めた。

「だいたいよ、じじい……（パシヤア！ー！）」

逆鬼はそう言いながら、飲み終えた酒のビンを握力だけで握りつぶした……。

「俺なんか弟子入りしたら……」

逆鬼は、そのまま何やら構えを取り始めた……。

その周りには、天井から吊るされた三畳の畳が逆鬼を囲んでいる

……。

「ちえりゃああああッ！！！！！！」

ドドドドドドドド！！！！！！！！！！

逆鬼はそう叫びながら、周りに吊るされてる三畳の畳に、怒涛の貫き手を叩き込む。

そして、その逆鬼の貫き手を叩き込まれた三畳の畳達は、それぞれ例に漏れず。

その所々を抉り・くり抜かれ、もはや先程までの形を残している畳は残つては居なかつた……。

逆鬼は、その惨劇を起こした後、ゆっくりと此方に口を開いた。

「三日で死んじまうぜ？」

「そつすかゝ弟子は取らない主義なんすね。」

でもそれじゃ、しょうがないですよね、残念だな。」

「おい！！兼一！？どこ行くんだ！？」

その惨劇を目の当たりにした兼一は、とう等この非常識空間から逃げ出そうとする……。

そして亮平は、目の前で立ち去ろうとしたその友人を止めるべく、兼一を追いかけようとす。

が……兼一が、この部屋の扉を開けようとしたその瞬間。

その兼一の目の前の扉が突然開き、外からもう一人の人物が只ならぬ空気を纏いながら、兼一の前に現れた……。

「ぎゃああアアアッ！！！！？」

「失敬だな君は……。」



兼一は、その突然現れた人物を見るや否や、気を失った……どうやら本当に限界を迎えたらしい。

「兼一！！おい大丈夫か！？おい兼一！！」

「おい秋雨、このガキ気を失ってるぜ？」

「さらに失敬な……」

その倒れた兼一に、亮平は急いで駆け寄るが、どうやら兼一は完全に気を失ってるようだ……。

また、兼一の気を失わせた連中は、気を失った兼一と。

その必死に兼一の状態を気遣う亮平を見ながら、何やら小声で相談をし始める……。

「おい！あんたらも少しは手伝ってくれ！」

「あくすまないが、君は鬼島君で良いんだよね？」

「それが何すか！？……今はそれよりも『大丈夫、ただ軽く気を失ってるだけだよ？』……そうですか」

亮平はその小声で相談し始めた三人に、手伝いを求めるが。突然、その秋雨と呼ばれた男が話しかけてきた……。

「それで、なんすか？」

「いやね、君の話は美羽から聞いててね……ぜひ試したい事があるんだよ」

「……なんすか？その手は？」

秋雨と呼ばれた男は、そう亮平に言いながら。

自身の右手を、亮平の前に出した……。

「いやなに、ただの体力測定だとも思ってくれば良いよ」

(何言ってんだ、このちよび髭オッサン?……第一俺よりも少し小柄だし。)

いや……着ている服からして合気道?それとも柔術か?)

「なに、簡単な事だよ……君にこの手を思いつきり握って欲しいだけだから」

「!?!」

その言葉に、亮平は驚愕の表情を隠せなかった……。

仮に、武術をやり、風林寺から話を聞いているとしても、普通の人間が自身の握力を確かめるため。

己の手を差し出して来られたのは、亮平にとっては初めての経験であつたからだ……。

「いいんすか?……俺、手加減しないかもですよ?」

「別に構わないよ?」

秋雨の言葉に、亮平は躊躇いも無く。

その目の前に出された秋雨の手を、自身の右手で握手をするように掴む。

次の瞬間、亮平は、その掴んだ秋雨の右手を潰す勢いで思いつきり握り始めた。

「ふんツ!?!」

「!?!」

亮平に右手を思いつきり握られた秋雨は、その想像以上の握力に一瞬驚愕の表情をするも……。

「なるほど……」

「は?……おわッ!?!?!?」

次の瞬間には、その自身の右手を掴んだ亮平を、何をされたのか？……掛けられた亮平自身、理解は出来なかったが。

秋雨は姿勢を変えず、一呼吸で亮平を地面に投げつけた……。

「は？え？」

投げられた亮平は、何が起こったのか分からないと言った風な顔で、目の前に佇む男を見上げる。

「すまないね、君を試すような事をしてしまった。

取り合えず、そこに倒れてる少年を連れて、先に居間の方に向かっていてはくれないかい？」

「は……はい」

その秋雨の言葉に、未だ何が起きたのか理解していない亮平は……。

そのままフラフラを立ち上がり、気を失い倒れている兼一を抱えながら、この部屋を後にし。

指定された、居間へと向かうのだった……。

「で、秋雨君？……あの鬼島と言う子は、どうじゃったかの？」

すると、突然今まで黙っていた厳つい老人が、その秋雨に先程の事を聞きだした。

「はい……間違いありませんね、彼は既に達人級のマスタークラスの一步手前。

準達人級（準マスタークラス）の実力を持っています……。

また、パワーだけで言うのなら、既に達人級に足を一本踏み入れています」

そう言った秋雨の、先程亮平に握られた右の掌には、亮平の手形が確りと残っていた……。

「ほう……それは珍しいの」

「生まれつきの強者って奴か……」

「いや、逆鬼……彼は生まれつきの強者など、そんな生ぬるい物では無い……」

「じゃあ、何だっただよ？」

「神に愛された才能……そんな言葉が相応しいと私は考えているよ」

「まさに神童じゃな」

「ふふ、私は怪童とも呼びたい気分ですよ……」

「だが、それだけに危うい存在でもあるの」

「はい、彼のような才能を見るのは初めてですが……。

大抵過ぎた才能を持った人間が辿る末路は……」

「わしは確か、昔に見た事があつたがの……。

そうじゃの、確かそやつも、己の才能に身を滅ぼされた一人じゃつたの」

亮平と兼一が去った部屋で、その三人の武術の達人達は。

先程の亮平の実力について話し合う……。

「しかし取り合えずはそろそろ、居間の方へ向かいましょう……待たせるのも悪いですし」

「そうじゃの、では行くかの逆鬼君」

「わっつたよ！行きや良いんだろジジイ！！」

そう言って三人の達人達は、これから始まる弟子物語を始めるために。

亮平と兼一が待つ居間へと向かうのだった……。



## 第七話 梁山泊（後書き）

いつ原作から逸れれば良いのか？  
そんな事が最近の悩みです。

そして、前書きに書いた事ですが。

それは、ゲレゲレが今日思いついた二次小説のネタを。

誰か書いてくれないかな〜……。

そんな下劣な考えが浮かんでしまったので。

どなたか興味が有る方、又は、良いよ書いてやるよ…と言う方。  
その様な神がいらっしたら、ゲレゲレの今日の活動報告までお  
越し下さい。

こんな事を後書きで書くのは非常識ですが……。  
すみません、どうしても私では上手く書けなかったもので……。  
すみません……。

今回は、兼一が原作通り梁山泊に入る話と。

亮平強化計画の……おっと、これ以上は言えないぜ？

第八話 いや、別にいやらしい事なんか考えて無かったし（前書き）

サブタイこんなんで良いのか？

まあ、取り合えずどつぞ。

第八話 いや、別にいやらしい事なんか考えて無かったし

「で、ここが風林寺さんの自宅と……マジで？」

亮平は今、大変困惑していた……。

「マジですの……本当に申し訳御座いません。

本来なら私が、兼一さん達をお迎えに上がらなければならなかったのですが……」

そう言つて、亮平の目の前に正座で座っている美羽は。

亮平に対し、深々と頭を下げるのだった……。

「それはまあ良いんだけどな……取り合えず、この気を失つてる兼一をどうするかだな」

「そうですね……」

そう言つて美羽は、気を失い横になっている兼一の側へと近づいた……。

「すみませんですの兼一さん……」

「ハッ！？……美羽さ〜ん！〜！」

美羽が兼一の側に近づいた瞬間。

今まで気を失っていた兼一が突然目を覚まし、その近くに居た美羽へと泣きながら抱きつこうとする。

が……それは、美羽が咄嗟に反応して身を避わした事によって未遂に終わる。



「うっ！しどい……」

「ほんとに申し訳ありません！！家の師匠達、人を驚かすの大好きで……。」

言いつけて置いたのですが……」

(人を驚かすのが好きって……妖怪じゃな……いや、妖怪で良いか)

そして、早速起きた兼一に対し、美羽は先程亮平に謝った時よりも必死にその頭を下げた。

亮平はその様子を見ながら、客観的にここの住人の事を化け物扱いするのだった……。

「あれ？……家？」

「実はここ……私の家なんです」

「……………」

その事実を聞いた兼一は、完全に思考を停止させた……。

そして其処に金髪の敵つい老人が、この亮平達が居る居間へと入って来た……。

「そして祖父です」

「うそ……」

(さっき聞いたから今は平気だけど……俺も流石に驚いたな、主に遺伝子的な意味で)

実は亮平も、その事実を聞かされた時は、今の兼一のように「うそ」と言葉に出していたのだが。

今は、確かに髪にその面影があるなど……そんな風に亮平は納得する事にしたのだった……。

そして、一通りの紹介を経て。

この居間に先程、好き放題暴れまわっていた大人達が亮平達と再度、顔を会わせるだった。

そこで、各々の事を、この家の長老と呼ばれる美羽の祖父。

風林寺隼人が、亮平達に説明してくれた……。

その説明によると、どうやらさつきまで暴れていた大人達はそれぞれ異なった武術の達人である事が分かった……。

まず始めに、最初に亮平達と遭遇したタイ人は。

裏ムエタイ界の死神と、そんな物騒な異名を持つタイ人で。

名前はアパチャイ・ホパチャイと言うそうだ。

次に、先程亮平達の前で、その長刀を振り回していた美女は。

剣と兵器の申し子と呼ばれているらしく、本当ならこの平和な日本にはなるべく居て欲しくない異名の持ち主で……名前を香坂しぐれと言う。

で、その危険な匂いを漂わせる美女に先程、盗撮を働いていた勇者もとい変態は。

あらゆる中国拳法の達人の異名を持つ、小さなオッサン。名を、馬剣星と言うらしい。

そして、先程弟子はとらねえとか言っていたガチムチの兄貴。

喧嘩百段の異名を持つ空手家と呼ばれ、どこの世紀末の方ですかと問いたくなる兄貴の名前は。

逆鬼至緒、その名前を聞いた亮平の感想は。

(名前だけは可愛らしい)……だ。

最後に、先程亮平に力試しをさせ、果てはそのまま投げ捨てた。その整えられた髭がダンディな男。  
哲学する柔術家と呼ばれ、名を甲越寺こつえつじ秋雨あきさめ。

その説明もとい紹介を受けた亮平は、その一番厳ついはずの風林寺の祖父に。

あなたには異名とかつて無いのですか？的な事を聞いたところ、  
どうやら有るらしく。

その異名は無敵超人と言っらしい……。  
流石の亮平も、これにはノーコメントを貫く事にした。

決して、決してあの牛井が好きなマスクマンを想像した訳では無い……断じて無い。

そして、どうやらこの梁山泊には。

そのような浮世離れた武術家の達人達が集まっているそうだ。

その説明を受け、またもう一人所要で居ないと言われた亮平と兼一の二人は。

兼一は自身の中にあるサイレンを全快で鳴らし。

(やばい、やばいよここ……やばい匂いがプンプンするよ)……  
と、自身に警戒を促し。

亮平は、その説明を聞きながらも。

先程自身を投げ捨てた秋雨をずっと見ていた……が。

突然、その秋雨を見ていた亮平の目に、しぐれの着物を羽織っている胸の谷間から。

一匹の小さなねずみが出て来た事によって、そのねずみに意識を釘付けにされてしまっていた。

「さてと……私、お茶を入れてまいりますわ」

その説明を聞き終えた後、突然美羽がそう言いだし。  
この部屋からそくさと出て行ってしまった……。

(逃げたな……)

(美羽さんッ!!置いていかないで!!)

そして、この部屋に亮平と兼一の二人が取り残された……。

「美羽のやつ、押し付けるだけ押し付けて逃げたぞ!!」

「まるで蜘蛛の巣に掛かった蝶を助けようとしたら……。」

余計大変な事になってしまった時の、子供のような反応じゃな!  
「!!」

「クスクス、その例えナイスね」

「で?…このチョウチョをどうするかね、諸君?」

「いや、俺は関係無いですよ?」

「そんな事言わないでッ!!?亮平君!??」

取り残された二人を見ながら、それぞれの武術の達人達が好き勝手言い始めたので。

亮平は早々に、この状況を回避しようとしたのだが、両足を掴まれ、兼一に縋られてしまう。

「まあ、それは本人に聞こうではないか……覚悟があつて、来たのだからの……」

「はッ!??」

その言葉を聞いた瞬間、すかさず兼一は、それまで縋り付いていた亮平の足元から離れた……。

その顔は、すでに先程までの弱々しい顔ではなく。

何かしらの覚悟を決めた男の顔をしていた……。

「改めて聞こう、白浜兼一君……。  
入門するかね？…我等が梁山泊に！！」

その長老の言葉に、兼一の目がカツ！つと見開かれる……。

「強く……なれるのなら！！」

（兼一……）

兼一はハッキリと、その長老が言った言葉に答えて見せた……。そのハッキリと答えて見せた兼一の姿を見て、亮平は少し感慨深い物を感じていた……。

「ではここに、住所と名前書いてね」

「え…あ、はい」

その兼一に、剣星が何やら巻物の様なものに、筆で兼一に住所などの記入を指示してきた。

「月謝として二万円いただくね」

「ええッ！！高ッ！！」

「ポツタクリバーじゃ無いんだから……それは無いだろオッサン？」

突然、剣星が指定してきた額に、兼一と亮平の二人はそれぞれで抗議する。

「……一万円いただくね」

「……」

「いきなり半額？」

「……五千元でいいね」  
「……（いきなり四分の一……）」  
「……（奇跡の値引き……）」  
「こら剣星、はしたないぞ！！」  
「まあまあ秋雨君……」

その亮平達三人の会話の中に、突然秋雨が剣星に対して注意を促す。

しかし、その注意も長老の言葉によって止められた……。

「実はこの梁山泊は今、貧窮ひんきゅうを極めておっての……」  
「はい、五千元」  
「毎度ね」

兼一と剣星の二人は長老の言葉を聞きながらも、先程手打ちされた月謝を支払う。

そして長老は、気まずそうにながらも話を続ける……。

「まあ美羽がやりくり上手で、なんとかもっているのじゃが……」  
「！？」  
「へへ、風林寺さんは何でも出来るんですね」  
「そうじゃの、あの娘には助けられっぱなしじゃよ……」

そう言う長老の顔は本当に申し訳なさそうな顔をしていた……。また、兼一はその話を聞いて何やら決心？というか勘違い？のような表情をしていた。

そんな中、漸く兼一も梁山泊に入門したという事だなにを習いたいのか？その話になったのだが。

兼一が……。

「思い入れがあるから空手が良いんだけど……」

と、言ったところ、その空手の師匠である逆鬼が……。

「俺は弟子はとらねえ主義だ!」

と、凄んでしまったので、今まで隅っこで黙りながらしゃがんでいた、しぐれが……。

「ボク…秋雨が教えたほうが、いいと……思う」

と、言った為に、その後いろいろあつて。

結局兼一は、比較的常識的な人だという事で、秋雨が教える柔術を習う事となった……。

「あの〜……あれって、武道じゃ普通の事なんですか?」

「普通だよ〜、全然敵しくないしね」

「ぎゃあああああああ!……!」

現在、秋雨の柔術を習うと決めた兼一は。

亮平と先生である秋雨に見守られながら（秋雨は茶を啜っている……）。





そう言っつて、兼一とアパチャイは……。  
アパチャイを乗せたタイヤを引き摺りながら何処かへと消えてい  
った……。

「さて、鬼島君？……少し君に聞きたい事があるのだが良いかな？」  
「ん？……いや、別にいいですけど？」  
「そうかい、では少々待っていてくれたまえ……」

秋雨はそう言っつてから立ち上がり、どこかへと歩いて行っつてしま  
った……。

すると暫くしてから、秋雨が何かを両肩で担ぎながら亮平の前に  
姿を現した……。

「なんですか？……その大きな地蔵は？」  
「これかい？……まあ、その前に話をしようか」

そう言っつて、秋雨は両肩に抱えた二つの巨大な地蔵を地面に下ろ  
し。

先程まで、自身が座つていた場所へと落ち着いた……。

「で？話っつてなんですか？」  
「そうだね、単刀直入に聞こうか……。  
鬼島君、君は武術をやるきはないかね？」  
「無いですね、めんどくさいですし」  
「そうかい……なら、その無駄に着いている筋肉を引き絞りたいと  
は考えた事は無いかい？」

「それは……まあ、一応はありましたけど。  
それがどうかしたんですか？」  
「ふむ、まあ簡単な話なんだが。」

君の体を今よりもっと優れた物に変えたいって……そんな興味が沸いてしまったんだ」

「いや……ですけど俺の筋肉はなかなか……って言うかほぼ落ちた事は無いですよ？」

「何でか知らないですけど……」

「秋雨どん、それじゃあ思春期の子は聞いてくれないね」

「剣星……」

亮平と秋雨がそんな会話をしていた所に、突然小さなオッサンが割り込んできた。

「鬼島君、君はモテたいとは思った事無いかね？」

「まあ、少しはありますけど……」

「じゃあ少し耳を貸すね」

「……？」

剣星の言葉に、亮平は不振に思いながらも……。

モテたいと言う言葉に、少しの魅力を感じてしまい、その剣星の言葉に乗る事にした。

(今の君の携帯には、目当ての娘のアドレスは入ってるかね?)

(いや……残念ながら)

(じゃあ他の娘はどうかね?)

(まあ、それなりに……)

(その目当ての娘は、もしかしたら君の事が好みでないかもしれないね)

(?!?!?……いや、そんなの分からないですよ?)

第一、アドレスが入って無いのは……俺がまだ聞けてないだけっすから)

(本当にそうかね?……もしかしたら、その娘は君の様なマッチョ

じゃなくて。

その秋雨どんの様なスマートな男が好みかもしれないね……。それに、その娘のアドレスが聞けないのは……。

君が自分のルックスに自信を持ってないからじゃないかね？

(なッ!!?)

「秋雨どん、少し上着を脱いでくれね」

「ん?……なんでだ、剣星？」

「いいから早く脱ぐね!!」

そう言つて、小さなオツサンは秋雨の上着である胴着を脱がす……。

するとそこに、本当に洗練された、彫刻……いや、まさに超合金の様に圧縮され尽した筋肉の鎧が姿を現した……。

「どうね、これならスマートかつ筋肉質な男として、女子にはモテモテ。」

さらには目当てのその娘も、きっと振り向いてくれるね」

「おお……」

「剣星、よさないか」

その光景を目の当たりにした亮平は。

剣星が言った言葉を真剣に考え始めた……。

(あの秋雨つて人の体……あれがあれば、俺も漸く怖そうな男からスマートでダンディな男に成れる……のか?)

いや待て、別に今でもそこまで……いや、結構太いのか……学ランも最近きつくなつて来たし。

それに、もしかしたら鷹島先輩に……そうか、それは良い事だ」  
「どうね?決まったかね?」

すると、突然ちつさなオツサンが。

その、しょうも無い思考を巡らせ始めた亮平に、やるかやらないかの是非を問い始めた。

そのオツサンの言葉に、亮平の目がカツ！！と見開かれる……。

「やりますッ！！！やらせてください！！」

「だそうよ、秋雨どん？」

「う、うむ……なんだか動機が不純だが。

取り合えずはよろしくと言っておこうか……」

「うすッ！！！！！」

そして此処に、亮平の肉体改造計画が発足されたのだった……。

そして、外をアパチャイとタイヤを引き摺りながら戻ってきた兼一は。

もはや精魂尽き果てたように、真っ白に、そして干からびた若芽わかめのように。

その体を、梁山泊の庭に投げ捨てていた……。

心なしか、その口からは何やら小さな兼一が姿を現している様にも見える……。

「ま、今日は初日だし、かるく体をほぐす程度だったが……。

明日からは本格的に始めるので、今日はよく寝て疲れを残さぬよう、では」

そう言っつて、兼一の先生である秋雨は。

その兼一から離れ、今度は何やら大きな地蔵を二体……。

その二体の地蔵の頭を、両手でそれぞれ鷲掴みにしながら、ゆっくりと振り回している亮平へと近づいていった……。

「鬼島君も今日はこの辺で良いから……この続きは明日にするとしよう」

「うす、分かりました……うんッ!」

亮平はその秋雨の言葉を聞いた後、その両手に持っていた二体の地蔵を地面にドスンッ!と音を立てさせながら下ろした……。

「どうかね？筋力トレーニングをやったのは今日が始めてだと言っていたが？」

「そうっすね……なんて言うか、体の中心から外に向かって少し引き締まったような感じがします」

「うん、それなら成功だね。」

今、鬼島君にやらせていたのは、赤筋とも白筋とも違ったピンク色の筋肉だからね。

普通のトレーニングとは違った感覚が来るんだよ」

「そうなんすか……っつて言っても、俺はその普通の筋トレすらやった事無いんですけどもね？」

「ははは、そうだね、じゃあ分からないか。」

それじゃあ、鬼島君もそろそろ帰宅の準備をするといいよ」

「そうっすね、そうします」

そう言っつて、亮平は汗を掻いた服を脱ぎながら。

その辺の地面に、まるで打ち上げられたように倒れ付していた兼一を拾い。

そのまま、着替えて意識の戻らない兼一とは別々に、帰宅の徒へ着くのであった……。

第八話 いや、別にいやらしい事なんか考えて無かったし（後書き）

なのはで空手家の話を書き。  
ケンイチでド素人の話を書く。

この矛盾、如何ほどのものか？

まあ、それは置いておいて。

実際、リアルで格闘技をやっているゲレゲレにとっては。  
花〇さんの様な素人キャラは憧れでもありました。

さらにその話は置いておいて。

実際、筋トレをやってる人から言えば、マジでピンク色の筋肉ってなんぞ？って思ったのは当然の疑問だと思いますが、それは触れないのが……まあいいや。

では最後に、この場を借りて書かせていただきます。

この小説のタイトル『史上最強のド素人』の『ド』は。  
本当は普通に『ど』としたかったのですが。  
ええ、普通に変換ミスをしてしまいました。  
でも、カタカナも良い感じだよね？

第九話 キサラの苦悩（前書き）

学校が、月曜を登校日に使っていた事から。  
今日は四連休の二日目ッ！！

そして、暇だったので更新。



## 第九話 キサラの苦悩

梁山泊での一件で、亮平は肉体改造を、兼一は武術の修行を。

そんな感じで、これから二人は梁山泊に通うことになった（兼一・毎日……亮平・週三ぐらい）。

そして、そんな事があった次の日の昼休みの事……。

亮平は現在、珍しく食堂ではなく、自分で作ってきた弁当を食べながら。

同じクラスメイトである姫野真琴と駄弁っていた……。

「ねえ、鬼島？」

「ん？…なんだ？」

現在、亮平と姫野は、窓際の一番後ろの席。

つまりは亮平の席と、その隣りの席を使って、二人で昼食を取っている。

「そのお弁当って、あんたが作ったの？」

「おう、そうだぞ……俺一人暮らしだし、それに今日は何か早く起きちゃったしな」

「へ〜……あのさ、ちょっとそのお弁当もらっていい？」

「別にいいぞ、だけどあまり味には期待するなよ？」

「ありがと……じゃあ、この生姜焼きもらうわね？」

（こいつ……迷い無く、メインのおかず取って行きやがった……）

姫野はそう言って、亮平の弁当から生姜焼きを取っていき。

そして、そのまま自身の口へと、その生姜焼きを運んでいった……

…。

「!!!? ……何これッ!!味が濃すぎないッ!?!」

「俺、濃い味が好きだからね〜 ……やっぱ不味かったか?」

姫野はその生姜焼きを口に入れた瞬間、若干涙目になりながらその生姜焼きを作った亮平へと抗議の声を上げた……。

「好きだからって、これは流石に濃すぎるわよ…… (チュ〜) 」

姫野はそう言いながら、その舌に残った味を消し去るために、飲み物であるパック式のイチゴ・オレをストローで吸いながら飲み始めた……。

「そいつはすまんね……」

「うげ〜 ……まだ舌に残ってる」

姫野は未だ抜けぬ味に、舌をチョロつと出しながら亮平を睨みつけた……。

その仕草を見た亮平は、心の中で。

(あれ……なんだろう…これ、何かエロイぞ?) と思った亮平は変態と言つ名の紳士。

「まあ、料理は本当にたまにしかないしね〜」

「でもあんた、毎日こんな食べてたら何れは、何かしらの病気になるっちゃうわよ?」

「そうか? ……まだそんな事まで考えた事無かったしな〜 (ちゅ〜) 」

そう言いながら、亮平は自身が持っているパック式の牛乳を飲み

始める……。

すると、この教室に一人の男が入って来た……。

その突然入って来た男に、亮平と美羽意外の人間が視線を向ける。

「おい、お前ら……（ガンツ！）」

そう言っつて、そのクラス中の視線を集めた男は。

教室の扉前にあつた、掃除用具を入れたロッカーの扉を思いつきり殴りつけた。

その男の行動を見た亮平は、ゆっくりとその腰を椅子から上げた……。

「白浜兼一はどこ……」

「おいハゲ……てめえ人が昼飯食つてる最中になんの用だ？」

「てめえはツ！！？」

扉の前で、教室にいるクラスメイト達に凄み始めた男に。

亮平が紙パツクの牛乳をストローで啜りながら、男に対してゆっくりと歩きながら近づいてきた。

「てめえもクソもねえよ……大体、今あんたが言ったやつは俺のダチだ。」

で？……俺のダチに何の用があるのかな？」

「ちツ！……命拾いしたな、うちの隊長からお前には手を出すなつて言われてるんでな。」

今日の所はこれで引いてやる……」

「いいや、ちよつと待てよ……」

亮平はそう言っつて、この場から立ち去ろうとした男の肩に。

牛乳パツクを持ってしている手とは逆の、自身の左手を置いた……。

「なんだッ!？」

「命拾いしたって……今時そんな捨て台詞吐くのは止めた方がいいよ?……先輩」

メリッ!!

「あがうッ!!?!?!?」

亮平はそう言いながら男の肩に置いていた左手で、その男の肩を軽く力を込め、掴み始めた……。

その掴んだ手の五指が、その男の肩にめり込み始め、終いには鎖骨と肩甲骨付近から何やら骨の音がミシミシと聞こえて来た……。

「あと、うちのロッカーを後で直しておけ……分かったな?」

そう言っつて、亮平はその掴んでいる手を離す……。

「ガッ!!……ハア……ハア……」

「分かったらさっさと行けッ!!てめえのせいで教室の空気が台無しになっちまったじゃねえか……」

「ハア……クソッ!!」

男はその場から、齒噛みしながら立ち去って行った……。  
そして、亮平も元の席へと戻っていった。

「あゝめんどくせ」

「お疲れさん」

席に戻った亮平に、姫野がそう言っつて亮平の事を労った。

「大体何なんだよアイツ……」

「え〜っと確か、空手部の筑波先輩だったけ？あの人」

「筑波？……ああ、確かに居たなあの時」

亮平は紙パツクの牛乳を飲みながら。

前回の兼一の試合に、そういうばそんなのも居たな的な軽い口調で答えるのであった。

「でさ、話を戻すんだけど……あんたこのままじゃ将来大変な事になっちゃうわよ？」

「（立ち直り早いな、こいつ……）う〜ん、だけど薄味ってのをもう覚えてないしな」

「何よそれ……そうだツ！？じゃあ私が明日作ってきてあげようか？」

「いいのかツ！？」

姫野のその発言に、亮平が今までのダルそうな態度を一変し。

その姫野の発言に食いついた。

「え、まあ良いけど……どうしたの？」

「いや、人に料理作ってもらうのって久しぶりだからさ（イイよっしゃツ！！女子の手作りが……男の夢が遂に叶ったよツ！！）」

「そうなんだ……（あれ？もしかしたら、これってチャンスなんじゃない？）」

「じゃあ、明日作って来てあげるから、その時ね」

「ああ、楽しみにしてるわ……」

そう亮平と姫野は二人で約束して、明日の昼休みをそれぞれの思いを胸に待ち遠しく思うのだった。

そんな事があった、その日の放課後。

亮平の幼馴染であるキサラは、自身の学校での溜まり場である空き教室で。

自分の隊の人間達を集めながら、今回起こってしまった事を。

教室に何故か置いてある、一人座りのソファーに腰掛けながら、自身の隊の人間達に警告を促していた。

「筑波、お前どういいうつもりだ？私の忠告無視して、『鬼島』にちよっかい出したんだって？」

「違うッ！！俺はただ白浜兼一を探しに行っただけだッ！！」

第一、あの鬼島が教室で飯食ってたなんて、情報と違うじゃねえかッ！？」

「はあ……筑波、お前は馬鹿か？『鬼島』だって人間なんだ……」

そりゃ気分で食堂じゃない日だってあるだろうに」

「くそッ！！あんたが手を出さなって言うから、俺は手を出さなかつたんだッ！！」

手を出していいなら、あの程度の素人……ッ!？」

その瞬間、筑波の顔面に突然キサラの右足が飛んで来た……。

「勘違いするんじゃないよ？筑波……」

「なッ!？」

しかし、その蹴りは筑波の顔に当たる直前で止められる……。

「あんた程度の男が、あの第二拳豪を倒した『鬼島』に適う筈無いだろ？」

それに、アイツを倒したいのなら、うちのチーム全軍で掛かるぐらいの気合を見せなきゃ無理さ」

「……………」

そのキサラの言葉に、この教室に居る全員の空気が一気に冷えたのを。

この教室に居る人間達は感じていた……。

「分かったら、さっさと白浜とか言う坊やを探してきなッ!！」

お前のテストはそれからだッ!！」

「……ちッ!！」

キサラがそう言って、筑波をこの教室から出て行かせたのと同時に。

今までキサラの横に黙って立っていた、長い金髪の男がキサラに話しかけてきた……。

「キサラ様、あまりご自身の隊でそのような事を口にするのは……」

「じゃあ、お前達はあの『鬼島』に勝てるって言うのかい？」

「それは……」

「だったら口を挟むな、そして二度と『鬼島』には手を出すな。分かったな……分かったら返事をしろッ!!」

「ッッッッは、はいッ!!」「ッッッ」

(あゝ……また、亮平に謝らなきゃいけないのか……)

キサラは、その自身が所属するチームの人間達の血の気の多さに呆れつつも。

これから亮平にまた謝りにいかなきゃいけないのかと、そんな事を考えるのであった……。

そして、その次の日の放課後。

兼一は、自身を探し回っていた筑波と喧嘩をし……。

何も出来ずに、敗れてしまうのであった……。



## 第九話　キサラの苦悩（後書き）

はい、という事で少しハシヨリ始めたゲレゲレです。

だって、早くラグナレクと本格的な戦闘を書きたいんだもんツ！

また、先程気づいたのですが。

筋トレしちゃったら、ド素人じゃなくね？っと思っしまいました  
が。

まあいいや。

そして、今回あった姫野の弁当の話ですが。

皆様が許してくれるのでしたら、幕間なんかで書こうかなと……そ  
んな風に考えています。

追申……遂にこの二次小説が、本命とか言っていたのはを、総合  
ポイントで抜いてしまった……。

なんだか悲しい、今日この頃です。

## 第十話 亮平の苦悩（前書き）

今更ながら、亮平に筋トレさせた事に後悔を抱き出したゲレゲレです。

まあ、やっちゃった事は仕方が無いので、このままダラダラと続けたいと思います。

## 第十話 亮平の苦惱

「兼一ッ！！何で俺に言ってくれなかつたんだッ！！！」

兼一が筑波に喧嘩で敗れてしまった次の日……。

その事を知らなかつた亮平が、ここ梁山泊で兼一を問い詰めていた。

「それじゃあ、意味が無いんだよ亮平君……」

「意味つてなんだよッ！？ダチがここまでやられたつてのに……。それを黙っていられるダチが居ると思うのか！？」

亮平は、筑波にやられた傷がまだ生々しく残っている兼一に。

その兼一をやつた筑波に、自身が報復に行く事を先程本人に止められてしまったばかりであつた。

そして、その事で亮平は兼一と出会つてから初めての言い合いをしていた……。

「まあまあ、鬼島君も、その辺にしときなさい……」

「何ですかッ！！俺はただ、その兼一をやつた筑波つて野郎に。てめえがどれだけの事を仕出かしたのか、ただ落とし前を付けに行くだけつすよ！？」

「そんなヤクザみたいな事はしなくても、別に大丈夫だよ」

亮平の怒りは留まらず、そのまま話の仲裁に入つて来た秋雨へとその怒りの矛先を向けた。

「何が大丈夫なんすか！？現に、兼一はやられてるんですよ！？」

「兼一君、君は先に剣星の所に向かいたまえ……」

「はい…分かりました……」

「おい待てッ！！兼一ッ！！おいッ！！」

「まあまあ、鬼島君？……少し居間で話でもしながら落ち着こうかな？」

「ちょッ！！掴むなッ！！甲越寺さんッ！！」

兼一をこの場から離れさせた秋雨は。

そのまま、全く落ち着こうとしない亮平の襟首を持ち上げ、そのまま居間へと連れて行くのであった。

そして、居間へと連行された亮平は、若干不貞腐れながら小さな卓袱台を間に置いて。

目の前に座る、秋雨と胡坐を掻きながら向き合っていた……。

「少しは落ち着いたかね？」

「いいえ、今からでも筑波……いや、そいつが所属する空手部全員伸しに行きたい気分です」

「ははは、それはやっちゃだめだよ？」

そう言っつて、亮平の前に正座をしながら茶を啜る秋雨は、笑いながら亮平の事を見据える……。

「で？……何で兼一は、俺に事情を話さなかったんですか？」

「うん、そうだね……まず一つは、君が昨日、ここに来なかった事かな？」

「それは、まあこっちにも事情があつて……」

その秋雨の言葉に、亮平は少々気まずげに答えた……。

「そして、次は兼一君の目標のせいだね……。」

これは確か、もう既に兼一君が君に話したと言っていたが……覚えてるよね？」

「そりゃ、まあ……確か『誰もが見てみぬ振りをする悪人を、片っ端からやつつけられるヒーローになりたい』でしたっけ？……もちろん覚えてますよ」

亮平は前に兼一が自身に語った夢を、既に兼一から聞かされていた秋雨に改めて確認した。

「そして最後に、昨日ボロボロで帰ってきた兼一君が言っていた事なんだがね」

「昨日兼一が？」

「そう、昨日兼一君が言った言葉は……」

秋雨はそう言って、亮平の目を改めてジッと見据えた。

「間違っている事を、間違っていると言うには、ただ口に出しただけではいけない。」

その正しいと思った事をやろうとするには、どうしても力がある……。

そんな事を、兼一君は泣きながら言っていたよ……」

「そうですね……兼一が……まあ、アイツらしいって言えば、アイツらしいですけどね」

「どうだい？……少しは落ち着いたかい？」

「まあ……友人がそこまで強くなりたかって思ってるなら、それを応援してやるのが本当の友人ってもんですよ」

その秋雨の言葉に、亮平は何やら途端に毒気が抜かれたように、天を仰ぎながらそう言った。

そして今度は、その天を仰いだままの亮平が話を始めた……。

「甲越寺さん、実はですね……兼一は、俺にとって本当の意味で、最初に出来た男友達なんすよ」

「そうなのかい？」

「そうなんすよ……」。

高校に入るまで、俺に近づいてきた同級生の男達は皆。

喧嘩の時とかに、俺の名前を使いたいがために舎弟とか、口だけのダチとか……。

そんなんばつかだっただんですよ……」

「それは酷いね」

「それに、俺がそいつらと違う普通の男子グループに近づこうとする」と。

その男子グループが皆怯えちゃって……結局、小坊から中坊の終わりまで。

男友達つてのは、全く出来なかつたんですよ」

「ほう、では高校に入学するまで、友人と呼べる人間は居なかつたと?」

「いや、友人と云うか幼馴染なら居ましたね……うるさい一っ年上の女の子ですけど」

その秋雨の問いに、亮平は少々自傷気味な表情で答えた……。

「まあ、高校からは兼一と出会って。

そんでもって、俺もだいぶ友達って呼べる人間が出来たかな……って。

そう思ってるんすよ……相変わらず男は兼一一人ですけど」

「ほほ、友人がどんなに傷ついてても、それを友人の夢のために必死

に堪え、目を瞑る。

兼ちゃんはいいい友人を持つてるんじゃない？」

「長老、戻っていらしたのですか」

「ほほ、今しがたじゃよ……」

亮平が話しているこの居間に、突然長老がそう言いながら入って来た。

「ま、見かたによっては見捨てたようにも見えますがね」

「ホッホ、そうじゃの……だが、亮平君は違うであろう？」

「ふ……ま、兼一が自分で何とかするって言うなら。」

若干心配ですが、俺は目を瞑りましょう……心配ですけどね」

そう言って、漸く亮平は自身の心に落ち着きを取り戻したのだ  
た……。

そして現在、亮平は兼一がやっている柔術の練習を見学している

……。  
もちろん、地蔵を振り回しながらだ。

「じゃあ、まずは対空手用の技を教えよう！」

「え？でも僕は仕返しのために武術をわけじゃ……」

「兼一、あの筑波つて空手部のハゲが、もしかしたらまた来るかもしれないだろ？」

「それは…確かに」

「それに、お前が筑波にやられた事によって、また別の空手部の連中が来ないとも限らない。

そう言った場合、一応は相手のやり方を知っておいた方がいいだろ？」

「鬼島君の言う通りだね……そこで、だが」

兼一と秋雨、そして地蔵を振り回している亮平の三人はそんな会話をしながら。

畳が敷き詰められた道場で練習をしていた（亮平は筋トレ）。

「逆鬼君、君も空手家として何かアドバイスを……」

「俺は弟子はとらねえ主義だッ！！」

（）（なら何故、ずっとそこに居るのだろうか？）（）（）

そして更にもう一人、世紀末のガチムチ兄貴こと逆鬼至緒の姿があった……。

「まあ、それはいいとして……なんすか、これは？」

僕に亮平君みたいに振り回せと……そんな事を言うんじゃないでしょうね？」

「はっはっは……まさか、そこまでまだ私も、君に求めてないよ？」

兼一は、今自身の目の前に悠然と佇む、自身の身長と同じくらいの地蔵を見て、そう秋雨に尋ねたのだが。

どうやら、兼一がやる事は違う事の様だ……。



「それは私が独自に開発した『投げられ地蔵君・グレート』！！  
使い方は、その地蔵に着せてある胴着を掴んで投げたり、重心を  
確かめたりと。」

武術家にとつて、まさに多種多様な練習が出来る頼れる相棒さ！

「！」

「うわ、重ッ！！？」

「石だからね」

兼一は早速その投げられ地蔵君の胴着を掴んで投げようとするが、  
全くと言っていいほどビクともしなかった……。

「小手返しなど精密な技は後回しにして、今は投げ技で行く！！  
実戦での投げ技は、地面が柔らかくは無いからね、注意が必要だ  
！」

その秋雨の言葉と共に、兼一の投げ技稽古が始まった……。

「ぐぬぬぬッ！！……だめだ、重くて投げられません」

「ハハ、重心を考えなきゃ」

「重心？」

秋雨は、その『投げられ地蔵君・グレート』に苦戦している兼一  
にそうアドバイスをした。

「重心とは質量の中心の事、人間で言えばへその下あたり。  
大ざっぱに言えば、重心を中心に、その両端を押さえて……」

秋雨はそう言いながら、『投げられじぞ……もとい地蔵の足と頭  
部に、自身の足と手を対角線上にして添えた。

そして、秋雨はその地蔵を手と足で挟む様にして、地蔵の足を刈り、頭も手で払った。

「崩してやれば人は簡単に倒れるわけだ!!」

「!!!!!!?」

その地蔵が投げられた光景は、まるで地蔵が風車の如く空中で回転し続けるといった光景で。

その光景を目の当たりにした亮平と兼一は、何も声を出せないまま、ただ驚愕の表情をその顔に浮かべるしか出来なかった……。

「す、すごいッ!!」

「すごいよお」

(でた、この人的常識……)

(俺もあんな風に投げられたのかな?)

秋雨の常識はともかく、そんな感じで兼一の投げ技稽古が進んで行き。

次に兼一は中国拳法の練習をするだとかで、亮平が今いる道場から、練習場所を庭へと移すのだった。

そして、その事によって道場に一人、亮平は取り残されてしまった……。

「あゝつまんねえ……」

そう言いつつ、亮平は地蔵をひたすらゆっくりと振り回し続けていた……。

「おまえは着いて行かない……のか?」

「ん？……あ、香坂さんすか。」

「いつも思っんですけど、流石に天井にぶら下るのはどうかと思えますよ？」

「なぜ…だ？」

「いや、分からないなら良いんですけどね？（流石の俺でも、面と向かってフンドシ丸見えとか言えないしな…）」

そこに現れたのは、『剣と兵器の申し子』香坂しぐれ、その人であつた。

「まあ、俺の筋トレはすぐに終わりますからね。」

「これが終わったら見に行きますって」

「ふ…ん」

「香坂さんは見に行かないんですか？」

「別に…後でアパチャイと一緒に稽古付けに行く…から」

「そっすか、なら兼一をお願いしますね（うん！俺、この人わかんない）」

「任せ…る」

そう言つて、しぐれは天井にぶら下つたまま何処かへと消えていった…。

そして、その筋トレを終えた亮平は。

筋トレで汗を掻いてしまった服を着替えてから、兼一が現在稽古をしている庭へと向かつていった。

そこで、兼一のミット打ちが見られたのだが…。

そのミットを持っているアパチャイが、何故か兼一を蹴り飛ばすという奇妙な光景が見られたのだが。

ここは閑話休題という事にする。

それから、何日か経ったある日。

亮平が普段のように、学校の食堂でカルビ丼を食っていた時。それは突然訪れた……。

「やあ、君は確かE組みの鬼島君だよな？」

「ん？……誰だ、お前？」

カルビ丼を食っていた亮平の前に現れたのは、何やらジャーニーズ系みたいな顔立ちのイケメンで。

何やら爽やかなオーラを、そこら辺に噴出しまくっている金髪の美男子であった。

「ああ、これは失礼だったね。

僕の名前は谷本夏<sup>たにもとなつ</sup>。

初めまして、鬼島亮平君……噂で聞いてたよりも話しかけやすい

人で良かったよ」

「どんな噂だ、どんな……」

「キヤーツ!!谷本王子がいるわよー!!」

「うそッ!うわ、本当だわ!」

「ははは」

(うぜ〜……うぜ〜よ、父さ〜ん……)

その時、亮平の頭の中に「怒れ!!怒るんだ亮平!!そうすればお前はスーパー……」などと言う幻聴が聞こえて来たのは紛れもない事実であった……。

「はは、おつとすまないね亮平君?」

「ああ別にかまわんよ……人気があるんだなお前?」

「そんな事無いよ、まあでも良くはしてもらってるかな」

「ふ〜ん……(死ね!!死んでしまえ!!もしくは俺が直々に、世のブサメン達のために……)」

亮平は若干苛付きながらも、そろそろ限界?が近かったために、早々に用件だけを聞くことにしたのだった……。

「で、なんの用だ?……俺は見ての通り、このカルビ丼にご執心中なんだが?」

「うん、特に用件とかは無いんだけどね……ただ話しをして見たかった、それだけかな、亮平君?」

「お前……まあいつか。取り合えず用件が無いのなら、飯を食うかここから立ち去るかにしてくれ……」。

「ここは食堂だ、席が空くのを待ってる人もいるんだ……それにさつきから視線が痛いんでな」

そう言って、亮平は周りを見渡す……。  
すると、この食堂にいる女子達が亮平の前に座っている谷本を見ながら、その近くににいる亮平を睨むをいう離れ業をやっている姿が見える事が出来た。

「ああ、これはすまなかつたね。

それじゃ、僕はこれで……」

「ああ、じゃあな（こいつ若干うざいな……）」

谷本はそう言って、この食堂からそそくさと立ち去っていった……。

すると其処に、新たな人影が、その不機嫌な亮平へと近づいて来るのが見えた。

「久しぶりね、鬼島君」

「ん？た……鷹島先輩ッ！！お久しぶりっす！！（落ち着け、落ち着け俺ッ！！）」

その鷹島千尋の登場によって、先程までささくれ立っていた亮平の機嫌も一発で何処かへと消えていってしまった。

「鬼島君、少し痩せたの？」

「い、いえ……これは別に痩せた訳じゃなくてですね」

「ふん、あッ！確かに前よりも筋肉の線維が浮き出てるわね……。  
亮平君、どこか部活とかに入ったの？そんな話は聞かなかったけど」

「いえ、ただちよつと暇だったから、筋トレでもしてみようかなって。

そう思っただけっすよ（イイエスッ！！！！ありがとうッ！！甲越寺さんッ！！YES！！！！）」

「へ〜偉いじゃない……………あ、ご飯粒付いてるわよ？」  
「え？……………ヴおッ！！？」

鷹島はそう言いながら、亮平の頬に着いていた一粒のご飯粒を掴み取り。

そのまま自身の口へと運んでいった……………。

その現象に、流石の『掌鬼』と恐れられている男も、その体を硬直させるほか無かったのだった。

「意外と抜けてるのね、それじゃ、私はこれで」  
「……………」

鷹島はそう言って、無言で手を振る亮平に別れを告げた……………。

そして、亮平は徐にその箸を置き、既に空となった井へと顔を近づけて行き。

隙間が空かないように、確りと顔にくっ付けてから、あの言葉を叫ぶのであった……………。

『忘れて来りませぬおのおのおのおのおのおおウシ……!』



## 第十話 亮平の苦悩（後書き）

どうしよう……筋トレ、修正しちゃおっかな

本気でどうしようか……。

まあいいや。

とりあえず、進行が遅すぎる事に悩みを感じる今日この頃です。

ところで、皆さんが好きな『刃〇』のキャラクターってなんですか？

ゲレゲレは。

一位 愚地 独歩 一応、ゲレゲレも空手家なので

二位 渋川 剛気

三位 花山 薫

四位 烈 海王、範馬 勇次郎

五位 範馬 刃牙、ジャック・ハンマー、アレクサンダー・ガーレン

ガーレンは、実在の人が好きだったからです。

ではノシ

第十一話 二れからの戦い（前書き）

今回、短いです。

そして、これからなるべく時間を飛ばせるようになった……かもし  
れない。

## 第十一話　これからの戦い

【side 亮平】

結論から言うと、兼一は筑波に圧勝という形でリベンジを飾った。

「しかし、アイツも中々（なかなか）強くなったよな」

そして俺は、その結果を新島……いや、宇宙人印の校内新聞で知ったという形だ……。

なぜ、俺がこんな形でしか知りえなかったのか？

それはただ単に、兼一と筑波が喧嘩をした時間帯が、一般生徒にとっては下校時間である部活動の時間帯であり……。

俺はその時、普通に家に帰って何にもせずならだらと、一日の終わりを迎えていたからだ。

何をやってるんだ、だって？……普通に生活してるんだ。

そして、そんなこんなで俺は。

今からその事に付いて兼一に、朝一番の教室で尋ねる事にするの  
であった……。

【side out】

「兼一、お前遂に筑波を倒したんだって？凄いやねえか」

「あゝ……やっぱりその新聞、まだ出回ってたんだね」

現在、亮平は机の上に突っ伏している兼一に、昨日の出来事について尋ねている。

「はは、別にお前が凶悪な人間だとは思ってないよ。

取り合えず良かったな、これで武術を習った甲斐があったってものだしな」

「いや……でもね、何だかまた新しい人達が、僕のこと狙ってるみたいなんだ」

「新しい？……今度は誰なんだ？」

亮平は、その兼一の言葉に疑問を投げかける。

「あの宇宙人が言うには、『ラグナレク』って言うチームの人達が僕に目を付けたって……」

「あゝあゝ、『ラグナレク』ね……俺も、それに目を付けられてる

ぞ？」

「えッ！！？本当なの！！？」

兼一は、その亮平の軽く言った言葉に、今までやる気なさげに突っ伏していた姿勢から。

突然跳ね起き、自身のその顔を驚愕の表情に染めていた。

「ああ、本当だとも……そうだな、この学校に入学したその時からかな？」

確かあの時はチームに入らないか？っていう勧誘で。

その次が、入らないんなら“しめる”とか言っつて、集団で来てたな。

で、その後何だかナンバー2の幹部が来たけど、こいつはタイマンでやったな。

まあ、それからは本当に血の気が多い奴等が、たまに仕掛けてくるって感じになったけどな？」

「はは……僕が知らないうちに、そんな事になってたんだ……」

兼一は、その今まで知る由も無かった友人の生活に、ただただ驚くのであった……。

「で？……お前は、今度はどんな奴と喧嘩するんだ？」

「いや、なるべく喧嘩はしたくないんだけどね？」

そして兼一は、自身が今置かれている状況を、友人である亮平に話す事にした。

「なんだか上級生の三人組で、一人は肌が黒くて、長い白髪を後ろで縛ってて……。」

で、次は短髪の高金髪と、黒いサングラスが特徴的な大男。それで最後に、子供っぽい顔立ちをした、耳にピアスを着けて頭にバンダナを巻いた。

半ズボンが特徴的な、僕と同じくらいの身長の人だよ」

「半ズボン？……ああ、そいつなら楽勝だな。

俺もう、そいつとこの前やったし」

「えッ!？」

その時、亮平は前回、教室前で亮平に喧嘩を売って来た。

一人の小柄な人間を思い出していた……。

「確か、蹴りの……ケリの、何だっけ？忘れちゃったわ。

ごめんな、兼一？……だけど安心しろ、確かそいつは其処まで強くは無かったぞ？」

「どうして、疑問系なの？」

「……………（それは、お前の実力が俺には分からんからさ）」

亮平は、そのジト目で見てくる友人に対し、無言のまま心の中でその問いに答えるのであった。

そして、その日の学校の時間も終わり。

皆が帰宅の徒に付き、その時間も社会人の方々が帰宅をし始める頃になった時。

亮平の幼馴染である南条キサラが、その自身の部隊のアジトとして使っている廃ビルで。

自身の隊のメンバーのは外に待機させながら、ある二人の人間と顔を交えていた……。

「で、うちの隊に、わざわざ何の用だい？……第四拳豪、ロキ？」

「おい！ヴァルキリー！！拳豪であるロキ様に向かって、その口の聞き方は何だ！！」

「別にかまわねえよ、20号……それよりも、ヴァルキリー。」

お前に第一拳豪オーティンから、言伝を与って来たんだ」

ソファアの肩肘を付きながら寝そべっているキサラが今、ロキと呼んだ男は。

長いコートに頭にバンダナ、そしてその白い髪に網目状のゴーグルといった。

そんな訳の分からない格好をした、そんな男で……。

その男に20号と呼ばれたのは。

迷彩柄の短パンを履き、薄いランニングシャツを腹の辺りで結び。頭にはニット帽と、何やら暗視ゴーグルの様な物を着け。

その背中に大きなリュックサックを背負った、中々（なかなか）

スタイルの良い女性。

「第一拳豪が？……なんだい、言伝つてのは？」

そして、その訳の分からない怪しい格好をした男が先程口にした言葉に。

キサラは、いかにも訝しげな表情で聞き返した……。

「お前、あの“鬼島亮平”と昔からの馴染みつて言っじゃねえか？」

「それが、どうかしたのかい？（こいつ……さぐりを入れて来やがったな）」

ロキと呼ばれた怪しい男は、その隠れている顔から唯一見て取れる、その口を不気味に吊り上げた。

「その馴染みに関して、<sup>オーディン</sup>第一拳豪からある事をお前に伝えるように言われてな。

その内容は、お前が八拳豪入りした暁には、その“鬼島亮平”の首をお前が取って来い。

だそうだ……まあ、流石の鬼島も、幼馴染の女には手を出せないだろうよ」

「……そうか、分かった……」

「じゃあ、伝えたからな？……おい20号！行くぞ！……」

「はいロキさまーッ！……」

そう言っつて、ロキと呼ばれた男は。



その取り巻きである20号と呼ばれた女性と共に、この廃ビルから姿を消した……。

そして、部屋にはキサラだけが取り残されていった……。

「亮平……私、アンタとやり合う事になっちゃったよ……どうしよっかね？」

そのキサラの声は、誰にも届かなかった……。

そして、キサラのアジトである廃ビルから出て行った二人の男女は。

「あはははー！ロキさまー、作戦の種蒔きは順調ですなーッ！」

「ははは、そうだな20号……」。

これでヴァルキリーの奴には、自分の馴染みとやり合う切っ掛けが出来た」

そう言って、ロキはその口端を、本当に楽しそうに吊り上げた……

…。

「後は、バーサーカーの奴が戻って来れば……俺の野望も叶うって  
もんだ」

「きゃはははッ！…ロキさま、やるー！…」

ロキと20号は、そう騒ぎながら、夜の町並みに消えていった…  
…。

第十一話 これからの戦い（後書き）

フラグです。

まあ、基本的には原作沿いをするのであしからず。

そろそろ戦闘を書きたいな〜……ではノシ

第十二話

PV10万、ユニーク1万1000突破。

だけど普通に進めるよー

サブタイ通り、普通に話し進めます。  
特にやること無いしね。

そんでもって、四連休最終日一番で更新。

第十二話

PV10万、ユニーク1万1000突破。だけど普通に進めるよー

「ド〇えもん!!」

「兼一、それは流石に失礼だそ（不〇子さんに）？」

ここは梁山泊、そして其処に今、亮平の友人である白浜兼一の声が轟いた……。

「ド……〇ラえもん？」

「ま、髭もあるしな……（By・逆鬼）」

「た、大変な事になってしまいました!!何とかがしてください!!何とかー!!」

「御邪魔しまゝす（時間が経って、漸く事の重大さに気づいた……のか？）」

兼一は、未来から来た耳の無い猫型？ロボットの名前を叫んだのだが、残念ながら其処に居たのは。

亮平の常識すら凌駕した人間達よつかいたちだけであった……。

そして兼一は、学校で過ごしていた時は、まあ有る程度は許容出来ていたのだが。

時という点火剤によって、今自身が置かれている状況に遂に耐えられなくなったのだ……。

そのせいで、現在の様な、秋雨に縋り付く兼一という構図が出来上がっていたのだ。

「何を取り乱してある？」

「あ、長老……」

「!?!」

「お邪魔してます」

すると其処に、この梁山泊の長老が美羽と共に、この現在亮平と兼一が居る居間へと入って来た。

「どれ、わしが相談に乗ってやろう」

「兼一さん、おじい様は人生経験の塊ですから、対策を授かりましよう」

「だってよ、兼一……良かったな？」

「なんで疑問形なの？」

「……（明後日の方向を向く）」

そして、そんなこんなで兼一は長老に自身が置かれている状況を相談する事にしたのだった……。

相談中………

「ZZZZZZ……ハッ！！！？」

「という訳なんです……亮平君、寝ないでよ……」

「そうか、それは大変な事になったのう……では一つ、わしが良い作戦を教えよう！！」

「作戦……ですか？」

「（はは……嫌な予感しかしないね）」

「うむ、名づけて……」

話を聞き終えた長老は、兼一に対して作戦を与えてくれると言ったのだが……。

「闘って闘って……闘い抜いたら最後に立っていたのは僕だった作戦!……!」

「ブツ!……!」

「きゃつかーッ!……!」

その長老が立ててくれた作戦は、およそ作戦と呼べるものではなく。

その作戦を聞いた兼一は、当然の如く、その作戦を拒否するのであった……。

亮平はその作戦を聞いた瞬間に吹き出した……。

「亮平く〜ん、人事だと思ってーッ!……!」

「悪い、悪かったって!!取り合えず抱きつくくなッ!……!なッ!……!」

「ほっほっほ、仲が良いのじゃの〜兼ちゃんと亮ちゃんは」

兼一は、その吹き出した友人に掴みかかると言うより縋り付いていた……。

そして、徐に長老が再度口を開いた。

「類似品に、『逃げて逃げて、逃げ抜いたのに最後は結局捕まった作戦』っていうのもあるがの」

「帰らせて頂きますッ!……!」

「まーまー!……!」

「ぎゃはははははッ!……!」

しかし、その長老から発せられた言葉に、流石の兼一も怒り始め、ここから帰ろうとする。

だが、それは美羽が抱き付きながら宥めた事で、解決を見たのだが。

亮平は、どうやら笑いのツボに入ってしまったらしく、その辺でのたうち回っていた……。

「へへへ……戦いつてのは、始めちまったら途中じゃやめらんねーつて事よー!!」

「そゆことね!」

すると其処に何時の間にか？兼一の先生達全員が集まり出していた……。

「しかし、敵が組織だつてきた以上、大急ぎで多対一の戦法を教えねばなるまいな」

「敵は武器も……使ってくる……」

「思い出すぜ、初めて多対一をやった時の事!!敵50人に小屋を囲まれてな……」

「あ!俺は60人だったすよ!？」

「おいちゃん80人」

「ほらチャバシラよ、チャバシラ!ねえ」

「……………」

その先生達は、思い思いの事を各々勝手に喋り出した……。

秋雨は今後の稽古について、しぐれは兼一に対しての注意。

逆鬼は過去の事を思い出し、亮平と剣星もその話に参加。

アパチャイは茶柱が立った事を、しぐれに嬉しそうに報告していた。

「ばッ!ばーろーッ!!次の時はその倍いたんだよ!!」

「おいちゃん、二度目は銃を持ってたね」



「俺、次は中学の時でしたね……」

「楽しそーっすねー……（ああ、亮平君もあっち側に……）」

兼一は、その自身の友人も入ってしまった会話を、ただただ無心になって聞き流すのであった……。

「兼ちゃんや、おぬしは闘う道を選んだ者じゃろ？」

「……………」

すると突然、長老が口を開いた……。

その長老の言葉に、兼一は何やらこれから話してくれるのかと、聞く姿勢に入った。

「だったら……覚悟決めちまえよ……！」

「……！」

長老はそう言って、爽やかな笑顔を向けながら、兼一にサムズアップを決めた。

その長老の言葉に、兼一は覚悟が決まったのか、黙って頷くのであった……。

「一つ良い話を聞かせてやるぞ。」

“ある” 武術家の話じゃ……………」

長老はそう言って、昔話をする態勢に入った。

「その者は若気の至りから、ついっつかりと……500人の達人を半殺しにってしまったの……！」

長老の話し方に臨場感に躍動感……そして危機感が籠る……！！

「そう一度闘つちまうと、やりたくなくても……。  
次々と喧嘩を売られちまうもんじゃよ……。」

だがしかし、その背景に見えたのは明らかに若き日の長老が……。居酒屋で、別の男に頭から酒をかけている風景であった……。

「来る日も来る日も、道場破りに明け暮れておった……。  
だがある日、気が付くとその者は……。」

そう言って、長老は懐かしむような顔から、深刻そうな顔へと変わった……。

その長老の表情の変化に、この部屋にいた誰もが息を呑む……。

そして、長老がその重い口を開いた……。

「その者はの……じじいになつとつたんじゃよ」

「あつ」

「兼一さん!!?」

先程の雰囲気嘘のように、長老がケロつとした表情でそう言った……。

その言葉を受け、兼一の口から何やら白い何かが一ヨロつと飛び出てきて。

その白い何かを、まるで迎えに来たかのように後光が差した天使が舞い降りた……。

しかし、それは美羽によって難無く終えた……が。

そんな状態の二人を他所に、亮平を含めた他の者達は各々の反応を示す。

「グツハツハツは！！（普通に爆笑）」

「はははは！！（両足をパンパンと叩いている）」

「ぐふふふふふ……（地面に突っ伏しながら、友人のために笑いを堪えている）」

「何時もながら奥が深い……（目を瞑りながら、うんうんと頷いている）」

「アパパパ？（何も分かっていない）」

「……………（我関せず）」

「よし、もう一話いくかね？」

そして、その各々の反応を示す者達に、長老が軽いので答える。

「キーツ！！何の救いも無いじゃないですか！！？その話！！

一生闘えつてののかーツ！！！！って言うか亮平君も何でそっち側にーツ！！！！？」

「まあ、これはお話しじゃからの、実際には殆どの者が途中で死ぬ……

……

「おじい様！！もう向こうに行つてーツ！！！！」

「ぶふツ！！……………いや……笑つて無いぞ？……ぶツ！！……………ふふ、兼一？

……………断じてわねって……」

「舌が回つてないよツ！！？」

そんな風にしながら、今日も梁山泊の日々は過ぎていくのであった……………。

そして、その週の日曜日。

亮平は珍しく、そろそろ夏物の服が欲しかったので、自身のお気に入りの服が売っている。

シヨッピングモール『ラオーナ』に買い物に来ていた……。

「しかし……俺も少し細くなったのか？」

そう言っつて、亮平は試着室の鏡の前で英語文字入りのポロシャツを着ながら呟いた……。

「うーん……これのワンサイズ下を買うか」

亮平はそのまま、試着しているポロシャツを脱ぎ。

試着室から出て行き、その目当てのポロシャツを会計まで持って行った。

「ありがとうございました」

会計を済ませた亮平は、購入した服が入った袋を持ちながら、そのままこの店を後にした……。

「あ、お〜い！鬼島〜！！」  
「ん？」

すると暫くしてから、このショッピングモールをダラダラと行く  
当てなく彷徨っていた亮平を。

突然、一人の女性の声が引き止めた……。

「お〜姫野か、こんな所で会うなんて、偶然って有るもんなんだな」  
「そうね、ん？その袋って何？」

「夏服だ、そろそろサイズも変わっちゃったしな……新しいの買っ  
たんだ」

「へ〜、確かにアンタ痩せた……じゃないわね、締まったのか」  
「そんな所だな……」

その亮平に声を掛けてきたのは、同じクラスメイトの姫野真琴。  
現在のそのクラスメイトの格好は、どうやら学校の部活終わりか  
ら直接こちらに来たようで。

学校指定の夏服姿で、薙刀部の薙刀を抱えていた……。

「お前は、ここに何の用で来たんだ？」

「う〜ん、私は今日帰ってもする事が無かったから、園芸部の友達  
と服を見に来たって所かな？」

「ふ〜ん、で……その園芸部の友達ってまさか…三つ編みに眼鏡を  
掛けた娘じゃないのか？」

「え、なんでアンタが知ってるのよ？」

「いや……そりゃあ……」

そう言って、亮平はある方向へと、その視線を向けた……。

「だって、あそこで絡まれてるし……その眼鏡の娘」

「えッ！！？ちよつと！！だつたら早くそれを言えッ！！」

その方向には、一人の地味な女子生徒を囲む、亮平達とは違う学校の制服を来た男達の集団があつた。

どうやら人数は五人と、亮平にとつては大して騒ぐほどでも無い人数だつたのだが……。

それを見た姫野は、その普段亮平に対して見せる態度を一変させ、その口調を男勝りなものへと変えて、現在進行形でピンチの友人の下へと駆け寄ろうとした。

「ちよつと待てつて」

「ちよつと！！離せよ！！」

しかし、それは亮平が姫野の腕を掴む事によって止められてしまふ……。

「俺が行くから、お前はすぐに逃げれるように準備してをけ」

「何でだよ！お前が行くんなら大丈夫だろ！？」

「多分、俺が騒ぎ起こしたら警備員が来るから……」

それに気づかれないように、あの友達連れて逃げるんだ」

「ちよ、それじゃあアンタはどうするんだ？」

「大丈夫、俺はこういふのには慣れてるからな！！警察が来た時は、監視カメラ見てもらつて。」

俺があたかも止めに行つたら、そのまま喧嘩に巻き込まれたみたいな演技をするから」

亮平はそう言つて、そのまま姫野の腕を放し。

自身が今まで持っていた袋を姫野に渡し。

向こう側であたふたし始めた姫野の友人の下へと向かつた……。

「この借りはちゃんと返すからな!」

「おう、楽しみにしてるぞ?それと、その服は明日学校で返せよ?」

そして亮平はそのまま、その歩を進めていった……。

「おい!!お前これどうしてくれんだよ!??」

「わ、私は何もやってないですッ!」

現在、園芸部所属の冴えない女子事、泉優香<sup>いずみ</sup>はピンチに陥っていた……。

「うるせえな……てめえがこつちジロジロ見てたせいで、それ見て余所見してた吉っちゃんが。」

俺の、この新しく買った服に飲み物、零しちまったじゃねえかよ  
)!!!!」

「それ私悪くないじゃないですかッ!??」

その泉の前には、なにやら男の癖に甲高い声を発するスキンヘッドの男と。

こちらを見て、そのプツクリと膨らんだ頬を赤く染めた、巨漢の男がいた。

また、その他にも泉の後ろには、明らかにチンピラといった風貌の男達が待機している。

「ああん!??てめえはだまって(ガシッ!!)……あれ、首がうごかねえッ!?!?」

「しかし見事なスキンだな……やっさん(安田先生)並だ……」

「だれだてめえは!!!?」

その時、突然いままでその甲高い声を鳴り響かせていたスキンヘッドの男の頭が。

後ろから何者かに鷲掴みにされた……。

「な、なんなんだなツ!!!?」

「俺か?……俺は」

そう言つて、そのスキンヘッドの隣りに立っていた巨漢の男が、そのふくよかな頬を揺らしながら。

今、自身の友人であるスキンの頭を鷲掴みにしている、謎の男に凄み始めた……。

すると、その謎の男は、そのスキンを左手一本で持ち上げながら、その口を吊り上げて、笑いながら答えた……。

「そのこの女子の、知人の友人Aだツ!!」

「あがががあががggggあばばあツ!!!!!!?!?!?」

知人の友人Aは、その鷲掴みにした男の頭を、握り潰さんばかりにその五指に力を込めた。

「ああツ!!みつちゃんの頭から血が出てるんだなツ!!!?」

（あれ……この人確か、白浜君の……）

「てめえツ!!なめちえんのか!!!?」

（あ、噛んだ……）

その知人の友人Aが巻き起こした光景によつて、その他にいた男達も。

自身の仲間であるスキンを助け出すために動き出した……。



「泉!!!こつちだ!!!」

「え!!!?何!?!」

そして、その絡まれていた女子生徒を、その友人である姫野真琴がドサクサに紛れて助け出した。

(よし、じゃあ俺もすぐに終わらせますか……)

「らあぁッ!!!」

「ふぐッ!?!」

「なッ!?!こいつ、みっちゃんを盾にしやがった!!!」

知人の友人Aは、その鷲掴みにしていたスキンで相手のパンチを防いだ。

「ちょっと飛ぶからな、気を付けろよ?」

「『は(なんだな)?』」

そう言っつて、知人の友人Aは、自身の体を後ろに思いっきり捻り、その鷲掴みにしているスキンを、そのまま円盤投げの様に後ろに構えた……。

そして、その最大限に溜まった体の捻りを一気に開放するかの如く捻りを戻し……。

鷲掴みにしているスキンを思いっきり投げる様にして、鷲掴みのまま、前に振り抜いた。

「うううづるらあああああッ!!!!!!」

「なッ!!!?あああああッ!!!」

知人の友人Aは、その鷲掴みにしたスキンを団扇の様に使って、

まるで突然そこに竜巻でも出来たかの様な突風を起こさせ、その目の前に迫って来た男達を遙か後方へと吹き飛ばして行った…。

「うあッ!? 思った以上に力が上がったな……だけど」

「な、なんなんだなッ!?!? みんな吹き飛ばんじやっただなッ!?!」

「流石に、そのデブは飛ばせなかったか……」

そう言つて、知人の……もういいや、亮平は目の前に未だ残つて  
いる巨漢の男を見据える……。

ちなみに、亮平が驚掴みにしているスキンは、完全にその存在が  
真っ白に燃え尽きていた。

「デ、デブって言つただなッ!?!? もうゆるせないんだなッ!?!」

巨漢の男はそのまま、その制服の上からでも分かる腹の肉を揺ら  
しながら。

自身の友人である、スキンことみつちゃんを助けるために亮平へ  
と突っ込んでいった……。

そして、その巨漢の男が亮平へとその拳を叩き込もうと振り上げ  
た瞬間。

「この肉はなぐんだ」

「はッッ!?!」

巨漢の男は、その振り上げた拳を前に出す前に、突然自身の目の  
前に肉薄してきた。

その素敵な笑顔を顔に貼り付けている亮平に、自身の腹の肉を摘  
まれてしまった……。

「おいおい、ちょっと軽く摘んだぐらいで……変な声出すなッ!?!」

気持ち悪い……!!」

「あぎゃぎゃぎゃッ!!アッ……!!!!」

そして、亮平はその摘んだ腹の肉を、少し力を入れて捻るようにして摘み上げた。

すると、巨漢の男こと吉っちゃんは、その亮平い摘まれた事によって、最後になにやら痛みの声とは違う叫びを発しながら倒れていた(昇天していった)……。

「……何だか、大変不味い事やってしまった様な気がする」

「ちよつと君!!……少し、事務所まで来てもらうよ?」

「(ようやく来たよ……さては監視カメラで終わるのを待ってたな?)……はい、分かりました」

その漸く来た警備員の言葉に、亮平は素直に従いながら。

この惨状を、どのようにして誤魔化すかを考えていた……。

そして、その日の夜……。

(やるねえ…あの三人！)

ここは、とある場所の駐車場……。

そこで現在、若者同士の集団での喧嘩が展開されていた……。それを影でみている宇宙人こと、新島春男。

「はは！」

「あがッ！」

「あぐッ!?!」

そして今、その集団での喧嘩で複数の男達が、一人の男に蹴り飛ばされた。

(あいつは蹴りの古賀!!)

「おおおおおッ!!」

次に、別のところで一人の大男が、相手方の男を柔道技の肩車で地面に叩き落した。

(投げの宇喜田!!……そして)

「おおおおおッ!!」

最後の一人の男に、二人の敵が雄たけびを上げながら突っ込んでいった。

だが、その最後の一人は左手をポケットにしまったまま、もう片方の右腕をユックリと動かした。

そして、その雄たけびを上げながら突っ込んでいった男達が、その構えた拳を右手だけ出している男に突き出した……が。

「あがッ！」

「あぐッ！！！」

（突きの武田！！）

しかし、その特攻も虚しく。

その最後の一人に殴りかかって行った男たちは皆、その顎を性格に最後の男の右拳で打ち抜かれ。

その意識を地面へと沈めていった……。

「こいつらが相手じゃ兼一も終わりか、まあ蹴りの古賀はもう鬼島に刈られてるがな。

ちッ、せっかく面白くなってきたのになー……」

新島はそう言いながら、自身の電子手帳を懐に仕舞い込んだ。そして、その懐に電子手帳を仕舞い込んだ瞬間。

「！！！」

（やべ、逃げる！）

一瞬、肌が黒い、突きの武田と呼ばれた男に気づかれそうになったが。

即座に新島は、そのいままで隠れていた物陰から姿を消していった……。

（不良グループ『ラグナレク』か……確かに、鬼島には最近やらねっばなしたが。

……)  
これからはこいつ等が、この辺を“占める”時代かもしれねえな

新島は、そんな事を考えながら、早々にその場から離れるために、  
本当に人間をと思えないスピードで、その夜の街へと消えていっ  
た……。

第十二話

PV10万、ユニーク1万1000突破。だけど普通に進めるよー

はい、最近亮平の強さが分からなくなってきたゲレゲレです。

そして、漸くケンイチ39巻を購入。

やったね!!

それでは、感想や意見など御座いましたら優しく……。  
優しく、お願いします(笑)

ではノシ

第十三話 お前は蹴りの……なんだっけ？（前書き）

そんな、その、そう……『そ』から始まる文章ばっか。

自身のボキヤの無さに絶望。



第十三話 お前は蹴りの……なんだっけ？

あの、巨大ショッピングモールで起きた出来事は結局。

監視カメラに映っていた、相手方の生徒を俺が止めたという事で落ち着いた。

まあ、気を失っている相手方を良い事に、亮平が好き勝手に証言したせいでもあるのだが……。

閑話休題。

そして、その後、実は今週は三連休だった事を亮平はお礼の電話をくれた姫野から知り。

『そうだ、梁山泊へ行こう』という結論に至り……。

「兼一が、絡まれてる……あ、風林寺もか」

そして、今に至る……。

「僕、古賀太一！ちよーっと付き合ってくれかな、白浜兼一君？  
武田さんが連れてくるようにうるさくって……」

（この人確か、あの時の三人の一人だ！！）

現在、兼一と美羽は、蹴りの古賀を含めた9人の男達に囲まれて  
いる……。

周りの地形は、地面にジャリが敷き詰められた工事現場の直ぐ隣  
りの舗装された道路で。

正直、地面に投げられたらとても無事では済まない地形だ……。  
そして、そんな中、突然何かに気づいた古賀が口を開いた。

「あッ！あー、後ろのおでこちゃん、オッパイ大きいねー！」  
「ふえ！？」

そう言われた美羽は、急いでその胸とおでこを隠した……。  
が、遠くで見ていた亮平は。

（全身のラインが見える様に、肌に密着しているボディスパッツみたいなの着ておいて……。  
今更隠す事でもねえくだろ……。てか羽織ってるのオレンジのジャケツトだけだし）

亮平は味方である風林寺の体を嘗め回すように見ながら、そう心の中で毒づいた……。

何度も言うが、彼は変態と言う名の紳士。

「まあそろそろ、俺が……」  
「待ちなッ！えくっくと確か……」

そう言っつて、亮平が兼一達の下へと向かをつとした時。  
亮平は突然誰かに後ろから肩を掴まれてしまった……。

「鬼島つすよ」  
「おー！そうだったッ！！悪いな？」  
「いや、構わないつすよ？」

そこに現れたのは、喧嘩100段の異名を持つ世紀末のガチムチ兄貴……。逆鬼至緒、その人だった。

亮平はその人物に、以前よりも崩した体育界系の様な敬語で挨拶をした。

「その袋、また酒ですか？」

「おうよッ!!」

「（風林寺さんも苦勞してるな……）ところで、何で待たなきゃいけないんですか？」

亮平は、その逆鬼が自身の肩を掴んでいる手をどけながら……その逆鬼に問う。

「お前が行ったんじゃ、今後のアイツのためにならねえからな……」

「はあ？」

「だから、俺が今から兼一に助け舟を出しに行つてやるよ!!」

「……は？」

逆鬼はそう言つて、亮平から離れていつて。

向こう側でピンチに陥っている、兼一の下へと向かつていった……。

【side 兼一】

「武田さんは、ただ連れて来いと言っただけだけど……へへへへ。」

決めたよ白浜君、君をやっつけて、その子は僕の彼女にする事にした!!」

「何を勝手な!!」

何だ、この人？

だけど、うう……困まれてしまった。

「武田さんには、スタボロになった君を届けるよ」

まずいよ……、ざっと9人に困まれてるよ……。

美羽さんがいるとはいえ……武器持ったこの人数が相手じゃ、二人とも袋叩きにされる!!？

「よし、囲みを狭める……」

目の前の古賀と名乗った男がそう言うと、僕と美羽さんを囲む男達が。

その囲みをジリジリと狭めてきた……。

「よ、兼一、楽しそうな雰囲気じゃねえか」

「逆鬼先生!!」

すると其処に、不敵な笑みを浮かべた僕の先生、逆鬼先生が現れた……。

よしッ!!これで助かったッ!!

実際、その突然現れた逆鬼先生の威圧感に、周りを囲んでいた男達が驚愕の表情を浮かべてる。

「いいな、楽しそうで」

「おでこちゃんって言われたですわ!」

逆鬼先生が、そんな風にケラケラと笑い。

美羽さんは、もはや他の物が目に入っていない様だ……。

「んだてめえッ!!?死ねや!!」

その時、逆鬼先生の威圧感を何とか振り切った一人の男が。

その自身が持っている木刀を振り上げ、買物袋を片手に持っている逆鬼先生へと突っ込んでいった。

「ああん?(ギロツ)」

しかし、その特攻は逆鬼先生の一睨みで、動きを止めてしまった……。

「あ……い……」

(ん?…何だか様子が)

すると、その逆鬼先生に睨まれた、木刀を振りかぶった男は。

その場で木刀を振り上げながら、その体を停止させ、体を小刻みに震わせ始めた……そして。

「いやああがばあああおうおお!!!!!!」

「うわ!なんだ!?!」

木刀を振りかざした男は、突然そんな奇声を発して。  
そのまま意識を失い、その体は地面へと倒れていった……。

(睨んだだけで、人を倒した?……やっぱりこの人、人間じゃないよ)

「兼一」

「は、はひい!!」

すると、その逆鬼先生がこちらを振り返り、僕の方へと近づいてきた……。

「股を閉じる!!」

そう言っつて、逆鬼先生は僕の太もを叩き、その足を空手で言う三戦立ち(さんちんだち)にさせた。

「これが手刀ていとう構え!!」

さらに逆鬼先生は、僕に空手でいう、手刀顔面打ち(しゅとうが んめんうち)の構えを取らせた。

「うん、よしと!!」

(はい?)

逆鬼先生は何やら、その構えを僕に取らせると。

何処と無く良い事をした……みたいな満足げな表情を見せた……。

「アパチャイが探してたぞ、早く帰れよ」

「え?」

そう言うと、逆鬼先生は身をクルツと翻し。  
そのまま僕たちの事を放って置いて帰って行ってしまった……。

「ちょ、ちょっと待ってよ？帰っちゃうの？」

逆鬼先生は、僕の声など聞こえていないかの様にスタスタと行ってしまった……。

「ふ、ふはははは！！！」

すると、今まで逆鬼先生の存在のせいで、硬直状態に陥っていた古賀太一が大声で笑い始め。

そして古賀はそのまま僕の顎を、その自身が得意とする蹴りで蹴り上げようとした……。

「死……」

ガシッ！！

「はい？」

しかし、その蹴りは僕には届かず……。

その事に僕と、その足を何者かに驚掴みにされた古賀は同時に呆けた声を出してしまった……。

そしてその突如、僕と古賀の間に割って入った人物が口を開く。

「あんたも懲りないね……え……と……蹴り？の……田中ツ！！！」

「お、鬼島……！！？」

その間に入って来た人物は、僕が良く知る友人で……そして親友

の鬼島亮平その人でした。

【side 亮平】

「おいおいおい……帰っちゃったよ、あの人」

俺は今、兼一達を助けに行ったのかと思いきや……。

何やら変な構えを兼一にさせてから、そのまま帰宅の徒に付いてしまった。

新感覚系世紀末ガチムチ・ツンデレ兄貴こと、逆鬼さんの行動にただただ啞然としていた。

「……はッ！！？呆けてる場合じゃなかった！！兼一！！」

俺は、そのまま呆けていた状態から即座に復帰し。

現在進行形で危機に瀕している友人を助けに行くため、久しぶりに全力で走るのだった……。

【side out】



「お、鬼島だつて……」

「おいおい、やばいんじゃないかねえのか？俺たち……」

「冗談じゃねえぞ！？古賀さん、逃げましょう！！」

兼一と美羽を囲んでいた男達はそう言つて、突如、目の前に現れた一人の男に恐怖していた……。

「本当は手を出さなつて、逆鬼さんに言われてたんだが……別にこいつ程度だつたらいいだろ」

「亮平君？」

亮平はそう言いながら、自身の右腕で片足を掴んでいる古賀へと目をやる……。

「で？……まだやるうつてのかい？…田中？」

「古賀だ！！一文字も合つてないじゃないか！！？」

「……まだやるうつてのかい？…古賀？」

（言い直したくですわ）

しかし、その亮平の問いに古賀は不敵な笑みを浮かべる……。

「丁度いいや、この前の借りを……あぎや！！？」

「片足掴まれて何粹がつてんだ？……取り合えず潰すか」

だが、その笑みも虚しく、亮平がその掴んでいる右手の指に力を込めた事によつて。

古賀の不敵な笑みは脆くも崩れ去つていった……。

そして、亮平がその古賀の足を握り潰そうとしたその時……。

「鬼島さん、そこまでやる必要は無いですわ」

今まで、おでこちゃんと呼ばれた事に腹を立てていた美羽に、その右手を掴まれ止められてしまった。

「風林寺さん……ま、いつか」

ブンッ！

亮平は、その風林寺に止められた瞬間。

何やらその目に、鋭く計り知れない何かを光らせたが、次の瞬間には普段の表情へと戻り。

面倒臭そうに、その掴んでいた古賀を、その取り巻き達に向かって投げつけた。

「おわ！！」

「んぐツ！！？」

亮平に投げつけられた古賀によって、その取り巻き達の何人かは巻き込まれるが。

当の古賀は無事に受け止められていた……。

「古賀さん、大丈夫ですか！！？」

「逃げまじょう古賀さん！！相手が悪すぎます！！！」

「なに言ってるんだ皆！！こいつら三人ともやっちまえ！！！」

「無理ですって古賀さん！！キサラ様に言われたじゃないですか！！！」

そして古賀はそのまま……。

ここに亮平が来たことによって戦意を根こそぎ奪われてしまった自身の取り巻き達に連れられて。

この場から逃げるようにして去っていった……。

古賀達が立ち去ったこの場では現在、亮平と美羽が何やら言い知れぬ雰囲気を醸し出していた……。

「鬼島さん……鬼島さんは今、あの方に何をなさろうとしたのですか？」

「別に、ただ思いつきりあの野朗の下を握かってやるうとしただけだ

……」  
「下かって、亮平君……女の子にそれはちょっと」

その美羽の問いに、亮平はただ面倒臭そうにしながら答えた……。  
兼一はこの状況に付いて行けていない様子だ。

「私達、武道を学ぶ者は……」

「俺は武道何か学んでないし……それに、兼一とは友達だが。」

俺はまだ、お前とはそこまで親しく接して無かった気がするけど  
「？」

「それとこれとは……」  
「あーッ！！ちよつとストップ！！」

完全に亮平と美羽の周りの空気が最悪になるうとした時……。  
今まで付いて行けなかった兼一が突然、声を張り上げた。

「どうしちゃったのさ、二人とも！？いままでこんなに仲悪く無かつたじゃないか！！」  
「……………」

その兼一の言葉に、亮平と美羽は互いに目を相手から反らす……すると亮平が先にその口を開いた。

「あゝ……………面倒臭え……………兼一、俺今日はもう帰るわ」  
「ちよッ！？亮平君！？」

亮平はそう言いながら、兼一達には目もくれずにこの場から立ち去って行ってしまった……。

「行っちゃった……………あんな亮平君、初めてだよ……………」  
「すみません、兼一さん……………私のせいで鬼島さんが……………」

亮平が立ち去ったこの場では、美羽が先程に自分の行動を本当に反省したような表情で兼一に謝った。

「美羽さん？」  
「あの……………鬼島さんは私達の事を助けようとなさって下さったのに。私は、その鬼島さんに対して……………気に触る様な事を……………」  
「……………多分、大丈夫だよ。」

亮平君も、たぶん頭に血が昇っちゃってたんだよ……………だから美羽

さんは悪くないし。

明日になれば、亮平君も機嫌を直してくれるって!！」

「そうでしょうか……」

兼一はその落ち込んだ美羽をなるべく元気にさせる様に、出来るだけ明るく振舞った……。

「亮平君は優しい人だし、その事は美羽さんも知ってるでしょ？」

「はい……ですわ」

「だったら、明日学校で謝れば良いって!きつと亮平君も許してくれるよ!！」

「そうだと……いいですわね」

しかし、美羽の様子は一向に明るくなるどころか、益々落ち込んでいく一方であった。

そして後日、亮平は入学以来、遅刻しようとも一回も休んだ事の

無い学校を……。

「おはよう、風林寺さん」

「お、おはよう御座いますですわ……鬼島さん」

普通に登校して来るのであった……。

第十三話 お前は蹴りの……なんだっけ？（後書き）

そろそろ亮平にも、ちょっと苦戦というものを経験させてやるつ。

と、言う事で……。

これから近いうちに亮平には何かしらの格闘技と闘ってもらいます。

まあ、一応決めてはいるのですが……。

皆さんにもし、こんな格闘技と亮平は闘ってくれ、みたいな要望があるのなら。

感想などに書いてみて下さい。

色んな方面から意見を貰えれば、もっと良い案が出るかもしれませんしね。

ではノシ

あゝ……今回は終わり方が浮かばなかった。

第十四話 噂って怖ッ！！（前書き）

サブタイは気分です。

そして、話はそこまで進みません。



## 第十四話 噂って怖ッ!!

ガコッ!!

ここはキサラが、何時も学校で自身の隊を集めている教室。そんな教室に、何やら人を蹴ったような打撃音が響いた……。

「私……白浜兼一を『連れて来い』って言わなかったけ？」

そして、その教室に備え付けられているソファーに肩肘を付き寝そべりながら。

今響いた打撃音を鳴らした張本人である、キサラが口を開いた……。

「ち、違うんだよキサラ!？」

そう言ったのは、先程のキサラの蹴りで教室の後ろに備え付けられているロツカーまで吹き飛ばされ。

更には、その鼻から血を垂れ流した、先日亮平にやられかけた蹴りの古賀であった……。

すると、蹴りの古賀はそのまま言葉を続ける。

「町で偶然あって、連れてこよう思ったんだ!

でもあいつの彼女が、ムチムチのおでこちゃんで!

羨ましいからちょっと“しめて”やるうとしたら……そしたら、

あの鬼島が来て!」

「まで、“鬼島”がどうしたって?」

古賀から出た自身の幼馴染の名前に、キサラは少し困惑の表情を露にした。

「そうなんだ！あいつ……白浜兼一の事知ってたと言うより、どこか仲が良い様な……。」

と、とにかくそんな感じだったんだ！それで僕が白浜の事を蹴るうとしたら急に……。」

「ちょっと待て、“鬼島”と白浜の坊やが仲が良いって？」

その古賀の言葉に、キサラが更に疑問を投げかける……。

「そうだよ！まるで白浜の事助けるみたいに現れてさー！」

「そうか……分かった（亮平と坊やが？……確かに同じクラス同士だが……）」

「とにかく、今回の命令無視の罪として……。」

武田、お前達三人には、しばらく大人しくしてもらおう！」

「……」

「うす」

そんな生返事をするキサラに変わって、キサラの側近である長い金髪を生やした男が。

今回の命令無視の罰を、技の三人衆に言い渡した……。

そして、それに三人はそれぞれ返事をし、この部屋から退室して行った。

「キサラ様、先程古賀が言っていた件は……。」

「……いや、お前達は気にしなくても良い。  
とにかく、私らには兵隊が必要なんだ、早く白浜の坊やをここに  
連れてくる事だけを考えろ!!」

「承知しました……」

亮平の事で、キサラの事を心配した側近は。

その古賀の言葉について聞こうをしたのだが、それをキサラは特  
に気にした様子もなく。

ただ、今後の方針を兵隊達に伝えるのであった……。

そして、当の亮平の方は……。

「昨日の事はごめんな?……俺もあの後、よく考えたら、まあ大  
人気なかつたなと」

「いえ、私も少し冷静になれば良かったと……あの後、反省しましたので」

亮平は、昨日の一件を教室で手打ちにしようとする。

その相手である、美羽に謝罪の言葉を述べている最中であつた……。

(昨日?……鬼島のやつ、風林寺と何したんだ?)

そして、その話に影から介入する人影が一つ……。

(良かった……美羽さんと亮平君はちゃんと仲直り出来たみたいだ)

そしてまた一つ。

「いや、ただどあれは……風林寺さんが寸前で止めてくれなかったら。」

多分、俺……やっちゃったと思うんだ」

(ナ、ナニをやったんだ!?……まさか鬼島の奴、風林寺と……)

「いえ、私もその……あの時は興奮してしまいましたので」

(美羽さん……何だろうこの会話、何か変だぞ?)

そんな二つの影には気付かず、二人は日本人特有のお辞儀合戦を続けて行く……。

「はは、確かに珍しく興奮してたのはこっちも感じたな……あれは中々(なかなか)良かったぞ?」

「もう／＼!あまりからかわないで下さいですわ……／＼／」

(どうして風林寺が顔を赤くするんだッ!?……これは、まさか本当にノノノ)

(美羽さん……やっぱ何処か変だよ?)

亮平と美羽の会話はさらに続いて行く……。

まあ、人影の正体は同じクラスの兼一と姫野なのだが。

「まあでも、許してくれるんなら良かったわ。

俺、今日は口も聞いて貰えないかと思ったから……あんな事の後だし」

(だから!あんな事って、どんな事だよ!?)

「はい、それは私も同じでしたですわ……。

ですが、次からはちゃんと相手を見てから手加減して下さいですわ」

(美羽さん、若干話しの流れがおかしいよ?……気付かないか)

「努力するよ、俺ももう中学生じゃないしな。

次からは、相手をちゃんと選んでからやる事にする!約束だッ!」

(鬼島!あんた爽やかに言っただつもりだろうけど……)

アンタそれ今まで見境無かったって事じゃないの!?)

「はい、ですがどうしても、鬼島さんが耐えられないと言っているのであれば。

その時は私にお任せ下さい、確りと鬼島さんの事を抑えて見せませますわ!」

(あれ、普通……なのか?ちょっと普通に戻ったかな?)

そうして、若干一名の勘違いを出した事以外。

亮平と美羽は、ちゃんと仲直りする事が出来たのであった……。

そして、その日の放課後……。  
亮平と兼一の二人は現在、兼一の所属する園芸部の活動場所へと向かっていた。

「亮平君は、確か園芸部は初めてだよな？」

「ああ、だけど部員の一人は知ってるぞ？確か……小泉だっけ？」

「違うよ、泉さんって言うんだよ。」

「ほら、同じクラスにもいるじゃん、あの姫野さんと仲が良い娘だよ。」

「あゝ、それは知ってるんだけど……どうにも顔が思い出せないんだ。」

そうこう話している内に、その目的地である園芸部の教室へと二

人は辿り着いた。

「こんにちは、泉さん」

「お邪魔します……ああ！この娘か」

そして、教室へと入った二人の前には。

前回、亮平が巨大シヨツピングモールで、他校の不良達から助け出した少女であった。

だが、その少女の顔はどこか亮平の事を歓迎していない様であった……。

「こんにちは、白浜君……それと、鬼島君？で良いのでしょうか……」

「泉さん、そんなに怯えなくても良いんだよ？……亮平君だって人は食べないんだからさ」

「……取り合えず、兼一は俺に謝ろうか？それと、泉さん？でいいんだな？」

「は、はい……」

泉はそう恐る恐る亮平の言葉に答えると、その体を兼一の後ろの方へと隠していった……。

「……俺泣いて良いのか？……いや、泣こうか？」

「泉さん、どうしたの？亮平君は噂みたいな人じゃないよ？」

「う、うん……でもね、その……白浜君にもそういう噂はあるんだよね？」

その泉の言葉に、兼一はどこか疲れたような、そんな顔をしながら答え始めた……。

「ああ、あの噂ね……それらは全て、宇宙人の皮を被った悪魔が流しているデマです……！」

「だよー、白浜君が学園最強の不良なはず無いもの……宇宙人？」

「……なあ？俺はどんな噂流されてるんだ？」

「ひい……！」

その泉と兼一の会話に入ろうとした亮平を、泉はまるで怯えた小動物の様に。

再度、兼一の後ろへと隠れてしまった……。

「あ……何だか、俺嫌われてる？」

「い、いえ！違います……その私、あの時助けてもらったのは感謝しているのですが……！」

どうも不良の方と言うか、怖そうな人は苦手です……！」

泉はそう言いながら、自身のスカートを思いつきり自分の手で押さえ込んだ……。

「これは……（エロいけど……ヒロインだけど）」

「亮平君、どうしたの？」

「いや、何だかな……何だか、俺に対する女子の噂が垣間見えた様な気がしてな……！」



亮平はそう言いながら、自身の周りに哀愁染みた雰囲気を醸し出し始めた……。

すると、其処へこの教室に誰かが入って来た。

「よう“最強”の!! 捜したぜ?」

「貴様ーッ!! また訳の分からん噂を流したなーッ!!」

そこに入って来たのは、兼一曰く、宇宙人の皮を被った悪魔こと新島春男その人であった。

だが、その突然現れた悪友に兼一は、今までに見た事が無い勢いでその宇宙人の制服の胸倉を掴むのであった……。

「流したよ! 流したさ!! それが何だって言うんだ!？」

しかし、その宇宙人は全く持つて反省の色を見せず。

その兼一に対して、逆切れとも言える開き直りをするのであった……。

「とにかく、これ以上嘘の情報を流すな!!」

「いずれ本当になる……」

「あー!! 本当に宇宙人!!」

「じゃああしい小娘」

「……俺の噂流したの、お前か?」

そんな兼一達の会話の中に、完全に十代ではない哀愁を漂わせた亮平が。

力なき言葉で、その宇宙人に問うのだが……。

「いえ、鬼島さんの御噂は、私めでは無く……」。

真に残念ながら、女子の間で広まった御噂で御座います」

「……兼一、俺今日はもう帰るわ」

亮平はその宇宙人の言葉を聞くと、そのままこの教室を出て行き、そのまま下校の徒へ付いてしまったのだった……。その間、兼一達はその亮平が醸し出す哀愁に酔いしれてしまっていた。

「……ハッ!? 亮平君が行っちゃったよ!!」

「……（あの人って、女子には弱い人なのかな?）」

そう言っつて、宇宙人以外の面々は。

この場から去っつていった亮平の事を気遣ったのだが……。

（これは使える! 使えるぞ!! 俺様が流していない噂だとしても……。

俺様が俺様にとつて都合の良いように歪めに歪めつくして……。終いにはあ、あの“掌鬼”を使いこなして見せるぜッ!）

元々性根が腐った宇宙人にとっては、只の甘い蜜にしか成らなかつたのだった……。

## 第十四話 噂って怖ッ!! (後書き)

前回、皆さんに聞いた亮平の相手ですが。

まだ正直、決めかねてます……。

感想版でも書きましたが、原稿案は日本拳法なのですが……。

感想で書かれていた、武器持ちや、プロレス(古き良き英国プロレスで考えてます)とか、かなり良い案が出てきて迷ってます。

ですので、まだ感想には書いていない皆さんも書いて頂けると嬉しいです。

選択肢が広がると、今後のためにもなりますしね。

残念ながら、ゲレゲレの知恵ではコツテコテの格闘技しか浮かばなかったのです。

追申：次回はかなり進めます(話を)。

多分、技の三人衆を終わらせるくらい進めます。

ですので更新が少し遅れますことを、この場を借りて書かせてもらいます。

それと、次回の更新まで亮平の相手を募集しますので。

そちらの方もお願いします。

ではノシ

第十五話 色々詰め込んでしまった……。 (前書き)

サブタイ通り、色々詰め込みすぎてその文字数1万3000オーバー！。

ごめんなさい、本当にごめんなさい。

## 第十五話 色々詰め込んでしまった……。

亮平が傷心してしまった日から、何日かの時間が経ち。その間に、亮平は何とか傷心から立ち直れたのだが……しかし、今度は兼一の方が何やら様々な理由で悩み始めた。

原因は、とある日の喧嘩で相手にナイフを出された時。

兼一は、それに一瞬怯えてしまい、危うく刺されるところだったのだが……。何とかそれは美羽の機転により避けられるのであった……が。

助けられた兼一は、男なのに、好きな女子に助けられてしまった事と、武器を出されてしまった時に、何も出来なかった自分に対して、かなり思い詰めてしまったのであった。

だが、それも一時の事……。

その武器を出された時の対処法を、武器の申し子と呼ばれている香坂しぐれに教わる事で、その武器に対するトラウマを振り払う事が出来たのだった……。しかし、今はこのように簡単に説明しているのだが。その稽古は、一般人にとっては異次元の世界のような光景で……亮平曰く。

「何故、スプーンで道着や風林寺さんのボディースパッツが細切れになるのか……。そして何故、丸腰の教え子相手に真剣を振り回せるのか？」……だそうだ。

その事によって兼一は、一時的ではあるが武器を持つ相手を見ると可笑しくなるといった。

そんな、可愛そうな状態になってしまったのだが……ここでは閑話休題とさせてもらおう。

【亮平の体について B Y秋雨】

晴れた空、白い雲。

そんな絶好の行楽日和に兼一はとある河川道路を、秋雨乗るタイヤを引っ張りながら走っていた。

もちろん、鞭で叩かれながらだ？

「甲越寺先生！！僕はいつたい何時になったら、基礎トレーニングを卒業出来るんですか！？」

その兼一の言葉は、今まで兼一がやってきた稽古の内容についてだ。

兼一は今まで、現在ののような基礎稽古をひたすらに続けている……。ある日は、多数の杭が刺さった地面を特殊な歩法でひたすら進み続ける。またある日は、柔軟で股裂きをやられたりだとか……。もちろん、技の稽古も確りやってはいるのだが（最初は渋っていた逆鬼も確りと教えている）。

「卒業！！？馬鹿言っちゃいかん！！基礎に卒業などあるものか！！」

「いーッ！！じゃあ僕は一生、こんな恥ずかしいマラソンを続けなければならぬのですか！？」

そう言いながらも、兼一は河川道路を、タイヤを引き摺りながら駆け抜けていく……。

そしてそのマラソンも終わり、休憩するために立ち寄った公園で兼一は再度。顔を水道で洗いながら、秋雨に先程の事を聞いた。

「どうして僕はマラソン何ですか……亮平君は、たまに筋トレするぐらいなのに」

「別にマラソンを続ける必要は無いさ！自分で自分を管理出来ればよい！！それに、鬼島君と兼一君とは出来が違うからね……」

「酷いやい！！どうせ僕は、凡人以下でミジンコレベルの才能しか無いやい！！」

「いや、そうではない……」  
「え？」

秋雨の言葉に、一瞬自暴自棄になった兼一は、その秋雨が発した言葉で、これまた一瞬で我を取り戻した。

「彼は所謂、そうだね……元々使っている筋肉が違っても言って置こうか」

「使っている筋肉が……違う？」

その秋雨の言葉に、兼一は少々困惑し始めていた……。

「そうだ、兼一君は逆鬼やアパチャイの体は凄いと思うだろ？」

「はい、あのイカれた腕の太さは異常ですけど……。そういえば、甲越寺先生はあんなに太くは無いですよね？」

「ふふ、スマートだろ？……それに。昔の人達は、筋トレが必要無いぐらいに組み手をやっていたんだ」

「はあ……でも、それと亮平君がどう関係するんですか？」

秋雨は、そう兼一に問われると、その整えられた髭を動かしながら笑みを作った。

「そうだね、それは彼が、筋トレや組み手等といった稽古を……全くと云って良いほどやっていなくとも、普段の体の使い方あの体を自然に作り上げていたからだ」

「えー！……た、確かに亮平君は何もやってはいないですけど。今は、甲越寺先生の筋トレをやっているじゃないですか？」

「まあ彼は確かに現在、私が言い渡したトレーニングを行ってはいるが……。それは厳密に言つと筋トレでは無く、体の使い方を矯正しているに過ぎないんだよ」

「は？」

兼一は、その秋雨の言葉に首を傾げた……。

そして、秋雨がゆっくりとその口を開いた……。

「兼一君は、インナーマッスルと呼ばれる筋肉を知っているかね？」

「はあ、まあ一応は……あれですよ？体の中にあるっていう」

「そうだが、まあ簡単に言えば外側のアウトマッスルの内側にある極めて内臓や骨に近い筋肉の事だ、小胸筋などが有名だね。だが明確には区別出来ない事から、実際にはインナーマッスルなどと言った言葉は無いのだがね」

「それがどうかしたんですか？」

「そう言った、普段ではあまり使わない……使えない筋肉を鍛えるのがコア・トレーニングなどと言ったものなのだが……。まあ、亮平君はその様な矯正無しでも、とある筋肉を自然に鍛えていたのだ

！！！」

「……？」

秋雨は珍しく興奮し始めたのだが……。



とうの兼一は、未だに首を傾げたままであつた。

「通説では、筋線維は二種類しか無いと言われている……。それは、収縮が遅く持久力に優れた筋線維である“赤筋”。そして、収縮が早く、一瞬の瞬発力に優れた筋線維“白筋”だ……。が。実は、それと更にもう一つの筋線維が隠されていたのだ！」

「もう一つの筋線維？」

「そう！それは……。その二つの筋線維の特徴を両方併せ持つ筋肉。所謂、中間筋と呼ばれる“ピンク色”の筋肉の事だ！！これは私が独自で発見した筋肉でね、そしてこれが亮平君の体の秘密さ！！」

「ピンク色の筋肉？」

兼一は更に首を傾げた。

「通常、その三種類の筋肉の割合は一生変わらないのだが……。亮平君の場合は、その割合が始めから（ピ）6：（白）2：（赤）2だったのだよ……。これは通常じゃあ考えられない事でね、もちろん私も見たのは初めてだった」

「……で、それが結局どう凄いのですか？」

「まあつまりは、亮平君は生まれて来てからこれまでその通常の二種類の筋肉ではなく、もう一つのピンク色の筋肉を使い続けたのだ。そして、私はその割り合いを更に変えようと、彼を矯正させているのだよ」

「ふん」

「はは、兼一君には少し難しかったかな？」

「はあ……。正直どう凄いのかさっぱりです」

そう言って兼一は、これまでの秋雨の説明を締めくくった。

その後、兼一は秋雨と珍しく買出しをしに行くのであったが……。そこで前回、亮平と美羽に追い払われたヤクザ達を再開する。

その際、ヤクザ達が元プロレスラーの大男を助っ人として呼び寄せたのだが。

しかし、それはヤクザがとっても嫌いな甲越寺の物理法則を無視した力で、無事解決した。

兼一はその事で、自身を教える先生の異常性を再確認すると共に。その後、梁山泊で聞かされた秋雨の体の秘密によって、自身の友人である、亮平の異常性も再確認するのであった……。

### 【技の三人衆 B Y 宇宙人】

それは、ある日の学校での事……。

亮平のクラス1・Eは、長い午前中の授業を終え。

これからの午後に備えるため、学校での楽しみの一つである昼食の時間を取っていた。

「それで、鬼島君とは何か話せたの？」  
「話せたも何も……あんな話を聞かされたらな」

そこに、園芸部部長の泉優香と、薙刀部所属でなおかつ亮平と仲の良い姫野真琴の姿もあった。また現在この二人の会話の内容は、前回の亮平と美羽の会話を正しく勘違いしたせいで、姫野が亮平に上手く面と面を迎えなくなってしまうた事についてである……。

「まあ、こつちの事より泉はどうなんだ？」

「こつちって？」

「白浜の事だよ、気になってるんだろ？」

しかし、姫野は現状の会話の流れを一先ず切り。こんどは泉の話題へと切り替えた……。その話題の切り替えしに、泉は面白い様に戸惑い始めたのだが。

「え！？私はそのツ！白浜君とは特にはその！！」

（あゝあ、まったく泉ってば……それじゃあバレバレだつて）

そんな二人の会話が続く中、この教室に突然何者かが複数人入って来た……。

「うげ！！“ラグナレク”の技の三人衆！！」

その突然の来訪者は、“ラグナレク”の技の三人衆と呼ばれる男達で。リーダー格的存在の武田をはじめ、投げの宇喜田や、最近やられっ放しの古賀の姿まであった。

つまりは『技の三人衆』が、この教室に揃った事になる。

「え、えつと！フヌケン、いや白浜？  
さ、さあ……昼飯の時はどっかに行っちゃまうんですよ！！」

その三人に対して、あまり知らない仲の良い二人の内一人の男子が怯えながらも。

何やらある人物の所在を話している事を、姫野はその場から離れながら聞いていた。

「ふ、友を庇うとは、見上げた物だが……我々も切羽詰っているの  
でね」

（白浜があのだ二人と？聞いた事無いぞ……どちらかと言うと鬼島……  
……。そういえばアイツ、こんな時にどこほつつき歩いてるんだ！！）  
「ムーンツ！！」

すると、その三人衆の問いに答えていた男子生徒が、今まで黙っていた投げの宇喜田に。その胸倉を両手で体ごと持ち上げられた。

「本当に知らないんです！！本当ですよ！？」

「そんな毎日毎日、クラスメイトの目を盗んで消えられるものか！！」

（そうは言っても確かに白浜のやつ、風林寺と一緒に何時も何処かへ行っちゃうしな……ハツ！まさか鬼島も！！？……いや、無いからアイツに限って、友達と二股なんて許すはず無いし）  
「ん？」

姫野が何かを考え始めると、今まで男子生徒の胸倉を掴んでいた投げの宇喜田が、何かに気づいたのか？その掴んでいた男子生徒を地面へと放し、そのまま何やらロッカーの方へと向かって行った。

すると……。

「そこかーッ?!?!?」

「!?!?!」

投げの宇喜田は何を考えたのか、そのロッカーを持ち上げ。そしてそのまま、両手で思いっきりロッカーをある方向へと投げつけた……。

「え……え?!?!?」

その方向に運悪く立っていたのは、亮平と仲の良い女子……姫野真琴であった。

(嘘ッ!? 当たる!!)

ガンッ!!

姫野に、その宙を舞ったロッカーがぶつかると思われた瞬間。そのロッカーが何かにぶつかる音を立てた……そしてその光景にクラス中の人間が息を呑んだ。

宙を舞い、落下地点に立っていた姫野に当たるはずだったロッカーは。

その間に入って来た人物によって、未だに地面には落下せず、そのまま宙を浮いた状態で静止していた……。

姫野は何時までも来ないその衝撃に、あまりの驚きに思わず閉じてしまった瞼をゆつくりと開いた。

「……お、鬼島?」

「大丈夫か?……それよりも何だ、この状況は?」

そこに居たのは、その宙に浮いているロッカーを片手で支え。自身の後ろに立っている姫野へと声を掛ける、先程まで姫野がもっとも駆けつけて欲しかった人物である亮平の姿だった……。

「お……お前、今までどこ行つてたんだよ？」

「いや、ただのトイレだ」

「……はあ、まあいっか、取り合えずこの状況を何とかして」

「あいよ」

亮平はそう言つて、自身の右手でキャッチしたロッカーを地面へと音を鳴らしながら“落とした”。

すると、ロッカーの扉がその落とした事によって生まれた衝撃でゆっくりと開かれた行く。そして、そのロッカーから何かの人形のような物が転がり落ちてきた……。

「ん？……藁人形？何か書いてあるな……」

そのロッカーから転がり落ちてきた藁人形を亮平は拾い上げる……。

すると、そこには……。

「けんいちハラグナれくにかつよ！！」？……あ、タブもか。何

々……“メイドインAPACHAI”？」

「何それ？」

そこには何やら、慣れない手つきで書いたであろう文字と、裏ムエタイ界の死神の名前が記されていた……。

「何だよ、その人形……」

「どうやら馬鹿にされたらしいよ!！」

その人形を目の当たりにした、宇喜田と古賀は揃って怒気を孕んだ声を出した……。

「こんなの出てきたけど……どうする?まだ此処に居座るかい?それとも……俺とやってみるかい?」

だが亮平はそんな二人など目もくれず、リーダー格である武田に対して挑発の姿勢を示す。その亮平が纏う空気に、それまで凄んでいた宇喜田と古賀は背筋に何か冷たい物が伝うのを感じていた……だが、その亮平の挑発を真っ向から受けた武田は何処かが違っていた。

「ふ……フツ、アツハツハツハ!！」

「……なに笑ってんだ?俺が聞いているのは“やる”か“やらない”かだぞ?」

その突然笑い出した武田の様子に、亮平は訝しげな表情をしながら再度尋ねた……。

「いや、だって……“そこかー!!”って言って。出てきたのがその人形って……プププツ!!」

「……まあ、そんな事はどうでも良いんだ。取り合えず、何の関係も無いうちのクラスの女子に当たりそうだったんだ……。その辺の落とし前はどう着ける?」

武田が笑い続ける中、その周辺の間人たちは困惑の表情を隠せず  
に居たのだが……。

当の亮平はそう言いながら、何時でも目の前の三人を潰せるよう

に身構える。

「ハハハ、その事ね……宇喜田君。君も流石に、今のは危険だしすまないと思っっているのだろ？ほら、その娘に謝ってきなよ」

「なツ！？俺たち“ラグナレク”が、そんな簡単に頭下げて……」  
「良いから行きたまえよ、今回はこつちに非があるんだからさ」

しかし、その亮平の身構えも、どこか外れている武田の言葉によって肩透かしを食らった様に無駄になってしまった……。

「ちツ！！……取り合えず、すまねえ」

「えッ！！良いですって、私には当たらなかった訳ですし……」

「意外と、まともな奴も居たんだな……（キサラ姉ちゃんだけかと思ってた）」

「これで良いのかい？……我々も白浜兼一を捜しに行かなきゃ行けないのでね」

『ラグナレク』に対して、少し考えを見直す亮平に、その唯一まともな武田がそう尋ねてきた。

「まあ……本当なら俺が、この場であんた等を“しめ”ようかとも思ったけども。兼一がこうやって倒すって言うてんだ……今回は見逃す……が。次に来た時は、問答無用でやっさん（安永先生）に突き出すからな？」

亮平は、アパチャイが作った藁人形を三人に見せながら、端的に言えば次は無いとの言葉を。その技の三人衆に向かって投げかけた……。

「それは勘弁願いたいね……じゃあ引き上げようか」



「くそツ!! 白浜めツ!! 俺に恥を搔かせやがって!!」  
「え!?! 三人でこいつやらないの!?!?」

そう言つて、武田が引き上げようとした時。宇喜田は渋々従つたのだが、古賀はその言葉には従わなかつた。

「古賀君、キサラ様に言われているだろ?..... 鬼島には手を出すなつて」

「でも!?! この三人なら、アイツだつて.....」

「第二拳豪を無傷で倒した男を、我々だけで倒せると思つているのかい?」

「ぐツ!! それは.....」

「少なくとも、僕は無理だと思つてるよ..... 分かつたら引き上げだ!?!」

「.....了解」

武田の言葉に、今まで駄々をこねていた古賀も、命令に従いこの教室から出て行つた.....。

そして、技の三人衆が出て行つた教室では.....。

「その..... ありがとうな、助けてくれて」

「ん? ああ、別に構わんよ..... あんなの飛んできたら、助けるのが当たり前だろ?」

「それでも、ありがとうな」

三人衆が出て行つた教室では、亮平と姫野の何やら甘酸っぱい青春劇場の様な物が展開されていた。

そして、その二人の雰囲気クラス中の人間が、微笑ましそうに、不思議そうに、茶化す様に、またあるいは妬ましそうに・憤怒のよ

うに・リア充死ねと言ったように見つめていた……。

「それにしても……兼一のやつは何時も何処行ってんだ？」

「さあ？風林寺のやつも一緒にいたいだから……ハッ！！」

「ん？どうした、姫野？」

亮平と話している姫野は、美羽の名前を自ら出した事によって、先日の勘違いの事を聞きだそうと亮平に尋ねる事にした。

「あのさ、鬼島は風林寺とは仲が良いのか？」

「ああ、まあそれなりに……それがどうかしたか？」

「（この反応……なあんだ、私の思い過ごしか）いや、なんでも無いって」

（良かったね、姫野！！）

その亮平の態度を見て、姫野は安堵の息を付く。

また、その様子を影ながら見守っていた友人の泉も安堵の息を付くのであった……。

そして、今回の騒動の中心である筈の男はというと……。

「あれ？おつかしーな……」

「どうしたんですの？兼一さん」

その男、白浜兼一は美羽と共に学校の屋上で昼食を取っていた。

だが突然、兼一が自身のポケットにある物が入っていない事に気が付いた。

「いや、ちょっと……アパチャイさんが作ってくれた魔除けの人形が……」

兼一が捜していたものは現在、自身のクラスのロッカーに仕舞われている。

「学校で何事も無く、無事に梁山泊に来れますように……。あれでいて結構優しい人ですよね、あの人って」

「ええ、アパチャイさんとはとても優しい方ですわよ……加減を知らないだけで」

「しかし、幾ら無益な闘いを避けるためとはいえ……」

そう言いながら、兼一は辺りを見回す。

ここは、学校の屋上ではあるのだが……屋上は屋上でも、そのさらに上。屋上の入り口付近に付けられている梯子を上った、給水タンクが備え付けられている場所であった。

「まあ、もう少し修行が進めば、学校の不良を制圧して、ゆっくりできますわー!」

「逆に制圧しないと、ゆっくり出来ない?」

「鬼島さんに頼むと言つのもありますが、それでは兼一さんが一人の時に危険が出てきますわ。」

「ですので、そうとも言いますわね……!」

その時、この兼一達がいる場所に上るための梯子に何者かが手を伸ばしていた……。

その事に気付いた美羽は、座った状態のまま宙へと飛び上がるという人間離れをした業を見せると共に、この美羽達がいる場所に上ろうとして、手を掛けた人物のその“手”を踏みつけた。

「ギャアアアア!」

美羽の攻撃は止まず、更に、その上ろうとした人物の顔面を踏みつけようと蹴りを繰り返す……が。

「ストーツ美羽ちゃんッ!」

「あつ、え!?新島さん!」

その人物に気付いた美羽は、新島に迫っていた蹴りをピタツ!と止め。

下から丸見えのスカートの内側を急いで隠しながら、自身の頬を赤らめるのであった……。普段なら、その仕草はグツと来るものがあるのかもしれないが……。今回の場合は直前に人の顔を踏み潰そうとしていたので、プラス4ぐらいの……。 (鬼島採点)。

「相変わらずおとろしい……。へへへ……でも捜し出したぜえ〜」

「スカートはこれだから嫌いですわ」

新島は、直前の光景で体を震えさせるも、梯子をヨジヨジとよじ登る。

「くっ……。どこへ隠れても、必ず嗅ぎ付けてくるなお前!」

(折角の美羽さんとの二人きりを……。!!)

「ケケケ…俺様をなめるな!」

そう言いながら、新島は兼一へと近づいて行く……。

「そして俺様にバレたって事は、じきに“ラグナレク”にもバレるという事だ!」

「何を威張って言っている!貴様は奴等のスパイか!」

「浅はかな男だな!」

兼一は新島の胸倉を掴みながら、その悪友の行動に対して疑問を投げかけた。そして、新島はその後、兼一達に隠れ家を変えるように言ったり。その変える時期や、回数までも兼一に対してアドバイスをしたのだが……そのアドバイスをしている時の新島の顔は、どう見てもお前の方が危ないだろ……と、言うような顔をしていた。

「うわー凄くずるい人ですわ！（パチパチ）」

「行こう美羽さん！！奴は宇宙人の皮をかぶった悪魔だ！！近づく  
と危ない！！」

「え、でも……」

だが兼一は、新島の事を拍手をしながら褒める美羽の手を引きながら、その宇宙人の皮を被った悪人から離れようとした……。

「あ~~~~あ、折角投げの宇喜田と、突きの武田の情報もって来たのにな~~~~」

「！！！！」

すると突然、新島もとい宇宙人が、兼一に対してその言葉をわざと聞こえるようにしてボソッと呟いた……。

「どんなん？教えて？」

「……くださいませは？」

「教えて下さいませ！！」

「新島大明神様は？」

「新島大明神様！！」

「なめる！！（足を突き出す）」

「……」

「……」

「キョエエエエ！！（突然殴りかかった）」

「ぐおおおおお！！（それを向かえ撃つ）」  
「ああっ！！これが男の友情ですね（違います）」

そんなこんなで、漸く二人は落ち着き。宇宙人が持ってきた、その二人の情報を兼一に伝えていた……もちろん、その訳の分からない電子手帳でだ。

「宇喜田孝造<sup>うきだしんこうぞう</sup>。三年生、名門の柔道の道場にいたが、勝つためにどんな手でも使う品性の無さから破門！得意技はその巨体から投げ落とす肩車！！」

「柔道か……」

「お前が喧嘩指数62として。奴は80……まあ今のお前じゃ勝ち目はねえな……。もっとも、お前のダチである鬼島は喧嘩指数“測定不能”だが……悪い事は言わねえ。素直に、あの“掌鬼”に任せちまいな……」  
「それは出来ない！」

兼一は、その新島の提案を即答で否定した。

「亮平君に頼ってしまったら、それは僕の夢を応援してくれた亮平君に対しての裏切りなんだ。それだけは出来ない……それに、人の強さが数字で出せるもんか！！」

（兼一さん……それに、段々と分かって来ていますわね）

その兼一の答えを聞いた宇宙……もとい新島は、ゆっくりとした動作で口を開いた。

「……ま、そのせいでどうなるかは、お前の勝手だがな。だが、敵は宇喜田だけじゃねえ……さらにやばいのが突きの武田、三年だ！  
！こいつはなんと、元ライト級のボクサーだ！！」

「ボボボ…ボクサア…っ！！」  
(おいおい…ですわ)

新島の情報を聞いた兼一は、先程の凜々しい表情が嘘のように崩れ去り。

その顔は元のフヌケンとまでは行かないが、明らかに困惑の表情を示していた。

「そうだ、ボクシング界でも、かなり期待されていた新人だったらしい！」

「そんな方が、何でまた不良グループなんかに？」

「さーねー！人が悪に傾くのは、りんごが落ちるのと一緒だし…その辺はまだ調査中だ！」

「ボ、ボクサ…」

そして、この場はここでお開きとなった……。

【ぶっ殺すならムエタイだよ！！ BYアパチャイ】

その日の梁山泊では。

「ドラえつもん！！」

(さすがに毎日走り込んでいるだけの事はありますわね。だいぶ速くなって来ましたわ！！)

いつものように、兼一が助けを求める時の声が梁山泊の門付近で響いていた……。

そして、梁山泊へと入って来た兼一の目に自身の先生達である、しぐれを抜いた四人の男達の姿が映った……。が。その四人の男達が醸し出す雰囲気は、およそ茶の間で醸し出す雰囲気とは一線を博していた。

(こ、これは殺気!!まさか……)

この空気を敏感に感じたのか、兼一はこれから起きてしまうかもしれない何かに恐怖した……。

「じゃ!!!(秋雨)」

「ん!!!(逆鬼)」

「け!!!(剣星)」

「ん!!!(アパチャイ)」

「じゃんけん……」

その結果に、兼一は肩透かしを食らった様に力なく床へと腰を下ろしたが。

達人級のじゃんけんは、ここからが本番であった……。

「ポーン!!」「」

(はっ!!一瞬のうちに相手の手を見て次々に変えて出している!?)

四人の達人級のじゃんけんは、各々が手を出し終えるまでの数瞬間の間に、相手の手を見てから自身の手も変えるといった、およそ人間離れたスピードで次々に手の形を変えていく光景であった。

だが……。



「フツ……裏の裏をかいたのだが」

達人級のじゃんけんが終わった瞬間、あまりの手の勢いのせいで辺りに埃が舞っていた……。

すると、珍しく額から一滴の汗を垂れ流した秋雨が、そう口を開いた……。

「アパチャイ……何も考えずにだしたね？」

「うわーい！アパチャイ初めて勝ったよー！！」

「……」

「秋雨と剣星がころころと変えるからだ！！」

その達人級達のじゃんけんの結果は、何も考えず、そのままの手で出したアパチャイに軍配が上がった。

「たのしそーっすね……弟子がこんなに大ピンチなのに」

「ばかやろう！遊んでたわけじゃねえ！！」

「え？」

四人の先生達のじゃんけんを見守っていた兼一は、自身が現在置かれている状況を考えながら。

能天気じゃんけん等で遊んでいる先生達に苦言を呈したのだが

……。

「次に誰がおめーを重点的に教えるか決めてたんだよー！！」

「あつこら！それは内緒だと言っただろうー！！」

「いつもそんな方法で決めてたのかあああー！！」

やはり、能天気なのは変わらなかったようだ。

「でも、兼一さん、ボクサーと一戦まじえるのでしょうか？ならムエタイは有効かと……」  
「なに？」

すると其処に、家事をするために制服から着替えてきた美羽が現れた。

その美羽の言葉に、秋雨が反応する……。

「それは本当かね、兼一君？」

「え……ええ……それでパニックってます」

「短期間にボクシングと戦えるようにするには、ムエタイはいいかもしれないな」

「……」

秋雨のその言葉に、兼一が反応する。

「アパチャイさん、ムエタイなら勝てますか？」

兼一はそう言いながら、何時も通りの笑顔を浮かべる。裏ムエタイ界の死神”に問いかけた……。  
すると、“裏ムエタイ界の死神”アパチャイは、その笑顔を一層嬉しそうにしながら答えた。

「もちろんよ！ぶつ殺すならムエタイだよ……」

「ちゃんとて……手加減して下さいよ……！（一応信じてますけど……）」

「山より深く、海より高くするよ……」

アパチャイはそう力強く兼一の問いに答え、その兼一の手をがっしりと握った……が。

「アパチャイさん、手が……手が痛い……」

前途多難のムエタイ稽古がここに始まった……。

アパチャイの練習は、ムエタイ特有の肘や膝の型稽古から始まった。

その際、兼一はムエタイ発祥の歴史や、ルールなどの説明を受けたが。

そのムエタイのルールと、何故ヒジやヒザを重点的に使うのかを聞いた時に……。

「僕……この武術やだ」

などと当初からは考えられない反応を見せた。だが、その兼一の姿を見かねた長老がアドバイスを与えた。その内容は……。

『武術というのは、突き詰めてしまえば、どれもこれも、いかに相手を……。効率よく、破壊できるかというところに行き着くもんじやて。後は使う者の心次第じゃよ……。もし……。もし己の欲求のために行使すれば、“ただの暴力”となるじゃろう。しかし身を守るため、誰かを助けるために使うよう心がければ。その殺人技も“武術”に昇華するものなのじゃ……。』

さらに、長老はその後、兼一に武術で人を不幸にしたいのかと聞いた。だが兼一はその問いに、首を横に振り回す様にして否定の意

を伝えたのだった……。そして最後に長老は……。

『技が人を傷つけるのではない……人の“負の心”がそうさせるのじゃ』

そう締め括ったのであった。

その後、兼一のムエタイ修行も順調に進んで行き。今日はミット打ちの練習に入っていた……。が。この時、兼一はどこか油断をしていたのかも知れない……。

「よし、打ってくるよ」

アパチャイはその何時もの無垢な笑顔で、兼一に対してパンチングミットを構えた。

そして兼一も、自身の拳に8オンスのグローブをはめている。

「ほーら、ミット打ちは楽しいよ!!」

バスッバスッ!

「そうですね!」

そう言いながら二人はミット打ちを開始した……。

兼一のミット打ちは、お世辞にもあまり良い音は出しておらず、どうやら持ち手のアパチャイがミットを持つのが苦手な様で、鋭い音という快音は響いては来なかった……。

そして、暫くの時間が経った後、アパチャイがミット打ちの途中である言葉を口にした。

「はい、そこでよけるよ」

「え？」

アパチャイのその言葉に、兼一は言い知れぬ不安感を抱いたが……時は既に遅かったようだ。

「イヤバタバデウ~~~~ツ!!!!!!」

ドッ!!!!!!

その時、兼一の家族である妹の白浜ほのか“中一”は……。

「ほのかちゃんと打ち返さなきゃだめよ」

兼一の妹は、とある中学のテニス部所属の少女で。その容姿は、活発そうなショートヘアに、これまた活発そうな顔立ちをしている元気娘なのだが。この時は、テニスの練習中に突然動きが止まり、何処か遠くを見るような視線を空に送っていた。

「今、何だかお兄ちゃんの声が？」

そして、同じく兼一の家族で母の白浜さおりは……。

「あらやだ、突然兼一のお茶碗が……」

兼一の母さおりは、二児の母とは思えぬスタイルをしており。容姿も兼一の母といった、母性に溢れた優しそうな顔立ちをしている。だが、そんな母さおりが兼一のご飯茶碗を洗っていた時。その兼一と書かれた茶碗が、真つ二つに割れたのだった……。

「兼一……何かあったのかしら？」

そして、これまた兼一の家族の父、しらはまもとつぐ白浜元次は……。

ブチッ！

「！？」

「どうなさいましたか、部長？」

「……靴紐がな」

ここはとある会社、其処を部下の女性と二人で歩いていた兼一の父は。

その突然ちぎれた靴紐に、言い知れぬ危機感を募らせていた……。

兼一の父の容姿は言わずもがな、あの『デューク東〇』にそっくりなのだ。

（兼一に何かが？）

そして最後に、兼一の友人である鬼島亮平は……。

（か……紙が無い）

自宅トイレで、ひっそりとピンチに陥るのであった……。

アパチャイにミットで叩き飛ばされた兼一は、その体を地面へと力無く落下させていた。

「キヤー！！兼一さん！！」

そこに美羽が駆け込んでいった。

「兼一さん、兼一さん確り！！」

「……」

しかし、兼一からは返事が返ってこない……。

「お~~~~」

「おーじゃねえ、あほ！！てめえ弟子を殺す気か！？」

兼一をすつ飛ばした犯人は、その事を近くで見っていた逆鬼に拳骨を貰っていた。

「なんね？ついにやったかね？」

「やれやれ」

「アパチャイ手加減したよ！海よりも高く！山よりも深くよ！」

「……」

そこに、他の達人級達の集まってきた……すると。

「秋雨さん！！け…兼一さんが……」

そこに、美羽が何やら兼一の首筋を抑えながら、冷や汗を流した状態で秋雨に何かを伝えようとしていた……。

「ハハハ、何を大げさな……この程度でくたばるような鍛え方は……」

秋雨も、その倒れている兼一の首筋に手を当てて脈を計ろうとする……。

「……!?!」

「……………」

「1・2・3!!1・2・3!!（心臓マッサージ）」

どつちやら兼一の脈が動いていなかったらしく……。

「……………」

「ほら!なんとも無かつたら?」

「いや〜!〜!」

一命は取り留めたものの、兼一は人生で始めて臨死体験を経験するのであった。

そして、その次の日の梁山泊では……。



「へ、そんな事が……やばくない？それって？」  
「はい……ですので兼一さんは現在、頭に強い衝撃を受けた事による一種の記憶障害に陥っていますの」

その日は亮平も秋雨の筋トレ改め矯正をするために、ここ梁山泊へと訪れていた。

「でも兼一のやつ、向こうで普通にアパチャイさんと練習してたぞ」  
「？」

「え！？それでしたら早く仰ってくださいですの！！」  
「はあ？」

美羽はその亮平の言葉を聞いた後、大急ぎで兼一がいる庭の方へと向かって行った……。  
そして、そこに一人取り残されてしまった亮平は。

「……俺も見に行こうかな」

そう言って、亮平も庭へと向かって行くのであった……。

庭へと到着した亮平の目には、ある意味予想外の光景が広がっていた。

「はい、トイ！！（パンチの事）」  
「シッ！シッ！！」

パンツパンツ！！

その光景は、亮平が美羽から聞かされていた物とは全く違った。普通にパンチングミットでミット打ちを行う二人の姿があった……。

「なんだ、普通にやってんじゃん……」

「あ、鬼島さん！！見てくださいですよ！アパチャイさんが遂に手加減出来るようになりましたの！！」

すると其処に、何やら本当に嬉しそうな顔で美羽が近づいてきた。

「そうよ！近づいたら、首を取ってカウ・ロイ（飛びヒザ蹴り）よ！！」

ガンッ！

「お、兼一が格闘家のように見える……」

「兼一さんはまだまだ未熟ですが、れっきとした武術家ですよ？」

「まあね、あいつも強くなっただんな……」

「今度は亮ちゃんが、手加減を上手く出来るようになる番じゃよ？」

美羽と一緒に兼一の練習を見ていた亮平の下に、この梁山泊の長老。

風林寺隼人が近づいて、そのような事を亮平に向けて言った……。

「俺がですか？」

「ほっほっほ、そうじゃよ……以前、格下の相手に喧嘩で亮ちゃんは相手の金的を狙ったそうじゃな？」

「あ、あれですか……あれは、俺も大人気なかったと思ってますよ……」

二人の会話は、以前亮平が古賀の金的を潰そうとした時の話である。

「あの時は兼一が、やられそうになってるの見ちゃいましたから……。多分、そのせいで自制が効かなかったんでしょね」

「それが分かつとれば今後は大丈夫じゃろう……だがの」  
「？」

長老はそこで言葉を一旦区切った……。亮平は訝しげな表情ながらも、その次の長老の言葉を待った。すると、長老が口を開いた。

「これは、我々武術家にも言える事なのじゃがの……」  
「……………」

「過ぎた力を、誰彼構わず振るい続ければ……いずれ自身をも滅ぼす負の力となつて。その力を振るい続けた者へと、必ず降りかかるものなのじゃよ……その降りかかる力が、その者に恨みを持った他者なのか？それとも、その者よりも強い力を持った別の誰かか？」

「……………」  
「それは、終わってみなければ分からのだがの……。亮ちゃんは、その自身の力を誰彼構わず振るいわせんであるう？」  
「……………まあ、そうですね」

亮平はその長老の言葉に、何か思う所があつたのか……。あまり確りとした返事を返せないでいた。

「自分に何か思うところがあるのなら、自分でそれを治すしか無いんじゃよ」

「そうですね……努力します」

「ほっほっほ、若い内は悩んでおくものじゃよ？亮ちゃん」

長老はその言葉を亮平に残して、この場から離れていった……。すると其処に、兼一とミット打ちをやっているアパチャイの声が届いた。

「そこで避けるよ……！」

パンツ！

「あだ！」

その方向へと目を向けた亮平は、話して聞いていたよりも、確りと手加減が出来ているアパチャイの姿があった……。

「手加減か……！」

亮平はそう呟きながら、自身の右手を開く。

「一応は、心がけてるつもりなんだけど……！」

亮平はその開いた右手を見ながら、ゆっくりと手を閉じていき。その右手で、“掌鬼”と呼ばれる亮平が珍しく“拳”を作り上げたのだった……。

第十五話 色々詰め込んでしまった……。 (後書き)

前書きでも書きましたが、ごめんなさい。

三人衆終わらず、次で終わらす予定になってしまいました……。

で、その次が……。

あの募集したにも関わらず、結局ゲレゲレが直ぐにネタバレしてしまつた日本拳法との闘いです。

すみません、本当にすみません。

まあ、前回の『ラーナー』での闘いの様にはならないのでご安心を。ゲレゲレは刃牙が好きなので、格闘技を習っているアドバンテージを生かして頑張つて書きたいと思えます!!

ではノシ

第十六話 友達（前書き）

今回、正直なつとくしていませんが……。早く亮平の闘いが書きたかったので更新！！すみませんとは言わないぜ？

後、文字数が1万3000ぐらいあります。

## 第十六話 友達

兼一がアパチャイと、ボクサー対策の稽古をしていたとある日の事……。

兼一は亮平・美羽と共に、珍しく食堂で昼食を取っていた。

「兼一、取り合えずそのボクサーと喧嘩をするなら……あの技は一番最初に出しとけよ?」

「え、何で?」

「あゝ、なるほど」

すると突然、亮平が兼一に対して。

その手にカツ丼を持ちながら、その言葉を発した……。だが、その言葉の意味をよく理解出来ていない兼一は亮平に聞き返す。美羽の方は何かに気づいたみたいであった……。

「喧嘩っていうのはな、最初に相手をビビらせた方が勝つんだ」

「うん、それで?」

「ボクサーってのは、その技の“痛み”ってのを知らないんだろ? だったら、一番最初っからその技を出して、相手に恐怖心を与えれば終わりだよ」

「そうなの?美羽さん?」

兼一には、亮平の説明では分かり辛かったようだ。

隣りに座っていた美羽の方に聞くことにしたようだ……。

「一概にはそうとは言いませんが、まあ兼一さん達のレベルなら大抵そうですね。相手の一つの攻撃に、もし闘いの場で囚われてしまったのならば……。確かに、後はどう片付けるかですね」

「片付けるって……美羽さん怖いよ?」

「まあ、私が言いたい事は。……一つの攻撃ばかりに注意を向け始めてしまうと、他の攻撃が見えなくなってしまうと言う事ですわ」「はあ……そうなの、亮平君?」

兼一は再度、亮平に問い返した。

「俺は経験無いしな、分からないが……取り合えずやってみ、多分上手く行くから」

「何か心配だけど……うん、分かった。もし絡まれたのなら使ってみるよ!」

「ああ、それと後……」

「ん?まだ何かあるの?」

亮平の言葉はそこで終わりかと思いきや、亮平は再度兼一に言葉を投げかけた。

「相手のパンチは、今お前が考えてるのよりも速いと考えた方が良いぞ」

「そうですね、そうすれば相手の攻撃に驚いてしまう事も少なくなりますしね」

亮平のその言葉に、兼一の隣りに座っていた美羽も賛同し始める。

「うん、分かったよ二人とも!!」

「おう、取り合えず絡まれたら頑張れよ?」

「絡まれて、どうしても避けられなかったらね……」

兼一がそう呟いた所で、この会話は終わりを告げた……。



亮平と美羽が、兼一に今回の闘いについてアドバイスをしている頃。亮平達の教室である1-Eでは、ある二人の男子生徒による儂い青春会話がなされていた……。

「お、お前が美羽さんを映画に誘う約束だろ!？」

「そ、そんな事言っただってしょうがないじゃないか!？」

この二人は以前、技の三人衆がこの教室へと訪れた時に脅されていた男子生徒である。

そして、二人の名前は島山と田中……別に紹介する必要も無いだろう。

「知るか!!早く何とかしろよ!その映画そろそろ終わるぞ!？」

「そ、そうだ!まず、“フヌケン”から友人にするのはどうだろうか!？」

すると、その二人の中の坊主の方が、その様な提案をし……。

「な、なるほど!“将を射んとすれば……何とかを(馬から)”ってやつだ!！」

もう一人の、短髪を金に染めた男子生徒もその提案に乗った……。

「いいか、俺らはたった今から白浜の友人だ!！」

「そうとも!大親友さ!！」

そう言っつて、二人は熱い握手を交わす……が。そこに一人の大男が割って入って来た。

「“大親友” ちょっと面かせや（こいつらで良いのか？……ちょっと違う気もするが、まあ武田の提案だしっか）」

其処に割って入って来たのは、技の三人衆の一人。

宇喜田孝造その人であった……。そして、その島山と田中の二人は宇喜田によつて何処かへと連れ去られて行つた……。

亮平達がクラスに戻つたのと、小野先生が教える国語の授業が始まつたのは、ほぼ同時の事であつた。

「国語の時間だよ。亮平くん、早く席に座って」

「え、何で俺だけなんすか？」

「なんとなくかな？」

「……若干理不尽ですよ、それ？」

「ええ！！なんでよ！！」

そんな感じで、小野先生の国語の授業が始まつた……。

（小野先生って、何で俺だけ扱いが変なんだろうか？）

小野先生の授業が始まり、小野先生が授業の導入部分を説明している最中に亮平は、先程の自身に対する小野先生の対応が可笑しす

ぎる事について考えていた……。

「あ、出席取るの忘れてたよ」 青山く〜ん」

（ハッ！まさか先生……俺に気が有るんじゃない………無いか、うん、無いな）

亮平が、そんな生産性の無い無駄な事を考えていた時。兼一は、机の中から授業中に読むための小説“怒りの武道”を取り出していた……。

（こんな時じゃないと読めないしな〜……ん？何だろう、この紙？）

兼一が机の中から小説を取り出したのと同時に、その小説と一緒にある一切れの紙が折りたたまれていた。……兼一は、ゆっくりとその紙を開いた。

（な!?!）

その紙に書かれた文字に、兼一は困惑の表情を露にした……。そして、その様子を見たものは誰もいなかった。

「先生！ちよつとトイレに行つて来ます!!!」

「え〜、別に良いけど〜？」

「失礼します!!!」

兼一はそのまま、その紙を持っていきながら教室から誰にも感ずかれぬ様にして出て行く。だが、今度はその様子を見逃さぬ者達があった……。

（どうしたのでしょうか兼一さん?……何だか何時もと纏っている

空気が違っていましたわ)

(あの目は……何かあったのか、兼一?)

その者達は兼一の数少ない友人である、鬼島亮平と風林寺美羽の二人であった……。

亮平は、何やら只ならぬ雰囲気我突然出て行った兼一について美羽から意見を聞くべく。一枚のルーズリーフから少しだけ紙を切り取り、そこに何かを書き残して前の席に座る美羽へと送った。

(風林寺さん、これ……)

(はい!?何でしょうか……まあ!これが授業中に友達と話すために送る“送り手紙”というものですのね!!)

亮平に肩を突付かれ、一瞬ビクつとした美羽は。その紙切れを後ろからこっそりと手渡されると何やら目を煌びやかに光らせながら恍惚の表情を漏らし始めた……。

(いや、なんでか分かんないけど取り合えず読め!)

(ハッ!すみませんです……今まで友達などが少なかったものですので、このような事は初めてでしたの)

(……取り合えず、読んで)

美羽は喜々としながら、亮平から手渡された紙切れを開いた。

(兼一さんの目が、ですか……)

そう言いながら、美羽もその紙切れに何かを書き足し始め……。そして美羽も、その紙切れを後ろの席に座る亮平へと後ろ手で送った。

(ん？猫？……まあいいや)

美羽から送られてきた手紙には、なにやら猫のようなイラストが悪書きされていたのだが、亮平はそれを無視し、書き足されている文章を読む……。

(これは……手を出さなくて事でいいのか？)

再度、亮平は紙切れに確認の言葉を書き足して美羽に送った。

(来ましたわ……キャーッ！？私の猫が落ち武者みたいに……これもなかなか良いですね。……ハッ！違いましたわ、それよりも……そうですね、よっぽどの事が無い限り私達が手を出す訳には行きません)

美羽も再度、亮平へと返事を返す……。

(ん？新しい猫が……まあいいや。だが手を出さなか……ま、兼一も結構練習してみただし大丈夫だろ……多分)

亮平はそう考えながらも、そろそろ手紙を終える事を伝えるため、最後の手紙を美羽へと渡した。

「(猫のお腹にファスナーが……) 鬼島さん、後で“お話し”致しましょうか？」

「ん？……別に良いけど」

こんなやり取りが続く教室とは裏腹に、兼一が何やら嘘まで付いて向かった場所では……。

ここは学校の屋上……。

其処に、技の三人衆のうち二人。

突きの武田と、投げの宇喜田の姿があった……。

だが、その二人の他に、何やら怯えきっている二人の男子生徒の姿が見られた。

もちろん、それは島山と田中の二人なのだが……。それよりも、この場では技の二人の雰囲気は少々可笑しな事になっていた。

「武田……本当にこんな手に引つかかると思ってるのか？」

「友人を人質に取られてちゃー来るよりあるまい？完璧な作戦だ！  
！」

現在、武田と宇喜田は今回の作戦について最後の確認をしてはいたのだが。宇喜田はその武田が考え付いた今回の作戦について不満を漏らしていた……。

「いや、普通ビビって逃げ出すぜ！？それか鬼島の奴を連れてくるかもしれねえ！！」

「ははは、まさかーっ」

（なんだコイツ……？前から思っていたんだが……俺とは根本的に何かが違う！！こねーだる普通）

「まだかな」

宇喜田は武田に不満の言葉を言い放つも、当の武田はまったく意に介さずといった形で宇喜田の言葉を軽く聞き流した……いや。聞き流したと言うよりも、本気でそう答えたようにも見えた。

「あのく、お取り込み中すみませんが……」

「ぼ、僕ら白浜の友人じゃないんです!!」

「な?なんだとお……」

その突然、自分等が人質にされた理由を否定し始めた二人に。二人を態々教室から連れ出してきた投げの宇喜田が激昂し始め。……人質になっている二人のうち、島山の方の胸倉を掴み上げた。

「大親友とか言ってたじゃねえか!!」

「どつちかって言うと……アイツを虐めてた方で、むしろ恨まれてると思います!!」

その島山の言葉を聞いた瞬間、宇喜田は。

そのまま掴んでいる胸倉を捻り上げ、自身も島山に背を向ける姿勢に入り始めた……。この事によって島山は宇喜田の大きな背中に背負い上げられた……。

「ひっ!」

「ドリヤッ!!」

宇喜田の気合と共に、島山は宇喜田によって、そのコンクリートで固められた地面へと叩きつけられた……柔道の十八番、背負い投げだ。

島山を地面に叩きつけた宇喜田はそのまま田中の方へと歩み寄り、胸倉を先程の島山のように掴み上げた。

「つまり、てめーらをさらっても……」

「奴は絶対に来ませんよー！！むしろ今、喜んでるんだよーッ！！」

「無駄骨かーッ！！」

宇喜田はそのまま、田中を思いっきり振り投げ捨てた……。

しかし、投げ捨てられた田中は、そのまま地面に落下はしたものの、後頭部だけは武田の足によって守られた。

「やたらと投げるなよ。死んだらどうする？」

「うるせえ！いい加減、アンタのやり方にはうんざりだ！！」

田中の後頭部を偶然守った武田は、その宇喜田へと苦言を呈すが、当の宇喜田は完全に頭に血が昇ってしまい、武田の言葉を全く聞かないと言った状態になってしまった……。

「俺はむしゃくしゃしたら、誰でもぶん投げる！！それが出来るから不良やってんじゃねーか！！」

「ま、それは僕も同じだが……」

「やめろ！！！！」

すると、この場に新たな人物の声が響いた……。

その人物は、屋上入り口の扉から今入って来たばかりで。どうやらここまで急いできたのか、その息を乱している……。

「ハア…ハア……僕のクラスメートを返せ！！」

その人物は、数々の武術の達人達から武術の教えを請うている梁山泊の門下生。



白浜兼一、その人であった……。

「ほら僕の言った通り、友人を助けに来ただろ？」

「アホかコイツ？」

だが、兼一の登場にも全く動じない技の二人……。

そして、この兼一の登場を待っていた突きの武田が口を開いた。

「人間は基本的に正しい道を生きたいもんさ……でもね、白浜君。そういう奴は大抵、いつも馬鹿を見るのさ……！」

(目つきが変わった!?)

兼一は、武田の纏っている雰囲気急に変わった事を感じ取っていた……。

「へへっ、やっと会えたな白浜……！」

「島山起きろ！逃げるぞ……！」

また、前回の件で兼一に図らずも恥を搔かされた宇喜田が、不気味な笑みを浮かべながら兼一へと近づいてきた……。その際、気を失っている島山を担ぎながら、田中はこの場から逃げるように立ち去っていった。だが、技の二人には、その逃走する二人など眼中などには入っていない。

「ここまでこけにされちゃあ、ただご招待って訳にはいかね〜よなあ？」

宇喜田はそう言いながら、兼一の胸倉を掴み取った……。

「やめて下さい！僕らが争う理由は無いはず……！」

「一ヶ月近く無駄にされてんだ！！こっちはあんだよ！！」

宇喜田は叫びながらも、兼一の体の下から担ぎ上げ、柔道の肩車の型を完成させる……。

「うわぁ！？」

「らあッ！！……ッ！？」

だが、宇喜田が投げの体制に入ろうかした時、その一瞬に兼一は、宇喜田の体を両足で挟み込み、肩に担がれた状態から地面へと落とされぬように、投げの宇喜田にしがみ付いた。

「ほう……（宇喜田の肩車を防ぐか）」

「しやらくせえ！！」

しかし、投げの宇喜田もそこでは終われず。

兼一にしがみ付かれた状態のまま、地面へと兼一を下にしながらいびついた……が、それも兼一が咄嗟に離れた事によって未然に防がれてしまった。また、宇喜田はそのまま地面へと背中を打ち付けてしまう。

「グッ、クソが！！」

「！！」

宇喜田は直ぐに立ち上がり、兼一へと掴みかかる為に両腕を開きながら接近を試みる……。だが、それが命取りになるのである……。

「（相手が近づいてきたら、首を取ってカウ・ロイよ！！）【飛びヒザ蹴り】」

その時、兼一の脳裏にムエタイの先生であるアパチャイの声が響いた。

兼一は、その声に逆らう事無く、両手を広げ顔を露にしている宇喜田の首を取り……。

「シッ!」

ガゴッ!!

「ッ!?!」

そして、そのまま宇喜田の顔面に左の飛びヒザを叩き込むのであった。

「あっ!?!」

その飛びヒザを、自分から突っ込む形でもろに貰ってしまった宇喜田は。その威力に耐え切れず、掛けていたグラスンを砕かせながら地面へと沈んでいった……。

そこに、宇喜田の顔面にヒザをぶち込んだ張本人である兼一が駆け寄っていく。

「条件反射でつい、何てこった!?!だ、大丈夫ですか!?!すっかりしてください!?!」

だが、兼一の呼びかけには宇喜田は答えない……いや、答えれなかった。

「やれやれ、仲間をやられた以上、ただ帰すって訳には行かなくな

「つちやたね……」

仲間である宇喜田がやられた武田は、そう言いながら自身のポケットに右手を突っ込んだ……。

（ナイフか！？）

兼一は一瞬、以前のトラウマが再発しそうになったが。……武田が取り出したものは赤チョコクと、時間が来ると鐘を鳴らす特殊なタイマーであった。

そして武田はそのまま、この屋上に何やら線を引き始めた……。

「……………」

「よし、出来た」

武田が引いたのは、何やら青コーナー・赤コーナーと書かれた、疑似リングであった。

（な、なんなんだこの人？）

「1ラウンド3分で、一分間の休憩ということ……」

兼一の訝しげな表情などお構い無しに、武田はそう言いながら、この疑似リングを書いた赤いチョコクを空へと投げ捨てた……そして。

ビッー！

その空へと投げ捨てられたチョコクは、武田の鋭い右拳によって空中で砕かれた……。

（空中でチヨークを粉々に！！なんて鋭いジャブだ！？……けど、亮平君に言われたとおりだ。……確かに想像以上の速さだった）

「僕も元ボクサーだからね、ハンドとして右腕一本で御相手しよう！」

兼一が事前に言われた事によつて、少し気持ちが悪くなり始めたその時に。武田がさらなる提案をしだす……。

「さ、リングに上がりたまえ」

「……（人質まで取って呼び出したんだ、何を言っても喧嘩は避けられないか）」

武田はそのままリングの線の内側に入る……。

今更だが、兼一が此処へと来た理由はあの紙切れに二人の友人を預かったと書かれていたからなのだが。……本当に今更であるう。

「しかし、君が体を張って守ろうとした二人は逃げちゃったね。」

あつはつは、今の君の状況を一言で表現すると何て言うか……その……“バカ”？」

「……」

そんな中、武田が兼一に対して先程の島山達の事で。ここに助けに来た兼一の事を挑発し始めた。

だが兼一はその言葉に真つ向から向き合っていく。

「そうですね……でも、“バカ”の方が卑怯者よりましだ！！」

兼一はその真つ直ぐな瞳で、自身を挑発してきた武田へとその言葉を言い放った……。

「さて、どうかなあ？もうすぐその考えも変わると思っな」

だが武田は、兼一の言葉など意に反さず。

その顔に不敵な笑みを浮かべながら、そのタイマーの鐘を鳴らした……。

カーンッ！！

そのタイマーの音はまるでゴングの音の様に、この屋上へと響き渡った……。

武田はそれと同時に、右腕一本のみでファイティングポーズを取った……左腕はポケットに仕舞われたままだ。

「君は蹴りでも投げでも好きにどうぞ！！10カウント・スリーノックダウン制で行こう！！」

（笑ってる！相当な自信だ！……だけど、始まったものはしょうがない！！ここはアパチャイさん直伝のムエタイと、亮平君のアドバイスを活かして！！）

軽くフットワークを刻む武田に向かって、兼一はガツチリと構えを取りながら接近する……。

そして、アパチャイ直伝の“あの技”の射程圏内に入ったその時……二人は同時に動いた。

武田はその鋭い右ジャブを……。

兼一は……。

「テッ・ラーン！（ローキック）」

ゴッ！！

「!?!?」

兼一が出したのは左のローキック……。だが、その技はボクシングには存在しない……。故に。

(グツ！バランスが!?)

故に武田は、その経験した事も無い衝撃に足を取られ、その右ジヤブを放てずにいた……。

そして、兼一のローキックは正確に、武田の右腿を捉えている。

……その事によって武田はさらにバランスを崩す事になる。

「(今!) やあ!」

「おっと!」

バランスを崩したかに思われた武田に、兼一は蹴った足を戻した反動を使いながら、右のヒジを武田の顔面に叩き込もうとしたが、それは武田に首を避けられただけで、かわされてしまった……。が。

「シッ!」

ドゴッ!!

「がッ!?!」

兼一はヒジを交わされても尚、再度左のローを武田の右腿に振り落とした。

(ヒジはフェイントか!?!味な真似を!?!しかし……)

その兼一のローによって動きを止めた武田に対して。兼一は武田の頭を抑えながら、今度は反しの右膝を繰り出した。……だがそれは、武田の右腕一本でブロックされてしまう。

「くッ！（こいつ、ただの優男かと思っただが……）こいつー！」  
グビッー！

そして武田は、兼一の押さえを振りほどいたのと同時に、右のジャブを兼一の顔に二発叩き込んだ。

（だが、足腰の強靭さは尋常じゃないー！）

しかし、その武田のジャブでは兼一は倒れなかった……。そして再度、兼一は武田の右腿に左の脛を振り落とした。

「ぐッ！ー！？」

それによって、武田は足を外から内に弾かれてしまい、バランスを崩し、地面へとその体を倒してしまう。

（効いた！？アパチャイさんのラツ・テーン（ローキック）が効きましたよー！）

「くそ！やるなー！」

だが武田もそれだけでは終われず、すぐに立ち上がり体勢を整えてしまう……が。

やはり、その右足は言う事を聞かないのか、膝を小刻みに震わせ



ている。

「おおー!!」

ゴッ!!

「ッ!!!?」

兼一が立ち上がった武田に対して、今度は先程フェイントとはいえ避けられた右ヒジを打ち込もうとする……。しかし、武田は何故かその右ヒジでは無く、兼一の左足を見ていたせいで、もろに兼一のヒジを喰らってしまう。

(ん!?これは、亮平君や美羽さんが言っていた通りだ!この人、完全に僕のラッ・テーンを警戒してる!!……それに、教わった通り、急に動きも無くなって来た!!)

兼一の右ヒジを貰った武田は、そのダメージによって動きを完全に止めてしまった。

その隙を逃さんと、兼一が武田の首を取り。先程宇喜田にやった飛び膝ではなく……。

「ティー・カウ・コーン!!(回し膝蹴り)」

武田の首を取った両腕で、武田を下に引き寄せながらの横から打つ膝蹴りを繰り出した……。

ガゴッ!!

そして、その膝蹴りは武田の右の米神を確りと打ち抜いた……。

兼一に顔面を膝で打ち抜かれた武田は、後ろで結んでいた髪留めが、その衝撃で千切れてしまい。その纏められていた長い白髪が解かれてしまう。

(これで!!)

兼一はそれで勝利を確信したのか、ヨロヨロと立ち尽くし始めた武田を見据える……。

「……君は……どうして、友人でもないあの二人を助けに来たんだい?」

すると、その武田が覚束ない足取りのまま天を仰ぎながら兼一に先程の事を問い始めた。

「正直僕はね……君みたいなお人よしには、その友情に対する幻想に気付かせてやらないと気がすまないんだよ……」

「……」  
「大体、君が守ろうとした二人はとつくに逃げたぞ?……今、君がやっている事は、まったくの無駄骨じゃないか?」

カーンッ!!

その時、この場に先程のタイマーが3分経った事を知らせるために、その鐘を鳴らした……。

「おっと……時間みたいだね……」

「一分で良いんですよね?」

「……そうだよ」

二人はそのまま、各々のコーナーに下がって行った。

そして、一分間のインターバルを取っている最中に兼一はある事を考えていた。

(この人、本当に右腕一本で闘ってる……案外律儀な人なのかな？  
……いや、ここまでやられて使わないのは可笑的い!!)

兼一はその武田の行動の不審さに、疑問を覚えた……。  
そして、兼一は持ち前の性格である事を聞く事にした。

「あおう、一つ質問していいですか？」

「……なんだい？」

「なんでボクシングを辞めたんですか？」

「!?!?……君、聞きにくい事を平気で聞くね?……気を付けないと友達に嫌われるよ」

「ッ!!……すみません、もう聞きません」

その兼一の言葉は真つ直ぐに武田の心を貫いたが、完全に悪い意味であった……。

だが、この話はここで終わりかと思われた時。……徐に武田が口を開いた。

「まあ、友達など……いないに越した事は無いしね」

「……それは、違うと思います」

武田が自虐的に笑いながら言ったその言葉に、兼一は静かに反論する。

「僕は……僕がここまで強くなれたのは、アナタが言うその友達の

お陰だからです」

「……………」

「僕の友達の一人は、僕の夢を聞いてもバカにせず、その夢をむしろ応援してくれた……。もう一人の友達は、僕に強くなる方法と目標を示してくれた」

「だけどいずれ、その二人にも裏切られて“バカ”を見るのは君だよ？」

兼一の言葉に、武田は何か思う事があったのか。

その自虐的な笑みを深めながら、兼一に反論をしだした……。

「僕だってね、昔は一緒に夢を追いかける戦友みたいな奴がいたさ……。だけどね。そいつがある日、地元の族に絡まれてね、助けを求めてきたのさ……」

「（ゴク）……………」

「正直、助けに行くかどうか迷ったよ……。僕も翌日には大切な試合が控えていたからね。問題を起こす訳にはいかなかったんだよ……」

「だけどアナタは行ったんでしょ？その友達を助けに……」

カーンッ！！

兼一がその言葉を発した時、インターバルが終わった事を、鐘付きタイマーが教えてくれた……。

「おっと……時間のようにだね」

武田はそう言いながら、もはや力の入っていない足を引き摺りながら兼一へと接近していった。

「待って下さい！！アナタはもう闘えない！！」

「そうかい？……僕はまだ闘えるさ！」

その言葉を吐き捨てて、武田は兼一に右のジャブを放った……が、  
ぺし……

武田の体には、もはや力が籠っておらず。先程まで、あれほど鋭かったジャブが今や見る影も無くなっていた……。

「無理ですよ！大体、なんでまだ左腕を仕舞ったままなんですか！？」

その兼一の言葉に、武田は闘いの最中にも関わらず、その口に先程と同じ自虐的な笑みを浮かべる。

「助けに行ったのかどうか……君はそう聞いたね？その答えは、もちろん行ったださ。……けどね、そのせいで僕は翌日の試合に行けなくなった……これがその代償という訳さ」

武田はそう言って、今まで仕舞っていた左腕を右腕でポケットから“取り出した”……。

「ッ！その腕は！？」

「そうさ……使わなかったんじゃない、使えなかったのさ」

ポケットから取り出された武田の左腕は、まるで糸の切れた人形のようにブラブラと力無く揺れていた。

「僕のボクシング人生は、その友達を助けに行っただせいで終わりを告げただ……どうだい、“バカ”そのものじゃないか！……それ

にね、その後でそいつは順調にボクシングの道を進んでいったさ。けど、そいつと会う機会が一度だけあったんだ」

「……………」  
「そいつはロードワーク中でね、僕が声を掛けたら、気まずそうに僕の事を避けて行ったよ。……………どうだい!“バカ”な話しだろっ？」

そうやって、武田は再度。兼一へと右のジャブを放った。

しかし、先程と全く変わらない光景が広がるだけであつた……………。

「大体、君も“バカ”な男だよ！……………友人でも無い人間のために、こんな所まで来るのだから……………」

「確かに……………僕は“バカ”ですよ。けど……………僕は決して、あの二人の為に来たんじゃない。己自身のためだ……………僕のせいで不幸になつている人を見捨てるのが、友達に応援してもらつた夢を裏切る事  
が」

「……………」  
「僕は、僕は殴られるよりも嫌だつたからだ！……………それに、あの二人に感謝なんか求めていないし、自分が損しようが関係無い！！決して何も求めないし、後悔もしない！！」

「……………それじゃあ君は、これからもそうやって友達に良い様にされて行くんだよ？」  
「違う！！」

もはや攻撃する体力も尽きた武田の言葉に、兼一は力強く即答する……………。

「僕の友達は、二人ともそんな損得で僕の事なんか見ていない。見られても今の僕には何も与えられない！！なぜなら……………」

「……………」  
「何故なら、友情は取引じゃないからだ！！」

「!?!?」

兼一は、その言葉を武田に向かって力強く言い放ったのだが……  
武田はまた、その顔に自虐的な笑みを零し始めた。

「じゃあ、なんでその友達とやらは此処には来ないんだい?……君に、全てを押し付けてるからじゃ無いのかい?」

武田がその言葉を発した瞬間、屋上の扉が何者かによって開かれた……。

「本当に君が言うように、友達同士に取引が……」

「無いだろそんなもん」

「ええ、そうですわ」

「美羽さん!? 亮平君!？」

武田が続けて、何かを言をうとしたその時。

屋上の入り口付近から兼一達の下へ、亮平と美羽が武田の言葉を遮りながら歩み寄って来た。

「どうして此処が分かったの!？」

「俺が、お前の机に放置してあった紙を見たからだ!！」

「すみません兼一さん、私は止めたのですが……」

「はっはは……」

亮平はそれがどうしたと言わんばかりに答え、美羽は本当に申し訳無さそうに兼一に謝った。

そして、亮平は完全にふら付いている武田へとその視線を向けた。

「き、君は鬼島君……そうか、そう言えばあの時」

「ああ、俺が兼一の友達の“鬼島亮平”だ……どうだい、俺の友達  
は？強いだろ？」

「……ふ、確かに君が友達なら、白浜君は何も与えられないね」  
「そうでもないさ……」

その武田の言葉に、亮平は誰にも悟られないような声量で答える  
……。

そして、今度は兼一の方へと視線を向けた。

「兼一はな、さっきも言つてた様に……まあお人よしなんだよ」

「……まあそれぐらいは僕でも分かるさ」

亮平の視線の向こうには、美羽に心配されながらもほぼ無傷の状  
態の兼一の姿が映っていた。

「それにな、あいつ俺と初めて喋った時の言葉が“どうしてそんな  
に寂しそうな顔をしてるの？”だぜ？……普通聞くか？って事、あ  
の時アイツはビクビクしながら聞いてきたんだよ」

「それで……君は何て答えたんかい？」

「“それは友達が居ないからだ”って、マジだけどふざけて言つて  
みたら。アイツ本気にしちゃってな、それからかな……俺とあいつ  
が“友達”ってやつになつたのは」

その亮平の話しを、武田は意識が若干回復して来た頭で聞いている。  
る。

「だから、アンタも成つてみると良い……アイツと友達に。……ま

あ、アンタの方が先輩だが気にするな。アイツも気にしない」

「ははは、そうかい……」

「きつと変わるさ……きつとな」



亮平は、その言葉を自身に言い聞かせるように武田に投げかけた……。

その後、今まで気絶していた宇喜田も目を覚まし。自分等が負けた事を武田が話すと、意外にもあっさりと負けを認め、付き合いの長かった武田を驚かせた……。

また、授業中に立ち歩き、あまつさえ無断で出て行った亮平に対して。副担任であった小野先生から泣き落としを喰らうという出来事もあり（美羽は確りとトイレと伝えていた）。今回の出来事は終わりを告げた……。

その出来事も終わりを告げ、怪我をさせてしまった相手を兼一が秋雨に見せると言い出し。

仕方なく、亮平も宇喜田に肩を貸しながら着いて行く事にしたのだった……が。

秋雨が武田の怪我を診断した時に、独自の医療法で武田の動かなくなった左腕を一瞬であるが動かせる様にしたという。秋雨から言わせれば“常識的”な出来事が起こった。それによって、武田はこれから秋雨の所に通い続ければ、またボクシングが出来るようになる事も分かった。

実にめでたい事である……。

【Another Episode】

(おいおいおい、マジかよ!!?)

その場所は、とある河川敷の橋の下。

(何者なんだコイツは……)

そこに、無数の若者たちが地面に倒れ伏せている中心で一人の大男が佇んでいるのが確認出来た。

(およそ百人の兵隊を、3分と掛からず片付けちまいやがった……)

すると、その倒れている若者たちの中心で佇んでいた大男が。

この場にいる、もう一人の男の方へと視線を向けた……。

「ロキとか言ったな、これで全部か？」

「……ああ、全部だよ」

そのもう一人の男は、“ラグナレク”で幹部を務める第四拳豪のロキ。

「では、約束通り……貴様等の中で一番強い奴と闘わせてくれ」

闘いの傷跡の中心に佇む大男は、ロキに対してそう口を開いた……。

「その前に聞かせてくれ、お前はなぜ強い奴と戦いたいんだ？」

大男に言葉を投げかけられたロキは、明確な返答ではなく、質問と言う形で答えた。

そのロキの問いかけに、大男はその口を吊り上げ自傷気味に言葉を返す……。

「真の武とは何か？……表の試合では、その事を理解出来なかったのではな」

「つまり、裏ならその真の武が見つかるんでも？」

「ああ、そつだ……それ以外にあるまい」

大男の言葉は何処か寂しげな雰囲気を持っていた……。

しかし、対象的にロキが纏う空気がガラリと変わる……。

(こいつ、使えるかもしれないな……この強さならあるいは)

ロキは今後の事を考えると、その内からあふれ出す感情を制御出来ず。

その表情は、不気味な笑みを浮かべていた……。

第十六話 友達（後書き）

すみませんでした。

上手く締められないとです……。

では、次回は漸く亮平の闘いです!!  
ゲレゲレは楽しみにしています!!

ではノシ

第十七話 狂気(前書き)

今回は書いてて楽しかった。

## 第十七話 狂気

「武田がやられただと？」

「はい……」

ここは、キサラがアジトとしていつも使っている廃ビル。

そこに前回、技の三人衆である内二人が兼一にやられたとの報告があった……。

「やれやれ……白浜という坊や、まさかここまで出来るとは」

「グワツハツハ！兵隊を増やそうとして、どんどん潰されてりや世話ねーな……」

キサラが何時も通り、体を預けているソファーに肩肘を付きながら悩んでいると。そこに、前回亮平にやられた辻新之助の姿があった……。

「うるさいよ辻、あんた“鬼島”に鼓膜やられてんだから大人しく自分の隊に戻んな！」

辻の右耳には現在、キサラが言ったように医療用の耳当てが着けられている。

これは以前の亮平との喧嘩で、鼓膜を軽く破ってしまったからだ……。

「白浜兼一、それ程の男を野放しにして置いて、他のチームにでも入られては厄介です！」

「それもそうだな……」

キサラはそう言いながら、今まで体を預けていたソファから跳ね起き、帽子を被り直した後で言葉を続けた……。

「予定を変更して、その坊やを潰す事にしよう！」

「まちな、キサラ」

「やだー！」

その決定を下したキサラに、辻は待ったを掛けるも。キサラは聞く耳を持つとはしない。

だが、ここから辻のしつこさの真骨頂でもある。

「待てよー！」

「……何か文句あんの？」

「いや、その餓鬼……俺にやらせる！」

「いや、それも待つて貰おうか！」

辻がその言葉を放った直後、このキサラ達が居る部屋に何者かが突然入って来た……。

その突然の来訪者は、“ラグナレク” 第四拳豪のロキ……そして、その取り巻きの20号であった。

「第四拳豪!?」

「……なんだいロキ? 今日には別に用事も無いだろう?」

その突然の来訪者に、この部屋にいた者はキサラ以外。全員が困惑していた……。

だが、そんな中でもロキはそのゴーグルのせいで隠れている目を見せず……その口下のみで笑みを作って見せた。

「まあそう言うなヴァルキリー……今日はお前等だけじゃない、う



ちら“ラグナレク”全員に対しての命令だ  
「全員召集かい?……穏やかじゃないね」

キサラはロキの言葉に訝しげな表情を見せた……。  
元々、この『ラグナレク』はそこまで全員が集まる事は少ないチ  
ームだ。

ましてや……幹部である“八拳豪”自体が集まる事が少ないのだ。  
……それが何故か、もう少しで“八拳豪”入りを果たすキサラだけ  
ではなく、末端の小隊長である辻新之助にまで召集を掛けると。今  
回ロキはそう言い放ったのだ。

「それもそうだろう、何せあの“鬼島亮平”を潰すんだからな」  
「なッ!?!」

そのロキの口から発せられた幼馴染の名前に、思わずキサラは驚  
愕の声を漏らしてしまった……。

だが、そのロキの言葉に反応したのは辻も同じ事であった。

「集団で潰すってか?気にいらねえな……脱会リンチでもあるめえ  
し」

「集団じゃねえよ、いい駒が最近入ったんだ……そいつを今回、鬼  
島の奴にぶつける!!」

「駒?……言つとくが、“鬼島”にタイムン一対一で勝てる奴なんざ居ると  
は思えないね」

キサラの疑問に、ロキはその笑みを更に深めた……。

「まあその辺は大丈夫だ……一応“保険”は掛けて置くからな」

「(“保険”ね……差し詰め、そのための全員召集か)……分かつ  
た、その時になったら連絡をしてくれ」

「俺は行かねえ！予定通り、白浜って男をやりに行くからな」  
「……………勝手にしろ」

キサラはそのロキの命令に従うと合意の姿勢を見せたが、血の気の多い辻はロキの言う事を聞こうとはしなかった……………。だが、ロキもその事は分かっていたのか、面倒臭そうに返事をするだけであった。

そして、その時は直ぐに来た……………。

現在は学校も終わり、辺りもオレンジ色に染まってきた下校時間。そんな時間に亮平は、とある道端である人物と鉢合わせしていた……………。待ち伏せをされていたと言うのが適当であろう……………。

「……………で、俺に何の用だい？“キサラ”？」  
“鬼島”、お前に見てもらいたいものがある……………」

その人物とは、幼馴染のキサラで。  
キサラの後ろには、薄気味悪い笑みを漏らすキサラの兵隊達が周りを固めていた……………。  
すると、キサラが亮平に対して、自身の携帯ディスプレイを向けた……………そこには。

「……………これは本気でやっているのか“キサラ”？」

「ああ……………本気だよ」

「まさか関係の無い、鷹島先輩まで巻き込むとね……………」

亮平がキサラの携帯を通して見た物は……。  
紐で手首を後ろに縛られ、口に喋らないようにタオルを巻かれた  
鷹島千尋の姿であった。

「分かったら着いてきな……。そこでお前には“ある人物”と喧嘩を  
してもらおう」

「ある人物？……それと喧嘩をしたら、鷹島先輩を返してくれるん  
だな？」

「ああ……約束する」

キサラはそう言って、亮平に背を向けた……。

それと同時に、キサラの兵隊達も亮平を歩かせようと後ろから煽  
つて来る。亮平はその手厚い案内に、笑顔を浮かべながら快く従い、  
目的の場所へと大人しく案内されるのであった……。

キサラに案内された場所は、とある廃工場で。その周辺には“ラ

グナレク”のメンバー達が、これから喧嘩が始まる場所を囲うようにして佇んでいた……。その数は亮平では数えるのが面倒臭いと言ったぐらいの人数が集まっていて……。そして、その人間サークルの中心には、ある大男が仁王立ちしていた……。

「俺の喧嘩相手ってな……。あんたで良いのか？」

「そつだ、その前に貴様の名を聞こうか……。」

亮平の前に佇む大男は、亮平よりも背の高い、裕に190は越えているのではないかという大きさで。

体格は亮平とは違って細長く、その手足は亮平よりも長いリーチを誇っている……。

「名前ね、案外律儀なんだな……。俺は鬼島亮平、お前は？」

「私は東翔太だ」

東翔太と名乗った男の格好は、下は道着に裸足で……。上は何も着ていない裸の状態だ。

そして、顔は彫が深く厳格そうな顔立ちをしている。髪の毛はスポーツ刈りの金髪で、その格好とのギャップが際立っている……。

その東の姿を見据えた亮平の視線の更に向こう側に、亮平が良く知る人物と……。それを守るようにして囲んでいる者達が、各々好きないようにして寛いでいた。

亮平が良く知る人物とは鷹島千尋の事で。写真と同じような格好で縛られて座らされている。

そしてその近くには、亮平は知らないが第四拳豪のロキと、取り巻きの20号が此方を馬鹿にする様な笑みを向けている……。

他には、亮平の事を少しだけ知っている久賀館要こと第三拳豪のフレイヤと、その直属の部隊である『ワルキューレ』部隊の少女達……その近くには何やら歌を歌い続けているバカ。……隣りに着物を着た力士みたいな巨漢男。……反対側に黒いフードで身を隠した怪しい男。……そして、その隣りにドラム缶の上で寛いでいる幼馴染のキサラ。

この者達はキサラ以外、金属で作られたローマ字の数字を裝飾した黒の手袋を嵌めている……。

陣形は、人質である鷹島を覆うように左右に開いていて、その中心には何やら豪華な椅子が用意されていた……。

その様子を確認した亮平は、視線を東へと戻した……。

「東ね……悪いが、俺の大事な人が取られてるんだ。……早目に終わらせてもらおう」

亮平はそう言いながら、自身が今まで着ていた制服のシャツを脱ぎ捨てた。

「うわ……すっげえ」

「何なのよ……あの体は」

「あれが鬼島亮平……」

亮平がシャツを脱ぎ捨てた瞬間、その露になった亮平の上半身に。周りで見っていた者達は小さな驚きの声を漏らした……。

「ほっ……」

亮平の前に立っていた東も、その声を漏らさずにはいらなかった……。

亮平の体は、以前よりも少し引き絞った、筋肉のラインやカットがハツキリと形作っていて。その上半身の形は確りとした逆三角形だ……言葉で例えるのならダイヤモンドのような雰囲気すら漂わせている。この体を見た者は、誰しもが見取られてしまい、その誰しもが驚きの声を漏らすか、言葉を失うかをしていた……。

「どうだい……結構なもんだろ？」

そんな中、とうの亮平は周りのざわめきなど気にも留めず。不敵な笑みを浮かべたまま東へと言葉を掛けた……。

「確かに素晴らしい体だが、闘いになれば関係は無い」

「そうだな、その通りだよ……ノツポ野郎」

しかし、東も特に気にした様子は無く。

その視線を亮平の目に向けた……。

「これから私と闘ってもらうのだが……貴様の流派は？」

「そんなもんねえよ……ただの喧嘩屋だ」

「ふっ、そうか……ならば、そのただの喧嘩屋に武道と言うものを教えてやるうー!!」

東はそう言いながら構えを取った……。

東の構えは左肩を前にした半身の構えで、自身の両手の拳面を亮平に向けながら軽く構えている。

対する亮平は、これが俺の構えだと言わんばかりのノーガードだ……。

そして、亮平はその構えを取っている東に対して。まるで……これから散歩にでも出掛ける様な足取りで近づいて行った……が、その時、東が動いた。

無防備で近づいてきた亮平に対し、東は自身の右拳で突きを放った……。

東の突きは、奥足である右足の爪先で地面を蹴り、その地面を蹴りこんだ力を上手く流れさせ、腰を回し、背中で肩を突き出し、突き出された力を使いながら、その拳を亮平の顔面に向かって真っ直ぐに突き刺す。

ガゴツ！！

東の右拳は、正確に亮平の顔面を捉えた……。だが顔を殴られた亮平は微動だにせず、その拳が引かれるまで動きを見せなかった。

そして、東の拳がゆっくりと引かれた時、亮平の鼻から少し多めの出血が見られた……。

「……鼻血か、随分と久しぶりだな」  
(コイツ、私の“直突き”を受けても微動だにしないだと……)

久しぶりの出血に、亮平が鼻を弄くり出すも。当の東はそれどころでは無かった……。

そして、その様子を見ていた“八拳豪”のロキとフレイヤは……。

「あの真っ直ぐな軌道を描く突き……珍しいな、日本拳法か」

「ああそうだフレイヤ、奴……東翔太は日本拳法の選手だった」

「だった？」

フレイヤが東の流派を言い当てるも、ロキのその過去形の言葉に訝しげな表情を見せる。

「俺も最近調べたんだが、東はあの成りでまだ18歳らしい……だがそこが驚く所じゃない。奴はその若さで、日本拳法の主要な大会を全て総なめにした異端児なのさ！」

「……それで、その異端児がどうして“鬼島”に勝てると言っただけ？」

少々興奮しだしたロキに対して、フレイヤは特に気にする事も無く言葉を投げかける。

「奴の戦績はそれだけじゃない……東は出た大会全ての試合で、相手の顔の防具を“破壊”している」

「ほう……それは凄いな」

「だが更にもう一つある……それは」

「それは？」

東についてのロキの説明に少し興味が沸いたのか、フレイヤはロキに続きを促した……。

「出た試合で三十秒以上掛かった試合は無かった事だ!!」

「……ふ、それではお手並み拝見と行こうか」

フレイヤはそう言いながら、亮平と東の闘いに視線を向けた……。



亮平が鼻から出血をし始めた現在……。  
その亮平の鼻から血を流させた本人は困惑していた。

(私の直突きを喰らって、鼻血だけだと!?)

「あゝ、こりや後で体拭かなきゃな……」

困惑する東とは対象的に、亮平はどこか余裕を持った表情をしていた……。

「で?……今のパンチはなんだ?急に拳がでかくなったと思ったら、いつの間にかに顔を殴られてた……こんなの初めてもらったわ」  
「……ふん、私の“直突き”を受けてその余裕。これは本気で掛からなければ不味いな……」

東はそう言いながら、再び先程の構えを取った……。

「“直突き”って言うのか、さっきの……じゃあ、次は俺の番だなあッ!」

「!」

亮平は、自身の目の前で構えを取り直した東に突っ込んで行く。  
そのスピードは、亮平の体格からでは考えられぬスピードで……その証拠に対峙している東も舌を巻いていた。……そして、亮平が東へと肉薄をし、その右手で東を掴み取るうとした瞬間。

「消えた!?!?」

パパンッ!!

「ッ！！」

東へと攻撃を加えようと、自身の右手を伸ばした亮平に対して。東は亮平から見て右に横移動させる事によって、亮平の視野に死角を作り出し、無防備となった亮平の右米神に二発の“直突き”を放った。

「糞がッ！！」

ゴッ！！

「ぶッ！？」

そして、横に移動した東に亮平が振り返った瞬間に。再度、東の“直突き”が顔面に突き刺さった。

東はその隙に亮平から距離を取り、一旦この流れを自ら切った……。

亮平はその距離を取った東の事を睨みつけている……。

(やはりな……こいつ、想像以上に首が強い！……これは、技を切り替えた方が良いな)

(野朗ちよこまかしゃがって……。それに、あのパンチ……正面からだと見づらいな)

一旦硬直し始めた闘いに、周囲の人間は息を呑んだ……。その様子を見ていたフレイヤも、視線に込める力を強める。

「日本拳法の最大の武器“直突き”、更にその基本的な動きである“円の動き”か……」

「どうだ、なかなか厄介じゃないか？」

「そうだな、“直突き”とは目標への距離と到達時間が早い事からも、その有用性がどれだけ優れている物なのかが良く分かる。……また、その“円の動き”が加われれば、移動した後でも最短での攻撃が可能となる」

「そうだ、だが日本拳法の技はそれだけじゃ無いんだぜ？」

フレイヤとロキの会話はさて置き、再度場面を戻す……。

亮平は、現在の状況を整理していた……。

（正面から突っ込めばあのパンチが、横に逃げられてもあのパンチが……これは面倒臭いな）

そう考えながらも、亮平は目の前で先程と変わらぬ構えを取っている東へと視線を向ける。

視線を向けられた東は、その構えを一旦解き。腕をブラブラと揺らしながらゆっくりとリラックスして行く。そしてまた構えを取り出した……。

（正直、この相手に対してこの選択は怖いのだが……打撃が通り辛いのだ、やるしかあるまい）

その考えと共に、東が身に纏っていた空気がガラリと変わった……。

亮平はその空気を敏感に感じ取ったものの、武術については全くの素人である亮平が気づける筈も無く……。亮平は東を捕まえるために再度、接近しながら右手を突き出した……が。

ガシッ！！

「ッ!？」

亮平が右腕を東に対して突き出した瞬間、東はその亮平の腕を体を捻りながら左脇に押さえ込み。その亮平の腕を伸ばそうと自身の胸と右腕でてこの原理を作り出した。

所謂、立ち間接での“脇固め”の形に入った……。

(決まった!!！)

その東の脇固めによって、亮平の右腕からは血管が浮き出始め、ギチギチと何かが絞られるような音も出始めた……。

「~~~~ッ!!!？」

「痛かるうッ!!！素人である貴様が味わった事の無い痛みだからな!!！」

亮平は東の脇固めから逃れられず、その顔に苦悶の表情を浮かび上がらせた……。

その様子を見ていたフレイヤとロキは……。

「あゝありゃ完全に決まってるな、こりゃ鬼島の悲鳴が聞けるかな？」

「随分と悪趣味だな……まあ、あれだけ決まってしまったつら、折られる他には逃れられまい」

「いや……あれじゃ、危ないのはノツポの方だよ」

その時、フレイヤとロキの会話に。今まで黙って観戦していた、キサラがその口を開いた……その際、捕まっている鷹島が『むう』と唸っている声も聞こえて来た。

「どう言う事だ、ヴァルキリー？」  
「どうもこうも無いよ……あの“鬼島”に近づいた時点で、あのノツポの方が危ないって言っただけさ」  
「なんだと……『あゝあゝあゝあああ！！！！？』何！？」  
「ほらな……」

突然の野太い悲鳴に、今までキサラに注目していたロキとフレイヤがその音源に振り向いた……。

そこには、何をしたのか……いつの間にかに東の脇固めから脱出した亮平の姿と。

何故か地面に左腿を押さえながら転げまわる東の姿があった……。その東の左腿の道着から、東の血と思われる赤が広がって行くのが確認出来た……。

「な、何が起きたんだ！？」  
「鬼島の左手に握られているのは何だ？」

あまりの出来事に困惑しだしたロキとは対照的に、フレイヤは亮平の左手に握られている何かを発見した……。

そして亮平は、その左手に握っていた“物”を投げ捨てた……。  
「ひッ！！？」  
「いやッ！」  
「なんだよこれ……」

亮平が、その握っていた“物”を投げ捨てた場所にいた者達は、その“物”を視認した瞬間に恐怖を覚えた……。  
亮平が握っていた“物”、それは東の血が染み付いた白い道着の

布切れと……それと一緒に、東から“ 筆り取った”、一片の腿肉であつた……。

「鬼島の奴、肉を筆り取るなんて！！どれだけイカれてるんだよ！？」

その光景を確認したロキ達も戦慄を覚えていたが……。だがその場で、幼馴染であるキサラだけが冷静であつた。

「“ 鬼島” がイカれてるんじゃない……あのノツポが“ 鬼島” を怒らせちまつたんだ」

キサラはそう言いながら、亮平の方へと視線を向けた……。

亮平は現在、ただただ目の前に転がる東を見下ろしているだけであつた。

すると亮平が、まるでその雰囲気壊さぬかのように……静かに口を開き始めた。

「どうしたノツポ？……まさか、“ 抓られた” ぐらいでもう終わるかい？」

「クソツ！……貴様ツ！……恥を知らないのだな！！？」

東は痛みの所為で、その彫の深い顔で苦悶の表情を浮かび上げながら。ゆつくりとした動作で立ち上がった……その肉を筆られた左足は、引き摺った状態なのだが。

「恥も何も、俺は素人だ……第一、喧嘩の練習を毎日しているような奴等に言われたくないね」

「クソツ！……貴様、もう加減はせん！！」

東はそう叫びながら、亮平へとその“直突きを”放った……。

ゴゴツガゴツ！！！！！

「ツ！！？」

東の“直突き”は、先程とは違って左右での連打を加えてきた。亮平の顔や体は、その猛攻に晒されてしまう……。

プシュツ！！

「切ったツ！！？」

その何者かが叫んだ“切った”という言葉は、東の“直突き”によつて亮平の右目の目尻がパツクリと切り裂かれた事を指していた……。そして尚も、東の猛攻は続く……。

「ガツ！！」

「ふんツ！！」

ガゴツ！！

亮平が、東の猛攻を省みず右手を伸ばした所に……東の左“直突き”が顔面にカウンターで直撃した。

「ぶふツ！！？」

その東のカウンターを貰った亮平は、この闘いで初めて首を後ろに弾けさせた……。

(勝機!!)

その隙を東は見逃さず、亮平の体に自身が持てる全ての回転力を使って連打を叩き込んだ……。

(あまり調子に……)

東の連打を浴びてしまった亮平は……その体をゆっくりと前のめりにして、東へと自身の体を預けようとする。

「近づくなッ!!!」

ガゴッ!!

自身へと体を預けようとする亮平に東は……その亮平の顔面に右“直突き”を叩き込んだ。

(調子にのんじゃ……)

しかし、亮平は尚も倒れず、再度東へと左手を伸ばした……が。

「シャッ!!!」

ガシャッ!!

手を伸ばした亮平の顔面に、東は返しの左“直突き”を突き刺す……。

その今までは違う音と、亮平の首が再度弾けた事から誰もが東の勝利を確信していた。



(勝った〜ッ!!!)

東は勝利を確信し、その厳格そうな顔を不気味に歪めた笑顔を作り出した……しかし。

ガシッ!!!

「え？」

バキッ!!!

その乾いた木の枝が折れた様な音と共に、東の顔は苦痛に歪められる……。

「あがあああッ!!!!!!!?」

「調子に乗んじゃねえよ……」

「亮平の勝ちだよ……」

その乾いた音の正体は、今まで崩れ落ちそうであった亮平が……いつの間にかに左手で掴み取っていた、東の右鎖骨が握り潰された音であった……。

この光景を確認したキサラは、誰にも聞こえないような声で亮平の勝ちを宣言した後……。その帽子を深く被り、これから起こる光景を目に入れないようにしながら俯いた……。

「ガッ……クソッ……鎖骨がッ!!!?」

鎖骨を亮平に握り潰された東は、未だに離そうとしない亮平の手を反対側の動く左手で必死に引き剥がそうとしていた……そこには

既に、“直突き”で引き剥がそうという思考は出てこなかった。

亮平はそんな東の事を見据えながら、掴んでいる腕とは逆の右腕を後ろに振りかぶった……。

そして、今まで“掌鬼”と呼ばれていた男が……。

此処に来て初めて、その振りかぶっている右手で“拳”を形作つた……。

その事に気付いたのか、東は亮平の振りかぶられている“右拳”を見据えた。

(なんだ、こいつ“拳”を……)

東のその思考と共に、亮平の振りかぶられていた“右拳”が東に向かって迫ってきた……。

その一瞬を、何故か東はスローモーションに感じていた……。

(来る!……)

(“拳”ッ……)

(俺の顔面に?)

この瞬間、東は無意識下の思考で様々な言葉を発していた……。

その間にも、亮平の狂気とも言える“拳”が迫ってくる……。

(避ける……)

(無理!掴まれてる……)

(じゃあ捌く……)

(だめだ!)

(体を反らせない……)

(ブロック…)  
(これならッ！)

東は一瞬で、動く左の腕を顔に近づけ、亮平の“拳”をブロックするために片腕でガードを固めた。

亮平の“右拳”が東の固めたガードへと近づいてくる……。

(来る！……)

(大丈夫……)

(受けれる)

(受けたらは…)

そして、亮平の狂気の“拳”が東のガードに接触した瞬間……。

(んげ……)

東の左前腕がへし折れ……。

(き……)

そのへし折った腕ごと巻き込みながら……。

グシャッ！……！！！！！！

亮平は東の顔面を……その何かを“砕いた”音と共に、殴り飛ばしたのだった……。



第十七話 狂気（後書き）

どうですか皆さん？

ゲレゲレがいか板垣さんに影響さ……ゲフンッゲフン……！

という訳で、次回でこの話は終わりです。

その後は日常編を少し挟もうと思います。

ではノシ

第十八話　で、結局……“動”の気ってなんですか？（前書き）

今回、最近自重しない文字数を抑えるために若干中途半端かな？

第十八話　で、結局……“動”の気ってなんですか？

その光景は、この場に居た者達の時を奪うには十分な物であった……。

ここはとある廃工場の跡地……。

その周辺を多くの若者達が、二人の男を囲むように大きなサークルを作っていた……。

だが二人の男のうち一人は、もう一人の男に“折れた鎖骨”を掴まれながら力無く頂垂れていた。

そして、力無く頂垂れている男を……。もう一人の男がまるでゴミ袋を捨てるかのように無造作に放り投げた……。

「……これで、良いんだろ？」

すると、力無く頂垂れていた男を放り投げた男……鬼島亮平が。投げた方向に転がっている……。先ほどまで喧嘩をしていた相手、東翔太を見下ろしながら口を開いた。

……。

だが、その亮平の問いかけに答える者は、この場には存在しなかった。

問いかけを無視された亮平は再度、自身が“壊した”相手の状況を確認した……。

東の左太腿の中心部分には、何かに食いちぎられた様な痕が痛々

しく刻まれており。上半身の右鎖骨は、亮平に握り潰された事によって、その肌に皺を作りながら歪な痕跡を残していた。また、亮平に殴られた左前腕は、中心からくの字に折れ曲がっており、誰が見ても異常な状態で……。その腕と“共に”殴られた東の顎は、口をだらしなく開きながら赤い液体を垂れ流している事から“砕かれた”事が確認できる……。

亮平は俯きながら一度目を瞑り、暫の沈黙を作り上げた後。その口をゆっくりと開いた……。

「……あんたらが言った条件は果たしたんだ、先輩を返してもらおう」  
そう言いながら、亮平はゆっくりとした足取りで。今まで捉えられていた鷹島千尋の下へと向って行く……。

鷹島の下へと辿り着くまでに、今まで亮平達を囲んでいた“ラグナレク”のメンバー達は。亮平が自身の前を通り過ぎるのを呆然とした目で見送り、なかには小さな悲鳴を漏らす者まで居た……。

だが、物事には例外というものが付き物だ……。

「少し待って貰おうか……“鬼島”」  
“キサラ”……」

まるで時が止まった空間を一人、散歩するかのよう歩いていた亮平の前に。

幼馴染である南條キサラが立ち塞がった……。  
だが亮平は面倒臭そうな仕草で、キサラを一見すると、そのままキサラを無視して素通りしようとする……。



「まッ!.....」

「今は“抑えきれない”.....それでもやるか?」

自身を無視しようとした亮平を、キサラは振り向きながら止めようとするが.....。その亮平から流れ出る射抜かれる様な空気に、キサラは動きだけではなく、言葉すらも止めてしまった.....。

キサラが立ち止まった事を確認すると、亮平はそのまま縛られている鷹島の下へと向って行った.....。

「ご迷惑を掛けてしまい、すみませんでした.....鷹島先輩」

「ん.....プハッ!」

鷹島の下へと到着した亮平は。鷹島の口に巻かれていたタオルを解きながら、今回の事について謝罪をした.....。

「今、体の方も解きますね.....」

「.....うん、ありがとう」

亮平は鷹島の体に巻かれていた紐を解き始めるも.....。当の鷹島は何やら元気が無いと言うよりも、心ここにあらずといった感じで、亮平の問いかけに答える。

「無理かもしれないですけど.....今回の事は、忘れてくださった方が俺も都合が良いです」

「.....ごめん、多分、それは無理よ」

「そっすか.....なら無理強いはしませんよ」

鷹島の精神状態が混乱している事を.....亮平はもちろん気付いていた。

何故なら、鷹島は普通の女子高生であり、決して亮平達のいる喧

嘩の世界とは無縁の人間であるからだ……。だが、鷹島は今回、亮平のせいで……。とまでは言わぬものの、この喧嘩の世界に巻き込まれ……。あまつさえ、知人が人を“壊した”光景を直に目の当たりにしてしまったからだ。

「取りあえず、此処から離れましょう……」

「そうね……。そうするわ」

そう言いながら、亮平は鷹島の肩を支えながらゆっくりと立ち上がった……。その際、亮平が鷹島の肩に触れた瞬間、一瞬鷹島がビクッ！と震えたのを亮平は確認した……。

そして、ここから立ち去ろうとした時。

亮平の目に再度、自身が“壊した”東の姿が映った……。

「先輩、一人で歩けますよね？」

「……ええ、まあね」

「じゃあ、ちよっと待ってて下さい……」

亮平は鷹島から手を離し、力無く倒れ付している東の方へと歩み寄った……。

そして亮平は、地面に倒れ付している東を、その肩に担ぎ始める……。

「連れて行くの？」

「……何でも治せる人がいるので、その人に見てもらいます」

亮平は肩に東、後ろに鷹島を引き連れながら。この場から立ち去ろうとする……。

すると、亮平が向おうとした方向の若者達が、何やら後ろから誰

かが来たのか……。自身等で作っていた壁を、後ろから急に開き始め、亮平達の前に道を作り出した。

そして、その開かれて出来た道から、一人の白スーツを纏った眼鏡の男が、ゆっくりと此方へと歩み寄ってきた……。

「きみが鬼島で良いんだね？」

「……お前は？」

「僕は“ラグナレク第一拳豪”のオーディーン」

オーディーンと名乗った男の手には、ローマ数字で？と表記された黒の手袋が嵌められていた。

「一つて事は、お前が“頭”<sup>トウ</sup>って事で良いんだよな？」

「まあ、そうなるね」

亮平がオーディーンにそう尋ねると、オーディーンは爽やかな笑顔で亮平の問いに答えた。

すると、チームのトップが登場した事から。周りの兵隊や、今まで固まっていたロキまでもが我を取り戻し始めた……。

「オーディーン！？今までどこに行っていたんだ！！」

「ロキか……お前の策では鬼島は、既に潰している筈ではなかったのか？」

「くッ！……言われなくとも、今から潰すところだよ！！兵隊ども、鬼島が弱ってる今が……」

「やめておけロキ、折角の兵隊が少なくなるだけだぞ？」

「なッ！？」

我を取り戻したロキが、今回の目的を果たそうとしたその時。…

…チームのトップであるオーディーンがその号令に割って入った。

「それに、他の拳豪達も集団は好まないようだが？」

そのオーディーンの指摘に、ロキは他の拳豪達を見回す……。

ロキの視線には、黒のフードを被った男や。先程まで歌い続けていたバカ、力士の様な男に、黒い肌とクールな瞳が特徴的なフレイヤ。……各々で、興味がなさそうに事の成り行きを見つめていた。どうやら、キサラ以外にも例外は存在していた様であった……。

「くツ!!」

「分かったら兵を引け……それと鬼島」  
「なんだ？」

苦虫を潰したロキに命令を下したオーディーンは、そのまま視線を亮平へと戻し。先程と同じ爽やかな笑顔を顔に貼り付けながら、東を抱えたままの亮平へと口を開いた……。

「一度、深呼吸をした方が良い……その雰囲気じゃ、警察に止められるよ？」

「……ああ、そうだな」

亮平は、そのオーディーンの突然のアドバイスを素直に聞き入れ。そのアドバイス通りに、ゆっくりと深く深呼吸を始めた……。

「落ち着いたかい？」

「ふ〜……ありがとな、お陰でスッキリしたわ」

「それは良かった……」

「じゃあ、俺は約束通り帰らせてもらおう……」

「ああ、気をつけて……」

亮平のその言葉に、オーディーンは特に気にした様子も無く。そのまま帰りだそうとする亮平を引き止める事もせず、亮平の事を快く見送るのだった……が、その事に不満を吐く者がいた。

「どういう事だ、オーディーン！あの鬼島を潰せるチャンスだったんだぞー！」

「勘違いをするなロキ、彼は弱ってなどいない……むしろ、これからエンジンが掛かる所なんだろう」

「なッ！？」

そのチームのトップが発した言葉に、今まで勇んでいたロキは困惑な態度を示す……。

だが、オーディーンは困惑しだしたロキなどには目もくれず、先程の亮平の事を考えていた。

（彼のタイプはやはり“動”か……フっ、リミッターを完全に外さないであの“気当たり”。鬼島亮平、中々面白い男じゃないか……）

オーディーンは、その思考と共に……。亮平が東を担ぎながら、鷹島と去っていった方向に視線を送るのであった。

あの廃工場から離れた亮平達は、とある道端で立ち止まっていた……。

「先輩はどこか怪我とか無いですか？」

「私は無いわ……それよりも、その人とアナタの方が深刻じゃない

「？」

鷹島のその言葉は、東はご覧の通りだが……亮平の事も含まれており。

亮平の顔は、鼻からは出血した血が固まり始め、右の目じりには東の“直突き”によって切り裂かれた傷が生々しく刻まれていた……。

「確かにそうっすね……へへ」

「アナタはどうか知らないけど、その人は本当に危ないんだからさっさと行きなさい！！」

鷹島は突然声を荒げ始め、亮平へと東を直ぐに連れて行くように促し始めた……。

亮平はそれもそうだと今更気付き、鷹島へと口を開く。

「そうですね……じゃあ俺、もう行きますわ」

「ええ、気を付けてね……」

亮平は鷹島と別れの挨拶を交わした後、すぐさまとある所へと全速力で向って行った……。

そして、その場に一人取り残された鷹島は思考に耽る。

（流石に……あんなの見せられたら……私だって、何も言葉が出ないわよ）

鷹島は先程までの、亮平と東の闘いを振り返っていたが……自分にとっては、あまりにもショッキングな映像だった事から。亮平の帰っていた方向を見据えながら……今後、あの後輩と、どう接していくのかを決めかねていた……。

亮平が向った場所……それはもちろん梁山泊の岬越寺接骨院だ。そこで亮平が秋雨に、今回自身が“壊して”しまった東を見せた所。……岬越寺脅威の医療法によって東は特に問題も無く、一命を取り留めた。

その事で、亮平が秋雨に贅辞の声を浴びせた時……。

「別に普通だよ」と。

そんな感じで軽く流されてしまった……まさに非常識である。

そして、東の治療も終わり。

亮平が安堵しきっていた時に、秋雨が突然、亮平に口を開いた……。

「鬼島君は今回の事を、どう考えているのだい？」

「どうって……まあ……」

しかし、亮平は秋雨の問いに、言葉を濁す以外に答えようが無かった。

「まあ、急いで考える必要は無い。……実際、君はこうやって相手

の子を此処まで担いで来たのだからね。思う所は有るのだろう……」  
「……一応、まだぼんやりとですが。俺が自分を抑えられなかったのは覚えています」

亮平が言葉に迷っていると、秋雨が亮平の言葉を止める。そして、亮平は秋雨に言われた通り、確かに今回の事で思うところがあったので、それを秋雨に話す事にした……。

「何だかこう……枷が外れたって言うか、抑える気も起きなかったって言うか」

「うん、それは君が“動”の気に囚われたせいだね」

「“動”の気？……何ですかそれ？」

秋雨から突然出て来た意味不明な言葉に、亮平は訝しげな表情をする。

すると、秋雨が話しを続けた……。

「およそ、武術家には大きく分けて二つのタイプがある。それは常に心を静め、冷静さを武器に闘う“静”のタイプと、今回の鬼島君の様に、一時の感情に身を任せ、体に掛かっているリミッターを外して闘う“動”のタイプだ」

「俺がその“動”のタイプの人間って事ですか？……ですが、俺は格闘家じゃないですよ？」

「これは何も武術家だけに当てはまる物ではない……むしろ、闘いに身を投じている全ての人間に言える事なんだ」

「……じゃあ、俺はどうして、その“動”って言う気に囚われたんですか？」

「うむ、それはだね……」

秋雨は一旦そこで話を切ると、亮平の目を、その鋭い視線で見つ



め始めた……。

「……なんですか？」

「君は、どんな相手でも手加減をしよう意識していたね……」

「まあ、全然出来てないですが……けど、良く分かりましたね？」

「いや、別に普通だよ」

「……」

その秋雨の言葉に、亮平は素直に驚くも。秋雨の常識という物に、一々驚くのであった。

「だが、そうだとすれば。多分、君は中途半端に“動”の気を無意識で使っていた事になるね」

「中途半端？……その何処がいけないんですか？」

亮平は、益々訳が分からなく成って行く秋雨の話しに、困惑の表情を浮き彫りにさせる。

「“動”の気というのは、言わば己の限界を越えて闘つ危ういタイプだ。……それを、無意識に抑えようとすると、自ずと意識の隙間が生まれてしまう。そんな限界ストレスの中途半端を保ち続けるのは不可能だ……」

「じゃあ、どうすれば“動”って気を抑えられるんですか？」

「ふふ……それは私より、実際に“動”の気をコントロールしている人間に聞くのが一番良い」

「……うおッ!？」

秋雨はそう言いながら、亮平の後ろを指差した……。

そこには、“裏ムエタイ界の死神”アパチャイ・ホパチャイの姿があった。

「アパチャイ君、鬼島君に何かアドバイスをしてくれないか？」  
「いいよ！亮平！取りあえずリミッターを外すタイプは、何も考え  
ずに相手をぶっ殺してから考えるよ！！」  
「……………」

そのアパチャイの有り難い御言葉に、亮平と秋雨は何も言えず、  
黙ったままアパチャイの事を見つめるのであった……。

第十八話　で、結局……“動”の気ってなんですか？（後書き）

はい、取りあえずこんな感じで無理やり感が出てしまいましたが…。

まあ、別に……よくないか。

取りあえず、東は秋雨の“常識”によって一命を取り留めましたが、今後、登場させる予定は未定です……。

……………ディワツッ!!

## 第十九話

気付いたらPV28万、ユニーク2万5千。だけど何もすること無

最近、感想版のほうで熱くなっちゃってしまい。

誠に、皆様に不快な思いをさせてしまった事をこの場を借りてお詫  
び申し上げます。

そして、今回はサッカーを見ながら締めを書いてしまったので。  
後の方がどうなっているか……ゲレゲレも怖くて見られませんでし  
た。

## 第十九話

気付いたらPV28万、ユニーク2万5千。だけど何もすること無

亮平は東を秋雨に任せ、ついでに岬越寺接骨院から梁山泊に寄る事にした。

そこで、亮平は兼一が辻新之助に喧嘩で敗れてしまった事を知り……。

「あのロン毛……まだ不良やってたんだ」

「なんだ、お前知ってるのか？ 兼一のやつが“あつげなく”負けちゃった相手を？」

以前、亮平は辻新之助を“ビンタ”一発で一蹴した事がある……。その事を、外見は兼一が負けてしまった事で怒っているが。内面はとても兼一の事を心配している逆鬼が、亮平の言葉に反応した。

「前にやったんですよ、そこまで強い奴じゃ無かったんですけどね。ただ、バカなのと馬鹿なんです」

「だとすると、これから更に兼一を鍛えなきゃなんねえのか」

「そうっすね、ある程度名前の通っていた“不良”を伸した兼一が同じ“不良”に伸されたんですからね……友人としては、これ以上は倒れるんじゃないか？ つて練習量だと思っただんですけど。これより上があるなら、兼一には悪いですけど、やらせるべきですね」

現在、亮平達は居間で寝込んでいる兼一の前に居る。

亮平は逆鬼と話しながらも、兼一の魔されている寝顔を心配そうに見つめている。

「それよりも、お前の顔はどうしたん……だ？」

また、この部屋には長老・秋雨以外の人物が集まっている。その中で、今まで兼一の側で座っていた、しぐれが亮平の目尻の傷について触れてきた。

「ああ、これはさつき喧嘩で切られたんですよ。ちなみに、ここ切られたのは初めてっす」

「そう…か」

「だが、てめえは兼一みたいに負けなかった様だな」  
「分かるんですか？」

亮平は、その逆鬼の言葉に訝しげな表情で返した。  
すると、逆鬼は特に気にする様子も無く、亮平の問いに答えた。

「まあな、大抵はそいつの目を見れば分かる！」

「そんなもんですか……」

「そんなもんだ!!」

そんな会話をしていると、今まで台所で夕飯の準備をしていた美羽が、この居間へと入って来た。

「兼一さんの様子は、どうでしょうか？」

「そろそろ、目が覚めるこ…ろ」

「う…う…うん」

「兼一さん!!」

「あば!!」

「ほら…な」

美羽が兼一の容態をしぐれに尋ねていると、それと同時に兼一が苦しそうにしながら目を覚ました。

「……ここは!？」

「てめえ、不良なんかにはやらねやがって……地獄すら、まともだと  
思える特訓が必要だな」

兼一が目を覚ました瞬間に、兼一の空手の先生である逆鬼が。起  
きたばかりの兼一を脅かし?始めた。

すると、兼一が目覚めて安心していた美羽が、兼一を逆鬼から庇  
いながら口を開いた。

「何言ってるんですか!？兼一さんはよく闘いました!」

「だが敗れた……」

場が荒れそうになった瞬間、この部屋に何時も通りダンディな秋  
雨が入って来た。

「岬越寺さん、あいつは……」

「ああ、安心したまえ。彼ならこちらで確り与ろう」

「すみません」

「え、なんの事?(ですの)」「」

部屋に入って来た秋雨に、亮平は東の事を尋ねた。……すると、  
その事を知らない美羽と兼一が秋雨に疑問を投げかけた。

「いやなに、今日兼一君と同じで。鬼島君も違う場所で喧嘩をして  
いたそうだね……その際、相手の子に怪我を負わせてしまったんだ。  
まあ、怪我自体は“大した事は無かった”んだけどね」

「ま、こいつは兼一と違って勝って来たがな」

秋雨の言葉に、逆鬼が兼一の事を茶化す様に被せてきた。

しかし、亮平もこの事はあまり兼一には教えたくなかったのか……

…。亮平は急に、焦った様な口調で言葉を紡ぎ始めた。

「いや！兼一だって、ちゃんと闘えたんだろ！？馬さんから見せてもらったし！だからそんなに気にするなって！な！？」

「……馬先生から？」

「はッ！」

亮平の言葉に、兼一は訝しげな視線を馬剣星に向ける。

だが、それに過剰に反応してしまったのは剣星ではなく、美羽の方であった……。

「……美羽さん？」

「美羽はおいちゃんと一緒に、兼ちゃんの闘いぶりを見学していたね」

「……」

「それと、亮ちゃんにはもう見せたけど。この通り、ビデオもちやんと撮ったね」

「……」

兼一が更に、剣星の事をまるでゴミでも見るかのような視線で見つめるのだった……。

その後、兼一が、今後更なる特訓が必要になるだとか。兼一の敗因は勝ったと思って油断してしまったからだとか。敗れた兼一を、ここまで運んで来たのは、あの武田一基だったとか。

そんなこんなな会話を、亮平が帰るまで続けていた……。



## 【次の日の学校】

騒がしかった昨日は既に過去の話し……。

亮平は現在、自身の教室で姫野お手製の弁当を食っていた。

「いや、すまんね！前日もそうだったけど、今回もこんなに作ってももらっちゃって」

「別に構わないぞ、これくらいなら、昨日の余り物に少し付け足せば幾らでも出来るし」

そんな会話をしながら、亮平は更に姫野の弁当を貪り食う。

「しかし……意外だな、お前って言葉使いもそうだけど、料理が出来るなんて」

「鬼島、あんたが私の事どう思ってるのかが漸く分かったよ……」

「いや、褒めてるんだぞ？……それに、俺が知ってる女子で料理が出来るのって。お前と風林寺さんだけだぞ？」

「……どうして、そこで風林寺の名前が出るんだ？」

亮平から出た同クラスの女子の名前に、姫野から先程までの和気藹々としていた空気ではなく……これから戦争でもするかのような、相手に対して無慈悲なまでの恐怖を孕んだ空気が溢れ出てきて

いた。

だが、亮平はそんな事などお構いなく（内心は裸足で逃げ出したいくらい）姫野の問いに答えようとした……その時。

「鬼島君は居るかな？」

「……ん？鷹島先輩！？」

そこに昨日、亮平の喧嘩に運悪く巻き込まれてしまった鷹島千尋が。亮平達の教室である1-Eに尋ねてきた……。

「こんにちは鬼島君、昨日はお互い大変だったわね」

「……そうですね、怪我とかは無いですか？」

「ん〜、縛られた痕がまだ少し……それくらいかな」

「（縛られた！？……いや、落ち着け私。会話自体はそこまで……おかしい）」

亮平と鷹島の会話に着いて行けない姫野は取り合えず、この二人の会話を黙って傍聴する事にした。

ちなみに、現在の三人の位置は……。

亮平はいつもの自分の席、姫野は美羽の席、鷹島は亮平の前に立っている。

所謂、バミュー……三角形の位置配置だ。

「どの辺にですか？」

「手首、私も流石に暴れたからね」

「はは、でも手は出されて無いんですね？」

「その辺はキサラに感謝ね。あいつ、下っ端が私に手を出さない様に気を使って、態々女の人達を見張りに置いてくれたから」

「そうですね……まあ、何も無くて良かったですよ」

そう言って亮平は、本当に安心したかのような安堵の表情を見せる。

すると、鷹島が何かを思い出した様に口を開いた……。

「そういえば、あなたと闘った人は？」

「大丈夫でしたよ、とある常識が狂った人の御蔭で」

「狂ったって……まあ良いわ、取り合えず鬼島君も平気そうだし。

私はここらで戻るわね」

亮平の言葉を聞くと、鷹島は少し肩の荷が下りたような感覚を感じていた……。

それが何なのか、鷹島自身には分からないが。だが、自分のせいで東がああなったのではないか……一応は、そうやって自分で当たりを付けている。しかし、鷹島の懸念は其処ではなく。

実際は、亮平とまともに話が出るのかどうか……それが心配だった。だが、それも杞憂に終わったよう。鷹島はそのまま教室をスッキリした顔立ちで行った……。

「ま……話しが出来ただけ良かったか」

「何？今の会話は……」

鷹島が居なくなり、亮平も安心しきつた雰囲気醸し出すと。今まで黙って事の成り行きを見つめていた姫野が亮平に、今の事を問い始めた……。

「昨日、俺の喧嘩に鷹島先輩を巻き込んだじゃってね……。一応は勝ったけど、ちよつとな……」

「ふん、じゃあその目尻の絆創膏はその時の？」

「まね、見てくれた人は大した事無いって言ってたし、直ぐ治ると思う」

「そう……（あゝスッキリした！……だって聞きづらいしね、もしかしたら負け……無いか）」

亮平の返答に、姫野は齒の詰まり物が取れた時のような……そんな晴れやかな表情をしだす。

「どうやら相当、聞きづらかった様だ。」

そんな姫野を亮平は一見しながら、その姫野に向って静かに口を開いた……。

「気を使わせて、悪かったな……」

「え、どうした急に……」

急に変わった亮平の雰囲気、姫野は普通に戸惑い出す。

「いや、今まで俺に気を使ってこの怪我の事、聞かなかつたんだろ？ それに、さっきの鷹島先輩みたいに……俺と関わってたらお前も、もしかしたら厄介事に巻き込まれるかもしれない。……それでも、姫野は俺と今みたいに接してくれるのかなって。……そんな事も考えちゃってさ」

「なッ！？……べ、別に私は！」

始めて見る亮平の弱気な姿に、姫野は驚きの表情を漏らす。

「別に私は……アンタの事す……“友達”として！……好きだから／＼」

「そ、そうか……なら、嬉しいわ」

姫野は急に顔を赤くし、亮平の言葉に顔を俯かせながら答えた……。

その姿に、亮平も自身の顔が熱くなるのを感じていた。

すると其処に……。

「鬼島さん、兼一さんを御見かけしませんでしたか？」

兼一が一方通行で恋心を抱いている、風林寺美羽その人が現れた。

「いや、兼一なら多分……」

「多分……」

亮平はそう言いながら、自身が背を預けていた壁の窓を覗き見た……すると、其処には。

『逃げるか卑怯もの!!』

『これは戦略的撤退だ!!』

其処には、昼休みだと言うのに校庭を元気よく走り回る兼一と。それを追い掛け回す三人ぐらいの不良達が、亮平達の目に映った。

「早速、追いかけて来ますの」

「いや、そこは笑う所じゃないぞ?……まあ、負けて弱った奴を狙う程度の相手に、兼一が負ける筈は無いしな」

「……あんたら、本当にアイツの友達なの?」

兼一は、辻新之助に負けてしまった事によって。今まで兼一の事をよく思ってたなかった他の不良達に、その傷が癒えてない今を狙われていた……。

その光景を目の当たりにしても、亮平と美羽の態度は全く変わらない。

「ま、でも心配はそこじゃない……俺的には、今後の兼一の練習が

一層厳しくなる事についてだからな」

「そうですね……何だか今日の夜に家の方達が会議を開くかどうかで」

「……あの人達も、存外兼一思いなんだな」

「ふふ、そうですね」

「……？」

亮平と美羽の会話を、全くと言って良いほど理解出来ていない姫野は。その頭に？マークが浮かび上がるぐらいに首を傾げていた……。

## 【梁山泊】

そして、そんな平和な学校も終わり。

今は日も沈み、辺りが闇に包まれた時間……。

「では！梁山泊首脳会議を始める！！」

そんな時間帯に、梁山泊の居間では。移動式の黒板を背にしながらの、秋雨の景気の良い会議を始める号令が響き渡った。

「我等が弟子、このまま中途半端に終われば各門派の恥！！我々は少々兼一君を“甘やかし”過ぎていると思われる！！よって、予てより温めていた作戦を実行したいと思う！名づけて……」

秋雨の言葉を、梁山泊の豪傑達は各々好きな体勢で聞いている……。

そして、秋雨は一旦区切った言葉を発するために、纏っている空気を最大限に危険なものにしながら、弟子のために口ひら……。

「死んでもともと人生格闘化大作戦”！！」

弟子のために、口を開いた……。

その秋雨の言葉に、梁山泊の豪傑達は最高潮の盛り上がりを見せる。

アパチャイに至っては“ハラキリー”や“スキヤキー”などの訳の分からない言葉を発している。

「で？その作戦、具体的には何をするのじゃ？」

すると、梁山泊の長老である、風林寺隼人が秋雨に作戦内容を問始める。

秋雨は、その長老の問いかけに答えようと話しを続ける。

「まず梁山泊に住み込ませます！！そして生活の全てを武術で染め上げる！」

秋雨の纏う空気が重みを増していく……。

「武術でたまった疲れを武術で癒し、武術あつての自分という事を思い知らせ……」

ついでに、居間のふすま扉を挟んで、お盆でお茶を運んでいる美羽は、この話しを耳に入れた瞬間に恐怖で体を震わせている……。

「武術による武術のための生活！！ 彼は二者択一を選ぶ事でしょう…… 武術か死か！？」

「つまり、兼一君を梁山泊の“内弟子”にすると言う訳じゃ！？」

すると、長老が今までの秋雨の話しをザックリと纏めた……。

「はい、いよいよ本物の修行開始です！！」

秋雨も、その長老の言葉に同意をする……同時に、兼一が聞いたら卒倒ものの言葉も添えて。

だが、秋雨の話しはまだ終わりでは無い様だ……。

「それと、鬼島君についてですが……」

「あの坊主がどうしたんだ？」

その言葉に反応したのは、今まで不敵な笑みを浮かばせ続けた逆鬼。

「彼はどうやら“動”のタイプのようだね……」

「ああ、大体は想像が着いたがな」

「彼は、それを抑え切れてはいない様なんだ……それと」

「それと？」



秋雨は其処で言葉を一旦区切る……。そして、秋雨はゆっくりと言葉を発し始める……。

「初めて彼と出会った時、私は握手で彼の力量を測りました……」

「おお、そうじゃの……」

「その時、彼の“奥深く”に何か“獣”のような凶暴な意思を感じる事が出来ました」

「ふむ、秋雨君も気付いていたのじゃな……」

秋雨は、亮平が始めてこの梁山泊に訪れた時の事を説明し始めた。それについては長老も何かに気づいていた様だ……。

「長老もお気付きでしたか……」

「まあ、それについてじゃが……逆鬼君」

「なんだ、じじい」

長老の言葉に、逆鬼は本当に面倒臭そうな態度で答えた……。

「彼を、兼ちゃんの友人……亮ちゃんを“地下闘技場”に連れてってやってはくれんかの？」

「……なんでだよ？」

逆鬼は、先程の態度を少しだけ正した後、長老の問いかけに疑問を投げかけた。

「“動”の気が抑えられないのであれば、思いっきりやらせれば良い！それに、彼を自身と同じぐらいの相手と戦わせ、彼の内にある“本質”を見極めて欲しいのじゃよ」

「“本質”？」

「そうじゃ、まあ“獣”と言っても、所詮は人の意思じゃからな。一度、思いつきり戦わせてみれば、後は亮ちゃん自身で解決するじやろつし」

長老の言葉に、逆鬼は暫く目を閉じてから。  
その口をゆっくりと動かし始めた……。

「……いいぜ、取り合えず“出ちまったら”俺が対処すれば良いんだな？」

「そうじゃな、兼ちゃんの指導も大変じゃろつが……そちらも、逆鬼君に任せようと思つ」

長老はそう言って、逆鬼に亮平を“地下闘技場”へと連れて行くように頼み込み。逆鬼もその事については、持ち前の人の良さで引き受けた……。

兼一・亮平は、共に今回の梁山泊での会議の内容は知ることは出来ない……。

だが、二人はこれから起こる出来事を事前に知っていたら間違えなく……ウサイン・ボートもビックリな速度で、この梁山泊から裸足どころか身一つで逃げ出していたであろう。

第十九話

気付いたらPV28万、ユニーク2万5千。だけど何もすること無

再度、後書きでも。

今回の不祥事について謝罪いたします。

誠に申し訳ありませんでした……。

今回の最後の内容ですが……。

『餓狼伝』を読んでなさっている方なら……こいつ、まさかパクろ  
うと。

と、思ったかもしれませんが……まさか

パクる気は○○ですよ

ではノシ

## 第二十話 内弟子（前書き）

気付いたら、PV30万・ユニーク2万9千!!

感謝です。

そして、本当は昨日の夜に更新しようとしたのですが……。昨日は生憎の飲み会だったので、更新出来ませんでした!! あゝたま痛いです……。

後、亮平の体の最終的な目標は、刃牙の烈海王です。

## 第二十話 内弟子

ある日の体育の時間。

その日は男子は外でソフトボール、女子は屋外プールで水泳の授業……。

つまり、男女別れての体育の時間だ……。

「プハッ」

ここは女子が水泳を行っている屋外プールで、そんな中、一人の女子生徒が水を滴らせながらプールから身を上げた……。

女子生徒は、プールから上がり耳に入ってしまった水を、頭を軽く叩く事で外に出す。

その際、彼女の豊満実った男の夢……もとい、母性の塊は頭を叩いた事によって、悩ましいいくらの揺れを見せる……。また、彼女は水泳用のキャップも同時に頭から脱いだ事で、彼女の煌びやかな長い金髪が太陽に照らされる。そして、そんな男殺しとも呼べる体を持つ女子生徒は。そのまま、校庭で行われている男子のソフトボールを見学しようと、ここ屋外プールを仕切っている金網越しに視線を向けた……。

「あら？」

すると、その女子生徒が何かに気づいた様だ。

「兼一さんの打順ですわ」

女子生徒の視線……そこには、明らかに冴えない雰囲気醸し出

した。どう見ても、これから一発かますタイプではない少年が映っていた。

「風林寺さんって、白浜君の知り合い？」

「えっ、ええ……」

すると其処に……こちらも冴えない女子、園芸部部長の泉優香が近づいてきた。

「どういう仲？」

「え？あつ……お友達ですわ。あ！兼一さんが打ちましたわ！！」  
「本当だ！！」

先程から色々説明をして来たが、この女子生徒は風林寺美羽。

美羽は視線の先でバットを構えていた兼一が、野球部のピッチャーが投げたソフトボールを完璧に捉え、その球を学校の校庭と外を仕切っているネットの向こう側へと飛ばしていった光景を目の当たりにして、歓喜の声を漏らした……また、泉もその兼一の勇士に歓喜した。

「あ、今度は鬼島さんの打順ですわね」

「あの人……見るからに飛ばしそうだよね」

「ま、鬼島の場合はどこまで飛ばしてくるか？……それだと思っけどな」

美羽と泉が歓喜している中、亮平がゆっくりとバットを持ちながら右バッターボックスへと入っていく姿が確認出来た……。すると其処に、泉の親友……姫野真琴がソフトボールを見学している二人に近づいて来た。

「姫野さんは鬼島さんと、とても仲が良いのですよね？」

「まあ、とてもって言い方は少し違う……かな／＼」

「（珍しい……真琴ちゃんが照れてる）」

三人の会話が進む中、亮平はその体から溢れ出る威圧感を存分に相手ピッチャーへと向け。自身が握ったバットに意識を送る……。

そして、亮平の威圧に飲まれてしまった相手ピッチャーは。普段、野球の練習中や試合中でも犯さないようなミス……ランナーも居ない一塁へと牽制球を投げてしまった……。

「ピッチャービビってる！！HEY！HEY！HEY！」

「牧野ビビるな！！後ろは俺たちが守ってるから！！」

「お前が投げたボールなら、誰も文句ねーから！！」

そのミスを犯してしまったピッチャーに、周りから罵声が飛ばされ、味方からは青春真っ盛りな熱い声を送られてくる……。

この味方の声援に、男であるピッチャーは奮い立ち。

目線の先に居る“化け物”へと、その鋭い眼光を向ける……。

「どうしても良いけど早くしてくれ……これ体育の時間だぞ？」

「鬼島ああ！！！！！！」

覚悟を決めたピッチャーは、その不敵に佇む“化け物”のストライクゾーンと真ん中に……。

己が尤も信頼する……渾身のストレートをぶち込んだ……が。

漢になったピッチャー渾身のストレートは、“化け物”が己の筋線維を唸らせ……。

その血沸き肉踊る筋肉の力をバットに送り……。

己のスイングスピードに物を言わせ、観衆の目からバットを“消し去り”……。

漢のストレートを真心で捉え、ボールすら“消し去った”……。

そして観衆が事態を把握したのは、“化け物”がバットを振り抜いた格好でピッチャーの更に向こう側を見据え……。その視線の先にあった光景を目の当たりにした時であった……。

「う……うそだろ」

「ネットの柱があ……柱があッ!!」

「「柱が曲がってるうッ!?!」」

観衆達が目の当たりにした光景は……。

学校と外を仕切るために設置されていたネットを張るための大きな柱が、中心から“くの字”に曲がり……その中心には“化け物”がぶち込んだソフトボールが、今もなお回転し続け、接触している柱との間から煙を立ち上らせている。……そんな、常軌を逸した光景であった。

「二塁打……で、良いんだな？」

そして、“化け物”は<sup>ダイヤモンド</sup>塁を悠然と回り始めた……。

この光景を見ていた、美羽・姫野・泉の三人は……。

「鬼島さんも打ちましたわ!!」

「ま、アイツならあれくらいは当然だな!」

「（おかしい……おかしいよ!!）だって、まず何で柱曲がってる



の！？ 何でボールもバットも壊れないの！？ 前々から思ってたけど、うちの道具頑丈すぎでしょ！？」

三人は各々が亮平が起こした事象を捉えていた……多分に非常識である（一人を除いて）。

そして、授業も終わり。

三人は女子更衣室へと向って行った……。

「そう言えば、風林寺さんは放課後とか白浜君と会ってるの？」

女子更衣室では、水泳を終えた女子達が水着を脱ぎ捨て。体についた水分を取るために、タオルで体を拭いている光景が、そこかしこで見られた……。

そんな中、泉が再び美羽と兼一の仲について尋ね始めた。

「ええ、今度我が家に住み込み計画まで……！！」

すると、美羽はこれから兼一が梁山泊に住み込む事を泉に口走ってしまふ。

「……これは極秘事項でしたわ」

「あなた嘘とか付けない人でしょう？（この二人怪しいんだよな…

…そのうちつきとめてやるわ）」

「それよりも風林寺、体隠せよ……」

美羽が口走ってしまった事によって、泉は益々兼一と美羽の関係を疑い始めた……。

そこに美羽が着替える際、同姓同士とはいえ体を隠さず着替えている事について、姫野が注意を促し始めた。

「あ！申し訳ございませんの……つい」

「まあ本人が良いなら、別に良いけどさ（何食ったらこんなになるんだ？……鬼島も、大きい方が良いのかな……はッ！？何考ええるんだ私！！）」

ちなみに、亮平は尻フエ……閑話休題。

### 【そして計画実行の日】

「51!52!……」

現在、兼一は秋雨監修の下。

地面に埋め込まれた三本の杭の上に、両手・両足を置きながら腕立て伏せを行っている……。

すると、秋雨が自身の手に持っていた木製の短い鞭を、兼一の手に向けて降り始めた。

「53ッ!」

兼一は、杭から自身の腕を一瞬浮かす事によって、秋雨が振った鞭をやり過ごした。

「54!55!……」

そして、兼一の腕立て伏せはまだ終わらない……が。  
その近くでは……。

「兼一すごいよ、50も数えられて!しぐれくじゅうの次って何よ?」

「じゅう……いち」

その近くでは、兼一の練習を見学するアパチャイの姿と……。頭にアパチャイに対して突っ込みを入れるネズミに乗せた、香坂しぐれの姿もあった……。また、亮平もこの場で地蔵を振り回している……。

「香坂さんは、何してるんすか?」

すると、最近大きくなってきた“投げられ地蔵君グレート”を振り回していた亮平が。自身の愛刀を何やら綿棒みたいな物で軽く叩いている、しぐれに声を掛けた……。

「刀の手入……れ」

「その綿みたいなのってなんすか？……何か白い粉出てますけど？」

「打粉……だ」

「……（わかんね）」

亮平の問いに、しぐれは普段通りの口調で答えたのだが。亮平は、そこまでしぐれとは関わりが無いので、どうしたものかと考えていたのだが……ふと、ある事を疑問に思った。

「香坂さんって、兼一には何か武器の使い方とか教えないんですか？」

その疑問は、本当に素朴な疑問なのであったが……しぐれには、少し重要な事柄でもあった。

「兼一……は、武器とか持ちたがらな……い」

「まあ、それは分かるかな……香坂さんが兼一に指導してたのって、あの兼一がナイフを怖がった時だけですよね？」

「う……ん」

「ぐわーッ！！もうだめだー！！」

しぐれと他愛の無い会話をしていると、突然辺りに兼一が限界を知らせる声を轟かせた……。

だが、このような風景は日常茶飯事で、兼一が限界の声を発した所で秋雨は稽古を中断させる事は無い……。

「よし、今日はこのくらいにしよう。無理は良くないからね……」

「え？」

「ん？」

その秋雨の言葉に、亮平と兼一は自身の耳を疑った……。兼一には、あまりに衝撃的な事だったらしく、地面に打たれていた杭から体を落としてしまった……。

「ど…どうしたんです？いつもなら『途中で崩れたら町内タイヤ三週！』とか言うのに……」

「ハハハ、まさか！うちの道場はいつだって優しいじゃないか」

兼一は当然、秋雨に事情を聞こうとしたのだが、秋雨は特に気にした所は無く答えた……。

この秋雨の返答に、兼一は体をブルブルと震わせていたのだが、秋雨が良いと言ったので、取り合えず次の稽古に移動する事にした……。

亮平は特に移動する事もないので、この場で地蔵を振り続ける事にした。

「……怪しいな」

だが亮平自身、今回の事は流石におかしいと感じたので、今日の所は少し警戒を強めておく事にした……が。

「亮ちゃんは着いて行かないのかね？」

「馬さん」

そこに、“あらゆる中国拳法の使い手”馬剣星が現れた事で、亮平の集中力は削がれてしまった。

「なんで削がれるね」

「いや……だって馬さんって、俺との会話じゃ下ネタしか出てこないじゃないですか」

「失礼ね！！流石に何時も、そんな会話はしてないね！！」

そんな会話をしながら、剣星も暇だったのか。

亮平の近くで、亮平の筋トレを見学しながら“写真本”を読み始めた……。

暫くすると亮平は筋トレを終え、秋雨作“投げられ地藏君グレート”を地面に置いた後。

何かを思い出したように、“写真本”を読んでも剣星に口を開いた……。

「そう言えば俺、この間ようやく目当ての娘のアドレスゲットしましたよ」

「何、本当かね？」

「嘘じゃないっすよ……だけど、最近気付いた事があるんですけどね」

「なんね？」

亮平は、あの出来事の後。学校で漸く、鷹島千尋のアドレスを手に入れた事を馬剣星に伝えたのだが。どうやら、話しには続きがあるようだ……。

「俺のアド帳を見てると……」

「見てると？」

「兼一の奴がハーレム状態なんすよ……」

「どういう事ね？」

「いや、ただ俺に男友達が少なすぎるみたいで……。アド帳の比率が（兼一）1：（女子）9状態に……」

「亮ちゃん、女の子の写真とか撮って無いのかね？」

「有りますよ……ほら」

亮平はそう言って、剣星に自身の携帯ディスプレイを向けた……。そこには、バナナ・オレを顔に引っ掻けてしまった状態で舌を出している姫野真琴の写真が写っていた……。

「亮ちゃんも、中々マニアックね……」

「そう言うアナタだって、香坂さんとかの写真……持ってるんですよ？」

亮平の言葉と同時に、この場に言い知れぬどうでも良い空気が流れ始めた……。

「なにかね、おいちゃんと交渉するつもりかね？」

「いや、特にそんな事は考えてませんよ……ただ、見せてもらえれば」

「ダメね、おいちゃんは露出してなきや嫌ね……。けど、どうしても見たいと言うなら（三本指を立てる）」

「いや、そちらのは盗○でしょ……だったらこれくらい（二本指を立てる）」

「おいちゃんも苦労したね（二本指を出してから、反対の手で五本指を立てる）」

「……（二本・二本“二千二百”）」

「（剣星首を振る）……」

「……分かりました、二千五百円払えば良いんですよ」  
「まいどね」

亮平は若干不貞腐れた表情をしながら、剣星に指定された金額を支払う……すると。

「いったい何なんですか!？」

梁山泊の居間の方から、兼一が叫ぶ声が響き出した。その言葉を聞いた瞬間、剣星はゆっくりと腰を上げ始め、亮平に向って口を開いた……。

「そろそろかね……じゃあ、亮ちゃんも一緒にくるね」

「はい？……まあ、着いて来いと言っなら行きますが」

剣星と亮平は、そう言いながら兼一が叫び出した居間の方へと向って行った……。

居間へと到着した二人は、兼一を囲みながら兼一の訴えを聞いている梁山泊の面々を確認した。

そして、亮平達が近づくと秋雨が口を開いた……。

「おお剣星、兼一君が快く引き受けてくれたよ」

「それは良かったね」

「ん？……何の事っすか？」

秋雨の言葉に、剣星は少し嬉しそうな表情を示したのだが、亮平は何の事が分からず、ただ場の空気に置いてきぼりを食らっていた……。

すると、達人達に囲まれていた兼一が口を開いた……その顔は困惑の表情を示していた。

「え、僕は何も引き受けて無いですよ？ただ、梁山泊は大切な場所だっって言っただけ……」



「内弟子だよ、内弟子！！知らんかね内弟子？」

兼一は何とか状況を理解しようと秋雨に質問するも、そんなものは関係無いかの様に秋雨は言葉を続けて行く……。

「内弟子とは師と寝食を共にし、あらゆる武術のノウハウと秘伝を伝える制度だ……」

秋雨の説明に、兼一の血の気が引いていくのを亮平は確認していた。

「24時間、武術を教え込む事が可能！！ まあ、噛み砕いて言えば、人生の為の武術が、武術の為の人生に変わるだけの事だよ」

兼一の表情が、更に生気の籠っていない状態へと陥って行く……。

「その光栄な制度にキミは選ばれたのだよ、やったね！ラッキー！！」

秋雨が力を込めて、兼一に指を差しながら宣言する……が。

兼一は秋雨の説明を聞き終えると、すぐさま自身の身のために戦略的撤退を観光した……。

「やれやれ……」

その兼一の逃走を確認した秋雨は、本当にしようが無さそうに溜息を着き、逃げて行く兼一へと視線を向け……。

「逃がすかあああッ！！」

兼一の逃走は認めぬ叫び声を発し始め……。

「逃げ切ってみせます!」

「甘い!」

畳に自身の掌を打ちつけ……。

「秘技!」

打ち付けた衝撃が、並んでいる畳を渡って兼一へと向っていき…  
…。

「畳乱れ返し!」

「ブツ!」

その衝撃は兼一の前方まで進んだ所で、今まで通過してきた畳を全てひっくり返し。兼一の逃走する進路を塞いだ……。その非常識極まる光景に、亮平は思わず噴出してしまった。

「くッ!」

だが、兼一もそこで止まってしまえば“終わり”が見えてしまうからか。走った勢いを殺さず、居間と外を分けていた障子を体で突き破り、外へと逃走を図った……。

「ほッ!」

「ちったあ良い動きするようになったじゃねえか!」

その兼一の動きに、梁山泊の達人達も驚きを見せるが……。

「（あ）……長老と逆鬼さんが行ったら、流石の兼一でも“終わりか”」

第三者を決め込んでいた亮平の言葉通り、兼一はその後。長老と逆鬼に挟み撃ちを喰らって、平凡な人生とはおさらばした……。

捕まってしまった兼一は、縄で体を縛られ、秋雨と逆鬼による説得もとい“脅迫”を受けていたのだが……。場を見かねた剣星が、兼一に様々な言葉（梁山泊での暮らしの素晴らしさ）を掛けた事で、兼一は晴れて梁山泊の内弟子になった……。あの手法は、亮平も昔経験したものであった（思春期の性）。

その後、内弟子になる事を決めた兼一は。何やら気味の悪い笑みを垂らしながら、今日の練習を切り上げるために着替えに向った……。

亮平は、今までの出来事に着いて行けず、若干悟りの境地を開き始めていたのだが。それは、突然声を掛けてきた長老によって閉ざされてしまった……。

「そつえば、亮ちゃんは傷の具合はどうかの？」

「……ああ、それなら塞がり始めましたよ」

「そうかそうか！なら亮ちゃんには傷が治ったら伝えたい事があるので。それまでゆっくりと治すが良い」

「……何の事が分かりませんが、取り合えず“はい”と言って置きます」

亮平は、後にこの返事をした事に後悔をするだろう……。

だが、この当時の亮平は知る由も無い事であった……。



## 第二十話 内弟子（後書き）

内弟子ね……。

ゲレゲレも、高校2年生の時に。

今の道場で誘われた事がありました……即答で断らせて頂きました！！

だって、月給4万・道場住み込み・風呂とかは外で入れなんて……。高校生に言う事じゃ無いでしょ！！

ま、そのせいで犠牲になった人が居たんですけどね……本当に悪い事をしました。

また、本当は地下闘技場でバーサーカーを出そうと考えていたのですが。

原作37巻を見たら、それっぽいシルエットが出てましたので。チキン風に吹かれて、バーサーカーの登場は原作しだいになりました。

ゆっくりやっていけば、その内出てきますしね。

では次回はいよいよ、ほのかでも出そうかと……考えています！！

ノシ

## 第二十一話 白浜ほのか(前書き)

今回程、自身の文才の無さを呪った事は無い……。

という事で、今回は色々上手くいかなかったのと。

だらだらと書きすぎってしまったって、文字数は1万オーバー！  
本当にすみません。

## 第二十一話 白浜ほのか

兼一が梁山泊の内弟子になってから、何日か経ったある日の事……。  
……。  
ここ白浜家では、ちょっとした騒動が起きようとしていた。

「お母さんの手作り弁当と、チョコに飴に、お兄ちゃんの大好きなチーカマと……」

現在、白浜家のリビングでは、兼一の妹である白浜ほのか……。何やら大きなリュックサックに様々な物（主にお菓子）を詰め込む姿が見られた。

「明日はちよつと行って、様子を見てくるだけでしょ？ それじゃまるで雪山登山の準備よ、ほのか」

すると其処に、兼一の母である白浜さおりが余りにも荷物を詰め込みすぎている娘に対して苦言を呈したが……。

「陸の孤島みたいな道場なんだから、不自由してたら可愛そうだもん！」

だが母の苦言も、兄のためにひたすら突っ走る娘には届かなかつた……。

実は、兼一の妹であるほのかは以前、亮平が巨大ショッピングモールで買い物をしていた時に、亮平とは入れ違いで梁山泊を訪れていた……。その際、美羽のスタイルを見て“ムチプリ”と革命的な表現をした事は亮平の知らぬ歴史のページである……。

「（お兄ちゃんは修行の邪魔になるから来るなど言っていたけど、あのムチプリの魔の手に掛かる事だけは断固阻止せねば！！）」

ついでに言えば、ほのかは大のお兄ちゃん娘である……。

そして、その愛が故に（家族として）……美羽の事を兼一に着いた悪い虫だと勘違いしている。

すると、その場に父……白浜元次が何やら物騒な物を持ちながら近づいてきた。

「よし！ ほのか、御信用にわしの“セバスチャン”持って行け……」

元次が持ち込んできたのは、“セバスチャン”と言う名の“猟銃”だ……が。

「え？」

スカーン！！

だが、その危険物を持ったほのかの父は……。母、さおりが何処からか鈍器の様な物を取り出し、それで元次の頭部を殴打した事で意識を深層まで落としていった……。

「何か言った、お父さん？」

「気のせいよ、ほのか！」

この事により、ほのかが銃刀法違反で警察の御世話になる事は、未然に防げたのであった……。

実は、兼一の父である元次も。兼一を梁山泊に住み込ませる事は



反対であつたのだが……息子からの本気の頼みに、流石の父も折れてしまい、渋々といった感じで梁山泊への住み込みを認めていた。だが、飽く迄“渋々”なので、この様に今でも隙有らば“愛銃”を持ち出しては問題を起こしていた。

「そう言えばほのか、確か兼一のお友達の子も明日は居るみたいだから。その子にも会ったら挨拶をしておくのよ？」

「分かつてるじよ！ 確か、鬼島“亮助”って人だよな？」

“亮平”さんでしょ、ほのか……失礼の無いようにしなさいよ？」

さおりに頭部を殴打され、気を失つたしまった元次を放つて置いて。

母と娘は、兼一にとって新島以外での友人の事を話していた……。

そして、母さおりは心配そうな顔をしながら、若干頼りないほのかに再度、忠告をする事にした。

「兼一の話しだと……顔は怖いけど、話せば良い人だそうだから。粗相のない様にね？」

「分かつてるじよ！ お母さんは心配しすぎ！ それに写真も見せてもらったから、大丈夫だよ！」

「そう、それなら良いけど……。取り合えず、明日は気を付けて行ってらっしゃいね？」

「はい！」

ここで、母と娘の明日についての会話は幕を閉じた……さて、明日はどのようなのだろうか。

【白浜ほのか来襲……】

亮平は現在、梁山泊の庭で筋トレ真つ最中だ……。

庭と言っても、梁山泊が誇る巨大な門付近で。その近くには暇なのか“裏ムエタイ界の死神”アパチャイ・ホパチャイの姿もあつた……。

「（しかし……この人は何時も、こんな感じでうるちよろしてるのか？）」

筋トレ中ではあるが亮平自身、既に“投げられ地藏君グレート”は振り回し慣れてしまったので、現在は秋雨に言い渡されたメニューを只消化していくだけの状態なのだ……そろそろメニューの変え時だ。

それによつて余裕がある亮平は、庭周辺をひたすらウロチヨロしているアパチャイを気にしながらも筋トレ（秋雨曰く矯正）を続けて行く……。

暫くした後、亮平は筋トレを終え。汗で塗れた体と服を綺麗にするために、梁山泊の中へと入って行った……。ちなみに現在、梁山泊には亮平・アパチャイ・しぐれしか居ない状況だ。理由は、兼一と美羽は買出しに向かい、剣星はその監視（兼一は買出しでも体に“鉄球”を付けられている）、秋雨は接骨院、逆鬼は酒の買出し、長老何処かへフラフラ……その様な理由で、今回の様な状況が出来上がっている。

「…………？」

すると亮平が居なくなつた庭で、一人残されていたアパチャイが何かに気づいたようだ……。

それまでアパチャイは、梁山泊と外を仕切つていた外壁付近で遊んでいたのだが（アリで）。その何かに気づいた瞬間、外壁の向こう側を確認するために、外壁の瓦屋根部分に手を付けた……すると

「…………」

「…………」

そこには、どう見ても、この外壁から頭を越すような生物には見えない……。幼さをかなり残した顔の少女がアパチャイと視線を合わせていた……。すると、アパチャイと視線を合わせた少女がゆっくりと口を大きく開き始め……。

「きゃああああああああああ！！！」

「あばああああああああああ！！！」

その少女が発した突然の悲鳴は、この町内を轟かせる程の女性特有の甲高い悲鳴で。同じく視線を合わせていたアパチャイも、独特な叫び声を上げながら、手を付いていた外壁から離れて行く……。そして少女の方も、アパチャイと同時に外壁から離れて行き、そのまま道路脇に立っている電信柱の影に身を隠した……。

「（今のは何なのだ！？ ほのかがゴミ箱を踏み台にして、やっと届いた高さなのに！）」

現在、電信柱に身を隠している少女……：白浜ほのかは、先程出会

った謎の黒人についての考えを巡らせていた……。何故、今回のような事が起きたのか。それは、梁山泊が誇る巨大な門が閉められていたので、当然開けられないほんかは、近くにあったゴミ箱を使って、外壁の中に進入を試みようとしたからだ……。

キイ……

「うん？」

すると、今まで閉じていた梁山泊の門が、ゆっくりと音を立てながら少しだけ動き始め、門から外を少しだけ確認出来るぐらいの隙間が開いた……。其処からは、先程自身と共に悲鳴をあげた謎の黒人らしき人物が、こっそりと此方の様子を窺っていた。

「……！？」

だが、こちらを門の隙間から窺っていた謎の黒人らしき人物は。電信柱に隠れていたほのかと一瞬目が合った瞬間に、その姿を門の内側へと消していった……。

その様子を窺うとほのかは、恐る恐るといった速度で梁山泊の門へと近づいて行った。

「（今開いた、この隙間なら中に入れそうだよ！）」

門の近くへと接近したほのかは、先程出来た隙間を確認すると迷う事無く、その開いた隙間へと体を捻じ込ませてゆく……。

「うっ、せまい……だっ……！」

門の中に入ろうと、隙間に体を捻じ込ませていたほのかは。突然、

門からすっぽ抜けてしまった自身の体を盛大に地面へと顔からダイブさせてしまう……。

「痛いの……」

地面へと顔からダイブさせてしまった事により、ほのかは自身の鼻を優しく摩っている……。何やら後ろから気配を感じ、咄嗟に後ろへと振り向いた。

「!!」

「やあ、アパチャイだよ！」

すると其処には、何時も通りのニコニコ顔で微笑む2mを越える巨人。

“裏ムエタイ界の死神”アパチャイ・ホパチャイの姿があった……。

「うおお！」

ほのかは突然目の前に現れた巨人に驚き、自身が今まで背負っていたリュックサックに手を掛け……。

「クッキー・アターック!!」

リュックサックの中から様々なクッキーを、目の前に笑顔で佇む巨人へと投げつけた。

だが、その抵抗は目の前の巨人には通じず、ほのかは投げつけたクッキーは全て空中で食され、あるいはキャッチされてしまった……。だが、ほのかも只で終わる女ではない……。

「（今の内なのだ！）」

ほのかは、自身で作り出した相手の隙を突きながら、相手に気付かれぬ様にソーっと、この場から離れようとしたが……。

シュパッ！

「どひゃー！！ 何時の間に!？」

しかし、ほのかの行動も……。

突如、巨人が常識離れたスピードで自身の目の前に戻ってきた事によって無駄になって……。

「チョコ・ポテチ・アターック!!」

……は、いなかった。

そして再度作り出した相手の隙についてほのかは、今度はこっそりでは無く、全速力でこの場から離れようとしたが……。

ボスッ！

「わっぷ!」

自身の前に突如現れた何者かによって、ほのかの逃走は再度阻まれてしまう……。

そして、ほのかがぶつかった人物がゆっくりと、ほのかの頭上から。困惑するほのかに言葉を投げかけた……。

「子供？」

その言葉に、ほのかはゆっくりと、ソーッと自身の顔を言葉がした頭上へと上げた……そこには。

「……も、もしかして、お兄ちゃんのお友達の鬼島“龍二”って人？」

「いや、多分それは人違いだな……俺は鬼島“亮平”だよ」

ほのかは写真でしか見たことは無かったが、そこには兄である兼一の友人、鬼島亮平の姿があった。

すると亮平の後ろに、先程までほのかを苦しめていた黒い巨人がとてつもないスピードで回り込んで来た……。

「ひいつ！」

「やあ、アパチャイだよ！」

「なに子供驚かしてるんですか、アパチャイさん……」

「アパチャイは挨拶をしてただけだよ……アパチャイ悪くないよ」

亮平は自身の後ろに回りこんで来たアパチャイに注意を促す……するとアパチャイはいじけた様に、地面に座り込んでしまった。その様子を見ていたほのかは、アパチャイに口を開き始めた。

「なんだ……案外、怖い人じゃ無いじゃないかちみは。この道場の人間はみんな悪人だと思ってたのに」

亮平は、そのほのかの言葉に少しの笑みを含めながら答えた……。

「別に、アパチャイさんは怖い人じゃないぞ？ 実際、動物にも優しいし、子供にだって優しいって聞いたしな。それに、ここの道場の人達に悪人は一人もいないぞ？ ですよ、アパチャイさん？」

「そうだよ、逆鬼、大酒飲みだけど良い人だよ。剣星もスケベだけ

ど良い人。秋雨も難しい事言うけど良い人。しぐれも刀振り回すけど良い人だよ！」

そのアパチャイの言葉にほのかは安心したのか。今まで怯えきつた顔をしていたのだが、その言葉を聞いた瞬間に表情を明るくさせた。

ほのかが落ち着いたのを確認した亮平は、取り合えずどうして梁山泊に入ってきたのかを問う事にした。

「まあ、取り合えずは落ち着いた様だから聞くけど。君、おうちは何処かな？ 迷子かなんかだろ？」

亮平のその言葉に、ほのかは顔を真っ赤にさせながら反論しだした……。

「むっッ！ ほのかもう中学生だもん！！ 立派な美少女だもん！！」

「あゝ……分かったから、取り合えず何で此処に入って来たのかな？（美少女って自分で言ってるし）」

ほのかの反応に亮平はタジタジになるも、取り合えずこちらだけでも冷静にならなければ事態は一向に進まないのので、亮平はなるべく目の前の少女を落ち着かせる様な声量で問うた。

「何だか流されたような気がするのだ……」

「流してないぞ、取り合えず理由は？ なんで入って来たのかな？」

「……もういいじよ、取り合えずほのかはお兄ちゃんの様子を見に来ただけだじよ」

「お兄ちゃん？」



ほのかの言葉に疑問を持った亮平は、今の言葉について思考を巡らせ始めた……。

「（この道場に、この娘ぐらいの妹が居る人って言ったたら……逆鬼さん？……いや、それは無いだろう。鬼いちゃんになっちゃっし。としたら……岬越寺さん？ いや、これも多分歳が離れすぎている……多分だが。だとすると……兼一か！ そうだ兼一だよ！ あいつ確か、前に妹がいるって言ってたし！」

「どうしのだ？ 急に黙り始めちゃって？」

「ん？ あゝ悪い悪い……」

思考に耽っていた亮平は、ほのかの言葉で意識を現実へと戻された。

そして亮平は、先程まで考えていた事を目の前の少女に尋ねる事にした……。

「君のお兄ちゃんって、もしかして白浜兼一って人かな？」

「そうだよ！」

「（だとすると、さっきのは本気で名前間違えたんだな）……そうか、じゃあ少し待っていると良いぞ。兼一なら、さっき買出しに行っただけだし」

「分かったのだ！」

亮平は、そのほのかの返事を聞くと、笑顔で頷きながらほのかに返事を返した……。

そして、亮平はアパチャイの方へと向き直る。

「アパチャイさん、少しこの娘の事、御願ひ出来ますか？ 俺ちよつと、他に誰か居ないか捜して来ますから」

「了解だよ！ そしたらアパチャイも一緒に捜すよ！」  
「いや……。アパチャイさんにはこの娘を……」

亮平は、自身が言いたい事をあまり理解してくれていないアパチャイに苦笑いしながら。視線をほのかの方へと向けると……。

「だったら、ほのかも一緒に捜すじよ！」

そう言ってきたので、亮平はアパチャイに視線を戻してから、アパチャイに再度言葉を投げかける。

「そっか、じゃあアパチャイさんは、この娘と一緒に他に誰か居ないか捜して来てください。俺は別で捜して来ますから……」

「分かったよ！ アパチャイに任せるよ！」

「わっ！」

アパチャイは亮平の御願いを聞きながら、ほのかを自身の肩に乗せ、肩車の形でどこかへと歩いて行った……。その様子を微笑ましそくに確認した亮平は、外を捜し始めたアパチャイ達とは逆の、梁山泊の中を捜す事にした。

梁山泊内を捜している亮平は、ふと何かを思い出していた……。

「（そう言えば……俺の怪我が治ったら、確か長老が俺に言いたい事があるって言ってたよな）」

亮平は以前、兼一が梁山泊の内弟子に成る際に、長老が自身に対して言っていた事を思い出していた。

「（まあ、でも……考えても仕方ないしな。そろそろ怪我也痕が見えなくなってきたから……。その内、長老の方から話しかけて来るだろ）」

亮平は、そう自身で自己完結しながら、梁山泊の部屋という部屋を回り始めた……。

その間に、亮平は様々な部屋で様々な体験をし……。時には仏像が列挙する異様な部屋を開いてしまい、暫くの間、放心状態に陥ってしまったり。

時にはある人物の部屋に訪れた際、扉を開いた瞬間に足元から槍が飛び出てきたり……。

今までの人生の中で、これでもかと言うぐらい不思議体験をしていた……。

そして、漸く梁山泊内部全てを探し回った亮平は取り合えずアパチャイ達と合流するために。

アパチャイ達が未だ探し回ってるであろう外へと向うのであった……。

「ア〜パチャ〜イさん！！ どこですか〜！！」

亮平は現在、外で動き回っているであろうアパチャイを呼び出すために、珍しく声を張り上げている。

また結局、梁山泊内部を探し回っても誰も見つからなかったので、取り合えずほのかを客間の方へと連れて行くこうとしてもいる……。

「……………ん？」

ガシャーン！！

亮平がアパチャイを捜していると、何処からか何か割れる音が辺りに響き渡った……。

その音に亮平は敏感に反応し、音がしたであろう場所に全速力で向うとそこには……。

「香坂さんまで混じって……何やってんすか？」

「ここは梁山泊の台所……。

其処には、アパチャイとしぐれが何かを探していたのか。至る所が散らかり、終いには二人が手に持っていたのは海苔と金魚鉢という、何とも斬新な組み合わせな光景であり……。亮平は、そんな訳の分からない光景に思わず突っ込みを入れてしまっていた……。すると、二人が揃って不安そうに口を開いた。

「「お茶？」

「「違っ」

その二人の言葉に、亮平は思わず即答で突っ込みを入れてしまった（無表情で）。

「「……で、何でお茶を作ろうと？」

「「やっぱりお客さんには、お茶かな……っ」

「「まあ、大体は合ってると思いますが……」

亮平はこの時、目の前で不安気に答えるしぐれを見ながら。

（香坂さんって、和っぽい雰囲気出したのにな）と言う、余りにも偏見が織り交ざった感想を述べていたのだが……暫くすると、亮平は仕方無さそうに口を開いた。

「ハア、しょうがないっすね……。二人はほのかちゃんの所にも行つて下さい。後は俺がやりますから……」  
「わかった、取り合えず、あの娘は客間の方に……る」  
「分かりました」

しぐれはそう言いながら、亮平に即答で否定された事により落ち込んでしまっていたアパチャイと共に。この台所から、客間の方へと向って行った……。

アパチャイ達がほのかの下へと向って行ったのを確認すると、亮平は一つ溜息を着きながらダルそうに口を開いた……。

「え〜っと、確かお茶の作り方は……」

亮平はそう言いながら、お茶を入れるために急須を取り出し、テーブルの上に置き。テーブルの上に置いてあったお茶の葉の缶を手を取った……。

「これに、お茶の葉を入れて……」

ドバババー

「で、これにお湯も入れて……」

ジャバババー

「最後に、この中身を湯飲みに入ら……」

ジヨロロロー

そうして出来上がったお茶を亮平は客間で待つ、アパチャイ・し

ぐれ・ほのかの下へと持って行き。

「はい、お茶」

そのまま三人に向って、出来上がったお茶を差し出すと……。

「」「」「」「」「」

当然である……。

「そうですかね？ 俺はイケますけど……」

元々、味覚が可笑しい亮平にとっては、これぐらいの苦味は許容範囲であるそうだが。

一般的な味覚を持つ者達にとっては、ただ苦いと言う感想しか出てこぬものであった……。

「亮平も大した事ないよ」

「お前の味覚は、壊滅的……だ」

「あんたら、結構容赦無いね……」

「も〜！ お茶ぐらい、ほのかが入れてくる!!」

二人の容赦ない（常識的な）言葉に、亮平が打ちひしがれてしまった時。突然ほのかが立ち上がり、勝手に台所の方へと爆走して行き……。

「お茶って言うのはこうやって！」

サラサラー

「じつやってー!」

シャー

「じつ淹れるのーっ!?!」

どーん!

ほのかが怒涛の勢いで出してきたお茶は、先程の亮平が淹れたお茶よりも常識的な苦味があり（比べるまでも無いが）、亮平・アパチャイ・しぐれの三人は素直に驚きの表情を示していた……。

「凄いよ! 手際いいよ!」

「やるね君……」

「確かに、こっちの方がお茶っばい……」

「え…そう?」

「天才だよ! びっくりだよ!」

「やるね君……」

「家庭科、成績悪いんだけどな……」

ほのかは亮平・アパチャイ・しぐれに自身が淹れたお茶を褒められ、素直に照れながら嬉しそうにしていた……。そうしていると、亮平・ほのか・しぐれ・アパチャイの四人は次第に打ち解けあい。取り合えず、兄である兼一が戻って来るまで四人で遊ぶ事となった……。

四人で遊んで暫くすると、どうやら兼一と美羽の二人が帰って来たようだ。

「む、あれは……」

「あら、ほのかちゃん!!」

兼一と美羽は、兼一の妹であるほのかを見つけると。すぐさま、ほのかがいる四人の輪の中に近づいてきた……。

「あつ！ お兄ちゃん!!」

ほのかの方も兼一達に気付いたようで、兄である兼一の胸へと飛び込んでいった。

「捜したじよ!!」

「ばか、みつともないだろ!!」

「うわゝかわいいですわ!!」

「お帰り二人とも」

妹に突然抱きつかれた兼一は恥ずかしそうに抱きついてきた妹に注意をし。美羽はそのほのかを見て、何やら小動物でも見たかのよう嬉しそうな表情をしていた……。そして、そんな所に、今までほのか達と遊んでいた亮平が近づいてきた。

「亮平君ごめんね、こいつの面倒見るの大変だったでしょ」

「わざわざ心配しながら様子を見に来た妹に向って、こいつって何だじよ!!」

「別に、確りした良い娘じゃないか」

二人の兄妹の様子を微笑ましそうに見ていた亮平は、兼一の言葉に軽い調子で答えた。

「ところで風林寺さんは、ほのかちゃんに会った時あるのか?」

「ええ、以前亮平さんがいらっしやらなかった時に一度だけ」



亮平が美羽とそんな会話をしているなか、兼一とほのかの兄妹は別の会話をしていた。

「前に言つたる！ 兄は今、本気で武術に打ち込んでいるんだ。邪魔になるから来るなつて」

「だつて……」

その兼一の言葉に、ほのかは落ち込んでしまつ……。

其処に、今まで亮平と会話をしていた美羽が気まずそうな表情で入つて来た。

「兼一さん、そんな言い方しなくても……」

「甘やかすと癖になります」

美羽の苦言も、ほのかの兄である兼一には届かず。

これはどうしようも無いと思つたのか、美羽は落ち込んでいるほのかへと言葉を投げかけるが……。

「ほのかちゃん、何時でも遊びに来てね」

「寄るなムチプリ！」

「（ムチプリだと？）」

美羽に声を掛けられたほのかは、まるで猫が敵に威嚇するかのような雰囲気を醸し出しながら、兼一の後ろへと隠れてしまった……。亮平は、その“ムチプリ”と言う言葉に無意味に反応していた。

「兼一君、そろそろ稽古を始めようか？」

すると其処に、何時の間に帰つて来たのか。兼一の師匠である秋

雨が、兼一に声を掛けてきた……。

「はい！」

「ぬ！（稽古……そうだ、この道場の実態を調べに来たんだ）」

それに兼一は気迫籠る返事で答え、ほのかは当初の目的を思い出した様で。

兼一が稽古を始める事に同意した事によって、兼一の梁山泊での稽古が始まった……。

「やーっ！！」

バンツ！！

「……ツ！！」

稽古が始まった早々、兼一の妹であるほのかは、まさに想像以上の光景を目の当たりにしていた。

「立ちたまえ」

ほのかが目当たりしている光景は……。

先程、優しそくに稽古の始まりを告げていた秋雨がまるで豹変したかのように、兄である兼一を背中から畳に投げつけた光景であった……。

「うっ！！」

「早く！！」

そして、秋雨の激しい稽古はまだ終わりを見ない……。

「敵は休みなど与えてくれないよ!!」  
「ッ!?!」

ドッ!!

秋雨はそう櫛を飛ばしながら、兼一が着ている道着の襟首を掴み倒れたまま起き上がれなかった兼一は再度担ぎ上げながら畳へと投げつけた。

すると、これまでの光景を見かねたのか。妹であるほのかが、投げられている兼一の下へと向をうとしたが……。

「おっと、今は行っちゃいけないな……」

「どうして!?! お兄ちゃんがいじめられて……」

「いじめてる? じゃあ、兼一の表情を見てみ」

「え?」

ほのかが兼一の下へと向をうとしたのは、同じくこの光景を見学していた亮平に止められた……。

止められはしたが、ほのかは当然の如く兼一の下へと再度向をうとするも、その亮平の言葉に足を止めてしまい。亮平の言う通りに投げられ、畳に突っ伏している兼一へと視線を向けると……そこに  
は。

「まだまだ!!」

「(……あの目……)」

「気付けたか?」

亮平の言う通りに兼一へと視線を向けたほのかが見たのは……。

何度秋雨の鋭い投げを受け続けても、その瞳の未だ強い光を宿している兄の姿であった。

「お兄ちゃんのおんな目……見るの何年ぶりだろう」「  
「ははッ！ あいつなら、何時もおんな目をしてるぞ？」  
「そうなの？」  
「ああ、羨ましいくらいにな……」

亮平とほのかが話している間にも兼一は再度、師である秋雨へと向っていく……。そして、何度も投げられ、何度も立ち上がり、何度も向って行く……。

「ほのかだけが知ってると思ってた……」  
「ふふん 最近じゃあ、ここの人達だけじゃ無く。他の連中にも知られてるみたいだな」  
「そうなんだ……」

亮平の言葉に、今まで不安そうな顔をしていたほのかの顔が、本当に嬉しそうな顔へと変わって行ったのだった……。

兼一の稽古も終わり、ほのかが帰る時間となった現在。  
兼一と美羽は、これから帰宅する亮平とほのかのお見送りに来ていた……。

「母さんの手作り弁当がよかったよ。でも、あんまり兄に会いに来

るな！」

そうやって兼一は、梁山泊の門の外にいる妹のほのかへと注意をした……。

近くでは、亮平と美羽が微笑ましそうな笑顔で二人を見守っている。

「白状すると、兄のボロボロな姿を、出来れば妹には見せたくないんだ！」

実際、本当にボロボロな兼一は、本当に気まずそうな仕草でほのかへと、その言葉を投げかけた。

そして、ほのかもしょうがないと言った表情で兼一の言葉に答えた。

「うん、わかった、約束する。お兄ちゃんの様子を見に来るのはもうやめるよ！」

「ああ、そうしてくれると兄も助かる……」

兼一とほのかの会話が終わろうとした、その時……。

この場に、もう一人の人物が。自慢のバイクを吹かしながら近づいてきた……。

「あれ、逆鬼師匠！ これから何処か行くんですか？」

「おう兼一！ これからちよつとな……」

そこに現れたのは、厳ついサングラスを掛けながら、厳ついサイドカー付きのハーレーに跨った。

兼一の空手の師匠である、“喧嘩100段”の異名を持つ逆鬼至緒であった。

すると逆鬼は、厳ついサングラスを掛けたまま、この場にいる亮平へと視線を向けた。

「え〜っと、鬼島で良いんだっけか？」

「亮平でいいですよ。どうしたんですか？」

「ああ、取り合えず亮平。お前、その絆創膏を取ってみろ」

「まあ、いいですけど……」

突然投げかけられた逆鬼の言葉に、亮平は戸惑いながらも。今まで右目尻に着けていた絆創膏をゆっくり剥がした……すると其処には。

「凄い、もう殆ど塞がってる……」

そこには、以前の様な怪我の面影は殆ど残っていない……。少しだけ痕が薄つらと残っている、亮平の目尻があった。その回復力に、兼一は素直に驚いていた……。

「うっし、それくらいならもう大丈夫だな！」

「……何が大丈夫なんですか？」

逆鬼の言葉に、亮平は困惑をし始めるが。それに気付いた逆鬼が説明をし始めた……。

「ああ、悪いな。本当なら、じじいが居るときが良かったんだがな。お前の怪我が治ったら、じじいにある所へ連れて行行って御願いされちまってよ。……取り合えず亮平、お前これから用事とかあるのか？」

「いや、無いですけど？……何か用事でもあるんですか？」

逆鬼の余りに分かり辛い説明に、亮平は更に困惑しつつも逆鬼の言葉に答えた……すると。

「じゃ、それ被りな！」

そう言っつて、逆鬼はある物を亮平に向って投げつけた……。

亮平はそれを問題なくキャッチし、そのある物を確認すると……。

「ヘルメット？……じゃあ、これからその長老に言われた場所に行くつて事ですか？」

「まあそうだな。取り合えず乗れや」

「はあ、分かりました……」

亮平はどこかまだ良く分かっていない雰囲気醸し出しながらも、逆鬼のバイクのサイドカーに体を乗せた……。

「うっし、じゃあ美羽！今日は夕飯はいらねえからな！」

「はい、分かりましたですの」

「じゃあな、兼一・風林寺さん・ほのかちゃん。また今度な！」

「うん！ 亮平君も気をつけて！」

「ええ、鬼島さんもまたいらしてください！」

「今日は楽しかったじよ！ また今度なのだ！」

逆鬼は亮平が、他の三人に別れを告げるのを確認すると。バイクを何度か吹かしてから、ここ梁山泊からハーレー特有の上品なエンジン音を鳴らしながら兼一達の下から離れていったのだ……。

## 第二十一話 白浜ほのか（後書き）

はい、という事で。

無理やりつぽいですが、次回は地下闘技場です。

上手くいけば一話で、あゝあつて感じになつてしまえば二話ぐらいになつてしまつかもです。

ではノシ

リアルではゲレゲレ、隠れオタクです。

誰にも、このヒミツはバラしてはならぬ……。



第二十二話 地下闘技場（前書き）

今回は好きに書いて、好きにやらかした感じです。

## 第二十二話 地下闘技場

現在、亮平は絶賛困惑中である……。

「ここは“地下闘技場” つつて、案外あちこちにある所なんだがな……」

「(何だこじ……)」

梁山泊で兼一達と別れ、そのまま逆鬼に連れてこられた場所は……とある湾岸沿いに建てられていた、倉庫の中にある“地下闘技場”という表の人間では先ず縁の無い場所……。

「場所によってルールもまちまちだが、ここは縛りが少なえ所で知られてんだ」

「(素手でやってるって事は、テレビとかは無いのか……)」

亮平が今、目の当たりにしているのは……。  
良くTVなどで見られる四角いリングの上で、明らかに素人ではない体格をした二人の男が殴り合い。周りでは、観客達が設置されているパイプ椅子から立ち上がりながら目の前の試合に発狂している光景であった……。

「ま、此処ならお前も全力を出せるって訳なんだが。……どうするんだ？」

「どうするって、何がですか？」

すると、今まで此処“地下闘技場”の事を説明していた逆鬼が。目の前で広がる光景に唾然としていた亮平に何かを問うてきた……。

「やってみるか？つて聞いてんだよ。やりてえなら、直ぐに試合を組んでやるぜ？」

「……全力を出しても良いんですね？」

逆鬼の問いかけに、亮平は質問で返すという返答をした……。

すると逆鬼は、掛けているサングラス越しでも分かるくらいに不敵な笑みを浮かべながら……。

「全力でやるかは、お前の自由だが……。今日は亮平、お前に“手加減”つてもんも教えるために来たんだよ！」

「“手加減”も、ですか……。じゃあ、全力は出しちゃダメなんすね？」

「別に、全力を出すなどは言つてねえぜ？」

「じゃあなんすか？」

逆鬼の言葉に、亮平は益々困惑し始める……。

そして、逆鬼はその不敵な笑みを更に濃くしながら、亮平の問いに答えた。

「これは、じじいからの伝言でもあるんだがな。亮平、今日は全力を出しながら“手加減”を試してみろ！」

「……それ、矛盾してないっすか？ 全力を出しながら“手加減”つて、無理じゃ無いっすか？」

「まあ、簡単に言っちゃうと。“手加減”なんて考えるなって事なんだがな」

「益々分かんないっすよ、それじゃあ……」

逆鬼の返答は、決して亮平を納得させるものでは無かったのだが。取り合えず、亮平は試合に出るために上の服を脱ぎ始めた……。

「取り合えず、今日お前が怪我させた相手は秋雨の所に送るから心配はするな！ 思いつきり行って来い！！」

「……“手加減”をするんですか？ それとも、気にしないで全力を出せば良いんですか？」

「本当は、もつと経験を積みたいんだがな。それだと、時間が掛かり過ぎちまう……。これは荒治療だと思え！ まあ、今回は騙されたと思って全力で戦ってみる。“手加減”ってのは“それから”だ！」

逆鬼はそう言いながら、亮平の下から離れて行き。リングサイドにいる白いスーツを着た偉そうな男に、こちらを指差しながら何かを伝えていた……。

その際、周りの観客達は逆鬼を確認した途端、物凄い勢いで逆鬼から離れて行き。白いスーツを着た偉そうな男は、何やら土下座までしていたのは気のせいであろう……。すると、逆鬼が此方へと戻って来た……。

「お前の試合は組んで置いたからな。俺から言える事は、“後の事は良いから、兎に角全力を出してみろ”だ……。ま、やばくなったら俺がアドバイスやら何やらしてやるから気にするな！」

「分かりました……。じゃあ、取り合えずはあそこに行けば良いんですよね？」

亮平はそう言いながら、目の前で二人の男達が殴り合っていて。天井から眩しいくらいの無数のライトが照り付けている四角いリングを指差した……。

すると逆鬼は、先程までの不敵な笑みではなく、本当に楽しそうな笑顔で亮平の問いに答えた。

「おうよ！！ 構わねえから思いつきりやって来なッ！！！」

逆鬼のその言葉と同時に、亮平が指差した四角いで行われていた殴り合いは終わりを告げ。その戦いの勝者が此方を睨んでいる……。その様子を見た亮平も、その顔に不敵な笑みを浮かべながら……。

「いいつすよ……俺、こつ言つ好きつすから!!」

亮平はその言葉と同時に、ゆっくりと歩を進め始め……。

四角いリングの上で此方を睨み続けている男の下へと向って行く……。

「うお！　　すげえ体だなおい!!」

「どうやれば、あんな風になるんだよ……」

「次の奴は只者じゃねえな!!」

リングへと向う最中、亮平の上半身を見た観客達から様々な声が飛び交い始めたが……。

その言葉のどれもが、亮平の肉体に対する驚きの声であった……。

『おつと!!　　ここで新たな挑戦者だ!!　　次の挑戦者はなんと16歳のガキんちよだ!!』

亮平がゆっくりと歩を進める中、何やらここの実況らしき者の声が響き始めた……。

『流派は此処では特に珍しくも無いケンカ・ファイター!!』

実況が興奮しながら声を張り上げている中、亮平はゆっくりとリングへと上がる階段を上がって行く。

『だがこの肉体を見れば誰もが叫ぶであろう!!』

リングへと入った亮平は、想像以上のライトの眩しさに目を細める……。

『お前は本当に素人なのかッ!!?!?』

そして、上から照りつけるライトの光を避けるように亮平はゆっくりと目を開き……。

『前代未聞! 俺たちは今までこんな素人見たことねえッ!!』

目の前に佇む、今回の喧嘩相手を見据えた。

『梁山泊、逆鬼至緒が送り込んで来たド素人ッ!! 鬼島ッりよお  
おへええいイツ!!!!!!』

その瞬間、この“地下闘技場”の会場が観客達の歓声と熱気に包まれた……。

「(何だかテンション上がるなおいッ!!!)」

亮平はこの雰囲気を楽しむかのように、その表情に満面の笑顔を露にした。

その様子を見ていた逆鬼も、サングラス越したがどこか楽しそうであった……。

「(亮平の野朗……リングに上がっただけで、ここの観客の心を掴みやがったな)」

逆鬼の考えた事は、正にその通りで……。その証拠に、観客達はこれから亮平がどんな戦いをするのかを。狂気に満ちた目でリング上を凝視していた……。

『しかし、挑戦者も運が無い!!』

その実況の言葉と共に、観客達は揃って亮平から視線を移す……。

『先程の殴り合いでも、その拳を見せ付けた“金網”の異端児!!』

観客達の視線に写るは、つい先程まで別の相手と殴り合いを演じていた巨大な黒人。

体の大きさは、亮平の体よりも太い大きさで。その身長は2mを越えているのではないかという程の大きさで、筋肉は明らかに格闘技者その物だ……。

『表の試合からは、相手の選手を文字通り生活出来なくなるまで叩きのめし!! 団体から追放を受けた経歴持ち!! グレゴオオオ・ロオオスウウツ!!!!』

実況の紹介を受けたグレゴは、その特徴的なスキンヘッドを輝かせながら。

先程から、満面の笑みを浮かべ続けている亮平へと近づいてきた……。

「オイオイ、今度の相手は只でかいだけの餓鬼かよ!？」

「これって確か……“よーいどん”で始まるルールじゃねえんだよな?」

「あん?」

亮平のその言葉に、上から見下ろしているグレゴは表情を歪める……。  
すると亮平は、その満面の笑みを消し去り。上から見下ろしているグレゴへと顔を上げ……。

「もう始まつてるつて事だよ、ハゲ」

「あぁんだとオオオツ!!?」

亮平がそう言い放った瞬間、ブチ切れたグレゴは亮平の顔面目掛け。その大きく太い右腕で、打ち下ろしのストレート、つまりチョップングライトを突き放つ……が。亮平には、既に見切られていた。

「（遅いな……それに、“直突き”ってやつよりも見やすい）」

そう考えながら亮平はグレゴの右拳を避けるために、体をグレゴの懐に入れながら頭を右に傾け……。

「（俺にとっては“久しぶり”の本気）」

頭を傾けた事により、グレゴの右拳は亮平の左頬を掠めるだけに留まり……。

「（出してみるかな!!）」

その空を切ったグレゴの右腕を被せるように巻き込みながら強引に、亮平は己の左拳をグレゴの顔面へと打ち放ち……。

「だっしやいッッ!!」

ゴシヤアッ!!!!!!



グレゴの右腕ごと“砕きながら”、亮平はグレゴの横っ面に己の左拳を叩き込んだ……。

『クリイーンヒットオオオ!!!』

実況の絶叫と共に亮平に殴り飛ばされたグレゴは、口から鮮血を撒き散らしながらリングの地面に叩きつけられた……。そして観客は、更なる狂乱へと湧き上がる。その様子を冷静に見ていた逆鬼は……。

「（亮平の奴、今避けるの面倒臭がりやがったな……。だが、相手も運が良かったな。どうやら、まだ全力は上手く出せてねえみたいだ……。それに、相手の右腕の御蔭で頭には其処まで酷え怪我は無かったみてえだしな……）」

逆鬼の言う通り、実際亮平の強引なパンチは相手の太い腕を巻き込むように外から放ったので、リーチが相手よりも短かった亮平のパンチは、流石に全開の威力は発揮出来ないでいた……。

「（それでもこの威力だ……。こりゃ、本気で“手加減”覚えさせねえと何時か死人だすな）」

逆鬼の心配も束の間、どうやら次の対戦希望者のセコンドが亮平のセコンド役である逆鬼に交渉を持ち掛けて来たようだ……。

「グローブ無し、武器ありの試合を申し込みたいんだが……」

「ああ良いぜ、何でも使いな！」

逆鬼はそう言いながら、実際に戦っている亮平を放っておきなが

ら勝手に対戦相手を決めてしまった。  
そして、グレゴを倒した亮平は……。

「（少しやり過ぎたか？……いや、本気を出せって言ってたし大丈夫だろ）」

亮平は先程、右腕を“砕きながら”倒したグレゴの事を気遣っていたが。その気遣いも無用と自分で考え、リング端のコーナーへ向をうとしたのだが……。

『おーっと、ここで新たな挑戦者の登場だ〜ッ！！』

その実況の言葉に、亮平は急いでリング中央へと振り向くと……。

「シャアッ！！」

「ちッ！」

亮平が振り向いたと同時に、突然亮平に接近して来た黒装束を着た細身の男が。亮平の頭上から垂直に刀を振り落とそうとするも……。

パシッ！

「なんと！？」

亮平は、その刀を左手の人差し指と中指の二本でキャッチすると。そのまま二本の指に力を込め……。

パキンッ！！

『なんとオオオ!! ド素人鬼島あ!! 日本刀を指二本でへし折ったぞオオツ!!?』

刀をへし折った亮平は、武器を失った相手に対して無慈悲なまでの右ストレートを打ち放った。

ゴキヤツ!!!!

亮平に顔面を打ち抜かれた黒装束の男は、自身の口付近に巻いていた黒い布を血の色で濁らせながら。

亮平の打撃によって、リングの外へと弾き出されてしまった……。

『脅威の威力を見せるド素人鬼島の打撃!! さあ、次の挑戦者は

……』

「（そうか、試合は勝手に始まるんだったな……）」

この“地下闘技場”では、選手のセコンドが試合を組んだ瞬間から試合が始まってしまつらしく。

流石の亮平も驚きを見せていた……。

だが、“地下闘技場”はその試合一つごとにどうやら賭けが成立しているらしく。先程から逆鬼の笑みが止まっていはいない……（亮平は残念ながら気付いてはいない）。

「（はは、また来やがった!!）」

そうこうしている内に、亮平の前に新たな挑戦者が現れたのだつた……。

亮平はあれから怒涛の連勝を重ね、現在は18連勝まで記録を伸ばしていた……。

「流石に……鬱陶しくなってきた」

『さあ！ もう勇敢な挑戦者は残ってないのかああ！？』

連勝を伸ばした亮平に、実況の言う通り先程から挑戦者の出現が少なくなってきた……。

その現状に、逆鬼は漸く止まらなかった笑いを無理やり止め、今回の本題に入ろうとしていた。

「（雑魚もそろそろ打ち止めの様だし、さっきから準達人級のやつらが動き始めてるな）」

逆鬼はそう考えながら、リング端のコナーで寛ぐ亮平へと視線を向けた……。

「（亮平の方もエンジンが掛かってきた様だな。……じゃあ、始めるか！）」

その考えと共に、逆鬼は今まで座っていた椅子から急に立ち上がり。

ある方向へと視線を向けた……。

「おい！ 其処の二階通路で寛いでる奴！！」

逆鬼が視線を向けた先には、二階通路の扉付近で寛いでいる道着姿の男が居た……。

すると、逆鬼に指名された男は、取り合えず確認のために自身を指差す。

「そつだ、てめえだ！！ 次の相手はてめえに決めた！！」

『おつと！！ ここで“喧嘩100段”の逆指名だあ！！』

逆鬼が指名しているのは自身だと気付いた男は、二階通路から飛び上がり。亮平が待つリングへと、着地音と共に降り立った……。

「“喧嘩100段”の逆鬼至緒に指名されたなら、出てくる他ないか……」

『逆鬼の逆指名に、指名された男も了承のようだッ！！』

リングへと降り立った男は、亮平には目もくれず。

ひたすらに逆鬼の方へと視線を向けている……。

「こちらとしては、“喧嘩100段”の貴様に出てきてもらいたいのだが……」

逆鬼へと視線を向けていた男が、そんな言葉を放ったが……。

「良いのかい？ もう始まってるんだぜ？」

「！？」

視線をリング外に向けていた男の背後から、今までコーナーで寛いでいた亮平が、突然の奇襲である右ストレートを放つ……が。

『おおつと!! ド素人鬼島の奇襲を、いとも簡単に避けて魅せた!! 何者なんだコイツはあ!!』

実況の言う通り、亮平の攻撃は道着男が飛び上がり瞬時に亮平から距離を取ったことで、風切り音を残しながら空を切ってしまった……。

男の背格好は、亮平よりも少し小さいくらいの体格で、髪型は黒髪のスポーツ刈り。顔は皺があり少し老け始め、服装は白の道着に黒帯を巻きながら、左胸の位置には一撃の文字が刺繍されている。

「（少し歳はいつてるが、こいつが今の亮平と同じくらいの実力だな……。さて、秋雨の野郎が言ってた“獣”とやらは何時出てくるかな……）」

逆鬼は、そう心の中で不敵に笑いながら亮平と相手の男が睨みあうリングへと視線を向けた……。

そして此処に、亮平にとって人生初の拮抗者との戦いが幕を上げた……。

第二十二話 地下闘技場（後書き）

はい、という事で次回に続く的な感じですよ。

ほっといたら文字数がとんでもない感じに成ってしまいそうだったので。

自重しました。

では、次回に会いましょうノシ

もうちょっと、綺麗に終われないものか……

第二十三話 『獣』（前書き）

今回は少し……てか、かなり自信ないです。



## 第二十三話 『獣』

ここ“地下闘技場”では現在……。  
無数のライトに照らされた四角いリング上で、二人の男が睨み合っていた。

「結構大きさに避けたな〜……おっさん」

一人は先程まで、無数の対戦相手を蹴散らしてきた男……。  
格好は、上半身裸・下半身ジーンズのみと言う、至ってシンプルな格好であるが……。

露にしている上半身の肉体は、およそ筋肉と簡単に表現出来るほど単純な物ではなく。

まるで綺麗にカットされ、匠にでも加工されたかのような鉾物……。  
そんな表現が相応しいくらいの肉体を誇っていた。

「ふん、若造が……お前程度の攻撃など、武道家の人間なら見えて当然だ」

そして、もう一人の若干老けた男。

この男の格好は、白い道着に黒い帯、胸には“一撃”の刺繍……。  
体格は先の男に劣るものの、道着の胸元から見える大胸筋は格闘技者そのものであった。

「そうかい……じゃあ、さっきまでやってた奴等は武道家じゃ無いと」

「そう言う事だ若造……」

二人はまるで世間話でもするかのように、周りで発狂している観客を放っておきながら、気軽に会話を続けていた……。しかし両者の瞳は、世間話をする和やかな雰囲気ではなく。これから闘う……。そんな武士もののぶの様な雰囲気醸し出していた。

「亮平！ 取り合えず、そいつはお前と同じ位の強さだから始めから全力で行け！！ 避けるのを面倒臭がるなよ！！」

今、リング上に居る一人に声を張り上げたのは。

先に紹介した男、鬼島亮平のセコンド役の“喧嘩100段”逆鬼至緒であり。亮平に向って声を張り上げながらアドバイスはしたは良いものの、その表情は不敵な笑みを浮かべていた……。

「この若造が私と同等だと、笑わせるな“喧嘩100段”！！」

逆鬼の言葉が気に食わなかったのか、道着姿の男は。ここまで試合が始まってから、未だにまともな構えを取っていない亮平へと接近して行く……。

『おおおう！！ 最初に動いたのは謎のおっさんの方だあ！！』

“地下闘技場”の実況が叫んだ通り、道着の男はノーガードの亮平に向って右足のよる鋭い足刀そくとうを繰り出す……。

「（あの蹴り方はやっぱり空手か……。なるほどな、やはり俺が睨んだ通りの実力だな！）」

逆鬼の考え通り、道着の男の足刀は亮平に向って一直線に。足を寝かせ、足の側面で亮平を射抜こうと、まるで槍の様に亮平の水月みづづき目掛け蹴り出されていた……。

しかし、その男の蹴りに対して亮平が取った行動は、単純かつ大胆なものであった……。

「（こいつ、前に出て来ただと!!?）」

亮平が取った行動は、道着の男の蹴りなど恐れる事も無いと言った風に。堂々と真正面から、自身の腹部を晒しながら、己の右拳を構えていた……そして。

ドスッ!!

「ぶぐッ!!」

シヤッ!!

「ッ!!?」

両者の攻撃は互いに相手の体に触れるも、道着の男の足刀は亮平の腹部に深ぶかと刺さり。亮平の右拳によるテレフォンパンチ（大振りで、相手に防がれやすいパンチ）は、蹴りを打つために半身になっていた、道着の男の右頬を掠めるに押し留まっていた……が。

『おおつとッ!! 今の交差でおっさんの頬から出血だああ!!?』

亮平の掠らされた男の右頬からは、横一門に切り裂かれたような切り傷が生々しく出来上がっており。その頬からは、既に真っ赤な血が男の頬を伝っていた……。

一方の亮平の方は、一瞬苦しそうな表情をするも、直ぐにケロツと表情を一変させ。自身が殴り損ねた男へと視線を向けた……。

「少し効いたが、これなら大した事は無いな……」

そう言いながら、亮平は不敵な笑みを道着の男へと向けた……。しかし、道着の男の表情は、不敵な笑みを浮かべる亮平とは違って。額に一筋の冷や汗を流しながら、驚愕の表情を亮平へと向けていた……。

「（この若造の打撃！！ 掠らせただけで、こちらの脳を揺らすかッ！？）」

道着の男は先程、亮平の打撃を掠らせてしまった事によって出来た切り傷よりも。それだけで、自身の意識を揺らされてしまった事に驚きのベクトルを置いていた……。そして、道着の男は思考に入り始めた。

「（それに、打撃の速度も先程とは段違いであった……。これは、“喧嘩100段”の言う通りかもしれぬな……）」

男はそこで思考を一旦切り、目の前で不敵な笑みを浮かべながらも構えを取っていない素人へと意識を向けた……。

「若造よ……今一度、名を聞こうか？」

その男の言葉に、亮平はフンツ！と鼻息を吹かしながら面倒臭そうに答えた。

「鬼島亮平、16歳だ」

「そうか、私は五十嵐直樹……ふん、私の歳はお前の丁度倍だよ」

五十嵐と名乗った男は、その言葉と同時にゆっくりと構えを取り始めた……。

その構えは、現代空手の物ではなく。純粹な武道に乗っ取った構えで、足は奥足である右足に重心を傾け、逆の左足は軽く前に置いているだけの形……所謂“後屈立ち”で。体は左肩を前にした半身両手は手刀しゅとうの形にしながら、右手で水月（“すいげつ”つまりみぞうち）を守り、左手は亮平に向けている……所謂、空手で言う“手刀構え”だ。対する亮平は、東戦でも見せた堂々たるノーガード……。そして最初に動いたのは、やはり先程と同じく五十嵐の方であった。

「セイイツ！！！」

五十嵐が放ったのは、後屈立ちの状態で構えていた前足での前蹴り……。

亮平はそれを先程と同じように、前に直進しながら右拳を構えている……。

そして、二人が再び交差する……。

ドスッ！！

「ちッ！！！」

五十嵐の前蹴りは、亮平の水月は先程と同じように捉えたが、亮平の動きはこれまた先程と同じように止まる事は無く、五十嵐の顔面に先程と同じ大振りの右拳を叩き込もうとしたが……。

「チエストオッ！！！」

ザスッ！！

「なッ！？？」

亮平の右拳が五十嵐の顔面に届こうとした瞬間。

五十嵐は蹴り出していた右足を引きながら、その足を引いた反動を使い。亮平の左鎖骨に体を跳ねる様に使って、空手の“手刀下し打ち”を斬り込んだ……。

亮平はその五十嵐の手刀によって、今まで味わった事の無い痛みを感じていて。

セコンド席に座る逆鬼はその光景に、少し関心したかのような表情をしていた。

「（ハッ！ 腹筋等の筋肉群に打撃が通らないなら、今度は骨につてか！ こりゃ亮平のやつ、流石にダメージ受けちまったな）」

逆鬼の言う通り、亮平は自身の左鎖骨を抑えながら。再度構えを取り出した五十嵐へと、敵意剥き出しの視線を送っている……。どうやら初めての痛みに対し、少し頭に血が昇り始めた様だ。

「（何だ今のは……。手の端っかわで打ってきやがった……。それに、少し骨の音が聞こえたぞ畜生！）」

「手刀は初めてのようだな、鬼島。……。だが、空手と私の手刀はこれだけでは無いぞ！」

そう言っつて、五十嵐は再び亮平へと接近を試みる……が。

今度は五十嵐よりも先に、若干キレ始めた亮平の方が五十嵐へと爆進していた。

「らあッ！……！」

亮平は、五十嵐へと接近を果たした瞬間に。先程よりも更に速い右拳を、五十嵐の顔面に叩き込もうとしたが……。

「フンッ！……！」

ガッ!!

「ちッ!!」

亮平の打撃はこれまた実戦では珍しい、五十嵐による“廻し受け”で防がれてしまった……。

「（こいつの打撃を、“捌き”と“スカす”以外では受けたく無いのでな!!）」

五十嵐は、亮平の右拳を“廻し受け”で捌いたと同時に。“廻し受け”の流れを使いながら、亮平の右拳を捌いた左腕とは反対の腕で、亮平の左米神目掛け“手刀顔面打ち”を放った。

ガンッ!!

「ッ!？」

普通の突きとは違い、手刀の打撃ポイントはかなり絞られた物だ……。  
それに伴い、五十嵐の手刀は亮平の米神をピンポイントで捉えていた。

だが、五十嵐の攻撃はまだ終わらない。

「セイッ!!」

ドスッ!

五十嵐は、米神を捉えられた事によって一瞬動きを止めた亮平に

対し。今度は反対の手で、亮平の右脇腹に“抜き手”を打ち込み……。

「ダッ！！」

ガスッ！！

「あぐッ！？」

脇腹を差し込まれた事によって、亮平が顎を下げた瞬間に。五十嵐は返しの右肘で、亮平の顎を打ち上げ……。

「チエストオッ！！！！」

ドスッ！！

顎を打ち上げられ、体を仰け反らせた亮平の水月に。五十嵐は槍の様に鋭い抜き手を突き刺した……。

『これは鮮やかに決まったああッ！！！！ 挑戦者五十嵐の抜き手が、ド素人鬼島の腹部に深々と突き刺さっているッ！！！！ これは文句なッ！！……』

五十嵐の連撃が実況の言う通り、まさに鮮やかに決まったのを観客達は確認していた。また、それに伴い、血の気の多い観客達は一斉に狂気に満ちた歓声を叫び始めるが……。

「あんまり……」

その地底の底から聞こえてくる様な低い呟きに……狂気に満ちか



けた観客達や、その他諸々の人間達は。まるで、信じられない物でも見るかのような表情をし始める……。

すると、その声を発した人物がゆっくりと仰け反った状態の姿勢を戻し始めた。

「あんま調子こくんじゃねえぞ？ おっさん……」

「これを受けて、その程度とはな……」

姿勢を戻し、その顔が正面を見据えた時。

会場を一瞬で黙らせた者、鬼島亮平の口の端からは一筋の血が流れていたが……。その相手の状態を確認しても、未だに抜き手を突き刺したままの五十嵐は勝利の予感ではなく、ただの不安しか抱けないでいた……。

「流石に効いたが……これじゃ俺は倒せねえよ」

ガッ！

その言葉と同時に、亮平は自身の腹部に刺さりっぱなしの五十嵐の左腕を掴み取った……が。

「シャッ！！」

ザスッ！！

「ッ！！」

五十嵐がただ掴まれる様な愚行を許すはずも無く、五十嵐は亮平に掴まれた腕を引き剥がすべく。亮平が無防備に晒している喉を、右手の中指のみで突き刺した……。

「がッ!?!…けほッ!?!」

「なるほど、先程のはやせ我慢か…ならばッ!?!」

五十嵐はそう言いながら、苦しそうに喉を押さえている亮平へと怒涛の猛撃を加えて行く……。

ガッッ!!

「ッ!?!」

五十嵐の手刀が亮平の鎖骨を捉え……。

ガンッ!!

「だッ!?!」

五十嵐の肘が亮平の米神を捉え……。

ガゴンッ!!

「ぶッ!?!」

五十嵐の正拳が亮平の顔面を捉える……。

もはや防戦一方になってしまった亮平の様子に、観客達は五十嵐の勝利を確信しながら歓声を上げていた……。しかし、この会場でただ一人、今の光景に疑問を持つものがいた……。

そう、梁山泊が豪傑“喧嘩100段”逆鬼至緒だ……。

「（亮平のやつ……さっきの“一本拳”を喉にもらってから、様子が可笑しくねえか？）」

逆鬼は今、自身の目の前に広がる光景に疑問を抱いていた……。

「（あいつの打たれ強さなら、あの程度で止まる筈がねえ……）」

今回、逆鬼は亮平の試合を観察し続けた結果。既に亮平の戦力や癖、性格や弱点なども見抜いていた……。それは、梁山泊の豪傑ならば当然の事なのだが。逆鬼はその見定めに基づきながら、現在起きている状況の可笑しさに言い知れぬ不安を抱き始めた……。

「（こりゃもしかしたら、秋雨の言ってた“獣”ってやつのお出ましか？）」

その思考と共に、逆鬼は再び意識を亮平の試合に戻した……。

『また入ったあッ！！』

実況の絶叫と共に、五十嵐の腕刀（“わんとう”）リアットみたいなもの（が亮平の首に当たった事によって。亮平の体がガクンッ！と左に揺れた……。

「セツ！！」

バゴッ！！

体勢の崩れた亮平に対し五十嵐は、更に崩れ行く亮平の顔面目掛け右肘を打ち上げる様に放ち。亮平の顔面を打ち上げる……。

「しゃッ!」

バチイイッ!!!

『ハイキツクウウッ!!!!』

そして、顔を無防備に打ち上げた亮平に対し。五十嵐は体のバネを使った左上段廻し蹴りを蹴り放ち、その蹴りは正確に亮平の頭を捉えた。

「(やべ……もらちゃったよ)」

その時、亮平は戦いの最中だというのに、深い意識の底で思考を巡らせていた……。

「(ああ……このおっさん、調子乗りやがって)」

ドゴッ!!

しかし、亮平の思考の最中でも。五十嵐による攻撃の嵐は止まない……。

「しゃあッ!」

ドッ!!

「(大体なんなんだよ……さつきから)」

亮平のこの言葉は、別に五十嵐に向けられたものではない……。だが、そんな思考の中でも今放たれた五十嵐の肘打ちは、亮平の

肝臓を正確に打ち抜いていた。

しかし、それでも亮平は倒れないし、また五十嵐も攻撃の手を緩めない……。

そして、五十嵐が亮平の顔目掛け、全身のバネを使った飛び膝蹴りを放った時……それは起きた。

ガシャツ!!!

『五十嵐の膝がド素人に突き刺さったああッ!!!』

ギヤリンッ!!!

「ッ!!!!!?」

それは、先程から亮平の“意識の中”で暴れまわっていたもの……。

その暴れまわっていたものが、何かの枷……。いや、鎖の様な金属を引っ張った音が亮平の深い意識の中で響き渡った……。

「(なんだ、お前……出たいのか?)」

亮平はその時、自身の内で暴れまわる何かを無意識の内に理解していた……。

『五十嵐の右……ッ!!!』

ギリギリ……

そんな中でも、五十嵐が攻撃をやめること無い……。

だが、五十嵐が亮平に攻撃を加えることに。亮平の“意識の中”の何かが、確実に枷である鎖を引き千切るうとする音が、亮平には

聞こえていた……。

「(やめろって、お前が出たらヤバイんだって……)」

ガゴツ!!

五十嵐が左の肘打ちを亮平の右米神に叩き込む……。だが、亮平は既にそれどころではない……。

「(まあ……でも、良いのかな？ 逆鬼さんも、全力を出せって言ってたし……)」

亮平の意識が徐々に薄れ始めて行く……。

また、それに伴って鎖が引つ張られる音も大きくなって行く……。

ガギヤツ!!!!

「(痛ええ……)」

五十嵐の頭突きが、亮平の顔面にめり込む……。それと同時に、亮平の目から力が失われる……。

「(もう……いつかな……)」

バチイイイ!!!!

『再びのハイキックううツ!!』

五十嵐の上段蹴りが入り、亮平は前のめりで倒れこもつとする……が。

バキイインツ！！！！

その時、亮平の中で、何やら金属が引き千切られる甲高い音が響き渡った……。

『これはついに……は？』

「な、なんだと……」

その光景に、ここに居る観客達は愚か、先程まで熱い実況を送っていた者や。亮平に今まで攻撃を加えていた五十嵐、また他の準達人級の者達までもが驚きの表情を露にしていた……が。この会場で只一人、現在の状況を冷静に見守る者が居た……それは、亮平のセコンドに付いていた逆鬼至緒であった。

「（出やがったな……“獣”がッ！！）」

ここ“地下闘技場”のリングで、現在起こっている光景は。

五十嵐の上段蹴りを綺麗にもらってしまい、遂に力尽きたかに見えた亮平が。倒れかけた体を瞬時に正し、目の前で勝利を確信していた五十嵐の事を無視しながら……。何やら異様な光を宿す瞳で天を仰ぎ、ポーっと佇んでいる……そんな光景であった。

「……………」

そして亮平が、ゆっくりと視線を下しながら目の前の敵、五十嵐を確認する。

すると……。

ガシッ！！

「ッ!?!?」

今までボーっとしていた亮平が突如動き出し、目の前で現状が理解出来ないでいた五十嵐の“両耳”を両手で鷲掴みにした……そして。

グシャツ!?!?!!

亮平は、五十嵐の“両耳”を鷲掴みにしたまま。五十嵐の頭を思いつきり下に引き込み、そしてそのまま五十嵐の顔面に左の膝をぶち込んだ……。

「~~~~~ッ!?!?!?」

それによつて、五十嵐の鼻、眼底は“砕け”。辺りに鮮血と折れた白い歯を撒き散らせながら、五十嵐の体を軽く宙に打ち上げさせた……。また、亮平に鷲掴みにされていた“両耳”は両方とも千切れかかっていた……。だがそれでも、亮平の狂気とも思える行動は終わりを見せない……。

「……………」

自身が打ち上げた五十嵐に向つて、亮平は己の右拳を構える……。もしこの時、五十嵐に意識があったのなら。亮平が今握っている拳が、自身の顔面を潰すために発射される巨大な鉄球に見えていたであろう……。

「……………」

そして、その亮平の右拳が……。



意識を既に失っている五十嵐の顔面に向かって何も躊躇することなく、突き放たれた……。

第二十三話 『獣』（後書き）

こんな展開、ゲレゲレ大好きです。

また、『あれ？ これってなんだか……』と感じた人はノータッチで御願います。

そして、次回は時間を少し飛ばそうかな？っと思っています。

ではノシ

## 第二十四話 事後処理？（前書き）

サブタイ、こちらでも何でつけたのか謎です。

そして、時間を飛ばすと言っておきながら……。

## 第二十四話 事後処理？

結果から語ると……。

亮平の拳は突如、亮平と五十嵐の間に割って入って来た逆鬼によって止められた。だが、亮平は突然目の前に現れた逆鬼に対しても攻撃を加えようとしたのだが……。それも、逆鬼の“拳骨”一発で亮平は意識を完全に失い、逆鬼への攻撃は未遂に終わった。

だが確かに、未遂で済んだのだが……。

今回の光景を目の当たりにしてしまった観客達は。いくら慣れているとはいえ、突然の出来事に皆呆然とリング上を見つめていた……。

流石に逆鬼も、この状況は居心地が悪かったのか。気を失った亮平を担ぎながら“地下闘技場”を後にしたのだった……。

### 閑話休題

そして現在、亮平は秋雨と剣星によって怪我の治療を済ませ。“地下闘技場”での出来事など、まるで最初から無かったかのように、気持ち良さそうに梁山泊の居間で眠っている……。

「で……鬼島君の“本質”は、一体どんな感じだったんだい？」

亮平がぐっすり眠る横で、治療を終えた秋雨が。居間の隅っこでビールを飲み続けている逆鬼に、落ち着いた口調で言葉を投げかけた……。その問いかけに、逆鬼はビールを飲むのを中断させ、面倒臭そうに言葉を返した。

「ああ、確かに“獣”染みだ“匂い”はしたぜ……だが、それよりもだ」

「……………」

秋雨は逆鬼の話しを、寝ている亮平の横で正座をしながら聞いている……。

「俺にとつちやあ、亮平が相手の野郎に止めを刺そうとしていた最後の一撃に……。 “殺気” が込められていた事が気になったがな……」

「……………そうか、“殺気” が込められていたか」

その逆鬼の言葉に、秋雨は珍しく眉毛をピクリと動かしながら相槌を打った……。

そして、逆鬼は言葉を続ける。

「俺の見立てじゃあ早く亮平に“抑え方”を教えねえと。その内、マジで死人が出るぜ？」

「……………」

逆鬼の言葉に、秋雨は何やら考える素振りをし始める……。

そして、暫く経った後、この雰囲気の流れに乗りながらゆっくりと口を開いた。

「分かった、取り合えず今回の事は長老が帰ってきてから、私が直接話すでしょう」

秋雨はそう言いながら、自身の横に敷いてある布団でグッスリ眠っている亮平へと視線を向けた。

「（本当は、これ以上鬪いに身を投じなければ良い事なのだが……。君の様に、力を持った人間には自然と、鬪争の方が“向こうからやってくる”……）」

そして秋雨は、今までの表情を一変させ……。何故か亮平にダンディズムが漏れ出す微笑みを向け始め。

「（だが安心したまえ、我々梁山泊の内弟子の友人である君を“そっちの世界”でも道を外さぬように、“確り”と“私達”が導いてあげよう……）」

もしこの時、亮平が目を覚ましていたのなら。目の前で不気味（実際は普通に）に微笑んでいる秋雨に、背筋を凍らされていたかもしれない……。

ちなみに、亮平が今回鬪った方々は……。岬越寺接骨院と剣星が経営する針灸院経由で、梁山泊の経営資金に換金された。また、今回亮平が稼いだお金は、亮平の手取りは2割、逆鬼の手取りは残り全てと言う……。何とも理不尽な配分をされたしまったが。亮平自身は気付いていないので（元々、お金を稼げる事は知らなかった）よしよし……。……。

【オセロ】

「ん……ここは……」

その言葉を発したのは、昨晚“地下闘技場”で逆鬼に寝かしつけられた人物。

つまりは亮平の事だ……。

「……梁山泊か？　ここは……」

亮平は目を覚ました瞬間に見た天井が、自身が見慣れた古い木製の物だった事から。自分が現在、何時の間にかに寝ていた布団の上で言い当てた……。そして亮平がゆっくりと体を起こすと。

「ッ！？　あゝ、段々思い出してきたわ……」

体を起こしたと同時に襲ってきた痛みにも、亮平は昨晚の事を思い出していた……。

「（確か、五十嵐とか言うオッサンにボコられそうになって……。それから確か……そうだ、急に頭がスッキリしたんだっけか。あゝ、思い出した……）」

「お！　気付いたみてえだな！！」

亮平が昨晚の事を思い出した瞬間に、亮平が寝ていた居間に逆鬼

が入って来た……。

「すみません逆鬼さん、昨日は迷惑をお掛けしました……」  
「何だ、覚えてたのか？　じゃあ話しは、はえ〜な！！」

申し訳無さそうに頭を下げた亮平に、逆鬼はそんな言葉を投げかけた。

すると、困惑の表情を亮平は浮かべ始めたが、逆鬼は言葉を続け始めた……。

「昨日の記憶はどこまで覚えてんだ？」

「逆鬼さんに“拳骨”もらう寸前までです」

「そうか、亮平、お前秋雨から“動”の気ってやつを聞いてんだよな？」

「はあ……良く分かりませんでした」

亮平は、これから逆鬼が言おうとしている事が全く分からないため、取り合えず話しに流される事にした。

「昨日、お前が最後に感じたのが“動”の気ってやつだ。あの時、お前は何を考えてた？」

「そうですね……何だか頭が急にサッパリして。取り合えず目の前の敵を倒そうかなと……」

「その時、お前は何も“抑えよう”とはしなかったのか？」

「……いや、“抑える”もなにも。ただ勝手に体が動いて、そのまま流された感じでした……」

その亮平の言葉に逆鬼は一度、手に持っていたビールを一飲みしてから言葉を返した。



「そりゃ、完全に“飲まれてた”証拠だな」  
“飲まれてた”？」

逆鬼の言葉に、亮平は疑問を返す。

「秋雨の奴から聞いてると思うが、“動”の気ってやつは、一時の感情に流されやすいタイプなんだ……。亮平、今回のお前みたいに“流され方”を間違えちまうと、いま俺が言った通り“飲まれちまう”のさ……」

“流され方”を間違える？……どういう事っすか、それ？」

武道の心得が皆無の亮平には、全くと言って良いほど理解出来ない内容であったが。逆鬼は更に話しを続ける……。

「まあ良いから黙って聞け……。取り合えず、今回のお前は“動”の気に身を任せたは良いが。お前はただ、その“動”の気ってやつに身を任せたただけだった訳だ」

「……」

「本来なら、身を任せながらも、てめえでコントロールするんだが……。簡単に言っちゃえば、お前は今回、喧嘩には勝ったがてめえには負けたって事だ」

「自分に負けた……ですか」

「そうだ！」

逆鬼は亮平の言葉に答えつつも、手に持っているビールを飲み干す。

「プハッ！！……ま、俺が言ってるのは喧嘩に勝つなら、てめえにも勝って事だ！！」

「はあ……」

亮平は、今の説明で有る程度は理解したのだが。未だ、少し引つかかる所がある様な返事を返した。

「分からねえなら、今度じじいに聞いてみな。少しは理解出来るだろうよ……」

「あ！ 起きたじよ！！ お兄ちゃん！！ 『おにっち』が起きたのだ〜！！！」

逆鬼が話しを締めようとした時、この居間に入って来た兼一の妹。白浜ほのかが、声を張り上げながら兄である兼一を呼びに行った……。

亮平は、何故ほのかが居るのか不思議に思ったが。取り合えず頭が少しボーっとし始めたので、ほのかが呼んだ兼一が来るまで待つ事にした……。

「じゃ、俺はこれから酒でも買って来るかな！」

話しが終わった逆鬼は、そう言いながら居間から出て行くところ……が。

それは、亮平の言葉によって止められた。

「逆鬼さん」

「なんだ？」

亮平に呼び止められた逆鬼は、亮平に背を向けたまま答えた。

「“手加減”って結局、自分の全力が分からなきゃ出来なかったんすね」

「ハッ！！ 今更気付いたのかよ！」

亮平は笑みを浮かべたまま、逆鬼にその言葉を送る。

そして逆鬼も、背中越しからでも分かる声のトーンで、亮平に笑いかけた。

このやり取りを最後に、逆鬼は今度こそ酒を買いに行ってしまった……。

「（今回でハッキリと分かった事と言えば。俺はただ今まで、自分の力配分を間違えていただけって事……それだけだな）」

フツと、亮平は自嘲的な笑みを零しながら、そんな事を考えていた……。

すると其処に、妹の声を聞きつけた兼一が、稽古中の道着姿のままで現れた。

「亮平君!! もう起きて大丈夫なの!？」

「ん? 兼一か、大丈夫だぞ。特にこれといって……」

「岬越寺師匠から聞いたけど……何か亮平君は胃袋とか、内臓系にダメージがあつたみたいだよ?」

その兼一の言葉に、亮平は少したじろいだ。

だが、兼一の言葉は続く……。

「でも、岬越寺師匠は“大した事は無い”って言って、馬師匠も“とっておきの薬”を飲ませたって言ってたから……」

「そ、そうか……なら、本当に大丈夫なんだな」

亮平は取り合えず、自身が今回のダメージを意識してしまう前に、兼一の言葉を止めたのだった。

また、“とっておきの薬”にも引っかけかりを覚えたが、亮平はそ

の事を無視する事にした。

「それと昨日は逆鬼師匠と、どこに行ってたの？ 師匠達に聞いても、皆教えてくれないんだ……」

「いや、特に特別な所じゃ無いさ……。ただ、好き勝手に喧嘩出来る所に行ってただけだぞ？」

「そ、そうなんだ……僕は行きたくないな、そんな恐ろしい所（亮平君がこんなになっちゃう所に、僕なんかが行ったら殺されちゃうよ……）」

亮平は、兼一の師匠達が教えるのを避けているのを確りと感じ取り。取り合えずは適当に、はぐらかす方向で兼一に教える事にしたのだが……。兼一の方は、何かに怯えているようであった。

「おにつち！ オセロやるじょ！！」

すると其処に、兼一の妹であるほのかが割って入って来た……。その後ろには、アパチャイとしぐれの姿もある……。

「こらほのか！ 亮平君は寝てなきゃいけないんだ、我俣を言うな！」

「良いつて別に、オセロぐらいなら目覚めの運動には丁度いいし」

「甘やかしちゃダメなんだよ、こいつ直ぐ調子に乗るから……」

「妹に向って、こいつとは何だじょ!？」

亮平は突然言い合いを始めた兄妹を見ながら、微笑ましい気持ちに自身がなっていくのを感じていた……。

「別に良いから、兼一も練習中だろ？ 早く行かないと、ヤバイんじゃないか？」

「あ！ そうだった！！ ごめん亮平君、取り合えずほかの相手は適当で良いからさ……」

「ああ、分かったよ。じゃあ、早く行って来い！ 岬越寺さんに“しばかれる”前にな！」

「うん、じゃあ後で！」

兼一はそう言いながら、梁山泊の庭へと向って行った……。  
そして亮平は、オセロ板持ったほかにかに視線を向ける。

「さて、オセロだな……言っとくが、俺は手加減しないぞ？」

「上等だしよ！！ 掛かって来るのだ！！」

その潔いほのかの宣言と共に、亮平対ほのかのオセロ対決は幕を揚げた……。

……

……

……

…

「あれ？」

「おにつち弱過ぎるのだ……」

亮平は今、まるで信じられない物でも見るかのような視線を、自身の前に置いてあるオセロ板へと向けていた……。結果自体は亮平の敗北なのだが、それよりも二人が対決をしたオセロ板の方が衝撃的な光景を露にしていた。

「全部まっ……くる」

「亮平弱すぎだよ！ これならアパチャイの方がまだ強いよ！」

しぐれが呟いた様に現在、亮平達の前に置いてあるオセロ板の表面は……。

ほのかの駒であった黒色が、全マス埋め尽くしていて。もはや亮平には、言い訳すら許されぬ状況であった……が。亮平は、今のアパチャイの発言に食いついた……。

「それは聞き捨てならないですね……アパチャイさん？」

「本当のことよ亮平！ 今度はアパチャイとやるよ！」

亮平は若干現実逃避をしつつ、矛先を今度はアパチャイへと向けた……そして。

……

……

…

「やった〜！ アパチャイの勝ちよー！」

「は、はは……マグレだよな？」

そして再び、亮平達の前に置いてあるオセロ板が真っ黒に染められてしまった……。

「お前、才能ない……な」

「いや、じゃあ次は香坂さんとやりましょうか！」

亮平は若干ヤケになりつつも、今度はしぐれの方へと矛先を向け  
たが……。

……

…

「お前、本当にオセロ下手……だな」

「そ、そんな馬鹿な……」

今度は表面を一色には染められなかったものの、亮平はしぐれと  
のオセロ対決で20枚差の大敗を喫してしまった……。

しかし、亮平はまだへこたれない。

「いや、俺は弱くない筈だ！！ 香坂さん、そのネズミとやらせて  
下さい！！」

その言葉を発した亮平の目は、既にプライドは捨て、恥もクソも  
あったもんじやない血走った目をしていた……。その亮平の様子に、  
しぐれの友達であるネズミ、鬨忠丸は首を振りながら『ヤレヤレ』  
と言った感じのジェスチャーを示した……。

「うをのおれい……たかがネズミ如きが……」

「ネズミじゃな……い、鬨忠丸……だ」

もはや、人としてのプライドを捨てた亮平に……。

「チュツ……（掛かってきな……）」

そんな風な態度で鬨忠丸は、亮平に向かって器用に中指で『掛かって来い』のジェスチャーをした。

……

…

「あ、ありえねえ……」

「チュ……（やれやれ、あっけなかつたな……）」

もはや人類史上初ではないか？……亮平はネズミである鬨忠丸にオセロで分殺をかまされていた。

そのオセロ板の表面はもちろん真っ黒である……。

「ネ……ネズミ如きにい……」

亮平は、某サ○ヤ人の王子の様な悔しそうな声をあげていた……するとそこに。

「あら、鬼島さん。もう動いてもよろしいのですか？」

そこに家事を終え、漸く一息を着こうかと言うエプロン姿の美羽が現れた。

すると亮平は視線を一瞬で美羽に向け、振り絞るような口調で言葉を発した……。

「風林寺さん？ 一回で良いから、俺とオセロをやらないか？」

「良いですわよ。今しがた、家事も終わったので問題ありませんわ」

美羽は笑顔で、精神的にボロボロな亮平の言葉に答えた。



そしてここに、亮平最後のプライドを掛けた男？の闘いが始まりを迎えた……。

……

……

……

……

……

…

「ハッ！ 相手にならないねッ！！ 出直してきなあッ！！！！」

「ぐぬぬぬう〜……（鬼島さんの顔、本当にムカつきますわ！！）」

亮平はギリギリで美羽に勝利を収めていた……（三枚差で）。

そして勝利を得た亮平は、目の前で悔しがる美羽に対し。鼻を広げ、口端を吊り上げ、視線は当然の様に相手を見下す……完全に勝ち誇った、美羽の言う通り本当にイラッとする顔をしていた。

「成績は優秀、家事も完璧、加えて容姿端麗、運動神経抜群の風林寺さんでも！ オセロが弱いんじゃないじゃあお話しにならないねえ！！！！」

「オセロって……」

もはや恥じも外聞も捨てた亮平に、周囲の目は哀れみの色で溢れていたそうなの……。

「ハハハハッ！…！ どうだよ！？ 俺はオセロ強いんだぜえい？  
ハッハッハッハア…！」

今の亮平には、おそらく誰の声も届きはしなかったであろう…。

第二十四話 事後処理？（後書き）

最近、描写不足が目立ち始めたゲレゲレです。

取り合えず、亮平は手加減のコツを少しだけ掴みました。

そして、今回の亮平の勝ち誇った顔は。

稲中の前野がする顔に近い表情です。

分かりづらいですね……。

では、次回はカニを飛ばして……海、やるのかな？

多分、それすらも飛ばすかもしれません。

ではノシ

二十三・九話（前書き）

すみません、やっぱりここ書かせてもらいます。

既に二十四話を読んでしまわれた方にはややこしいですが。

申し訳御座いません、書いてしまいました……テへ

## 二十三・九話

気を失い、宙を舞っている五十嵐の顔面に、亮平の右拳が迫る……。

その拳は、正に狂気と形容するに相応しい代物……。

相手に掠めただけで脳を揺らす程の威力を秘めている拳……。

当たれば確実に致命傷は免れぬ拳……。

その拳が、五十嵐の顔面に当たるかと言う瞬間。

亮平と五十嵐の間に、一人の豪傑が突然割って入って来た……。

バチイイイ!!!!!!

「ッ!!!?」

その豪傑は、亮平が五十嵐に振り抜こうとしていた右拳を左の掌で受け止めた。

「こりゃ、想像以上に面倒臭えのが出てきたな……」

豪傑はそう言いながらも、亮平の拳を掴み続けていた……。

また、亮平の拳から難を逃れた五十嵐は。宙に舞っていた体を地面に叩きつけ、そしてそのまま意識を深層へと落としていった……。

「ダッ!!!」

亮平は、自身の拳を掴み続けている豪傑に対し。開いていた左拳を振り抜こうとした……が。

「見境なしかよ」

ガッ！！

「ッ！！」

しかし、その亮平の左拳は、豪傑が右前腕で外へと打ち払った事により無力化されてしまう。

この豪傑の受けは“内受け”と言う、空手では基本中の基本な受け方であった……。

そして、右拳を掴まれ、左腕を外へと打ち払われた亮平は。目の前に佇む豪傑に真正面で、己の顔面を晒してしまう……よって。

「まあ、大人しく……」

豪傑はそう言いながら、己の右拳を脇に構え……。

「寝てろつてのッ！！」

ガゴンッ！！！！

その構えた右拳を、無防備に晒された亮平の顔面へと叩き込んだ。この豪傑の“正拳突き”は、空手の三戦サンチンの形で、正に基本通りで突かれたのだが。その拳速は、常人では視認出来ない程のスピードであった……。

これにより、先程まで殺気立っていた亮平は完全に沈黙してしまった。

「ま、さっきまでのダメージもあるから……。気を失って当たり前か」

豪傑はフンツ！といった感じで、溜息をつきながら気を失った亮平を見据える。

そして豪傑は、気を失い、リング上に倒れ付した亮平を軽々と担ぎ上げた……。

「（それにしても、さっきのコイツの拳に感じた“殺気”は……。明らかに、本気で殺すつもり物だったな）」

豪傑はそんな事を考えながら、亮平にやられた五十嵐の方へと視線を向ける。

其処には、白いリング上に鮮血を飛び散らせ、亮平の膝をもらってしまった顔面は。まるで、何か丸い鉄球の様な金属をぶつけられた様に陥没していた……。

だが豪傑は、この者がもう助からないとは考えてはいなかった。

「（これくらいなら、秋雨のやつに診せれば大丈夫だな……）」

亮平の打撃を片腕で止め、あまつさえ亮平を“一撃”の名の下に沈黙させた豪傑の名は。梁山泊“喧嘩100段”逆鬼至緒。

そして逆鬼は、梁山泊関係者なら誰もが知っているスーパード・岬越寺に、完全に非常識な怪我を負っている五十嵐を任せようと考えていた……。

「（それにしても、観客の連中も流石に黙り込んだな……）」

逆鬼の言う通り、先程まで狂気に溺れていた観客達も。亮平が突

然起こした現象に、ただただ言葉を失っていた……。

「(ま、当初の目的も果たせし、ついでに纏まった金も手に入れたからな。そろそろ帰るとするか)」

逆鬼は亮平を担いだ状態のまま、リングから飛び出し。一瞬でこのオーナーらしき人物の下へと、着地したのであった。

「オーナー、こいつが今日稼いだ金と、こいつが今日倒した連中をトラックにでも積んで。俺が指定した場所まで運んで置いてくれ」「しょ、承知致しました、マスター逆鬼……」

突然自身の目の前に降り立った逆鬼に怯えつつも、オーナーである白スーツの男はキツチリと仕事をこなしていた。

そして逆鬼は、亮平を担ぎながら出口へと向って行く。

「じゃあな！ オーナー！ 俺はここで帰らせてもらうが、後は楽しくやってくれ……」

出口に向う途中、逆鬼は振り返りながらオーナーである白スーツの男に向って、そんな言葉を投げつけたのだった……。



二十三・九話（後書き）

短いですが、こんな感じで亮平は落ち着きました。

そして、実は既にPV42万。  
ユニークアクセス3万8千。

こんな行き当たりばつたりな小説を読んで頂き。  
大変感謝致しております事を、ここに申し上げます。

ではノシ

第二十五話 二人の違い（前書き）

前回は申し訳ありませんでした。

今後は、なるべくしない様に心がけますが、  
いつかまた、やらかしそうで怖いです……。

## 第二十五話 二人の違い

「見る！ ラグナレクの辻に負けて以来、学ランでの貴様の順位は急降下だぞ！！」

ここは、亮平達の教室である1年E組。  
そこに、人類とは思えぬ男の声がこだました……。

「失った信用を取り戻すというのは大変なんだぞ。分かってんのか兼一！！」

人類とは思えぬ男……いや、宇宙人の皮を被った悪魔“新島春男”は。

お手製の電子手帳のディスプレイを兼一に向けながら、興奮した面持ちで言葉を続けていた。

その電子手帳には、折れ線グラフで現された兼一の学内ランキングが表示されていた。また、折れ線グラフの形は、新島の言う通り坂を滑り落ちる様な右肩下がりがだ。

「何が言いたいんだ、宇宙の人？」

だが兼一は、興奮する新島に対して昼食を食しながら鬱陶しそうに言葉を返した。

ちなみに、既に兼一は隠れながら昼食を食べる事はしておらず。堂々と、美羽と机を並べながら昼食である弁当を食している。

新島はこのクラスの間人ではないので、当然席は無く、座っている兼一に対して上から目線で言葉を投げかけていた。

亮平は、今日は食堂ではなく、友人である姫野と共に昼食を取っていて。姫野の親友である泉は、亮平と姫野と共に食しているが、

ひたすらに兼一と美羽の方向を凝視し続けていた……。そんな中、姫野お手製弁当を貪っていた亮平が、我関せずの態度を取っていた姫野に話しかけた。

「この玉子焼きって、姫野の好みか？」

「え……ああ、甘いでしょ？ 塩っぱい味ばつかじゃ、弁当でも飽きるしね。私はいつも甘めの玉子焼きを入れてるんだ」

「ほ……確かに、これは味のメリハリが出て食べやすいな」

兼一と新島が揉め、それを美羽がただ成り行きを見守り、亮平と姫野は弁当雑談、泉は兼一をひたすら見続ける……。そんな統一感が全く無い中、1-Eの昼休みは進んでいく。

「そういえば鬼島、あんた今週の休み空いてるか？」

「ん？ 空いてるけど、どうしたんだ？」

すると突然姫野が、亮平には視線を向けず。そっぽを向きながら、気恥ずかしそうに亮平に対して質問を投げかけてきた。

「じゃ、じゃあさ……今週の土曜日に、私と服でも買いに行かないか？ いきなり部活が休みになって、暇になっちゃったから」

「いいぞ、俺も丁度夏服がまだ欲しかったからな」

「そ、そうか！ じゃあ、土曜の10時に待ち合わせな！」

「（姫野ちゃん、やったね！ でも、私一人置いてきぼりなのは勘弁して欲しいな……）」

亮平の承諾に、姫野は本当に嬉しそうな表情で感情を露にした……しかし。

この机の塊には、泉の存在も有る事を忘れてはならない……。すると、亮平の携帯にとある人物から着信が届いた。

「ん？……（なんだ、キサラ姉ちゃんか……）」  
「どうしたんだ？」

姫野の問いかけに亮平は、なんでもないと答えながら。自身の携帯に届いたキサラからのメールを確認する。

「（“日曜暇か？”って……まあ暇だな）」

亮平はそのキサラからのメールに、“暇”とだけ書いた内容を返信した……すると。

「（お、早いな……“じゃあ、日曜午前に買い物に付き合え”ってま、いつか……）」

今度も亮平は、その内容に対して。“分かった”とだけ書いたメールを返信した。

「誰からだ？」

すると、亮平のメール相手が気になったのか。姫野が、メールを終えた亮平に問うてきた。

「幼馴染。一つ上の先輩だよ」

「そうか、じゃあ土曜日なんだけど……」

「ええい！！ 親友がこんな心配してやってるのに……！！」

「知るか！！ そんな、お前がお前のためにお前の汚れた手で作り上げたランキングなぞ……！！」

姫野が休日の計画の話しに入ろうとしたと同時に。今まで言い合

いを続けていた兼一と新島の怒声が、教室じゅうに響き渡った……。その声に、流石に何事かと感じた亮平と姫野は視線を兼一達の方へと向ける。

其処には、四つん這いになった新島の尻に、兼一が弁当を食しながら座っているという。初見はお断りみたいな風景が広がっていた……。

「大体僕は、ランキングとかで威張り散らすために、武術をやっている訳じゃない!!」

「ほう、では何のためにやっている?」

すると、兼一の言葉に新島が敏感に反応をし始めた……。

どうでも良いが、兼一は流石に新島の尻からどいた方が良いのではないかと、亮平は感じていた。

「べ……別に、何でも良いだろ」

「人に堂々と言えない様な動機で武術やってんのか!? なめんなこら! あ〜ん!!」

新島の返しに、兼一は言葉を濁してしまふ……。

そして新島は、これ幸いと中指を立てるジェスチャーをしながら、兼一へと毒づく……。

「悔しかったら、納得出来る理由を言ってみろ!!」

兼一はこの新島の言葉に怒ったのか、何やら真剣な表情へと顔つきを変える……。

「(兼一が格闘技をやってる理由か……俺はちゃんと覚えてるぞ。ちゃんと、な……)」

兼一が表情を変えると同時に、亮平の表情もどこか懐かしむ様な表情へと変わって行く。

そして、真剣な表情をした兼一が、ゆっくりと口を開き始めた……。

「誰もが見て見ぬ振りをするような……」

兼一が喋り出すと同時に、教室中の空気が静かなものへと変わって行く……。

皆が、兼一の言葉を聞き漏らさぬようにしているかの様であった。

「悪人を片っ端からやつつける……正義の味方ヒーローになりたいんだ僕は」

この兼一の言葉に、教室中の人間たちがシーンと静まり返る……。そして、一拍の間が過ぎ去った瞬間に。兼一に向けて何処からとも無く拍手が送られ始めた。

「え？」

その皆の拍手に、兼一は驚きの表情を見せる……。

この兼一の状況に、亮平は静かに優しくそうな視線を送り。美羽はどこか嬉しそうな表情をしていた。

「おお！ すげーよ！ あんな臭えー台詞、真顔で言い切ったぞ！」

「前々から不良に一人で立ち向かっているとは聞いていたが……」  
「良いぞ兼一！ 密かに俺達、お前に期待してたんだよ！」

すると、クラス中の人間たちから、兼一に向けて賞賛の声が投げ

かけられる。

その様子を見ていた亮平と姫野は……。

「へー言うじゃんあいつ、私そういうの嫌いじゃないんだよね!」

「ま、兼一なら最初からあんな考えだったしな……」

姫野は兼一の事を素直に褒め称え、亮平は当然と言った表情で答えた。ちなみに、泉は既に兼一の下へと向っていた……。

「でも、何であんたは違うのかな?」

「何がだ?」

姫野の疑問の言葉に、亮平は質問で返した。

「だって、あんなだって不良とかやつつけてるじゃない? でも他の連中は、あんに期待はしてないだろ? ちょっと可笑しいなって、そう感じちゃってね」

「それなら簡単だぞ……。だって、兼一は言っちゃ悪いが“元イジメられっ子”。俺は、始めから兼一の立ち位置とは程遠かった人間、ましてや話した事無い奴等には、俺も不良に見えてるみたいだしな」

「ふーん、そんなもんなのか」

「そんなもんだ……」

そんな会話をしながら、亮平達は学校での昼休みを満喫していた……。

亮平と姫野が話している間に、新島が兼一に。自身がいかに皆から期待されているのかや、今後の相手となる人物を示唆していたのだが。

兼一はその相手の写真を確認した瞬間に、なにやら何かのトラウマスイッチでも入ったかのように発狂し始めた……。



どうやら、相手の髪量が、自分が以前負けた相手“辻新之助”と似ていたらしく。その事で、負けた時のシヨックが蘇っていた様であった……。

### 閑話休題

学校も終わり無事、帰宅した亮平は。

自身の住まいである、マンションの一室の扉を開けた……。  
亮平のマンションは、オートロック式の扉が付いている程の綺麗なマンションで。とても、高校生が一人で住む様な場所では無かった……。

自分の住まいに帰宅した亮平は、廊下を進み、カウンター式キッチンに設置してある冷蔵庫から。一本の牛乳を取り出す……。  
そして亮平は、キッチンの食器棚からコップを取り出し、カウンター式キッチンから出て。その前に設置しているテーブルの上にコップを置き、パック式の牛乳の口から真っ白な牛乳を注ぐ。

「（やっぱり、帰って来た直後は牛乳に限るな……）」

そんな事を考えながら、注いだ牛乳を飲み干した亮平のポケットから、“ゴッ○・ファーザー”の着信メロディーが流れ出した……。

「（この曲は……キサラ姉ちゃんか）」

亮平は設定した音楽で、着信してきた人物を当てると。そのままポケットの中から携帯を取り出し、通話ボタンを押した。

「どうしたんだ？ 久しぶりじゃん、俺の携帯に電話掛けて来るなんて？」

『別に、日曜何処に行きたいか聞きたいだけだ』

亮平の問いかけに、キサラは特に気にした様子無く答えた。

「あ〜……。じゃあ、普通に街でも周る？ 場所なんて、歩きながら見つければ良いし」

『そうだな……。そうするか。取り合えず、また連絡するかもしれないから』

「了解、そう言えば……」  
『ん？ どうしたんだ？』

亮平の言葉に、キサラは少し気になった様子の口調で言葉を返した。

すると亮平は、本当に気になっていたかのような雰囲気、携帯越しのキサラに口を開いた。

「水着って買わないのか？ 俺、今女の子がどんなの着るか黙ってる、じゃあな』……切れた」

亮平の言葉を聞き終えるまでも無く、キサラは亮平との通話を無理やり切った……。

「（ちょっと気になっただけなんだけどな〜……）」

もうキサラの声が聞こえなくなった携帯を、亮平は見つめながら。そんな事を考えていたのだが……。

「(ま、いつか……。取り合えず、土曜姫野に日曜キサラ姉ちゃんね……。はは！ 何だかモテ男の気分を味わっている気分になるな、これ！)」

流石に、二人の女子から誘いを受けた亮平のテンションはうなぎ上りだ！！

そして亮平は、その余韻が冷めやらぬ内に。夕飯の準備を済ませて置こうと、カウンター式のキッチンへと消えていった……。

## 第二十五話 二人の違い（後書き）

PV45万、ユニークアクセス4万、総合ポイント10000pt

正直信じられません、ビックリです。

本当に、このようなゲレゲレの気分次第小説を読んただき。  
有難う御座います……。

日常が苦手で、戦闘描写が得意？なゲレゲレですが。  
今後とも頑張つていきます。

また、カニと海は。

今回の話しを使つてすつ飛ばします。

海は楽しいので、ケンイチを読んでいない方は原作で楽しんでもら  
えると幸いです。

ではノシ

六巻の裏表紙は、ゲレゲレのストライクゾーンを貫く物でした……。

## 第二十六話　デート？　それとも宣戦布告？（前書き）

今回、ゲレゲレは初めて難産という経験をしました。ですので、所々おかしな文章があるやもしれません。

また、文字数は過去最高を記録しています。

この事に関しては、本当に済みませんでした。

また、PVが51万、アクセス数が4万5千と。

正直、ゲレゲレには信じられない数字に達してしまいました。

更に総合Pttも1100越えと、感謝しきれない状況に陥っています……。

これに加えて、ピックアップに載つけられてたりと、ゲレゲレの想像を絶する状態にも陥っています。

やばい……皆のプレッシャーに耐えられないかもしれない。

では、長々と書いてしまいましたが、どうぞ。

## 第二十六話 デート？ それとも宣戦布告？

「こんなもんで良いかな？」

現在亮平は、一人暮らしの高校生が住むような場所ではないマンションの自室に立て掛けてある姿見で。自身が今日、着ていく服を合わせていた。

なぜ、姫野じゃ無いのか……。

この答えに行き着いたあなたは、変態と言う名の紳士。

「だけどなく、俺がいくら格好付けた所で。みんな、俺の服なんて見てくれないしね……」

亮平はそう言いながら、若干アンニョイな表情を顔に浮かべ。自室から見える外の風景へと視線を流した……。亮平の自室には、主に青いシートが目立つベットや、黒くシンプルなデザインが特徴のワークデスク。他にはシックなデザインの本棚、小さくはあるがこの部屋の中央を陣取っているガラステーブル。そして極めつけは、スタイリッシュなローボードテレビ台の上に設置してある32インチの液晶TVだ……。また高校生にも関わらず、この部屋にはネット環境も整っている……。

何故、一人暮らしの高校生の自室がこんなにも充実しているのか……それは、また次の機会にお話するとしよう……閑話休題。

仕度を終え、自宅から姫野と約束した待ち合わせ場所へと向つていた亮平は現在。非常に気まずい視線を、周囲の人間から浴びせられていた……。

確かに亮平は問題なく、目的の待ち合わせ場所である柱時計の前へと辿り着いていた……。

しかし……しかし、着いた事は着いたのだが。周囲で亮平と同じ様に待ち合わせしていたカップル達の視線が、亮平へと向けられていたのだ。

「（やつぱりな……。いつもこうだよ……。まったく）」

だが、亮平も理由はしつかりと理解している。

別に、亮平の格好自体は普通だ……。上は以前、姫野の友人を助けた時に購入していた、白を基調にした英語文字入りのポロシャツに。下は黒い生地ジーンズ、靴はNIEOEのハイカットシューズ。首元には小さなサーフボード型のシルバークセサリー。

これ自体は普通だ、普通なのだが……。問題は体なのだ。何故なら、白いポロシャツだというのに、普通に隠してある筈の筋肉のカットが浮き出ているのだ。まあ、簡単に言ってしまうえば浮き出ている物が一般人のそれでは無いので。これによって、周囲のカップルさん達から浮いているだけ……。それだけなのだ。

「ねえ、あの人の体凄くない？」

「あんまり見んなよ。絡まれたら危ないって……」

「うわ、セクシー……」

「おい！ 早く行くぞ！ 何時まで見てんだよ……！」

周囲の視線は男女別で対照的だ……。

女性は亮平の体を、自身の彼氏と照らし合わせたり、見惚れてい

たりしているのだが。男性の方は、亮平の雰囲気には怯えてしまったり、自身の彼女の反応に嫉妬してしまったり……。正直、亮平自身には非は無いのだが。こればかりは何時もの事なので、亮平は静かに周囲の視線を流し続けている……。

「早く姫野来てくれね〜かな……。何だか今回は一層、周りの視線が流し辛いんだが……。」

亮平の言葉の理由は、単に以前よりも体が引き締まり、当初の目的通りの魅力的な肉体へと変化しつつあるだけなのだが……。まあ、どうでも良い話であろう。

そうして、暫くの間が経った時。

亮平の待ち人である普段着姿の姫野真琴が、周囲の視線を集めている亮平のに到着した。

「ごめん！ 待ったか!？」

「ん？……（ほお〜……これはまた）」

亮平の下へと、先程まで急いでいたのか。やや慌てた様子で近づいてきた姫野の姿を目の当たりにした亮平は、心の中で感慨の声を漏らしていた……。

姫野の格好は、白い五分袖レースのワンピースにピンクのカーデイガンを羽織り。足には着ている服に合わせた、キャメル色のウエスタンブーツ、肩には小さな可愛いバックが。そして極め付けに、首下にはハートのネックレスが着けられている……。その姿は、普段の男勝りな口調の姫野からは想像出来ない程に女の子らしく、そして何よりも可愛い姿でもあった……。

「……どうかしたのか？ あ！もしかして変だったか、この格好



!？」

その姿を見ていた亮平に、姫野は更に慌てた様子で聞いてきた……。

「いや、似合ってるぞ。正直驚いてるくらいだから……」

姫野の様子を見て、微笑ましそうにしながら亮平は姫野の言葉に答えた。

すると姫野は、何やら恥ずかしそうにしながら亮平から視線を逸らしてしまった……。

「あ、ありがとうな／＼ だけど、なんで驚くんだよ？」

そう言った姫野の顔は、若干赤くはなっているが。亮平の余計な一言に、ちよつとした突っ掛りを覚えている様であった……。

そんな姫野の様子に、亮平は特に気にした様子もなく答えた。

「別に、俺が想像してた格好と違っただけの話だから。気にしなくても良いぞ？」

「お前の頭の中じゃ、私はどんな格好をしてるんだ？」

「そうだな……。俺の想像じゃあ、姫野はジーンズ派だと思っただから。ワンピースは意外だったっただけさ……。まあ、想像以上に似合ってたからってのも有るけどな」

「そ、そうなのか／＼ な、なら、許してやっても良いぞ／＼」

どうやら姫野の誤解も解けたのか、亮平の言葉に姫野は本当に嬉しそうな顔をしながら真っ赤に顔を染める……。

「取り合えず、移動しようか。そろそろ動かないと、ゆっくり服と

「か見て周れないしな」

「そ、そうだな……じゃあ、行こうか」

そう言っつて二人は、今回の目的である夏服を求めに。

夏の繁華街へと繰り出していったのだった……。

「お！ いい感じのサーフ系発見」

「ん？ ここ入るのか？」

繁華街を歩き始めた亮平と姫野の二人は、まず亮平が興味を持ったサーフ系の服が売っているショップへと入って行った……。そして、店へと入った亮平はまず、自身が好んでよく着ているポロシャツのコーナーへと向って行く。

「そっつえば、今お前が着てる服って……。前に私が預かってたやつだろ？」

「ん？ ああ、そっつだけど？」

すると、様々なポロシャツを物色していた亮平に、姫野が、そのような事を亮平に聞いてきた。

「じゃあ、あんたっつてポロシャツが好きなのか？」

「ああ、そっつだぞ。俺はTシャツよりも、結構ポロシャツばっか着

てるぞ」

「へ〜じゃあ、私が選んであげようか？ 一人で選んできると、同じような色ばっかじゃない？」

その姫野の提案に、亮平は少しだけ考える素振りを見せるが……。直ぐに答えが出たようだ。

「分かった、じゃあ選んでくれ。なるべく真面目に選んでくれよ？」  
「任せておきなさい。私って結構、人を選ぶの上手なんだ！」

姫野はそう言いながら、先程まで亮平が物色していたポロシャツコーナーを見渡し始めた。

時に立ち止まり、時に睨み、時には手に取って亮平へと合わせた  
りした結果……。

「よし！ これだ！ 鬼島、これ着てみてよ！」

「ピンクの文字入りか……確かに、この色は持ってなかったな」

亮平は、姫野が自信満々に取り出した服を受け取り。そのまま試着室へと向って行った……。

姫野が亮平に進めたのは、左胸には金と黒の英語文字、そして背中にも何やら大きく黒と金色を使った英語文字がある、ピンクを基調としたポロシャツであった。

「お、結構良いな、これ……」

「だろ？ じゃあ、それに決定だな！」

「そうだな……結構早く決まったが、これでいいか」

亮平はそう言いながら、姫野が選んだポロシャツをレジへと持って行き、会計を済ませたのだった。

その後、亮平は他の品々も見ていたのだが。どうやら目に留まるものが無かつたらしく、そのまま店を後にしていった……。姫野は亮平が会計を済ませ、店を出た後も。その表情はどこか誇らしげであり、そしてどこか嬉しそうでもあった……。

「じゃあ、次は姫野の店を探そうか」

「ああ、私はもう決まってるから……」

亮平のその言葉に姫野は、何やら視線を辺りにキョロキョロと動かし始めた……。そして。

「……あつた!! 鬼島、行くよ!」

「お、おい!？」

姫野は何かを見つけた瞬間、急に亮平の手を掴み取り。そしてそのまま、亮平を引っ張る形で走り出し始めた。

その姫野の頬は若干の朱色に染まっていたのだが……。幸いにも後ろを着いて行く亮平には気付かれなかった様だ……。

「……ここか？」

姫野に手を引かれ、亮平が連れてこられた店は女性だらけのレディースシヨップで。正直、いくら女子と共に入店するからといって、亮平にとっては、かなり居心地が悪そうな空気を醸し出していた。すると、そんな亮平の空気を理解したのか。前で亮平の手を引いていた姫野が、後ろにいる亮平に振り返りながら言葉を掛けた。

「大丈夫だつて! 大体、私だつてさつき慣れない店に入ってるんだから。あんただつて我慢しなさよ!」

「いや、けどな……」

姫野の言葉は確かに正論なのだが、亮平は若干気まずそうにしながら辺りに視線を向けた……。姫野も、その視線を追い始める……。すると、そこには。

「ああ、なるほどね……。ようするに、周りの視線が気になるって訳ね？」

「あ、ああ……ちょっとな」

「たく、良いから着いて来い……」

「分かった、分かったからそんなに引つ張らないでくれ！」

「だったら早く歩け！ これじゃ、いつまで経っても私の服が買えないだろ！」

周囲から来る女性達の視線に亮平は気まずそうにするも、姫野はそんな事などお構いなしに亮平の手を引つ張り続けた……。その様子に、周囲から来る女性達の視線は微笑ましいものを見るかのような感じに変わり。この視線に気付いた姫野は、さらに顔を朱色に染め上げてしまう……。

そして、亮平を引つ張りながらも姫野が立ち止まった場所には。亮平が分かるだけでも、トップスやワンピース等の洋服が並べられていた。

「あのさ……鬼島？」

「ん？ なんだ？ 俺いま、結構テンパッテんだけど？」

すると、今まで亮平の手を強気で引つ張っていた姫野が。言葉通り、本当に緊張している亮平へと、何やら言葉にするのが気まずそうに、亮平には顔を見せないようにして話しかけてくる……。

「あのさ……さっき、さ……。私も、お前の服選んでやったろ？」

「ああ……まさか。俺に選べと？」  
「……うん。……だ、だめか？／＼／＼／」

その言葉を発しながら姫野は、今まで亮平には見せて来なかった赤くなつてしまった顔を。後ろへと振り向きながら、身長差のせいで上目遣いになつてしまいながらも、言葉通り緊張しきつている亮平へと向け始めた……。

「あ、ああ！ 良いぞ、別に！ うん！」

「そ、そうか！！ じゃ、じゃあ！ なるべくセンスの良いやつをえ、選んでくれ！！」

普段、学校では見せない姫野の仕草に。亮平は一瞬、コロつと逝つてしまいそうな心境に陥るも、何とか踏み止まり。発する言葉をつつかえながらも、取り合えずは行動を起こす事が出来た……。

一方、姫野はというと。

自身が起こしてしまった現在の状況に、自らも羞恥心に苛まれ始め。顔を真っ赤に染め上げながら、視線を下に落としながら俯いてしまった……。

「……あ、そういえば。おい、姫野？」

「……／＼／＼／」

「姫野？」

「うんッ！？ ど、どうしたんだ！？ 私はいつも通りだぞ！！？」  
「いや、分かつてるから……（相手がこんだけ恥ずかしがってくれ  
ると、逆にこっちは冷静でいられるんだな……）」

先程の状況から、逸早く復帰した亮平が姫野に話しかける……。

だが、姫野は若干、上の空状態に浸っていたのだが。冷静になつた亮平に、諭される様に声を掛けられた事で、多少は取り乱しながら

らも言葉を返す事ができた。

そして、取り合えずは姫野が落ち着くまで様子を見ようと。亮平は、姫野に深呼吸をさせながら。姫野の服を選びつつも、姫野の復帰を待ったのであった……。

すると、どうやら落ち着いた姫野が、先程の亮平の問いに漸く答えた。

「ふ〜……で？ どうしたんだ、急に？」

「落ち着いたか……。いやなに、お前って普段、こっぴつワンピースとか好んで着てんのかなって」

「ん？ ああ……」

亮平は、漸く落ち着きを取り戻した姫野に。ワンピースを着たマネキンが乗っかっていている棚に、規則正しく並べられている売り物を指し示しながら問い始めた。

「私は特に“これ”っていう、特別なこだわりはないぞ」

「そうか……。じゃあ、今日のは偶々（たまたま）って事か？」

「あ、ああ……。そうだな（言えない……。友達に思いつきり頭下げを選んでもらった服なんて事は……。口が裂けても絶対に言えない……）」

「ふ〜ん……。じゃあ、これなんてどうだ？」

今回の服を着てきた経緯を思い出しながら、視線を泳がせた姫野の事を流しながら。亮平は、先程とは違うコーナーから、一つの服を取り出してきた……。

「トップスカ……。分かった、一回着て来る」

「おう、早く見せてくれよ！」

「う、うるさいー！！ 黙って待ってるよー！！／／／」

亮平のワルノリに、姫野は若干恥ずかしそうにしながら。亮平が選んだ、コットン素材で白色の肩見せトップスを持ちながら、素早く近くに並べられていたレギンスを一着だけ手に取り。そして、そのまま試着室へと走っていった……。

……

……

……

…

「遅い……」

姫野が試着室へと駆け込んで、少々の時間が過ぎたころ……。

流石に痺れを切らした亮平が、何時までも出てくる気配のない姫野に対して。若干、疲れたような口調で呟き始めた。

「お〜い、まだか〜……」

店内のため、そこまで大きな声を発せない亮平は。姫野が現在使っている試着室の前で、少しだけ普段よりも声を出しながら問いかけた……その音調は明らかに、段々待つ事が飽き始めた者が発するものであった。

「ちょ、ちよっと待って！ い、今出るから！！」

姫野はそう言いながらも、試着室内を隠すために取り付けられて



いるカーテンの端っこだけを捲りながら。ヒョコっただけ顔を出し、近くにいた亮平へと恥ずかしそうな視線を向ける。

「わ、笑うなよ？」

「笑わなねえって。俺が選んだんだからさ」

「そ、そうか……じゃ、じゃあいくぞ？」

その言葉と同時に、姫野は今まで亮平の視線から自身を隠していたカーテンを思いっきり開いた。

「……ど、どうだ？ 変じゃないか？」

「いや、俺が睨んだ以上だ……」

カーテンを捲り、亮平の前に姿を晒した姫野の姿は……。

上は、亮平が先程選んだトップスを確りと着こなし。下は、先程姫野が咄嗟に手に取ったレギンスを着ている。また、亮平が選んだトップスは、肩が見えるタイプの物であり。彼女の女性らしく細い、柔らかそうな肌が露となっている。レギンスは、彼女の足のラインにピッタリのサイズであり、確りと魅力的な脚線を目の前の亮平に見せ付けていた……。

「そ、そうか？ 本当に似合ってるのか／＼」

「おう、もちろんだとも！ どうする？ それにするのか？ それとも、まだ違うのを選ぶのか？」

この亮平の、姫野は少し考える素振りを見せるが直ぐに顔を上げ、目の前で自身の答えを待っていた、亮平へと視線を向けた。

「……そうだな、もうそろそろお昼だし。お前が選んでくれた、この服だけで良いよ」

「そうか、じゃあ会計でも済みますか」

そう言っつて、姫野が試着していた服から。先程まで着ていたワンピースへと着替える。

そして、姫野は購入を決めたトップスとレギンスを近くに置いてあつたカゴに入れてからレジへと向かつていったのであつた……。

二人は今回の目的である買い物済ませた後、丁度昼時の時間になつていたので確認する。

「じゃあ、どこで食べようか？」

先程購入したばかりの服が入つた袋を嬉しそうに抱えながら、姫野は亮平に向つて言葉を投げかけた。

「うーん……取り合えず、また適当に周つてみるか？」

「そうだな、またそれでいいか」

そう言っつて、二人は再度。この夏の繁華街を歩き始めた……。

暫くすると、姫野が突然口を開き始めた。

「おい、あそこで良いんじゃないか？」

「……ん？」

姫野が指し示した場所へと、亮平は視線を送る。

「ホットドック・カフェ？　こんなのあるのか……」

「取り合えず入ってみないか？」

「……そうだな、結構待ちも無さそうだし、行くか」

亮平が姫野の問いに同意を示した事で、二人は目の前に店舗を構えるホットドック・カフェへと入って行った。

「いらつしゃいませ。お二人様で宜しいでしょうか？」

「二人で、あと外に座りたいので御願います」

店内へと入った瞬間、なにやら営業スマイルを引つ提げた女性店員が近寄って来ると同時に。これまたマニュアル通りの問いかけを、亮平と姫野に投げかけてきた。その女性店員の問いかけに、亮平が何ともなしに答え、そしてそのまま空いている外の席へと案内されていく……。

「ご注文がお決まりでしたら、お声を掛けてください」

そう言つて、店員の女性は。テラス席に座つた亮平と姫野に笑顔を振り撒きながら、メニューだけを置き去りにして去っていった……。

「先注文じゃないのか……。取り合えず、先にメニュー見ていいぞ？」

「ありがとうな、じゃあ私はこれで良いや」

姫野は亮平にメニューを渡された瞬間に、女性とは思えぬ即決で

食べるものを決めてしまった。

その様子に、亮平は若干驚きつつも。今度は自身の番なので、姫野から手渡されたメニューを見定める。

「……じゃあ、俺はこれで良いか。すみませ〜ん！ 店員さ〜ん！」  
「はあ〜い！ お決まりですかあ〜い！」

亮平の言葉に、このカフェの店員はすぐさま反応し。注文をする亮平達の下へと近づいて来た。

「え〜っと、この“オリジナル（この店では、ハンバーグの様なあらびきな食感のソーセージ）”ってやつ下さい、姫野は？」

「私は、この“チェダー（中に溶けているチーズが入っているソーセージ）”下さい」

「かしこまりました〜。ご注文を繰り返します、オリジナル御一つに、チェダー御一つで宜しいでしょうか？」

「OKです、御願います」

「では、少々おまちくださ〜い」

注文を終えた瞬間、店員はそう言い残し厨房へと消えていった……。

暫くした後、厨房から先程亮平達が注文したホットドックをトレイに乗せながら。こちらに向って、優雅に歩いてくる女性店員が、亮平達の目に入った。

「お待たせしました     ご注文のオリジナルとチェダーで御座います」

そう言いながら、女性店員は手際良く亮平達の前にホットドック

を置いていく。そして、注文の品を置き終わった女性店員は笑顔で「じゅっくり〜」などと言いながら去って行った……。

「うわ〜 かなり美味しそうじゃん！ このホットドック！」  
「そうだな、じゃあ、いただきますっつと……」

亮平と姫野は、それぞれ違うホットドックに噛り付く。

「おいしい！ これ、本当においしいぞ！」

姫野は、チーズ入りのソーセージを一口、口に入れた後、本当に嬉しそうな顔で亮平に美味しい事を伝えた。

「そうだな、かなり美味しいな、ここは」

亮平もその姫野の言葉に肯定を示し、再び二人は揃ってホットドックに噛り付く。

すると、亮平が姫野を見ながら何かに気付いた様な顔を始めた……。

「（ソーセージの先から溶けたチーズが出てきてる……。あれ？  
これ何か、女の子が持つと卑猥に見えるな……。あ、でもかじ……  
……）」

だが、その考えは果てしなくどうでも良い事だったので。省略させてもらう……。……。

そして、暫くの時間が過ぎ去った現在。

二人は確りと自身が注文したホットドックを完食し、この店を出

るために会計を済ませることにした。

その際、流石に亮平も男なので。

姫野が自分の分の料金を支払おうとした所「昼飯ぐらいは奢ってやるよ」と、一応の甲斐性を見せていた。それに姫野は意外そうな表情をしたのだが、取り合えずは亮平の御言葉に甘える事にして。次の場所を探すために、また再び夏の繁華街へと躍り出るのであった……。

その後は、食事した後の運動ということだ。

近くにあつたゲームセンターで暇を潰す事にした。他の洋服店を回ってみたりと、様々なコースを歩んでいたのだが。

やはり、楽しい時間とはあつという間なのである……。

「あ、もうこんな時間だ……」

辺りが夕焼け色に染まった現在、姫野は自身の携帯を見ながら、そんな事を口にした。

姫野が持つ携帯の裏には、先程亮平と一緒に撮ったプリクラが張られている……。

「ん？ 門限でもあるのか？」

姫野の言葉を、亮平は質問で返す。

「うん、私の家って正直、結構厳しいんだ……。だから、今日はそろそろ帰らないと不味いかな」

「そうか、じゃあ駅まで向うか……」

この姫野の言葉に、亮平は特に気にする事もなく。姫野を帰すために、駅の方角へと体を移動させ始める。だが、その亮平の姿を見

た姫野は、若干寂しそうな表情をしていた……。

「（そんな簡単に、帰るのを決めなくたっていいじゃない……。でも……初めて二人で行く遊びなんて、こんなもんなのかな？）」

姫野はそう考えながらも、既に駅の方へと歩き始めている亮平へと駆け寄って行った。

そして暫くして亮平と姫野は、この街の駅へと到着した……。

「途中までは一緒なんだっけ？」

「そうだな、確か二駅だけしか変わらないんだよな？」

二人はそんな会話をしながら、改札を通り、電車のホームへと向って行く。

「今日は楽しかったな……また、こんな風に遊ばないか？」

「ああ、良いぞ、俺も今日は服選んでもらったりしたからな。また今度、予定が合ったら遊ぼうか」

二人が楽しそうに、今日の事や次の事を話していると。

二人が乗車する電車が到着した……。

亮平と姫野は、到着した電車の扉が開き、中に入ってから会話が続いている。

「じゃあ次の機会は、俺が選んだ服を着て来てもらうかな」

「良いぞ、だけどお前も着て来いよ？ 私だけじゃあ不公平だ」

「ああ、分かった。だけど、すぐにこの服は明日着ちゃうけどな」

「そうなのか？ 明日、どこか遊びに行くのか？」

「一応な……。まあ、次の機会が何時になるか分からないしな。早

く着たいってのもあるから、明日直ぐに着させてもらうな」

「ふん、分かったよ。実際、私も早く着たいしな……」

姫野はそう言いながら、自身が持っている購入した服が入っている袋に、本当に楽しみと言った感じの視線を向ける……。

「この服は、大切に着るよ……」

「そう言ってもらえると、選んだ甲斐があったってもんだな。俺も、お前に選んでもらったこの服は大事に着させてもらうな」

二人は周囲が微笑ましそくに視線を送る中、そんな会話をしながら帰宅の電車を満喫する。

そして、暫くの時間が経った後、先に姫野が下りる駅に到着した。

「じゃあ、また学校でな！ じゃあな！」

「おう、じゃあな！」

そう言いながら、姫野は亮平が乗る電車から降りていく。

その際、少し寂しそうな顔をしていた事に、亮平は気付けないでいたのだが……。

姫野と別れたあと、亮平の携帯に着信が入る。

「どうやら相手は、先程別れたばかりの姫野のようだ……」。

「（今日は楽しかった、また今度一緒に遊ぼうな！）か……」

その姫野のメールは男である亮平にとって、本当に冥利に尽きるものであった。

そして亮平は、送られてきた姫野のメールにすぐさま返信をする。



内容は……。

（“俺も楽しかったぞ！ また今度、学校でな！”）

このメールを返信した後、亮平は今日の姫野との時間を楽しそうに思い出しながら。

電車の窓から見える夕焼け色の風景を眺めるのであった……。

### 【キサラとの一日】

「おせえ！ どんだけ遅刻してんだ！！ お前！！」

現在、亮平は待ち合わせに“二分”遅刻した事で。前日の姫野とは違い、普段通りの格好をした幼馴染であるキサラから怒声を浴びていた……。

「ごめんって言ってるだろ？ それよりも、早く行かないのか？」

そして亮平は、目の前で怒声を浴びせて来るキサラを特に気にした様子もなく受け流す。

「たく！ 本当に反省してんだろっな！？」

「だから反省してるから、早く行こうぜ？」

しかし、その亮平の態度がキサラには納得出来なかったのか。訝しげな表情で亮平に問い始める。

だが、それも亮平に受け流され、キサラは更に不機嫌の底へと沈んでゆく……。

その様子に、流石の亮平も不味いと思ったのか。ある提案をキサラに持ちかけた。

「じゃあ、今日の昼飯は奢るから。それで許して、頼むから……」  
「……しょうがないな、それで許してやるよ」

亮平の提案に、キサラは渋々といった感じで答えたのだった……。現在、亮平とキサラは待ち合わせ場所であるモアイ像の前にいる。すると、亮平の提案を渋々飲んだキサラがある事に気が付いた。

「おい亮平……。お前がいま着てるのって……」  
「ああ、これか？ 昨日買ったばかりの服だよ」  
「……」

その亮平の言葉を聞いたキサラは、何やら思考の世界へと入り始める。

「（亮平がピンク？ いや、確かこいつの好きな色は黒と赤、そして白だった筈だ……）」

キサラはそう考えながら、現在の亮平が着ている服をまじまじと観察し始めた。

「（黒のジーパンにNIEの靴、首下のネックレスは何時も通りのコイツの趣味だ……。だけど、ポロシャツだけは、コイツが今ま

で着ていた服の趣味とは違う。そして、昨日買ったばかり……」  
「おい、どうしたんだ？ キサラ姉ちゃん？」

突然考え込み始めた自身の姉貴分であるキサラに、亮平は心配そうな声を掛ける……。

だが、キサラの思考は留まる事を知らない。

「（て、ことは……昨日、誰かに服を選んでもらった？）」

「おい、本当にどうしたんだよ？」

「（こいつに、男友達は白浜とかいう坊やしかない筈……。だが、聞いている情報ではピンクなんて色を亮平に勧めるとは思えない……だとすると）」

「おい、聞いているのか？」

「おい……亮平？」

今まで思考に耽っていたキサラが、漸く亮平の呼びかけに反応したかと思えば。突然亮平に向って疑惑の視線を向け始めた。

「お前が昨日、服買いに行ったときに……他に誰かいたのか？」

「ん？ ああ、クラスの友達がいちぞ？ それがどうしたんだ？」

「そのクラスの友達ってのは……女か？」

そのキサラの問いかけに、亮平は思わず明後日の方向を向き始めてしまう……。

“別段、隠すことはない、やましい事はしていないのだから……”  
”こんな考えが亮平の中に渦巻くが、これについては、亮平は何故だかはぐらかそうとしてしまう……”。

多分これは、所謂本能こゝろというものである……。

「どうして私と目を合わさないんだ？」

「いや……べ、別に？ 確かにクラスの女子だけどさ、キサラ姉ちゃんには関係ないだろ？」  
「ッ……！」

亮平が苦し紛れで発した言葉に、キサラは何やら苦虫を噛んだ顔で俯いてしまう。

そのキサラの様子に、亮平は焦り出す……。  
何故なら此処は、公衆の面前であり……この様子は完全に、亮平が目の前のキサラに何かをやらかした様な光景だからだ。

「お、おい！ どしたんだよさつきから……！」

「……上等だよ」

「はい？」

そのキサラが発した声は、遙か地底の彼方から何かが這い上がってくる様な……。そんな鬼気迫る声音であった……。

どうやら亮平の言葉に、何やら火がついてしまった様である。

「亮平……確かお前、水着が見たいって言ってたよな？」

「あ、ああ、確かに電話で言ったけど……それがどうしたんだ？」

「買いに行くぞ……！」

「は？」

「だから買いに行くって言ってんだろぅが……！ 水着だよ水着……！」

「え？ あの時は、かなり嫌そうだったじゃん？」

「予定変更だ……！ とにかく水着を買いに行くぞ……！ 早くしろ……！」

置いてくぞこらッ……！」

「……（これは……そうだ、流された方が良いな。うん）」

突然やけになりだしたキサラに、亮平は流されるという対処法を慣行する事にした……。

そして、二人は当初の目的には無かった物を買いに。この繁華街を彷徨い始めるのであった。

暫くした後、結局はデパートで探したほうが早いとの事に二人は気付き。

そうと決まったら、膳は急げと歩を進め。とある巨大百貨店へと辿り着いたのであった……。

そして現在、今回の言いだしっぺであるキサラは、非常に後悔をしていた。

「（やばい、勢いで此処まで来たけど。……どうする私？ これを亮平の前で着れるのか？）」

今キサラは、ここ巨大百貨店のとある水着ブースの試着室で。ブースに入ったと同時に亮平に選ばせた水着を手を持ちながら、今しがた冷静になった頭で現状を非常に後悔していた。

「まだか〜？」

「うるせえ！！ 黙って待ってる！！」

そのような混乱している時に声を掛けられれば、人は特に怒りやすくなるのであろう。それが元々短気な性格の人物ならば尚更だ……。

「（たく！ 誰のせいでこんな事になって……いや、私自身で撒いた種だった）」

だが冷静になれば皆、自身がトチ狂った時に行った行為を後悔し始めてしまう……。

キサラは現在、そんな負の現象に陥っていた。

「（だけど、あいつが選んだ水着自体は普通なんだ……着れない筈は無い。そうだ、着れない筈は無いんだ……）」

キサラ自身、自分が冷静になってきたのは感じていたのだが。どうやら未だに、どこか冷静になれない部分があったのであろう……。

「（所詮チユーブトップじゃないか、こんな物、ビーチバレーとかの奴等は普通に着てるんだ。私に着れない筈はない……）」

その様に、“着れない筈は無い”と何度も繰り返しながら、キサラは何とか亮平に選ばせた水着を試着していく。

何故、亮平は三角ビキニを選ばなかったのか……。

それは亮平自身、キサラが抱いているコンプレックスを知っている。なるべく刺激しないように気を使ったからであった。

「（だけど、アイツめ……なんで態々“ローライズ”なんか選んで来たんだ！）」

だが確かに亮平はキサラのコンプレックスには気を使ったが、“純”高校生である亮平は、それ以外の事には容赦が無かった……。  
亮平が選んできたのは、股上が低く、隠す所の丈が短い水着であった。

「（これ絶対、アイツの趣味だろ！！ 私になに着せようとしてんだよ！！ アイツは！！）」

「おい、流石にそろそろ出てきてくれないと。俺も恥ずかしくなっ

て来たぞ……………」

「うるさい！！ 黙って待ってる！！ 直ぐに出て行ってやるから！！（何言ってるんだ私……ッ！？）」

亮平の言葉に、本来自身が取るべき返答を間違えた彼女は更に深みへと嵌まっていく。

しかし、キサラ自身、何時までもこんな状況に浸かりたくは無い……………。なので、彼女は“女は度胸”の精神で、亮平が選んできた紫のチューブトップ水着に着替え始めた。

「まだか？」

「いいから黙ってる！ いま、出てやるから……………」

そう言いながら、キサラは試着室を外から遮っていたカーテンを開いた……………。

「お、おお……………」

「あ、あまりジロジロ見るなよ…………… 恥ずかしいだろ……………」

試着室から出て来たキサラの姿に、亮平は一瞬時が止まったのを感じた。

彼女の姿は、亮平が選んだ水着と非常にマッチしており。

紫のチューブトップが彼女からスポーティーな雰囲気溢れさせ、亮平が下心……………もとい、善意で選んだローライズのビキニは、彼女自慢の脚線美や、引き締まった腰周りのウエスト、更には形の良い引き締まったヒップに艶めかしい下腹などを余す事無く、目の前にいる亮平にアピールしていた。

「い、いや……………別に恥ずかしがる事無いじゃん、幼馴染なんだしさ……………」

「そう言う問題じゃ無いんだよ！！ と、とにかくもう着替えるからな！！」

キサラはそう言って、また再び試着室のカーテンを閉じてしまった。

残された亮平は、先程の衝撃から生じた余韻に浸っていた……。

「（えがった、こりゃ眼福だったべ……さて、やっちまったよッ！！ 写真撮つとけば良かったよ、畜生！！）」

しかし、亮平は余韻には浸ってはいたものの。すぐさま自身が犯してしまったミスに気付いてしまい、キサラが着替え終わり、試着室から出て来るまでの間中。ひたすらに悶え続けていた事を、ここに伝えて置きたい……。

#### 閑話休題

水着売り場のブースから出た二人は、丁度昼食時もあったか。現在は、ここ巨大百貨店内にあるレストランで食事を取っていた。

「で、このあとどうすんの？ 特にこれが買いたいって言うのは無いの？」

「そうだな……。アクセサリーでも探すか？」

キサラはそう言いながら、既に食後のデザートであるティラミスを入れた。



「あゝ……それはいいや、俺もう間に合ってるし」  
「じゃあどうするんだ？ 私はもう何も無いぞ？」

そう言ったキサラの視線には、先程購入した水着の入った袋が自身の隣りに置かれている。

どうやらあの後、ちゃっかり購入したらしい……。

「そういえば、ここってペットショップも有るらしいぞ？」  
「それは本当か？」

亮平が何かに気付きながら発した言葉に、キサラが鋭い反応を示す。

「ああ、さつき案内板で見たから……」

「直ぐ行くぞ、早く会計を済ませる財布!!」  
「財布って……」

何やら突然、目の色を文字通り変えたキサラはそのまま、今まで食べていたティラミスを一気に口の中に入れ、亮平を置いてこの店を出て行ってしまった……。

そして“財布”呼ばわりされた亮平は、キサラとは違い落ち着いた様子で会計を済ましてから店内を後にした。

店内を後にし、亮平が件のペットショップに到着した時……。既にキサラはある場所で、普段の彼女を捨てていた。

「キヤアア!!! カワイイ!!!」

「はは、もう始めてるよ……」

亮平の目の前では、外間を見失った自身の幼馴染が。周りに居る子供達を置き去りにしながら、このペットシヨップに備えて有る“子猫との触れ合いコーナー”と言う場所で、文字通り子猫を抱きかかえながら悶え転げ回っていた……。

「お前は何て名前なのかニヤ〜？」

「いや〜飛ばすね〜……」

そのぶつ飛んだ幼馴染の姿に、亮平は呆れながらも微笑ましそうな視線を送っていた……すると。

「ッ!？」

微笑ましそうにぶつ飛んだキサラを見ていた亮平が、突然何かを感じたのか。素早い動きで後ろに振り返り、その感じた何かを目で捜し始めた。

だが、そこにあつたのはペットの餌が並べられた棚だけであつた……。

「（気のせいか……確かに、何かを感じたんだが）」

亮平は心の中でそう疑問を呟きながらも、取り合えず何も無かつたことにする事にした。

そして再度、キサラの方へと視線を戻そうとした時……そいつらは居た。

「……そ、そんなに見るなよ。俺は、お前達を飼えないんだ……」

亮平の前に現れた者……いや、者達は。

自身の目の前にいる亮平に対して、その筋の者には耐え兼ねない視線を送り続けていた……。

「頼むから、その目は止めてくれ……。俺は、キサラ姉ちゃんの様にはなれないから」

そう言いながら、亮平はその者達から視線を外した……。

亮平が視線を外した程の相手……それは、ここがペットショップだからこそ存在していた相手。そう、店内のケージ内に入れられた子犬達だ。

実は亮平、大の犬好きなのだ……。

それにより、ペットショップにいる子犬達を見てしまうと。幼馴染で、猫命であるキサラ程ではないが。亮平も、たまに自我を失いかける時があるのだ。そんな犬好きの亮平に、様々な犬種の子犬達は更に視線を集中させる。

「（うわ〜見てるよ……どうする。俺まで飛んじまったら、誰がキサラ姉ちゃんを止めるんだ？）」

子犬達に視線を集中されるも亮平は現在の事を考えながら、今にもケージ越しでも良いから飛びつきたい衝動を抑え始める。

「あ？　いま私の鼻に御手した〜？」

一生懸命、自身の恥と外聞のために葛藤を続けている亮平の耳に未だ周りの子供達を置いてきぼりにし続け、子猫達と戯れるキサラの悶え声が届いた……。

「（だめだって！　俺はやっちゃいけないんだってツ！！　多分、

店員の人も困ってるだろうし!!」

亮平はそれでも、自身が持つ欲望との闘いを続ける……。

「大丈夫だ……そろそろ店員の人キサラ姉ちゃんに注意しよう  
とやって来るだろう。その時だ……その時に、俺も動いてキサラ姉  
ちゃんを連れ出せば万事解決だ!!」

そんなどうでも良い葛藤が、結局外の景色が茜色に染まる時まで  
続けらる事となったのは、事情により省かせてもらう……。

そして現在、名残惜しそうに動物という拘束から逃れた亮平とキ  
サラの二人は。

先程まで居た巨大百貨店を後にし、取り合えずは落ち着こうと、  
近くにあった公園のベンチで休んでいた。

「あ……別の意味で疲れたわ」

「そうか？ 私は楽しかったぞ？」

このキサラとの温度差は、当然亮平が自身の欲望との葛藤に打ち  
勝った証拠であった……。

「姉ちゃんが楽しかったのなら良いんだ……。取り合えず、俺はも  
う無理だ……」

「そうか、じゃあ今日はこの辺でお開きだな」

キサラはそう言いながら、先程購入した水着が入った袋を手に持ち。そして、そのままベンチから腰を上げた。

「ああ、俺も久しぶりに二人で遊べて楽しかったよ……」  
「そっか……そういえば、お前とこうして遊んだのも久しぶりか」

ベンチから立ち上がり、帰宅の徒に付こうとしたキサラに亮平は、その声を掛けた。

すると、キサラは未だベンチに座りっぱなしの亮平に向って、背を向けながら言葉を返し始めた。

「確か最後に遊んだのは、キサラ姉ちゃんが“ラグナレク”に入る前だったな……」

「ああ、そうだよ……。だがそう考えると、長かったような気がしてきたよ……」

「ん？ 何が長かったって？」

キサラの言葉に反応した亮平が、キサラに疑問の声を投げかける。

「私とお前の約束さ……」

「ああ、確か“私が強くなったら、一回で良いから本気で相手をしてくれ”だっけ？ 覚えてるよ」

「はは、今考えると、私も随分と無謀な約束をしたものだと思うよ……」

そう言いながら、キサラは茜色に染まった空を見上げた。

亮平はそんなキサラを不思議に思いながらも、言葉を投げかける……。

「だが、どうして今更そんな話しを？」

「あのさ……亮平」

キサラは未だに空を仰ぎながら、後ろでベンチに座っている亮平と会話を続ける……。言葉を続ける、キサラが醸し出す雰囲気は、どこか懐かしそうな、寂しそうな、そんな雰囲気であった。

「私な、今度近いうちに“ラグナレク”の第八拳豪って言う幹部に昇進するんだ……」

「へー、確かそれって。俺が前に倒した2番と同じ地位だよな？」

「そうだよ、私は近いうちにその拳豪入りを果たす……」

言葉を続けるキサラの背中を見ながらも、亮平はこの周囲に何かの気配を感じたが……。しかし、今は目の前の幼馴染の方が重要なので、取り合えずは意識をキサラに向け直した。

キサラはそんな亮平に背を向けていたので、この事には気付けないでいた……。そして、キサラは話しを続ける。

「でな……私が拳豪入りして。伝統の腕試しを終えた後にな……」

キサラは一度そこで言葉を切った……。そして、暫くの時が流れた後。キサラが漸く、その重く動く口を動かした……。

「私……お前と喧嘩する事になったんだ」

「そうか……」

「驚かないのか？」

そのキサラが打ち明けた言葉を、亮平は特に気にした様子も無く、静かに受け止めたのであった。

この亮平の反応に、キサラは疑問の声を投げかける。

「確かに驚いてはいるさ……だけど、俺が驚いているのは違う方だよ」

「違う方？　なんだ、それは？」

「キサラ姉ちゃん、これは自分で気付かなくちゃいけない事だ……俺から教える気なんて更々ないね」

「……分かった、じゃあもう聞かないよ」

このやり取りと同時に、キサラは亮平に背を向けながら離れていくこうとする……しかし、亮平から離れ様とした直後。キサラは亮平の言葉によって、歩む足を止めた。

「最後に聞くけど、やる時……俺はどうすれば良い？」

「決まってるだろうが……」

この亮平の問いに歩みを止めたキサラが、今まで背中越しで話していた亮平に対して。漸く振り返りながら言葉を発した。

その最後に見せた表情は、どこか覚悟を決めた……そんな表情であった。

「本気で掛かって来な……私もお前を潰す気で行くからさ」

「ふん、本気で掛かるかどうかは姉ちゃん次第だよ……」

「……ふふん、じゃあ楽しみにしておきな。私がどれだけ強くなったのか、お前に教えてやるからさ」

「楽しみにしておくよ……じゃあ、また今度な」

「ああ、また今度……」

その言葉と同時に、キサラは未だベンチに座っている亮平から離れていった……。

キサラが離れて行くのを確認した亮平は、突然何処ともなしに口を開き始めた。

「さつきから何してんだ？ 出て来いよ、誰だか分からねえが」

すると、この亮平の呼びかけに応じる様に。この公園の何処からとも無く、何やら宇宙人の様なシルエットを持った人物が現れた……。

「新島か……なにしてたんだ？ 大方予想は付くが……」

「流石“掌鬼”の鬼島君、私めの……」

「御託は良い……とにかく、何をしていたのかを聞いている」

宇宙人のシルエットを持った人物、それはもちろん宇宙人の皮を被った悪魔こと“新島春男”である。

亮平は、その新島の強者に対する媚びた言葉を遮りながら、新島がここにいる訳を簡潔に聴き出そうとする……。だが、そこは宇宙人の皮を被った悪魔……亮平の威圧的な言葉など、容易に聞き流してしまった。しかし、聞き流しはしたものの、亮平の質問には答える様だ。

「ええ、私めはただ、“ラグナレク”に関する情報を。アナタ様のご友人である白浜兼一に伝えようと、今回の様な情報収集に勤しんでいた所で御座います」

「兼一に？ そうか……なら、今日の事は兼一には伝えないでおいとくれ」

「それは何故でしょうか？」

亮平の言葉に新島は、自身が愛用している電子手帳を操作しながら疑問の言葉を返した。



「いや……お前に言った所で、口約束を守るとは思えないからな。言い方を変えよう……」

「……」

新島は亮平が次に発する言葉を、不気味な笑みを浮かべながら待っていた。そして、亮平は言葉を新島に伝えようと、ゆっくりと口を開いた。

「兼一に伝えるなら、こう言つといてくれ…… “確かに『ラグナレク』との喧嘩はお前の喧嘩ではあるが、キサラは俺がやる。もし手を出そうとするのなら、俺はお前でも容赦はしない”」

「……」

「長つたらしくなったが、確り伝えてくれよ？ もし、捏造や伝達漏れとかをやらかしたのなら……」

「やらかしたのなら？」

「俺はお前も潰す……分かったな？ 分かつたらどっか行つてくれ」

「……承知致しました、確かに伝えて置きます」

「ああ、頼んだぞ」

亮平の言葉と同時に、新島はどこかへと消えていった……。本当に、神出鬼没な宇宙人である。そして新島が去った事で、亮平はこの公園で唯一一人の存在へとなったが。そんな中、亮平は既にキサラとの闘いについて思考を巡らせていた……。

「（あんな事言っちゃったけど……実際俺は姉ちゃんの事殴れないし、怪我也させたくないしな）」

そんな考えを巡らせていると、亮平はある事を思いついた……。

「（そうだ！ 確か柔道の試合とかで、無傷で相手を倒す技があったよな！？ 面倒臭いが、それだけでも知つといた方が良いよな…）」

この考えが浮かんだのと同時に、亮平の思考の中にはある人物の顔が浮かんでいた……。

それは今回亮平が、幼馴染であるキサラを傷付けずに、無傷で勝利を収める方法を確実に知っているであろう人物。この人物が浮かんだ時、亮平は試せるものは試してみようという、微妙な決心をするのであった……。

第二十六話 デート？ それとも宣戦布告？（後書き）

大変だった……これ書くの。

取り敢えずは、皆さんに想像しやすいように書こうとしたら、  
どンドン文字数は増えるわ、ゲレゲレの頭が混乱しだすわで……。  
正直辛かったです。

ですが、これからはある程度原作を崩しながら。  
原作通りに進むといった手法を取るの、ある程度は楽になります。  
崩すと言っても、原作ファンが不快に感じない程度の崩し方なので。  
兼一や、他のキャラクターの成長を妨げる様な事は致しません。  
どうか、この辺の事はご了承下さい……。

では、多分明日の夜か、月曜の夜かは分かりませんが。  
それぐらいには、次の話しを書き上げたいと思っています。  
ではノシ

第二十七話 兼一、『掌鬼』の意味を知る（前書き）

今回、文字数がまた一万を突破しそうな勢いだったのだから、キリが若干良いところで切り上げています。また、サブタイの様な激しい回では無いです。

## 第二十七話 兼一、『掌鬼』の意味を知る

深夜の公園……。

其処に現在、多くの若者が集まっている……。

だが、その集まりは不良チームなどの集会ではなく。多くの若者同士が殴り合う、つまりは集団での喧嘩の集まりであった……。

その多くの若者……殆どが男性という、喧嘩をするのなら在り来りな性別なのだが。この場に至っては、その多くの男性が主役なのではなく、ただ一人の女性がこの集団で行われている喧嘩の主役を勝ち取っていた。

「シッ!!」

ガゴッ!!

その女性は今、空中で目の前の大男の顔面に向かってティミョ・トラ・ヨプチャ・チルギ（跳び回転蹴り）を打ち放った……。この蹴りはただの横蹴りとは違って、相手の正面を向いた体制から、体の軸をブラさぬ様に回転させ、蹴り足を回すのではなく、一度蹴り足の膝を豊んでから蹴りの溜めを作り、その後、直線を意識しながら踵を基点にして打ち放つ。言わば、後ろ回し蹴りではなく、後ろ蹴りに部類されるものである。この直線で飛んでくる踵をもろに貰った大男は、いかに女性が打ち放った蹴りとはいえ。女性が履いているブーツの硬さ・重さも相まって、一撃の名の下に地面へと意識を沈めていった……。

「頭あッ!!」

そして今、地面へと沈んで行った大男はどうやら女性が所属する

チームとは違う。相手方チームのトップであったようで……。それに伴い、この集団での喧嘩も終わりを見たようだ

「また一つ、我らが“ラグナレク”に逆らうチームが消えた……」

そう言いながら、先程相手方のトップを蹴り飛ばし、地面へ悠然と着地した女性は。目の前でチームの柱をやられた事によって、浮き足立っている男達の集団を見据えた……。

「お前達、残敵の掃討は任せたよ！」

「はっ！！」

女性は男達の集団を見据えた後、自身が持つ兵隊達に残りの後始末を任せた。

「キサラ様、お疲れ様です……」

「ああ、すまないな白鳥」

この闘いでの主役を勝ち取っていた女性……南條キサラは、白鳥と呼ばれた金髪ロングの男から汗を拭くためのタオルを受け取った。

「今回の戦いは如何でしたか？ キサラ様」

キサラにタオルを渡した白鳥は、自身が渡したタオルで汗を拭き始めたキサラに向って、その様な質問を投げかけた。その質問に、キサラは汗を拭きながら答える。

「だめだ、これじゃあ“鬼島”には届かない……。もっと、試してみなきゃ正直辛いな……」

「では、これからは？」

「ああ、なるべく骨のあるチームを捜してくれ。今までより多くても構わない、とにかく捜し回れ」

「承知いたしました……」

自身の幼馴染である亮平の名前を出したキサラは、自身の右腕である白鳥に向って命令を下す。

その命令に、白鳥も了承したのだが……。

「ですがキサラ様？ お言葉ですが、流石に無理を為さり過ぎでは？」

この白鳥が発した突然の言葉に、キサラは特に気にする事も無く答えた。

「この程度で音を上げる様じゃ、“鬼島”には到底敵わないさ……」

「しかし、それではキサラ様が……」

「お前も見ただろ？ “鬼島”と、東つて奴の喧嘩を……。アイツは、私たち武道家とは根本的な部分が違うんだ。あの東だつて、強くなるために努力していたらさ……」

「……」

そのキサラの言葉を、白鳥は無言で受け入れる……。

「だがアイツは、努力も何もしないで誰もが羨む力を持っている……。しかもその力は、私達が幾ら努力しようとも届かない程の力だ。つまりは、はなっから人間としての出来が違うのさ……」

「……」

「簡単に言えば、人の皮を被った化け物……。そんな化け物相手に、この程度で音を上げてちゃ先が思いやられるってもんだ……」

「……申し訳御座いません、どうやら出すぎてしまったようです」

「気にするな……」

キサラの言葉に少しは納得したのか、白鳥はそう言いながら、残敵を処理している兵隊達の指揮へと向って行った……。そしてキサラは、空を覆う夜空を見上げた……。

「私だって、怖いものは怖いさ……」

このキサラの言葉は、辺りの喧騒に飲まれ。誰にも伝わる事無く、夏にしては肌寒い夜風と共に消えていったのだった……。

所変わって、ここは梁山泊。

そこで現在達人達による、ある話し合いがなされていた……。

「兼一君はそろそろ“本格的な技”の修行に入ってもいいと思うんだが……どうだろうか？」

今、兼一についての提案を出したのは……。障子の角に体を預けながら、袴道着姿で哲学書を読んでいるちよび髭がダンディな達人…… “哲学する柔術家” 岬越寺秋雨。

「そうね、かなりきつい修行だけどそろそろかね」

秋雨の言葉に同意したのは、エロ本を笑顔で読み続けている“あらゆる中国拳法の達人” 馬剣星。



「おいおい、兼一は体に恵まれている訳でもねえ！ ただの餓鬼だ！ あんまり急いで技の修行に入ると……」

剣星が同意の姿勢を示すと、今まで“片手”逆立ちで腕立てを行っていた、顔に横一文字の傷がある男が。そう言いながら逆立ち姿勢から身を正し、言葉を続け……。

「死ぬぜ！」

そう言いは放った……。この言葉を発したのは、“喧嘩100段”空手家の逆鬼至緒。

「ゆっくりゆっくり教えれば、アパチャイ、兼一なら生き延びると思っよ！」

逆鬼の次に、無数のピンポン玉を宙に浮かせながら喋り始めた人物。

「いつも兼一が死にそうになるのは……皆が無茶するから！」

「おめえが言っな！！！」

その人物は、宙に浮いていた無数のピンポン玉が地面へと落下するや否や。自身の前を通過するかの所で、常人では理解できぬ程のスピードで全てのピンポン玉を蹴り上げ。また再び、無数のピンポン玉を宙へと放り上げた……。この人間離れた曲芸を軽々としている人物、“裏ムエタイ界の死神”アパチャイ・ホパチャイ。

「あろう……皆さん？」

そしてこの会話を、外の地面に打たれた杭に両足を乗せ、角度を付けた腕立てを行いながら聞いていた人物……。その人物は、背中に“剣と兵器の申し子”香坂しぐれを乗せながら、達人達の会話に頼りなさ下名声で割り込んできた。

「死ぬだの……」

その人物は、この達人達が会話で出していた件の中心人物……“梁山泊内弟子”の白浜兼一。

「生きるだのそういう相談は……本人のいない所でしてください……」

兼一は、達人達が話していた内容の不穏さに、常識的な突っ込みを入れた……。確かに、人の生死に関わる話を本人の前で平然と話すのは不味い。

「いや、君的にはどうかなくと思ってね。更に本格的な修行だが……どうする？ きつ〜いけど始める？」

だが、ここ梁山泊の豪傑達に常識的な突っ込みを入れても効果は薄い……。故に、兼一の腕立てを見守っていた秋雨は、兼一の言葉など無視をして言葉を投げかけた。

「きついですか？」

「はい！ きついです」

秋雨に不安げに質問した兼一の言葉は、秋雨の即答によって切り捨てられてしまう。

「……………」

そして、しぐれを乗せた腕立てを終えた兼一は。ゆっくりと体を立たせながら再度、秋雨に質問をする。

「もう少し待ってもらえます?」

「もう少しってどのくらい? 明日?」

だが、その質問も秋雨の素早い切り替えしによって返されてしま  
う……………」

「……………」

(秋雨のやつ……………修行始めたくてうずうずしてるんだな)

この秋雨の様子に、逆鬼はそう当たりを付けた……………。実際、確かに秋雨は早く技の修行に移りたいのだが。当の兼一自体が、その“本格的な修行”に尻込みしてしまい今回、技の修行は先送りとなつたのであつた……………。

そんな梁山泊でのやり取りは既に過去の事……………。

現在、兼一は学校での所属部活である園芸部の活動を行っていた。

「うお〜い、はま君、泉ちゃん? 水やりおねがいね〜」

この園芸部の顧問である小野京子が園芸部活動開始の挨拶を執り行った事で、兼一と泉の放課後の部活動が始まった……。

園芸部の活動が始まり、暫くの間時間が経ったころ。花壇の花々に如雨露じよつゆで水やりをしながら、泉が兼一に言葉を投げかけ始めた。

「……白浜君ってさー、風林寺さんとかとよくいるよね」  
「えっ？ ええまあ……」

実はこの泉、本名泉優香は。兼一に気がある様で、兼一と何時も一緒にいる美羽との関係を探ろうとしているのだ……。

「もしかして二人って……」

「はい？」

「ははは！ 兼一く〜ん！！」

しかし、その探りも。この場に突然割って入って来た人物の大声に遮られてしまう。

「やあ、元気そうだね」

その人物は、兼一に敗れた“元・ラグナレク”の武田一基であった。また、探りを遮られた泉は静かに、兼一に気付かれぬ様にいじけている……。

「あ、武田さん。これからロードワークですか？」

「はは、左腕の復活を機に学校でもボクシング部に入ったんでね」

以前から、武田はその壊れた左腕を岬越寺脅威の医療法で治療を

続けていた。その甲斐あつてか、今ではもう既にボクシングが出来るぐらいに回復している。だが兼一は、そんな武田についての心配事があるようだ……。

「前に言っていた脱会リンチとかいうのは……まだ、大丈夫ですか？」

この兼一の言葉は以前、兼一が辻新之助に敗れてしまった時の話で。兼一が辻に敗れ、その膝を砕かれようとしていた時。間に割つて入り、兼一を助け出した武田が“ラグナレク”脱会の意を、その場に居た者達に伝えた事により出て来た話で。“ラグナレク”には、脱会する者には最後のケジメとして、執行人達による“リンチ”が規則として存在しているらしく。今回は、その脱会した武田の脱会リンチを心配した兼一の質問であつた……。だが武田は、その兼一の質問を特に気にする事も無く答えた。

「うーん、それがどうも“ラグナレク”内部で色々忙しいいらしくってね。何でも、僕の元・上司のキサラちゃんが昇進したとかで、辻君もそれどころじゃ無いみたいだよ！」

「そうですか、取り合えずは大丈夫なんですね。もし何かあつたら……僕も戦いますので」

「ハハハ、気持ちだけで嬉しいよ。大丈夫！ 自分の事は自分でね！！」

武田の言葉に兼一は少しの安心をすると同時に、自身もその時が来れば闘う意思がある事を伝えた……。しかし、当の武田は兼一の言葉に軽く反応するだけであつた。

「じゃあ、僕は行くよ。君のハニーよろしく？」

そして武田はそう言って兼一から離れ、当初の目的であるロードワークへと向って行ってしまった。

「がんばってー!!」

「(ハニ―って、もしかして風林寺さんの事!?)」

兼一と泉は、その去り行く武田を見送りながら活動を再開する事にした……だが、泉の方はどうやら更なる疑惑が兼一に出て来たので。一度コホンと咳払いをした後に如雨露で水やりをしながら、楽しそうに水をやっている兼一へと疑問を投げかけようとしたが。

「でさー、白浜君と風林寺さんて……」

「え?」

「つめたい……」

「え? ひいひい!!」

泉は兼一へと疑問を投げかけようとしたが、自身が如雨露で水をやっていた場所に隠れていた人物によって、再び探りは遮られてしまった……。また隠れていたせいで、泉が持つ如雨露の水を頭から掛けられていた人物は、お手製の電子手帳を持ちながら、自身が隠れていた場所からゆっくりとした動作で出て来た……。

「うわっ! 何だよ新島? そんな所で何してる!？」

「ふっ……データの入力は、人目につかない所でいつもやっている」

この隠れていた人物は、兼一が呼んだ名前の通り宇宙人こと新島春男で。どうやら今回、新島は兼一に用があるらしく、突然真剣は表情になりながら兼一へと口を開いた。

「兼一よ、南條キサラが近々拳豪入りをするらしい!!」

「え？ ああ、キサラって、うちの生徒でラグナレクの幹部だつていう、あの？」

新島の言葉に、兼一は質問で返した。すると新島は、自身が持っていた電子手帳を操作しながら兼一の質問に答え始めた。

「そう、南條キサラ、二年。最近どんどん力をつけている女幹部だ。お前を付け狙ってた奴等の親玉さ。それに、この南條キサラは、女だてらにテコンドーの遣い手でかなりのもんらしい。自分の倒した相手を次々と参加に加える、そのやり方から北欧神話に出てくるヴァルキリーと呼ばれている！」

「なんだい、拳豪って？」

新島の説明に出て来た“拳豪”という言葉に聞き覚えが無かった兼一は、新島へと質問した。

「拳豪ってのは“ラグナレク”の幹部で、特にその実力をかわれた者だけがリーダーの“拳星”直属の兵として選ばれるんだ。つまり、巨大グループ“ラグナレク”の全てを恐怖で束ねている奴等って事だな。それに、キサラが今度加わる事によって、これからは“八拳豪”って呼ばれるそうだし」

「なんか……凄そうだね？」

「だが安心しろ、お前は南條キサラとはやらねえよ」

「は？」

今まで新島の説明を聞いていた兼一だが、この新島の言葉に訳が分からないと言った疑問の声を出す。すると、新島がその宇宙人フェイスを不気味に歪めながら、楽しそうに口を開いき始める……。

「この南條キサラってなあどうやら、お前の友達である鬼島の昔馴染」

染みらしい……。それでこの間、俺様が鬼島と南條のデート？ なのかあは？ まあ、それにつけたんだが……」

「亮平君がデート？ いやお前、なんてもんにつけてんだ!？」

新島の説明を聞いた兼一は一瞬、亮平がデートしている姿を想像したのだが。そのデートが、悪意ある宇宙人によって監視されていた事に驚きを見せた。

「まあ聞けつて、ここからが本題だ……。」

「……分かったよ、続けてくれ」

「そのデートの最後にな、南條の奴が鬼島に宣戦布告しやがったんだよ！ それに鬼島の奴も了承しやがった！ これはチャンスだ兼一！ 俺らが何もしなくても、“ラグナレク”の幹部が一人消えるんだぜ!？」

「え!？」

その新島の言葉に、兼一は更なる驚きに見舞われてしまった……。しかし兼一自身、いま新島が話した事をあまり理解出来ていないようだ。兼一は再び、楽しそうに笑っている宇宙人へと疑問を投げかけた。

「だけどデートするほど仲が良いのに、どうして殴り合いの喧嘩なんかするのさ？ それに亮平君だって、幼馴染の女の人の事なんか殴れないでしょ？」

「だが、それが組織つてもんだ。たとえ親しい人間が居ようとも、組織の敵になるのなら容赦はしない！ これは俺の勘なんだがな、多分キサラは上からの命令で鬼島に喧嘩を売ったんだと俺は踏んでいる」

「そんなツ!？ それじゃあ、亮平君やその南條さんって人は被害者じゃないか!？」



「この作戦を考えた奴は相当の悪党だが……考えが甘かったな」  
「え？」

新島はそう言いながら、兼一へと電子手帳のタッチペンを向ける  
……。

「本来なら幼馴染の女を使って、鬼島の奴をチームに引き込むか、何も抵抗させずに集団で潰すかを考えていた様だが……当のご両人が、とんでもなくやる気満々なんだよ」

「どついつ事だよ？」

「その証拠に俺様は直接、鬼島の奴からお前宛に伝言を頼まれてんだよ」

「伝言？ 何だよ、それ？」

新島から出て来た“伝言”と言うワードに反応する。それも、自身の友人である亮平から直接きた物と聞けば尚更であろう……。そして新島は困惑気味の表情を浮かべる兼一に対して、真剣な眼差しを向けながら口を開く。

「確かに『ラグナレク』との喧嘩はお前の喧嘩ではあるが、キサラは俺がやる。もし手を出そうとするのなら、俺はお前でも容赦はしない”。……一字一句、確かに正確に伝えたぞ。鬼島に聞かれた時は、ちゃんとそう言ってくれよ？ じゃないと、俺様まで巻き添えを食らっちゃまう」

「どついつ事だよそれ！？ なんで亮平君はそんなにやる気になれるんだ！？ デートするほど仲の良い人に！！」

亮平から送られてきた伝言を聞いた兼一は、新島の肩を掴みながら思いつき揺さぶり始めたが。

「だぁーッ！！ やかましい！！」  
「ブツ！？」

だが新島は、突然冷静さを欠き始めた兼一に向って、顔面に思いつきりパンチをぶち込んだ。しかし、新島の攻撃はそれだけでは留まらず、地面に倒れ付した兼一にストッピング（踏んづけ）を浴びせ続けた。

「気になるんなら直接聞きに行け！！ とにかくだ！！ お前は辻新之助とのリターンマッチだけを考えてれば良いんだよ！！」  
「痛いバカやめれ！！ 本気出すぞこの！！」

この新島の猛攻はそんなに痛くは無かったのだが、しつこ過ぎる攻撃に兼一は若干キレかかっていた。

そんな時、今まで兼一に対してストッピングの雨を浴びせていた新島が、少し息を切らせながら。自身が踏んづけている兼一に向って、上から見下げる形で喋り始める。

「今、奴は長い間狙っていた拳豪の座をキサラに取られたってんで精神的にダメージを負っている。それに、俺が流してやったデマで兵が減って行き、今では辻隊は壊滅状態さ！！」

「（お、恐ろしいやつ……）」

ケケケと不気味な笑い声を発しながら出て来た新島の言葉に、兼一は戦慄を覚えた。

「大体兼一、いいか？ 武田の脱会リンチを任されたのは辻なんだぞ！ 奴を倒せば……」

「倒せばなんだよ？」

「うまくすつと、あやふやに出来るかもしれないぜ？ 俺の力も使

「……」

「ッ!? ……だけど、亮平君はどうするんだよ? 亮平君の方だつて、もしかしたら集団で来るんだろ?」

「兼一……お前は鬼島の奴に殺されたいのか? 大丈夫だよ、あの“掌鬼”が例え集団であつたとしても、キサラ程度の女にやられる筈がねえよ……」

「“掌鬼”って何?」

「お前……そんな事も知らないで、鬼島の達たちやつてたのか?」

「どうやら自身の友達の事も分かつていなかった兼一に、新島はハア〜と溜息を吐きながら答えた。

「いいか?“掌鬼”の鬼島つてのはな、必ず闘つた相手の体の一部、たまに複数箇所だが……。自身が持つ自慢の握力で握り潰す事から付いた異名だ」

「……に、握り潰すつて?」

「まんま骨ごとグシャッ! て、感じだよ。俺も何度か見てきたが……正直目を疑つたぜ。だってよ、人間の体を支える為に出来てる硬い骨をだぞ? まるで、ただ紙を握り潰すかの様に簡単にやつちまうんだぜ? 正気とは思えねえぜ……」

「……」

その新島の説明に、兼一は自身の体から背筋が凍るのを感じる……。だが、それと同時に一つの疑問も生まれた。

「じゃあ、亮平君はその幼馴染である南條さんに……」

「さあな、俺には想像もつかねえぜ……とにかく、お前は辻の事だけを考えておけ。鬼島の奴の事は、自分で聞きに行くか、武田の脱会リンチを阻止してから考えるんだな」

「(確かに、武田さんの力になれるかもしれない。だけど、亮平君

はどうする?)

思考に入り始める兼一を確認した新島は、兼一の体の上に置いていた自身の足をどけ。兼一を立ち上げらせながら言葉を続けた……。

「まあ、辻に負けちまったら話しにもならねえからな。俺は、辻と八拳豪の情報をもっと手に入れる」

「……」

そう言いながら、新島は起き上がったばかりの兼一に顔を近づける。

「おめえはもつと腕を上げておけや!! じゃな」

「何か府に落ちないが……分かった」

新島が去り際に投げた発破に、兼一は取り合えず了承した……。すると新島が去つたのと同時に、新体操部の練習を終えた美羽が走って近づいてきた。

「兼一さん! 練習終わりましたので、迎えに来ましたですわ」

「!」

「あ、ども!」

「ああー? もう来ちゃった!!」

美羽が兼一の下に到着したのと同時に、兼一は服に付いた土を払いながら美羽のと共に去って行った。

そして、この場に取り残された泉は“負けるもんですか!!”と気持ちを苛々させながら、去っていく兼一と美羽を不本意ながら見送るのであった。



第二十七話 兼一、『掌鬼』の意味を知る（後書き）

許してくれ！！ これ以上、無理に書き続けたら酷い事になりそうだったんだ！！  
分かってくれ！！

はい、という事で。

最近、亮平について兼一がどう考えるのかが分からなくなって来たために。

今回のような、微妙な感じになってしまいました。

ですので、ちょっと一週間ぐらい間を空けたいと思います。

その間に、頭を落ち着かせて来ますのでご了承下さい。

取り敢えず今回の話しの部類は“亮平VSキサラ編”みたいな部類です。

多分、もう少し続くと思います。

あゝ、もっと話しを早く進めたい……。

では、やさぐれ始めたゲレゲレですが。

取り合えずは一週間、頑張ってみたいと思います。

ではノシ

もしかしたら、一週間経たないうちに投稿するかも！

第二十八話 不意打ち（前書き）

良いサブタイが思いつかない……。

そして、今回も文字数が1万4千を越えています。

ごめんなさい

## 第二十八話 不意打ち

「兼一さん、最近少し遅くなりましたね」

「いや、この間の海水浴は大変でしたからね……」

兼一が自身の今後の事と、現在亮平の周りを取り巻く状況を新島から聞いた後。兼一の事を、新体操部の練習が終わった美羽が迎えに来てから程無く経った現在。二人は梁山泊へと、帰宅の徒に付いていた。

そんな中二人の会話は、亮平が姫野と幼馴染であるキサラと遊びに行っていた土日に。兼一と妹であるほのかを交えた、梁山泊の皆と行った海水浴の話で盛り上がっていた……。

「まさかサメと闘うはめになるとは……」

「まあ、何事も経験ですわ」

盛り上がっていた……。

この話しは、兼一が休みを利用して何処か行こうと秋雨に言ったことから始まったのだが。行った先は長老が以前見つけた無人島、別名『風林寺島』で起こった出来事の話しなのだ……。この話しについては、諸々の事情により省略させてもらう。

「おかげで度胸はつきました。もじゃもじゃ（兼一が辻新之助を呼ぶときの名前）でもなんでもどんとこーいって感じですよ!!」

すると、兼一は『風林寺島』でのとんでもない経験からか。自信満々の笑いを口にしながら、隣で一緒に梁山泊へと向っている美羽に頼もしい言葉を言い放った……。すると、何やら美羽が何かに気付いた様だ。



「あら？ だったら丁度いいですね！」

「え？」

その美羽の言葉に反応した兼一は、今何かに気付いた美羽が、その細く綺麗な指で指し示している方向へと視線を向けた……。そこには。

「噂をすればモジャモジャさんですわ？」

「ひい！！」

美羽が指し示した方向に視線を向けた兼一は、舌の根も乾かぬうちに怯えたような情け無い声を出し始めた……。そこには兼一が以前敗北を喫し、そのせいで兼一にとつてのトラウマ対象へとなってしまった辻新之助が、腕を組みながら堂々と立っていた……。

「どうします？ 勝負、申し込みます？」

「ちよ、ちよっと待ってね！」

その完全にトラウマスイッチが入ってしまった兼一を苛める様に美羽は兼一に対して挑発染みた言葉を投げかける。だが当の兼一は近くにあった、辻新之助が立っている空き地と道路を分けている下がブロックで固定されているフェンス越しに隠れ始めた。

「こんな所で何してんのかな？ ちよっと様子を見てみよう!？」

「そうですね？」

トラウマから隠れるために必死の兼一に対して、今日の美羽は少しだけイジワルな態度を取っていた。

だが兼一も言ったからには、ちゃんと様子を見るつもりらしく、

表情を真剣なものへと変えてゆく。

「（モジャモジャとその部下が二人だけ……。新島の言った通りになつてるよ……。ん？ 三人の中心に誰か居るぞ？ 女の子か？）」

兼一が様子見をしている有り触れた空き地では、辻とその部下二人が一人の女性を囲んでいた……。その女性の格好は、頭に帽子を被り、赤い英語文字のＴシャツに、下は左足の付け根から下をバツサリと切ったジーンズ。そして靴は底が固そうなウエスタンブーツを履いている。

すると、その女性に対して腕を組みながら堂々としている辻が口を大きく使いながら凄み始めた。

「俺はぜってーに認めねえぞ！！ てめえが八拳豪だと！？ “実力だけ”で“ラグナレク”の序列は決まる筈だったんじゃないのか？」

「（八拳豪だつて！？ じゃあ、あの女の人が亮平君の……）」

辻から出た八拳豪の言葉に、兼一は先程新島に言われた事を思い出していた……。

すると、辻に凄まれていた亮平の幼馴染……南條キサラは、特に気にした様子もなく答えた。

「そうとも、だからこそ私が選ばれた……。当然じゃないか？」

「なにい〜？」

言葉通り、まさに当然と言った表情で言い放ったキサラに。逆に挑発されてしまった辻は眼つきを凄めた。

「それより随分と兵が少ないんじゃないか？ わざわざ私を待ち伏

せしてた割には、備えが悪いね……」

「俺達は辻隊長の親衛隊だ！」

「他の連中は貴様が流した“デマ”で、他の隊に移ったんじゃないかねえか！！」

「私はそんなまどろっこしい事はしないよ……それに、そんな暇はないしな」

キサラが辻隊の少なさについて指摘した所、どうやら本人の知らない所で誰かが“デマ”を流していたようだ……だがキサラは、そんな些細な事などまるで鼻につかないかの様に切つて捨てた。

「は！！ 知ってるぜ！ お前、八拳豪に昇格するのと同時に。あの鬼島とやり合うんだろ？ 大丈夫なのかよ？ 華奢な女程度で、あの鬼島とやり合うなんてな！！」

「華奢な女だって？ 女だからって何だってのさ……」

辻がキサラに対して“女だから”と言う内容の挑発をした瞬間。今まで不敵な態度を取っていたキサラの目が一瞬にして鋭い眼つきへと変わった……。

この変化に、キサラを囲んでいた辻達がジリジリと間合いを詰め始める。

「ッ！！」

「兼一さん……大丈夫ですわ」

この、一人の女性に対して三人の男が迫っている状況に。兼一は咄嗟に反応し、今まで隠れていた場所から立ち上がり囲まれているキサラの下へと向おうとする……だが、その行動は同じく隠れていた美羽に、静かな口調で止められてしまう。

「どうしてですか美羽さん!？」

「あの女の方、相当の遣い手ですわ……」  
「……え？」

その美羽の言葉と共に、一番キサラに接近していた辻が地面を蹴りだし。真正面で待ち構えているキサラへと右拳を振り上げながら接近した……。

「おらッ!!!」

辻は掛け声と共に、自身の間合いに入った今でも左肩を前にした左構えで構え続けているキサラへと、振り上げていた右拳を打ち放った……が。その辻の右拳は、キサラが構えている腕を使わず、突き放たれた右腕の外側をなぞりながら体捌きだけで、軸をブラさずに右廻りをした事で華麗に避けられ……。

「なにッ!?!？」

「シッ!!!」

ガゴッ!!

「辻隊長!?!？」

その体を回転させた流れそのままに、キサラは軸足である左足の踵を辻に向けながら、反対の右足を畳む様に、巻く様に遠心力を使いながら辻の後頭部へと、自身の右足に履いているウエスタンプーの踵をぶち込んだ……。この蹴りはキサラが得意としているテコンドーでは、ティフリギー（後ろ廻し蹴り）と呼ばれている……。

「隊長ッ!?!? しっかりしてください!!!」

「辻隊長!！」

「ふん、口程にも無いね……」

この美しい弧の曲線を描いた蹴りに、辻は脆くも一撃で敗れ去ってしまった……。

「す、す……」

「あの方の技……あれはテコンドーですわね」

その光景を目の当たりにした兼一は、あまりのあっけなさに驚きを見せ。この光景を予測していた美羽は、先程の技を一目見ただけでキサラの流派を言い当てた……。

「で、お前達はどつするんだい？ このフヌケみたいに、私に蹴り殺されるかい？」

「貴様ああッ!！」

「よくも辻隊長をッ!！」

だが辻を倒したとしても、キサラの前には未だ二人の男が残っている。

「二人同時ッ!！」

「あ、兼一さん!！」

キサラに向って、その残りの二人が物凄い勢いで向って行く……が。

「こらあーッ!！」

「ん?」

「なんだ!？」

この何処からともなく聞こえて来た叫び声で、二人の男の突撃が一瞬だけ止まった……そして。

「さっきから女の子に何してんだあッ!!」

ドガアッ!!

「あぶッ!!」

「なッ!? ぶッ!?」

止まってしまった二人の内一人に、突然飛んできた兼一の飛び蹴りが顔面へとめり込み。その隣りで並走していたもう一人の男も、この兼一の飛び蹴りの勢いに負け、最初に蹴られた仲間共々地面へと吹き飛ばされてしまった……。

「(ほう……雑魚とはいえ、二人の男を一蹴りで吹き飛ばすか)」

「ふう……」

キサラへと迫っていた男達を蹴り飛ばした兼一は、地面へと着地した後、ゆっくりと息を吐きながら立ち上がる……。

「(すごい! 不意打ちとはいえ、二人の敵をたった一撃で倒してしまいましたわ!)」

そこに、素直に兼一の成長を喜びながら、美羽も遅れて到着した。

「あの……大丈夫でしたか?」

立ち上がり、一先ず落ち着いた兼一は、視線を目の前にいるキサ

ラへと向ける。視線を向けられ言葉を掛けられたキサラは、突然現れ目の前で自身の獲物を一撃で倒した兼一へと不敵な笑みを浮かべる。

「やるじゃない坊や……確か、白浜とか言ってたっけ？」

「え？ どつかでお会いしましたっけ？（おかしいな、僕は直接会ったとき無いのに……）」

「うちの部下が何度も世話になってるじゃないか。ま、私は写真で見ただけだけどね……」

このキサラの言葉に、兼一はなるほど頷いた。だが、キサラはまさか自身の事を知られているとは気付いていなかったため、取り合えず自身の名前を名乗る事にした。

「私は南條キサラ、白浜で良いんだよな？」

「あ、はい……白浜兼一って言います」

自己紹介を受けた兼一は、持ち前の人の良さで普通に返してしまっただ。

だが、本人だと確認出来たキサラは己が纏う空気を張り詰めさせる……。

「そうかい、じゃあやっぱり坊やが白浜なんだな……。技の三人衆の内、宇喜田と武田の二人を圧倒した男……これはどうにも一度闘いたくてしょうがなかったんだ」

「い、いえ！ 僕はそんなに……」

「（あはは、謙遜してますわ）」

キサラの言葉に、兼一は美羽の言う通り謙遜をし始めた……だが、キサラの話しはまだ続いている。

「そこに転がってる辻は大した事ないと言っていたが……うちの武田を圧倒した男が、大した事が無い訳が無いからね!!」

「……………」

その言葉と同時に、キサラは先程と同じ左足と左肩を前にした左構えを取った……。この構えを取ったキサラに美羽は、観察する様な視線を送る。

「（先程の蹴り……前進する相手の後ろから踵を当ててましたわね。それに蹴りのしなやかさも、まるで鞭の様に柔らかかったですし……）」

そして次に美羽はキサラの太腿に視線を向ける。

「（発達した大腿四頭筋……威力は保障されてますね。更にこの間合いの取り方……）」

美羽が言ったのは、現在の兼一とキサラの間を開いた距離だ……。二人が構えている間合いには、丁度人が一人立てるぐらいの間が開いている（兼一はただ止めさせようと手を出しているだけ）。

「兼一さん、気を抜かないで。あの方、今の兼一さんよりできますわ」

「え?」

キサラの事を冷静に分析した美羽は、兼一にそう言葉を投げかけた……。だが、当の兼一は頬に冷や汗を掻きながら何とも無しに答えた。



「いや、気を抜くもなにも……。相手は女の人ですし……」  
「女だから、何だつて？」

この兼一の言葉にキサラは反応する。どうやら、キサラにとって  
“女だから”という言葉は禁句の様だ。

「いえ、その……僕は、女性には手をあげない主義ですから」  
「……何か、私は女じゃないみたいない方ですわね？」

だが兼一は、本当にキサラとは闘う気は無いかのようにしていた。  
また兼一の言葉に、普段の稽古で組み手の相手をしている美羽は多  
少のシヨックを受けていた……。

「あ、いや、美羽さんの場合はどうせ当たらないし……ていうか、  
そうじゃなくて。それ以前に、アナタと闘う事は、僕の友達から止  
められてるんですよ」

「友達から？ 坊やの友達って言う……」

キサラはその時、以前の蹴りの古賀とのやり取りを思い出してい  
た。

確かその時、古賀は目の前でたじろいでいる兼一と、幼馴染であ  
る亮平の仲が良いと言っていた。この事を思い出したキサラは、目  
の前にいる冴えない男へと口を開いた。

「……それは“鬼島”の事かい、坊や？」

「はい……あなたの幼馴染である、亮平君です」

「ッ！？」

目の前の冴えない男が、自身と亮平との関係を知っていた事にキ

サラは一瞬驚いた表情をするが。一度考えるために一拍の間を空けると、まあそれも多分亮平自身から聞いたのだからと当たりをつけた。

「ふん、それは“鬼島”から聞いたのかい？」

「い、いえ……僕が聞いたのは、宇宙人からです」

「う、宇宙人？ 何だそれは？」

だがキサラがつけた当たりは、予想外の答えによって外れてしま

う。  
当たりが外れたキサラは、兼一が言った言葉に困惑をし始めるが。キサラが考え込んでいると、兼一の方が先に口を開いた。

「あの、アナタは亮平君とは仲が良いんですね？ その……デー  
トするほどって聞いているんですけど」

「ブツ!？」

「まああ!」

兼一から出て来た言葉に、キサラは思わず噴出してしまっ……。  
流石は兼一、人が聞きづらい事を平気で聞いてしまった。また、このやり取りを聞いていた美羽は顔を少々赤らめながら、女子高生と言うより、女子中学生の様な驚き方をしていた……どうやらこっ言  
う話しには普通に興味が有るようだ。

しかし噴出してしまったキサラは、先程までの重苦しい雰囲気な  
ど何処かに行ってしまったかのように取り乱し始めた。

「わ、私と“亮平”が！ デ、デデッデートなんかする訳ないだろ  
ッ!! アイツとは只の幼馴染だ!」

「あ、いま下の名前で“亮平”って……」

「ブツ!？」

「まあまああー!!」

この失言に、キサラは思わず再度噴出した後に片手で口を塞いでしまう。兼一は兼一で苦笑しながらキサラの行動を見守り。美羽は美羽で更に嬉しそうな表情で、キサラの行動を見守った……。

思わぬ失態を犯してしまったキサラは、この生暖かい視線を送る二人に（キツ!）と鋭い視線を向ける。

「お……お前等、ただで帰れると思うなよ!」

「い、いや僕はただアナタと亮平君の関係が知りたくて……」

「……（コクコク）」

自分が幼馴染の事を、下の名前で呼んでしまった事を聞いた二人に対してキサラは凄みながらゆっくりと構えを取った……が。当の本人達は、そんなキサラの心境など関係無いかのように興味津々の表情をしている……（特に美羽が）。

「だから言っただろうが!! “鬼島”と私はただの幼馴染だッ

!! それ以上の関係は無いッ!!」

「で、でもデートはしたんですよね?」

「その辺を詳しくですわ!」

「うるせえ!! 私はアイツとデ、デートなんかしてねえ!! て

めえら、いい加減にしないと蹴り殺すぞッ!!」

「え?」

シュッ!!

兼一は余りに突然起きた事のために、全く反応が出来なかった……。

キサラが行った行動は、先程まで散々自身の事をからかっていた

(本人にとってはそう捉えていた)、目の前に立つ人物に向つて。構えていた体勢から右足を地面から蹴りだし、蹴り出した勢いを殺さず、軸足の踵を相手に返しながら(回転させ向ける)、体を捻り、腰を前に突き出す様にしながら上段廻し蹴りを放った……これだけの動作を、キサラは更に上半身の振りも付け加えながらワンモーシヨンでやってのけたのだった。

この蹴りによって、兼一の左頬にちよつとした切り傷が出来上がった。

「……次は本気で当てるよ?」

「(は、速い! まるでコマ送りの様な速さだった……)」

「(やはり、今の兼一さんには荷が重いですわね……)」

そして蹴りを放ったキサラは、兼一に対して端的に言えば「次は無い」という警告を発する。

「大体、てめえはさつき女には手を上げないって言ってたな? そういう事は、自分より強い奴には言つたって意味はねえんだよ……分かつてるんだろっね?」

「……」

「私はそういうのいっちゃんムカつくんだよ……」

このキサラの問いかけに、兼一は頬の傷など氣に出来ない程にたじろいでいた……。その様子にキサラは、兼一はこのまま怯み続けると思っていた……。が、キサラは後に知る事になる。いま目の前にいる冴えない男を、普通の人間の尺度では測つてはいけないという事を。

「ですが……それでも僕は女性には手を上げません。これは絶対です……」

「だから言ってるんだろ？　そういうのは私より強くねえと意味がな  
いってさ？」

「……………それでもです」

「じゃあ、てめえは私に蹴り殺された後でも、そんな事が言えるの  
か？」

「はい……………こればかりは譲れません」

キサラは目の前で意味の分からない事をほざいている冴えない男  
を睨みつける……………。だが、自身よりも強い存在である者からの威圧  
にも、目の前に突っ立っている冴えない男の瞳はぶれないでいた。  
次第にキサラが込める瞳の強さも強くなっていくが、それでも目  
の前の冴えない男の瞳はぶれなかった。

「……………たくツ！　調子が狂うね全く……………」

「……………え？」

何時までも変わらない兼一の姿勢に、先に折れたのはキサラの方  
であった……………。

「私は何も抵抗してこない人間をいたぶる趣味は無いからね……………。

それに私はこの後、ちよいと忙しいんでね……………勘弁しといてやるよ」

「は、はあ……………ありがとうございます」

「はあ……………（本当に調子が狂うな、これは……………）」

折れたキサラは、目の前で女性である自身に「勘弁してやる」と  
言われたにも関わらず、そう言って申し訳無さそうに頭を下げる冴  
えない男に、呆れた様な溜息を吐いた。

「だけど坊や、そのうち武田共々しめてやるから、精々覚悟しとく  
んだね！！」

「武田さんはもういいでしょう!! 放つといてあげてください!!」  
「そういうのは私を倒してから言いな!! ま…… “鬼島” に脅しかけられたぐらいで闘わないって決める程度の男に、この私がやられる筈が無いがな」  
「ッ!?!」

そう言い捨てて、キサラは近くに置いてあった自分の荷物であるポストンバツクを、足で一度蹴り上げてから自身の肩に背負い。そして、そのまま此処から立ち去ろうとした……が、その時。

「待って下さい!!」

「……なんだい? 折角見逃してやるつてのに、まだ何か用なのか?」

キサラが立ち去ろうと背を向けると。突然兼一が、その立ち去ろうとするキサラに向って声を張り上げた。この声にキサラは立ち止まるも、その空気は先程よりも張り詰めたものとなっていた……。

「どうして亮平君と闘えるんですか? デートでは無いにしても……一緒に遊びに行くぐらい仲が良いんじゃないんですか!? それなのにどうして……」

「それ以上は坊やには関係ないさ……どうしても聞きたいってんなら、“鬼島” から直接聞く事だね」

「あ、ちょっと待って下さい!! ……行っちゃったよ」

だがキサラはそう言い残して、この場から本当に立ち去っていつてしまった。

「兼一さん、鬼島さんの脅しってなんなのですか?」

「え？」

すると、今まで事の成り行きを見守っていた美羽が兼一に向って口を開いた……。兼一は、その美羽の問いに困った表情を浮かべる。

「そういえば、美羽さんにはまだ言ってませんでしたね」

「はあ……」

「実は、亮平君とさっきの女の人は仲の良い幼馴染らしいんですが……どうも色々複雑な事情があるみたいなんです」

「それは先程のやり取りである程度は理解できましたが……それが何か？」

「僕自身、まだ新島に聞いただけですから。そこまで詳しい事情は理解していませんが……」

「なるほど、それで兼一さんは、あの女性の方と鬼島さんが何故闘うのかが分からないと？」

兼一は理解が早い美羽に感謝をしつつも、そのまま話しを続けた。

「はい……でも、これはあくまで新島の勘だそうですが。何やら“ラグナレク”から出た上からの指示で、あの女の人は亮平君と闘わなきゃいけないみたいなんですよ……」

「そうですね……ですが、何故か“鬼島”さんが兼一さんに釘を打った。ここまででは、まあ分かりましたが……それで、兼一さん自身はどうしたいのですか？」

「僕は……」

すると、この美羽の言葉に兼一は言いよんどんでしまう……しかし、兼一は考える。

この問題は確かに亮平自身の問題だ。これに本来、関わるなど釘を刺された兼一は手を出すべきでは無いのだろう……だが、本当に

それで良いのであろうか。

そう考えた兼一はやがて、どこか決意の籠った目で美羽を見据えながらゆっくりと口を開いた……。

「僕は、亮平君の力になりたいです……。確かに、僕の力なんて亮平君には必要無いかもしれないけど……。それでも僕は、友達である亮平君の力になりたい！」

「ふふふ、でしたら早く梁山泊に帰りましょう。確か、今日は鬼島さんもいらっしゃる日ですから」

「はい！ 行きましょう、美羽さん！」

この兼一の言葉に美羽は微笑みながら、そう兼一に言葉を投げかけた……。その言葉に兼一も、何かが吹っ切れた様な表情でハッキリと答えたのであった……。

そんなこんなで、梁山泊へと帰って来た二人の目にはまず……。広い道場の中心で亮平が“哲学する柔術家” 岬越寺秋雨に、見事“裸締め”で絞め落とされている光景が飛び込んできた。

「……………（口を開けたまま、信じられないといった表情をしている）」  
「秋雨さん何やってるんですかーッ！！」



「ああ、二人ともおかえり」

この光景を目の当たりにして、兼一は一瞬で現実から逃避し始め。美羽はすぐさま亮平を絞め落としている秋雨の下へと走っていった。

「どうして鬼島さんを落としてるんですかッ！」

「いや、これは鬼島君たつての御願いに、私が答えただけなんだが……」

「それでもです！！ 見てください！ 兼一さんが放心状態になつてしまつたじゃないですかッ！！」

自身の叱責に何とも無しに答える秋雨に対して、美羽は更に声を張り上げながら、道場の入り口付近で完全に空っぽになつてしまつた兼一を指差した。

「あ、兼一君。そろそろ練習を始めたいから、早く着替えてきてくれないかな？」

「秋雨さん聞いてますの！？」

「……ハッ！！ ……あれ？ 俺は……」

「お！ 起きたね、鬼島君」

美羽の言葉を秋雨が受け流していると、今まで秋雨に絞め落とされた格好のまま、白目を剥きながら眠っていた亮平が意識を取り戻した。

「鬼島さん！ 大丈夫でしたの！？」

「……ハッ！ 亮平君！」

「ん？ ああ、帰ってきてたのか二人とも……」

意識を取り戻した亮平に、今まで混乱しきつていた二人が駆け寄

つて来た。だが亮平は、その心配そうに駆け寄ってくる二人に対して、何事も無かったかのように、普段通りの言葉を返した。

「亮平君、生きてたんだ！ 良かった、遂にこの道場で死人が出たのかと思っただよ！」

「兼一君？ 君は梁山泊の事を、何だと思ってるんだい？」

この兼一の言葉に、秋雨は苦笑をしながら疑問を投げかけるも、その疑問は兼一に軽くスルーされてしまった。そして兼一の言葉に、意識を取り戻したばかりの亮平が答える……かと思いきや。亮平はそのまま、兼一の事を無視しながら。自身の直ぐ後ろで正座をしていた秋雨へと振り返り、そして亮平も正座をしながら頭を思いつきり下げた……。

「忙しい中、武道とは関係が無い俺なんかのために、態々（わざわざ）時間を割いて頂き、本当にありがとうございますッ！」

「……え？」

この亮平の行動に、今まで混乱しきっていた二人の動きが止まった……。

そして亮平に頭を下げられた秋雨は、ゆっくりと微笑みながら口を開いた。

「別に、そこまで御礼をしなくてもいいよ。ところで、確りと“位置”は掴めたかい？」

「はい、俺は一回経験すれば、大抵の事は直ぐに覚えますから……勉強以外ですけど」

「……“位置”？」

「なるほど……」

二人の会話に、兼一は何の事か分からず首を傾げるが。美羽の方は何かに気付いたようだ……。

「それは良かった……じゃあ、後は“絞めすぎない”事を注意しておけば問題は無いだろう」

「はい、本当にありがとうございます……」

亮平は、そう言いながら再び、座った姿勢のまま深々と頭を下げて……。すると、これまで何の事か分かっていなかった兼一が、正座をしている秋雨に頭を下げている亮平へと言葉を投げかけた。

「亮平君？ どうして岬越寺師匠に絞め落とされてたの？」

「ん？ ああ、それは俺が頼んだんだよ……」

「え？」

兼一の言葉に気付き、亮平は下げていた頭を上げながら、何とも無しに兼一の質問に答えた。その亮平から出た言葉に、兼一は驚きの声を漏らす。亮平はそんな兼一など無視しながら言葉を続けようとした。

「なぐに、ただの気まぐれだよ兼一。俺は……」

「嘘ですわよね 鬼島さん？」

「……え？ どういう事？」

亮平が言葉を続けている時、突然横から美羽が、本当に楽しそうな表情で亮平に向けてそう言った。この美羽の言葉に、亮平は「グツ！」という押し黙る様な声を出しながら、苦虫を噛み潰した様な表情をし始める……。美羽はそんな亮平を見据えながら、まだ何も分かっていない表情の兼一に説明をし始めた。

「ふふ　さつき会った鬼島さんの幼馴染の方の事ですね、兼一さん」

「なッ!?　お前らキサラ“姉ちゃん”に会ったのかッ!?”

「「キサラ“姉ちゃん”?”」

「あ……いや……その……な?”

美羽から突如出た“幼馴染”という言葉に、亮平は驚いてしまい思わず普段の呼び方で尋ねてしまった……。その意外な呼び方に、兼一と美羽の二人は本当に意外そうな視線を亮平に向けるが。当の亮平は何やら恥ずかしそうに押し黙ってしまった……。そんな普段の性格からは考えられない態度を示す亮平に、美羽は微笑ましそうな顔をするも、取り合えずは兼一への説明が先だと思い、兼一へと視線を向けた。

「兼一さん?　どうやら鬼島さんは、あの方との闘いで。相手を傷つけずに勝つつもりのようですわ」

「え?　……ああ、そういう事ですか」

「おい、お前ら……俺の質問に答えるよ」

すると二人で納得し始めた、美羽と兼一に対し、亮平が訝しげな視線を送り出した……。

この視線に気付いた二人は、慌てて亮平の方へと意識を戻す。

「え!　うん、確かに僕と美羽さんは、あつき亮平君の幼馴染である南條さんに会ったよ」

「ええ、その時に御話しも少しだけ致しましたの」

「ふん……で?　会ったのは良いとして、何も無かったのか?»

二人の言葉を聞いた亮平は、一度軽く溜息を着きながら話しの続きを促した。

「まあ、僕とは少しだけ闘いそうな雰囲気だったけど……。一先ずは見逃してくれたから、特には無かったよ」

「ええ、今の兼一さんには荷が重い方でしたので。正直助かりましたわ……」

「……そうか、そう言えば兼一？ もう新島とは話したのか？」

この亮平に言葉に、兼一は一瞬だけピクツと反応するも。直ぐに瞳を真剣なものへと変え、目の前で正座から足を崩した亮平へと口を開いた……。

「……伝言も聞いたよ」

「ならいい……。俺が言いたいの、新島に伝えた通りの事だから、もう話す事は無いな……」

「いや、あるよ」

「ん？ 新島からちゃんと聞いたんだろ？ だったら、お前はお前の喧嘩をすれば良い。俺は俺の喧嘩をするだけだから……」

亮平にそう言われた兼一は、一度首を横に振りながら言葉を続けた。

「確かに僕が、亮平君と南條さんの闘いに手を出すのは筋違いかもしれない……。だけど、僕は亮平君の力になりたいんだ！」

「……」

兼一が続ける言葉を、亮平はジツと兼一の事を見つめながら聞いている。

「新島のやつが言ってたけど、もしかしたら“ラグナレク”は南條さんを利用して、亮平君を集団で倒す作戦を立ててる可能性がある

んだ」

「……………」

「僕は亮平君と南條さんの闘いには、手を出さない……。だけど、他の事なら僕が力を貸したって良いんでしょ？ だって、これなら二人の事は邪魔して無いんだしさ！」

「いや、俺が言いたいのはだな……………」

「止めたって無駄だと思いますわ……。だって兼一さんですもの！」  
「いや、だからそんな嬉しそうな顔してもだな……………俺が言いたいの  
はな？ 何人来るかも分からない状況で、お前を巻き込みたく無い  
って事なんだぞ？」

どんどん先に行ってしまう二人に戸惑いながらも、亮平は取り合えず新島に頼んだ伝言の意味を、直接言葉にした……………（本当は、その集団すら亮平にとっては、自身の“喧嘩相手”だったのだが）。

しかし、そんな亮平の言葉など関係無いかのように。美羽の方が、天使の様な微笑みを浮かべながら口を開いた。

「その辺も大丈夫だと思いますわ。兼一さんは先程、弱いとはいえ二人の男の方を、一蹴りで纏めて蹴り飛ばしてましたから……………まあ、“不意打ち”ではありましたが。ですので、その程度の方達が何人来ようと、その辺の不良達レベルなら既に問題は無いと思います」  
「……………ハア……………」

この美羽の言葉に、亮平は大きな溜息を吐きながら、自身の顔を両手で塞ぎこんでしまった……………。どうやらこれから、未だに伝言の意味を理解してくれない二人を、どうやって納得させようか悩んでいるようだ……………。しかし、微笑む美羽に悩む亮平、ここまでが良いのであるろう……………。問題は美羽から出た“不意打ち”というフレーズを聴いてしまった瞬間に、見事に固まってしまった兼一の方であるう。

「どうしましたか？ 兼一さん？」  
「……み、美羽さん？」

その兼一に気付いた美羽が、何事かを問うが。兼一の方は、どこか歯切れの悪い口調で美羽の問いに答え始めた。その光景に両手で顔を塞いでいた亮平は、「ん？」という疑問の声を題しながら、顔を覆っていた手を開いた……。そこには、何やらやらかしてしまった様な表情をした兼一の姿があった。

「そ、そういえば僕……。さっき“不意打ち”で倒してしまった二人をどうして来ましたっけ？」

「え？ 確か“不意打ち”で倒された後、あの状態のまま放置して来ましたよね？ それがどうかしましたか？」

「……………ああああッ！！！！」  
「おお！ どうした兼一ッ！！！！」

美羽の言葉に突如発狂し始めた兼一に、大人しく事の成り行きを見守ろうとしていた亮平は思わず驚きの声を出してしまう……。この兼一の様子に、美羽が何事かを尋ねる。

「どうしましたか！？ 兼一さん！！！！」  
「ぼ、僕……人としてやってはいけない事をしてしまいました」

この兼一の様子に、美羽はある事に気付いた。

「あ、“不意打ち”の事ですか？ それでしたら、女の子を助けるためでしたし……」

「ですが……」  
「まあ兼一君、取り合えずは落ち着きたまえ」

取り乱し始める兼一に、これまで空気となっていた秋雨が言葉をかけた……。すると秋雨は、ゆっくりと兼一に近づきながら、兼一の両肩に手を置いた。

「え？ 岬越寺師匠？」

「兼一君は“不意打ち”をした事に罪悪感を覚えているのだね？」

「は、はい……たとえ女の子を守るためとはいえ、“不意打ち”は流石に人として卑怯ですし」

「そうか……だけどね、兼一君？ もし、兼一君が。その女の子が襲われている時に助けに行かなかったら……兼一君は自分を許せたかい？」

「ッ！？ ですが、それでも僕は……」

秋雨の言葉に、兼一は何か気付いた様な反応をするが。その反応は直ぐに収まってしまった……。どうやら兼一の中では、“不意打ち”は本当に禁じ手のような位置にあるようだ。

「……兼一よ、お前はキサラ姉ちゃんの事を助けてくれたのか？」

「え？」

すると、そんな兼一の姿を見かねたのか。突然亮平が兼一に向ってそう聞いてきた。

「だったら、俺はお前に感謝するよ。何たって、俺の幼馴染を守ってくれた恩人なんだからな」

「亮平君……何かごめんね、気を使わせてしまった」

「気にするな、事実なんだから仕方が無いだろ？ それに、やつちまったもんは仕方ねえんだ……。そういう事は、“次はやらない”って反省すりゃ良いんだよ」



「亮平君……」

この亮平の何とも無しに発した言葉に、兼一は少しは落ち着いたのか。段々と表情が柔らかくなつていくのが確認出来た……。だが亮平の本心では、兼一の助けなど無くとも、自身の姉貴分であるキサラが。そこら辺にいる相手になど負けるはずが無とも考えていた……。

「分かつたらあまり気にするな……不良やつてる奴等だつて、“不意打ち”なんかにゴチャゴチャ言う奴なんていねえからさ」

「そうなのかな？ だつて、やっぱり不良の人達の喧嘩つて、一対一が基本なんじゃ……」

「兼一よ、お前は不良を舐めてるのか？ 不良じゃない俺だつてそうだが……たとえ“不意打ち”で負けたとしても、負けは負けつて認めるのが不良やつてる奴の基本だぞ？ 大体、不良達が格闘技やつてる奴等に言う台詞の大抵が“喧嘩は何でもあり”つて言葉なんだぜ？」

この亮平の言葉に、何故か秋雨が静かに頷いていた……。どうやら秋雨自身は、不良達のプライドの様な物は理解している様であった……。

「でも……」

「でも糸瓜へちまも無い、不良つてのはそういうもんなんだ……。それに、不良つてのはしつこいのが基本だ……舐められたら負けつて世界だから、負けず嫌いが多いからな。だから気をつけるよ兼一？

今日、お前にやられた連中は必ずリベンジタイムンにやって来る！ その時に本当は必要ないが、謝つて、改めて一対一タイムンをやつてやれば良いんだよ……」

亮平はそう言いながら、目の前で俯き始めた兼一に、右手に力を“グッ！”っと込めて握り拳を作って見せた……。兼一は、その自身の友人の拳に魅入っていた……。

亮平の拳は大きくて……。そして力強く、どこか頼れる様なそんな拳をしていた……。

この拳を見た兼一は、途端に今まで纏っていた暗い雰囲気を一変させ。

何か肩の荷が下りたかのような、そんなスッキリとした表情をしていた……。

「分かったよ亮平君！ 次にあの人達が来た時、僕は正々堂々……真正面から、あの人達と闘う……！」

兼一もそう言いながら、亮平が握った同じ手に“グッ！”っと力を込めて、亮平の握り拳に答えて見せたのだった……。

「その息だ兼一……今度あった時は、思う存分ポッコポコにしてやれ……！」

「ポッコポコって……！」

兼一はこの時『亮平君、最後の一言で台無しだよ……』と、心の中で密かに思うのであった。

## 第二十八話 不意打ち（後書き）

もっと進めたい、もっと上手く言葉を使いたい。  
キリがないですね……。

そして今回、ゲレゲレが書いていて気になったのが。  
心理描写が酷い、台詞も他の文章もどこかぎこちない、長ったらしく書き過ぎた。

この三点です。

戦闘描写は、まあ今回はキサラの実力を書こうとしたので、説明が長くなってしまいました……これも反省です。  
次からは、その辺を意識して書いてみたいと思います。

さて、一人反省会もここまで。

今回はキサラの“五十人”組み手です。  
今回読んでくださった方で、「あれ？　なんかキサラが強く書かれてない？」と感じてくださった、そのアナタ！！　正解です。  
この二次小説では、原作よりもキサラの強さを少しだけ強く書いています。

ですので、今回はキサラの一人対五十人にします。

次回予告も終わり、ここからはお知らせ。

現在、実はゲレゲレ……。

なんとオリジナル小説を執筆中です。

まあ、一日500から1000文字ずつ書いてる感じですがね。  
大体、プロローグみたいなのが終わってから投稿したいと思ってます（5・6話ぐらいです）。

ですので、投稿した際はそちらも御願います。

内容は、ギリシャ神話をゲレゲレが都合のいいように崩した感じになっております。

かなり崩れてます、だってほぼ参考にしただけですしね。

また、主人公は“当然”ガチムチ兄貴です。

ヒロインは……おたのしみという事で。

なぜ書き始めたかというのと、やっぱり折角小説になろうで書いてるんだし。

オリジナルも書かなきゃ損だなって思っちゃったからです。

後は、大学の図書館で暇つぶしに読んでた本に影響されたって感じですね。

では、後書きすら長ったらしくなってしまいました。

この辺で失礼いたします ノシ

あ！ あと、PVが60万を越えました、本当にありがとうございます御座います！！

ではノシ

第二十九話 強さを求めて（前書き）

今回はあまりストレスを溜める事無く書けました。  
うん、やっぱり戦闘シーンの方が気が楽だわ。

## 第二十九話 強さを求めて

夏の夜風が肌寒く吹く、河川敷のとある橋の下に……。何やら物々しい空気を周囲に撒き散らす、男達の集団が集まっていた……。

この集団の殆どが、体格の良い威つい風貌の男達で。素手の者もいるが、何人かが手に木刀やバール、鉄パイプを持ち。また4・5人ぐらいの男達は、他の者達と違ってバイクに跨っていた……。

「そこか!! 出て来い!!」

すると、この集団の先頭に立つリーダーらしき人物が、突然ある方向に声を張り上げた……。

男が向いている方向は、こここの大きな川を電車で渡る為に掛けられた、コンクリートで出来た橋を支えている、柱の付け根部分……。ちよと、男達の集団からは死角になって見えない部分だ。

その方向に男が声を張り上げてから暫くすると、一人の帽子を被った女性がゆつくりと出て来た……。

「なんだあ、一人だけか？」

男はその女性を一見すると、落胆したかのような声を出し始めた……。  
だが、出てくるのは男達にとっては幸か不幸か……。一人だけではなかった。

「いや……」

その突然、何処からとも無く放たれた言葉と共に、数人の人間達

が最初に出て来た女性を囲むかのようにぞろぞろと出て来た……。そして何人かが出揃った時、先頭にゆっくりと出て来た白スーツの男が言葉を続けた。

「一人欠けていてすまないが……七人だ！」

白スーツの男がそう言うと、夜闇に隠れていた他の人物達の顔が上から照らされる月明かりによって露となった……。

それによって見えるようになった面々の顔を、対峙している男達の集団はじっくりと見定め始めた。

まず先程まで喋っていたリーダーは、黒髪に眼鏡と、普通にしていたらただの優男にしか見えないのだが。彼から滲み出る余裕と、彼が着用している白スーツによって、ただの優男では無い事を証明している……。

次に、その隣りで座り込んでしまった人物。この人物は、顔に網眼鏡のようなゴーグルを着け、頭にバンダナを巻き、いくら夜と言っても、この夏には相応しくない革のコートを羽織っている。

この人物よりも場違いな格好をしているのは、もはやローブに付いているフードのせいで顔すら見えない人物。この人物の格好は、黒のローブで全身を隠した格好で、男達の集団が幾ら見ても理解できない格好であった……。

次に羽根着きのテンガロンハットが特徴的な人物。この人物が纏う雰囲気は、どこか不思議な感じを醸し出していて、こちらを興味なさげに見据えている……。

その後ろに、このメンツの中でも一番巨大な巨漢が立っていた。この巨漢の格好は、もはや鬚さえあれば着物を着た力士の様な格好であった……。

その巨漢の左側に、肌が浅黒く、髪は短い。それでも男には見えないぐらいに凹凸が確りしている、クールな瞳が特徴的な女性が

佇んでいた……。

最後に、この集団の中心にいる人物。この人物は先程最初に出て来た女性で、頭に帽子を被り、上半身は英語文字の赤いTシャツに、下は左足だけがごっそり切り取られたジーンズ。また履いている靴は、底が固そうなウエスタンブーツだ……。

この面々の手にはそれぞれ、ローマ数字を刻まれた黒い手袋グライベルが嵌められていた。

「なめてんのかてめえ？ たった七人でどうするつもりだあゝああん！？」

この七人を確認した男達の集団のリーダーは、そう凄みながら己の後ろに控えている男達を、手を大きく振ることで指し示した。

「こつちんは50人いるんだぞ！？ 今日全面抗争じゃ無かったのかよッ！！？」

「勘違いするな、お前達如きに、我々七人全員は動かん」

「はあ？ お前、なに吹かしてんだよ？」

男達の集団のリーダーは徐々に苛立ちを募らせる……が。目の前に立つてる白スーツの男は、特に気にした様子も無く言葉を続けた。

「君達には悪いが、今日は新入りの腕試しに来たんだ……ヴァルキリー、前に出る」

「はッ！」

白スーツの男の言葉と同時に出てきたのは、先程まで七人の集団の中心にいた人物。

ヴァルキリーこと南條キサラである……。



「それと……」

「チーフ、今回は私一人でやらせて下さい」

キサラにチーフと呼ばれた白スーツの男が言葉を続けようとした時、キサラが突然言葉を被せて来た。

このキサラの言葉に、チーフと呼ばれた男は特に気にした様子も無く答えた……。

「分かった、ならば一人で50人と戦って来い……。だが、負けは許されないぞ？」

「承知しております……」

チーフの許可を得たキサラは、ゆっくりとした足取りで、目の前に広がる男達の壁へと向って行く。

「よりもよって女一人かよ？ たつく……なめんのもいい加減にしるやあッ!!」

男達のリーダーである男はそう叫びながら、ゆっくりと此方に向ってくるキサラに対して走り出した。

「（この喧嘩は……）」

その走り出した男を確認したキサラは、別に問題視する訳でもなくペースを変えずに、まるで散歩をするかのように、未だ歩き続けている……」

「（あの亮平はげものと喧嘩をするための……）」

「うるうらあッ!!!!」

キサラへと遂に接近を果たした男は、その勇ましい掛け声と共に目の前で未だ構えも取っていないキサラに向けて、その右拳を振り下ろした……。

だが、その男の右拳がキサラに当たる直前……。キサラは迫り来る拳の内側を右手で捌きながら回り込み、難なく男の懐へと入り込んだのだった。

「なッ!? クソがッ!!」

懐へと入り込まれた男は、キサラとの身長差を活かした左の膝蹴りを慣行しようとする……。

この膝蹴りが出されれば、男より身長が低いキサラにとっては顔面へと丁度飛んでくる高さで。横に回るなどして避けなければならぬ攻撃であったが……。

ガッ!

「なんだとッ!?」

避けなければならぬ攻撃であったが……。

キサラはその膝蹴りを横や後ろではなく、上へと男の膝蹴りを踏み台にしながら飛び上がる事で難を逃れたのだった……。

飛び上がったキサラは、背を空中で男に向けながら、右足の膝を腹部付近で畳み込む……。これで溜めを作った右足をキサラは、全身の瞬発力ばねを使いながら男の顔面に向かって、踵を突き出しながら打ち放った……。

「(喧嘩するための下準備さッ!!)」

グシャッ!!  
「ブグッ!?!」

このキサラの蹴りを顔面に喰らった男は、一撃の名の下に、歯や鼻血を辺りに撒き散らせながら、これから始まる戦いから脱落していった……。

「な、この女がッ!!」  
「叩き殺したるッ!!」

だが、この戦いは集団だ。これだけでは終わらない……。その証拠に、目の前でリーダーをやられた男達が。男を蹴り終え、悠然と着地したキサラへと殺到した。

「(良いよ……もつと来なッ!!)」

しかし、その光景によってキサラの表情に浮かぶのは笑みであった……。

そして、最初の三人がキサラへと向ってきた……。対するキサラは、先程の歩みとは違い向って来る三人に対して、自身が持てる最速のスピードで接近して行き。男達の下へと付くや否や、真ん中にいる男に走りこんだ勢いそのままの、右足による“ヨプチャギー(横蹴り)”を打ち放った……。

「シッ!」

ガゴッ!

その蹴りは男の顔面をブーツの側面で正確に捉え、また一人この戦いの脱落者を増やした。

だが、向ってきたのは三人。残り二人が両側に残っている……。その内のキサラから見て右側、つまりは蹴りを打ち出したせいで背を向けている方の男が、手に持っているバットでキサラに殴りかかって来た。

「おらッ!！」

しかしバットは、キサラが頭を下げながら蹴り出した勢いを利用した前進を行った事で、キサラの頭スレスレを通って空を切った……。

これに続き、反対側の男がキサラに対して右足で、振り向きながらのミドルキックを放った……。だが、ここでキサラは再び飛び上がった。

「なんだとッ!！」

「クソが!！」

キサラが飛び上がったせいで、男の蹴りは空を切った。

そして、攻撃を外した二人は飛び上がったキサラを見上げる……。そこには既に、体を空中で右回転で捻り上げているキサラの姿があった。

「シッ!！」

「パガッ!！」

空中でキサラは、まず地上で呆けている自身から見て右側に位置する男に向って、右足による“ティミュ・ドリョチャギー（飛び廻し蹴り）”を振りぬき……。その蹴りの勢いを殺さぬまま、今度は空中で更にクルッと横に回転し、反対側にあるバットを持った男に。

回転した勢いそのままに“ティミヨ・パンデルリヨ・チャギ（跳び後ろ廻し蹴り）”を蹴り放った……。

ガゴッ！

その蹴りは、正確にバットを持った男の頭頂部を踵で捕らえた……。

この一連の動作だけで、二人の男が一瞬にして戦いから脱落うして行った。

「（まだ！）」

二人の男を沈めた瞬間、着地したキサラの後ろから男が鉄パイプを振り下ろした。

ドスッ！

「は、外しただと!？」

だがその鉄パイプはキサラの頭ではなく、土の地面に叩きつけられた……。

いつの間にか、キサラは男から見て左側で構えていた。これを男が確認するや否や、キサラは上体をブラさず、無駄な動きを取り除いたノーモーションの右足による“ドリョチャギー（回し蹴り）”を男の側頭部に叩き込んだ。

パコオオンッ！！

蹴りこんだキサラはすかさず蹴った足を地面に付けず引きながら。そのまま同じ足で後ろに向って、“ティチャギ（後ろ蹴り）”を蹴り放つ……。

ゴシヤツ!!

そこに丁度敵の顔があったようで、その男はそのまま脱落して行った……。

だが、そこでもキサラの動きは止まらず。後ろに蹴り出した右足を今度はちゃんと地面に戻し、そしてそのまま両足で地面から飛び上がった……。

その瞬間キサラが先程まで立っていた場所に、一台のバイクが走り抜けようとしていた。

「な! また飛び… ガシヤツ!!」

通り抜けようとしていたバイクのライダーに、キサラは思いつきり上からネリヨチャギ(踵落とし)を振り落とした……。この蹴りによって、ライダーが被っていたヘルメットの頭頂部付近が砕け散った。

「(まだ足りない!!)」

蹴られたライダーが、バイクを手放しながら地面へと蹴り出された事など目もくれず。キサラは更に笑みを深めながら着地し、こちらへと向ってくる男達の集団を見据えた……。

この光景を目の当たりにしていた“拳豪”達は、正直に驚いた空気を醸し出していた……。

「ヴァルキリーのやつ、前にも増して強くなつてねえか？ あれ」

すると、この中で比較的よく喋る方の第四拳豪のロキが「ヒュ」  
「と口笛を鳴らしながら、そう誰とも無しに言葉を漏らす。この言葉に、直ぐ後ろにいた第三拳豪のフレイヤが反応した……」。

「確かに以前から比べれば、かなりの成長だな……」

「ですが、彼女からはフェローチェ（荒々しく）の様な動きと共に、アジタート（激しく、苛立って）の様な焦りも見受けられますよ」

フレイヤの言葉に反応したのは、意外にも反対側に立っていた羽根付きのテンガロンハットを被った男であった。

「さあな、私にはよく分からないが……確かに、何か焦っている様にも見えるな」

テンガロンハットの男の言葉に、フレイヤはそう返してから、再びキサラの方へと視線を向けた。

キサラに再びバイクが二台突っ込んできた……。

だがキサラは、目の前に迫り来るバイクなど気にしないかのよう  
に、逆にこちらから突っ込んで行く。二台のバイクが並走しながら  
キサラへと迫るが……。

キサラは、その目の前で並走するバイクの間に、飛び込む様に宙

へと飛び上がり。並走するバイクと交差するその一瞬、キサラ一度体を捻り、捻った事で得た溜めを使いながら、両足を左右同時に打ち出した……。

この蹴りは、寸分違わずライダー達の側頭部に命中し。バイクに跨っているライダー二人を同時に地面へと蹴り飛ばしたのだった……。

「次ッ!!」

走っているライダーを横から“点”で捉えるという離れ業をやつてのけたキサラだったが、この戦いでは一瞬の気の緩みが命取りとなる。その事を理解しているキサラは着地した直後、動きを止める事無く、土の地面を蹴飛ばしながら、逆に自分から男達の集団へと走っていく。

「なんなんだコイツはッ!!?」

「くそッ!! とにかく取り囲めッ!! 流石に全方向からなら当たる筈だ!!」

男達の集団は混乱していた……。

何故なら今、目の前で自分達と戦っている一人の少女が、多対一の常識を全く無視した戦い方をしているからだ。

本来、人が複数人と戦う場合、まず囲まれたり・一気に二人以上の人間と戦う事を避ける筈だ。だが、目の前の女はそんな事など関係無いかのように、この集団戦を駆け巡っている。

この光景は、一般的な常識を持つ者達ならば全員が全員“異常”という印象を受けるであろう。

「(止まれないッ!! 止まったらその瞬間に私は袋にされる!!)」

「



だがキサラ自身、この行為を普通だとは思ってはいない……。

「（この感覚に慣れるんだ！！ アイツのはこんな物じゃないんだ！！）」

男達へと接近を果たしたキサラはまず最初に、目の前で鉄パイプを横薙ぎしようとしている男の顔面を、右足による“ヨップチャギー（横蹴り）”で蹴り抜いた。キサラのブーツの横側面で蹴り抜かれた男は、振り抜こうとしていた鉄パイプを手放すと同時に、意識も手放していった……。

「（そして触れさせるな！！ アイツの場合、一瞬でも触れさせたら持つてかれる！）」

そして次にキサラは、その蹴り飛ばした男の直ぐ横にいた男に。

蹴り出した右足をそのまま横へと振り抜くことで、横に立っていた男の側頭部に“ドリョチャギー（回し蹴り）”を叩き込んだ。

「（一つ一つに対応するんじゃない！！ この戦いの“流れ”その物になるんだッ！！）」

右足を蹴り抜いたキサラは、蹴った勢いを殺さずに回転し。今度はキサラのすぐ後ろに迫っていた男の側頭部に、振り向き際の左足による“ティフリギー（後ろ回し蹴り）”を叩き込んだ。キサラが履いている底が固いブーツの蹴りを喰らった男は、キサラの蹴りの軌道そのまま横薙ぎに意識を持ってかれてしまった……。

「一瞬で三人やりやがった！！」

「後ろに目でもあんのかよッ！！？」

この一連の動作に男達は更に混乱を極めた……。

これまでで既に、自身らの集団の実に半分を目の前の敵に蹴り飛ばされていった……。だが終わりではない、そう思った一人の男がふと、これまでどれくらいの時間が経ったか気になり、自身が手に巻いている腕時計に目をやった……。すると。

「マジかよッ！！ まだ一分とちょっとしか……」  
ドガッ！！

その事実によそ見をしていると、時計を見ていた男は。いつの間にか接近してきていたキサラに、無慈悲なまでに顔面を蹴り飛ばされてしまう……。

「よそ見たあ余裕だねえ！！」

男を蹴り飛ばしたキサラはそのまま、再度男達の集団へと突っ込んで行った。

「畜生ッ！！ なめやがって！！」

「もう構わねえ！！ 全員で一斉に掛かれッ！！」

突っ込んで来るキサラに対して男達の集団も、もはやなりふり構わず全員でキサラに向かって行った。

「そうだ！！ そう来なくちゃねえッ！！」

迫り来る人間の壁に向って、キサラは顔に笑顔を貼り付けながら走り込む……。

その後は一方的であった……。バットを持った男は、その構えていたバットごと顔面を蹴り込まれ。

鉄パイプを持っていた男は、振り抜こうとした瞬間に腹や顎などを蹴り飛ばされ。

バールを持っていた男は、他の男達を蹴り飛ばしたついでの流れでキサラに蹴り抜かれてしまった。

バイクのライダーに至っては更に悲惨だ……。

何故なら走っている時に起こる慣性の法則を利用したカウンターを、思いつ切り顔面にぶち込まれてしまったからだ……もちろん、キサラが履いているブーツで、だ。

この一方的な“流れ”で男達の集団も気付けば、もはや一桁台とその数を減らしていた……。

「随分と片付いてきたな……」

そう呟いたのは、この戦いを先程口笛を鳴らしながら観戦していたロキだ。

「ああ、これは思ったよりも早く方がつきそうだ」

ロキの言葉に反応したフレイヤが言葉を返す。

「こりゃあ、確かに俺らの手はいらなかつたな……なあ、オーディーン？」

ロキはそう言いながら、今まで黙って新人の戦いを観戦していた朝宮龍斗へと声を掛けた。

その声に、朝宮はゆっくりと眼鏡を掛け直しながら答えた。

「そうだな、今の彼女は実に良い感じだ……」  
「ん？ どういう事だ、オーデイン？」

この朝宮の言葉に、フレイヤが訝しげな視線を向けた。しかし朝宮は、そんなフレイヤの視線など気にもせず、その整った顔に不敵な笑みを貼り付けながら言葉を続けた……。

「今の彼女は、純粹に“力”を求めている……あの姿勢には共感出来るよ」

朝宮はそう言いながら、不敵な笑みを浮かべた顔で、視線をそろそろ佳境となったキサラの戦いへと向けた。一方、それまで朝宮に訝しげな視線を向けていたフレイヤは、ただ「そうか」とだけ呟いて視線をキサラへと戻した……。

キサラの戦いは、既に決着が着いていたと言っても良いだろう……。

「（おいおいおい、さっきまでは50人いたんだぞ！？）」

現在この場にただ一人残された男は、目の前に迫って来る敵に戦慄を覚えていた……。

「（なんなんだよ……）何なんだよてめえわああ！！！！」

残された男は目の前に迫った敵に対して、自身の中で巡らしていた思考を外に叫び出しながら走り出していった……。

「らあッ!！」

お互いに接近し合っていた為に、二人の間合いが交差距離クロスレンジに重なるのは早かった。

そして接近を果たした男は、目の前にいる、今まで散々暴れまわっていた敵へと拳を振り下ろしたが……しかし目の前の敵には、その拳は届かなかった。

ドッ!

「フゲッ!？」

目の前の敵は、男の拳を少し体勢を屈ませる事で回避し。また、ついでに屈みながらも回転しながら、男のから空きとなった腹に、屈んだ体勢の下からによる右足の“ティチャギ(後ろ蹴り)”をめり込ませ。身長差で高い位置にあった男の頭を下げさせた……。

そして下がって来た男の頭の頭頂部に向って、目の前の敵は更に体に回転を加えながら飛び立ち。男のから空きとなった頭頂部に目の前の敵は、空中から先程と同じ足で“ネリチャギ(踵落とし)”を振り落とした。

ガゴッ!!

この一撃で、男はそのまま地面へと顔面を叩きつけられ……。

その男が地面へと文字通り沈んだ瞬間に、今回の一人対五十人の戦いは幕を閉じた。

戦いが終わり、無数の男達が倒れ付している地上へと着地したキサラは一度息を付く。

「（一度も触れさせないでやれたが……本番はこんなもんじゃない）」

息を付きながらキサラは今回の戦いではなく、これから確実に避けられないであろう亮平との戦いを考えていた……。

「（とにかくアイツのとの戦いの前に、もっと強くならなきゃいけない……もっと、もっとだ!）」

キサラはそんな思考を巡らせながら、先程からずっとこの戦いを見ていた“拳豪”達の下へと戻っていったのだった……。

キサラが“拳豪”達へと合流し、一言二言の会話を交わした後。たったそれだけのやり取りをしただけで、今回の“拳豪”達の集まりは解散となった……。

“拳豪”達が解散し、この夜の河川敷に静寂が訪れた時。倒れ付している男達ではなく、橋を支える柱から、一人の人間……いや、宇宙人が姿を現した。

「たった一人で、50人全員を片付けやがった……」

そう呟きながら、己が持つ電子手帳を弄繰り回す人物……新島春男は。

この男達が倒れ付している惨状に目を向けた。

「こりや、俺様が考えてる以上に“拳豪”ってのは厄介なのかもな……」

新島はその惨状を見て、自身の考えを改める事にし。そして新島は、男達が倒れ付している惨状から目を離し。この場所を今尚照らし続けている月へと、その視線を向けながら思考に入り始めた。

「（ま、鬼島の方は大丈夫だろうが……問題は兼一の方だな。アイツじゃまだ、“拳豪”クラスの奴等とは闘えねえ……。こりや俺様の“計画”を実行に移す前に、俺様自身が一肌脱ぐしかないな！！）

新島……いや、この宇宙人の皮を被った悪魔は。そんな思考を自身の頭で駆け巡らせながら、邪悪な笑い声と共に、この夜闇に消えていったのだった……。

第二十九話 強さを求めて（後書き）

テコンドーはトリッキーな蹴り技の宝庫なので。

今回はそこを書く事に苦労したぐらいですね。

まあ……読者様に理解してもらえなえければ意味が無いのですがね。

さて、今回から反省会みたいのをちょっとだけ続けさせてもらいます。

前回やったら、結構気が楽になったので……すみません、お付き合い下さい。

今回の反省点は、集団戦なのに、もう少しスピーディーな描写が出来なかつた事です。

どうも出した攻撃の説明が長くなってしまふんですよ……。

これは多分、実際の技を知らない人にとっては頭を混乱させてしまうだけの様に思いますからね。

後はそうですね……。

時代劇みたいに、主役に都合良く書いてしまった事ですかね。

以上です、これからは気をつけます。

では、次回は兼一対辻と、兼一の技の修行の為に誰かが一肌脱ぎます。

早く、闇のどこまで行きたい所です……（涙）ノシ



第三十話 稽古開始（前書き）

前回到引き続き、ほとんどが原作沿いですがご了承ください。

### 第三十話 稽古開始

「憂鬱だ……」

「変なのですか？ 普通は基礎練習から技の練習に移るときは喜ぶものですよ」

この会話は、早朝の通学路を歩く兼一と美羽のものだ。

そして兼一の“朝から憂鬱発言”は、前に柔術の師匠である岬越寺に言われた技の修行についてだ。

「でも……正直に白状すれば、単にこれ以上の辛い修行が怖いだけじゃないんです」

「え？」

確かに以前兼一は、岬越寺にこれ以上辛い稽古を進められている……。

その時の兼一は、岬越寺から出る『辛い』という言葉に尻込みしてしまっていた。

が、しかし兼一が技の修行を始めるについての懸念は、それだけでは無いようだ。

「僕って、才能ないでしょ？」

「……ええ、まあ」

「うう……今日まで死ぬ気で修行して来たのに」

兼一の問いかけに、美羽は若干気まずげに答えたが。それでも、分かっていたとはいえ、兼一が受けるショックは相当なものであった……。

だが兼一は、そんな決まり切った事を言われたぐらいでは話しを

止めなかった。

「技を覚えても全然強くなかったら、師匠達ガツカリするんじゃないかなあって思ってる……。それに、僕の夢を応援してくれている亮平君にも悪いし……。実は、それが一番怖いんです」

兼一は朝の通学路を歩きながら、自信がなさそうに空を見上げながら、一緒に歩く美羽にそんな弱音を吐くが。

その兼一から出た弱音を聞いていた美羽は、そんな言葉など特に気にした様子も無く。表情に笑顔を露にしながら、弱気になっている兼一へと言葉を掛けた。

「鬼島さんも含めて、あの方達はガツカリなんかしないと思いますわよ」

「え？」

笑顔で美羽が突然発したの励ましの言葉に、兼一は「ハッ」としながら振り向く。すると其処には、何か確信めいた表情をしながら、片手の人差し指を立てている美羽の姿があった。

「だってガツカリは、あきらめの気持ちですもの。それに、あの方達の辞書に“あきらめる”なんて言葉はありませんわ」

「た、たしかに……。でも、亮平君は……」

美羽の励ましに一瞬表情を明るくした兼一であったが。その表情は亮平の名前が出て来ると共に、みるみるうちに元の弱気な表情へと戻って行ってしまった……。

この兼一の様子に、美羽は一度「はあく」と溜息を吐きながら。その次には、顔に優しい笑みを浮かべながら、落ち込む兼一を諭す様にしながら口を開いた。

「兼一さん？ あの鬼島さんが、自分のご友人であるお人に対して、“才能がないから” “どんなに頑張っても強くないから” と言うだけで、見捨てる様な方に見えますか？」  
「ッ！！」

この美羽の言葉に、今まで落ち込んでいた兼一の表情が、一瞬にして何かに気付いた様な表情へと変わった。

「そうでしたね、亮平君は僕が空手部にいた時から、僕の夢を笑わずに聞いてくれた……。そんな亮平君が、その程度の事で僕を見限る筈が無いですものね。むしろ、僕のこと引つ叩いてでも気合を入れ直してくれそうです！」

「ふふふ、それにあの方達も兼一さんが伸び悩み始めたら。むしろ修行をさらに厳しいものにするでしょうしね？」

「（た、確かに……それはありうる）」

そんなこんなで落ち着いた兼一は、美羽と共に通学路である住宅地の一本道を進んで行く……が。

「まわれ！ 右！！」

「ウギヤアア！ 突然出てくるな宇宙人！！」

「あら新島さん、おはようございますわ」

暫く一本道を進んでいると道路端の電信柱の影から、突如兼一の悪友である新島春男が気味の悪い笑みを浮かべながら“又ウツ”と、不気味な動きで出て来た。

「この道は通ってはいけません。まわれ！ 右！！」

驚く兼一、普通に挨拶を交わそうとする美羽。

その二人の反応を無視しながら、新島は再び最初と同じ内容の言葉を発した。

「何を訳の分からん事を！？ どけ！ そして自分の星に帰れ！！」

美羽との二人っきりの朝を邪魔され、あまつさえ此処から引き返せと言う宇宙人に兼一は声を荒げた。だが、当の新島はそんな事などお構い無しに話しを続けた。

「実はこの道の先で辻新之助が待ち伏せしてるのだ！！ 引き返せ！！」

「モジヤモジヤさんが！！」

この新島の言葉に、兼一は瞬時に反応する。

「奴は大変怒っている！ 部下達をお前に不意打ちでやられたと…」

「…」  
「ッ！！」

新島から出た“不意打ち”というワードに、兼一の顔が……いや、纏う空気自体が真剣なものとなった。この変化に、新島は訝しげな視線を向けた。

「ん？ どうしたんだよ兼一？ 普段のお前なら、“不意打ち”なんて……」

「新島、そこを退いてくれ……僕は行かなきゃいけないんだ！」

「このバカチンが！！ 俺様が折角、てめえに待ち伏せを教えてやったってのに！！」

この兼一の言葉に、新島は兼一の体を羽交い絞めにしながら激昂し始めた。

しかし、兼一の表情は真剣なままだ……。

「僕は彼らに会わなくてはいけない……」

「黙れ！！ 奴は怒ると強えんだよ！！ 今闘ったら貴様の負けは火を見るより明らかだ！！」

「何と言われようが僕は行く！ 男としてもそうだけど、僕は亮平君に言っただ！ 今度闘う時は、正々堂々真正面から行くって！！」

新島に羽交い絞めにされた兼一だが、兼一はその新島の拘束を簡単に振りほどきながら。新島が掛ける静止の言葉など無視しながら、正面に伸びる真っ直ぐな道を進もうとした。

「（まずい！ こ、このままでは、俺様の壮大な計画があ……）」

薄汚い完全利己主義の宇宙人は、このまま兼一を進ませれば自身の不利益になると判断した……。

其処からの行動は速く、新島は己の体で両手を広げながら、戦いに赴こうとする兼一の前に壁となって躍り出た……。

「何の真似だ、宇宙人！！」

「どうしても通るといふのなら、この俺様を倒してから……ドギヤッ……」

「躊躇無く……」

肉壁恒例の台詞を吐こうとした新島の顔面に、兼一は容赦なく右の正拳突きを叩き込んだ……。

叩き込んだ兼一は、そのままスタスタと新島が阻んでいた一本道

を進み始めた。

すると、見事兼一に玉砕された新島がムクツと起き上がり始め、前へと進んでいく兼一に向き直り。

「殺されちまえ！ バーカバーカ！！ たこ八ゲのろま間抜け！！」

自身の制止を振り切り、そのまま辻の下へと向って行く兼一に小学生の様な罵声を浴びせるのであった。

新島の忠告を無視してまで進んだ兼一は美羽と共に現在。以前、キサラと初めて対面した空き地へと来ていた……。

「辻隊長！！ 奴が来ました！！」

「来たな卑怯者！」

その空き地の中心に、新島の情報通りの人物が、二人の部下を侍らせながら仁王立ちしていた。

「俺がキサラにやられてる間に、随分と舐めた真似してくれたな！！」

部下を侍らせながら仁王立ちしていたのは、特徴的な長髪が目立ち、時代錯誤な長ランを羽織っている辻新之助その人であった……。兼一は、既に怒りの頂点を通り越した辻を見据えながら。ゆっく

りとした動作で辻へと近づいて行き、辻の目の前に着いた途端に。辻の両隣に立っていた二人の部下に向って、深々と頭を下げた。

「な、なんでえ!! いきなりこの野郎!!」

「すみませんでした!!」

「「「はあ?」」」

目の前まで接近して来た敵の突然の謝罪に、辻達三人は揃って首を傾げてしまう……。

頭を下げた兼一は、そのまま顔を上げながら目の前で首を傾げている三人に向って口を開いた。

「この前お二人に行った“不意打ち”についてです……」

「はッ!! 今更そんなのは聞きたくねえ!! 用件はただ一つだ!!」

だが、兼一の謝罪は激昂した辻には通じる筈も無く。

辻は兼一に向って指差しながら、これから始まる戦いの啖呵を切り始めた。

「こいつらの代わりに、俺がてめえをぶっ殺す!!」

「……分かりました」

この辻の啖呵に、兼一はスツと掌を開いた左構えを取った……。目の前で潔く自身との戦いを承諾した兼一に、辻は「フンッ!」と鼻息を荒げながら左拳を握り締め……。

「うおらぁッ!!」

その握り締めた左拳を、目前で構えを取っている敵に向って振り



抜いた……が。

パシッ！

突き出した辻の左拳は。兼一がスイッチ（出している足を素早く逆にする動作）をし、その突き出された左腕の手首付近に右手を添えながら受け流した事で無力化されてしまった。

だが、兼一の動作はそれだけではない……。

兼一は受け流したと同時に、受けた反対の腕の拳……つまりは左拳を縦拳の形で、攻撃を打ち終えた辻に向かって矢の様な突きを打ち出した。

「ちッ！！」

だがその兼一の拳は、辻が顔の少し前で両腕をクロスした事によって防がれ……いや。

「（な！ 抜けやがったッ！！？）」  
ドゴッ！！

兼一の矢の様な拳は、辻のクロスアームをぶち破り、そのまま無防備となった辻の顔をぶち抜いたのだった……。

この兼一の拳を喰らった辻は、兼一の拳の威力に体も……意識も着いて行けず。

そのまま後ろの地面へと転がりながら、着いて行けなかった意識を手放すのであった……。

「た、隊長！！」

「隊長！！」

兼一に一撃で敗れ、地面へと体を沈めた辻に。辻の仲間である二人の部下が駆け寄って来た。

逆に、この戦いの勝者となった兼一の下に、今まで黙って事の成り行きを見守っていた美羽が近づいて来た……。

「なるほど、確かにもうそろそろ技の稽古に入っても良い功夫クシフですわ」

「……うそ、吹っ飛んだよ」

どうやら兼一自身、このような勝利を収めるとは思っていなかった様で。

突き出したままの左腕を美羽にペタペタと触られているのにも関わらず、自身が起こした現象に驚愕していた……。

「あの方達が技の修行をやれって言う事はつまり、もう既に兼一さんが技の修行に耐えられるだけの力を持っているという事ですわ」  
「今まで唯がむしやらにやってただけだけど……恐るべし梁山泊！」

兼一は自身の成長に、素直に驚いていた……。

そして、戦いも終わり暫くすると倒れていた辻が目を覚ました。

「いッうー!!」

「大丈夫ですか？」

「あのくらいでは、人は死にませんわ……」

気を失い、部下達に地面に仰向けで寝かされていた辻は。意識が戻った途端に、体を勢い良く起こしたが、先程脳震盪を起こした頭が痛むのか。周りで部下が心配そうに見守るなか、辻は頭を抑えな

がら辺りを見回した……。

その様子に、兼一は心配の声を、美羽はどこから得た経験か分からない言葉を発していた。

「お……俺はいつたい……？ はッ！ そ、そうか！！」

一通り辺りを見回した辻は、先程何故自身が地面に倒れ付していたかを思い出していた。

「すまねえ、お前ら……俺は、お前らの仇を討つどころか。二日続けて同じ場所で、負けちまった……」

「隊長ッ！！」

「辻隊長！！」

全てを思い出し、自身が負けた事を素直に認めた辻は。周りで心配そうに見つめていた部下達に、この言葉を告げた……。

「おめえらも他の隊に散れ！ これ以上俺といても得はねえ」

「そ……そんな、隊長！！」

「俺達は親衛隊ですぜ！！」

辻の言葉に、二人の部下達は目に涙を浮かべながら反論する。

しかし、辻は反論する二人の部下を諭すように、ヨロヨロと立ち上がりながら言葉を続けた。

「あれだけいた兵はみな、消えちまった！ それに俺までこんな無様な負け方を続けちまったんだぞ、辻隊は終わりだ！！」

「……」

この光景を、兼一達は黙って見守っていたが。

次に辻が発した内容に、兼一が辻達の会話に割って入ってくる。

「男の価値は束ねてる部下の数で決まる……俺にはもう、何も残ってねえ！」

「何言ってるんですか!!」

「何？」

この突如割って入って来た兼一の言葉に、辻達は一斉に兼一の方へと視線を向けた。

「あなたは部下百人なんかよりもよっぽど、素晴らしいものをもってるじゃないですか!! 信頼できる友を!! そう、二人もね!!」

「(……友!!)」

兼一へと視線を向けた辻達は、この兼一が言い放った言葉に何かを感じた様であった……。

そして兼一は、そのまま話しを続ける。

「僕にだって、信頼出来る友がいます……」

「兼一く! おめえは必ず勝つ、そういう男だと俺は始めから信じていたぜ!!」

「こんなのもいるんですよ……」

「……」

兼一が話しを続けていると、何処からとも無く、今まで何処に隠れていたのか。

兼一の悪友である新島春男が、不気味な笑みを貼り付けながら兼一に駆け寄って来た。

この薄汚い完全利己主義な宇宙人の登場に、兼一は話しを中断さ

れた悔しさだけでなく。自身が持つ、信頼出来る友達の効果を打ち消すほどのマイナスマ面を持っている悪友がいることを。涙を流しながら嘆いていた……。

「そうですね！！ 辻隊にはまだ俺達があります！！」

「隊長！！ もう一度立て直しましょう！！ トップ目指しましょうぜ！！」

「おめえら……」

兼一の言葉に、大切な友というのを気付かされた辻は。目に涙を浮かべ始めた……。

だが、辻もプライドの高い男だ……辻は、信頼してくれる部下であり、友でもある仲間達に涙を見せない様にして、部下達に背を向け、空き地の出口へと歩を進めていった。

「お前ら！！ これから辻隊は“ラグナレク”をしばらく離れる！

！！

「はっ！！」

「どこまでもお供します！！」

そう言いながら、辻隊の面々はこの空き地から離れていこうとする……が。

突如辻が立ち止まり、自身に勝った兼一へと振り返った。

「おい白浜！！」

「は、はい？」

「おめえのもう一人の友……あの偽ボクサーの脱会リンチが延期になるらしい」

「えっ！？ 本当ですか！！」

「良かったですわね！ 兼一さん！！」

辻から突然出て来た情報に、兼一と美羽は一時の安堵を覚えていた……が。

その安堵は直ぐに消える事になる。

「確か前に聞いた事があるが……お前、あの鬼島の友でもあるらしいじゃねえか？」

「え？ はい、まあ亮平君は僕にとって信頼出来る人ですが……」

「その偽ボクサーの代わりに、どうやら鬼島の方を近々やるそうだし……」

「何!!」

この辻の言葉に、兼一の体に何かが駆け巡った……。

その駆け巡ったものが何かは、兼一自身分からないが、とにかく辻の話しを聞こうと意識を辻に集中した……。

「やるのは、これも噂だが……鬼島の昔馴染みらしいキサラの隊だ

!!」

「……」

「しかもそれだけじゃねえ、立会人に“拳豪”がもう一人着く……」

「“拳豪”がもう一人？」

「第四拳豪の口キって奴だ……こいつは俺も気にいらねえ奴だが、実力も狡賢さも折り紙付だ」

「け、“拳豪”が二人も……」

「ん？ どうしたんだ新島？」

この“拳豪”というフレーズに、突然兼一の後ろにいた新島が身震いを始めた……。

「兼一……鬼島のところに行くってんなら、止めときな！ 俺見ちま

つたんだー！ あいつら“拳豪”って呼ばれる奴等の実力をー！  
あの時はキサラ一人だったが、その一人だけで武器やバイクに乗っ  
た50人の敵に、一回も触れさせる事なく3分以内に全滅させやが  
つたー！！

「ッー！！」

「兼一さん？」

新島の口から出た事に、兼一は全身に電気が駆け巡るのを感じて  
いた……。

「悪い事は言わねえ……ここは鬼島一人に任せときなー！！ 集団だ  
ろうが何だろうが、あの化け物一人なら問題はねえー！！」

「そいつはどうか？」

新島が話しを続けていると、この話題をもたらした辻が言葉を挟  
んで来た。

「第四拳豪のロキつてのは、さつきも言ったが狡賢さじゃ“ラゲナ  
レク”一だ……鬼島相手に、それだけしか用意しないのは可笑しい  
ー！！それに、相手は昔馴染みの女であるキサラだー！！ 鬼島だっ  
て、ちよっとくらいは躊躇する筈だぜ？」

「ッー！？」

兼一はこの時、何故亮平が岬越寺に絞め技を掛けられていたか、  
その本当の理由に気付けた様な気がした……。

「（そうか、亮平君にとって、幼馴染である南條さんは大切な人な  
んだ……。亮平君だって迷ってるし、躊躇だつてしてるんだ……。だ  
から、傷つける事なく勝負を着ける方法を岬越寺師匠から教わって  
たんだ）」

その考えと共に、兼一は握る拳にギュツと力を加えながら、ある事を決意したのであった……。

所変わって学校では。

通常授業の時間も終わり、現在は放課後であるが。

朝の出来事を新島が、速攻で載せた荒涼新聞が号外として学校の隅々まで出回っていた……。

もちろん、亮平もその新聞を手にとっていた。

「I am No. 1」って、兼一の奴はこんな事言わねえだろ？」

亮平はその号外の内容に、苦笑しながらも友人である兼一が勝った事を喜んでいた。

号外に載っている記事の写真には、兼一がうつ伏せに倒れている辻の背中に片足を乗っけながら堂々と勝ち名乗りを上げている姿であった……もちろん、それが偽者だと亮平は気付いている。

すると、今まで新聞を廊下で歩きながら読んでいた亮平に、ある人物が後ろから声を掛けて来た。

「やあ、久しぶりだね鬼島君？」

「ん？ ああ、武田先輩ね……」

亮平が振り返ると、そこには部活中だったのか。



上半身裸の武田一基の姿があった……。

「さつき兼一君に、僕の脱会リンチが延期になった事を教えられてね」

「それがどうしたんだ？ 俺に言う事じゃ無いだろ？」

振り返った亮平に、武田はそう言った。

だが当の亮平の方は、特に気にした様子が無い返事を返している。武田は、そんな亮平に済まなげな顔をしながら、亮平との会話を続けた……。

「どうやら、僕の脱会リンチが延期になったのは君の所為らしいんだ……」

「へえ、そいつは良かったじゃん。これでアンタも少しは安心して、普段の生活を満喫出来るな」

「ハハハ、その辺は感謝してるよ。だけど、これは君にとっては笑い事じゃないだろ？」

「別に闘う相手が分かってんだ。そこまで気にする事じゃないさ……」

どうやら武田は“ラグナレク”が自身から亮平に矛先を移した事について、その矛先を向けられた亮平の事を心配して今回声を掛けた様だ……。

だが武田の心配を受けても、亮平の態度は変わらない。

「まあ、君なら大抵の事は大丈夫そうだけどね。僕にこの事を伝えてくれた兼一君が心配してたのさ」

「兼一がね……ま、そこまで心配してもらわなくても良いんだけどね」

「ハハハ だけど、君がそんな考えでも。あの兼一君が、君と同

じ様な考えを持つと思うかい？」

「思わんね」

「八八、即答かい」

亮平はそう答えた後、まだ話しを続けようとする武田から背を向けた。

どうやらもう話す事は無いと、暗に示している様であった。

武田もその雰囲気を感じ取ったのか、最後にと付け加えて言葉を発した。

「君の相手は確かに、僕の以前の上司だが……。他にも“拳豪”がもう一人いるらしい、君でも一応は気を付けた方が良いんじゃない？」

この武田の言葉を背中から受けた亮平は、一度「ふんっ」と面倒臭げに溜息を吐き出しながら口を開いた……。

「だからどうしたんだ？ それだったら、そのもう一人も“ついで”に潰すまでさ……」

“拳豪”を“ついで”呼ばわりかい……僕には真似できないな」

亮平の強気で、それでいて静かな言葉に。武田は苦笑しながら、何時もの調子で答えたのだった。

そして、もう会話をする事が無くなった二人の間に、ある人物が二人の内、亮平の方に向けて声を掛けて来た……。

「おゝい！ 鬼島〜！！」

「ん？ 姫野か……」

そこに現れたのは、こちらも部活中だったのか。袴姿で走ってく

る姫野真琴であった。

「ハハハ どうやら、僕はお邪魔の様だね？」

「別に気にしないでいいさ、一応教えてくれてありがとな」

「ああ、君も気を付けてくれたまえ。“ラグナレク”は、何時襲ってくるか分からない連中だからね」

「問題ないさ、今回の相手は律儀な人だからな……」

「そうかい？ じゃあそういう事にしておくよ」

そして、武田は軽口を叩きながらも、目の前で背を向けながら話している亮平に向って注意を促した。

この武田からの注意に、亮平は前から走ってくる姫野を待ちながらも一応の言葉を返したのであった。

「あのさ鬼島！ 今週の土曜日、私の部活が休みになったんだ！」

「ほう、それは良かったじゃん」

武田が空気を読みながら静かに離れてったこの場では、何やら焦り気味の姫野と亮平の会話が開始された……。

「それでさ……その……その今週の土曜日なんだけどさ！」

「悪い、今週は忙しいんだわ……」

開始はされたが、その終わりは早かった様だ……。

どうやら、いきなり出来た休日に姫野は亮平と遊びに行こうとしていたようだが。亮平は直ぐにその言葉が発せられる前に、本当に申し訳無さそうに断りを入れた……。

この亮平の言葉に、姫野は「そうか……」とだけ言い、先程まで息を切らしながら動かしていた肩を落としてしまった。

「本当にごめんな？ その代り、今度飯食いに行こう。その時は奢るからさ」

「……分かった、絶対だぞ？ 絶対だからな！？」

そんな姫野を見て、少し可哀相に思ってしまった亮平は。とりあえず、姫野が機嫌を取り戻しそうな提案をする。

すると姫野は、若干必死そうな表情になりながらも小学生の様に亮平へと詰め寄っていった。

その距離は既に端から見たら、亮平の胸に姫野が縋り付いている様にも見えた……。

「わ、分かったから！ 絶対な！ 絶対だ！！」

「よ、よし／＼／＼！ 分かれば良いんだ……分かれば／＼／＼／＼」

亮平から了解の返事をもらった姫野は途端に冷静になり、現在自身と亮平の距離が近すぎる事に気が付いていた……。

別段、それだけで姫野は赤面するような女子生徒ではない。

赤面した理由は、部活終わり直後の袴道着姿……これだけ言えば、ある程度は想像が付くであろう。

「そつだ、姫野？ 一つだけ聞いていいか？」

「え！ な、なんだよ突然！！」

すると突然亮平が考え込むような表情で、目の前でうるたえる姫野に言葉を掛けて来た。

この問いかけに、姫野は自身の袴道着が“くく臭い”と言われるのではないかと、内心ビクビクの状態であった……が。

どうやら亮平が聞きたい内容は違うようだった。

「あのさ、例えばの話しな？」

「……ん？ なんだよそれ？」

「例えばさ、目標に向けて頑張ってる女の子がいるとするじゃん？ 女の子は目標を達成するために、あるサークルの様な集まりに入った訳だ……」

「……それで？」

亮平が突然始めた例え話に、姫野は一瞬何の事か分からない表情をするも。直ぐに気を取り直して亮平の話しを続けさせる。

「だけど、そのサークルの偉い連中が女の子に無理難題を押し付けてきたんだ……。で、その女の子には一人の幼馴染がいます」

「急に出てきたな幼馴染……」

「その辺は流してくれ……。とにかく、その無理難題を押し付けられ困っている幼馴染を助けるためにはどうしたら良かったら……そんな話しなだけで？」

例え話を終えた亮平は、目の前で少し考え込み始めた姫野を見つめる……。

すると暫くした後、姫野は「はあ……」と深い溜息を吐きながら、目の前で自身を見つめている亮平へと視線を合わせた。

「とりあえず私が言える事は、鬼島……あんた例え話下手すぎ！

そんなんじゃ分かるわけ無いだろ！」

「な、何ッ!？」

この聞き捨てならない言葉に亮平は怒るのではなく、普通にシヨツクを受けた。

だが、言った本人の方は落ち着いた口調で言葉を続け始めた……。

「だけど……だけでもし、その女の子を幼馴染が助けたいんなら。」

一回、思いつ切り愚痴でも聞いてやれば良いんじゃないか？ あまり深く入り込んで、もしかしたら女の子を追い詰めるだけかもしれないしな……」

「そうか……分かった、ごめんな？ 変な事聞いちゃって……」

姫野の返答を聞いた亮平は、そう言っただけで姫野に返した。

その亮平の言葉に、姫野は“しょうがないな”と言った風な表情で亮平に口を開いた。

「何に悩んでるかは知らないけど、そんなの鬼島らしくないぞ？

お前はもつと、堂々としてれば良いんじゃないか？」

「そうだな……その通りだよ、全く。すまないな、時間を取らせて」

「構わないよ、悩んでんだっいたら人に聞くのが一番だしな！」

「そうか、じゃあ、ありがとな」

亮平はそう言い残して、帰るために現在いる廊下から自身の下駄箱へと向おうとした……が。

下駄箱に向っていた亮平が、何かを思い出したかのように足が急に止まり、まだ先程の場所で帰ろうとする亮平を見送っていた姫野へと振り向いた。

「ん？ どうしたんだ鬼島？ 忘れ物か？」

その行動に見送っていた姫野は、振り返った亮平に不思議そうな視線を送っていた。

亮平は姫野の視線と自身の視線が合わさると、何処か軽い口調で言葉を発し始めた。

「いや、姫野ってさ、強引な男ってセーフと思うか？」

「な！ 何言っただお前は！？」

突然の発言に、姫野は見るからにうろたえ始めた。その様子を見て、亮平は楽しそうにしながら質問の仕方を変えた。

「じゃあ、女って強引な男はセーフの方なのか？ それともアウトの方なのか？」

「え？ ど、どうだろう……多分、時と場合に寄るんじゃない？」

今度は姫野も、首を傾げながらも答えてくれた。その回答に亮平は頷きながらも、質問を続けた。

「そうか、じゃあ姫野はどっち側なんだ？」

この再びの質問に、姫野は若干顔を朱に染めながら口を恥ずかしそうに動かした。

それと同時に、体の動きもモジモジとしていて、何処か恥ずかしそうであった。

「わ、私は……どちらかと言えば、多少強引でも良いかなって……」  
「なるほど、分かった。じゃあ、改めてありがとうな！」

姫野が答えた途端、亮平はそのまま何やらスッキリしたような顔になって、恥ずかしそうに体をくねらせていた姫野にお礼を告げながら、下駄箱の方へと消えていったのだった……。

「え、ちょ！ いちゃった……何だったんだ急に？」

取り残された姫野は、下駄箱へと消えていった亮平を不思議そうに見送りながら、そんな疑問をただ呆然と呟くのであった……。

亮平が武田や姫野と会話をしていた頃。

先に帰宅の徒に着いていた兼一が、ここ梁山泊の道場で。自身の師匠である岬越寺と正座で対面していた。

「兼一君、急にどうしたんだい？」

「岬越寺師匠！」

「うん？」

兼一はそう言って、目の前で落ち着いた雰囲気を醸し出す秋雨に向って真剣な視線を向ける。

なぜ、二人は正座で対面しているのか……。

これは、兼一が美羽と帰って来た直後。偶々兼一達の帰りを迎えた秋雨を、兼一がそのまま道場まで引っ張って行ったからだ。

ちなみに、兼一は既に道着に着替えている……。

「僕に、今日から本格的な技の修行を始めてください！！！」

真剣な眼差しを向けられながら発せられた言葉に、秋雨はニコッと優しそうな笑顔を兼一に向けながら答えた。

「ふっ……何があったか知らないが、最近の君がしていたものは、まるで違う良い眼だ兼一君！」

秋雨はそう言いながら、太腿を一度ポンッと叩き、正座の体勢から立ち上がったと同時に、兼一に先程の優しそうな表情ではなく、これからの修行の厳しさを表すかのような真剣な表情を向けた。



「では、これから他の者達が集まり次第、本格的な技の修行に移る  
！！」

「はいッ！！ 岬越寺師匠！！」

「他の者達が集まるまで、まだ少し時間がある。それまで柔軟体操  
でもして、気組みでも練っておいてくれ」

「分かりました！！」

これから兼一に取って、辛い修行が始まる……。

だが兼一は、今までとは違って決意の籠った目で、その辛い修行  
に臨むのであった。

第三十話 稽古開始（後書き）

これでやっと進められる……。

この兼一の技の所はどうしても外せなかったもので、すみませんでした。

そして、前回の予告とは違ってしまい申し訳御座いませんでした。

まあ、次回からは本格的に進められるので、楽しみに出来る方は楽しみに待っていてください。

ではノシ

第三十一話 集い始める者達（前書き）

特になし……。

この文を、いっただれだけ書いて来た事か……今は書いてませんよ？

### 第三十一話 集い始める者達

兼一が技の修行に入った頃。

亮平は姫野と別れ、そして現在は帰宅途中で通学路の一本道を歩いていた……。

すると、亮平のポケットから電子的な音声で“ゴッ〇・ファーザ―”のテーマ曲が流れて来た。この着信音に設定してある人物は、亮平の携帯には一人しかいない……。

「（キサラ姉ちゃんか……）」

そう、亮平の幼馴染である南條キサラだ……。

亮平はその事を念頭に置きながら、折りたたみ式の携帯を開いてから通話ボタンを押した。

「掛けて来たって事は、今日なのか？」

携帯を耳にやり、開口一番、亮平は全てを悟っているかのような台詞を吐いたが。どうやらそれは当たりであったようだ……。

『ああ、今日これからある場所に来てもらっ……』

電話越しから聞こえるキサラの声は、前回一緒に遊んだ時とは違う。どこか、真剣みを帯びた……そんな敵意すら伝わって来る声音であった。

だが、この声を聞いても亮平の表情に一切の変化は無い。

「場所は広いのか？ それと、警察マッポの方は大丈夫なんだろうな？」  
『大丈夫だ、問題ない……てか、そんなのが来たら自己責任だ』

亮平の質問にキサラは呆れた声を出す。直ぐに真剣な声音へと切り替えると、当初の目的である場所の指定を行い始めた……。

亮平はそのキサラの説明に耳を傾ける……が、この時亮平は気づいていなかった……。

自身の直ぐ後ろにある電信柱の影に、何やら人間では無いシルエツトが存在していた事に……。

そして所変わり、梁山泊の庭では……。

「し……死にましえん!!」

「兼一さん？」

技の修行で精魂使い果たし、既にボロ雑巾の様に・廃人の様に白くなりながらもまだ必死の言葉を発し続けている兼一の姿があった……。

「あゝあ、こりゃあ完全に意識飛んでるぞ？」

「ぼ、ぼかあ……死にましえん!!」

「……」

美羽の問いかけにも、逆鬼の声にも噛みあわない言葉しか喋らない兼一の傍では。何やらオロオロと困り顔の巨大なタイ人、アパチャイ・ホパチャイの姿があった……どうやら、兼一の意識を飛ばしたのはこの人物で間違い無い様だ。

だがしかし、何時までもこの状態は不味いので。逆鬼は何処からかバケツを取り出し、その中に入っていた大量の水を意識を飛ばしている兼一の頭に向けてぶち撒いた……。

「わっぷー!!」

「ふう、生きてやがったか……」

バケツ一杯の水をぶつ掛けられた兼一は、鼻などに入った水に苦しむも意識を取り戻した。

するとそこに、先程から兼一の事を呼んでいる美羽が兼一に近づいて来た。

「兼一さん？ 武田さんが帰ってしまいますわよ？」

「え!？」

実は今日、武田が岬越寺接骨院に通院する日だったらしく、美羽は帰ってしまう前に一緒に挨拶しに行く事を提案した。

その提案に、先程の状態から気付いたばかりの兼一も頷き。兼一と美羽の二人はこれから、岬越寺接骨院から帰宅の徒に付く武田のお見送りをしに行った。

「武田さ〜ん!〜!」

「やあ兼一君、凄い特訓だったね〜。ちょっとだけ見させてもらっただよ」

既に武田は、梁山泊の門を潜る所だったのだが、どうやら兼一達は間に合ったようだ。た。

そして、どうやら武田は兼一の技の修行をどこかで見ていたらしく、兼一にその事についての話を振った……。

「アハハ……そりゃもう凄かったですよ……」

「け、兼一君!？ どうしたんだい、何だか目が虚ろじゃないかい?」

振ったは良いが、どうやら兼一にとっては軽いトラウマになりつつある様であった……まっこと恐るべし梁山泊である。

すると、虚ろな目……いや、死んだ魚の目とも表現できる程の状態で兼一が復活すると、兼一は武田に向って諭すような口調で喋り始めた。

「だめじゃないですか武田さん？　いくら延期になったって、脱会リンチとかいうのは残ってるんですから……一人での外出は控えてもらわないと」

「仕方ない、今日は私の診療日だったのだよ」

武田と話していると、後ろから自身の師匠である岬越寺の聲がやんわりと入って来た。

「それじゃあ仕方ないですけど……武田さん？　僕が学校で渡した携帯番号ちゃんと登録しました？」

「え？　ああ……」

実は兼一は、学校で武田に脱会リンチが延期になった事を伝えた際に、危険な場面に陥っても自身を直ぐに呼べるように携帯番号を紙に書いた物を渡していたのだ。

だが、どうやら武田はまだその番号を登録してなかったらしく。兼一の問いに、頭をボリボリ掻きながら、兼一の視線から目を離れた……。

「ちょっと携帯貸してください、今から登録しますから」

兼一は武田に携帯を出すように促しながら、自身の携帯も何処からとも無く取り出した。

すると、兼一が携帯を取り出したのと同時に、兼一の携帯電話のランプが発光し始め、それに合わせて甲高い電子音が流れ始めた。

「うん？ 誰だろう……すみません武田さん、ちょっと出ますね」

「ハハハ、構わないよ」

兼一は不思議そうに思いながらも、携帯のディスプレイに写っている番号を覗く。

そこには、兼一の家族でもなく、友人である亮平でもない番号が記されていた……。

しかし、何時までもこのままとはいかず。取り合えず兼一は、その着信に出るために通話ボタンを押した。

『よう兼一、俺様だ！』

「……………」

その声には聞き覚えがあった……。

だが兼一は、聞き覚えがあろうとも、どう考えても不吉な事しか浮かばなかった。その電話の主が要件を言う前に、限りなく無感情な動作で通話を切った……。

「兼一君？ 誰からだったんだい？」

「え？ いえ、ただの地球外生命体でした」

「……………は？」

兼一が電話を出ずに切った事を不思議に思った武田は、取り合えずどんな人物が掛けて来たのかを聞いたのだが、その兼一から出た言葉に一瞬呆けた様な声を出してしまった。

だが暫くすると、再び兼一の携帯が辺りに着信音を響かせ始めた。兼一は怪しむような視線を送りながら、取り合えずその携帯に出る



事にした。

『おいこら、なんで切りやがった!!! このすつとこどつこい!!!』  
「黙れ宇宙人!!! 大体、なんで貴様がこの番号を知っているんだ!?」

そして聞こえて来たのは、兼一の悪友である宇宙人こと新島春男。新島は兼一が電話に出た瞬間に、携帯越しに怒声を浴びせる……。だがそれよりも、兼一はその悪友がなぜ自身の携帯番号を知っていたのか疑問……。いや、気味悪く思い、取り合えず一度新島の怒声に返してから、その事について今度は自身から怒声を発した。

『そんなもん俺様に掛かれば見戯に等しい!!!』  
「ええい!!! えばるなこの犯罪者予備軍!!!」

しかし、新島から返ってくる答えは、およそ答えとは捉えられないものであった……。

この後、そんなやり取りが幾分か続いたのだが……。

『そんな事より兼一よ、鬼島の件が動き出した!』  
「え!?! どういう事だ新島!!!」

この新島が発した言葉によって、途端に電話越しの二人の雰囲気が変わった。

兼一は、その情報に驚いた反応をした後、情報をもたらしした新島に詳細を尋ねた。

『どうもこうもねえ!!! 辻からの情報で、俺様は鬼島をつけてたんだが……さつき、鬼島の携帯に着信があったみたいだな。その電話での話しの内容と電話を切った後の鬼島が取った行動からして、

これから“ラグナレク”の南條キサラとやり合いに行ったと見て間違いは無い!!」

「ッ!？」

兼一は驚きの顔を隠せないでいた……。

その兼一の様子に、近くにいた美羽・武田・岬越寺の三人は何事かと思いい、事の成り行きを見守った。

『いま俺は鬼島の後をつけてるんだが、どうやら街外れの廃病院に向ってるみてえだ!! うん? 不味いぞ兼一!! 鬼島の奴、もう“ラグナレク”の連中と接触しやがった!! 取り合えず、俺様は引き続き後をつける!! 兼一、来るなら早く来い!!』

「え!?! おい新島!! 勝手に切るな!!」

兼一の声も虚しく、新島の声はそこで途切れてしまった……。そして、この様子を唯事ではないと思った美羽が、兼一に何事かを尋ねてきた。

「兼一さん? 新島さんは何と仰っていたのですか?」

美羽の問いかけに、兼一はゆっくりとした動作で携帯の電源ボタンを押しながら答える。

「亮平君が“ラグナレク”と、今さっき接触したそうです……」

「……では兼一さんは?」

兼一はこの言葉を発した美羽に向って、決意の籠った真っ直ぐな瞳を向けた……。

「ええ! 急ぎましよう!」

「はい！」

その真っ直ぐな視線に、美羽も真っ直ぐな視線を返しながら頷いたのだった……。

すると、そんな視線を合わせる二人に、近くでこの話を聞いていた武田が割って入って来た。

「二人で盛り上がってるところ悪いけど、その話しに僕も入れてくれないか〜い？」

「え？」

この武田の言葉に、美羽と共に盛り上がっていた兼一が驚いた顔をする。

何故なら武田は以前、兼一と戦った際に今回の様な出来事を切っ掛けに好きだったボクシングから一度身を引いたと言っていたからだ……。

確かに今は岬越寺のお陰で、ボクシングを辞めた理由である左腕の怪我の状態も良好だ……その証拠に、既に武田は学校のボクシング部で順調に活動している。だがそれでも、以前の出来事は武田にとってトラウマと言っても過言でも無いであろう。

しかし、そんな兼一が抱いた驚きに気付いたのか、武田は表情に何時も通りの爽やかな笑顔を貼り付けながら全く構わないと言った風に、目の前で驚いている兼一に言葉を投げかけた。

「以前、兼一君が言ってたじゃない……“友情は取引じゃない”  
ってさ」

「武田さん……」

武田は「それに……」と付け加えてから、今まで貼り付けていた笑顔ではなく、先程兼一が見せた様な真剣な表情で言葉を続けた。

「僕の脱会リンチが延期……いや、先送りと言ってもいいけど。とにかく、期限が延ばされたのは鬼島君のお陰だしね……あと、そんな危険な場所に兼一君とハニーだけで行かす訳にはいかないじゃない？」

「……分かりました、武田さん！ 僕達と一緒に行きましょう！」

武田の意思を聞いた兼一は、そう言っただけで武田の意思を汲みながら、自身の掌を武田に差し出す……。

この兼一の意図を察したのか……武田は一度軽く手を振り上げながら、その目の前に差し出されている兼一の掌に向けて、自身が振り上げた手を振り下ろした。

その瞬間、『パーンッ！』という小気味良い音が辺りに響き渡ったのだった……。

「うふふ　では急ぎましょう！　兼一さん！　武田さん！」

「はい！　美羽さん！！！」

「ハハハ　じゃあ、行って来ます！　岬越寺先生！」

「ああ、みんな気をつけて行っておいで」

そうして三人は、これから遠足に行く子供でも見守るかの様な雰囲気醸し出す岬越寺に見送られながら。

新島が待つ、亮平と“ラグナレク”の戦場へと赴くのであった……。

第三十一話 集い始める者達（後書き）

すみません、今週は私情で忙しくなりそうなので。  
この様な物足りなさで切ってしまいました……。  
本当はラグナレク陣営の方も書きたかったのですが。  
この様な事情で、それは次回に持越しです……。すみませんでした。

追記

水曜日に初めてキックボクシングのジムに行き。  
知り合いに頼んで軽く練習をさせてもらいました……。知り合いって  
言っても、兄なんですけどね。

いや〜……。顔面ありだと難しいですね、間合いやタイミングの取り  
方が。

ゲレゲレは極真の者なもので……。苦戦しました。  
ですが、最後にやったスパーでは結構いい感じで二人程、中段蹴り  
でダウンを奪いました！！

それ以外に、良い所があとは力が強いただけしか無かったもので……。  
悔しいので、言い訳半分・自慢半分で書かせて頂きました

ではノシ

第三十二話 強さとは、戦いとは何か（前書き）

今回、ゲレゲレの苦手な心理描写満載です。

ですので、ちぐはぐな文章があると思います。

ご了承下さい。

### 第三十二話 強さとは、戦いとは何か

ここは街外れにある、とある廃病院の廃れた待合室……。

この廃れた待合室は、床には大量の埃、更には天井から外れかかった一本の蛍光灯や、革が切れ、中から黄色い化学繊維の様な綿が飛び出ている長椅子などが所々に点在しており。とてもじゃないが、常人ならば長居はしたくない情景を醸し出していた……。

だが其処には、この情景に逆らうように楽しげな声を出す人物と、それを様々な視線で見守る三人の人物が、各々好きな格好で存在していた……。

「ロキ様ーッ！ 外の連中の配置が完了したそうですーッ！！」

この廃病院の待合室は明かりが灯っておらず、唯一の明かりが外から漏れてくる明かりだけなのだが。

そんな暗い雰囲気など吹き飛ばすかのような声で、外に出るために開きつぱなしになっているガラス製の自動ドアから、一人の不思議な格好をした女性が嬉しそうに駆け込んできた……。

「そうか、分かった20号……ではヴァルキリー、外で鬼島の奴が来るのを待っていてくれ」

今の会話で分かる通り、この場には第四拳豪のロキと、今駆け込んで来たその取り巻きの20号……。

そして、亮平の幼馴染である第八拳豪の南條キサラの姿があった。ロキにそう命令されたキサラは、今まで座っていた廃れた長椅子から立ち上がる。

「分かったよ……けど、さっきから気になってたが、どうして此処

に第三拳豪であるフレイヤ姉さまと、第六拳豪のハーミットが居るんだい？」

キサラは、そう言いながら辺りを見回す……。

其処に居たのは、受付のカウンターテーブルの隅っこに腰掛けている第三拳豪のフレイヤと、この明かりの少ない世界に見事同化している、黒いフード着きのローブを被った第六拳豪のハーミットが、この廃れた待合室の壁柱に腕を組みながら背を預けていた。

「この二人は立会人兼ヴァルキリー……お前がやられた時の保険さ、気にするんじゃないよ」

このロキの言葉に、キサラは一度「ふん」と息を短く吐いてから口を開いた。

「いいかいロキ？ 私と“鬼島”の喧嘩は、あくまで一対一タイムンだ……。それに、フレイヤ姉やハーミットの手は借りないよ」

その言葉に、網目のゴーグルを着けているロキは。着けているゴーグル越しにも分かるくらいの笑みをキサラに向けた。

「当然だ、お前と鬼島の奴の喧嘩は邪魔しねえよ？ ま、その後は分かっていると思うが、ここに居る全員で掛かるがな！」

「キャハ　ロキ様あくどーい！」

ロキと共に、20号と呼ばれた顔に暗視ゴーグルを着けている女性は大口を開け、腹を抱えながら本当に楽しそうに笑っていた。

その様子に、壁に背をかけているハーミットはフードの中で「ふん」と詰まらなそうに息を吐き、カウンターに腰掛けているフレイヤは無表情で静観し、廃れたソファアの前に立っていたサラは、誰



にも気付かれぬ様に、拳を握り締めながら歯噛みをした……。

すると其処に、開けっ放しの自動ドアから一人の男が、額に汗を掻きながら焦った様子で駆け込んで来た……。

そして、先程まで20号と大笑いしていたロキが、突如表情を切り替えながら、駆け込んで来た男に問いかけた。

「何事だ？」

この言葉に、おそらく“ラグナレク”でも下っ端であろう男は一瞬“ビクッ！”と表情を強張らせるも、直ぐに立ち直り、駆け込んで来た理由を述べるために口を開いた。

「お……お……」

「ん？ “お”がなんだって？」

だがしかし、男は相当焦っていたのか言葉が上手く出せず、部屋に居た幹部達を困惑させてしまう。

その困惑する幹部達の様子に、下っ端の男は冷や汗を掻きながらも、一度深呼吸をしてから、伝えようとしていた事態を思いつきり“叫んだ”。

「鬼島ですッ！！ ロキ様！！ 鬼島の奴が来ましたッ！！！！」

男が発した待合室中に響いた叫びに、この場にいた20号はもちろん驚きの表情を露にし。

そして四人の拳豪達も、各々の反応を示した。

ロキは再度、楽しそうに笑い……。

フレイヤは掛けていたカウンターから、地面へと降り立ち……。

ハーミットは組んでいた腕を解きながら、背にしていた壁柱から体を離し……。

そして今回、亮平と一対一で戦うキサラは。

決意を込めた瞳を外へと続く自動ドアの向こう側へと向けながら、力強く歩を進めたのだった……。

廃病院へと続く道を、亮平は“ラグナレク”の下っ端に案内されながら進んで行く。

現在、周囲は既に夜の暗さを醸し出しているが、亮平は前を歩く三人の人間に先導されながら目的地である廃病院へと向っていた……。

亮平の前を歩く三人の人間は、そのどれもが格闘技者だ。

亮平はただ、その三人の案内に従いながら歩いているだけだ……だが、亮平の前を歩いている三人は違った。

まず、この三人は前回の亮平と東の戦いを真近で見っていた……。

あの時、亮平と戦った東は、確実に自分達よりも格上の存在であった……しかし、その自分達よりも格上の存在である東に苦戦したとはいえ、最終的には一撃で粉碎して見せた人物が今、自分達の後ろを歩いている。

当時はあれが、後ろを歩いている人物の“全力”だと思っていた……。

だが、その思い込みは勘違いであった事が、両者の戦いを見た事によって出て来た興奮が冷めた後で、確りと気付かされた……。

何故なら、あれだけの攻撃に身を晒されながらも、現在自分達の後ろを歩いている人物は、最終的には倒した相手を担ぎながらも“確りとした足取り”で帰っていったからだ……つまりは、あれだけの攻撃を受けて尚、いま後ろにいる人物には“それだけの余裕”があった事になる。

そんな、自身等の常識など通じない“化け物”が、今自分達の後

るを悠然と歩いている……。

亮平の前を歩いている三人は、各々全身に緊張の冷や汗を流しながら、いつ自分達が後ろから“あの拳”で襲われるのかと恐怖していた……。

すると漸く、目的地である廃病院が見えて来た……。

廃病院には現在、自分達の仲間である集団が、周囲に明かりを着けながら待機している。

三人は、その廃病院から漏れ出ている明かりを見た瞬間、三人同時に「助かった」と、心の中で安堵の息を付いた……。

しかし、その安堵の息は一瞬にして失われる。

先程まで自分達の後ろを歩いていた人物が突然、自分達の真ん中を歩いていった男の肩に、その悪魔の様な握力を誇る“掌”を置いたのだ……。

当然、置かれた本人は「ひッ！」という情け無い声を漏らしてしまふ。

だが、その情け無い声を漏らした仲間を非難する者はいなかった……。

何故なら他の二人も、一瞬芽生えた安堵を捨て去り、先程までと同じで全身に冷や汗を流しながら恐怖に身を固めてしまったからだ。やがて、この恐怖を振り撒く元凶がゆっくりと口を開いた……。

「後は一人で行ける……」

元凶はそのまま言葉通り、自分達の仲間の肩に置いていた“掌”を「ス…」と離しながら、目的地である廃病院へと一人で歩いて行ってしまった……。

この元凶の行動によって、三人はその場へたり込んでしまった。

「お、俺……不良やめるわ……」

「……わ、私も」

「死ぬかと思つた……」

三人はそう呟きながら先程まで恐怖の元凶であった、視線の先で廃病院へと歩いて行く亮平を、呆然と見続けるのであった……。

一人で歩いていた亮平の前に、目的地である廃病院が佇んでいた……。

しかしその前に、廃病院と外を仕切っている、重量感溢れる横スライド式の鉄製の門が存在していた。

すると、重量感溢れる門の向こう側から第四拳豪である口キが、手に持っている拡声器を使って声を辺りに鳴り響かせた……。

『今夜の主役のご到着だ！！ 門を開けてやりな！！』

この声と共に、数人の男達が一斉に門を開ける為に。亮平から見て、門の左端に集まつて来た……が、しかし。この集まりは、次に亮平が行った行動によって無駄となつてしまった。

亮平は、男達が集まるのを無視しながら門の太い一本の鉄格子を、右手を逆手にしながら掴んだ……。

『おい、折角いまから開けてやろうと……』

拡声器を持った人物、第四拳豪の口キが声を発するも、亮平はその声を無視しながら……。

ガアアアッ！！！！

一本の鉄格子を掴んでいた逆手状態の右手を使って、先程まで数人の男達が開けようとしていた重量感溢れる門を、鉄格子を掴んでいる右手を軽い動作で外に振り払う様にしただけで、辺りに重い鉄と鉄がぶつかり合う轟音を轟かせながら開けてしまったのだった……。

それによって、今まで門を開けようとしていた男たちも、亮平が開いてしまった門に引っ張られてしまい、辺りに投げ出されてしまった。

『……………は？』

この光景に、拡声器を持ったロキは呆けた声を出してしまう……。だが、門を開けた亮平は、そんなロキの事などお構い無しに、この夜を照らすライト等の明かりに照らされた目的地である廃病院へと到着した。

到着した亮平は、まず第一声を上げようとするが……。

「うるさいねえ……もう少し静かに入って来れないのか？」

亮平が第一声を上げようとした瞬間、廃病院の中から一人の人物がゆっくりと出て来た……。

その人物を、亮平はよく知っている……。

「キサラ」か……来てやったぞ？ で、直ぐに始めるのか？」

亮平はそう言いながら、両手を左右に軽く広げて見せた。

この行動を、キサラは“あからさまな挑発”と受け取り、もともと鋭い目を更に鋭くさせながら、廃病院前の広場で待つ亮平の下へと向おうとした……。

「ああ、直ぐに始め……なッ!?」  
「へえ……」

亮平の下へと向うために歩を進めていたキサラの前に、今まで同じ廃病院の広場付近で待機していた集団が割って入って来た……。その集団は、主力である武田を抜いた“技の三人衆”を先頭に置いたキサラが持つ部隊“キサラ隊”の面々であった。

この自身とキサラの間に入って来た集団を見て、亮平は小さな感心の声を出す……。  
すると、自身の隊が突然現れた事に驚いていたキサラの下に、一人の男が近づいて来た。

「キサラ様、失礼ですが、我々が先に鬼島と戦わせて頂きます……」  
その男は、そう言いながら長い金髪を垂らし、深々とキサラに頭を下げた。

「どういつつもりだ白鳥ッ!! お前等の出番は無いと言っただろ!!」

だがキサラは、その突然割って入って来た自身の部下達に激しい叱責を浴びせる……。

その叱責に対して、キサラの前に立つ集団ではなく、目の前で頭を下げていた白鳥がゆっくりと顔を上げながら反応した。

「これは“キサラ隊”としての我々ではなく、我々“各個人”としての総意です……。ですので、その命令には従えません……」

「何を考えているんだお前達は!! お前達が束になった所で……」  
「キサラ様!!」

「ッ!？」

今まで静かにキサラの言う事に答えていた白鳥が、突然声をキサラに向けて張り上げた……。

白鳥はキサラの忠実なる部下だ……今まで一度も、キサラの言う事に逆らった事もなければ、今回の様な行動も起こした事は無い。

この事に驚いた流石のキサラも、先程まで張り上げていた声を止めてしまう。

それを確認した白鳥はゆっくりと諭す様に、目の前で驚いているキサラに言葉を掛けた。

「キサラ様は我々にとって、本来守るべき御方なのです……それを我々は、最近までのキサラ様の“焦り”を良い事に、キサラ様御一人に全ての抗争を任せてしまいました」

「私が“焦ってる”だって?」

白鳥の言葉に、キサラは訝しげな視線を向ける……。

だが白鳥はそのキサラの視線を受けても尚、怯まずにキサラと向き合っていた。

「はい、最近までのキサラ様……今回の話しを聞いた後から、キサラ様は何かに関われたかの様になっていました」

「それはどういう意味だ? まさか白鳥、お前……私が“鬼島”と戦うのを恐れていたとか言うんじゃないだろうね?」

「ええ、私から見たらキサラ様は今、我等の目の前にいる人物に恐れを抱いている様に見えます」

「ッ!！」

キサラはこの言葉に反応してしまっ……。

それは凶星なのか、それともそうでは無いのか……。

だが白鳥は、そんな事など確認せずに視線をキサラから、目の前を固めている。“キサラ隊”の更に先にいる亮平へと向けた。

「この戦いは、キサラ様だけのものではありません……」

「お前に……お前に何が分かるってんだ！！ 私が今までアイツと戦う為に……ッ！？」

キサラを無視しながら視線を亮平へと向けた白鳥に、キサラは声を張り上げようとする。だがその声は、突然白鳥と自身の間に割って入って来た人物に止められてしまう……。

「キサラ、少しは落ち着いたらどうだ？」

「フレイヤ姉！！」

キサラと白鳥の間に割って入って来た人物、それは浅黒い肌とクールな瞳が特徴の第三拳豪のフレイヤであった……。

「キサラ……これはお前と鬼島の戦いである前に、我々“ラグナレク”と鬼島の戦いでもあるんだぞ？ その事を履き違えるな」

「だ、だけどフレイヤ姉！！」

「甘ったれるな！！」

「ッ！？」

キサラが反論しようとする、フレイヤが突然キサラに対して怒鳴りつけた。

「お前はもう、“ラグナレク”の“拳豪”という地位に居るんだぞ！ お前が負ければ、どれだけ我々“ラグナレク”に影響が出るのか考えているのか？」

「……」



「お前は個人である前に、既に“ラグナレク”という集団の一部なんだ。だったら尚更、我々“ラグナレク”が勝つために甘さなど捨てろ！」

「……クソツ！」

フレイヤの言葉に、キサラは悪態を付きながら、被っていた帽子を深く被り直してしまう……。

このキサラの様子を、白鳥は横目で確認した後、背を向けながらキサラを説得したフレイヤに言葉を掛けた。

「感謝致します、フレイヤ様……」

「礼には及ばんさ……その代わり、良い結果を期待しているぞ」「厳しいですが、何とか致しますよ」

そう言って白鳥は、そのままキサラ達の下を離れていつてしまった……。

取り残されたキサラに、フレイヤは声を掛ける。

「キサラ、自分の部下達の目を見てみる……」

帽子を深く被っていたキサラは、この言葉に素直に従い、深く被っていた帽子を上げながら正面に見える集団を見据えた……。

その集団の姿を見た時、キサラは一瞬驚いた様な表情をする。

「あいつら……どうして、どうしてあんな目してるのさ？」

「見たか、キサラ？ お前は本当に良い部下を持ったな……」

驚くキサラに、フレイヤは表情を緩めながら優しい口調で言葉を送った……。

キサラ達の前に佇む集団“キサラ隊”の面々は、そのどいつもこ

イツもが真つ直な目で、目の前に居る強敵を見据えていた……。確かに、これから戦う相手に対する恐怖で震えている者や、小声で独り言を言っている者もいる……。だが、そのどれもが目線だけは確りと目の前の強敵を見据えていたのだ……。そしてキサラに言葉を送ったフレイヤは、先程とは違ったいつもの真剣な表情で言葉を続けた。

「あれは一朝一夕で身に着く様な覚悟では無い……。真剣に、お前のために体を張ってる証拠さ」

「……」

「汲んでやれキサラ！　そして自分の部下達の姿を目に焼き付けろ！！　それが部下を持った者の務めだ！！」

「……分かったよ、フレイヤ姉」

フレイヤに発破を掛けられたキサラは、先程までのうるたえた表情ではなく、纏う空気を張り詰めさせ、表情を真剣な物へと変えながら正面を見据えた……。

もちろん、冷たいようだがキサラは部下達が亮平に勝てると思っではない。だが、これだけの覚悟を見せられれば、不良の世界に生きる者として見届けねばならないという使命感に駆られてしまふ。

それはフレイヤも同じ、また周りに居る他の者達も同じ……。若干数名は特に気にした様子もなく見ているだけだが……。それでも尚、この場に居る大多数の人間達が“キサラ隊”の覚悟を見届けようと、真剣な眼差しを送っていたのだった。

そんな空気に、亮平は完全なアウェー感を感じていた。

「……なんだか俺が悪人みたいだな」

亮平は、この台詞を若干苦笑しながら言葉にしていた……。

アウェーには慣れていている亮平であったが、正直いまの空気は受け流せという方が酷であろう。

そんな可愛そうな状態に晒されている亮平に、一人の男が近づいて来た。

「久しぶりだな鬼島!!」

「そうっすね、宇喜田先輩……」

その者の名は宇喜田孝造、以前武田と共に兼一に倒された人物だ。

「てめえとは、あの時の借りがまだだったな!」

「あの時? ああ、確かロッカーを投げた時のね」

宇喜田の言葉に、亮平は面倒臭そうに何かを思い出した素振りを見せた。

この様子に宇喜田は若干イラ付くも、すぐさま真剣な表情に取り直して言葉を続ける。

「今日はその借りを返させてもらっぜ!!」

亮平は「ふん……」と疲れたような溜息を付くと共に、目の前で凄んでいる宇喜田を見据える……。

その瞳を受けた瞬間、宇喜田は自身の顔に突然何かが飛んできたような錯覚を感じてしまった。その事によって亮平に瞳を向けられた宇喜田は、まだ亮平が何もして無いにも係わらず、自身の顔を両

腕をクロスさせながら守る体勢を取ってしまった。

だが当然、宇喜田の顔には何も飛んでは来ず、周りの不思議そうな視線を受けながら、宇喜田はゆっくりとガードの為に上げた両腕を下した……ガードを下げたために露となった、宇喜田の顔には既に緊張の冷や汗が大量に流れていた。

「（なんだ今のは！？ 俺は確かに何か飛んできたのを見た筈だ！?）」

「何をしたいのかわからないが……」

突然の事に困惑する宇喜田を尻目に、次に亮平は宇喜田だけではなく、その後ろに控える者達を見据えながら言葉を続けた……。

「そろそろ始めないか？ 今日ほこれだけの人数が折角集まってるだ、楽しくやろうぜ？」

この亮平の軽く発せられた言葉に、目の前に居た“キサラ隊”の面々だけではなく、周囲に控えていた者達も啞然とした反応を示していた……。

此処には、今回亮平を潰すために四人の“拳豪”に大きな部隊が三隊存在している。“拳豪”達の事は、事前に聞いていた人数よりも二人ほど多かったのだが……それによってこの場には、当初予定していた“キサラ隊”と第四拳豪が用意した部隊だけではなく、第三拳豪直属部隊“ワルキューレ”、更には大きな部隊は所有していないが、個人の戦闘能力がずば抜けた第六拳豪の隠者<sup>ハミット</sup>まで居る。

そして前回の東戦同様に、今は亮平の事を大きなサークル状に囲んでいるのだ……。

それでも尚、この余裕は何だという疑問が、この場にいた人間達全員に浮かび始めた。

すると、そんな不敵な余裕すら見せる亮平に“キサラ隊”の白鳥

が近づいて行った……。

「鬼島、貴様と戦う前に聞きたい事がある！」

「……なんだ？ まだ始めないのか？」

突然近づいてきて、これから戦う気満々だった亮平に、白鳥はいきなりそんな事を言い始めた。

この肩透かしの様な状況に、亮平は詰まらなそうな視線を白鳥に向ける。

その視線を受けた白鳥は、一瞬息をゴクリと飲み込むも言葉を続けた。

「何故貴様は態々、この罫だと分かりきった場所に來たのだ！ そして何故、この状況を見てもその様な余裕を見せられるのだ！」

「ふん……これから戦うつてのに、そんな事を聞くななんて野暮そのものだろ？」

白鳥の言葉に、亮平は本当に詰まらなそうに答えた……。

「俺とタイマン一対一を張りたい奴がいた……そしたら“ついで”に、他の団体さんも集まっていた。……これだけの状況だろ？」

「ッ！？」

この亮平が当然と放った言葉に、聞いた本人だけではなく、この場に居た全ての者が驚きの表情を見せた……。何故なら、これだけの人数を相手に目の前の男はタイマン一対一の“ついで”と言つてのけたのだ、驚かすにはいられないであろう……。

「驚く事も無い、当然の事だろ？」

「……当然とは？」

すると、驚く者達など関係無いかのように亮平は話しを続けた。

「今回俺は“キサラ”と喧嘩するために来たんだ、他の連中なんて“ついで”で十分だろ？」  
「……………」

この言葉には流石に周囲の人間は驚きでは無く、怒りの感情を感じていた……。

不良の世界とは、以前亮平が言っていた通り“舐められたら終わり”の世界だ。

そんな世界に居る人間にとって、このような言葉は流石に聞き捨てなら無い言葉である。

だが白鳥は、そんな亮平の言葉には反応せず、自身が今まで抱いていた疑問を亮平へと尋ねる事にした。

「私は以前から、貴様に対して気になっていた事がある……………」  
「ん？　なんだ、今日は質問ばかりだな？」

真面目に聞いてくる白鳥に、亮平は少し不機嫌になりながらも質問を了承した。

了承された白鳥は、一度軽く目を瞑った後で、再度亮平へと目を開けながら口を開いた。

「貴様は何故、そこまでいつも強気でいられるのだ？　貴様を其処まで強くいさせる考えとは一体何だ？　貴様にとって、強さや戦いとは一体何なのだ？」

この白鳥から発せられた疑問に、発した本人だけではなく周囲にいた人間達まで亮平が、これから亮平が発するであろう答えに耳を

傾けた……。

ここにいる誰もが、一応の格闘技者だったり、力自慢の喧嘩屋だったりする……。

だがその誰もが、目の前で不敵に存在する素人には様々な特別な思い・感情を抱いている。

それは単純な力に対する対抗心か、それとも単純な力に対する恐怖心か、チームに仇名す者に対する敵対心か……正直、負の感情も善の感情も入り乱れすぎていて、ここでは並べられぬ程の様々な思いや感情が存在している。

そんな思いや感情が渦巻く中、質問に答えるために亮平が口を開いた……。

「そういう事を聞かれるのは……これで二度目か……」

口を開いた亮平は、どこか懐かしむような雰囲気で喋り出した。

「俺にとっての強さとは何か？　俺にとっての戦いとは何か？」

亮平の言葉を遮る者は、ここには既に存在していなかった……。

「じゃあまずは、俺にとっての強さだが……それはぶっちゃけ“我侷”だ」

この言葉に、その場に居た全ての者が反応する。

だが亮平は、そんな小さな反応など気にしないかのように言葉を続ける。

「俺の敵が、俺の存在・考え方・もう何でもいいが……とにかく、俺の事を気にいらねえとしている。その場合、どうやって俺は敵に対処すればいい？　対処の仕方は人それぞれだが、俺は俺の事を気に

いらねえと言って来る奴がいれば、出来れば“これで”……」

そう言いながら、亮平は己の右拳を目の前の敵である集団に向ける。

「“こいつ”で通してえ……そうしないと、ややこしくしてしまうがねえしな。……まあ、つまりは自分の“意志”を貫き通す力だな、俺の場合は“頭”や“金”じゃなくて、単純な“拳”ってただけさ」

それは分かりやすく、至ってシンプルな考え方であった……。  
まとめれば、“自分にとって、意志を貫くための手段が、自分にとっての強さ”という事なのだ。

この考えに、周囲に居た者たちは息を呑む……。  
そして亮平の話しは、次の話しに切り替わる。

「次にお前が聞いたのは、俺にとっての戦いだ……」  
「……」

この亮平が話している内容を聞いた本人である白鳥は、既に亮平が発する言葉に聞き入っていた。

「俺にとっての戦いだ、それは“自由”だ……」  
「……“自由”？」

亮平の言葉に聞き入っていた白鳥は、思わず亮平から出た“自由”という言葉に聞き返してしまった。

だが亮平は、その白鳥の聞き返しに何とも無いといった表情で答えた。

「だってそうだろ？ 戦い……いや、喧嘩って言った方が俺らしい」



「……………」

「喧嘩つてのは、俺自身も敵自身も基本的に“自由”なんだよ……………」

「……………」

「そうだな、白紙の紙とペンが其処にあるって考えれば良い。白紙の紙が相手と考えて、さあ！ この白紙の紙を好きにしるって言われた感覚だ」

「……………」

「文章を書くもよし、悪書きするもよし、字の練習をするもよし、好きだつて書くのだって良いし、終いには破り捨てたって良い……………。喧嘩だつてそうだろ？ 相手の体に対して、俺は自分の体を好きに使って攻撃を加えたつて良いし、周辺にある石や何らかの武器だつて“自由”に使つて良いんだぜ？」

「……………」それが、“自由”だと？」

「ああ、そうさ……………」これで満足か？」

亮平の話しに聞き返してくる白鳥に、亮平は「さつさとしろ」という雰囲気を感じながら言葉を返した……………。だが、どうやら白鳥の質問はまだ一つだけあつた様で……………。

「鬼島……………」

「ああ？ なんだよ？」

「これが最後の質問だ、お前は何故“武術をやるうとしないのだ？”」

この疑問は、この場に居た……………いや、亮平に係わつて来た人間ならば誰しもが抱いたであろう疑問だ。

その証拠に、この場に昔から亮平と係わつてきた幼馴染である南條キサラは、以前に同じ質問を亮平にぶつけた事がある……………。そして亮平は、そのキサラに聞かれた時と同じ回答を言うために、面倒臭そうに口を開いた。

「そりゃ“窮屈”だからだ……」  
「……はあ？」

亮平の言葉に呆けた声を出す白鳥は放っておきながら、亮平は早く話を済ませようと言葉を続けた。

「俺がさっき言った“自由”、それに反するんだよ……格闘技つてやつは」

「……どういう事だ？」

「別に格闘技を否定する訳じゃない、俺には合わないってだけの事だよ……。決められたやり方で、決められた技で、決められた結果を……それが、俺にとっては堪らなく“窮屈”なだけなのさ」

「貴様にとつての戦いの“自由”、これを制限する事が“窮屈”という事なのか？」

「ま、簡単に言っちゃえばそうだな……」

白鳥の切り返しに、亮平は飽きてきたような態度で返した……。そして「勘違いするなよ？」と付け加えてから、この話しの最後を締めくくった。

「先に言った通り、強さも戦いも全部人それぞれだ……。強さを求めるために、格闘技を習ったって良い、戦いの仕方なんて、それぞれそれぞれで良い……ただ俺は、“自由”な喧嘩のために持っている“強さ”を、格闘技という“縛り”で“窮屈”にしたく無いだけだ」

亮平はそう締めくくって、自分が今まで着ていた夏服用のシャツを脱ぎ捨てた……。

そこには、前回東戦で見た時よりも更に凝縮された、高密度な筋

肉の結晶が存在していた。

亮平がシャツを脱ぎ捨てる……この事は、暗にもう話す事は無いと言つ意味も込められていた。

そして、周囲の人間は亮平の体を見た瞬間に、これから始まる戦いの緊張に息を呑んだ。

亮平が歩き出す……。

“キサラ隊”はそれを迎え撃つために身構える……。

だが誰も動けず、そこに身構えているだけだ……。

この場には、全ての時が止まったかのような静けさが支配していた……。

だが、この場には支配されない者がいる。

戦いを“自由”と言い放った男、鬼島亮平だけが……。

この場では唯一人、支配されてはいなかった……。

第三十二話 強さとは、戦いとは何か（後書き）

はい、今回ではなく、亮平の集団戦は次回です。

あと、ロキの作戦はこれだけ……なのかな？

これからゲレゲレが考えているのが作戦と呼べるものなら、違つか  
もしれません。

では、次回である程度は……進むのか？

あまり期待しないで待っていて下さい……舞っていて下さい。

ではノシ

第三十三話 盗み（前書き）

今回は更新が一週間も開いてしまい、真に申し訳ありませんでした。就活やら、学校の課題やらで時間を割かざる負えなかったので……。

ここからは言い訳です。

今回は途切れ途切れの時間で書いていたので、正直色々自身が無い

です。

### 第三十三話 盗み

その光景は、まるで巨大な象が小規模の蟻集団をこれから踏み潰すかの様な映像であった……。

巨大な象……いや、もはやこの場では食物連鎖のトップに君臨するかのような存在、鬼島亮平が。

小規模の蟻集団……“キサラ隊”に向けて、その足を進めた。

“キサラ隊”には、その亮平の一步一步の足音が、自身の終わりを告げる時計の針の音の様に聞こえていた……。

亮平の姿が一步一步進む度に大きく、ハッキリと鮮明に“キサラ隊”の面々には確認できる様になっていく。そして亮平は、突然その歩みを止めた……。

何故なら、既に“キサラ隊”の先頭に立っていた白鳥の前に辿り着いていたからだ。

白鳥の目の前に辿り着いた亮平は、ゆっくりと、目の前に立つ白鳥を見下ろす形で口を開いた。

「どうした……始まつてるぜ？」

「……お……おおおおお！！！！」

今まで亮平の存在によって時を止めていた白鳥は、亮平に声を掛けられた事によって漸く我を取り戻したかの様に、目の前で自身の事を見下ろしている亮平の顔面に向って、右の拳を突き出した……。だが、その拳を亮平は避けようともしない……。

パシッ！

「な……」

亮平が取った行動はシンプルだ……何故なら、白鳥の右拳を左手

で掴んだだけなのだから。

だがこの場に居る誰もが、その“掌鬼”と呼ばれる男に“掴まれる”という意味を知っている……。

「白鳥イ！！！！」

その時“キサラ隊”の後ろから、自分達の隊長であるキサラの悲痛な叫び声が聞こえて来た。

「キサラ様……」

グシャアツ

！！！！

キサラの叫びに白鳥が反応した瞬間、白鳥の右拳は亮平によって無残にも“握り潰された”。

「ああああ、あ、あ、アアツ！！！！？」

握っている拳を直に握り潰された白鳥は、その場に悲痛な叫び声を上げながら膝を付いてしまう。

だが、意外にも白鳥の目は死んではいなかった……。

「…………ツ！？ 何をしているツ！！ 戦いは始まっているのだぞツ！！！」

白鳥は潰された右手を押さえながらも、周囲で最初の白鳥同様に固まっていた仲間達に叱責を入れた。

この事によって、白鳥以外の者達の時間が再び動き出した……。

「鬼島アツ！！！」

白鳥の叱責によって最初に亮平へと向かって行ったのは、“技の三人衆”である“蹴りの古賀”だ。

この“キサラ隊”で最も素早い古賀は、白鳥の拳を握り潰した後、その場で白鳥を見下ろしながら佇んでいる亮平に向けて、自身の得意技である足技で、体を空中で横に半回転させながら亮平の下顎目掛けて“飛び後ろ蹴り”を放った……。

古賀の蹴り出した右足の踵は、亮平の下顎目掛けて一直線に飛んでいく。だがその右足も、亮平が先程の白鳥の拳と同じ様に掴んでしまった事によって無意味となってしまう……。

「なッ!？」

掴まれた蹴りの古賀は驚きの声を漏らす。

今の蹴りは、以前東戦で亮平が苦戦した“目線に沿った蹴り”だった筈なのだ……。

その以前苦戦した軌道を、目の前の敵はいとも容易く掴み取ってしまった。

だが古賀の驚きは、それだけではない……。

「うわッ!」

古賀の右足を掴み取った亮平は、そのまま古賀を片手で振り回し始めた。

「古賀!!!」

その様子に、“現キサラ隊”の主力である宇喜田が駆けつけて来た。

しかし次の瞬間、潰された右手を押さえながら地面に膝を付いていた白鳥が突然叫び出した。



「だめだ宇喜田！！ それ以上近づく……」

白鳥の言葉が終わる前に、この廃病院中に『ゴガツ！』という鈍い音が響き渡った

原因は、亮平が宇喜田に向けて振り回した古賀の後頭部が、宇喜田の顔面にめり込んだからだ……。

「古賀ツ！？ 宇喜田アアツ！！！」

白鳥の悲痛な叫びと共に、宇喜田の顔面から古賀の後頭部が離れて行く……。

ゆっくりと離れていく古賀の後頭部には、ネットリと赤い糸を伸ばしながら、宇喜田の鼻から出た大量の鼻血が付着していた。

そして、完全に二人の頭が離れていった時、宇喜田はその場に糸が切れた人形のように崩れ落ちていき、古賀は意識を失っても尚、亮平に右足を掴まれていた……。

また、古賀の後頭部には未だ宇喜田の鼻血が、ベツトリと塗りたてのペンキの様に付着している。

「くそツ！！！」

亮平に片足を掴まれながら、ぐったりと地面に頭を付けている古賀を見て、白鳥は思わず悪態を付いてしまった。

実際、想像はしていた……自分達だけでどうにかなる相手では無い事を。だが、それでも自分達は決めたのだ、自分達の隊長である女のために体を張ってみせると。

亮平によって、同時に倒された二人の姿を白鳥は再度確認する。

古賀は先程確認した通り、ぐったりとしながら亮平に片足を掴まれている。

宇喜田は、正面から地面に顔面を沈めていて……其処を基点にしながら、周囲に大量の血だまりを作っていた。どうやら、鼻の骨を折ったか砕いたかをしたのだろう。

その光景に、白鳥以外の人間達も息を呑み……そして認識する。目の前の敵……“掌鬼”に対して、自分達の実力では到底どうにか出来るものでは無いのだと。

そして、“体を張る”だけでは足りない事を……。

「全員前に出ろ！！ 一斉に掛ければ一撃ぐらいは入れられる筈だッ！！」

その白鳥の号令に、主力を欠いた残りの“キサラ隊”の面々が反応する……。

「ほう……」

号令に反応した敵の集団を前にして、亮平は思わず感心の声を漏らしてしまった。

何故なら号令を受けた瞬間に、今まで動けていなかった者達も含めた“キサラ隊”のメンバー達が、ゆらゆらと立ち上がった白鳥と共に、亮平と戦うために一斉に前線へと出て来たからだ。

「とにかく誰でもいい！！ 一撃だ！ 一撃だけでも与えるんだ！！」

そうすれば一瞬の隙が生まれる……白鳥はそんな願いも込めながら、覚悟を決めた仲間たちに叫んだ。

集団戦では、一瞬の停止が、一生の終わりへと様変わりする……。そのことは、不良達の喧嘩でも同じ事だ。

白鳥は考える、目の前の敵も所詮は人間だ……どんなに打たれ強

うとも、バットや他の鈍器で打ち続ければ、いづれは地に倒れ付すと。

「掛かれえッ!！」

『おおおおおおお!!!!!!!』

白鳥の掛け声と共に、“キサラ隊”の面々は、未だ古賀の片足を掴みっぱなしの亮平へと、無数の足音を辺りに響かせながら向って行く。

その様子に亮平は、特に気にした様子もなく、掴んでいた古賀を軽い動作で投げ捨てながら、向ってくる“キサラ隊”に向けて、堂々とした威風を撒き散らせながら足を進めていった。

“キサラ隊”の第一波が亮平に向って押し寄せてくる……。

最初に亮平の接触したのは、集団の中心位置にいた男であった……。

男は自身が持っていたバットを、こちらに近づいてくる亮平に向けて振り下ろした。

しかし、その振り下ろしたバットは、亮平が何ともなしに出した右手によって掴み取られてしまう。

「放せやこらあ!!!?」

バットを掴まれた男は、目の前にいる亮平に向って凄み始めるも、当の亮平はそれを無視しながら先程の古賀同様、掴んだバットごと男を自身から外側に向って振り払った。

その突然訪れた力の流れによって、バットの男は、握っていたバットを放す間も無く、隣りで同様に亮平に向って突っ込んでいた仲間と衝突してしまった。

だが、この現象は……それだけでは収まらなかった。

バットを掴んでいた亮平は、相手の男が未だにバットを離さない

事を確認すると。そのまま握ったバットの先を、相手の男の腹へとめり込ませ、男の近くにいた有象無象の人間ごと巻き込みながら、亮平は握っていたバットも纏めて、この集団戦を囲んでいた外の人間サークルへと薙ぎ払った。

これにより外を囲んでいた数十人の人間達が、亮平に薙ぎ払われた“キサラ隊”に巻き込まれる形となり、戦わずして今回の舞台から引き摺り下ろされてしまった。

言葉にすると、簡単に亮平が起こした現象の様に思えるが、バット一本を使って数十人の男達をなぎ払ったのだ……亮平の所有する力が、尋常ではない物である事が良く分かる光景である。

だが、この集団戦はまだ終わらない……。

今の亮平が起こした現象は、ただ向ってくる第一波の左翼（亮平から見て右側）を潰しただけに過ぎない……よって、今度は亮平の左側から男達の集団が押し寄せてきた。

「おうるあッ!!」

亮平に接近を果たした一人の男が、今しがた自分の仲間たちを薙ぎ払った亮平の顔面に向けて木刀を横薙ぎに振るう……が。

バキッ!!

「なッ!？」

だが男の木刀は、亮平がただ突き出した左手によって、掴まれ、そして中心から乾いた音を響かせながら握り潰されてしまった……。

「足りないな……」

「ひッ!？」

木刀を握り潰された男は恐れた……。

目の前の男はフルスイングで振るわれた木刀を、ただ何とも無しに掴み取り……そして、まるで枯れ木でもへし折るかの様な気軽さで握り潰してしまったのだ。

男は一瞬の思考の内に考える……。

もし、それだけの握力が自身を捕らえたら……そしてもし、その握力で固めた握り拳を自身の顔面に叩き付けられたら……。

そんな考えを、恐れを一瞬のうちに巡らせていると、突如自身の目の前に、巨大な“掌”が現れた。

パアアアッ！！！！

そして、巨大な“掌”が自身の目の前に現れたかと思えば、次の瞬間には既に男の鼻の骨が砕かれると共に、男の意識をも砕かれていったのであった……。

また、この亮平の“張り手”によって吹っ飛んだ男が、後ろから迫っていた集団をも巻き込んでしまい、終いにはこの一発の“張り手”で数十人の男達が、先程の右翼の者達と同じ様な結果に晒されるのであった。

巨大な“掌”の正体……それは、ただ単に亮平が軽く突き出した張り手であるのだが、この“張り手”に敏感に反応した者が、この場には数人存在していた。

「今の軌道は！？」

「やっぱりな……」

それは、この“キサラ隊”の戦いを見届けている第八拳豪キサラと、第三拳豪であるフレイヤ、そして他二名の拳豪達だ……。

「鬼島の野朗、今の打ち方……」

「どうしたんですか口キ様？」

だがどうやら拳豪達は、今の亮平が出した“張り手”では無く、その“軌道”に驚きの声を漏らしていた様だ（ハーミットは顔がフードで隠れているが、肩がピクリと反応していた）。

そして、この現象を想定していたかの様な発言をしたキサラが、まるで当たり前の事を喋り出すかの様に口を開き始めた。

「あいつ……やっぱり“盗んできたのか”」

「“盗んできた”？ どういう事だキサラ？」

この“盗む”という内容の言葉に、隣りでこの戦いを見届けていたフレイヤが疑問の声を上げる。

そのフレイヤの疑問に、キサラは苦虫を噛み潰したかの様な口調で答えた。

「言葉通りさ、フレイヤ姉……今の“軌道”、フレイヤ姉も気付いたんだろ？」

「当然だ、あれは以前、我々の前で鬼島が戦った……」

フレイヤはそこで言葉を一旦切ってから、目を瞑る……。

その様子は、これから自分が口に出す言葉を認めたくは無いらしい……そんな雰囲気醸し出していた。

だが、この事実を想定していたキサラは、そんなフレイヤの様子など気にしないかの様に言葉を発した。

「フレイヤ姉の考えた通りさ……あれは、前に“鬼島”の奴が戦った、東の“直突き”の軌道さ」

「……」

キサラの言葉にフレイヤは珍しく、その冷静な表情を一瞬だけ忌

々しげに歪ませてしまった。このフレイヤの様子を横目で見たキサラであったが、直ぐにその視線を目の前の戦いに戻しながら言葉を続けた。

「信じられないかもしれないけど、フレイヤ姉……アイツは一度見たり、体験したりしたら。その一回の経験で、殆どの物は自分の物にしちまうんだよ」

「……まるで、私達武術家を嘲り笑う様な才能だな」

キサラの言葉に、フレイヤはまるで自分達を皮肉るかのような嘲笑を漏らす……。

武術家にとつて、“技”や“技術”とは長年かけて、まるで凹凸おぼつこの激しい岩を丸くする様な稽古（作業）を繰り返して、やっと物に出来る……言わば戦いにおける“英知”と言つても過言ではない物である。その“英知”を、目の前で戦っている男は、以前“体験しただけ”……たったそれだけで、完璧に盗んでしまったのだ……フレイヤには、これが笑わずに入られなかった。

「だけどフレイヤ姉……いやになるのは、まだ早いよ？」

「……なんだと？」

嘲笑を漏らすフレイヤに、キサラは更なる皮肉を見せるべく、目の前で自身の部下達を捻じ伏せている亮平へと視線を向けるように促した。

するとそこには何やら自分の掌を、首を傾げながら見つめている亮平の姿があった……。

「何をしているんだ？ あれは？」

「どうやら気に入らなかつたみたいだね……」

「何？」

「簡単さフレイヤ姉、ただ単に趣味に合わなかった……それだけさ、  
アイツがあんな表情をするのは」

「なるほど、趣味に合わねば使う気も起きない……か。まるで子供  
だな……」

「そう……あいつは子供なんだよ」

まるで出来の悪い子供でも見守るかの様に、キサラはその言葉を  
吐いた……。

内心では、自分の部下達が幼馴染の男に潰されているのだ……そ  
の苦悩は計り知れない。

だが、其処は戦いに身を置く者なのだ、キサラの内では当然覚悟  
は出来ている。

しかし、辛いものは辛いのだ……キサラがこの様な言葉を吐くの  
は、だからなのかもしれない。

そんな事を言われているとは露知らず、亮平は再びキサラが居る  
所へと歩を進め始めた。

亮平の視線の先には、既に残存数を十人程度と数を減らしてしま  
った“キサラ隊”と、その数を減らしてしまった部隊に守られる様  
にして立っている白鳥の姿があった……。

亮平は、目の前で部下に守られながら、潰された手を押さえてい  
る白鳥を見据え「ふん……」と溜息を吐きながら面倒臭そうに口を  
開いた。

「なあ？ そろそろ、こんな茶番……終わりにしないか？ 正直飽  
きてきた……」

「何だとッ！」

亮平の言葉に、白鳥は激昂を露にする……。

しかし、当の亮平は、そんな白鳥を一瞥する事もなく言葉を続け



た。

「少しでも場持ちさせようと俺も慣れない事をやってはみたが……それも詰まらなかつたし、むしろ不快だった」

慣れない事、それはつまり東の“直突き”の軌道を真似てみた事だろう……。

それを亮平はハッキリと不快だと告げた……。

だがこの武術の“英知”を侮辱したとも取れる言葉に、この場に居る人間は誰一人として反論をしようとはしなかった。

何故だかは分からない……ただ、目の前の男ならそう言うてのけるだろうと、心の何処かで想像していたからなのかもしれない。

「最初は感心したさ……良い気構えだつてな」

言葉を続ける亮平に、目の前で身構えていた“キサラ隊”は何も出来ずに、ただその場で固まっていた……どうやら、勝負はもう決した様であった。

「だが全てが足りなかった……今回は、それだけだったって事だ」

「……それは、私達が貴様の相手にすらならないという事か!」

白鳥は内心では気付いていた……これ以上続けても、ただ踏み潰されるだけだという事を。だが、それでは終われないのが“不良”という物なのだ。

白鳥はゆっくりりと、自身の事を守ってくれていた集団の中から歩み出て来た……。

「ふざけるな! 貴様に分かるのか? 我々が今回、どれだけの覚悟で貴様の前に立ったのかを!」

「……」

叫ぶ言葉に怒気を込めながら、白鳥は一步一步、亮平の下へと足を進めていく。

後ろでは、そんな白鳥を止めるためなのか、残された“キサラ隊”の面々が白鳥の名前などを呼んでいたが、残念ながら当の白鳥には届いてはいない様であった……。

「貴様に分かるのか！ 貴様と戦うために、キサラ様がどれだけ苦悩していたのかを！！」

この言葉に、亮平は再び「ふん」と溜息を漏らしながら、特に気にした様子も無く答えた。

「知ったこつちやねえよ……」

「なんだとツ!？」

その答えと共に、白鳥は怒気を孕んだ空気を身に纏いながら、亮平の下へと辿り着いてしまった……。

白鳥と亮平の間合いは距離にしておよそ3m。

この3mという距離、それは亮平にとっての射程範囲内……そして次の瞬間には気付くであろう、この行為が、この距離が、どれだけ危険であったのかを。

「もとはと言えば貴様が……」

「白鳥よせ!!」

この場で唯一、今の亮平と白鳥の距離の危険性を知っているキサラが声を上げる……。

だが、その声は既に手遅れであった……。

白鳥が亮平との距離を一步だけ縮めた瞬間、『ドンッ!』という地面が踏み砕かれる轟音と共に、亮平の姿が一瞬だけ、この場に居た全ての人間達から“消えた”

そして、次に亮平が姿を現せたのは……。

「なッ!?!」

「少し、お前さんは……」

白鳥の顔は驚愕の色に染まる……。

何故なら今、目の前には先程まで自身の間合い外にいた男が、刹那とも思える瞬間の内に、その凶悪な右腕を上振り上げながら立つていたからだ。

そして……その右腕は、白鳥が我を取り戻す時間など与えないかのように、無慈悲なまでの風きり音を唸らせながら白鳥の左肩に振り落とされた。

ゴシャアッ!!!!!

亮平の右腕を振り落とされた左肩に、まるで巨大な鉄骨でも落とされたかの様な衝撃が白鳥を襲う。

故に白鳥は、その瞬間に言葉すら発する間も無く、亮平の右腕の軌道に沿うかのように地面へと体を潰していった……。

「白鳥イイイ!!!!!」

自身の右腕である白鳥が、このような惨状で潰されてしまった事によって、キサラは今まで抑えていた感情を爆発させるかのような悲鳴をあげる。

そして、この惨状を引き起こした人物、鬼島亮平は……。

目の前に倒れている白鳥を一瞥しながら、口をゆっくりと開いた。

「鬱陶しいな、喋りすぎだ……」  
「りよオオへえええッ！！！！！」

そして、この場を轟かす様な……そんな、キサラの悲痛な叫びが辺りに響き渡るのであった。

#### 同時刻

兼一・美羽・武田の三人は、新島の電話での生実況を頼りに、現在亮平が戦っている廃病院へと向っていた。

そして兼一は、三人の先頭で新島の電話を聞きながら、以前とは比べ物にはならないほどのスピードで、この夜道を駆け抜けている。

「新島ッ！ 次の道はどつちだ！！」

『三つ目の道を右折だ！！ その後は直線が暫く続くぞ！！』

「くそッ！ まだ着かないのか！！」

「兼一さん！！ 何やら一箇所だけ、異常に明るい場所を見つけましたわ！！」

すると、焦る兼一の横から、普段の優しそうな喋り方ではなく、言葉に真剣味を帯びさせた美羽の声が飛び込んできた……。

美羽は、兼一とは違い、民家の塀や電信柱などの足場を使って、見通しの良い所を跳ねるように疾走している。

『多分そこだけ兼一！！早く来ねえと、集まってる“ラグナレク”の総攻撃が始まっちゃうぜ！？』

「（とにかく急ぐんだ！！新島の情報じゃ、最初の話しより“拳豪”が二人も多いつて言うし……）」

「兼一君！！そんなに急いじゃ、いざって時にバテちゃわないかい！！！！！！」

新島の煽りとも取れる言葉に、更に走るスピードを上げた兼一の後ろから。

若干息を切らせながら、やっとの思いで二人のスピードに着いて来ている武田が、前を走る兼一に対して注意を促した。

だが、当の兼一には既に武田の言葉は届いてはいなかった……。

「（急げ！！その人数相手じゃ、流石の亮平君も厳しい筈だ！！とにかく急ぐんだ！！）」

兼一は更に走るスピードを上げていく……。

これから行く場所は、今まで自分が体験した事の無い世界かもしれない。

だが、それでも兼一は走るスピードを上げていく……そう、友の為に。

### 第三十三話 盗み（後書き）

はい、という事で、亮平はこんな事も出来るようになって回でした。

補足としては、今回のパクリは、“体験”の方のパクリです。

“見ただけ”の方のパクリではありません。

ま、あんだだけ殴られれば、覚えちゃうぜ？ て感じですよ。

そして、亮平が消えた件ですが……これはあまりやらないっす。

亮平の性格的に合わないのです。

後、実は既にPVが80万を越え……ユニーク・アクセスが7万を越えてしまいました。

これは、本当に感謝しなければなりません（今までもしてやしたぜ！！）。

ですので、ここで豆意識？ を一つ。

空手って言うのは、一撃とか何とか言われて、豪快なイメージがありますが。

実はかなり繊細で、かなりコンパクトな格闘技なのですよ。

その証拠に、基本立ちである“サンチン”の立ち方なんて、内に内に絞るようなイメージの立ち方ですし。

突きの引き手に至っては、ケンイチの原作で掛かれてた手と手を滑車で繋ぐイメージではなく。

むしろ本来は、肘……または肩甲骨を……いや、背骨を螺旋のようなイメージで突く。

そんな人体の内面を追求する様な、そんな繊細な格闘技が空手という物なのですよ。

ま、長つたらしく書きましたが、実際には戦い方、考え方が人それぞれなので、全く持って統一はされていないんですけどね。

そしてお知らせを一つ。

今回の話しがちょっと長くなりそうなので。

そして、更新がまた途切れそうなので……。

全部書けたら、次の更新という事にします（今回の話しだよー!!）。

では、次回をお楽しみに出来たらお楽しみにノシ

第三十四話 野性（前書き）

またせたな！！



### 第三十四話 野性

自身の部下を潰した男に向って、キサラは疾走する……。

この時、隣にいたフレイヤは落ち着くように言葉をかけようとしたのだが、そのフレイヤの行動よりも速く、キサラは男に向って飛び出していた。

だが、この場に居た誰もが疑問を抱いた……。

確かに、自身の部下を無残にも潰された怒りで我を失ったのは理解できる。

しかし、様子が違うのだ……。

キサラの、彼女の様子が……。

「フシャー!!」

「ツ!?!」

想像以上の速度で接近を果たしたキサラに、亮平は目を見開く。

確かに我を失った者は、どこか頭のネジが飛んだ、馬鹿げた力を発揮する時がある。だが、このキサラの様子は、我を失ったと言うよりも、むしろ何かが乗り移った感覚に近かった……。

自身の敵に接近を果たしたキサラは、高く跳躍しながら、亮平に向って左“手”を振り上げた。

「フツ!!」

キサラが振り上げた左“手”は、亮平の“目”に向って“爪”を立てる様にして振り抜かれたが、その引っ掻きは、亮平が頭を少しだけ後ろに仰け反らせた事によって避けられてしまう。

だがキサラは、振り抜いた遠心力を利用し、空中で体を捻りなが

ら、亮平に向って右足による、“後ろ回し蹴り”を放った……。

ゴッ……!

ブーツの踵と人の頭が衝突する鈍い音を響かせながら、キサラは空中で亮平の右米神を打ち抜く。

だが、それだけでは亮平は身動き一つしない……。

自身の改心の一撃を喰らって尚、一切の素振りを見せない敵に、キサラは先程と同様、普段の彼女からは考えられない速度で、地面に着地し、亮平から距離を取った……。

その動きはしなやかで、どこか動物的な雰囲気醸し出していた。いや、むしろ動物そのものと言った方がいいのかもしれない……。何故なら、キサラの現在の構えが腰を低くし、両手を地に付けた……。いわば、四つん這いの格好になっていたからだ。

「これはまさか、あの時の……」

今キサラが行っている動きに心当たりが有ったのか、キサラを止め損ねたフレイヤは周囲には聞こえないぐらいの小さな呟きを漏らしてしまった。

しかし、そんな事は亮平とキサラの両名には関係が無い……。

周囲の奇異の視線を他所に、二人はまるで、肉食獣同士がこれから死闘を繰り広げるかの様な、そんな空気を醸し出しながら対峙していた。

「どうしたんだ？ らしくねえな？」

「フー！ フー……！」

何やら亮平が苛立たしげに言葉を吐くが、当のキサラには完全に届いてはいなかった。

どうして亮平が苛付いているのか……それは多分、現在のキサラの状態にどこか、以前の自分の姿が重なったのかもしれない。そう、この状態は以前、亮平が“地下闘技場”で見た状態に、どこか似ているのだ。

「フシャツ!!」

そんな風に亮平が苛付いていると、再びキサラが動き出した……。亮平の間合いから射程外の距離を、キサラは地から手を放し、人間がクラウチングスタートから動き出したぐらいの姿勢の低さで疾走して行く。

そのスピードは、その動きは、もはや普通の彼女の物ではない……。

この様子に、亮平は若干の苛立ちを浮かばせながら、面倒臭そうに呟いた……。

「そうじゃねえだろ……」

接近を果たしたキサラは、低姿勢の状態から一気に飛び上がり、再び亮平の顔面に蹴りを入れるべく体を身伸の状態から捻るように回転させ、足と頭の位置が天地逆さまの状態になった瞬間に、今まで捻る事で溜めていた右の“ネリチャギ（踵落とし）”を、亮平の脳天に解放した……。

その頭上から来る蹴りに、亮平は守勢の避けるではなく……。

「フシャツ!!!!」

「そうじゃねえだろつってんだろオツ!!!!」

己も右腕を突き出す……つまり、攻勢に打って出たのであった。

そして、二人の攻撃は交差する……。

一方、兼一と美羽、そして武田の三人は、目的地である廃病院まで、あと僅かと迫っていた。

「兼一さん!! 見えてきました!!」

「はい! 美羽さん!! こっちでも確認出来ました!! 急ぎましょう!!」

「気合入ってるね、兼一君……」

この会話の通り、既に兼一達の視線の先には、夜闇を無視したかのような光で照らされた廃病院が見えている。だが、ここで美羽と武田が異変に気付いた……。

「おかしいですわ…… 大規模な人数が集まっていると言うのに、あまりにも静か過ぎますわ」

「ああ、なんだか不気味じゃない」

美羽は相変わらずの常識離れた移動の仕方（民家の塀や電信柱を使って飛ぶように移動している）をしつつも、何やら不安げな口調で口を開いた……。その美羽に同調するかのように、若干息を切らせながらも、軽い口調を崩す事無く、武田も続いた。

「……とにかく急ぎましょう!! 美羽さん! 武田さん!!」

兼一は、この二人の口調に不安を覚えるも、直ぐに表情を真剣な物へと戻し。

目の前に見える目的地へと、足の回転を速めた……。

そして、夜闇の暗さを全く感じさせない明かりの中心地……目的地である廃病院へと辿り着いた三人の目に飛び込んできたのは。

「う、嘘でしょ……」

まるで、肉食獣が獲物の喉笛に噛み付いたかの様に、相手を地に伏せながら、相手の細首を鷲掴みにしている“掌鬼”の姿であった……。

キサラの踵が亮平の脳天へと迫る……。

だが亮平は、そのキサラの踵など気にしないかのように前に踏み込み、己の右腕をキサラの股下から首に向って突き出そうとする。

よってキサラの右足の踵は、『バゴツ!!』という鈍い音を出すも、亮平の首と右肩で挟まれる格好となってしまう……。

そして今度は、亮平の右の“掌”が、キサラの細首に迫っていく……。

当然キサラは、その迫ってくる“掌”を避けようとする。だが、その“掌”はキサラの反応速度を裕に超えていた……。

ガシッ!!

「ニヤッ!」

故に、キサラの細首は亮平の右手によって鷲掴みにされてしまう……。  
キサラの首を掴んだ亮平は、そのままキサラをゆっくりと地面へ掴み伏せた。

「フー!! フー! フシヤッ!!」  
「暴れんなよ……」

掴み伏せられたキサラは、右足を亮平の首と右肩に抑えられるも、残りの両手と左足をジタバタさせながら、何とか亮平から脱出しようと暴れ始めた……。

それはまるで、猫が腹を抑えられるのを嫌がる仕草に似ていた。故に、既に亮平の顔にはキサラの引つ掻き傷が何本か刻まれていた。

だが捕まえた……亮平は、顔を引つ掻かれようとも、とにかく当初から予定していた決め技を、暴れるキサラに慣行した。

「取り合えず、聞こえてるか分からないが……」  
「グルルル……」  
「今回は無しだ……出直して来い」

先程の喋り方とは打って違って、今の亮平が発している言葉は、どこか優しい気持ちが含まれていた。

そして、首を鷲掴みにされているキサラは、ゆっくりと、その怒気を意識の深層へと深めていく。

亮平が行っているのは簡単な事だ……幼馴染のキサラを無傷で落ち着かせるために、鷲掴みにしている人差し指と親指を使って、人間の首に存在する頸動脈を軽く押さえているのだ。

柔道や柔術……およそ、組技系の格闘技には“落とす”という言葉が存在する。

それは、まさに言葉通りに意識が“落ちる”……簡単に言えば、一瞬のうちに相手を眠りに付かせる様な状態の事をいう。

本来なら、プロレスのチョークスリーパーの様に、腕の筋肉などを利用して絞めるのだが。亮平の掌は大きく、また力も強いいため、相撲の様な“のど輪”で事が足りるのだ……。

そうこうしている内に、キサラは意識が完全にブラックアウトをし、まるで子供が母親にあやされたかの様に、深い眠りにへと、ゆっくりと瞼を閉じていった。

「……ふん、取り合えずは成功か」

キサラを優しく“落とす”亮平は、そう溜息を付きながら呟いた……。

この亮平の言葉からは、どこか神経を使った作業を、やっとこさやった直後の雰囲気を感じ取れた。

今回の亮平には心配事があつたのだ……それは、“落とす”と決めたが良いが、正確な頸動脈の位置や、キサラを絞める際の力加減が分からない、といったものであつた。

頸動脈の位置は、以前秋雨に絞め落とされた事によって、正確に覚える事が出来た。

手加減の方も以前の経験から、全力を出した自分の力がどれだけ強いのか、それを確認出来た事が幸いした……。自分の限界ラインを知らなければ、どれぐらい力を込めれば、どれだけの成果が出るのか分からない……。まだ、この程度の事しか理解は出来ていなかったが、以前の亮平からしたら大きな進歩であろう……。すると、そこに。

「亮平君……！」

「うん？ 兼一か、それに風林寺さんと武田先輩まで……」

そこに、今まで急いで駆けつけたのが分かるぐらいに息を切らした兼一と武田……二人と違って、全く息を切らしていない美羽が駆けつけてきた。

だが、この場合は“ラグナレク”との戦いの最中だ……そうは問屋が卸さない。

『誰だてめえら！！ おい！ 見張りはどうした！！』

駆けつけてきた三人に、拡張期を持ったロキが怒気を孕んだ言葉を響かせる。

内心、ロキはかなり焦っていた……。

実は、キサラと亮平の戦いが長引く様なら、隙を付いて亮平を集団で潰そうとしたり、戦い辛そうにしていたらキサラを間接的に人質にしてから、引き込みの交渉をしようかと考えていたのだ。

「（くそッ！ どういう事だ？ 鬼島の野朗には味方が居ない筈だぜ？）」

そう心の中で毒づきながら、ロキは見張りがいたはずの出入り口の方へと視線を向けた……。

其処には五人ほどの見張りがいたのだが、どうやら中に居た者達気が付かない内に全て倒されていた様だ……。

一瞬ロキは、その光景に齒噛みするも、次の瞬間には一度「ちッ」と舌打ちをしてから、冷静な心を取り戻していた。

「おい、20号、例の作戦に移行しろ……もうなりふり構ってられねえ」

「はい！ ロキ様ー」



部下の少女に命令を下してから、ロキは亮平とキサラが戦っていた、人間サークルの中央に視線を向けた。

ロキの立っている所は、廃病院の入り口にある屋根の上。

其処からは、新たな来訪者達が入って来たであろう、人間サークルの綻び部分や。今まで亮平に捻じ伏せられていた“キサラ隊”の惨状、亮平に未だ掴み伏せられているキサラ。更には、新たな来訪者に警戒している第三拳豪フレイヤと、その直属部隊『ワルキューレ』の面々が見えた……。

来訪者の実力は未知数だ……そう考えていると、ロキはある人物に視線が止まった。

「（あいつは突きの武田！ なぜだ？ 鬼島の舎弟にでもなったのか？）」

視線は止まったものの、イマイチ状況が掴めないロキは、とにかく一度体勢を立て直そうと、指令を出すために拡張期を口に近づけた……。

キサラを落とした亮平の下に、血相を掻いた様子の兼一が駆け寄って来た。

「亮平君！ 南条さんは！？」

どうやら兼一は、亮平に首を掴まれているキサラの事を心配しているらしい。

亮平は取り合えず、血相を掻いた兼一を落ち着かせようと、なるだけ冷静に言葉を発した。

「大丈夫だ、優しく“落とせた”からな……」

この亮平の言葉に、兼一は「よかった」と、ほっと一息付きながら亮平を見据えた。

「亮平君、僕も手伝うよ！」

その兼一の表情は、いつかの真剣味を帯びていた……。

だが亮平は、その兼一の言葉に「ふん……」と溜息を付きながら、今まで地に掴み伏せていたキサラを両腕で抱きかかえながら、諭すような口調で兼一に言葉を返した。

「俺よりも、宇喜田先輩とか、怪我人の方を頼む……ほら、風林寺さんとか、武田先輩とかが動いてるだろ？」

「え？」

キサラを抱えるために両腕が塞がってしまった亮平は、仕方なく顎で兼一にある方向を見る様に促す。

するとそこには、自身の親友の姿を発見した武田が、心配そうな声を張り上げながら、親友の身体を抱かかえていたり。美羽がその隙に武田がやられないように、周辺にプレッシャーを掛けている姿が見られた……。

その様子を兼一が目当たりにしたのを、亮平は確認すると。

ゆっくりとした動作で、キサラを抱かかえながら立ち上がった（所謂“お姫様抱っこ”を慣行中だ）。

「俺はまだ、“コイツ”についてやらなきゃならない事がある……」

そう言って亮平は、自身の胸に沈んでいるキサラに視線を向ける。

この様子に、兼一は何かを感じたのか、一度頭を振ってから再度、亮平へと視線を向けた。

「……分かったよ、なら僕は美羽さん達の方へ行くね」  
「そうしとけ……」

心配そうに亮平を見る兼一に、亮平は不敵な笑みを向け返した。  
そして、二人は同時に動き出す……。

亮平は自身の幼馴染を抱えながら、正面に展開する『ワルキューレ部隊』へと……。

兼一は、亮平が倒した者達の下へと……。

第三十四話 野性（後書き）

ちよつと自分で突っ込ませてもらつと。

・兼一達の行動が不自然

なぜ、いきなり怪我人によつていつてしまったのか？

これはゲレゲレにも分かりません……。

書いていたら、なぜかそうなつてました……。

不思議な事もあつたもんだな。

では、次に進みます。

第三十五話 ルーズジョイント(前書き)

今回、説明文が多いです。

### 第三十五話 ルーズジョイント

亮平の下から戻って来た兼一は、亮平が引き起こした惨状を始めて目の当たりにする。

来る時とはかく、自身の友人の危機を助けようと必死だったの  
で見落としていたが。改めて周辺を見回してみると、数十人の人間の  
雑魚寝が見られたり、何人かの人間が重なり合って倒れているの  
が見られたりした……。

その中でも酷かったのが、地面に前のめりで倒れ付している金髪  
ロングの男と、現在武田に介抱されている宇喜田であった。兼一は  
取り合えず、武田は美羽に守ってもらっているの、近くに倒れて  
いた金髪ロングの下へと向った……。すると自身の後ろから、拡張  
期を使つた騒々しい音と共に、ある人物の声が辺りに響き渡つた。

『お前等、何ぼくつとしてやがるんだ!! 敵だ! 全員で掛かれ  
!!』

兼一は初めて見るが、第四拳豪のロキが、この場に新たに現れた  
自身等に対して、周辺を囲んでいた部下達に指令を飛ばした。

すると、今まで何故か放心状態に近かつた“ラグナレク”の下っ  
端達が、「ハッ!」と何かに気付いた様に動き出した……何故放心  
状態だったのか? それはおそらく、キサラの豹変を目の当たりに  
した所為なのかもしれない。

動き出した下っ端達は、まず兼一の進路を阻もうと、倒れ付して  
いる白鳥に向つて走っていた兼一の前へと躍り出てきた。

「おおおお!!」

躍り出てきた数人の男達……。

その男達に向って、兼一は雄たけびを上げながら突貫する。

最初に対峙したのは、男達の中心に居た人物だ。

兼一は、その中心に居た人物に接近を果たした瞬間に、後ろ足を一気に蹴りだし、加速した勢いを前足である左足で抑え付け、その事によって生まれた力を股関節から腰、腰を回して背骨、肩甲骨に流れるように送り出し、この力の流れを突き出す様にして肘、手首へと繋ぎ……。

「おおおおりゃッ！！！」

ドガッ！！！！

力の流れの終着点、右拳の拳面を、相手の顔面に文字通り“ぶち込んだ”……。

何故、兼一は前足でストッパーを掛けたのか？

パンチを出す……これだけなら、誰にでも出来る動作だ。

だが、強大な砲撃を打つ際、何が必要なのか考えて欲しい……。

答えは、その強大な砲撃の力を逃さない様に備え付けられている砲台だ。どんなに強い砲撃でも、土台が確りしていなければ反動に耐えられず、折角の威力を関係ない方向へ霧散させてしまう。よって、土台が確りしていればしている程、強力な砲撃を余す事無く目標へと向けて放てるのだ。

兼一は、梁山泊では足腰を徹底的に鍛えられている……更には、内弟子になってからと言うもの、上半身や腕の筋肉を、足の筋肉と同等ぐらいの力を引き出せるようにと、秋雨が考案した地獄の様な稽古を積んで鍛えている。

この事から、上半身の力が流れないように、完璧な土台でストッパーを掛け、確りと手首で固定された兼一の拳は、前に走ってくる人間を“弾き飛ばす”という威力を発揮した。

弾き飛ばされた男は、兼一に殴られた頭を後ろへと仰け反らしながら5メートル後方に飛ばされ、その後、二転三転しながら意識を

失った。

だが兼一は、吹き飛んだ男の様子に一瞥もくれずに、近くに迫っていた別の男へと突っ込んでいった。

「ひッ!？」

兼一が起こした事象を真近で見ってしまった男は、情け無い悲鳴を零しつつも、向かってくる兼一へと、持っていた角材を振り上げた……。

だが兼一は、振り上げた事によって露になった男の腹部に狙いを定め、接近を果たした瞬間に、相手の首を取り（首相撲の状態）、その細腕からは考えられない力で、相手の身体を“く”の字に引き込み、丁度良い角度になった瞬間に、裏ムエタイ界の死神アパチャイ・ホパチャイ直伝の膝蹴りを、相手の折れ曲がった腹部へと叩き込んだ。

「ぶぐうッ!!」

男はこの膝蹴り一発で、兼一に打ち抜かれた腹部を押さえながら、地べたへと身体を沈めてしまった。

だが、男を一撃で倒した兼一に向って。まるで、この打ち終わりの瞬間を狙い澄ましたかのように、一人の男がナイフで兼一を突き刺そうとした。

「ッ!!」

「死ねえ!!」

ナイフの男は確信する……およそ、鬪争において“打ち終わり”とは、ある意味で最も危険な瞬間でもあるのだ。

人間、打撃を打つ際に、どうしてもインパクトを出すために、打



撃の終わりに体で最後の“キメ”を作ってしまう（先程の、兼一の前足の様なもの）。これによって、人は打ち終わりに、本当に数瞬だが“硬直時間”という物が出来てしまうのだ。ナイフの男が突いたのは、兼一のその“硬直時間”だ。この呪縛からは、どんな達人でも逃れられない（達人級の人間の隙は、もはや人には見えないが）。

よって兼一は、この戦いにおいて早々にピンチを迎えて……いや、迎えはしなかった。

タツガゴツ！！

男のナイフが迫ろうとした瞬間、兼一は冷静に……というか反射的に、左手で相手が突き出した右腕の前腕を下に打ち払い、それと同時に払った手を相手の顎へと迫り上げ、手首を内側に折った状態でむき出しになった“鶴頭”<sup>かくとう</sup>と呼ばれる部分で、相手の無防備に曝け出されている顎を打ち抜いた。

「（決まった！ 決まりましたよ逆鬼師匠！）」

実はこれ、兼一が先程まで梁山泊で教えられていた逆鬼の技なのだ。

故に、顎を一瞬で打ち抜かれたナイフ男は、前に出ていた勢いそのままに、前のめりで地に倒れ付してしまった……。

『何やってんだ！！ そんな優男一人、まともに抑えられねえのか！！』

この部下の不甲斐ない様子に、拡張期を使っているロキは悪態をついてしまう。

しかし、ロキがそんな風に悪態を付いている間にも、優男と言わ

れた兼一は、まるで台風のように、迫ってきた男達を投げては、蹴り飛ばしては、殴り飛ばしてはしていた……。

「くそー！ 聞いてねえぞ、こんな奴が鬼島の近くに居たなんてよー！！」

予想外の状況に、ロキは本当に焦り出した……。  
焦り出したついでに、先程から人間離れた動きで自身の部下達を片付けている女を見る。

「ヤッ！」

人間離れた女…… 風林寺美羽は今、空中で身を捻りながら、地上でどうしていいか分からないと言った風な拳動をしている男を蹴り飛ばした。

だが、美羽の滞空時間はそれだけでは終わらない……。

美羽は蹴り飛ばした反動そのまま、さらに近くに居た男に向かって美しい弧を描いた蹴り下し（けりおろし）を顔面に浴びせた。

「武田さん！ 宇喜田さんは大丈夫ですか！？」

長い滞空状態から軽やかに着地した美羽は、自身の後ろで宇喜田を介抱していた武田に声を張り上げる。

「ああ、何とか無事みたいだよ！」

美羽の言葉に、武田も声を張り上げながら答えた。

実際、宇喜田の状態は常識的に考えて無事とは言えない……。

何故なら、古賀を使った亮平によって潰された鼻は、素人目に見ても歪な方向に曲がっており。また、出血量は確実に折れたか砕か

れたかした状態の量であった。

だが武田は無事と言った……何故か？

それは、亮平……つまりは現在の不良界で、もはや絶対の名前である“掌鬼”にやられて、この程度で済んだのだからだ。

武田は知っている、亮平が今まで壊してきた者達の惨状を……。

故に、“この程度”で済んだ宇喜田を無事と言ったのだ。

宇喜田の無事を確認した武田は、美羽に加勢するべく、武田と御喋りをしながらも、空中を舞うように、迫り来る男達を蹴散らしている、美羽の下へと足を進めた。

「ああくそツ！！ 突きの武田まで入って来やがった！！」

この様子に、ロキは益々機嫌を悪くする……。

普段なら、この程度の人数など、数に物を言わせて叩き潰す事が出来るのだ。

だが、相手が違った……。

「（金髪女は尋常じゃねえ強さだし、武田も最近腕が治ってきたと聞いた……それに、あの優男も危ねえ存在だ……ましてや、この場には鬼島の野朗もいる！）」

本来は、最後に出て来た亮平一人を相手にするだけだったのだ……

……しかも、幼馴染を使って。

だが、作戦に入る前に、その幼馴染であるキサラが謎の豹変をし、本来の作戦である亮平の動揺を誘ったりする前に勝負の決着が着いてしまったのだ。

加えて、この謎の面子である……ロキは本当に嫌になりそうであった。

しかし、この場には“拳豪”と呼ばれる一騎当千の猛者達が、動ける中で自身も含めて三人居る。

「おいハーミット！ お前も動いたらどうだ！！」  
「……………」

その考えから、自身が立っている場所の直ぐしたに居た、黒いローブを着た男に言葉を投げた。しかし、黒いローブの男、第六拳豪ハーミットは、ある一点を見つめたまま、ロキの言葉を沈黙で返した…………いや、無視した。

「おい！！ 動けって聞こえねえのか！？」  
「……………」

再度ロキが声を張り上げるも、ハーミットは依然として動こうとしない。

その様子に、流石のロキも不審に思い、ハーミットが向いている方向に目を向ける…………。

其処には、既に周辺の敵をあらかじめ片付け、先程亮平に潰された白鳥の下へと辿り着いていた兼一の姿があった。

「…………あの優男が気になんのか？」

「…………ふん」

「あ！ おい！！ どこに行くってんだよ！？ 敵を倒せて言うてんだよハーミット！！」

ロキが問いかけた瞬間、ハーミットはローブを翻させながら、この廃病院の裏口へと歩いて行ってしまった…………。

この謎の行動に、ロキは一度舌打ちをしてから、再度視線を戦いの輪へと向けた。

「（ハーミットの野朗…………扱えばいいなら無いな。こりゃ、終わ

「だったら一手講じる必要があるな……。しかし、不味いなこれは……。全部が上手くいかねえ」

今日は厄日なのか？

そう思い始めたロキの目に、ある集団のやり取りが映った。

「（何やってんだ？ あいつ等……）」

亮平はキサラを抱きかかえながら（お姫様抱っこで）、ある集団と対峙していた。

「話すのは随分と久しぶりっすね？ 久賀館先輩？」

この言葉を向けられた人物、久賀館くがたかなめ要こと第三拳豪フレイヤは、油断の無い瞳で目の前の敵……。キサラを抱えた亮平を見据えていた。そのフレイヤの前には、合計八人の少女達が各々の武器を構えて、亮平とフレイヤの間を隔てている。

「そうだな……。だが、今は関係無いだろう？」

「冷たいっすね……。相変わらず」

意外とフランクに放しかける亮平に、フレイヤはサラッとした態度で流した。

実はこの二人、亮平が中学の時に、キサラ繋がりで面識があったのだ。

その際、亮平は一度だけ“ラグナレク”に入らないかという勧誘を受けたのだが。これを亮平は見事に「面倒臭い」の一言で切って捨てたのだが……。その後、何故か、その時の態度が気に入られ。亮平が高校に入学する間際までに、ちよっとした交流があったのだ。

「冷たいも何も、お前はいま我々“ラグナレク”最大の敵だ……前のように、気安く話せる間柄でもないだろう？」

「敵になつた覚えは無いんですけどね？ 前は案外楽しかつたんだけどなく、キサラ“姉ちゃん”絡みの話しするのが」

会話自体は、そこまで危機感を煽る様なものではない……。

だが既に、フレイヤ直属部隊『ワルキューレ』は臨戦態勢に入り、同時にフレイヤも何やら腰を少しだけ落としている……。対する亮平は、これまた特に気にした様子も無く、目の前で構える少女達を見下ろしながら、キサラを抱きかかえた状態で突っ立っている。

すると今度は、亮平は会話の矛先をフレイヤには無く、目の前で亮平と対峙している『ワルキューレ』へと向けた……。

「リーダーさんも久しぶり……つて、そんな雰囲気じゃないな」

「当たり前だ！ お前は何を勘違いしている！？」

今、亮平が話し掛けたのは、腰まで伸びた長い黒髪が特徴の、真面目そうな顔立ちの少女で……両腕にはトンファアを持ち、『ワルキューレ』専用の制服を纏っている。

実は亮平、この『ワルキューレ』専用の制服を非常に気に入っており、毎回見るたびに、彼女達のミニスカートを拝もうと……閑話休題。

「いや、そんなツンツンしなくても……」

「こんな状況で、そんな余裕を出せる方が可笑しいんだ!!」

トンファアを持った『ワルキューレ』リーダーと亮平の会話は、全くと言っていいほどかみ合っていない……。

すると今度は、亮平は視線を活発そうな目が特徴な、ショートヘアの娘に向けた。

「そういえば、ごめんな？ 折角メアド教えてもらったんだけど、「コイツ」に消されちゃって……」

「よくこの状況で、そんな話題を持ち出せるな……」

空気の読めない亮平を嘆いた少女は、一度自身が構えている棍こんをダラっと力なく下げてしまっても、再度気組みをし直し、目の前でふざけている様にしか見えない亮平を見据える。

だが、この亮平の言葉に反応した者がいた……。

「連絡先を教えたのですか？ 良い度胸じゃありませんか……我々『ウルキューレ』内で抜け駆けとは」

「（相変わらず、すげ〜お嬢様っぽいんだけどな……）」

亮平の言葉に反応した者は、端から見ればお嬢様というより、お姫様と言ったような金髪をしているが、持っている武器が木製の薙刀なのだ……正直、ミスマッチも良いところである。だが亮平はこの女性を見た時、そんなミスマッチよりも、その胸元に実った豊富なロマンの方に……関係ないので省略。

また、このお嬢様が言っている事は別に『ウルキューレ』内で亮平が取り合いになっている訳ではない。単に、彼女達のいる場所は出会いの少ない部隊なので、その様な話題に敏感なだけなのだ。

この事を、お嬢様の様な女性に“抜け駆け”と指摘されたショートカットの少女が、突然「ビクッ！」と反応し、恐る恐るといった感じで薙刀を構える仲間に振り返る。

「え？ 抜け駆けなんかしてないよ！？ 今のは鬼島君が前にしつこく……」

「お前達……今がどの様な状況か、理解できているのか？」

ショートカットの少女が恐る恐る、お嬢様の様な女性に反論しようとする、これまで『ワルキューレ』と亮平の会話を、黙って真面目に構えながら聞いていたフレイヤが口を開いた。

このフレイヤの声に、もはやグダグダに成りつつあったが、流石の直属部隊『ワルキューレ』は一瞬のうちに“ハッ”と我を取り戻し、先程と同じ戦いの空気を、再度作り直してから亮平を見据えた。

「申し訳御座いません！ フレイヤ様！！」

「構わん、次はしなければそれで良い……だが気組みはし直せ、どうやら向こうも切り変えたらしい」

部下に注意を呼びかけると共に、フレイヤの頬を一筋の冷や汗が流れた……気組みをし直した『ワルキューレ』達もまた、各々で緊張の面持ちを見せる。

何故なら、先程まで和気藹々（一方的にだが）と喋り続けていた目の前の男から。これまでに感じた事の無い、普段の男からは考えられない程のプレッシャーが放たれていたからだ。

「ふん……あまり気が進まないんだけどね」

だが亮平は、そんな緊張を感じている少女達など関係ないかのように。相変わらずキササを抱えたまま、面倒臭そうに言葉を吐いた……。

亮平は気付いていない……何故、目の前の少女達は自分を前にして冷や汗を流したり、息を呑んだりしているのかを。

「（嫌になるな……この男、無意識のうちに私達に“気当たり”をぶつけて来ている）」

“気当たり”……これは簡単に言ってしまうと、相手に与えるプ



レッシャーの様なものだ。

単にプレッシャーと言つても、様々なものがある。

それは大きな者と対峙した時に感じる圧力、獰猛な肉食獣と真近で対峙した時に感じる命の危機感や恐怖心……更に言つてしまえば、高い所に上つた時に感じる浮遊感や、仕事で上司に掛けられるものですら、そうとも言えるかもしれない。

フレイヤ達が今感じているのは、最初に述べた二つのプレッシャーだ。

このプレッシャーは、人……いや、およそ動物と呼ばれる者達を見えない鎖で拘束する、そんな事が出来るプレッシャーだ。

そのプレッシャーを、目の前に立つ男は自身の意思とは関係なく、無意識のうちに眼前にいるフレイヤ達に与えているのだ……。

「（なるほど……あの気の強いキサラが怖がる訳だ……。この男、前にも増して成長している……いや、これは成長ではないな。この感覚はもっと……そう、元々あつた力をようやく外に上手く出せる様になった、そんな感覚に近いな……）」

フレイヤは、珍しく戦いの最中に考え込む自分に苦笑する……。

だが実際、フレイヤの考えている事は、あながち間違いでは無いであろう。

以前までの亮平なら、この様な“気当たり”などと言うプレッシャーを敵には与えられなかった。だが、今の亮平は以前までとは完全に違う点がある……それは、戦いの場数では無く、戦いの“経験”だ。

最近になるまで亮平は、自身の体にダメージを与える者、あるいは自身と同じくらいの強さを誇る者、またあるいは、自分と同じ様な“野性”を秘める者に出会つた事は無かつた……。

だが、最近になって……正確に言えば、梁山泊と係わるようになってからは、その様な者達と短期間の内に係わる様になって行った

のだ。

そしてこの短期間の“経験”によって、亮平の内に秘めている才能は自然と研ぎ澄まされて行く事となる。

「（しかし、目の前に敵として出てくるのなら私達も武術家だ……逃げるなどと言う選択肢は、最初から存在しない！！）」

フレイヤは亮平を見据える眼光を鋭くする……どうやら戦う気構えが出来た様であった。

また、それに呼応するかのように周りにいた『ワルキューレ』達も、今までのどこか怯えた表情ではなく、各々瞳に込める光を強くし、亮平に向ける視線を戦いの眼差しへと変えて行った。

しかし、そんな鋭い視線を真正面から集中されようと、当の亮平は特に気にした様子は見せない。

逆に、目の前で勝手に覚悟を決めた者達を、宥める様な表情を見せ始めた。

「おいおい勘違いしないでくれよ？ 別に俺は、久賀館先輩達と戦うために来たんじゃない……」

「……何？」

この亮平の言葉に、フレイヤは眉を顰めた……。

その表情は、まるで絵に描いたような表情で『この男、何を言っているんだ？』という感情を露にしていた。すると、そんな表情をするフレイヤに答えるために、亮平が珍しく至極真面目な表情をしながら言葉を続けた。

「今回は、キサラ“姉ちゃん”の事について話しておこうと思って」「キサラについてだと？ どういう事だ？」

「いやなに、俺も悩んだんだよ……どっちにするかでさ……」

「……………」

フレイヤは目の前でいきなり言葉を濁し始めた亮平に、訝しげな表情を送る。

だがその表情も、亮平が話しを進めるうちに、しだいに呆れが入り混じった何ともいえない表情へと変わっていく事になる。

「だけど、決めてんだ……………今日の俺は、多少強引な男で通すって……………は？」

もはや訳が分からない……………亮平の前に立つ少女達は例外なく全員で、この様な考えに行き着いた。

そんな何ともいえない空気になりつつあるこの場を、亮平は我が道を行く様に言葉を続けた。

「先輩達には悪いが、キサラ姉ちゃんは俺が貰っていく。文句があるなら、力づくで奪いにきな！」

「なッ!? 鬼島! お前、キサラをどうするつもりだ!」

「落ち着けて、リーダーさん……………」

この亮平から出た宣言に、流石にフレイヤも含めた少女達が驚きの声を漏らす。

どうやら亮平は、姫野に聞いた事を変な方向に受け止めたようだ……………まず、女性を“貰っていく”と言っている時点で、“多少”ではない。

しかし、この様な事は“ラグナレク”幹部である、第二拳豪を名乗っているフレイヤには、到底許容出来るものではない。

「キサラは仮にも、我々“ラグナレク”の“拳豪”という地位に立っている者だ。残念だが、お前の行動を我々が見逃すと思うか?」

当然の様に、フレイヤは亮平に警告を下す。

だが亮平はフレイヤと同じ、当然といった様に言葉を返した。

「残念だけど、先輩達は俺の“敵”じゃない……」

「そうか……なら仕方ないな、『ワルキューレ』達よ！ 目の前にいる敵を駆逐せよ……」

『はっ……！』

突然のフレイヤの号令と共に、今まで亮平の目の前で身構えていた『ワルキューレ』達が、未だキサラを抱え続けている亮平に殺到した……。

最初に接近を果たしたのは、リーダーであるトンファー遣いだ。

「はっ……！」

リーダーが握っていた右のトンファーが、キサラを抱えている亮平の“股間”に向って、下から上に振り上げられる……だが、次の瞬間には。

パカンッ……！」

「な、なんだッ……？」

リーダーが振り上げる筈の右のトンファーが、何らかの物に木がぶつかった様な小気味よい音を発すると共に、リーダーが持つ木製のトンファーが中ごろからゴッソリと“切り取られていた”。

よって、亮平の“股間”に迫っていたリーダーのトンファーは、元の長さの半分を失った状態で空を切り、リーダーは何がなんだか分からない状態のまま、短くなったトンファーを間抜けな格好で上に掲げていた。

周囲の少女達は息を呑む、それは何が起こったのか分からない……といった物ではなく、目の前で起きた事象を理解した上でのものであった。

少女達は現在、ある一点を見つめている……。  
それは亮平の足元に広がっていた。

「ま……まさか、蹴りでリーダーのトンファーを？」

その誰とも分からない眩きは、亮平の足元に広がっていた、無くなったリーダーが使うトンファーの残骸が転がっていた……『ワルキューレ』達はそれを確認して息を呑んでいたのだ。

『ワルキューレ』達は何が起きたのか理解できてはいなかった……だがこの場には、今起きた事を確りと理解出来ていた者が一人だけいた。

「（この男……まさか、“ルーズジョイント”か!?!）」

理解出来ていた者……それは第三拳豪と呼ばれる地位に立つフレイヤだ。

「（あまりに上体が動かなかったから反応できなかつたが……この男、今確実に“蹴り”で振り上げられたトンファーを砕いていた……）」

フレイヤが見た映像は、あまりにも亮平の上体が動かなかつたせいで見落としそうな物であったが。

確かに見たのだ、亮平の右足が、他の体とは独立したように、まるでムチの様に動いてリーダーの持つトンファーを上から振り砕いたのを……。

その技は確かに、空手やテコンドーでも見られる“縦廻し蹴り”

であった……。

本来なら“縦廻し蹴り”を行う際、人は体を真半身にする必要がある。それは、蹴りの軌道を“横”の軌道から、股関節と膝の関節を使って無理やり“縦”の軌道に変えるためなのだ。“縦廻し蹴り”は、通常の蹴りとは違って、膝の向きを相手にではなく、地面に向って行うものなのだ、故に、通常の股関節では足の付け根を捻りきれないため、体を真半身にする必要があるのだ。

だが亮平は、その蹴りを全く上体を動かさず、右足だけを動かして行ったのだ……。

「（まさか、これほどの才能の他に、股関節が“ルーズジョイント”とはな……）」

フレイヤが先程から驚いている“ルーズジョイント”とは、通常の人間からは考えられない関節の稼動域を持つ関節の事をいう。

プロレスなどでは“ダブルジョイント（二重関節）”と呼ばれ、なかなか関節が決まり辛い……簡単に言えば、異常に関節が柔らかいという用語で使われている。

この用語で呼ばれる者は、関節技を主とする格闘家達からは“ラバーマン”などと呼ばれる事もあり、滅多に御目にかかれない、そんな希少な関節なのだ……。

そして、その様な関節まで持つ男が、ゆっくりとした口調で言葉を発し始めた。

「すまないな、今キサラ姉ちゃんを起こしたくないんだ……だから、慣れない足を使わせてもらうぞ？」

「くッ！ 全員散れ！！ 四方を取り囲んで“バルハラ陣”で叩く……『待て！ お前達は手を出すな』……フレイヤ様？」

リーダーが号令を出す直前、突如『ワルキューレ』を取り仕切る

フレイヤの声が、リーダーの号令を遮った……。

その様子に、リーダーを含めた『ワルキューレ』の面々は不思議そうな表情をフレイヤに向ける。

だがフレイヤは、そんな部下達の様子など気にしないかのように、静かに眼を瞑りながら、『ワルキューレ』達を掻き分けて、キサラを抱きかかえる亮平の下へと歩を進めていった。

そして、亮平の下へと何の問題もなく辿り着いたフレイヤは、静かに瞑っていた眼を開きながら、亮平向ってゆっくりと口を開いた。

「鬼島、何故キサラを降ろさない？ それは余裕か？ それとも、私達をバカにしているのか？」

「別に、俺は先輩達の事を馬鹿にした事は一度も無い……これはただ、俺がやりたいからやってるだけだ」

フレイヤの質問に、亮平は子供の様な理由の返答をした。

その返答を聞いたフレイヤは、若干の苦笑をしたのちに、再び亮平の方へと視線を向けた。

「そうか……だから足だけで戦おうとしたのか？」

「ま、そうですね……下手に揺らして姉ちゃんが起きたら、俺は多分また引っかかれる」

そう言っつて亮平は、目だけを動かして、キサラを掴み伏せる際に出来た引っ掻き傷をフレイヤに見せる。

その様子を黙ってみていたフレイヤは、一度眼を瞑った後、また再び瞼をゆっくりと開きながら、先程とは打って変わった口調で、亮平に言葉を発した。

「そんな理由で、私達と足だけで戦おうとしたのか？」

「仕方ないでしょ？ 怒ったキサラ姉ちゃんは容赦がない……」

「…………舐めるなよ」  
「ッ!？」

フレイヤが言葉を発すると共に、亮平に“目線に沿って”フレイヤが何かを放った……。

ガッ!

「ッ!？」

「ふあばないっしゅふえ…………(危ないっすね…………)」

だがその放られた何かは、亮平の口によって止められてしまっ……。

フレイヤが亮平の目線に沿って放った物、それは棒術で使う棒の先端だ。フレイヤは、亮平の目から棒を隠すように、今まで亮平の目線に沿わせながら棒を隠していたのだ…………正直、これはとんでもない技術である。

だが亮平はその棒の先端を、塞がっていた両手ではなく、空いていた口で噛み捉えたのだ…………。

そして亮平は、フレイヤの棒を噛んでいたままでは喋りづらい事に気が付き、ある行動をとる事にした。

バギッ!!

「(私の棒を、歯で噛み砕いただと!?)」

フレイヤの驚き通り、亮平は噛み付いていた棒を、何の躊躇も無く噛み砕いたのだ。

だが、棒の様な硬くしなやかな木を噛み砕いたせいで、亮平の口の中には噛み砕いた棒の破片などが散漫し始めた。この事を不快に感じた亮平は、抱えているキサラに掛からないように、真横に首を動かしながら、必死に口の中の木片を外に吐き出し始めた。



この様子を見ていたフレイヤや『ワルキューレ』は、啞然とした顔で亮平を見つめていた。

「フレイヤ様の初撃を口で……」

「信じられない……」

フレイヤの初撃、それは相手の目線に沿った直線状態で、最短距離を活かした一発必中の棒による突きなのだが……フレイヤ含め、この初撃を防いだ者を見るのは初めてだったようだ。

すると亮平が、この『ワルキューレ』達の言葉を無視しながら、木片を吐ききつたせいでカラツカラに渴いた口で言葉を発した。

「俺は別に、先輩達と戦うつもりはない……それに、久賀館先輩を倒すのは俺じゃない」

渴いた口でフレイヤに言葉を投げかけるも、当のフレイヤは何やら噛み砕かれた棒を眺めながら、亮平の言葉を無視していた……。

「……ん？ だうしたんすか？ そんなに棒ばつか見つめて……」

亮平も、そのフレイヤの様子に疑問を投げかけるが、フレイヤは一度「ふっ」と微笑を浮かべてから、再度亮平と向き直った……。

「お前は知らないかもしれないが、杖術遣いが杖を折られるとな、自然と負けを認めざる終えんのだ」

「折られたって……先端が砕けただけじゃ？」

「それでもさ……杖術遣いの道は“神武不殺”の道でな。人を殺す武器は使わないのだ……。その道を行く私が、この様に先端が尖ってしまった得物を使うわけにはいかない」

そう言って、フレイヤは亮平に先端を砕かれた棒を見せる……。確かにフレイヤが持つ棒は、先端が砕かれたせいで、元の平面ではなく、鋭利に尖った状態になっている。

「ふん……面倒なんすね、その杖遣いつては」

「そうだな、お前に言わせて見ればそうかもしれんな……」

自傷気味な台詞を吐いたフレイヤは、ふと、この場ではなく、兼一や美羽・武田が戦っている場所へと目を向けた……。

そこには“ラグナレク”の下つ端達を尽く倒し伏せている兼一達の姿が見られ、どういう訳か、何時の間にかに第六拳豪であるハーミットの姿も消えていた……。どうやら、気付かない内に勝負が決する間際まで来ていたようだ。

その様子を確認したフレイヤは、一度「ふう……」と溜息を吐いた後、後ろに控えていた『ワルキューレ』達に振り返った。

「撤退だ！ 我々はこの場から引き上げるぞ！」

「で、ですがフレイヤ様！ キサラが！」

フレイヤの突然の号令に、『ワルキューレ』のリーダーが食い下がる。だが、フレイヤはそのリーダーの言葉など問答無用で棄却した。

「反論は許さん、それに鬼島は何と言った？」

「え……あ！」

「そうだ、アイツは“文句があるなら力づくで奪いに来い”と言ったんだ……次の機会にでも奪いに行けば、それでいい」

フレイヤはその言葉を、首だけを亮平に向けながら言い放った。そのフレイヤの様子に、亮平は若干苦笑しながら答えた……。

「なんだか今回は俺、悪役みたいなんだけど……」

亮平が苦笑をしながら漏らした言葉に、フレイヤは「ふっ」というアンニョイな笑みを浮かべた後。

撤退命令が下され焦りながら撤退する『ワルキューレ』達と共に、フレイヤもこの戦いの場から姿を消していったのだった……。

### 第三十五話　　ルーズジョイント（後書き）

“気当たり”については、若干独自解釈が入っていますので、あまり鵜呑みにしない事をお勧めします。

はい、今回も自分で突っ込ませてもらいますが。

・リーダーのトンファーを砕いた時の間合いがおかしい。

これは皆さんお気付きですよ。

どう考えても距離がおかしいです。

・ルーズジョイントを大きさに書き過ぎた（汗）

実際、一箇所だけを動かして“縦廻し蹴り”を打つのは、この関節の持ち主でも不可能です、鵜呑みにしないで下さい（恥かきます）。

今回出たルーズジョイントですが、これは空手の先輩から聞いた物を、独自に大袈裟に書いたものなので、鵜呑みにしないでください（恥かくかも）。

ですが、実際にいるみたいですね、こういう関節が異常に柔らかい方が。

現実でいえば、極真にいた成嶋〇なんてのがそうだって言われてたり。

猪木と戦った、パキスタンだかどこかの選手がそうだったり。

いろいろ話があるんですよ。

では、次もありますのでこの辺でノシ

第三十六話　ロキ、最後の抵抗（前書き）

影武者！！

ゲレゲレは落ち武者！！

みんなは……

### 第三十六話　　ロキ、最後の抵抗

ロキは更に焦っていた……。

「（おいおいおいおい！！　不味いぞこれは……）」

何故なら、当初の作戦は既に瓦解し……。

今ではロキ以外の拳豪達も勝手に撤退を行ってしまい、ロキ自身、早急に撤退行動に移らなければ危険な状況に陥っていたからだ……。本来なら、キサラを使って亮平を揺さぶり、隙を作れば数で潰したり、運良く転んでくれれば“ラグナレク”側へと引き込めたかもしれないのだ。

だが、その作戦はキサラの突然の豹変により、実行に移す前に崩壊してしまう。

次に考えていたのは、フレイヤとハーミットを使った、拳豪達による集団戦だ。

如何に鬼島と言えども、『ワルキューレ』を従えたフレイヤと、個人の實力がずば抜けたハーミットを同時に相手にすれば只では濟まないと踏んでいたのだ。其処に、自分自身の部隊や、他の下っ端共を使えば、個人の力など数で捻じ伏せられるとも考えていた。

だが、それもハーミットが何を思ったのか勝手に裏口から帰っていつてしまったり、亮平によって、棒を砕かれたフレイヤが勝手に『ワルキューレ』を連れて撤退行動に移ってしまったりと……まあ、簡単に言ってしまうえば、上手く他の者達を使えなかっただけなのだが。

しかし、それだけではない……そもそも、今回の作戦は亮平に鬼島がいない事が前提だったのだ。にも関わらず、今この廃病院には、鬼島の仲間と思しき人物達が三人もいる。

しかも、この三人が其々ともない使い手だったのだ……ロキ

で無くとも嫌になるであらう。

だがロキも“戦う参謀”を名乗る者としては、このままでは終われない……。

そう考えたロキは、徐にコートの内ポケットから携帯電話を取り出すと、部下である20号に連絡を入れた……。

「おい20号、影武者達をここに集める……」

『了解しましたロキ様ー！』

「ついでに、用意していた“アレ”をいつでも行ける様にしとけ！」

『はい！ ロキ様 』

「へへへ……鬼島の野朗、ただで済むとは思うなよ？」

ロキは目の方は網眼鏡のせいで隠れて見えないが、それでも尚、口先を不気味に歪め、気味の悪い笑みを作りながら携帯の通話を終えたのだった……。

今まで“ラグナレク”の下っ端をなぎ倒していた兼一は、今回来る前に教えられていた師匠達の技のお陰で、何とか無事に目立った外傷も無く、この集団戦を切り抜けていた……。

「ふ〜……取り合えずは何とかなつたか（うわ〜自分でも信じられないよ、こんな人数相手にしてただなんて……）」

外面は確りしていても、内心ではガクブル状態の兼一であった……。

だがぼ〜つとはしていられないと兼一は、亮平に特に酷い怪我を負わされた白鳥の下へと向った……本来ならこの様な事など必要は無いのだが、そこは白浜兼一だ……生粋の優しさからか、どうしても心配で仕方が無かつたようだ。

白鳥の下へと漸く辿り着いた兼一は、まず言葉を失った……。

「（ひ、ひどい……）」

兼一の視線の先には、前のめりに突っ伏しながら意識を失っている白鳥の姿があった。

その姿は、亮平に“潰された”右拳は完全に原型を留めておらず、指はひしゃげ、手の甲からは一本の骨が突き出していたのだ……だが、それよりも目に留まったのが、彼が力なく地面に預けている左肩だ。

白鳥の左肩は、彼が着ているコート越しにでも分かるぐらいに形が變形しており、良くて重度の脱臼か、悪くて骨が完全に砕かれたのか……それ程判断に困る状態にあったのだ。

「（これが“掌鬼”って呼ばれる亮平君の、力の爪痕……）」

この白鳥の姿に、兼一は初めて友人に恐怖心と言うものを感じてしまった……。

だがそれも一瞬で、兼一はとにかく今は、目の前の怪我人をどうにかする事が先決だと判断した。

しかし、この様な大怪我を負った人間の手当てなどした事が無い兼一は右往左往してしまふ。

すると其処に、兼一や武田よりも敵を多く倒した美羽が、汗一つ掻いていない涼しい顔で兼一に近づいて来た。

「どうしましたか兼一さん？」

「み、美羽さん！」

どうやら可笑しな拳動を取り出した兼一を心配して、声を掛けた様なのだが、当の兼一は目の前に救いの女神が現れたかの様な反応



をし始めた。

この兼一の反応に、美羽は若干身動きするも、兼一の近くに倒れていた白鳥を確認した途端に、その表情を真剣なものへと変える……。

「兼一さん！ この方は！？」

「分かりません、だけど、亮平君にやられた人だとは思いますが……」

「とにかく、肩の骨の容態が気になります！ あまり動かさないようにコートを脱がすので、兼一さん、手伝ってください！」

「分かりました美羽さん！」

二人はそう頷き合いながら、白鳥の肩を隠しているコートを慎重に脱がしていく……。

そして、コートを脱がしきつた二人の前には……。

「これは……」

「（これが亮平君の……）」

二人の目の前には、白鳥の無残にも変形してしまった肩が露になつていた……。

幸い……いや、これは幸いとは言えないであろう。白鳥の肩は、複雑骨折の様に砕けてはいなかったものの……肩が完全に抜けているのだ……それも、肩の皮膚や筋肉が伸びてしまっくらいに。

ぱつと見では、重度の脱臼だけが目を引かせるが、白鳥の肩や胸には既に紫色の大きな痣が出来ており。痣の大きさや、皮膚の状態からいって、肩の上から何らかの形で衝撃を受けたのが伺える。そして、胸の方の痣は、どうやら脱臼した際に筋肉が伸びきってしまった、それに耐えられなかった幾つかの筋肉が断裂した結果に出来た様であった。

兼一は改めて、その惨状を見て息を呑んでしまった……。

だが見羽は、その惨状など慣れているかのような手際の良さで、白鳥の着ていた衣服を切り裂き、脱臼していた白鳥の肩を一瞬ではめ込み、切り裂いた衣服を三角巾の様にして、白鳥の首に巻きつけ、その巻きつけた布で白鳥の左腕を手際よく固定した。

「これで良しですわ……」

「慣れてますね、見羽さん？」

その様子に苦笑しながらも、兼一は見羽に言葉を掛けた。

兼一の言葉を見羽は「ええ、前に似たような人を手当てした事がありますから」と、そんな意味深な過去話を笑顔で言っただけであった。

「ハニー！ それと兼一くん！ そっちは大丈夫かい！？」

「武田さん！ ご無事で！」

するとそこに、美羽と共に今まで戦っていた武田が寄ってきた。

兼一はその武田の様子に、嬉しそうな表情で答えた。だが見羽の方は、先程から未だに警戒の表情を崩さないでいた……。

「兼一さん、武田さん……まだ一人だけ、敵の司令塔が残っていますわ」

兼一と武田の二人は、美羽が見据えている方向に目をやった……。

「彼か、久しぶりじゃない」

「あれが……第四拳豪の口キ！」

廃病院入り口の屋根に佇む口キを見て、武田は軽い口調でおどけて見せて、兼一は新島から聞いた外見を照らし合わせた。

「お、漸くこつちを向いたな……」

視線を向けられたロキは、不敵な笑みを浮かべながら、兼一達に視線を返した。

この時、ロキは内心で注意すべきは、凄腕の女だけだと高をくくっていた……。

何故なら、武田は確かに強いが、左腕が治ったばかりだ、自分自身が直接相手をすれば、それほど脅威にはならない。冴えない男の方は、ここに来た最初の行動が周囲の警戒ではなく、仲間であろう鬼島に近づく事であったり、次に行った行動が死に損ないの下へと真っ直ぐに向って行ったりと、正直悪く言えば猪野朗で、良く言えばお人好しの馬鹿なので、正面から戦わなければ大した事の無い相手と判断したからだ。

だがロキは、それでもこの場で戦う気は無かった……。  
当然だ、ここには油断のならない未知数の実力を誇る凄腕の女は居るし、キサラを大事そうに抱えているとはいえ、足だけでも脅威の鬼島まで居るのだ、“戦う参謀”を名乗るロキとしては、ここが引き時だと心得ていた……が。

「（そろそろ始めるか……）」  
「おい！ ロキとか言う人！！ ここまで降りて来い！！」

ロキは下から聞こえてくる冴え無い男の叫びなど無視しながら、手に持っていた携帯電話のボタンを押した……すると。

「うわ！ なんだ！？ 急に暗くなつたぞ！！」  
「兼一君！ 何が起こるか分からないじゃない！ 気を付けよう！！」

「兼一さん！ 落ち着いて、とにかく周囲に気を配ってください！」

ロキが携帯のボタンを押すと、今までこの夜闇を眩しいぐらいに照らしていたライト全てが、「ガシャン！」という電源が切れる音を出しながら、この廃病院を下の暗闇の世界へと戻ってしまった。今までの眩しいぐらいの明るさから急に暗闇に戻されたせいで、兼一達の視界は一瞬光の残照を残しながら、視界が真っ暗闇に染まっただけで終わった。

瞬間、視界を急に奪われた兼一の後ろから、パチパチと何やら何か小さく弾けるような音が響いてきた……兼一は、その音を不審に思い、警戒しながら振り向くと。

「うりゃあ!!」

「うわッ!？」

そこには、持っている人間は生憎暗闇のせいで見えないが、何か棒状の物に細かい紫電を纏わせた武器を振り上げている敵と思しき人物がいた。

兼一はあまりの突然の事に驚きの声を漏らしてしまう……しかし、この瞬間に兼一はある事に気付いたのだ。

敵の持っている武器は、明らかに電気を使ったスタンガンのような武器なのだ。それを、いま目の前で振り上げられている……そして自分は、警戒すべき時だと言うのに、先天的なビビリ症で思わず反応を遅らせてしまった。故に体は動かせず、その場で硬直してしまっている、これは“電気”が流れる武器を手で受けるしかない……つまり簡単に言えば、大ピンチだという事だ。

「おッおおおお!!!!」

上から迫り来る脅威に、兼一は意味も分からず雄たけびを上げながら立ち向かっていく……だが、その勇気も次の瞬間には肩透かし

を食らった様に収まってしまふ。

ガゴツ！！！！！」

「がツ！？」

この暗闇の中、突然兼一の前の方、正面の敵の後ろから、何か鈍器で殴られた打撃音が聞こえて来た。

「…………へ？」

その音と同時に、今まで兼一の正面で武器を振り下ろそうとしていた敵は、突然力をなくした様に、兼一の横側へと前のめりで倒れこんでしまふ…………。

突然の出来事に、雄叫びまで上げていた兼一は呆けた声を出してしまつた。

「やはり俺がいないとダメだな、なあ？ 兄弟？」

すると、兼一の前の方から聞きなれたくない声が聞こえて来た…………だが兼一は知っている、この狡賢く、偉そうな口調で喋る“宇宙人”を！

「お…………お前！？」

「親友の新島様を加勢に来たぜ！！」

その言葉と同時に、今まで明かりを失っていたこの場に、再度夜闇を照らす明かりが灯つた。

そして、兼一の前に現れたのは、不敵な笑みを浮かべながら金属バットを肩に担ぐ…………。

“宇宙人の皮を被った悪魔”こと新島春男その人であった。

「新島、お前の後ろにいる人達は何だ？」

だが居たのは宇宙人だけではない。

新島の後ろには現在、数十人規模の男達が控えており、その男達の一人がなにやら“新白連合”なる文字が書かれた旗を掲げていた。

「こいつらか？ こいつらは、俺様とお前の連合…… “新白連合”の兵隊達さ！！」

「……はあ！？」

「お前達！！ 他の連中にも加勢して来い！！」

あまりに訳の分からない事に兼一が驚きの声を出す、新島はそんな事などお構い無しに、後ろに控えていた男達に命令を下した……が。

「総督！！ 残念ではありますが、他の敵は既に倒されております！！」

「え！？」

新島の事を“総督”と呼んだ男の言葉に、兼一は辺りを見回す……。

「み、見羽さん……」

すると、まず目に入ったのは、最初に倒したであろう敵など放っておきながら、既に武田に迫っていた敵も倒していた、優美な金髪を夜風になびかせる美羽の姿であった……。

「およ？ 兼一さん！ ご無事でしたかですわー！」

「は、はははは……」

また、こちらに気付いた美羽が兼一に手を振りながら無事の確認をしてきたが、兼一は、そんな余裕な彼女を見て、自身と彼女の實力の差を痛感したのであった……。

だがその兼一と美羽の間に、一人の人影が物凄い勢いで飛び込んできた。

「うわッ!？」

そして、飛び込んできた人影は、兼一の目の前で地面に激突し、その後二転三転と地面を転がり続け、漸く止まったのかと思えば、まるで電池の切れた玩具の様に力無く地面に体を沈ませていった。

飛んできた人影の正体は、今まで拡張期などを使っていた男……

“第四拳豪”のロキであったのだが。そこで兼一は漸く気付く。今まで新島の奇襲や、美羽の活躍で倒された者達が皆、同じコートやバンダナ、網眼鏡をしており、どれが本物なのか、区別が着かなかくなっていった事に。

しかし、兼一の視線はそこでは無い……。

兼一の視線は、ある一点を見つめていた……。

「亮平君……」

それは自身の友人である、未だキサラを抱きかかえたままの鬼島亮平の姿であった（お姫様抱っこ）。

そして、その亮平の周りには、先程と同じ、第四拳豪と同じ格好をした男達の惨状と、へし折られた長い警棒の様な武器が無数に散乱していた……。

兼一の視線を受ける亮平は、ある一点を見つめていた。

「逃げられたか……ま、仕方ないな」

亮平が見つめていたのは、先程まで拡張期をやたら響かせていた人物が立っていた場所。

そこには既に誰もおらず、まさにもぬけの殻のような状態であった……。

「うん……うん……」

「ん？ 起きるのか？」

すると、流石に今の騒動で眼が覚めたのか。

亮平の胸に今まで顔を預けていたキサラが、亮平の腕の中で身動きをし始めた……。

「……ぜってえタマ潰してやる……クソ亮平……」

「（やばい……寝てても可愛いこと言わないよ……この人）」

キサラの“色気”のある寝言に、亮平は涙した……。

すると、そんな呑気な亮平に、兼一と美羽、そして武田が近づいて来た。

「亮平君！ ロキって人は！？」

「逃げたよ……こんな凝った真似をしながら」

そう言って亮平は、自身の足元に転がっていたロキの“影武者”達を一瞥する。

「しかし兼一よ、最初は頭に血が昇ってたから言えなかったが……ありがとうな、来てくれて」



亮平が突然述べた礼の言葉に、兼一は若干気まずげにしながら口を開いた。

「い、いや……僕よりも、美羽さんや武田さんの方を……」

「別に、感謝の度量に違いは無いんだがな……風林寺さん、武田先輩、今回はありがとう」

キサラを抱えたまま、亮平はそう言いながら美羽達に頭を下げた。

「宇喜田は幸い……って言ってもいいのかな？ 八二一に見てもらったんだけど、鼻の骨は岬越寺先生に診てもらえば元通りになるみたいなんだ」  
「そうですか……」

亮平はそう言いながら、一瞬であったが顔を曇らせた……。

鼻の骨というのは、結構厄介なもので、折れた状態で鼻で息を吸えば、脳に直接鼻血が行ってしまう危険性があったり、早急に鼻の形を整えなければ、某格闘家の様に、鼻がおかしな方向に歪んでしまふという事態も起きてしまふのだ。

だが、鼻の骨を折る事は、不良達の喧嘩の間では結構頻繁に起こる事……気にする事は余り無いが。亮平が顔を曇らせたのは、別にある……つまり、気まずいのだ、助けに来てくれた武田の友人である宇喜田の鼻を砕いたか、折ってしまった事が。

そんな亮平の様子を察したのか、武田が気にするなとも言いたげな口調で亮平に声を掛けた。

「宇喜田だつて覚悟は出来てたさ……鬼島君が気にする事はないじやな〜い」

「……そつすか、なら良いです」

「はわわわわ」

「……ん？」

なかなか真面目な雰囲気だったのだが、突然亮平達の横から可笑しな声がして来た。

そちらに亮平が顔を向けると、何やら美羽が顔を赤くしながら亮平とキサラの事を交互に見ている姿があった……。

「……」

「お、鬼島さんが裸で……南条さんをお姫様抱っこして……」

「……」

「こ、これが略奪愛と『ちげえよ!?』ハッ！」

亮平の突っ込みに、若干変な世界へと爆走し始めた美羽が我を取り戻した……流石に、略奪愛は間違っているだろう。

そんな変な流れになりつつある雰囲気を、兼一がうまく塞き止める。

「と、取り合えず“ラグナレク”がもう居ないなら、怪我人を運ぼうよー！」

「そ、そうですね！結構酷い怪我を負っている方もいらっしやいましたしー！」

亮平の突っ込みで我を取り戻し、兼一の機転で逃げ道を見つけた美羽が、珍しく焦った様子で兼一に続いた……。

亮平はそんな兼一達の向う方向を見やると、何やらいつの間遭遇したのである宇宙人が、部下なのか味方なのか分からない男達を使いながら、亮平が倒した“キサラ隊”の面々を運んでいる姿が映った。

兼一達の他にも駆けつけて来た人間がいたことに亮平は驚いたが、どうにも宇宙人の行動が腑に落ちず、首を捻るばかりであった。

するとそんな亮平に、兼一達とは行かなかった武田が突然口を開いた。

「おかしいじゃない……ロキがこんな簡単に姿を消すなんて」

「おかしい？ いや、それは考えすぎじゃないのか武田先輩？」

「そうかい？ ロキは“ラグナレク”一狡賢い男だよ？ このままで終わる筈が……」

「大変じゃー総督！！！！」

武田が訝しそうな言葉を口にしてしていると、突然この廃病院中に轟くぐらいの大声が響き渡った。

声の主は、先程から“新白連合”という旗を持ち続けている田舎臭い男で、その男の声は、まるで先程の武田が抱いていた悪い予感が的中してしまったかのようなようであった。

だが武田の悪い予感は、次の男の言葉で“かのようなようであった”ではなく、“してしまった”という確定事項になってしまった。

「何事だ松井！」

「総督！ なにやら大型のトラックが、この廃病院に猛スピードで突っ込んで来るみたいなんじゃ！！」

「な、なんだとツ！？」

その男の言葉に、この廃病院に残っていた者達は皆、驚きの表情を露にってしまった。

この廃病院には、出入り口が裏口を抜くと、亮平が最初に開けた入り口しか無いのだ……。

そして、その入り口付近では現在、亮平が特に酷い怪我を負わした“キサラ隊”の面々が、未だに数十人の人間を残して、地面に倒れ付しているのだ……つまり、このまま大型トラックが突っ込んでくれば、その取り残された“キサラ隊”の面々は、信じられないで

あろうが、この様な、たかが学生同士の喧嘩で大型トラックに轢かれるという事態に陥ってしまうのだ……。

「ええい！ とにかく“キサラ隊”の移動をギリギリまで急がせる！！」

「了解じゃー！」

「（くそ！ 置き土産にしちゃ相当性質が悪いぜ、こりゃ！）」

新島は焦った……。

本来なら、今回起こった騒動の美味しいところを最後にもらっていただけだったのだ。だから、今まで兼一達を呼び込んだ後も様子を伺い、丁度良いぐらいに敵戦力が崩れ、自分たちの登場のインパクトがもつとも高い時を選んだのだ……。

事実、新島が秘密裏に集めていた“新白連合”登場のインパクトは、兼一達にも十分伝わっていた。

だがしかし、予想外の事は時折あるものなのだ……。

「（イメージアップのために、敗残兵の助けなんてしなきゃよかったぜ……）」

打算でしか物を考えない宇宙人にとって、これは流石に許容出来ない事態であった。

また、この時、宇宙人は「流石にちよつと欲張りすぎたかな？」とも思っていた事は、流石と言わざるおえないであろう。

すると其処に、今まで宇喜田や白鳥といった、今回の騒ぎで時に酷い怪我を負った者たちを運んでいた兼一と美羽が近づいて来た……。

「おい新島！ 今の話って……」

「不味い事になったぜ兼一？ こりゃ、見捨てなきゃならねえ奴等

も出てくるかも知れねえ……」

「なんだと！ おい宇宙人！！ お前は何のためにこんな人達を連れてきたんだ！！」

「じゃあかましい！！！！ これ以上続ければ、無事な奴等も巻き添えを喰らうんだよ！！」

「兼一さん！！ トラックがもうそこに！！」

「「えッ！？」」

近づいて来たなりに、いきなり言い合いの口喧嘩をし始めた兩人の目に、美羽の言葉通り、こちらに猛スピードで廃病院まで続く一本道を駆け抜けている大型のトラックが姿を現した。

「まずい！！ 総員、運べる者を運んだら急いで退避しろ！！ 巻き込まれるぞ！！」

「おい新島！？」

「察せ！！ このままじゃ俺様も、お前も美羽ちゃんも巻き添えなんだぞ！！」

「それでも僕はッ！！」

「なかなか、奴さんも容赦が無いね……」

兼一と新島が口論をしていると、突然二人の間に、一人の大きな人間が割って入って来た……。

その者は、まるで彫刻の様な筋肉の鎧を身に纏った巨人……。

「亮平君！？」

そう、兼一の友人であり、今回の騒動の中心人物、鬼島亮平だ。

「兼一に宇宙人、ちょっと退いてな……それと風林寺さん」

「はい？ なんてでしょうか？」

兼一達の前へと躍り出た亮平は、未だキサラを抱えた状態で美羽を呼んだ。

「すまないが、“姉ちゃん”を頼む……」  
「はい、分かりましたわ」

そう言っつて、亮平は抱えていたキサラを美羽に優しく預け、こちらに今尚、猛スピードで向かってくる大型トラックを見据えた……。

「ふん……俺を轢くには、ちょっと小さいな」  
「りよ、亮平君？ 何をしようとしてるの？」

溜息混じりに呟きながら、廃病院の入り口正面へと歩いていく亮平に、兼一が不安そうな口ぶりで問うてきた。その友人の様子に、亮平は不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「大丈夫だ兼一、俺も姉ちゃんの部下達を見捨てるつもりはない……」

その言葉には、どこか不思議な力強さが籠っていた……。そして、その言葉を受けた兼一は、入り口へと悠然と歩いていく友人の広い背中を見つめながら、危険だとは分かっているも、何故か無意識のうちに「亮平君なら、もしかしたら……」という感情を抱いていた。

「しかし、本当に容赦ねえな……これは“ガキの喧嘩”だろ？ ここまでするか？ 普通？」

冗談を言うように軽い口調で、亮平は迫り来る大型トラックを見

据えながら言葉を吐いた。

見据えるトラックの運転席には、先程の影武者達と同じ格好をした、一人のデブがハンドルを握っていた……。

「はっはっは！！ ロキ様の言う通りだ！！ 鬼島の野朗、馬鹿みたいに前に出てきやがった！！」

ハンドルを握っていたロキ（デブ）は、フロントガラス越しに見える風景を見ながら、本当に楽しそうな笑い声を出していた……。

ロキ（デブ）の視線の先には、前へと出て来た亮平の後ろで、必死に運べる怪我人を背負いながら逃げ回る者達が写っていた……そして、ロキ（デブ）の頬はほんのりと赤く染まっている。

どうやら、何かしらハイになってしまっ物飲んだ後のようであった。

「死ねえ！！ 鬼島ああ！！」

そして、ロキ（デブ）はアクセルを踏む力を強めた……。

目の前には、両手を広げながら身構える“掌鬼”の姿が……。

トラックと“掌鬼”の距離が、猛スピードで縮まっていく……。

刹那

この辺り一体に、巨大なもの同士が衝突し合う轟音が響いたのであった。

第三十六話　ロキ、最後の抵抗（後書き）

はい、という事で次が最後です。

気になったところがあれば言ってください。

正直今回は自信が無いので、かなりあると思います。



第三十七話 トリックは「じつって止まるんだよ？」(前書き)

連続投稿の最後です。

### 第三十七話 トラックは、こつやって止まるんだよ？

最大積載量3tの大型トラックが、廃病院入り口で両手を広げる亮平に迫る……。

迫り来るトラックに対し、亮平は右足を少し曲げながら後ろに下げ、腰を据え、重心をゆつくりと下に落した……。

トラックと亮平の距離が更に縮まる……。

既に亮平の後ろにいる者たちは、この亮平の無謀とも言える行動が成功しなければ助からないと、高をくくり始めた。

「ハーハツハ！！ 潰れちまええええ！！！！！！」

トラックを駆るロキ（偽者）が、アクセルに込める力を更に深めた。

その瞬間、トラックのスピードが更に上がった……。

この瞬間、周囲の人間には時間がスロー再生のようになる感覚を覚えた。

迫り来るトラックが、先程よりも遅く見える……。

そして、迫り来るトラックが先程よりも大きく見える……。

瞬間、亮平が動いた。

亮平は、己が曲げていた右膝の溜めをフルに使って、後ろ足である右足を思いつきり杭の様に地面に突き刺し、迫り来るトラックに対して体を前に押し出した。

刹那

ガシャアアアアアアア！！！！！！

この廃病院だけではなく、周辺全体に轟くぐらいの轟音が鳴り響いた。

「りよ、亮平君！！」

「鬼島さん！！」

「鬼島君！！」

この轟音に、今まで取り残されていた人達を運んでいた兼一達が声を上げた……。

「お、おおおおお！！！！」

だが、その兼一達の声は悲痛の叫びではない。

「ば、化け物があ！！」

兼一達が見たものは、亮平が大型トラックのバンパーの下に手を掛け、杭の様に地面にめり込んだ右足をつ張りながら、未だタイヤを回転し続けるトラックを正面から受け止めた姿であった。

その姿に、兼一達は驚きと共に、歓喜の声を上げたのであった。

「く、くそ！！ 何故進まん！！ 何故押し潰せないんだ！？」

ロキ（偽者）は、亮平との衝突の際、あまりの衝撃に一瞬頭をハンドルにぶつけてしまったのだが、そんな事よりも、目の前で起こっている事に驚愕の叫びを出した。

亮平と正面から衝突した大型トラックは、フロントガラスは衝撃により、縁の部分から取れかかっており、亮平と直に衝突した箇所は、亮平の体を捻じ込んだかのように内側に凹んでいる。

だがロキ（偽者）は、そんな事などお構い無しにアクセルを踏み

続けるのだが、一向に前に進まない。

というより、何故か後ろの方が浮いている様に感じたのだ……。

「ま、まさかこのトラック……」

ロキ（偽者）は、一瞬浮かんだ嫌な予感を確かめるべく、恐る恐るサイドミラーを覗いた……。

「う、浮いてやがる！？ 後輪が浮いてやがる……」

「おおおおおおお……」

後輪が浮いている事にうろたえるロキ（偽者）を他所に、亮平は体をトラックの正面にくっ付けながら、トラックの下を掴む両腕に力を込める……。

何故後輪が浮いているのか……それは、亮平とトラックが衝突した際、亮平の前に出る力に負けたトラックが、あまりの衝撃により一瞬前のめりになった瞬間、亮平が前のめりになるトラックを支えるようにして、浮いた後輪をそのまま持ち上げたからだ。

トラックを支えるために、亮平は背中を思いっきり反らしながら、腕に込める力を更に増やす。

そして……。

「おおおつりやッ……」

「お、おおおおお……」

ドガシヤアアア……！！！！

トラックの後輪が完全に浮ききった瞬間に、亮平は体を捻り、まるで捲り返すようにして、受け止めていたトラックを横転させた。

真に非常識極まりない光景である。

証拠に、今まで歓喜に沸いていた兼一達は、啞然とした表情でトラックを横転させた亮平を、まさに開いた口が塞がらないと言った表情で見つめていた。

また、この轟音で、今まで気を失っていた者達も「ビクッ！」と目を覚まし。

美羽に支えられていたキサラは、「フニヤッ!?」という訳の分からない驚きの声を上げながら目を覚ました。

そして、トラックを横転させた亮平が、運転席でうなだれるロキ（偽者）にゆっくりとした足取りで近づいて行く。

「おい、このデブ……」

この声に気付いたのか、ロキ（デブ）は一度頭を振ってから、歩いてくる亮平に視線を向けた。

「痛ッ!……つつ……お、お前は!」

漸く衝撃から覚めたのか、ロキ（デブ）はフロントガラスが完全に吹き抜け状態になってしまったトラックのシートベルトに固定されながら、驚きの声を出した。

近づいてくる亮平は、額から少しだけ血が流れ、多分衝突の際に出たのであろう鼻血を拭いながら口を開いた。

「こんなので、俺を轢けると思ったのか?」

「ひ、ひいッ!」

近づいてくる亮平に対して、ロキ（デブ）は固定されたシートベルトを必死に解こうとしながら、体をジタバタさせる。だが生憎と、焦っているとシートベルトという物は外せない物なのだ。

そして、遂に亮平がロキ（デブ）の前に辿り着いてしまった。

「お、お助けええ!!!!!!」

「ふん……大体、俺を轢きたいなら、後ろに丸太でも積んだ“コンボイ”で来いつてんだ」

そう言ってから亮平は突然、今まで後ろで呆けていた新島に振り返った。

「新島！ 後の面倒は頼んだぞ？」

「……は？」

亮平に声を掛けられ、漸く我を取り戻した新島が返事をする。亮平は突然目の覚めたキサラを支える美羽の下へと歩いてきた。

「りょう……へい？」

「ん？ なんだ、気付いたのか？」

「鬼島さん？ もしかして……」

目は覚めたものの、未だ寝起きの様な声を出すキサラを亮平は、支えていた美羽からキサラを受け取り（再度お姫様抱っこ）、今度は未だ呆けている兼一へと視線を向けた。

どうやら美羽は、亮平がこれから言う事が分かったのか、目を覚ました宇喜田を支える武田の下へと走った。

「……お、おい!? 降ろせ!!! おい!!」

「兼一、逃げるぞ! そろそろ警察まっほが来る筈だ!!!」

「え? え?」

「とにかく走れ! 悪いが怪我人を乗せたりアカーは兼一、お前に頼んだぞ!」

「え? ええええええ!?!」

うろたえるキサラと兼一を他所に、亮平はこの廃病院を出るために、全力で出口でもある入り口に向かって走り出した……（もちろん、抱えているキサラに優しいスピードだ）。

そしてそれに続いて、美羽そして宇喜田に肩を貸した武田が続いた。

「美羽さんに武田さんも！？ お、おいていかないで下さいよ〜！」

これに兼一も、若干涙目になりながらも、亮平に言われた通りに白鳥などを乗せたりアカーを引きながら、この廃病院から走り去っていったのだった……。

そして、この場には横転したトラックと、新島率いる“新白連合”に、特に怪我は無いが、今まで意識を失っていた“ラグナレク”の兵隊達が、ただ虚しく残されるのであった。

第三十七話 トリックはこつちやって止まるんだよ。(後書き)

あゝ……大変だった。

今回苦労したのは。

- ・美羽の戦い方のイメージが湧かない
  - ・亮平と戦う相手が……。
  - ・死んだんじゃねえか？っていう描写をしてしまった
  - ・怪我に無理があつた
  - ・兼一達の行動が読めない
  - ・時間が無い
  - ・就活きつい(三年なのでやりはじめたばっか)
  - ・課題いっぱい
  - ・宇宙人を出すタイミング
  - ・ロキの作戦が人殺しレベル
  - ・etc
- です、いっぱいですね……。。



正直、今回で分かりました。

纏めて出そうとすると、余計に考えなきゃならなくなる事が!!

これは性格上の問題ですね(ゲレゲレ自身の)。

では、次回は事後処理をやります。

その次ですかね、亮平に関するオリ話は。

では、次回もよろしく御願いますノシ

第三十八話 事後処理とこれからと（前書き）

今回、二万文字を超える分量です。

また、後半の展開に自信が無いです。  
では！

注意：キャラ崩壊が少しだけあります。

それと、ちょっとケンイチの世界には合わない下ネタもあります。

### 第三十八話 事後処理とこれからと

「お、おい！ 降ろせ！！ 聞いてんのか！？」

「聞こえないね〜」

亮平に抱えられたキサラが、抱えられた腕のなかで暴れ始めるも、亮平は特に気にした様子もなく、夜の情景を走り抜けていく……。

「な、なんだか楽しそうですね、亮平君……」

「そうですね」

「ハハハ……僕と兼一君は、それどころじゃないけどね」

そして、その後ろに兼一・美羽・武田の姿があり。兼一と武田は、今回亮平にやられた宇喜田や白鳥といった怪我人を乗せたりアカーを、前を走る亮平の速度に付いて行く様に引きまくっていた。

現在、亮平達は怪我人を梁山泊へと運ぶために、街灯が照らす夜の道を駆け抜けている。

「亮平、お前ふざけるな！ 降ろせ！ そして白鳥達はどうしたんだ！！」

また、先程から亮平にお姫様抱っこで抱えられていたキサラが、冒頭と同じ様に暴れ続けていた。

そんなキサラの言葉に答えるように、亮平は走っている姿勢を捻りながら、先程から自分の体でキサラから見えなかった、兼一と武田が引き続けているリアカーをキサラに見えるようにした。すると、キサラが驚いたような表情をする。

「お、おい！ 雑すぎるだろ！？ そして武田！ どうしてお前ま

でいるんだい!？」

「ハハハ　久しぶりキサラちゃん」

リアカーにまるで山の様につまれた部下達を見て、キサラは思わず突っ込んでしまい、更にはそのリアカーを引いていた武田を見て声を張り上げた。

だが武田は、亮平の走る速度に合わせてるために疲れていたのだが、なんとかといった仕草で、だいぶ無理をした表情でキサラに軽い口調で答えた。

「キサラ“ちゃん”ね……」

「なッ!？」

武田の軽口を聞いた亮平が、抱えているキサラの顔を見下ろしながら、口の端を上げた何ともいえない……いや、単純に苛つく表情をしながら、小馬鹿にしたような呟きを漏らした。

その亮平のわざと聞こえる様にしてある呟きに、キサラは赤面しながら見下ろしてくる亮平に顔を向けた。

「キサラ“姉ちゃん”が、俺以外に直接“ちゃん”付けされるなんてね」

「ばッ!　だ、黙れ!!　蹴りいれるぞ!？」

「はっはっは　どうぞ御自由にい?　その代り、俺はこの状態からケツを触らせて……ブッ!？」

なぜか何時もより調子に乗り……もといセクハラ口調の幼馴染に、キサラは問答無用で抱えられた体勢から、器用に体を使いながら亮平の顔面に向かって蹴りを入れた……直撃したのは、現在も鼻血が目立つ亮平の鼻だ、まっこと、容赦の無い幼馴染である。

だが亮平は離そうとはしない、まるでこの楽しい時間を手放した

くないかのように……。

「鼻にブーツは……鼻にブーツは無いでしょうに……」  
「うるせえ……何考えてんだテメエ？ この私にセクハラなんて、  
いい度胸じゃないか？」

亮平にはまだ抱えられながらも、キサラは自身の顔を見下ろす幼  
馴染に鋭い視線を向けた。

だが亮平は、そんな威圧感を与えてくる自身の腕の中に収まっ  
ているキサラの顔を見て、一瞬だけ「ふ……」と笑みを漏らしなが  
らぼつりと呟いた。

「猫みたいでかわいいな……」

「フニヤツ!？」

この亮平に呟きに、キサラは本当に猫みたいな驚き方をしながら、  
顔を赤らめていく……。

「ハツハツハ! どうしたキサラ姉ちゃん? 今日はやけに素直じ  
ゃないか!」

「お前は少しおかしいぞ!? わたしと……あれ?」  
「ん? どうした?」

なにやら本当におかしなテンションの亮平に、キサラが言葉を返  
そうとすると、何やらキサラが言いよんどんでしまった……。その様  
子に、亮平は不思議そうな視線をキサラに向けた。

「どうして私は、お前に抱えられてんだ? それに、私とお前は…

……」

「……?」

「鬼島さん、そろそろ着きますわ!」

キサラが不思議そうに亮平を見つめていると、横から悠然と美羽が亮平に追いつき、目的地が近いことを亮平に告げた。

「分かった、じゃあ、悪いけど先に行つて、岬越寺さんに話しててくんない?」

「分かりました、では」

そう言つて、美羽は亮平を一瞬にして追い抜いていき、そのまま梁山泊へと疾走していった。

その様子を黙って見ていたキサラは……。

「おい、いまの女は誰だ?」

「ん? 俺の友達だけど? ついでに言つと、後ろで姉ちゃんの下を運んでいる俺の友達の好きな人で、風林寺美羽つて名前だ」

亮平から説明を受けると、キサラは先に走つていつてしまった美羽を見据える……。

見据えながら、キサラは何やら小さな敵対心のようなものを抱いていた。

「気に入らないねえ……気に入らないよ……」

「……」

この呟きに、亮平は先程までの調子の乗り様とは打つて違って、表情を強張らせ、明らかな緊張を見せていた……亮平がここまでの緊張を見せるのは稀だ、稀なのだ。

だが亮平は、そんな緊張など他所に、多分久しぶりに幼馴染を好きに出来て調子に乗っていたのである……静かな敵対心、という

より完全な敵対心を抱き始めたキサラに、恐る恐るといった声で言葉をかけた。

「もしかして……」

「……あん？」

「……胸か？」

「亮平……」

「な、なに？」

「お前、調子に乗りすぎてないかい？」

「い、いや、そんな事は無いぞ！？ ちょっとテンションがハイになってるだけだぞ？」

「それを調子に乗ってるって言うんだよ……覚えときな」  
「……」

後に亮平は後悔した……。

この事が原因となり、次の日に眼を覚ました時、自身の携帯電話から家族とキサラ以外の女性のアドレスが全て消されていようとは、夢にも思っただけでなかったからだ……。

### 【戦いの後】

昨日の出来事など、既に過去の事……。

現在、キサラは窓辺のカーテンから漏れ出る日の光で、鬱陶しそくに唸りながら眼を覚ましていた。

「う……うん……うん？ こっは……」

眼を覚ましたキサラは、まず周囲の様子がおかしい事に気が付いた……。

見渡せば、自身が寝ている空間と外を遮るかのようなカーテンが回りを囲んでいて、現在寝ているベットはどこか病院のような、学校の保健室のような雰囲気醸し出すものであった。

天井はお決まりの見慣れぬ天井、ただ自分が眠りから覚めた日の光だけが、この空間に侵入を果たしていた……。

キサラは寝起きで未だ覚めない頭をフルに回転させ、現状の掌握を図る。

「思い出した、私は、確かあれから……」

キサラの脳裏に、昨日の出来事が蘇る……。

昨晚あの後、梁山泊へと辿り着いたキサラ達は、怪我人である白鳥や宇喜田の治療を、こここの病院を経営している岬越寺と、針治療が得意だとかいう小さいオッサンに御願いしたのだ。

すると、どうだろう……。

あれほど酷かった白鳥の怪我の治療を、たったの10分で完了し、あまつさえ見るにも耐えなかった内出血や、肩の脱臼などが全て元通りになっていたのだ。

正直これにはキサラ自身、小さいオッサンではなく、ダンディな方に抱き付きたくなっただぐらいだ。

だが白鳥の怪我は流石に完治とはいかず、とうぶんの間、この病院に通い続けなければ脱臼が癖になり、切れた胸筋や三角筋、上腕二頭筋・上腕三等筋が元の状態には戻らなくなってしまっただそう……。

また、宇喜田の鼻の方は幸い治ったとしても、以前と変わらない形で治るのだそうだ。

これにもキサラは感謝した。

しかし、その後が大変であった……。



なぜなら、部下達の怪我が大事に至らなかつた事に安堵したキサラが、急に脱力したように地べたに尻餅をついてしまったのだ。

岬越寺曰く、どうやら自分には相当な疲労が溜まっていたらしく、急に尻餅を付いてしまったのは、戦いが終わった安心感のせいで、張り詰めていた緊張の糸が切れ、急激に今まで蓄積して来た疲労が目眩や立ち眩みといった症状に表れたからだそうなの……。

これにはキサラ自身、素直に驚いていた。

実際、確かに亮平と戦うため、“ラグナレク”以外の敵対勢力と何度も連戦を繰り返してきた、しかも全て一人だけ……。

だが、それでもキサラは疲れを感じた時は無かつた……。

しかし事実、キサラは倒れたのだ、岬越寺が言う通り……過労でこの事実、キサラは自身の部下が発した言葉を思い出していた。

「私が亮平を恐れている……か」

全てが終わわり、全てを受け入れた時、キサラは納得を得た……。

キサラが亮平と戦うまで、何故疲れを感じずに過度な戦いを続けてこられたのか？

それは、今のキサラの言葉通り、“恐れていた”からだ……。

亮平と戦う……弟分と戦う……“掌鬼”と戦う……躊躇われる……

……怖い……恐ろしい……

傷つきたくない……壊されたくない……

なら強くならなくちゃ……なら戦わなくちゃ……なら……戦い続けなきゃ。

思考の連鎖……いや、恐怖の連鎖、または“依存”の連鎖とも言えるであろう。

この連鎖に、キサラは無意識の内に囚われていたのだ。

これを受け入れた瞬間、キサラは涙が、笑が止まらなかつた……昔キサラは、亮平に対して、ある言葉を吐いた時が有るのだ。

それは亮平に、“ラグナレク”入りを反対された時……。

キサラは亮平に対して、こう言ったのだ。

『私は私の道を行く!』……と。

それがどうだ?

キサラは自分を嘲り笑いながら、心の中でそう呟いていた。

“自分の道に行く”、言葉にすれば非常に簡単な言葉だ……。

だが、今回の戦いを思い出していくと……。

最初はロキに唆そそされ、どうやって勝つか、考えても分からなかったために戦い続け。

多分あの時は、無意識のうちに心が折れかかっていたのであろう……敵になる筈の幼馴染を遊びに誘ったり、一緒に遊んで気分を落ち着かせたり。

多分あの時既に囚われていたのであろう……迫り来る50人の敵を一人で倒したり、部下達に頼らず、他の抗争も全て一人で片付けようとしたり……。

「なにが“私の道を行く”だ……」

結局、一番囚われていたのは私自身じゃないか……。

この事に気付いたのは、全てが終わってしまった、全てが過ぎ去ってしまった“今”であった。

「(それに、亮平と戦った事さえ……私は思い出せない)」

これだ……これが一番、あの時の言葉を裏切ったのだ。

亮平の話しによれば、あの時の自分は、自分の持っている力以上の動きをし、接近し、亮平に攻撃を与えたそうだ……。

その際、自分は亮平の顔に向って、ある事か“引っ掻き”を行ったそう……。

これは私の意志を超えている……私の意志を無視している、そんな感情を呼び起こすには十分な出来事であった。

だが、その話を横で聞いていた岬越寺先生が、話を聞いて落ち込む自分に声を掛けたのだ。

今回、かなり世話になつてしまった人物は、実は前まで私が追つていた白浜兼一の、武術の師匠だそうな。

この話を聞いた時、正直私は訝しげな視線を岬越寺先生に送つてしまつたが。亮平が「俺、この人に投げられた事あるよ」「や」「そういうえば、落とされた事もあるよ」などと抜かしていたので、多分、見かけによらず、相当な実力なのであろう。

そんな岬越寺先生が、私に対して言つた言葉が……。

『それは、簡単に言えば君がもつ“野性”に、君が吞まれてしまつただけだね』

この言葉には、私は妙に納得してしまつた。

実は今回のように戦いの最中の記憶が無いのは、初めてではないのだ……。

前は私が『ワルキューレ』だつたころの話だ。

その時、私は味方を逃がすために、大勢の男達に一人で戦いを挑んだのだ。

だが当然、以前の私では簡単に捕まつてしまふ。

しかし、何故かその後の記憶が無いのだ……。

記憶があるのは、男達の手が私に迫つてきた時の映像と、その後すぐに駆けつけて来てくれたフレイヤ姉が、何故か目の前で私を取り押さえている映像だけであつた。

つまり、その間に起こつた事が一切合財、記憶から抜け落ちていくのだ。

話によれば、フレイヤ姉が駆けつけて来てくれた時には、既に男達は私一人で倒していたそうなのだが……さっぱり覚えていない。

今回は、それに非常に似ていた……。

「う……うおッ！……」

「……？」

キサラが昨日の出来事を思い出していると、突然カーテンで仕切られた向こう側から、一人の男のものであろう声が聞こえて来た。

「（なんだ？ 私以外にも、この部屋にいたのか？）」

そう考えながら、キサラはベッドの上を移動しながら、カーテンの向こう側を確認するべく、ベッドの真横に垂れ下がっているカーテンに手を伸ばした。

するとそこには……。

「りよ、亮平！？」

そこには、キサラが寝ていたベッドと同系統のベッドに寝転がった、何故か上半身裸の、自身の幼馴染がいた。

どうやらこの部屋は、本当に保健室の様な構造になっているらしく。一つ一つのベッドをカーテンで仕切っていた様であった……。

「……ね、寝てるのか？」

突然現れた就寝中の幼馴染を観察しながら、キサラは驚いた表情をしていた。

そりゃあそうだ、朝見知らぬ場所で起床したら、いつの間にかに隣りには、幼馴染である異性が寝ていたのだから。寝起きの頭には、良い刺激になったようであった。

すると、キサラに観察されていた亮平が、何やら口を動かし始め

た。

「な……なんだ？」

「お……おばい……プル〜んプル〜ん」

ありえない！

まず始めに、キサラの心に浮かんだ言葉は、この言葉であった……。

そして次に浮かんだのは……明らかな殺意であった。

「亮平……」

キサラはゆっくりとした動作でベットから降り、亮平が眠るベットへと近づいていった……。

現在のキサラの格好は、入院患者が着る様な薄手の服のみで、他は何も着けていない。普段なら、欲情的な格好なのだが、この時は違った。

亮平のベットの横に到達したキサラは、ゆっくりとした動作で右足を半月を描く様に振り上げた。

そして、キサラの素足の踵が頂点に達した時、それは仰向けに眠る亮平の喉に、容赦なく振り下ろされた……。

「なんつう寝言ほざいてんだー！」

「ゴおッ!？」

エグイ音を響かせながら、キサラの踵は亮平の喉へとめり込んで行った。

流石の亮平もこれには参ったのか、喉に何か詰まらされた声を吐き出しながら、一瞬にして目を覚ました……普通の一般人だったら、正直殺人的に危険なモーニングコールだ。

「ガッ！ えグッ……」

「起きたか？ 良い夢みてたそうじゃないか？」

寝起きで喉を潰されかかった（普通なら潰れてる）亮平は、苦しそうに咳き込みながら、ベットの隣りに来ていたキサラを睨んだ。

「し、死ぬぞ！？ 流石に死ぬぞ！！」

「うるさいねえ……」

珍しく涙目で訴えかける亮平に、キサラは面倒臭そうに答えた。

「いや、嫌になりたいのはこっちだから！ 目覚ましに喉潰すなんて聞いた時ねえから！」

「ハッ！ 寝言がぶつ飛んでる奴には言われたくないねえ！」

「ね、寝言？」

亮平に反論されると、キサラがもともと鋭い目をさらに尖らせながら怒声を吐く。

その怒声の内容に、亮平は訳が分からんといった表情をし始める。

「何が“貧乳じゃ揺れねえ”だ！！ 殺されてえのか！？ このド助平野朗！！」

「どんな寝言だよ！？ 流石に言わないって！ そんなのは！」

言葉の捉え方は個人の自由だ……よって、キサラには先程の亮平が発した寝言が、ことう聞こえていたらしい。

だがいくら無意識でも、そんな失礼な事は言わないと信じ続けている亮平は、キサラに向って自らの思いをぶち当てる……なぜ、この様な言葉を吐いたのか？

それは、後の世になっても亮平自身、理解は出来なかった。

「だいたい、俺は貧乳だろうが巨乳だろうが関係ない！！俺が好きなのは尻だ！尻が『だまれこの変態野郎！！』フグッ！？」

自身の性癖フレイトを告げた亮平に、キサラはそのうるさい口に向って、右足による横蹴りをぶち込んだ……。

本来なら避けれるこの蹴りも、今の亮平にはなぜか『避けちゃダメ』という天の声が聞こえてしまったので、辛うじて閉じられた口にダイレクトでキサラの蹴りを受け止めたのだ。

なぜ閉じたのか？

それは、キサラは現在素足なので蹴った際、亮平の口の中にある歯で、その素足を切ってしまう恐れが有るからだ。変な所で優しい亮平であった。

「起きましたか？ 鬼島さん、南條さん？」

朝っぱらからバイオレンスな二人の空間に、ある女性の声が割り込んできた。

二人はその声の方向に目を向ける、だがそこを見るためには仕切りのカーテンが邪魔だったので、亮平は手を伸ばし、カーテンを開いた……そこには。

「風林寺さんか……おはよう」

「おはようございますわ」

「……ああ、あの白浜って坊やの女か」

そこにいたのは、この部屋の扉の前で、何時ものボディスパッツにエプロンを着けた風林寺美羽であった。

美羽は現在、ベットの上で身を起こした状態の亮平と、その横で

立ちながら美羽の事を目に入れているキサラの姿を確認した。

「南條さんも何とも無いようですね」

「あ、ああ……まあな」

どうやら先程のキサラが呟いた言葉は聞こえていなかったらしく、美羽はいつも通りの笑顔でキサラに言葉を掛けた。

だがキサラが美羽に向ける視線は、どこか射抜くような視線をしていた……。

それに気付いた亮平は「人の胸見ても大きくはならないぞ？」と言葉を出そうとしたのだが、言葉の途中でキサラに再度、喉を蹴られたことは言うまでも無いだろう。

しかし亮平はめげない、なぜなら先程から、ある一箇所を死守しているからだ。

いつもならキサラは亮平の股間を蹴り上げたり、股間を蹴りぬいたりしている。だが今回は違う、なぜなら先程から亮平は膝を上げ、なるべく股間は蹴り辛くしているからだ。

蹴りづらいと判断すれば、人は自ずと別の場所を蹴ろうとする……亮平はこの時、キサラに心理戦で勝利を収めていたのだ。なぜ、ここまでして股間を守り抜くのか……。

「（まずいぞ……風林寺さんまで来たら、ベットから余計に出れない……）」

男なら分かるであろう……思春期特有の、あの朝の現象だ。

亮平は現在、その現象と戦い続けていたのだ。

なるほど、敵は目の前にいる敵ではあらず、本当の敵は己自身なのだ、この時の亮平は悟っていた。

「そういえば南條さん？ 宇喜田さん達が、先程目を覚ましました



から、後で会いに行ってみてくださいわ  
「そうか、分かった、後で行くよ」

そんな事など露知らず、美羽とキサラは二人で会話を進めていく。怪我は無いのか、疲れは取れたのか、様々な質問攻めに、キサラも面倒臭がらずに答えていた。

だが亮平は別だ、早く出て行け……そして、その格好をどうにかしろと、心の中で必死に訴えかけていた。

先に言った通り、キサラの格好は薄手の物を着ているだけで、朝っぱらからやけに色っぽい。更に此処には、他人が見たら確実に目を奪われる程のスタイルを誇った美羽がいるのだ。正直亮平にとつては、これは何の拷問だと考えてしまっくらいであった。

「鬼島さんは、もう頭がボーっとしたりはしないのですか？」

すると、そんな葛藤をしていた亮平に、キサラと話していた美羽が声を掛けてきた。

この質問の意図は、昨晚この岬越寺接骨院を訪れた際、“キサラ隊”と過労で倒れたキサラを見送った後の出来事によるものが関係していた。

「頭？ おい亮平、頭がどうしたって？」

その事を知らないキサラが、亮平に先程とは違った心配そうな声を掛けてきた。

だがその質問には、扉付近でいまだに立っている美羽が答えた。

「昨日南條さん達が落ち着いた後なんです、その後、鬼島さんがボーっとすると言い出したので、秋雨さんがついでに診てくれたんですの」

「まさか、脳震盪でも起こしたのか？」  
「そのように……」

バツが悪そうに美羽が言う……。

そして心配そうに亮平を見つめるキサラに、事の経緯を話した。  
簡単に言えば、流石に人間が3tのトラックを止めるというのは、ただでは済まないという事だった。

「気にするなって、脳震盪なんてのは初めてじゃないんだ……別に気にする事も無いって」

「トラック生身で止めた癖に、なに威張ってんだお前？ お前が無理したせいで、他の人達に手間掛けさせたんだろ？が、反省しろ」

まるで本当の姉の様に、キサラは亮平に注意する。

その注意に、亮平は一度溜息をついてから「気をつける」とだけ言葉を吐いた。

「（あの鬼島さんが、本当に下手に出てますわ……）」  
「ところで風林寺さん、兼一のやつはどうしてます？」

珍しい光景に驚いていると、亮平が美羽に尋ねた。

「兼一さんなら、もう既に秋雨さんとランニング（タイヤ引いて、重りをつけて）に出掛けましたわ」

「そうか……大変だな、あいつも」

自身の友達の苦労が浮かんだのか、亮平は窓から漏れてくる光に目を細めながら、遠い所を見るようにして微笑んでいた。

するとキサラが、この場の会話が落ち着いたのを見計らって、亮平にある事を尋ねてきた。

「そういえば、ここって坊やが通う道場なんだよな？」  
「ん？ ああ、そうだよ、ここであいつは格闘技やってるんだ」  
「じゃあ、坊やが急に強くなったってというのは、ここの道場で鍛えられたからか？」  
「まあね、俺が見てても地獄みたいな練習をしてるよ……毎日」  
「あ、あははは……」

梁山泊の事を聞かれた亮平は、とりあえず自分が分かる事だけを話した。

傍らでは、美羽が気まずそうに苦笑している。  
そんな二人の様子を見ながら、キサラは何かを思いついたかの様に口を開いた。

「なら、凄腕の教え手がここには居るって事か……よし」  
「凄腕ってか常識はずれだが、どうしたんだ急に？」

「おい風林寺とか言うの、私にその凄腕の教え手を紹介してくれないか？」

「ほえ？ 別に構いませんが……」  
「急にだな……」

別にキサラの言葉に、二人は驚きはしない。  
美羽は武道家であるために、向上心を持つ者のことは理解している。

亮平は昔からの付き合いなので、少しは想像していたが、昨日の今日なので、今は急すぎると考えていた。

「すまないね……それで、どんな先生がいるんだ？ 坊やは確か、空手の他にも色んな武術をやっているって聞いたけど、テコンドーはあるのか？」

美羽から了承を得たキサラは、一度頭を下げた後に、嬉しそうな顔をしながら美羽に向って質問を投げかけた。だが美羽は若干気まずそうな表情で、キサラの質問に答えた……。

「ごめんなさいですの……テコンドーを教えられる方はいらっしやいませんか」

「そうか……いや、すまないな、急に無理言い出して」

その答えに、キサラは先程までの表情を曇らせながら落ち込み始めた……。

人間、長い間続けてきた事には愛着が沸くものだ……それはスポーツ然り、格闘技然りだ。

しかし、そんな幼馴染の姿を見かねたのか、亮平が口を開いた。

「だったら、そこにいる風林寺さんと戦ってみれば？　かなり強い

ぞ、この女？」

「……そうなのか？」

亮平から知らされた情報に、キサラは確認を取るために視線を美羽に向ける。

その視線に美羽は「かなりは少し言い過ぎですが……多少は」とだけ答えた。

この答えに、キサラは苛付きを隠せないでいた……。

キサラは気付いているのだ、自分がいまだに亮平から本当に“強い”と思われていない事を。

なのに目の前の牛乳は、今亮平から直接“強い”と言われたのだ……。

これは認められない……キサラは、自分より巨乳の女が嫌いなのだ。その事によって、益々苛付きを露にしていくな。

「なら、これから組み手でもやるうじゃないか？ 私は直ぐにでも出来るぞ？」

「構いませんわ　では、家事がそろそろ一通り終わるので、その後には致しましょうか」

「ああ、なら先に体動かしてくるかな……亮平、付きあいな！」

「ははは……（やべえよ、変なスイッチ入っちゃったよ……そして愚息よ、なぜ更に猛り始めるんだ？）」

美羽の了承を得て、キサラは病み上がりだと言つのに気合を入れていく……。

そのキサラの気合を見て、亮平は乾いた笑い声を出し、未だ問題が取り除けない事に意気消沈した。

### 【美羽VSキサラ】

その後、残った家事を片付けるために美羽は二人から去っていった。

そして、取り合えず組み手の前に体を温めておこうと考えたキサラは、何時もの服に着替えた後、何やら様子のおかしい亮平を急かしながら梁山泊の道場へと来ていた。

「しかし遅いなあいつ……何やってんだ？」

急かしたは良いものの、当の亮平は着替えに手間取っているのか？  
未だにキサラが居る道場には姿を現さない……。

「（仕方ないね、先に動いてるか……）」

いつまでも待つてはられない、そう考えたキサラは、亮平が来るまでの間、一人で動く事にした。

「シッ！」

しなやかに弧を描きながら、キサラの廻し蹴りが空を切る……。

そして、その廻し蹴りを振り抜いた勢いそのままに、一度回転しながら今度は逆の足で踵に打点を置きながら“後ろ廻し蹴り”を空に放つ。

「（体は動く、悪くない……）」

しなやかに、軽やかに、そして勇ましく体を流していくキサラは、動かしながらも自身の調子確かめていく……。

昨晚、過労で倒れた筈だが、どうやら小さいオッサンの針が本当に効いていたようであった。

そしてキサラは、右足を半月に描きながら、自身の体の頂点に踵を据える。

「フッ！」

据えられた踵が、地面である畳に向け一直線に振り下ろされる……。

振り下ろされた踵が地面と衝突するか否や、キサラは振り落とされた踵の勢いを“ピタッ！”と止め、今度はその右足を軸足にしなが  
ら、クルッと左に回転しながら、前方に左足による“後ろ蹴り”を蹴り出した。

その蹴りは空を切るも、蹴り出した瞬間に風切り音を辺りに響かせた。

「（キレもそれほど落ちていない……凄いなあのオッサン、殆どベストと変わらない状態だ）」

この時キサラは、あまりの調子の良さに、今なら誰にも負けないんじゃないかとまで考えていた。

するとそこに、今までキサラを待たせていた張本人が到着した。

「ごめんな」 “色々” 手間取っちゃって……」

「遅いぞ亮平！ ちよつとそこに立ってる……！」

“色々” と言ったが、実際には自然に身を任せ……以下省略。

到着を果たした亮平は、道場で一人軽やかに蹴りを出し続けているキサラの指示通り、シャドーを続けているキサラの前方へと身を移動した。

「罰だ！ サンドバックになれ！」

「……へ〜い」

バチインツ！！！！

キサラの前へと移動した亮平にさっそく、キサラの右上段回し蹴りが自身の左頬を捉えた。

キサラの足の甲と、亮平の頬の皮膚が衝突する音が、弾けるように辺りに響き渡る。

「シッ……！」

ドスツ！！

今度は腹に、キサラの“後ろ蹴り”が直撃する。  
だが亮平は微動だにしない、まるで一本の柱の様に、まるで巨大な樹木の様に……。

そんな状態が5分は続くと、打ち疲れたのか、キサラの息が丁度良い具合に切れてきた。

「おい……」

ドゴー！

「そろそろ……」

ガゴ！

「良いんじゃないか？」

ドドドガー！！

「おい！」

無抵抗に蹴られ続ける亮平は、汗を滴らせながら体を動かし続けるキサラに向って声を張り上げた。

するとその声に気付いたのか、キサラが肩を上下させながら動きを止めた。

「フ……そうだな、そろそろ良いか」

「当然の様にやってるけど、人をサンドバック代わりにするのはどうかと思うぞ？」



当然の様にキサラは、その亮平の言葉を無視する。

「汗も丁度いいくらいに掛けたし……」

「すみませ〜ん、お待たせしましたですわ!」

亮平の事を見事スルーしたキサラに、家事から解放された美羽が戻って来た。

美羽の格好は、いつも兼一と組み手をする際に着る道着の上だけに、これまた何時も通りにアンダーに着る物もいつものボディスパッツだ。

「丁度良い所だよ……」

「直ぐに始めますか?」

そんな美羽に、キサラは鋭い視線を有る一点に向ける。

そう……胸だ、道着の間から見える谷間だ。

このキサラの様子に気付いた亮平は。

「（完全に嫉妬してるよな……あれ）」

そして視線を向けられる美羽は。

「見たところ良い具合に暖まっている様ですし、私も準備は万端ですわ」

完全に気付いておらず、そのままキサラの視線をスルーした。

「ああ、直ぐに始めようか……この牛乳娘……!」

「まッ!? う、牛!」

牛乳と呼んだと共に、キサラは驚く美羽に接近をする。

「でかけりゃ良いってもんじゃねえぞッ!!!」

「(この人、想像以上に速い!)」

ある意味機先を制したキサラは、容易に美羽を自身の蹴りの間合い入れた。

間合いに入ったのと同時に、キサラは前に出た勢いそのまま、後ろ足の左足で地面を踏み込み、前足である右足の側面を未だ構えも取っていない美羽の腹に蹴り出した。

「シッ!」

通常なら、この“横蹴り”の蹴り方は予想以上の伸びを見せ、相手の距離感を惑わすもののだが。

風林寺美羽は通常の格闘家ではない……。

ヒュン!

「消えた!?!」

機先を制したはずの蹴りが空を切った瞬間、キサラの視界から美羽の姿が消えた。

「上だ! キサラ姉ちゃん!!!」

「!?!?!」

亮平の言葉に反応したキサラが、蹴り出した足を引きながら上を見る。

そこには、空中で舞いながら己の事を見下ろす美羽の姿があった。

「くそッ！」

キサラは短く毒づきながら、宙を舞っている美羽に向けて、一度その場で体を回転させながら、先程とは逆の左足で天を貫くかの様な“後ろ蹴り”を蹴り放った……が。

「やッ！」

その真つ直ぐに美羽へと迫った蹴りは、美羽が体を反らす事で避けられ、避けられたと同時に出された変則的な後ろ蹴りで打ち払われてしまった。

この衝撃で、キサラはバランスを一瞬だけ崩しかけてしまう。

だが、崩したのは一瞬だけで、直ぐに体勢を立て直し、正面へと着地した美羽からすぐさま距離を取った。

「（なんだコイツの動きは！？ 普通の飛び技じゃ無いぞ！？）」  
「いくら鬼島さんの幼馴染と言っても、流石に牛と呼ばれてはお頭に来ましたわ！」

今までに見たことの無い滞空時間と舞うような動きに、キサラはまさに度肝を抜かれていた。

本来の飛び技は、ちよつとした相手の行動で目標を失い、見当違いの場所を攻撃してしまったり、逆に着地した所に相手に合わされてしまったりと、正直言つてリスクが高すぎる技なのだ。

だが、目の前の女はそんな些細な事など関係無いかのように、飛び技で相手に合わせ、飛び技で相手を牽制したりしているのだ……正直、格闘技の常識を覆した戦い方だ。

そんな常軌を逸し戦い方をする相手が、キサラに迫る。

「ちッ！」

前に出てくる相手を止めるために、キサラは一番リーチを稼げる技、右足による“前蹴り”を迫り来る美羽の顔面に向けて蹴り出した。

だがその蹴りは、美羽が急停止し、体を後ろに逸しただけで避けられてしまう。

しかし予測の範疇だとばかりに、キサラは前蹴りを直ぐには引かず、逸らされた美羽の胸部に向けて“ネリチャギ（踵落とし）”を落とそうとした。

シュドッ！

「痛ッ！？」

振り落とした踵は、美羽が逸らした状態のまま、上半身を振りながら横に向けて回った事によって空を切ってしまう。

また、振り落とされた踵は勢いを止められず、地面である畳と激突してしまう。

そして、美羽が避けたのは確かに“横”なのだが……。

「避けながら近づくか……」

“横”は“横”でも、キサラの蹴り出された足の直ぐ外側だ。

美羽はまるで新体操でもするかのように、蹴り出された足のラインに沿うようにして、反り返った胴体を正しながら“蹴り主体”のキサラに接近を果たした。

そして……。

「懐がお留守ですわ！」

美羽は回転した勢いをそのまま右肘に乗せ、がら空きになっているキサラの右脇腹……つまり肝臓<sup>レバー</sup>目掛けて、背中の筋肉を引くようにして、右肘の硬い骨の部分を打ち込んだ。

ズドッ！

「ふぐツ！？」

肝臓<sup>レバー</sup>を肘で打ちぬかれたキサラは、肺に溜まっていた大量の空気を吐き出しながら、地面である畳へと蹲<sup>つづくま</sup>ってしまった。

「う……あう……ぐ……」

あまりにも綺麗に入ってしまったために、キサラは畳みにおでこを擦り付けながら蹲り、途切れ々に息を苦しそうに吐き出しながら打たれた脇腹を押さえていた。

「ああ！ すみませんですわ！ 思った以上にできるもので、つい力が入ってしまいましたわ！」

その苦しそうに悶えるキサラの姿に、美羽は先程の戦いからは考えられないほどに狼狽する。

だがそこに、今まで観戦モードに入っていた亮平が近づいて来た。

「どうよ？ 言ったとおり強かったろ？」

「く……そがぁ……見るな……」

「鬼島さん？」

亮平は蹲るキサラを見下ろしながら問いかけた。

しかしキサラ自身、亮平の問いかけに答える余裕は無い。

「ふん……仕方ないな」

溜息を吐きながら亮平は、蹲るキサラの背中を手で摩り始めた。亮平自身これが効くのかどうか分からないが、取り合えずはやって置こうと思ったのだ。

「……………ッん…ふ…ふう〜」

「どうだ？ 少しは楽になったか？」

実際亮平の摩りが効いたのかは分からないが、徐々にだがキサラの呼吸が整い始め、ようやくといった感じで深く息を吐けるまでに回復した。

「ふう〜……もういい、手をどける」

「そうか、なら立てるか？」

そう言って、亮平はキサラの背中から手を退けながら、右手をキサラに差し出す。

キサラは差し出された手を一瞥するも……。

パシンッ！

「南條さん!？」

その差し出された亮平の手を、キサラは無言で打ち払ってしまった。

「おいおい……………」

「ほっといてくれ!」

「あ！ 南條さん!……!」

亮平の手を打ち払ったキサラは、蹲っていた畳から一瞬ふら付くも立ち上がり、そのまま逃げるような足取りで道場から立ち去っていつてしまった。

「行っちゃいましたわ……」

「ふん……相変わらず、負けず嫌いだね」

「私が行きましようか？」

「いや、俺が行くわ……」

そう言っつて亮平は、キサラの事を心配する美羽を他所に、立ち去つていつてしまったキサラを追いかける事にした。

### 【負けず嫌い】

キサラを追いかけた亮平は、梁山泊の庭隅っこで目的の人物を見つけた。

「くそ！ くそ！！」

キサラは亮平に見つけられた事など気付きもせず、庭隅っこの壁をひたすら蹴飛ばしていた。

「（一発も入れられなかったのが、よっぽど悔しかったんだろうな……）」

そんなキサラの様子を観察しながらも、亮平は別に気付かれても構わないといった足取りで、壁をいまだに蹴飛ばし続けている幼馴染

染へと近づいていく。

「くそ！ あの牛乳めえ！！ このー！」

「あゝ……あまり人様の家を壊さないでくれ、謝るの多分俺になるから」

「な！？ 亮平ー！」

後ろから声を掛けられ、漸く気付いたキサラは。急いで声がした方に振り向きながら、驚きの声を上げた。

「そんなに驚かなくても良いだろ？ とにかく、相手してもらった風林寺さんに挨拶もしないのか？」

「……ふん」

振り向いたキサラに、とりあえず亮平は先程のことを話し始める。だが、当のキサラは、そんな亮平の言葉など無視するかのようになり、顔を俯かせてしまった。

「負けて悔しいのは、付き合いが長いから分かるけどさ……とりあえず、組み手をやってくれた相手に対して礼をしないのは、相手に対して失礼なんじゃないのか？」

「……」

亮平は普段、兼一と美羽の組み手を見ていたので、その程度の常識は理解できていた。

だがそれでも、キサラは顔を亮平に向けようと、頭を上げようともしない……むしろ、どこか身体を振るわせえいる様にも見える。

「今回は負けでいいじゃないか？ 次に勝てればさ？」

「……うるさいー！」



するとキサラが、突然辺り一帯に怒鳴り声を響かせた。  
それと同時に、亮平へと向けられた目には若干の涙が浮かべられていた……。

「お前になんか分かるか！！ 最初から強いお前になんか！！ 私  
は今まで、お前やフレイヤ姉に認めてもらうために努力して来たんだぞ！  
それがなんだ！ お前と戦えば記憶は無い！ さっきの牛乳と戦えば手も足も出ない！！」  
「……………」

目に涙を浮かべながら捲くし立てるキサラに、亮平は一瞬たじろぐも、直ぐに正面で叫び続けるキサラを見据えた……。

「なんなんだよ……努力つて何なんだよ！ お前には分からないだろうな！  
一度も努力しないで、そんな誰もが羨む強さを手に入れて！ さぞ  
気持ちが良いだろう？ 私達みたいな、努力しなきゃ強くなれない奴等  
を潰すのがさ！！ ケホッ！」

あまりに叫び続けてしまったために、キサラは苦しそうにむせ返ってしまっ……。

すると、むせ返ったせいでキサラの叫びは止まったのだが……。

「ハア……ハア……お前に……」

「……………」

「お前になんか分かるかよお……………」

「ッ！？」

おそらく初めてであろう……キサラが目の前で、自身の事を見据える亮平に顔を向けながら、盛大に泣き出してしまったのだ。

これには流石の亮平も驚いた。

普段強気のキサラは、その普段通りなかなか弱音も吐かない、我慢強く、精神的に強い女性なのだ。

それが目の前で盛大に泣いている……亮平は内心軽いパニック状態に陥っていた。

「私は、お前に認めてもらいたかったんだ……ひっぐ！　なのにお前は、あんな牛乳の事を“かなり強い”とか鼻厘するし……ひっぐ！　なんでだよ！　幼馴染だろ！　私の方を鼻厘しろよ！」

「いや、キサラさん？　普段のアナタから戻ってきて……うるさい！ー！』……はい」

とにかく落ち着かせようと声を掛けようとすると、キサラが声を張り上げ、それを阻止した……。

「どうやら、この話しは聞き続けなければならないようだ……。その事を理解した亮平は、取り合えずキサラの話しを聞き続ける事にした。」

……

……

……

…

あれからどれ程の時間が経ったのだろうか……。

キサラの話しを聞き続けていた亮平は、既に精神的に来ていた。

なぜなら、キサラの叫びの中には、もはや今回のこと関係ないじ

ゃん？　という亮平に対する文句も含まれていて。やれ「あつくる

しい」だの、やれ「だから鷹島に相手にされない」だの……更には、「お前の携帯に入ってた女の連絡先、全部消してやった」だの。正直、既に亮平は先の言葉通り限界を迎えていた。だがその甲斐あつてか、キサラも大分落ち着いたようで、既に涙も止まり、嗚咽もなくなっていた。

「ハア……ハア……それから」

「もうやめて……御願いだから、いやマジで御願いだから……」

それでも尚、亮平に言葉をぶつけようとしていたキサラに、亮平は身体を90度に曲げるぐらいの勢いで、目の前で荒れ狂う幼馴染に頭を下げた。

そんな様子を見て、キサラは「ふん！」とだけ言いながら、亮平から再び背を背けてしまった。

「……なあ、亮平？」

「……なんだ？」

すると、亮平に背を向けてしまったキサラが、普段の彼女からは信じられないほどの弱気な声で、後ろに立っている亮平へと声を投げかけた。

そのキサラの声に、亮平はなるだけ優しい口調を意識しながら答えた。

「私がテコンドー始めた理由、覚えてるか？」

「ああ、覚えてるぞ……確か男より強くなりたいから始めたんだろ？」

「そうだけど……本当はな、もう一つあるんだ」

「もう一つ？」

「それはな……お前みたいになりたかったんだよ、私は」

「俺みたいに？」

このキサラの言葉に、亮平は若干呆けたような声を出してしまう。自分みたいに……亮平には、この言葉が良く理解できなかったのだ。

そしてキサラは、話しを続ける……。

「お前と私が最初に出会ったとき、あれは確か、私が近所の餓鬼と慣れない喧嘩をした時だよな？」

「ああ、覚えてるけど……」

「あのとき、私……負けちゃっただろ、さっきみたいにビービー泣いちゃってさ」

「そうだな……」

「そしたら、いきなりお前が出てきて『女殴って勝ち誇った顔してんじゃねえよ』って言って……」

「キサラ姉ちゃんを泣かした奴をぶん殴った……」

「だけど、あの時のお前は、今よりも力加減が出来てなくて……」  
「相手の餓鬼の顎砕いちゃって……懐かしいな、この話し」

二人は本当に当時の事を懐かしむかの様に、話しを続けた。

「あの後は問題になっただらしいけど……それよりも私は、お前の強さに興味が行ってたんだ。自分を負かした相手を、たったの一発で潰したお前の“力”に……」

「そうなのか？ 知らなかったわ」

「そりゃそうだろう、今日始めてお前に話したんだ……」

そう言いながら、先程まで亮平に背を向けていたキサラが、再び後ろに立っていた亮平に振り向いた。

その顔は、今の亮平と同じ、どこか懐かしむような顔をしていた。

「それからなんだ、私がお前に近づいていったのは……」

「なんだか自傷気味な台詞だな、その“近づいていった”って？」

「実際そうなんだからしょうがないだろ？ それにお前に近づいてから、色んな信じられないものを見てきたんだ……ある時は、近所の子供に噛み付いていた大型犬を殴り倒したり、ある時は弟をやられた報復できた、地元の中学生や高校生を尽くり返り討ちにしたり……」

「あははは、やったな〜確かそんな事も……」

「でもさ、お前と付き合っついていく内に、私はある事に気付いたんだ

……」

「ある事？」

「お前はただ強いだけじゃないんだって……そんな事さ」

キサラは空を仰ぎながら、言葉を続けた……。

その口調には心なしか、楽しげな感情が含まれていたように感じた。

「喧嘩するとき、いつもお前は絡むんじゃないやなくて、絡まれてからだし。たまに困ってる女の子や、年配の人を助けたりするし……そうかと思えば、いきなり近所の女の子の尻触って泣かせたりするし、ムカつく爺がいたら空襲だ！ とかいつて、不謹慎な馬鹿かまして悪戯したりするし。さらには近所のOLの尻触って、悲鳴を上げさせたりするし」

「おい、最後の方マイナスばかりじゃねえか！」

思わず突っ込みを入れる亮平を無視しながら、キサラは楽しそうに話し続けた。

「だけど私は、そんな自由なお前みたいになりたいと思ったんだ……」

…助平で馬鹿なのは御免だけど、強くて、優しくて、自分の筋を確り通してるお前みたいになりたいって」

「……」

「だけど、今の私じゃ程遠いな……自分に負けて、相手にも負けて、部下に心配までされて、終いには情けなく泣き喚いて……全く」

そう言いながら、キサラは被っていた何時もの帽子を深く被り始め、目の前の亮平から表情を隠してしまった……。

これは多分、今の顔を弟分である幼馴染に見られたくは無かったのだろう。

「全く、私はつくづく弱い……嫌になるくらい弱い……」

「……勘違いするなよ、キサラ姉ちゃん？」

「何がだ？」

今まで一人で喋り続けていたキサラに、亮平が「ふん」と溜息を吐きながら口を開いた。

「俺だって、姉ちゃんが知らない間に、自分を抑えられなかったり、自分が決めたルールを守れなかった時だってある……俺はスーパーマンじゃない、完璧超人でもない、ただのクソ餓鬼さ。姉ちゃんが思ってるほど、俺だって楽はしていない」

それは以前、東戦で相手を壊してしまった事による後悔から来た感情……。

あの時、亮平は自分が“手加減”を出来ない事に悩んでいた。力有る者が誰しも、己が持つ力を存分に振りたいとは思っていない……もし、それに囚われたりでもしたら、それはもはやただの“獣”だ、人ではない。

人と言うのは理性があるから人と言う、考える事が出来るから人

と言つ。

確かに、自身と同等に戦える好敵手ライバルの存在に、亮平も憧れた時はあつた。だが実際に同等の人間と戦つたとき、亮平は理性を失い一瞬ではあつたが“獣”になつてしまつた。

亮平は自分では気付いていないが、無意識下の内に、その“獣”を否定している……。

何故なら、本来、この体の主である筈の自分の意思から、他の自分に体を乗っ取られてしまうからだ。

あの時、言外には言わなかつたが、亮平は自分が自分では無くなる様な、気持ち悪い心情に悩まされていた。

それはそうであるう……戦いを“自由”と言つた男が、強さを“我侷”と言つた男が、皮肉にも自由である筈の、我侷である筈の“自分”を見失つてしまつたのだ、これには亮平も、今回のキサラ同様に自分が嫌になりそうであつた。

そんな心情を他所に、亮平はキサラに話しを続ける。

「それに、俺みたいになりたいって、それは止めた方が良い……」

「な、なんでだよ!？」

「それじゃあ何時まで経つても、姉ちゃん俺に本気を出させられないからだ」

「ッ!？」

亮平の言葉に、キサラは帽子を深く被りながら、驚きの声を漏らしてしまう。

今まで自分が目標にしてきたものを否定された……それも、目標であつた者に。

だがそんなショックを受けるキサラを、今度は亮平が無視しながら言葉を続けた。

「分かりやすく言えば、俺になりたいじゃなくて、俺を“超えたい

”ぐらいの意気込みじゃなきゃ、俺は倒せないって事かな……だいたい、俺は最初から超える気が無い奴には本気を出す気も無いし”

「……そうかい、お前を“超える”ね……ハハ、正直思いつかなかつたよ、これっぽちも」

「だったらこれから思えば良い、俺はキサラ姉ちゃんには、もっと強くなつてもらいたいから」

「亮平……」

「俺は、戦ってるキサラ姉ちゃんはカッコイイと思ってるし……それと、羨ましいとも思ってるから」

羨ましい……実は亮平、この時、本当は「綺麗だと思ってる」と言おうとしたのだが、恥ずかしいので自重したのだ。

だがその言葉に、キサラが反応する……。

「お前が、私を羨ましい？ どういう事だ？」

「そのままの意味だ……その……」

「どうしたんだ急に？」

言いよどむ亮平を不審に思ったのか、漸く落ち着きを取り戻したキサラが深く被っていた帽子を上げながら、亮平へと近寄ってきた。そんな身長差のせいで、下から心配そうな視線を送ってくる幼馴染に、亮平は珍しく赤面する。

まさか面と向って「綺麗だ」とは、本来の亮平なら口が裂けても言えない。

だがこの時は、雰囲気流されたのであろう……亮平は、恥ずかしがりながらも、消え入りそうな声で喋り出した。

「……だと……」

「何？ 聞こえないんだよ？」

「きれ……だと……」



「ああ？ はつきりと言えよ、らしくないなあ……」

このキサラの言葉に、亮平は覚悟を決めたのか、その眼つきが悪そうな眼を「クワツ！」と見開きながら、言葉を発した。

「……綺麗だと思ってるんだよ！ 姉ちゃんが戦ってる姿が！」

「なッ！？ わ、私が綺麗！？」

「そうだよ！ 俺じゃあんな風に魅せれないから羨ましいって言うんだ！ 言葉通りだろ！？」

もはや完全に開き直った亮平の叫びに、キサラは驚きながらも、先程の亮平よりも赤面をしてしまう。

「お、お前が私を……綺麗だつて？」

「そうだ、その……勘違いするなよ？ 別に戦ってる時だけじゃないからな？」

「え？ それって……」

先程までの空気など何のその、二人の周りには甘酸っぱい空気が流れ始めていた……経緯の方は、少し特殊だが。

そして二人は意味も無く、見つめ合い始めてしまう……。

甘酸っぱい空気、二人の見詰め合う男女……今二人は、青春真っ只中に居た。

「あれ？ 亮平君、何してるの？」

だが其処に、秋雨とのランニングから戻って来た兼一が割って入って来たのだった……。

亮平には、まだ春は遠いのかもしれない。

## 【エピソード】

キサラを何とか連れ戻した亮平は、とりあえず美羽に謝らせてから、キサラを“キサラ隊”が待つ部屋へと送っていった。

そこには宇喜田や白鳥といった者達や、亮平が名前も知らない者達もいる、なので……。

「とりあえず、ここからは姉ちゃんの問題だ……俺はここでまってるよ」

「分かった……さっきはありがとうな」

そう言いながら、二人は宇喜田達がいる部屋の扉前で別れようとした。

すると、思い出したかの様に、キサラが赤面しながら去り行く亮平の背中に向かって言葉を投げかけた。

「あと、さっきの事！ 他の奴等に話すなよ！！ 話したら分かってるだろうな！！」

「ハハハ！ あんな珍しい姉ちゃんは、俺だけが知ってれば良いんだよ！！」

「ちょ！ おま！ 分かってんのか！？ おい！！」

だがそのキサラの警告も、亮平はサラッと流しながら何処かへと消えていってしまった。

「まったく……昨日からアイツ、はしゃぎやがって」

去り行く亮平を見据えながら、キサラは本当にしょうがないといった、本当の姉の様な口調で呟きを漏らした。そして、キサラは視

線を亮平から、近くにある扉へと向けた。  
既に、これからの事は決まっている……。  
今回の騒動は、自分の弱さにあった。  
自分を貫き通せないから起こった……。  
自分が信じる“強さ”を見失ったから起きた……。  
なら決まっている、これからは改めて、その自分が決めた“強さ”  
を確りと持ちながら歩んでいくと。  
決めているんだ……。

ランニングを終えた兼一は、今日たまたま道場に訪れていた妹の  
ほのかと話していた……。

「で、お兄ちゃん勝ったんだ？」

ほのかは居間で、アパチャイとしぐれを交えたオセロの最中だ。  
そのほのかの言葉に、兼一は意外とスッキリしない顔で答えた。

「まあね、でも殆どは亮平君や美羽さんがやっつけてから、正直兄  
はそこまで活躍はしなかったかな」

「ふん、そうなんだ」

兼一は現在、絶賛秋雨考案の杭上腕立て最中だ……。

「兼一君？ 稽古中に話しとは余裕だね、最初からやり直し」

「ええ〜!!!？」

「クスクス 兼一さんたら」

その不幸な様子の兼一は、先程から亮平と共に兼一の稽古を見学している。

「だけど兼一よ？ お前等が来てくれたお陰で怪我人も運ぶ事が出来たし、俺も“トラック”を止めるのに専念が出来たから、実際助かったよ、本当に……」

「亮平君……」

「稽古中によそ見かい？ 余裕だね、あと100回追加ね」  
「えええ〜！！？」

今日も平和な梁山泊の風景……。

そんな中、亮平はある事を気に掛けていた。

「（今回の騒ぎは、流石に警察沙汰は免れないか……）」

亮平の心配も当然だ。

何故なら、立ち入り禁止の筈の廃病院で、若者達が集団での喧嘩騒ぎを起こし。多数の怪我人や、明らかな速度超過で公道を走りぬけた3トトラック、更には未成年による（ロキの偽者による）飲酒運転。また極めつけには、防げたとはいえ、ほぼ殺人未遂の様な交通事故に、そのトラックを横転させたまま帰って来ってしまった事……どう考えても、いずれは学校にまで連絡が行くであろう。

そうなったらアウトだ……亮平はそう考えていた。

「（幸い、新島が上手く証拠を消してくれたそうだが……流石にトラックは無理だったみたいだしな）」

この情報は、先程兼一から聞いたものだ。

だがそれでも不安は消えない……ならばと亮平は、ある事を決心した。

「（これは……“実家”に一回戻らないとダメかな、やっぱり）」

実家……亮平はなるべく此処には戻りたくないのだが、今回は仕方ないと割り切る事にしたのであった。

この時の亮平は知らなかった……。

そこでまた、亮平にとって、新たな面倒臭い騒動に巻き込まれる事になるといふ事を……。

### 第三十八話

### 事後処理とこれから（後書き）

はい、次回は実家絡みの話です……どんな家なんだろうかね？  
鋭い人は既に見抜いていると思います。

どうせ……だろ？　くだらねえと。

今回は正直難産です、ですので後半部分が大分自信ないです。

“こつやれば良くなるよ”や“こつすれば辻褃が合うよ”などのアドバイスをあれば、気軽にお申し付けなさって下さい。

では、次の話しは亮平の実家絡みの話です。  
多分、今回のキサラ編（宣戦布告してから）よりも長くなるかもしれません。  
その辺をご了承頂けると幸いです。  
ではノシ

岡村さん復活おめでとう……………！！！！！！！！

鬼島亮平 設定（三十八話時点）（前書き）

これは亮平の成長記録です……。

## 鬼島亮平 設定（三十八話時点）

名前：鬼島亮平おにじまじやうへい

年齢：16歳

髪：黒の髪を後ろに軽く流している（ちょっとしたオールバックになっっている）。

初期の頃はそこまで長くは無かったが、最近少しだけ伸びてきてしまった。

目：純粋な日本人の目そのものだが、眼つきは初見には怖がられる。しかし、慣れてしまえば正直優しそうな目である（これは体格のせいだと、本人は言っている）

身長：187cm（少し伸びた）

体重：106kg（増えた）

（初期のころは、筋肉の質が量だったが、現在では質が変わったため、本来通りの重さに戻ったとも言える）

体脂肪率：6〜8の間を行ったり来たりしている。

体格：初期よりも大分引き締まったが、正直太いものは太い。

（刃牙のジャックの様な体系をしている、筋肉の構成はそれ以上）

腕の形：H腕型

好きなもの：鷹島千尋・キサラ弄り・味が濃い食べ物・姫野の弁当・兼一のリアクション・女性のお尻

嫌いなもの：理不尽なキサラ・やたら“よいしょ”してくる男・梅干・気取ったイケメン

以下、亮平の所有するスペック紹介

握力：計測不能（むしろ学校の計測機の握り部分を引き千切ってしまった）

100m走：体育の教師と陸上の顧問から



「奴が本気で走れば、陸上競技の歴史は一瞬にして覆る」と言われている。

股関節というより、下半身全体が異常に柔らかく、フレイヤから“ルーズジョイント”と判断されるほどの柔軟性を誇っている。

だが逆に、上半身のほうは欧米人の様な、円い胸部をしているのせいで（胸骨や肩甲骨の胸周りの骨格が、通常の日本人よりも膨らんでいる状態）、肩関節の位置が胸よりも少しだけ後ろに位置しているのも、通常の日本人よりも脱臼しやすい構造をしている。

（実際には、肩の関節も柔らかいのでそこまで起こることではないが、あくまで通常よりもの話しだ）

格闘技経験は基本的に無し、あつたとしても体育の柔道だけなのだが、これは最初の授業で教師を病院送りにしてしまったために、特に何も教わってはいない。

基本勉強は、ある程度出来る方なのだが、安永先生曰く「常に違う事に集中している」と言われており、その集中力の無さを指摘されている。

また、体を動かす事に関しては、見本さえ見れば大抵は真似できてしまう。

なお、格闘技などの技術は、それほど難しい物でなければ見ただけで出来るが、難度の高い、長い研磨が必要な技は、喰らったりして経験しなければ、正確な打ち方や使い方、タイミングが真似できない。

（この辺はご都合主義である！）

鬼島亮平 設定（三十八話時点）（後書き）

腕の形は、X腕は猿腕と呼ばれ、O腕は肘が外に広がった形のことを言います。

亮平のH腕は、真っ直ぐに伸びている確りとした腕です。

また、X腕は脇を絞めてのアームカール、H腕は脇を広げてのアームカール。

O腕はシャフトを使うより、ダンベルカールの方が鍛えやすいとされています。

（筋肉は捻転すればするほど、可動域が広くなり、それだけ使い続ける事が出来るので、肘を捻転させる事が出来るやりかたが、自分にあつた筋トレ方法なのだ）

この説明は、腕……つまりアームカールを前提として説明していません。

第三十九話 PV102万、ユニークアクセス9万突破！！そして、今回が

漸く始まりました、亮平の実家話のプロローグです。

「で〜ここは〜」

「（だ〜眠くなる……これは眠くなる）」

高校時代というのは、過ぎ去ってしまった者には懐かしく、出来るならば戻りたいと思う時代だ。

だが現役の高校生はどうか？

それは人それぞれだが、こと鬼島亮平という男にとっては、正直  
退屈この上ない事なのだ。

「この文章からして〜……この主人公は〜」

「（だが眠れない……腹減った〜……）」

現在、亮平は昼休み直前の国語の授業を受けている……担当は、  
以前亮平と生徒と教師の禁断の愛を、文字通り“演じた”小野京子  
だ。

亮平にとって、この小野先生の授業は心地よい子守唄の様に聞こ  
えてしまうのだ。

原因は彼女の喋り方なのだが……こればかりは仕方が無い、抜け  
ているものは抜けているのだから。

そして今、亮平は眠気と空腹に攻められながら、なんとか耐えよ  
うと机に突っ伏している。

前の席には、いまだこのクラスは席替えをしていないので、以前  
と変わらず風林寺美羽が座っている。

「（鬼島さん？ 具合でも悪いのですか？）」

すると、前に座っている美羽が、後ろに突っ伏している亮平に振

り向きながら、周りに聞こえないように小声で声を掛けてきた。

「（いや、腹減ったのと眠いのと……俺に対する風林寺さんの愛がたらないから……）」

「（大丈夫そうですね）」

最近亮平は色んな事で自重をしない……。

なので、このような絡み辛い台詞を平気で吐くようになってきたのだが……美羽は梁山泊で、馬剣星というちっさいオッサンに鍛えられているので、この亮平の言葉を華麗にスルーした。

「（世知辛いね……世知辛いよ……最近の世の中は）」

机に頭を突っ伏したまま、亮平は消え入りそうな声で世の中を批判し始めた。

「こら〜！ 鬼島君！ もう少しなんだから起きてよ〜！」

世知辛い世の中に浸っていた亮平に、先程まで楽しそうに黒板に板書していた小野先生が怒っているのかジャレているのか分からない、どこか間延びした叫びを上げた。

だがそれでも、亮平はまだ机に突っ伏したままだ……。

そんな亮平を、離れた席で見つめている一人の女子生徒がいた……。

「（まったく、仕方ないなアイツも……）」

一人の女子生徒、それは最近“掌鬼”の胃袋を制圧した女と、クラスで囁かれているとかいえないとか言われている姫野真琴だ。

姫野は以前、亮平に面と向って“強引な男ってどう思う？”みた

いな内容を聞かれた時、“時と場合によるけど、多少なら許せる”と答えたのだ。

その時は何の事だか分からなかったが（今も良く分かっていないが）……最近になり、ある出来事が切っ掛けで、少しだけ分かった事があるのだ。

キーンコーン

「ああ！？ 終わっちゃったよぉ……」

「起立！ るえいッ！！」

『ありがとう御座いましたっ』

「はあい……」

姫野が亮平に呆れ、小野先生が亮平に向って柔らかい叱責を与え、そのため騒いでいると、丁度時間になったのか、昼を告げるチャイムの音が聞こえて来た……。

瞬間、この時を待っていたかのように、クラスの委員長兼野球部の男子生徒が声を荒げながら、目の前でオドオドしている小野先生に終わりの号令を告げた。

その号令にクラスの間達は素早く反応し、一瞬にして立ち、一瞬にして小野先生に頭を下げた。

小野先生は、授業を確り目標まで進めなかったのを後悔し、ションボリした雰囲気を漂わせながら教室を後にした……多分、この後安永先生に小言を言われてしまうのである。

「終わった〜ッハッハ！ マジ腹減った〜」

「鬼島？ 今日は……」

「亮平！ 飯食いに行くぞ！」

何かの呪縛から介抱された様に、突っ伏していた体を伸ばす亮平に姫野が近づくと、突然教室の扉が開けられ、その向こうから一人

の女性が入って来た。

姫野が最近、亮平の“強引な男発言”に何かを感じていた理由……それが、この女性だ。

「キサラ“姉ちゃん”か……」

そう、亮平の幼馴染である南條キサラだ。

既に荒涼高校には、南條キサラ率いる“キサラ隊”を、“掌鬼”と呼ばれる鬼島亮平が壊滅させた情報が隅々にまで知れ渡っていた。

また、亮平とキサラの関係が、昔からの“幼馴染”だった事もだ。これは今までは一部の者しか知らなかったのだが、“キサラ隊”

壊滅後、いつの間にかに知れ渡っていた……亮平には心当たりがあったが、正直既にもうどうでも良いので放っておいている。

そして、この事によって姫野も、亮平の幼馴染がキサラである事を知ったのだ。

「これから食堂に行くんだが……」

「こんにちは、南條先輩？ “今日も” 鬼島と昼食ですか？」

「うん？ アンタは確か……『亮平』の“友達”の姫野真琴だな？」

亮平から“強引な男発言”が出たのは、丁度“キサラ隊”が壊滅した日と一致する。

また、“キサラ隊”が壊滅してからというものの、話しに聞く限りでは、“ラグナレク”幹部であり“拳豪”でもあったキサラが、壊滅した自身の部下達共に“ラグナレク”から独立。

最近では、新しく出来た“新白連合”なる新興チームと、この辺一体を牛耳る最大勢力“ラグナレク”、更には、その“ラグナレク”から独立した“元・キサラ隊”の三つ巴とも言える勢力争いが繰り広げられている。

実はあの後、キサラは部下達に解散を言い渡したのだが、思いの

ほか部下達が抵抗し（一緒に着いていくと聞かなかった）、キサラは渋々と言った形で部下達とまた一からやり直す事を決意したのだ。本当は不良を卒業して、純粹にテコンドーを極めようと思っていたのだが……無意識内で、その前に亮平の他にも目標であった、かつての上司、フレイヤを超えたいと思っていたのかもしれない。

だが何故、それだけの事で姫野が何かに感づいたのか？

それは、あの時の亮平が言い出した、本当に下手くそな例え話の事であった……。

あの時、何故か亮平は例え話の時に、唐突に“幼馴染”の言葉を出していた。

これだ……この事だったんだ……。

姫野はそこで、何かに気付いたのだ。

「すみませんが、今日鬼島は私と弁当を食べるので、食堂には行きません」

「ふん、だったら私もここで食うわ」

「んなあ！？」

「何驚いてんだい？ 別にどこで食ったって、私の勝手だろ？」

そう言いながら、キサラは事前に用意してあったのだろう。

手に持っていたコンビニの袋から、パンや牛乳を取り出し始めた。

姫野とキサラが出会ったのは、会話から分かる通りこれが初めてなのではない……。

キサラは自分が“ラグナレク”を脱会した次の日、今までまるで何事も無かったかのように、今回みたく亮平がいるクラスに入り浸り始めたのだ……。

それは、今までの溜まっていた何かを吐き出すが如く、ここ数日連続でだ。

最初は姫野自身、今までの関係を知り得たために、「仕方ないか」と内心で納得したのだが。もはや許容出来る範囲ではないと踏んだ



時、今回の様なギスギスした関係が始まったのだ。

「（いや）……俺のためってのは嬉しいんだけどね……正直慣れない」

そして亮平自身、この光景にはホトホト困っていた。

なぜならこの間中ずっと、クラスの人間から変な目で見られるからだ……。

亮平はモテない（一部を除いて）、それは自分が一番分かってい………こういうのは、演劇部の谷本夏という一握りのイケメンが独占すべきなのだ。

なのに何故か、この光景は亮平の前で起きている……。

「（これはもう……あの人生で二回ぐらいしか訪れないという“モテ期”と認定しても良いな）」

しかし亮平は、この程度でめげる弱い子ではない。

むしろ、この状況を如何に受け止め、エンジヨイ出来るかを模索していたのだ……。

「おい、その男！ 机を貸しな」

「は、はいいいッ！」

「ちよつと待つてください！ 流石に横暴じゃないですか!？」

しかし現状は、そうはいかない……。

キサラは食堂行きを諦めた瞬間、亮平の隣りに座っていた男子生徒に机を貸すように命令をし、あろう事が男子生徒を無理やり退けしてしまったのだ。

荒涼高校では、壊滅したとは言え、いまだに南條キサラの影響力は強いのだ。

だがこの行為に、流石の姫野も憤慨する。

それはそうだ、自分のクラスで他クラス、ましてや先輩が好き勝手にしているのだ、黙っていられる筈が無い。

だが次の瞬間に、その憤慨は途絶える事になる。

「ほら、お前の席だ、早く座りな……」

「え？」

「座れって言うてんだよ、別に気にする事ないだろ？ お前だって、亮平と飯食いたいだろ？」

「い、いや……私はその……何と言うか、いつも一緒に食べてたから、別に鬼島と昼食を食べたいなんて事は……」

「どっちなんだ？ どうせ食うんだろ？ だったら座れ、ほら！」

「え！？ あ！」

男子生徒から強奪した机の椅子に、キサラは姫野を強引に座らせた……。

現在、亮平の前には、横と横を合わせた二台の机が並んでいる。

そして亮平の隣りに姫野、姫野の向かい側にキサラと、何とも言えない陣形になってしまった。

ちなみに、亮平の前の席、風林寺美羽の席には、美羽と共に昼食を共にする兼一と泉の姿が見られた。どうやら、姫野がお節介を焼かない代わりに泉自身が勇気を出して、二人と共に昼食を取することに成功した様であった。

更にちなみに、机を強奪されてしまった男子生徒に、亮平がジエスチャーだけで「すまん」と謝っていた事は、男子生徒以外誰にも知られる事はなかった……。

「あ、あの……どうしたんですか？ 急に……」

「うん？」

キサラによって何故か無理やり座らされた姫野は、変に緊張しながらも、目の前で机に頬杖を付きながら座るキサラに疑問を小さく尋ねた。

その疑問に、キサラは元々眼つきが悪い猫目を細めながら、意地悪そうな微笑を浮かべた。

「別に、ちょっとお前に聞きたい事があるだけさ」

「……な、何を聞かれるんでしょうか？」

目の前に居るのは、以前まで荒涼高校を占めていたグループのトップだ。

流石に男勝りな性格が売りの姫野でも、自身より明らかに格上の人間と相對しては緊張を隠しえなかった……。

「いやなに、お前、前に亮平と服買いに行つたる？」

「は、はあ……」

「ッ!？」

この言葉に驚いたのは亮平だ……。

なぜ知っている!? 何故分かった!?

そんな感情が、焦りが、隣りで昼食である“姫野”の弁当を食している亮平の中で巡り始めていた。

だが姫野自身、ただ正直に答えただけなので特に焦りなどといった感情は湧いて来なかった。

「やっぱりな、あの“ピンク”の服は亮平の“趣味”じゃないからな……」

そして、姫野の言質を得たキサラは、何やら納得した表情で、コンビニの袋に入っていたパンを袋から開け始める。

その様子を見て、姫野も自身が作った亮平の弁当と“同じ”具材が入った弁当の蓋を開け始めた。  
すると……

「……ん？」

「どうしました？」

姫野が開けた弁当の中身が気になったのか、キサラが訝しげな表情で亮平と姫野の弁当を見比べ始めた。

「……おい、これはなんだい？」

「え？ お弁当ですけど？」

その回答にキサラは一度首を軽く振ってから、今度は違う問い方をした。

何やらキサラの眼つきが、更にきつくなった様にも見える……。

「私が言ってるのは、その弁当の中身だ……どうして亮平の弁当とお前の弁当が同じ中身なのか聞いてるんだ」

キサラの問いに、姫野は何かを確信したのか。

心の中で「ふん」と勝ち誇った様な声を出しながら、目の前で睨んではいるが、その瞳の奥は揺れているキサラに、これまた少しだけ嫌味ったらしく答えた。

「別に不思議な事じゃ無いですよ？ だって、このお弁当は“私”が作って来たんですから」  
「なッ!？」

この宣告の瞬間、キサラの表情が驚愕の色、一色に染まった。

亮平の弁当をコイツが？ それに一緒の物を？  
キサラの脳内の様々な思考が飛び交い始める……。  
しかし、そんな二人の様子をただ黙りながら、姫野が作ってきた  
弁当を貪っている亮平は。

「（お、この鮭美味しいな……）」

普通に弁当を貪っていた……。

その後、姫野が弁当について誇らしげに語り始め（亮平の好物だ  
とか、味の濃さを注意するだとか）、それをキサラが何やら忌々し  
げに聞き入っていたりだとか……。

正直、亮平も途中で弁当を貪るのを止め、前の席で美羽と泉と一  
緒に昼を食べていた兼一に助けを求めたぐらいだ。

だが兼一では、流石に解決には至らず……結局、教室の隅の席で  
亮平は小さくなっている他無かった。

そして、昼食時から時も進み、今は放課後……。

「兼一、ちよっと待ってくれ」

「うん？ どうしたの亮平君？」

部活動や委員会、または普通に帰宅の徒へとクラスメイト達が向  
うなか。

亮平は、これから園芸部へと向おうとしていた兼一を教室内で引  
き止めた。

その引止めに、兼一は教室の扉付近で、後ろに振り返りながら反  
応した。

「お前、確か新島の奴が作った“新白連合”とか言うやつ“切り込み隊長”なんだろう？ 行かなくて良いのか？」

この亮平の言葉は、以前“ラグナレク”との戦いの最中に兼一がピンチになった際、新島と共に駆けつけて来た集団の事を言っていた。

だが兼一は、この話しを振られた瞬間に、若干疲れたような、若干面倒臭い様な溜息と表情をし始めた。

「それは誤解だよ亮平君……あの宇宙人、勝手に僕の事をそんな集団の隊長にただけなんだ。僕自身は入ったつもりはないし、ましてや集団を組んでしまったら、僕は“ラグナレク”と同じになってしまうから」

新島の思惑は、あの時助けに参じた事によって兼一を無理やり“新白連合”の一員にしようとした……つまり、既成事実を作ろうとしたのだ。

だが兼一自身にはその意思は無く、連合入りを断り続けているのだが、どうやら亮平がまだに誤解していたという事は、新島は諦めずに改竄された情報を流し続けているようだ。

「そうなのか……なら、出来るだけ放っておけば良いんじゃないか？」

「それが出来るならね……あの宇宙人、狡賢さと粘り強さだけは天下一品だから」

「ははは、苦労するなお前も……」

二人はお互いに苦労する事柄がある事を共有している様な感覚を感じた。

それは気のせいでは無いだろう……。

すると、兼一が突然何かを思い出したかのような口調で話し始めた。

「そういえば、新島の奴が言ってたけど……」

「うん？ どうしたんだ？」

「亮平君の実家ってどんな所なの？」

「ッ！？」

何とも無しに兼一が聞くと、亮平が突然うるたえ始めた。

「い、いや〜……べ、別に普通の家だけど？ 少し大きいくらいか

な、うん！」

「亮平君？」

明らかに動揺している友人に、兼一は訝しげな視線を送る……。

どう見ても怪しい……そんな感情が、兼一の中では渦巻いていた。

「と、ところで新島の奴は何て言ってたんだ？ その……俺の実家の事」

「え？ えつと確か、“俺は係わりたくねえ”だっけ、何に係わりたくないんだか」

兼一は、此処にはいない自身の悪友に対して呆れた仕草で首を横に振った。

だが当の亮平は、その顔……と言うより、全身に変な汗を掻きまくっていた。

「どっしたの？」

その様子を不審に思ったのか、兼一が亮平の顔を仰ぎ見る感じで見上げ始めた。

「い、いや！ 別に何とも無いぞ！ そうだ俺この後、姉ちゃんに呼ばれてたんだ！ それじゃあな！ 兼一！」  
「…………え？」

とても焦った様子で、亮平はこの場から逃げるようにして去って行った…………。

そして、取り残された兼一は…………。

「本当にどうしたんだろ…………」

心配そうな表情で、去り行く亮平を見送っていた。  
すると、そこに一人の女子生徒が近寄ってきた。

「おい白浜、鬼島の奴見なかったか？」  
「え？ 姫野さん？」

近寄ってきた女子生徒は、最近“掌鬼”の胃袋を制圧した女、姫野真琴であった。

そして、姫野は兼一に近寄ってきたと同時に、先程まで兼一と話していた亮平の事を尋ね始めた。

その問いに、兼一はバツが悪そうに答えた。

「えっと、その…………さっきまで話してたんだけど、何だかキサラさんの所に行くとかで」  
「…………ふん、そうか」

兼一の答えを聞くと、姫野は若干不機嫌そうに、それだけ言っただけから離れていこうとした。

ちなみに、既に兼一と美羽は、あの騒動の後にキサラから下の名



前で呼んで良いと言われている。

「あ、待って姫野さん！」

「うん？ なんだよ白浜」

すると、離れていこうとする姫野を兼一が呼び止めた……呼び止めたのだが。

振り返った彼女の表情は、明らかに不機嫌そのものであった。

兼一は一瞬、その表情に「ウツ」と身じろぎするも、すぐさま体勢を整えた。

「その、何か亮平君に伝えて欲しいなら聞くけど……教えてもらえるかな？」

「……」

その兼一の提案に、姫野は何やら思案するように、その細い顎に手を添えながら考え始めた。

この間の時間を、兼一は気まずそうに待っていた……。  
すると、ゆっくりと姫野が口を開いた。

「そうだな、それじゃあ頼ませてもらうか」

「う、うん、じゃあ教えてもらって良いかな？」

兼一が安心した様に姫野を促すと、姫野の表情に影が宿り始め、普段の軽快な彼女からは考えられない負のオーラを発し始めた。

この様子に、兼一はまたも身じろぎしてしまう。

「ちゃんと伝えるよ？ お前、前に飯奢るとか言ってたけど、あの約束はどうなった……ってな」

「え、う、うん！ ちゃんと伝えるよ！ うん！」

既に兼一の額には、数滴の冷や汗が滴り落ちていた。

あの時の約束……それは亮平が前に、姫野に対して“強引な男”  
について聞いた時の物なのだが、どうやら未だに解消出来てはいな  
かったようだ。

そして姫野は、兼一に伝えるだけ伝えた後、「じゃ、御願いな」  
とだけ言ってから、この場を去っていった。

「……おかしいね、僕、何も悪い事してないんだよ？」

またも取り残された兼一は、何やら開放された様な笑みを浮かべ  
ながら、誰とも無しに、そうとだけ呟いたのだった……。

あれから亮平は別にキサラと会うまでも無く、そのまま帰宅を済  
ませ、現在は自宅のリビングに置いてあるソファで寛ぎながら携  
帯電話を耳に当てていた。

「……」

先程から亮平の耳には、携帯電話から流れてくる呼び出し音がひ  
たすら流れていた……。

どうやら、どこかに電話を掛けている様だ。

「……」

そして暫くした後、何度目のコールかは分からないが、もう出な  
いかと思われたその時、亮平の耳に相手が電話を取った音が響いた。

『はい、お久しぶりです、亮平坊ちゃん』

すると、亮平の耳に当てている携帯電話から、電話越しからでも分かるぐらいの低い、それでいて渋めのハスキーボイスが流れてきた。

亮平“坊ちゃん”、そう呼ばれた亮平は、特に気にした様子もなく、微笑を浮かべながら電話の声に答えた。

「久しぶり、金城さん、相変わらず渋い声だな」

『ええ、恐縮です』

金城と呼ばれた男と亮平の会話は、誰がどう見ても楽しげな雰囲気醸し出していた。

『しかし珍しいですね、亮平坊ちゃんの方から電話を頂くとは……何時振りでしょう』

「そうだな……中学の時以来か、そう考えると、丁度良かったかもな」

『……と言つと？』

すると亮平が早速本題に入ろうと、口調を申し訳無さそうにし始めた。

「ちょっと派手にやり過ぎてな、俺じゃ処理し切れなくなつたんだ……」

『なるほど……つまりは“喧嘩”の後始末という訳ですかい？』

「面目無いな、全く……」

もはや慣れたと言っても過言では無い対応で、金城と言う男は亮平が言いたい事を一発で当てた。

その金城の反応に亮平は再度、本当に申し訳無さそうに答える。だが金城は、そんな亮平に電話越しでも分かる微笑ましそうな「フフ」と言う笑い声を漏らした。

『面目無いも何も、大抵坊ちゃんが私に用があるのは、そんな時ぐらいですからね』

「迷惑をかけるよ、毎回……」

『気にしないでください、私は“会長”から受けた仕事をこなしているだけです……それで、どんな“おいた”をしたのですか？』  
「苦労をかけるが、すまないな、もつとかける……トラックを横転させたまま、警察が来る前に逃げた」

その亮平の言葉を聞いた瞬間、金城は本当におかしそうに笑い声を上げた。

『ハツハツハツハ！！ これまた随分と派手にやりましたねえ！』

この反応に、亮平は金城との電話で二度目の「面目無い」を使った。

『しかし、安心してください。その程度なら、私が警察に持つコネでどうにかあります』

ひとしきり笑った後、金城は若干苦しそうにしながらも言葉を続けた。

その言葉に亮平は、本当にすまなそうに口を開いた。

「次はなるべく頼らない様にするから、あまり笑わないでくれ……」

『すいません、しかし坊ちゃん……』

「ん？ どうした？」

亮平がすまなそうにしていると、突然金城の口調が最初の真面目な雰囲気に戻った。

その様子に、亮平も次の言葉を待つ……。だが次に出たのは、意外な言葉であった。

『坊ちゃんは最近、“地下闘技場”に行った事がありますね？』

「うん？ ああ、まあな。行っただけ言うか、連れてかれたみたいな感じだが」

『そうですか……。では、五十嵐直樹という男は知っていますか？』

「ああ、知ってるが、それがどうした？」

五十嵐直樹……。以前、亮平が“地下闘技場”で戦った男の名だ。

当然、亮平も痛みを伴う記憶だったので鮮明に覚えている……。

しかし、何故ここで？

その考えが、まず亮平には浮かんだ。

だがその疑問も、直ぐに解消する事になる。

『ええ、その男に坊ちゃんが“落とし前”つけたとかで……。』

「“落とし前”？ あのおっさん、何かお前等にやったのか？」

“落とし前”、何やら物騒な単語に、亮平は眉を顰めるが、金城は話しを続けた。

『何でも、五十嵐は私達に対して“金バッチ狩り”をしていたとかで、“こっち”じゃちよつと名の知れた男だったんです』

「物騒な事してたんだな、あのおっさん……。」

これまた出て来た“金バッチ狩り”という単語……。

『その男に、亮平坊ちゃんが直々に“落とし前”つけたとかで、こつちじゃ一時期、結構話題になつてたんですよ?』

「あ……まずい事したかな?」

『いえ、むしろ喜ばれてましたね。“これで二代目も安泰だ”だとかで』

「……まずつたな」

その報告に、亮平は頭を抱えなくなった……。

だが金城の方は事情を知っていたのか、『御心中、お察し申し上げます』とだけ返していた。

「まあ、その辺の話しは直接戻つてするから。その時は頼むな……」  
『ええ、きつと“会長”も“亮子”さんも、そして“桜”お嬢も、お喜びになります』

「そうだな……じゃあ、今週辺りに戻るから」  
『お待ちしております』

そして、亮平は「じゃあ、また今度」とだけ言つて、電話を切つた。

電話を切つた亮平は、そのまま立ち上がり、携帯をソファに放り投げてから、冷蔵庫の方へと向つた。どうやら喉が渴いたらしく、冷蔵庫の中から大きなペットボトルのコーラを取り出した。

亮平はペットボトルの未開であつたキャップを開け、そのままラッパ飲みを慣行する……。

飲んでいる最中、息継ぎなど一切せず、亮平はひたすらにコーラを飲み続けている。

よつて、どんどん量を減らしていく水量を揺らしながら、亮平は徐々にペットボトルの底を上向きにし、残りのコーラを飲み干そうとする……。

徐々に、徐々に減らしていく水量が、遂にはペットボトルの先端

部分にまで到達して行き。最終的には、一度も飲み口から口を離さずにコーラを飲み干してしまった。

だが更に亮平は、空になったペットボトルを吸い続ける……すると。

ベコベコベコ……

亮平が吸い続けると、大きなペットボトルが物凄い勢いで、まるで内部を真空状態にするかのように、内へ内へと圧縮されて行く……。

そして、完全にペットボトルが一枚の紙の様に平べったくなり、そこから更に細い前方部分がメリメリと捻られ始めた瞬間に……。「バチンッ！」という音を響かせながらペットボトルの細い前方部分と後方の太い部分を繋ぐ、丁度中心部分が文字通り“弾け飛んだ”。

その事によって、支えを失った後方部分は在らぬ所へ飛んで行き、亮平は自分で二度手間を作り出してしまった。

「やりすぎたか……」

そう言いながら、亮平は飛んでいったペットボトルの残骸を見やる……。

「そつだな……色々やりすぎたか」

亮平は誰とも無しに呟いた……。

どうでしたか？

“二代目”とか“金バッチ”とか、他にも色々出しましたが。その話しは次の話しで出します。

多分、余裕で感じた方もいらっしゃると思いますが、まあそんな感じですよ。

次に、アンケートです。

今回の話しは、普通に進めてたら兼一達出てきません。

そこで、兼一達の話しと、亮平の話しを平行してやろうと思うのですが、どうでしょうか？

ちなみに、原作とはちょっと違った感じにしなければならないのですが、これが一つ目。

二つ目は、更新の仕方です。

序盤は一話ずつの更新ですが、盛り上がる所では、前回の様な同時更新の方が良いですか？

この二つです。

次に、活動報告の方ですが……。

どうしよう、バトンって言うのが回って来てしまいました。

ゲレゲレの活動報告は、北洋さん以外コメントをくれた事があります。

なので、バトンを回しても受け取ってくれない可能性があるのです。

悲しい……マジで悲しい。

よって、私の事をお気に入りユーザーに入れている方で、小説を書いている方、またはお気に入りユーザーには入れてないけど、小



説は書いているという方。

もしその様な方で、この二次小説を呼んでいる方がいらっしやったら。

活動報告で、バトンを回しますので、受け取ってくれたらコメントください。

そうすると、ゲレゲレが画面の前で踊り出します（自宅で）。

あと、なにかオススメのライトノベルがあれば教えてください。  
ちなみにゲレゲレが読んでいるのは。

インデックスとフルメタ（最近読み始めた）です。

インデックスは最新刊まで読んでいます。

なるべく、ほのぼのって言うか、日常って言うか恋愛って言うか。そんなのを希望します。

宜しければお教え下さい、今後の参考にもなりますので。

じゃあ、今回はこの辺で。

ではノシ

本当に御願います……

第四十話 東堂会（前書き）

本当はもっと別のサブタイにしようと思ったのですが、  
思いつきませんでした。

## 第四十話 東堂会

現在亮平は自宅の自室で、実家に戻るための仕度を整えていた。しかし整えると言っても、今回は行って戻ってくるだけの、いわばトンボ帰りみたいなものなので、実際の仕度は着て行く衣服だけである……。

「少しだけ、着易くなったなこれ……」

姿見の前で亮平は、今自身が着ているスーツを確認している。

スーツ……それも、亮平の体に確りフィットしたオーダーメイドスーツだ。

色は全て白。

白じゃない所と言えば、シャツと腕時計だけであろう……。シャツの色は深い紫、ネクタイはしておらず、シャツの襟を外に出している。

左腕に着けている時計はおよそ高校生が着ける様な安物ではなく、重厚漂う、メタリックなデザインだ。

襟を出す事で若干ホストの様に見えなくも無いが、その雰囲気は亮平の肉体によって完全に払拭されている。

「しかし毎回行く度に、これ着ないといけないのはちょっとな……」

しかし亮平自身、この格好は好かないようだ。

それは何故か？

当然だ、こんな格好で外を歩いていたら、確実に一般人では無い事が丸分かりだからだ。

更に言えば、目立ち過ぎる事だろうか……。

だが何故着ていかなくはならないのだろうか。

それは、これから亮平が向う場所に関係しているからだ……。すると部屋のテーブルに置いてあった携帯電話から、設定しておいた出発の時間を知らせるためのアラームが、亮平の自室中に響き渡った。

「うん？ ああ、もうそんな時間か」

その言葉と共に、亮平は財布や携帯などを持ち出しながら外出するために玄関の方へと向って行った。

そこでも亮平の着ているスーツに合わせるように、高そうな白いクロコタイル鱧皮の革靴が用意されていた……と言っても、亮平自身が前日に出しといた物なのだが。

「は……趣味悪いよな、先が尖ってるし」

文句を垂れながらも、亮平は渋々と言った感じで白の革靴を履いていく……。

そして、特に問題も無く履き終わった所で漸く、亮平の仕度が全て整った。

「……行くか」

しかし全ての支度が整ったとしても、亮平の表情に喜という感情は籠っていない。

籠っているのは、おそらく喜怒哀楽の哀の感情であろう……。

そして、亮平は目的の場所へと向うために分厚い鉄製のドアを開いた。

亮平は、自身が住むマンションのエントランス付近で立ち尽くしていた……。

「お待ちしておりました、亮平坊ちゃん」

現在、亮平の目の前にはエントランスのエレベーター付近からズラ〜っと、外の道路に止めてある黒塗りの轍ついロールスロイスの後部座席まで、まるで亮平がこれから進む道を示すかのように、黒服スのこれまた轍つい男達が左右対照に別れて道を作っていた。

そして、その左右に分かれた男達の中心……つまり亮平の目の前には、一人の男が立っていた。

男の格好は、此処にいる男達の例に漏れず黒服スーツなのだが、言うなれば漂う気品の様な物が違うのだ……。

背丈は亮平よりも小さい178cm、体系は細身なのだが、スーツ越しにでも分かるぐらいの引き締まった筋肉を有している。また、整った顔立ちをしているが顎に薄い髭を生やしており、なかなか渋めの男と言う感じだ。髪型は亮平の軽いオールバックではなく、きちんと整えられたオールバック。その髭と髪型が相まって、非常に渋く、そして紳士的な男性を演出していた。

その男に声を掛けられた亮平は、驚いた表情というよりも「勘弁してくれ」という言葉が滲み出るような表情をしていた。

「金城さん……これは何だ？」

そして亮平は、その男の事を金城かねしろと呼んだ……。

「いえ、“亮子”さんから坊ちゃんを、お迎えに行く様に言い渡されましたので」

「だからと言って、これじゃあ“堅気”の方々に迷惑が掛かるだろ

う？」

「すみません……“亮子”さんにどうしても言われてしまいました」

金城と呼ばれた男は若干苦笑いしながらも、亮平に向けて軽く頭を下げた。

そして亮平は、その言葉を聞いた瞬間に、盛大に溜息を付く……。

「たく、あの親は……」

「そう言わないであげて下さい、“亮子”さんも自分の子供が心配なんですよ」

「それでもこれは無いだろ？」

そう言いながら亮平は、外の方へと視線を向けた……。

金城は亮平の視線に気付いたのか、何かかと思いつながら後ろの方を振り返った。

「……そうですね、私もやり過ぎだとは思いますが」

「だろ？」

金城の目には、亮平のために用意した男達の花道の所為でエントランスの防犯用自動ドアと、ついでにもう一つある自動ドアを遮ってしまっていて、開きっぱなしにしまっている、関係の無い住民達にはこの上なく迷惑を掛けている映像が映っていた。

「だったら速く切り上げさせろ……後で管理人さんにどやされるの俺なんだからな？」

「ハハハ、面目ありません……」

亮平が面倒臭そうに出した言葉に、金城は苦笑いしながら答えた。

だが次の瞬間には苦笑いをしていた金城の表情が一瞬にして変わり、顔だけを向けていた後ろへと体も向けて、その自慢の渋いハスキーボイスをエントランス中に轟かせる。

「お前らあ聞いたな！ 聞いたんなら撤収だ！ 全員自分等の車に戻れ！！」

『おおおすッ！！！！！！』

「（相変わらず暑苦しいな……）」

金城の言葉と共に、今まで左右対称に並んで道を作っていた黒服の男達は、全員で同時に了解の返事をエントランス中に轟かせながら、金城の指示通り外に止めてあった他の車（黒塗りベンツ）へと走っていった……その光景に、亮平は慣れた様な、または呆れたような顔をしていた。

そしてふと気付いてみると、先程まで整列していた男達に檄を飛ばしていた金城が、いつの間にかに振り向き、こちらを正面から見据えていた。

「どうした金城？ 俺達も行くんだろ？」

その金城の様子を不思議に思ったのか、亮平が訝しげな表情で言葉を金城に掛けた。

だが、そんな亮平の表情など金城は気にもせず、口元に嬉しそうな微笑を浮かべていた。

「いえ、久しぶりに坊ちゃんのお姿を見たもので……」

「それがどうしたんだ？」

「なに、私も歳を取ったなと……そう思ってしまっただけですよ」

「……ふん」

金城のどこか懐かしむような口調に、亮平は軽く気恥ずかしそうに溜息を付いた。

実際、ここ最近の亮平を見ていない者ならば、必ずと言って良いほど「痩せた？」や「細くなった？」などを聞くであろう……だが、「その道」の人間達は違う。

亮平の肉体は確かに今でも太い……常人が見たらまず目が奪われるぐらいにだ。

だが以前と比べれば、亮平の肉体はかなり絞まっている。それはスーツ越しでも分かるぐらいに、以前よりも無駄が無くなり、より戦いに特化し、そして戦いに身を置く者達にとっては、より美しくなっていたのだ。

「男子は三日も見なけりや変わっているものと良く言いますが……

これは“会長”もお喜びになられるでしょう」

「そうかい……」

その金城の褒め言葉が恥ずかしかったのか、亮平は照れ隠しの様に一言だけ返事をしながら、そのまま亮平の成長を喜んでいた金城を置いて、外に路上駐車されていた黒塗りの蔽ついロールスロイスへと歩を進めていった……。

「本当に成長なさって……」

自身を置いていってしまった亮平の後姿を見つめながら、金城は誰にも聞かれずにポツリとだけ呟いたのだった。

本当に、ここは車内なのか……。



そんな声が聞こえて来そうな高級感が漂うどころか、もはや一つの部屋の様なロールスロイスの“後部座席”で、亮平と金城の二人は向き合っていた。

位置取りは、亮平がトランク側のシートを陣取り、金城が黒いスモーク窓で遮られた運転席側のシートに腰掛けている状態だ。

「それでは坊ちゃん、これを御着け下さい」

現在、亮平達が乗る車は首都高を走っている……。

外の景色はお世辞にも良いとは言えず、見えるのは車が外に飛び出さないように作られた壁と、その先に見える都会ならではの巨大なビルの数々、あとは亮平達の車の他に走っている運送業のトラックやら観光用のバスやら味気の無いものばかりだ……。

当然亮平達は、そんな味気の無い物には目もくれず、自分等の会話を進めていた。

「……着けなきゃだめ？」

「申し訳御座いません、これも決まりですので」

金城が亮平に手渡そうとしているのは、“鬼”の文字が力強く描かれた、小さな“金バッチ”だ。

このバッチは、先程列を作っていた黒服集団達の襟にも着けられてあつた物で、当然金城の襟にも着けられている。

しかし、バッチを金城から差し出された亮平は、それを見た瞬間に、本当に嫌そうな表情をしながら言葉を吐いた。だが金城は、そんな亮平の態度など予想の範疇であつたかのように、冷静に、そしてサラッと流したのであつた。

その金城の流し方に、亮平は諦めたかのように「冗談だよ」と言いながら、目の前に差し出された“鬼”と力強く描かれている“金バッチ”を渋々受け取った……。

「これで良いんだろ？ 全く、俺は“組”の人間じゃ無いってのに……」  
「仕方ありません、ご自身の御立場が“会長”の息子となれば……」  
「分かっているよそれくらい……」

珍しく本気で不貞腐れる亮平だが、そんな珍しい姿を見ても金城は特に気にした様子は無い。

むしろ慣れてきている感で対応している……。

そして亮平は、本当に渋々と言った仕草で、自身の胸元の襟に“鬼”の“金バッチ”を着けた。

「やはり久しぶりに拝見しますが、良くお似合いで」  
「皮肉か？ それとも馬鹿にしてんのか？」

“金バッチ”を着けた亮平に、金城が微笑を向ける。  
だが当の亮平は、どこか鬱陶しげに言葉を返した。

「俺は“組”に入るつもりないし、ましてや“渡世”何か渡りたくもない」

「それは私も理解はしております。ですが、現在の生活を続けられるのも、“会長”のお陰であり、“組”のお陰でもあります」

鬱陶しげに話す亮平に、金城が冷静に、諭すように言葉を返す。

「確かにな……だが、俺が基本的に御世話になっってるのは金城さん、アンタだぞ？」

「私自身も“会長”の組、“鬼島組”の“若頭”ですから、どっちにしたって変わりませんよ」

「……はあ、人間って平等じゃないよな。良い意味でも、悪い意

味でも……」

腰を掛けていたシートに亮平は更に体を預けながら、車の天井を仰いだ。

これまで亮平は色々な事柄に涉っては来たが、金城の冷静な返しに遂に諦めた様だ……。証拠に、もはや喋る気は無いと言わんばかりの空気を車内に蔓延させている。

そして二人がしていた、これまでの会話を聞いて、亮平の実家がどの様な場所なのか、その事について気付けない者はいないであろう……。

車内の会話から暫くした後、今回の目的地である亮平の実家が見えてきた。

「坊ちゃん“東堂会本部”<sup>とうどうかいほんぶ</sup>が見えてきましたので、そろそろ気構えの方を切り替えて行きましようか……」  
「もう出来てる……」

金城が“東堂会本部”と称した場所……。

そこは、ここ都内のど真ん中にあるにもかかわらず、広い土地を有しているであろう……。外から見ても内の様子が分かるぐらいに風情が出ている純和風といった、白く、そして背の高い外壁が周りを囲っており、その中と外の間を完全に遮っている。

また、出入り口には、梁山泊にある門よりも更に重量感がある、もはやどこぞの城が誇る城門の様な巨大な門が構えられており、これも外と中の関係を完全に遮っている……。いや、むしろ外を威嚇しているようにも見える。

そして、そんな外を威圧するような門の前に、亮平達が乗る黒塗

りのロールスロイスが到着した。

「では、お先に出させて頂きます」

「ああ、宜しくな」

車が目的地に到着すると同時に、二人が醸し出す雰囲気張り詰めた物へと変わっていく。

また、外を威圧する巨大な門も、亮平達が到着するのを待っていたかのように内側へと、重々しい音を響かせながら開門して行った。

金城は、その様子を確認しながら、車内から外に出るためにシートから腰を上げ、そのまま亮平よりも先に後部座席のドアを開いた。

金城が外へと出て行く……。

だが金城は、開いたドアから離れる事無く、こちらから出てくる“東堂会会長”の息子である鬼島亮平の為に、開いたドアの外側からドアを抑えながら控えている。

開いた門の向こう側の景色は、長い直線の道を白い石畳が作り出しており、石畳以外の地面には白砂が敷き詰められている。また、石畳の横には左右対照に白い灯籠が等間隔で置かれていて、その先には白い石段の階段があり、これを上がった先に……大きな邸宅、“東堂会本部”が威を構えている。

そして、亮平の為に控えているのは、何も金城だけではない……。長い直線を作り出している白い石畳の直ぐ横に、亮平がマンションのエントランスで見た光景が広がっていた。

白い石畳の横に、まるでここがこれから来る人物の花道だとも言つかのように、黒服の男達が左右対照に列を成している……。それも、白い石畳の先、つまりは白い石段の直前までだ。

また、規則正しく、そして儼つい風貌を感じさせないぐらいに綺麗な姿勢で並ぶ男達の胸には、先程、金城が亮平に渡した“鬼”の

文字が描かれた“金バッチ”が日の光に照らされ個々の光を放っている。

そのせいもあってか、この場には異様な緊張感が漂っていた……。

そして遂に、この場の誰もが待ち望んでいた人物……“東堂会会長”の息子、鬼島亮平が黒塗りのロールスロイスから姿をゆつくりと現した。

金城に抑えられていた後部座席のドアから出て来た亮平は、まず久しぶりの空気を味わうかのように軽く息を吸い、そして吐いた。

「（全く、変わってないな……ここは）」

亮平はそんな事を思いながらも、目の前に広がる光景と向き合った……。

ここは“渡世者達”の総本山とも言える場所……つまり、日本に存在する“極道”達の本部とも言える場所だ……そう、亮平の実家の家系とは“極道”更に言ってしまうえば“ヤクザ”の世界に身を置く家系なのだ。それも、ただ身を置いてるだけではない……。

「どうぞ、亮平坊ちゃん……」

いつの間にかに車のドアを閉めていたのか、亮平の後ろから先を促す金城の声が届いた。

「おっ」

その金城の言葉に、亮平はそう言って短く答える。

そして、金城に促された通りに門の向こう側……つまり、外の世界とは違う、“極道”の世界へと亮平は歩を進めていった。

白いスーツで決められた亮平の姿には、もはや高校生等と言う雰

困気は消えており。今の亮平の姿は、歩き方はまさに“極道”のそれだ。

そんじょそこらのチンピラのように、肩や足をだらしなくしながら歩く事などしない……。

亮平の今の歩き方は、背筋を真っ直ぐに伸ばし胸を張り、確りと前を見据え、腕の振りや足の歩幅すら威厳に満ちた、正に強者の歩き方そのものであった……。

この“東堂会会長”の息子の姿に、ここに居る全ての男達が魅せられていく。

そして遂に、亮平が外の世界から“極道”の世界を遮っていた巨大な門を潜り抜けた瞬間に、列を成していた大勢の男達の先頭が頭を下げ始めた。

『御勤め、ご苦労様でしたあッ！！！！！！！！』

同時に、この都内全域に轟くような、そんな豪声が亮平を待っていた大勢の男達から鳴り響いてきた。

だがこの声に、亮平は身動き一つしない、まるでこれが当然の事だとも言つかのように歩を進めていく……。

「御勤め、ご苦労様でした！！」

「御勤め、ご苦労様でしたッ！！」

「御勤め、御苦労様でしたあ！！」

亮平が歩を進めていく間にも、亮平が男達の列の間を通過するたびに、まるで波の様に男達が順々に頭を下げては労いの言葉を発していく。

それは歩を進める度に、毎回、毎回の様に続いて行く……。

そして遂に、亮平が長い石畳の終着点である石段まで辿り着いた。辿り着いた亮平は、そのまま何も言わずに白い石段を上がって行

き、その先にある“東堂会本部”の邸宅へと姿を消していった。

邸宅へと姿を消していった亮平の代わりに、今まで亮平の右後ろに控えていた金城が後ろを振り返り、いまだ規則正しい列を乱さずに頭を下げ続けている男達へと言葉を発した。

「お前等も出迎え御苦労！！ 各自、もう持ち場に戻って良いぞッ  
！！」

『へいッ！！！！！！』

頭を下げていた男達は全員一斉に、金城の言葉と同時に頭を上げ返事を返した……。

その返事は、先程よりも揃った、そして大きなものであり。大勢の男達はその返事と共に、各自金城の指示通りに元々の持ち場へと戻っていった

この様子を金城は一瞥しながら、自身も亮平が入っていった邸宅へと歩を進めていった。

本部の邸宅へと入った亮平は、取り合えず目の前の光景に溜息を着く……。

「亮兄……！！」

現在亮平は、邸宅玄関である二階まで吹き抜けのホールにいる。

亮平が立っている地面には、赤い絨毯じゅうたんが隙間無く敷き詰められていて、一階全ての地面を真っ赤に色取っている。

また亮平の正面には、吹き抜けの二階と一階を繋ぐ、金の手摺りが目立つ大きな階段があり、その階段の格段差にも赤い絨毯が敷かれている。

そして現在、亮平の目の前に起こっている光景とは……。

一人の可憐な少女が、大きな階段を一段抜かして下りて来ながら亮平の元へと駆けてくる光景であった……。

「……“桜”か、久しぶりだな」

“桜”と呼ばれた少女は、残りの階段を一気に駆け下り、そのまま黒曜石の様な、長く綺麗な黒髪をなびかせながら、一階の階段付近で佇む亮平の胸へと飛び込んでいった。

「亮兄ッッ!!」

亮平の胸へと飛び込んでいった桜は、「ポフッ」という亮平の胸と自身の体がぶつかる音を出しながら飛び込んだ勢いそのままに、亮平へと抱きついた。

「亮兄！ お久しぶりですッ!!」

「ああ」

胸に抱きついた姿勢のまま、亮平の顔を見上げるために桜は顔を亮平の胸から上げた。

その顔はとても整っていて、顎も細く、目は可愛いと言うよりも綺麗といった様な大きさと、眉毛も優美な曲線を描ており、どちらかといえば、このような行動を起こす人物には見えないぐらいの美しさを誇っている。

またスタイルもなかなかのもので、長い足は細く、胸もそこそこの大きさだが、ウエストは本気で抱いたら折れてしまいそうなくらいに細い。そして何より身長が170cmと、日本人女性の平均を裕に超している……。

もはや外見だけ見れば、どこぞのモデルの様な人物なのだが、実



はこれで亮平の二つ下の14歳、つまりは中学三年生と言う訳だ。  
未恐ろしい少女である……。

「この度は“金バッチ狩りの五十嵐”に対して、直々に“落とし前”を着けてくれたそうぞ！」

「まあ、俺はそんな事情なんて知らなかったがな？」

亮平の顔を見上げる桜の端正な顔は、喜々としながら亮平に視線を送っている。

だが当の亮平はというと、先程までの堂々とした雰囲気や嘘の様に消え去り、今は既に面倒臭そうな微笑を浮かべながら桜と対峙していた。

「それでもです！ 漸く、亮兄にも“極道”としての心構えが出来たのですね！！ 私、桜は感激致しました！！」

「……はあ〜」

もはや対極と言って良いほどに違う二人のテンションは、周りから見れば滑稽そのものであった。

一人盛り上がっていた桜もその雰囲気気付いたのか、突然亮平がついた溜息に不思議そうな視線を向ける。

「亮兄？ どうしたのですか？」

「毎回言ってると思うけど、俺は親父の後は継がない」

「どうしてですか！ なら今回着けてくれた“落とし前”は！」

「偶然だよ偶然、俺が喧嘩張った男が、偶然そのおっさんだっただけだ」

その亮平の言葉を聞いた瞬間、桜は「スッ」と亮平から離れ、同時に今まで喜々としていた表情に陰りを曇らせながら下に俯き、な

にやら体全身をプルプルと振るわせ始めた……。

「お、おい桜？」

「……亮兄の……」

「は？」

体を振るわせる桜に亮平が声を掛けると、桜が耳を澄まさなければ聞こえない様な声で何やら呟き始めた……そのせいもあって、亮平は現に桜の呟きを聞き取れてはいない。

だが次の瞬間には、桜が突然俯けていた顔を怒りの表情に変えた状態で、目の前で困っている亮平へと上げ直し、その歳にしては艶美な唇からは考えられない程の音量で亮平に向かって叫び始めた。

「亮兄のクソ兄貴！！ このヘタレ！！ 根性無し！ 腰抜けええ  
くくく！！」

そしてそのまま桜は亮平から背を向け、この場を走り去っていつてしまった……。

何とも外見と内面が一致しない少女である。

「はあ……」

最近増えてきたような気がする溜息を、亮平は盛大にこの場でついた。

「毎度、苦労しますね、兄と言うものは」

そんな亮平の後ろから、一人の男性が発する、渋くハスキーな声が聞こえて来た。

その声に亮平が振り返ってみれば案の定、先程外の人間に指示を

出していた金城であった。

「まあな……」

「辛いお立場ですものね、お嬢の将来のために、“極道最強の男”の息子であり、お嬢の兄である御自分がお先に外の“堅気”の世界で……」

「それ以上は言わなくていい、むしろ言うな」

「申し訳ありません、出過ぎましたね」

「……ふん」

金城が言おうとした言葉を、亮平が途中で制する。

「ところで坊ちゃん、この後の予定ですが……」

「顔見せと近況報告、それと他の組連中からの今回の事についての言葉……そんな所だろ？」

「はい、お察しの通りで」

金城が言おうとした言葉を、再度亮平が制しながら言葉を続けた。どうやらそれで合っていたらしく、金城も畏まった喋り方で返事を返す。

「はあ、どうせ桜と同じか、それ以上の勘違いされてんだぜ？」

「まあそうですね、他の連中は坊ちゃんが遂に二代目襲名を！と  
か言っていましたからね」

「だろ……あゝ面倒臭え」

亮平の言葉には覇気が無い、むしろ込めようともしていない。

どうやら本気で面倒臭い様だ……。

そんな亮平を苦笑しながら見ていた金城は、取り合えずそろそろ行かないと不味い事を亮平に告げると、そのまま亮平を“東堂会会

長”、つまりは亮平の父親が待つ部屋へと案内して行ったのだった。

その扉は両開きの扉であった……。すると、その両開きの扉がゆっくりとした動作で内側に開き始めた。

まずそこから姿を現したのが、“鬼島組若頭、金城組組長”かねしろ金城銀二ぎんじ。

金城は扉を開けた状態のまま、この部屋の上座に座る男に向けて一礼をした……。

「会長、亮平坊ちゃんをお連れ致しました」

「おう、入らせる」

「はい」

上座に座る男が一言発すると、金城が徐に両開きの扉の横に移動し始め、これから入ってくる人物のために頭を下げ始めた。

そして、内側に開いた両開きの扉の向こう側から、一人の大きな男が入って来た。

「おお、久しぶりだな亮平」

大きな男が入って来たと同時に、上座に座る男が嬉しそうな口調で声を上げた。

だが、声自体が低いものであったので、それほど抑揚があるものでは無かったが……。

「久しぶり親父、それに母さんも」

「ええ、益々男前になって……お母さん、嬉しいよ」

亮平が言葉を返すと、上座にいる男の隣りに座っていた一人の女性が言葉を返した。

その声は、とても綺麗で、そして極道の妻らしい、本当に凛々しい声色であった。

「では坊ちゃん、席にお着き下さい」  
「分かった」

取り合えず一通り挨拶が終わったと判断した金城が、横から亮平に向って声を掛け、上座に座る男の右隣に座るように促した。

その指示に、亮平も一つ返事で頷きながら、指定された席へと向って行く。

金城もまた、亮平の後ろに着いて行きながら、自分に用意された席へと向う。

この部屋には現在、高そうな一人用のソファが“コ”の字型に並べられている。

上座には会長親子が座り、その左右にはそれぞれ“東堂会”の幹部達が座っている……。

「全員座ったな？　なら始めるぞ」

そして全員が座った所で、上座の中心に座る人物……つまりは“六代目東堂会会長兼鬼島組組長”、または亮平の父親でもある鬼島平八おにじまへいはちが言葉を告げた。

鬼島平八……その男は、何もかもが太かった。  
スーツ越しても分かるぐらいに膨れ上がった脹脛はふせ、着ているスーツがはちきれんばかりに張っている太腿、腰は大きくて強く、そして頑丈そうだ。腹回りは平八が持つ体のパーツから比べれば細い方で、その上に存在する分厚い胸部を更に引き立てている……。

背中は異常に膨れ上がっていて、尋常じゃない力を生み出しそうな期待感を持たせている。

腕はもはや言わずもがな、スーツを着ている筈なのに、そのスーツがまるでボディスパツツの様に、平八の筋肉をなぞる様に張っていて、正直大丈夫か？ と、心配になりそうな雰囲気を漂わせている。

首も太く、並みの格闘家ならこの首を見た時点で逃げ出してしまふであろう。

顎はどんな攻撃にでも耐えられそうな頑丈さを表しており、顔も厚顔で、そう簡単には切れそうに無い。髪形はピツチリとしたオーバルバツクだ。

だがこの男を見たとき、“その道”の者なら違ふ所に目が行ってしまう……。

それは平八の拳だ……平八の拳は砲丸の様に大きく、そして格闘家の様に傷だらけなのだ。

また、拳だけではなく、平八の目も武士の様に鋭く、そして力強い眼光を放っている……。

「始めると言っても、私等の息子の近況報告みたいなものだから、全員、肩の力抜いて聞いとればいい」

平八の言葉に続いたのは、和服姿の美女……鬼島平八の妻、つまり簡単に言えば“極妻”の鬼島亮子おにしまりよつこその人である。

長い黒髪は後ろへ綺麗に纏められており、着物特有の色気であるうなじを艶めかしく露出しているが、肌の露出はここまでだ。

既に歳は四十真近だというのに、肌の張りも艶も、先程亮平と再開した十代である桜と張れるぐらいの若々しさを持ち、醸し出す空気は桜をそのままあと6・7年成長させたような、その様な大人の女性という色気を醸し出している。

そして、実は出身が元々関西の方であったのだが、関東人である

平八と結ばれる際に言葉遣いを関東寄りに合わせようとして、若干失敗してしまい、たまに二つの方言やら訛りが入り混じってしまうという悩みを抱えている……悩みと言っても、本人自身が極妻なら別に良いかと開き直り始めているので、それほど深刻な悩みでも無いのだろう。

『へい』

この場に居る“東堂会”の幹部達が、亮子の言葉に軽く返事を返す。

だが如何せん返事も全員が低い声、または渋くハスキーな声で発すれば、それだけで普通の人間を威圧できる様な空気を作り出してしまふのだ。

まあ、この場にはその様な空気に臆する者は居るはずも無いが……。

「よし、なら亮平、話しを始めろ」

「はい」

部屋の空気を確認しながら、平八は隣に座っている亮平に言葉を掛け、そしてその言葉に亮平も座りながら軽く一礼して答え、自身が腰掛けていたソファから立ち上がった。

「では始めさせて頂きます……」

言葉遣いこそ、緊張感を持たせるには十分な喋り方なのだが、如何せん……報告する事は高校生の近況報告だ、とてもこの様な極道の幹部達が集まり様な場所で話す内容ではない。

だが内容自体は喧嘩好きの者達にとっては楽しめるものであった……。

最初に話したのは、自身の友人である兼一と美羽の話した。

この話しは亮平が始めて美羽の実力を目の当たりにした時のものだったのだが、話しを聞き終えた幹部達は、街中でその様な行為を働いた同業者達を「東京湾に沈めたる」とか「指詰めえんこつさせて、ケジメとして亮平にその指を届ける」だとか、その様な物騒な事を言い始めたので、流石に亮平がそれを止めた。

そして次に、亮平の肉体が変化した理由を分かる範囲で説明をした……。

その時、自然に亮平の口から出た『梁山泊』という言葉に平八が反応した。

どうやら平八は、『梁山泊』の長老である風林寺隼人と激しい喧嘩をした事があるらしく、途中から平八と風林寺隼人の喧嘩の話しに切り替わってしまった。

だが自分の世界に入り始めた夫を亮子が現実へと引き戻した事で、事なきを得た。

その後は、日本拳法の猛者である東の話だったり、幹部達が聞きたがっていた五十嵐との戦いであったりしたのだが……途中で亮平が「ハッ」と気付いたのだ。

「（俺の高校生活って……なんだか喧嘩の話ばかりじゃないか）」

この部屋に居る者達にとっては楽しい話しなのだが、亮平にとっては悲しい事実であった……。

また、話しがキサラとの戦いに及んだ時、母である亮子が反応した。

「亮平、アンタ。……キサラちゃんに怪我でもさせたんじゃないだろっね？」

この時、亮平は自身の母から鋭い気配を感じ、一瞬背中に嫌な寒



気を感じたのだが、実際に怪我などさせていなかったの、それを正直に伝えると亮子は。

「そか、キサラちゃんを悲しませたらいかんよ？ 折角の幼馴染さかい、大事にせんと」

先程の気配が嘘の様な、心配した表情で亮平に諭すように言葉を投げかけた。

その言葉に、亮平は「当然」とだけ答え、話しの続きを進め始めた……。

……

……

……

…

「まあ、こんな所です……」

「そうか、なら座って良いぞ」

「はい」

近況報告が終わったあと、話を聞き終えた平八が亮平を席に座らせた。

そして何やら思う所があったのか、平八が思案顔をした後、座り直した亮平に向けて言葉を発した。

「お前の友人、白浜兼一と言ったな？」

「うん？ まあ、そうですね」

「その男は、強いのか？ それとも弱いのか？ どっちなんだ？」

どうやら平八が気になっていたのは、亮平の友達である兼一の強さだった様で、その質問に亮平は別に困る事も無く、当然と言った口調で答えた。

「強いつちゃ強いですが、だけど俺が言ってるのは、アイツの根性についてです。喧嘩の方は、今はまだ強くなるうとしていている途中ですが、いずれは見違えるぐらいに強くなる筈です」

「そうか、お前がそこまで言うんなら、白浜兼一とか言う男はなかなか気合の入った男なんだろう」  
「まあね」

亮平の言葉を得て、平八は満足した様な表情でソファーに身を深く預けた。

どうやら、亮平が作った初めての男友達に興味を持ったようであった。

だが今度は、その隣に座っていた亮子が、亮平に向けて言葉を掛けた。

「亮平？ 言葉遣いに迷ってるなら、何時も通り喋りなさい。さつきから敬語やら何やらが滅茶苦茶になつとるで？」

亮子の言う通り、先程から亮平の喋り方が統一されていない。

「……分かった、なら普通に喋らしてもらおうわ」

「それで良い、何かさつきから他人行儀で嫌な感じやったからな」

また亮平自身、その事について困っていたのか、直ぐに何時も通りの口調で話し始めた。

どうやら久しぶりの実家の雰囲気で、どう喋って良いか忘れていた様な感じだったらしい……。

亮子から許可を得た亮平は、どこかスッキリした表情であった。その亮平の表情を確認してか、亮子が再度、亮平に話しを掛けた。

「そういえば、学校で良くして貰ってる女の子が居るって言ったわよね？」

「姫野の事か？ そうだよ、かなり助けてもらってるな、実際」

この亮平の返しに、亮子はどこか嬉しそうな表情で身を乗り出し始めた……。

もはやどうでも良くなってきたが、忘れないで欲しい……ここは一応、日本の極道達の総本山という事を。だがそんな事は関係ないと言った感じで、亮平の言葉を聞いた亮子が喜々とした声で亮平を話しをしていた。

「嬉しいわ、ならその娘連れてきなさいなあ！ お母さん、その娘に会いたいわあ」

「それは無理だって、その娘普通の一般人だから。こんな所に連れてきたら、流石に不味いつて」

「でもキサラちゃんは昔普通に連れて来てたやん……その娘はあかんの？」

「姉ちゃんは根性座ってるから……」

「はあ、そうか……会いたかったわあ、その姫野とか言う娘に」

残念そうに頂垂れる亮子に、亮平は苦笑を送った。

流石に無理だろ……それが亮平が現在抱いている心境であった。

「しかしキサラのお嬢ちゃんか……わしも久しぶりに会いたい」

亮平と亮子に会話を間で聞いていた平八が、急に懐かしげな雰囲気醸し出し始めた。

その平八の言葉に同調するかのようになり、他の幹部達も口を開き始めた。

「そうでやすね、あの坊ちゃん幼馴染の娘はなかなか度胸がありやすからね」

今喋ったのは、金城の隣りに座っている男だ。

男の外見は、あなたはどこの漁師ですか？ と、聞きたくなくぐらいに肌が色黒く、顔も暑苦しいぐらいに濃い顔をしている。

体系は、この場にいる者達の所為で目劣りしてしまうが、明らかに素人のそれではない……。

というか、この男の方が本来の極道らしい姿をしている。

髪型はもはやスキンヘッド、しかし、男の特徴はそれだけであつた。

「そうだな、お前の頭叩いたのは、客人であの娘が始めてだったからな」

「あんどときゃ驚いた……まさか、俺の頭を叩く娘がいるなんてな」「ハッハッハ!! ちげえねえや!!」

男の言葉に答えたのは、その漁師の様な男の対面に座ってる男。

男の背格好は、一言でいえば肥満体系だ。

だがこの男は油断してはならない……。

この男、昔に暗殺されかけた経験があり、その時、心臓にライフルで狙撃されたのだ。

だがそれが幸いした、実はこの男、体の胸部に厚い鉄板を埋め込んでいるのだ……。

本来の脂肪と、その鉄板のお陰で一命を取り留めた男は、この出

来事が切つ掛けで渡世では“ジヨッキいらすの檣橋”と呼ばれている……なんだか、若干可愛そうな異名である。

最初に喋った漁師の様な男は“六代目東堂会々長、鬼島組舎弟頭、三代目横岸組々長”横岸港。この男は、主に神奈川、さらに言えば横浜を取り仕切っている男である。

次に喋った肥満男は、“六代目東堂会々長、鬼島組内、四代目檣橋組々長”檣橋幹辰。この男は、主に関西との交流を深めるために親善大使の様な役割を担っている。

またこの他にも、様々な組の重要人物達がこの場にはいるが、主要な人物と言えはこれくらいであろう。

個々の紹介はここまでにして、話しを進めよう。

キサラの話題が出た事で、この場の雰囲気は昔話に花を咲かせる、そんな微笑ましいオヤジ達の和やかなムードに包まれてしまった。

亮平は知っている……。

こうなったら、このオヤジ達は止まらない。

なぜなら、各組長達の子息達に、女の性別を持った子供が一人もいないからだ。

男ならある程度の人間が思うであろう……“出てくる子供は、なるべく女の子がいいな”と。

だがこの場で、女の子の子宝に恵まれた者は、桜を授かった鬼島平八しかない。

また、大抵の組長達の息子達は、そこら辺でチンピラをやったり、暴走族に入ったり、親の名前を使って粹がったり、さらに酷い者達の息子は、10代で出来ちゃった結婚をし、そのまま親元を離れて駆け落ちをしたりと……正直、可愛げの無い子供達ばかりなのだ。つまり、その可愛げの無い息子達を愛でるよりも、亮平の幼馴染であるキサラを愛でた方が楽しいといった、悲しいオヤジ達の唯一の楽しみなのだ。

しかし、そこまで娘分に餓えているなら、亮平の妹である桜を可

愛がれば良いと思うのだが……。

察して欲しい、桜が誰の娘なのかを……。

「あ……こりゃ話しが出来なくなっちゃったな」

「そうですね、こうなると家の連中は止まりませんから……」

オヤジ達が和やかなムードを醸し出す中、亮平と金城の二人は会話を続けられない事に溜息をついた。

「なら場所移すか？ 亮平もそのほうが良いでしょ？」

「いや、今日はここまでにするぞ亮平」

「だろうね……」

亮子が溜息をついた亮平に場所を移すかという提案を出すも、間に座っている平八がそれを拒否した。

その様子に、亮平は分かりきった感じで言葉を吐いた。

すると、平八が徐に席を立ち、そのままある方向へと歩いていく……。

「ああ、あの人も会話に入りたいと……」

「親父も好きだからな、姉ちゃんの事」

「そうですね、会長はキサラさんの事を大変気に入られてましたからね」

平八が向った方向は、和やかなムード漂う極道達の喋り場。

正直、あまりにもシニールな情景である。

「ああなると、あの人が長いからね……そうだ亮平！ アンタ、今から桜と一緒に新宿行ってきなさい」

すると、亮子が突然声を上げた。

その声に、亮平の表情が訝しげなものへと変わっていく。

「どうしてだ？ 新宿なんて、俺は用が無いけど？」

「違う、桜の方に用があるんよ。あの娘にも、そろそろ自分達が将来仕切る街を見せときたいのよ」

「じゃあ金城さんで良いだろ？ なんて俺なんだよ？」

「金城はこれから別件があるさかい、そんな小さい事に付き合わせれへん。だからアンタって訳や、新宿は色々危ない所じゃし、ボディーガード役が必要じゃろ？」

もはや言葉遣いを自重しなくなった母親に、亮平は苦笑いを浮かべる……。

だがそれ以上に、先程の出来事が亮平には気がかりであった。

「まあそうだけど、多分、今の桜は俺の言う事きかないぞ？ さっき思いつきり怒っちゃったみたいだし」

これは先程、邸宅内部に入った瞬間に起きた出来事なのだが、当の亮子はそんなもの関係無いと言った風に話しを続けた。

「大丈夫よ、あの娘、内心ではアンタのこと大好きやから。そんなに気にしたらだめよ？」

「……はあ、分かったよ、桜を新宿に連れて行けば良いんだな？」

「そうや、それでこそ兄の務めや」

「それは良いけど……母さん、もう喋り方統一したら？」

「別にそれは関係ないでしょ？ 分かったなら早く行ってきなさい」

「はいはい……」

そう言いながら亮平は席を立つ、また、それと同時に金城も席を

立つ。

亮子はいまだに座りながら「じゃ、また後でな？」とだけ言い渡して、部屋を去り行く亮平達を見送った……。

どうやら今回の亮平が経験する一日は、まだ終わりそうにないみたいだ。



## 第四十話 東堂会（後書き）

どうでしたか？ 可笑しな表現とか無かったですか？  
今回は正直忙しいなか、ちまちまと書いていたのであまり自信が  
無いです。

次回は新宿に亮平と桜が行きます。

また、組などの設定は勝手に作ったものです、実際は違います。  
昔、その道の人の名刺を貰った時があるのですが、取締役とか書  
いてあったし。

なんだか良くわからなかったので、独自設定にしました。

また、鬼島組に何代目とか無いのは、平八が初代だからです。

一代で会長の座に……とんでもない事を書いてしまった。

まあ、別に後悔はしていませんけどね。

それと、前回オススメしていただいたラノベを読んできました。  
今のところ読めているのは、「狼と香辛料」「バカテス」だけで  
すけどね（汗）

まあ、昨日やっと「世界平和は一家団欒のあとに」の一卷を見つ  
けたので、これからそれを読むところですけどね。

では、オススメのラノベを教えてくださいました虚空さん・北洋さん、  
ありがとうございます！ お陰でなかなか楽しい暇な時間を過ご  
しています。

じゃあ今回はこの辺で、さようならノシ

第四十一話 事態は動く、さねど話しは進まず（前書き）

今回、さらに無茶な展開が……。

第四十一話 事態は動く、されど話しは進まず

田舎者が都会に酔うとはこの事なのだろう……。

「なんなのですか、この人ばかりは……」

「新宿なんてそんなもんだ、我慢しろ」

現在、亮平と桜の二人は“眠らぬ街”新宿歌舞伎町の街並みを歩いている……。

「だけど、これは歩き辛いです」

「いや、歩き辛くは無いだろ？」

亮平と桜が歩いている場所は、映画館やゲームセンター・ボウリング場、さらにはクラブハウスや定食屋までが立ち並ぶ、四方を建物に囲まれた、待ち合わせには適した空間がある広場で。

周囲には多数と言うよりも、無数の人ばかりが出来ていた……。

「これで歩き辛くないって、亮兄はこういう場所慣れてるのですか？」

「別に慣れてる訳じゃない……てかお前、少しは落ち着いて周囲を見渡してみたらどうだ？」

「……？」

亮平に促された通りに、桜は周囲を見渡し始めた。

周囲の様子は、休日の昼ともあってか、休憩場所を探すカップルや普通に遊びに来ていた若者集団。他には観光に来たのであろう、アジア系だったりヨーロッパ系だったりの外国人観光客達など、様

々な人種が様々な風景を作り出していた。

だが亮平が示したのは其処ではない……。

亮平が示したのは人々の営みではなく、様々な人々がこちらに向けている奇異の視線だった。

それに桜も漸く気付いたのか、隣を歩く亮平に向けて不思議そうな視線を向けた。

「何ですか、この視線？」

不思議そうな視線を向けながら桜は亮平に、母の様な訛りの効いた喋り方で疑問をぶつけた。

その疑問に、亮平はまず自分が着ている服を指差しながら答えた。

「そりゃ俺のこの格好と……」

言葉が続けながら亮平は、自分の服に指していた指を桜に移動させ……。

「お前の格好が原因だろ？」

そう言って、桜の事を指差しながら、桜がぶつけてきた問いに答えた。

「……なるほど、理解しました」

意外と物分りが良かった妹に感心しながら、亮平は桜に指していた指を下ろした。

現在、亮平がしている格好は、東堂会本部に行った時と同じ白スーツ姿だ……当然、胸には“鬼”の文字が描かれた“金バッチ”が着けられている。

対して、隣に立つ桜の姿は……。

ここ、「眠らぬ街」新宿歌舞伎町にはそぐわない、優美な蝶の刺繍が施されている紫の着物姿なのだ。

歌舞伎と言う面では、合っているのかどうか判断しかねるが、ここは都会だ……祭りでも無い限り着物などには袖は通さない。

だが桜は何故か着物に袖を通してている。

それを説明するには、東堂会本部の邸宅で、亮平が桜を新宿に誘った時の事まで溯らせて貰おう……。

亮子に桜を新宿に連れて行けと御願いされた亮平は、現在、東堂会本部にある桜の部屋へと来ていた。

何故、極道の総本山に人が住む場所があるのか？

それは代々東堂会では、代表……つまり会長になった者は、ここ東堂会本部に住を据えなければならぬ取り決まりがあるのだ。

この取り決めは、会長職に就いた者は、極道という巨大な組織の象徴となるために、常に組織の中心に居なければならぬという理念の下に取り決められているのだが。実際には、ただ単に有事の際組織のトップが逸早く動けるように、または逃げられないようにするための措置なのだ。

簡単に言えば、アメリカの大統領がホワイトハウスに住み着くと一緒にある。

話しが脱線してしまったが、ここらで戻したいと思う……。

「桜、ちよつと出てきてくれないか？」

「何ですかッ！！ この親不孝者の腰抜け野郎！！」

「……（いや、親不孝ではないだろう）」

いま亮平は、邸宅二階にある桜の部屋の扉前で、これから桜を新宿へと誘うために、部屋の中に居る桜に呼びかけていた。

だが亮平の呼びかけも虚しく、桜は先程の出来事を未だ引き摺っている様だ。

「取り合えず入るぞ〜」

「なッ!？」

だが亮平も、言葉だけで妹を引き出すのを流石に面倒臭がったのか、桜の了承を得る前に扉のドアノブに手を掛け、そのまま桜の驚きを無視しながら扉を開いてしまった。

「よっよよよ、よ、嫁入り前の女人の部屋に了承無しで入るなど!

破廉恥にも程がありますよ!！」

「女人も何も肉親だろうが、気にする方が可笑しい」

亮平が開いた扉の先には、西洋の城にある、とある一室の様な部屋の中心で大きなソファーに腰掛けながら、部屋の隅っこに設置してある大画面のプラズマTVで、何やら「落とし前」や「ケジメ」、「シャバ代」に「ハジキ」等の単語が飛び交って来そうな映画を見ている桜がいた。

また、亮平が入って来た瞬間に桜はTVに映っていた映像を、速攻で傍に置いてあるリモコンを使って消したのだった……どうやら、他人に見られたく無かった様であった。

「親しき仲にも礼儀ありッ!! それが肉親でもです!！」

「あ〜分かったから、謝るから……」

何が恥ずかしかったのか、桜は顔を赤くし、若干涙目になりながらも、扉付近で面倒臭そうな顔をしている亮平に、そう言って訴え

かけた。

だが亮平は面倒臭そうな表情を崩さないまま、涙目になりながら訴えかけてくる桜に言葉を返した。

「猛省してください！」

「後でするから、取り合えず話し進めさせろよ……」

「今してください！」

桜の怒りは収まらない……。

その様子に亮平は、仕方ないので怒る桜を無視しながら勝手に話しを進めるといふ、かなり強引な手法を取る事を選択した。

「……さつき母さんから頼まれたんだが」

「大体！ 亮兄はデリカシーと言うものが昔から……」

「今からお前を新宿に連れて行けって言われちゃってな」

「そもそも！ 年頃の妹の部屋に無理やり……」

「金城さんも別件で忙しいからって、今回は一緒に行けないんだが」

「それに！ 亮兄は極道の息子として……」

「取り合えず、お前一人に新宿を歩かせるのは物騒なのと、お前が将来取り仕切る“シマ”を見せたいからって、母さんが俺と一緒に……」

「亮兄と一緒にい！？」

「ッ！？」

強攻策を取る亮平、その亮平に対して不満をぶつける桜……。

これは長期戦かと思われたその時、まるで今までの不機嫌さが嘘のような喜々とした声を、桜が部屋中に響かせた。

「どうやら「一緒に」というワードに食いついた様で、桜がこれまで座っていたソファから身を放り出し、扉付近で桜の大声に驚いていた亮平に突然詰め寄ってきた。」

「亮兄と一緒にどこへ行くと言うのですか！」

「いや、だからさっき言ったろ？ 新宿だ……」

「し、しし新宿ですと！？ 新宿のどこですかッ！？」

「親父が取り仕切ってる“シマ”って言ったら、“歌舞伎町”しかないだろ？」

「か、“歌舞伎町”……」

その場所を聞いた瞬間、何やら桜が「ポ」と頬を朱色に染めながら、目の前にいる亮平の更に向こう側を見るように、傍目から見ても分かるぐらいに意識を現実から遠ざけていった……人、それをトリップと言う。

「ど、どうしたんだ……何か危ないぞ、その表情？」

当然、目の前でそんな光景が起こり始めたら、いかに亮平と言えども困惑の表情は禁じえない。

だが桜は、そんな困惑する亮平に向けて表情を一変させ、先程までの喜々とした表情ではなく、危機迫る表情で亮平に再度詰め寄った。

「新宿歌舞伎町と言えば、Vシネの二大スターが共演した映画で舞台となった場所じゃないですか！！」

「……俺、Vシネ興味ないし」

「Vシネに興味が無いですってッ！？ それでも“極道最強の男”の息子ですか！！」

Vシネマとは、劇場公開を前提としないレンタルビデオ専用映画の総称だ。

総称と言っても、昨今は殆ど極道ものやギャンブルものが主流に



なっているので、一般のファン向けと言うより、根強い……という  
かマニアックなファン向けの映画が多い。

かなり簡単に説明をしたが、まあ、これだけで桜がどの様な趣味  
の持ち主か分かったであろう。

「映画の好き嫌いなんて、人の勝手だろ？」

「何を言ってるのですか！ 極道の道を進む者、Vシネを見ずして  
何とするのですか!？」

「いや、見なくても大丈夫だろ」

「だから亮兄は腰抜けなのです!! 哀川〇様を見習いなさい!

竹〇力様を拝みなさい!! 文様を崇拜なさああいッ!!!!!!」

「……面倒臭え〜」

流石に亮平も本気の呟きを漏らしてしまっ……。

亮平は知っている、桜はこうなると止まらない事を……。

だが同時に亮平は、止めるまではいかないが、話しの逸らし方は  
知っている。

当然だろう、暫く会ってなかったとしても、同じ母の下から産ま  
れた兄弟なのだから。

ちなみに文様とは、菅原文〇の事である……。

「大体、亮兄は格好だけはちょっと前ですが、中身は全くの……」

「そう言えばお前、最近学校はどうなんだ？」

「……え？」

唐突に出て来た“学校”というワード。

それに桜は、今までの勢いが嘘の様に呆けた声を出してしまっ……  
…。

「だから、学校だよ学校。お前が通ってる女子中だよ」

「学校ですか……」  
「そうだ、学校だ」

何やら本当に言いよどみ始めた桜は、そう言って聞いて来る亮平に向けて一度「ふう」と、疲れたような溜息を吐きながら口を開いた。

「正直疲れます……」  
「なんだ、また何かあったのか？」  
「ええ、それはもう……」

この時、亮平は「俺の妹ながら、美人が悩ましそうな表情をするのって絵になるよな」などと、口が裂けても目の前にいる妹に聞かれたくない事を考えていた。

そして桜が話しを続ける……。

「朝登校すれば、周囲からは『ごきげんよう』の嵐……。授業中になれば、同級生だと言うのに『凛々しい』だとか『御美しい』だとか……」

「うわ……」

「昼になれば、後輩達がこぞって『ご一緒しましょう！』とか『私がつけてきた御弁当を食べてください！』だとか……」

「（女子中つて、そんなにパワフルなのか？ てか前聞いたときより悪化してる……）」

「更に放課後になれば、校舎裏に呼び出されて、“お礼参り”か？とか思ったら、同性に告白されたり……」

「あゝ……何か、ごめんな？」

流石の亮平も、この手の話しにはついて行けず、桜の話しを途中で打ち切らせてしまった。

実際、以前までは亮平も笑って聞ける程度だったのだ。

例えば、「先輩！ 私達の部活に入ってください！」だったり、「先輩！ 体育祭は何組みですか！」だとか……その様な、微笑ましい先輩と後輩の関係だったのだ。

ところが今聞いた話は何だ？

内容だけを聞いていれば、妹が同性愛者に慕われているかのような内容だったのだ。

これには、聞いた本人である亮平自身も予想外だったのだ……まさか、ここまでだとは。

「いいのです、私には哀川〇様が居ますから……」

「それもどうかと思うぞ？」

「なら、亮兄が極道の道に進んでください……」

「それもどうかと思うぞ？ いや、それはダメだと思っぞ？」

肉親である兄に乗っかろうとした妹を、その兄自身がストップを掛けた。

そして、暫く共に暗い空気の時間を過ごした二人は、漸く本題である新宿の話しに戻す事にした。

「新宿ですか……なら、気構えの方を高めていかなくてはいけませんね」

「何でだよ？ 普通にしていれば良いだろ？」

亮平の言葉に、桜は「この兄は全く分かって無い」という言葉を、首を振りながら言外にゼスチャーで示した。

その妹の態度に亮平は「お前、舐めてるのか？」という不機嫌面を視線で桜に送りながら「そもそも、お前新宿行った時ないだろ？」と、言葉で返した。

「言った事は無くとも、私にとって“新宿歌舞伎町”とは、いわば“聖地”の様なもの……いい加減な覚悟では、その“聖地”を穢す事になるのです！」

「んな大袈裟な……」

言葉を返そうが、桜は亮平の言葉など一切の聞く耳を持たなかった。

そして反応したかと思えば、まるで独裁者の演説かの様に身振り手振りを激しく動かしながら「いいえ、大袈裟などではありません！これは義務なのです！」と、ノーマルな亮平にとっては理解不能な語りを開始し始めたのだった……。

それから暫くたった後、亮平が勘弁してくれと音を上げたのに満足したのか。桜はそのままの勢いで「分かったのなら、部屋から出て行ってください！私はこれから身支度を整えなければならぬので」と亮平を部屋から追い出し。さらに時間が経過した後、部屋から出て来た桜の姿が、気合の入った冒頭の着物姿だったのが、そもそも始まりだったのだ……。

回想終わり……。

そんなこんなで現状を把握した桜は。

「申し訳ございません亮兄、私のせいで……」

「いいんだよ、どっちにしたって、俺のこの格好で同じ様な事になってただろうから」

桜に申し訳無さそうに頭を下げられた亮平は、そう言いながら周囲を見渡した……。

周囲の状況は、新宿ならではの人込みがごった返しているのだが、先程から述べている理由のせいで、亮平と桜を中心に自然と人間サークルの様なものが出来上がっていた……。

簡単に言ってしまうえば、周囲の人間が亮平達を避けて歩いているのである。

これに先程、桜が「歩きづらい」と言ったのである。

まあ、周囲の視線による不快感ではなく、ただたんに人込みに慣れなかっただけなのだが。

「ま、避けてくれるなら開き直るしかないな。取り合えず適当に回りながら、時間が来たら金城さんの所へ行けば良いだろ」

「……そうですね、そう考える事にします。金城さんが居る場所は、あの“タワー”みたいなビルで良いんですね？」

亮平に確認を取るために、桜はある方向を指差した。

それはここ、“新宿歌舞伎町”の中心地……。

歌舞伎町南西部にいる亮平達から見て、北東の方角に位置した、ここ歌舞伎町で一番高いビル。

このビルは、亮平達の前に佇んでいる五階建ての建物が視界を邪魔しているにも関わらず、その姿を確りと亮平達に示していた……。

「ああ、そうだ。あそこが“歌舞伎町ヒルズ”だ、最終的には行く事になるから、俺と逸れて迷ったら、あそこで待っていてくれ」

「亮兄、私を何歳だと思っているのですか？ もう昔の私では無いのです、迷ったりなんかしません」

“歌舞伎町ヒルズ”それが、ここ歌舞伎町で一番高い建物の名だ

……。

外観は長く、太い円柱をそのまま建てたといったシンプルなデザイン。屋上にはヘリポートがあるのである。まるでドラム缶の様に天辺が平らになっている。

「そうだな、それじゃあボチボチ行こうか」

「ええ、では行きましょう」

二人はそう言いながら、“眠らぬ街”新宿歌舞伎町を歩き始めた……。  
もちろん、周囲の人間達を避けさせてだ。

「お腹が空きました……」

歩き出して暫くたった現在、着物姿の桜がお腹を抱えながらそんな事を呟いた。

どうでも良いが、折角の着物姿なのに、この仕草はどうなのだろうか？

「まあ昼時をちょっと避けたしな……その辺で店でも探すか」

格好だけは決めているにも関わらず、だらしない桜に亮平はそう言いながら、周囲に良い店がないか目を配り始めた。

実は先程から、桜は「お昼にしましょう」と亮平に提案していたのだが、当の亮平が「待つのはヤダ」と言って、頑なに桜の提案を流し続けていたのだ……。

「うっ……折角の歌舞伎町だと言うのに、同業と会うどころか、チンピラにすら絡まれないなんて」

店を亮平が探していると、桜が亮平の後ろに控えながら、何やら物騒な事を呟き始めた。

その桜の呟きに、亮平は「何言ってるんだ？」と言って振り向きながら、呆れた表情を桜に向けた。

「俺らがしてる今の格好の話はさっきしただろ？ 傍から見れば、俺らは完全に“渡世者”だ。そんな奴等が来るわけ無いだろ」

「ですが、これではあまりにも歌舞伎町らしくありません！」

「お前が抱いてる歌舞伎町のイメージは狂ってるぞ。……とにかく、俺も今は“バッチ”着けてんだ、絡まれたとしても、こんな白昼ど真ん中で荒事はしねえよ」

そう言いながら亮平は、桜から視線を外し、再度昼食を取るために店探しを始めた。

自身が抱いていた想像を狂ってると言われ、桜は表情を暗ませ、完全に意気消沈してしまう。

だが、そんな時だった……。

『く、食い逃げだぁッ！！！！』

「ッ!?!」

その叫びに、亮平と桜は反応する。

二人はまず、声がした後方へと目をやった。そこには、天下一〇と書かれた看板の店から、一人の巨漢の男が走り去っていく姿が見取れた。それに続く形で、店の店員が走り去る巨漢の男を追走した。

「亮兄！ 食い逃げです！」

人込みを掻き分けながら、都会の喧騒を駆け抜けて行く巨漢の食  
い逃げ男……。

食い逃げ許すまじの不屈の精神で、前方を走る巨漢の男を追う天  
下一〇の店員……。

そして何故か、その様子に何かを感じて興奮しだした亮平の妹：  
…。

「だからどうした？ 俺らは関係無いだろ」  
「大有りです！！」

亮平が至極真つ当な、というより少し冷たい返答を返すと。桜が  
面倒臭そうにする亮平の前まで近寄ってきてから大声を上げた。だ  
が身長差の所為もあって桜は亮平を見上げる形で凄んでいたの  
で、正直どこか和ましい雰囲気を作り出していたのは否めない。

「ここは誰の“シマ”かご存知の筈です！」

「関係ないだろ、そんなの……」

「そうかもしれませんが、私達“鬼島組”の“シマ”で生活してい  
る“堅気”の方々が困っているのですよ！？ 私達は“シマ”の方  
々が居るからこそ存在出来るのです！ その様な恩人と言っても差  
支えが無い方々を見捨てることは出来ません！！」

そう言いながら、桜は「ズビシッ！」と亮平から視線を外し、食  
い逃げ犯である巨漢の男を指差した……。

どうやら巨漢の男は、体系通りそこまで足が速く……というより、  
周りの時が止まったかの様に遅く。勢い良く店から逃走はしたもの  
の、あっけなく店員に追いつかれていた。

その様子に、桜は「あれ……」と呆気に取られた様な声を出して  
しまった。



「お〜良かったな、どうやら自力で解決したみたいだぞ？」

桜と共に巨漢の男が捕まる瞬間を確認した亮平は、呆気に取られている桜に向って意地悪な笑みを浮かべた。

その背中越しにでも分かるぐらいの嫌味な笑顔に、桜は両肩をプルプルと震わせながら亮平に振り向こうとした……が、その時。

「キャアアアアツ！？」

「け、喧嘩だあツ！！」

「ツ！？」

突然聞こえて来た喧騒に、亮平と桜の二人はある方向に目を向けた。

そこは、先程まで桜が指を指していた方向……つまり、食い逃げ犯と店員がいた場所だ。

亮平達が目を向けた方向には、歩行者天国となっている広い道路のど真ん中で、先程まで追われていた巨漢の男が、追っていた店員を一方的に殴りつけている光景が広がっていた。

どうやら店員には抵抗する術が無いらしく、胸倉を掴まれた状態で何度も、何度も顔を殴られていた。

体重差と言うのは、時に残酷だ……。

店員の体格は、多く見積もったとしても60？前半ぐらいの細身なのだが、対する巨漢の男は、履いているジーパンかはみ出るぐらいの腹周りを誇っており、とてもじゃないが100kg以下には見えない体系であった。

それほどの体重差がある人間に掴まれたら、何の抵抗手段も用意していない一般人には脱出不可能である。また、いくら体重の乗せ方が下手だとしても、これまた体重差の所為で、軽く、または不十分な体勢からパンチを放ったとしても、十二分の効果を得られていた。その証拠に、既に幾度も殴られていた店員の顔面からは出血が

見られていた。

「あの男……ッ！」

この光景に、桜は静かな怒りを覚え始める……。

だが、そんな今にも飛び出していつてしまいそうな桜の前に、一本の白いスーツを纏った太く、そして大きな腕が、飛び出してしまいそうになっていた桜の動きを止めた。

「亮兄！ どうしてですか！？」

「お前は行かなくて良い……」

そう言いつと亮平は、桜を制止していた腕を引きながら、桜の前へとゆっくりと踊り出て行った。

「そこで待ってる、直ぐ戻る」

「……はい、分かりました」

亮平の言葉に、桜は一瞬驚いた顔をしたが、直ぐに表情を改め返事を返した。

その返事に亮平は振り向きもせず、そのまま横暴とも言える騒動を起こしている現場へと歩を進めた。

「~~~~~ッ！！」

「あべッ!？」

何やらアジア系、それも東アジア系の言語を叫びながら、巨漢の男は。胸倉を掴んでいる店員の顔面を、先程から何発も殴りつけて

いた。

店員の方は、既に鼻血などで口周辺は赤く染まり、着ている衣服ですら胸元が血で染まり始めていた。

あまりにも理不尽な暴行……それも、捕まえた筈の食い逃げ犯からだ。

抵抗をしたい、だけど力の差が歴然としているのだ。

「~~~~ッ！」

「ぶッ！」

目の前の男の右拳が、店員の顔面に再度打ち放たれた。

この打撃にも店員は抵抗という抵抗も出来ず、文字通り無抵抗で既に血だらけの顔面に、巨漢の男が放った右拳をまともに受けてしまった。

周りは叫び、驚いてはいるが誰も助けにはくれない……なんて無慈悲な人達なのだろうか。

そんな事を考えている店員の後ろに、一人の男が、まるで目の前の光景など眼中にすら入らないと言った雰囲気近づいて来た。

「…………ッ!？」

「あ…………あが……」

その突然現れた男の雰囲気、先程まで店員に暴力を加えていた巨漢の男が訝しげな表情を向けながら、その拳を遂に止めた……。

ようやく痛みと恐怖から開放された店員は、既に意識も朦朧としていて、呂律もまともに回らない状態であったが、その時だけは何か、ゆっくりとした動作で後ろを振り返る事が出来た。

後ろに佇んでいたのは、先程まで自身に暴行を加えていた巨漢の男よりも大きな漢……。

その体つきは、スーツ越しからでも分かるぐらいに見事としか言

いよつもの無い体つきで、店員はこの時初めて、同性の体に美しいものを感じてしまった。

漢の胸元には、“鬼”と力強く描かれた“金バッチ”が日の光を反射して輝いており、店員はその金バッチを確認すると同時に、この漢がどのような人間なのかを確認した。

そして、その“極道”がゆっくりと口を開いた……。

「ちょっと横暴すぎじゃないかい？ そのオッサン……」

「……ッ！？」

「何言つてつか分んねえよ……日本語話せ、ここは日本だぞ？」

極道の男は、巨漢の男が日本人でないと気付くや否や、面倒臭そうな表情をしながら、吐き捨てるように言葉を吐いた……。

だがその態度が気に触ったのか、巨漢の男は店員を放り投げ、そのまま今度は極道の男へと凄みながら近づいていった。しかし、凄んだとしても言語が理解できなければ、それは無意味となってしまう。

その所為で巨漢の男が幾ら凄んだとしても、極道の男は全く持つて反応を示さない……いや、反応ならあった。面倒臭そうな表情が、鬱陶しそうな表情へと変わったただけであったが。

「……ッ！！」

巨漢の男は我慢の限界にきたのか、遂に先程まで店員を殴り続けていた右拳を極道の男へと放った。

しかし放ったは良いものの、極道の男はその巨漢の男が放った右拳を、何とも無い首を動かすだけの動作で、相手が突き出した右腕の外側に避けると、そのまま相手の右腕を首と肩で挟み込む様にして捉え、自身の右腕を相手の“首”へと伸ばしていった……。

「ッ!？」

伸ばされた極道の右腕は確りと相手の首へと伸びて行き、そしてそのまま相手の肉でまみれた首を……極道の男はその“右手”で鷲掴みにした。

異変が起こったのはその時だ……。

巨漢の男の体重は裕に100kgを超えている……超えている筈だったのだ。

だが、巨漢の男の体はみるみる内に宙へと浮いていく。まるで、重力から開放されたかのように……。

しかし様子が違う、宙へと浮いていく巨漢の男は足をバタつかせながら、押さえ込まれた腕とは反対の左拳で極道の顔面を殴りつけようとしていた。だが、元々リーチに差があつたせいで、男の左拳は極道の顔面には届いていなかった……。

その現象を、極道の男は“右腕一本”で起こしていたのだ。

「食い逃げ捕まったら店員ボコって、注意されたら殴りかかって……救い様ねえな、外人？」

「ッ!ッ!」

そして遂に巨漢の男が、まるで釣り上げられた魚の様に片手で持ち上げられると、極道の男が苛付いた口調で巨漢の男に言葉を投げかけた。

だが巨漢の男には、その言葉に答える余裕など無く、いまだに体を暴れさせながら、何とかこの“右手”から逃れようと体をジタバタさせていた。

後々に思えば、この巨漢の男の行動は完全に悪手であつた……。

人間、抵抗されればされるほどに加減が効かなくなって来るものだ。

それは、この極道も同じことであつた……。

「……………本当に鬱陶しいな」  
「ッ！？」

その言葉と共に、巨漢の男の体が更に上昇した。

この瞬間、巨漢の男の視界には遥かに高い位置から、この辺一体の景色が広がっていた……………まるで、大きな脚立の上に登ったかのような、そんな景色であった。だが違う……………この状態は脚立を登った状態ではないのだ。

巨漢の男が感じている感覚、それは身を持ち上げられた時に感じる浮遊感。

そう、足など最初から付いてはいないのだ……………。

気付けば、巨漢の男の爪先の位置に、極道の男の腰があった。

これは不味い……………。

その考えは既に遅かった。

不意に訪れた内蔵が体の中で置き去りにされていく感覚……………まるで、ジェットコースターに乗った時に感じる、そんな感覚だ。

だがあまりにも突然の事で、巨漢の男が現在自身が置かれている状況に気付くには時間が掛かった。

地面に叩きつけられる……………。

その考えも、既に遅かった。

バアンツ！！！！

地面に叩きつけられた瞬間、巨漢の男の胸が突然の圧迫感に襲われ、その所為で分厚い脂肪で守られていた骨すらも軋まされていた……………。

頭は幸いにも、極道の男が“右手一本”でアスファルトとの衝突を避け、大事には至らなかつたのだが。どうやら、その気遣いのせいで余計な力が入ってしまい、巨漢の男の喉は“握り潰されていた

”。  
喉を握り潰された男は、口から血を吐き出しながら、そのまま意識を手放していった……。

「汚ねえな……掛かったらどうすんだよ」

男の吐血から難を逃れた極道の男は、そのまま地べたを這い蹲っている店員へと近づいていった。

「大丈夫かい？ 災難だったな……」

「あ……あ……」

店員はボロボロになりながらも、目の前まで歩いて来た極道の男を見上げた。

その姿は勇ましく、そして何より力強かった。

「拭いてやる、血で汚れすぎだ」

「……」

極道の男はそう言いながら、店員の血まみれになった顔をハンカチで拭い始めた。

「鼻は折れてないみたいだな……取り合えず病院には行けよ」

「は……はい」

顔を拭ってくれた男に店員は、所々切れてしまった口を動かしながら、何とか返事を返した。

すると、極道の男は「よし」と言って、その店員を一瞥した後、直ぐにこの場を立ち去ろうとする。

その行動に、店員は焦った……。

速くお礼を言わなくちゃ……いつ会えるか分からない。

そう考えた店員は、文字通り最後の気力を振り絞りながら、なかなか思うように動いてくれない口を必死に動かし、去って行くこととする男の背中に言葉を投げかけた。

「ありがとう……」

その店員の言葉に極道の男は振り向かず、歩きながら背中越しに手を振るだけで答えた……。

大丈夫だ、届いてくれた……。

店員は、野次馬達を避けさせながら去っていく男の背中を見ながら、ゆっくりと瞼を閉じ、ちよつとだけ意識を飛ばす事に決めた。やがて、店員が意識を手放すと同時に、数人の警察官が漸く到着したのだった。

「御勤めご苦労様です、亮兄」

「御勤めじゃない、そこはお疲れ様で良いんだ」

戻って来た亮平に向って、桜は軽く頭を下げ一礼をした……。だがその行動に顔をしかめた亮平が、その桜の行動に注意を与えた。

桜は亮平の注意に頬を膨らませながら「極道の娘なんだから良いんです」と、まさに膨れっ面で答えた。

「……まあいい、取り合えずどつか飯食えるところ探すぞ」

「分かればいいのです、ですが亮兄？」

「なんだ？」



早いところ昼食を取りたい亮平は、再度店を探すために歩を進めようとしたが、それは桜に止められてしまった……。

止められた亮平は、桜に不思議そうな表情で振り向いた。

振り向いた亮平に、桜は「先程の……」と言って話し始める。だが話しを始めた桜の瞳には、明らかに喜々とした感情が浮き彫りになっていた。

「先程の技は“チヨークスラム”ですか!？」

「……は？」

「だから、先程の技は“チヨークスラム”かと……」

「それで良いよ面倒臭い……」

「あッ！ 待つてください亮兄！ 待つてくださいい〜！」

お腹が減っている時の亮平は、少々普段の面倒臭がりに拍車が掛かってしまうのだ。

故に、桜が振ってきた面度そうな会話を、亮平は華麗にスルーし、そのまま昼食に在り付く為に歩を進めていった……。

その亮平を桜は、着物姿のせいでなかなか速度が出せない走り方で追っていく。

その光景は、本当に仲の良さそうな兄妹そのものだった……。

仲良く歌舞伎町の喧騒を歩いていく極道然とした格好をする二人を、まるで品定めでもするかのように見つめる一つの影が存在していた。

「こちらレベッカ、“東堂会”の一員と思われる人物を発見したわ」

レベツカと名乗った人物は、ショートカットの金髪をボブカットにした、スタイルも、顔の小ささも、肌の白さも傍目から見れば明らかに欧米人と分かる容姿をしていた。

細い顎に端正な顔のパーツ、蒼い瞳に髪の毛と同じ色の細い眉毛。着ている服自体は、まるでどこかのSPの様な決まった女性物のスーツ姿なのだが。彼女から漂う妖艶な色気のせいで、どこかエロティックな雰囲気醸し出している。

耳には何やらイヤホンを着けており、どうやらそれを使って何処かと連絡を取っている様であった。

『そうか、なら尾行に移ってくれ。チャンスが来たら、脅しでも掛けて何としても聞き出せ』

「了解……だけど、私一人じゃ多分無理ね」

その言葉と同時に、イヤホン越しにでも分かるぐらいの動揺が彼女の耳に伝わって来た。

『君が無理と言うか……』

「ええ、私の考えでは、今持つてる“玩具”じゃ小さすぎるわね」

『そうか、分かった。なら応援を寄越そう』

「助かるわ……正直、これからの仕事を想像したら、ここで梃子摺る訳にも行かないしね」

彼女の言葉は、どこか真剣味が欠けた言い方だったのだが……彼女の表情自体は真剣そのものであった。

それが伝わったのか、イヤホンの向こう側にいる人物の声も緊張を含んだ物へと変わっていく。

『そつだ、我々は何としても、ここで奴を捕らえねばならない』

「ここで捕まえられなかったら、もうそのチャンスは永久に訪れな

い……」

『ああ、奴は確実に歌舞伎町のどこかで“東堂会”の誰かと接触をする筈だ。……それを見逃せば、奴は日本の裏社会の闇へと消えていってしまう。それだけは避けなくてはならないのだ』

「イワン・モロゾフ”……か」

『相手はレスリング界の皇帝とまで呼ばれた男だ、聞き込み何かで、つまらない怪我はするなよ？』

「分かってるわよ、取り合えず通信を切るわね。追跡対照が店に入ったわ」

『そうか、気をつけるよ？』

レベツカの視線の先には、二人の男女がご飯でも食べるのであるう、なかなか大きなレストランに入って行った姿が確認できていた。そしてそれを確認したレベツカは、通信相手に向けて言葉を返し……。

「私を誰だと思っているの？ あの銃の達人グレー大佐に、ICP Oで唯一認められた女ガンマンよ？」

そう言っただけで彼女は向こう側の反応を待たずに、通信を一方的に切ったのだ……。

第四十一話 事態は動く、されど話しは進まず（後書き）

はい、今回の相手は一体どんな人物なのでしょう？

ここからは、ゲレゲレの助けを呼ぶ声です。

以前にオリジナル小説を書くこと記しましたが、やばい……。  
もう一つ浮かんでしまった。

これでは、多分一つも書き切る事が出来なくなる様な気がしてきました（汗）

そこで、皆さんに質問です。

ゲレゲレにどんな小説を書いて欲しいですか、という質問です。  
まあ、なるだけ意見をもらえると助かりますので、軽い気持ちで書いて頂ければ幸いです。

1) 以前書いた通り、ギリシャ神話を参考にした完全オリジナル小説。

主人公はガチムチで武器は大剣、まあ簡単に言えばファンタジ  
ーものです。

2) 空手家の兄を持つ妹のお話し。

学園ものです、主人公はブラコンの妹です。  
ですが、兄の前ではツン100%です、もうツンがデレです。  
兄はイケメンではありません、身長が小さなガチムチです。  
ほのぼのです、特に盛り上がる場所は……

こんな感じですね、1の方は現在、最初の序章的な部分の半分ま

で書いています。2の方は、完全に思い付きです、桜を書いていた  
ら、いきなり思いついたネタです。

取り合えず、意見をもらえると助かるので御願ひします。

ここからは、オススメしていただいたラノベの感想です！！

「バカテス」

- ・なにこれ面白い……。
- ・一番好きになったのは、やはり鉄人です

「狼」

- ・わつちだと……いいセンスだ！
- ・ロレンス頭いい

「世界平和」

・主人公と姫がいいねこれ、あと七姉え  
・ただし刻人はだめだ、ゲレゲレの脳内では、怪力キャラはガチ  
ムチと決まっているのだ！

- ・刻人のギャップは、ゲレゲレには合いませんでした
- ・お母さんとお父さんは凄いな、これは凄いらノベだ

「モンハン」

- ・エピソード？が見つからない……
- ・MHP3は、上位のレウス装備を作ったばかりです
- ・イビルジョーの鬼畜め……

「いぬ」

- ・もつやだこの日本……
- ・せんだんが一番良いと感じたのは、おかしいでしょうか？

現在はこのぐらいしか読んでいません……なにぶん就活生だもんで。

教職免許を取るのに忙しいモンで……授業案作るのに忙しいモンで……空手の練習で拳を怪我してしまったモンで。

えっと後は……。

そうですね、第十七話で起きた、あの不祥事で書いてしまった“救済措置”なるものを、消しても良いか？ という質問です。

正直、そろそろ良いかなと……考えているので。

あとは、もしかしたら、平八を二代目にするかもしれないので、修正をもしした時は、後書きで記させてもらいます。

これくらいかな？

次回はなるべく早く仕上げたいと思います（話しが進まないしね）ではノシ

第四十二話 始まりの銃声（前書き）

お待たせしました！

今回から、本格的に事態が進んでいきます！！

## 第四十二話 始まりの銃声

遅めの昼食を終え、亮平と桜の二人は。取り合えずもう一度歌舞伎町の街並みを回るために、若干一般人では気後れしてしまいそうな、そんな豪華な内装の店内から出るのだった……。

「なかなか美味しかったですね、亮兄」

「そうか？ 俺はもう少し濃い目のほうが……」

「亮兄……まだ、味覚の方は治らないのですか？」

「人を味覚障害者扱いするんじゃない！ 俺は至って正常だ」  
「……」

店を出た二人は、先程食した昼食についての会話をしながら、暫くは歌舞伎町の空気を満喫した。

その間は特にこれといった問題もなく……あつたとしても、架空請求にあつた老人を助けるために、桜に頼まれた亮平が架空請求会社の事務所に直接乗り込み、データの入ったパソコン本体ごと破壊して来たり。裏通りでストーカーに困っていた女性を助けたり。悪質なキャバ嬢勧誘を桜がボコボコにしたりと……そんな事ぐらいであつた。

そして気が付けば既に、歌舞伎町の空が夕暮れ時を知らせる茜色に染まっていた……。

夕暮れ時と言えば、そろそろ歌舞伎町が真の姿を現す時間帯でもある。

街には店の呼び込み（キャッチ）がまだそこまではないが、ちよろちよると出てき始めたり、歌舞伎町の夜を逸早く楽しもうとする若者達が集まり始めたり……そんな、昼と夜が入れ替わる時間帯となっていた。



「そろそろ時間か……」

桜と歌舞伎町の街並みを一通り歩いた亮平は、ゆっくりと茜色の空を見上げた後、自身が巻いている腕時計で現時刻を確認しポツリと呟いた……。

亮平の呟きは、亮平の後ろを歩いていた桜にも聞こえたようで。

……聞こえた瞬間、桜は寂しそうな表情をしながら「え……」とだけ、前を歩く亮平には聞こえない様な声を漏らしてしまった。

「桜、もう時間だから金城さんの所に行くぞ」

「……」

しかし亮平は、そんな桜のサインには気付かず。後ろを歩く桜に振り向きながら言葉を掛けた。

だが当の桜は亮平の言葉に反応を示さない……。

これを不審に思った亮平は、一度立ち止まったあと桜に近づき、今度は目の前で言葉を掛けた。

「桜？ おい聞いてんのか？」

「……え、あ！ はい、何でしょうか？」

「……なにぼくとしてんだ？」

亮平が目の前で声を掛け、それで漸く気付いた桜は、ハツとした表情と仕草で返事を返した。

「いえ、その……」

返事を返したはいいが、桜は明確な返答が出来るほど先程の話は聞いていなかった……というより、先程話していた内容も忘れていた。

そんな桜の様子を見て、亮平は一度溜息を付きながら口を開いた。「別に、これで一生来れなくなる訳じゃないだろ？ それに、これから此処で一番デカイ建物に行くんだぞ？」

その言葉に、桜は少しだけ沈みかけた気持ちを取り戻したのか。無意識の内に暗くなり始めていた表情に少しだけ明かりが灯り、目の前で佇む亮平を見上げた。

そこには、心配そうな視線で自身を見下ろす兄の姿があった……。

「そうですね、これから確か、あの“歌舞伎町ヒルズ”に行くんですけどね……」

「ああ、これから行く場所は金城さんの新しい事務所でもある場所だからな。楽しみにしていると良いさ」

「あ……は、はい！ 楽しみにしています！」

その返事は空元気なのか、それとも心からの返事だったのか……。だが桜が現在抱いている気持ちは嘘偽り無いものだ。

最近までの桜は、今回の様に兄である亮平と街……というより、外を出歩く事は殆ど無かったのだ。

亮平がまだ幼かった頃、つまり東堂会本部で暮らしていた時は結構頻繁に一緒の時間を過ごしていたのだが。とある事情で亮平が東堂会本部から身を移してしまったせいで、桜はそれ以降兄である亮平とは、ほぼ疎遠という形になっていたのだ。

疎遠と言っても、時たまこうして突然戻ってきたりもする……。それでも、今回の様に外出をして、一緒の時間を過ごしたりする事は無かった。

元々、桜はお兄ちゃん娘だ……それも、なかなか重度の。

理由自体は桜がタイプな男性像が、極道のように厳つく、男らしい人という特殊な性質なので。近くに、その様な同級生が居る筈も無

い事から、身近な兄である亮平に対して一種の憧れの様なものを抱いているに過ぎないのだが……いや、それだけでも無いだろう。

幼い時期に、肉親である兄と離れ離れになれば、大抵の子供は寂しい思いをするかもしれない。離れ離れになっっているのに、好いてる兄の話しだけは聞けるといふ特殊な環境のせいなのかかもしれない。挙げればキリが無いほどの理由が出てくる筈だ……。

だがこの時、この瞬間の気持ちだけは……桜には理解出来ていた。もつと一緒に居たい……

理解出来ていたとしても、口に出す事は許されない事なのは分かっている……。

だからこそ桜は亮平に、この言葉をぶつけようとしな……いや、ぶつけられない。

兄は極道の世界、渡世の世界に入る事を拒絶している……。

これだけで、桜は理解出来てしまうのだ。理解できてしまうからこそ、その様な甘えた言葉はぶつけられないのだ。

「うん？ 何だ、あの外人……」

桜が自分自身と葛藤を繰り広げていると、目の前に立つ亮平が突然疑問の声を上げた……。

当然、亮平と桜の身長差は歴然とした差がある。

故に、亮平は特に桜の頭の高さを避けることも無く、視線を下から元に戻すだけで、桜が現在立っている所よりも、更に向こう側を見渡す事が出来るのだ。

その亮平の言葉と視線に、桜も気付き、不思議そうな表情をしながら後ろを振り返った……。

振り返った瞬間、まず目に入ったのが無数の人ばかりだ。これは、

昼の時とは違い、慣れているのか、明らかに極道然とした格好をした二人を見ても無数の人々は、そのまま道を最低限だけ避けながら二人の横を素通りしていた。

そして次に目に入ったのは、そろそろ夜も近いのであろう、この道を作り出している店々が、様々なネオンの光を発しながら、夜を楽しみにしている客達を誘っている光景であった……。

だが、そこではない……。

亮平と桜の眼に止まったのは……そこではない。

それは一人の白人女性であった。

白人女性の格好は、まるで妖艶なオフィスレディを演出した、ピッチリと体にフィットしているスーツ姿。髪型はショートカットの金髪をボブカットにしたもので、その所為もあってか、元々細い顎や整った顔立ちが際立って、欧米的な美女といった雰囲気醸し出していた……。

男である亮平は、そんな美女がいればまず目を奪われてしまう普通の感性を持っているのだが、今回はやはり違う視線でその美女を見ていた。

美女は真っ直ぐこちらに向って歩いてくる……。

真っ直ぐに、真っ直ぐに……。

この程度なら、二人が軽く道を譲ってやるか、向ってくる白人女性が道を避けるかすれば解決する問題なのだが。あいにく、白人女性は確かに真っ直ぐ歩いてはいるが、見ている方向が、顔を向けている方向が……そう、下を向いていたのだ。それも本を読んだ状態で。

危なっかしい……

これが二人の共通意見だった。

つまり、簡単に言ってしまうえば、真っ直ぐに歩いてくる妖艶な女性がこちらに気付かず、そのままぶつかって来るんじゃないだろう

かという、どうでも良い心配が二人の視線を釘付けにしていたのだ。そして案の定、その白人女性はこちらに全く気付く事無く、着実に一歩一歩亮平達に近づいてきて……。

「きゃっ」

そのまま、亮平と桜が立っている場所で頭をぶつけてしまった。

直前で桜は気を利かせて身を横に避けたのだが、何故だか亮平は女性に道を譲る事無く、そのまま立ち尽くしていたので、白人女性が頭をぶつけてしまった場所は亮平の腹部辺りだった……。

頭をぶつければ、流星に誰でも意識をぶつけた物へと向ける。

故に、頭をぶつけた白人女性はビックリした様な顔をしながら顔を正面へと上げた。

「え、あ……あれ？」

「上ですよ、上」

女性は顔を上げて、目の前にあったのが壁の様な白いスーツで覆われた腹部しかなかった事に目を丸くし始めた。だがそれは、亮平が上から言葉を掛ける事で直ぐに解決する事となった。

どうでも良いが、亮平の表情が若干にやけているのは気のせいである……。

どうでも良いが、その亮平の表情を見て、桜が「むっ」と膨れっ面になったのは気のせいでは無い。

「あ、すみません。本に没頭してたみたいで」

顔を上げた白人女性は、何やら流暢な日本語で、亮平を見上げながらぶつかってしまった事への謝罪を述べた。その謝罪に、亮平も「こちらこそ」と付けてから言葉を続けた。

「大丈夫ですか、なんだか妙に集中してたみたいですけど？ この人込みだと危ないですよ？」

「え、あ、ああ……そうですね」

「どうしたんですか？」

「え？ あ、いえ！ その、とても大きな方だと思ひまして……」

白人女性はそう言いながら、何故だか亮平の腹部や上腕付近をペタペタと面白そうにしながら触り始めた。

男なら分かるであろう……美人に体を触られるという事を、それも偶々では無く、自主的にだ。

当然、先程から亮平の鼻は伸びっぱなしだ……とんでもなくだらしなくらいに。

その間にも、白人女性は「凄い……」だとか「太くて、おつきい……」だとか、どこか艶の効いた吐息を吐き出しながら呟いていた。亮平の鼻は更にだらしのないものとなっていく……もはや、その面影に“極道の息子”という風格はなく、そこには“ただの馬鹿息子”と言つに相応しい、ただの工口餓鬼が存在していた。

この様子を見れば、間違いなくキサラ辺りは亮平の玉を容赦なく蹴り抜くであろう……。

この様子を見れば、間違いなく姫野辺りは薙刀で亮平の顔面をフルスイングするであろう……。

この様子を見れば、間違いなく鷹島千尋との関係を築くのは絶望的になるであろう……。

だが忘れないで頂きたい……この場には、先に挙げた猛者達にも勝るとも劣らない人物が居る事を。

「亮兄？ 少し、こちらを向いて頂けませんか？」

「はい？」

明らかに白人女性に目を奪われていた亮平は、突然発せられた自身の妹である桜の声に呆けた声で応じてしまう。

だが応じたのも束の間、亮平が視線を白人女性からその少し後ろに居た桜に移すと、そこにはまるで、周囲の喧騒を冷まさせる……いやこれは、むしろ凍えさせるほどの冷気を纏った冷笑を浮かべている桜の姿があった。また、亮平の目の錯覚でなければ、桜の懐から何やら木製の柄の様な物がヒョコッと顔を覗かせている。

まずい、これは殺られる……。

そう亮平が感じた瞬間、桜はスッと懐から顔を覗かせている木製の柄を右手で握り始めた。

そしてスラッつと、その木製の柄を懐から取り出そうとした時。

亮平の体から、白人女性の細い指の感触が消えた。

だらけていた亮平が気付けば既に、白人女性はいつの間にか桜の目の前に立ち、桜が抜き放とうとしていた木製の柄と右手を、その両手でたしなめる様に抑え込んでいた……。

「なっ」

「うん、だめじゃない。こんな所で、そんな危ないもの抜こうとしちゃ……お姉さん、抑制が効かなくなっちゃうから」

いつの間にか目の前に現れた美女に、桜は驚きの声と共に、この時初めて警戒心を抱き始めた。

だが亮平と桜の二人は、いささか警戒心を持つのが遅すぎたようであった……。

柄と右手を両手で抑え込んでいた白人女性は、亮平と桜が意識の切り替えを行うよりも速い拳動で、柄から左手だけを放し、一拳動で自身の懐から小型の自動拳銃を抜き放った。

抜き放ち、その拳銃の銃口を向けた先は“桜”が身に纏っている着物の帯付近……つまり腹部に向けられていた。更に言えば、白人女性はこの行動をなるべく周囲の人間に見られない様に、拳銃を桜

の腹部に突きつけながら、自身の体を桜の体に密着させていた。

「あんだ……」

「おっと、あまり変な気を起こされると、お姉さん困っちゃうかな」

「亮兄……」

事態に漸く意識がついて来た亮平は、目の前で自身の妹に銃口を突きつけている白人女性に歩み寄ろうとしていたが、その安直な接近は、当然といったように白人女性に止められてしまう。

桜は自身の腹部に向けられていた銃口をどかすために、どうにかして白人女性の間を先程から伺っているのだが、「この人、重心にブレが無い……」

桜は抑えられている右手から、相手が自身を抑えるために添えている右手の感触を伺うも、相手はどうやら本当に桜を抑えている手の力を添えているだけにしているらしく、掴み取ったとしても、相手は脱力しているので、直ぐに対応されてしまうと警戒をしてみまい、それによつて桜は下手な行動を取れない状況に陥っていた。

すると、白人女性が先程と同じ様な若い二人を小馬鹿にしたような喋り方で口を動かし始めた。

「ここじゃ派手な事はお互いに出来ないし、少し着いて来てくれるかな？ 君たちには、お姉さんから聞きたいことがあるから」

「何言つてんだ？ 俺は別に、今からここでおっ始めても……」

「無理ね、貴方はなかなか考えられる男の子みたいだから。今この状況で、そんな“下手な誘い方”をしても、お姉さんを“その氣”にさせる事は出来ないって気付いている筈よ？」

あくまでも自身の主導権で動こうとする白人女性を挑発しようとした亮平だが、その普段の亮平からは考えられない安い挑発は、冷



静な白人女性の対応によって流されてしまった。

そんな自身の兄を、桜は「亮兄……」と先程から心配そうな表情で見つめている……。

そして亮平は自分自身で、らしく無い安い挑発をしてしまった事に一種の焦りを覚えていた。

焦りというのは、人が持つ正常な判断能力を、大差はどうあれ損なう可能性を秘めているものだ。

この場での亮平が感じている焦りの対象は、言わずもがな、自身の妹である桜が人質に取られている事だ。また、その人質が自身の手の届く範囲に居るのに手が出せないと云った状況が、亮平に更なる焦りを生み出させていた……。

亮平は珍しく自身が歯噛みをしている事に気付きながらも「野郎……」と呟いてしまう……だがそれも、白人女性が「私は真正正銘の女なんだけど……何なら確認してみる？」と切り替えてきた事によって、亮平に更なる感情の昂ぶりを抱かせる材料とされてしまった。

「ま、そろそろ移動しましょうか」白人女性は軽い口調で言葉を吐くも、次の瞬間には亮平に向けて、初めて鋭い視線を送りながら「ついてきなさい」と命令を下すのであった。

現在亮平は、後ろから進行方向を指示してくる白人女性に従いながら、新宿歌舞伎町に無数存在する、一種の裏路地を歩いていた。

道筋は狭い直線……それを先程から、亮平・桜・白人女性の順で歩いている。

当然、桜には先程と銃口を突きつけられている箇所は違えど、その腰に後ろから小さな自動拳銃を突きつけられている。自動拳銃の名前は、ワルサーPPKと呼ばれる、ワルサーPPを私服警官向け

に小型化した物だ。デザイン自体は、本当に女性の手の大きさでも、片手に収まる程の小さな拳銃だ。

だがそんな小さな拳銃でも、こう至近距離……いや、もはやゼロ距離で突きつけられては、いくら桜が着物の厚い帯を巻いていようと、撃たれれば無事では済まない。

そうこうしている内に、先程から歩いていた狭く建物の壁に挟まれていた道から、正方形に開けた、広い空間に亮平達は辿り着いた。開けたと言っても、コンクリート製の建物に囲まれているの情景は変わる事は無い。

「ご苦労様　じゃあ、選んで良いわよ。壁際で囲まれるか、中央で囲まれるか……」

すると、亮平の後ろから白人女性のふざけた様な口調が届いた。その言葉に、亮平は眉を顰めながらも「中央でいい」と簡潔に答えた。

「あら、意外と妹さんの事は考えてないのね。壁際なら、妹さんの盾に成れたのに」

「あなた先程からっ」

「桜、別に構わなくても良い。それから、何で俺らが兄弟だって知ってる？」

桜が白人女性に振り返ろうとするのを、亮平は特に気にした様子もなく止めた。

しかし、亮平自身気になった所が出て来たので、その事について振り返りもせず、背中を向けた状態のまま問うた。

その問いに、白人女性は笑いながら「何を聞くかと思えば……」と、亮平の逆鱗を逆撫でする様な、小馬鹿にした口調で答えた。

「あなた達、気付いてなかったの？ 私、あなた達の事、お昼過ぎ  
辺りからつけてたのよ？ そんだけつけてれば、誰だって相手がど  
んな関係なのかぐらいは分かるわよ。それに、この娘、喋るたんび  
に『亮兄』とか言ってたじゃない」

「そ、それは……」

「いつからだ？ 正直俺は、そこまで警戒心が強い方じゃないから、  
今まで全く気付かなかったわ」

白人女性の挑発とも受け取れる喋り方に、亮平もおどけた様な口  
調で返し始めた。

その亮平の口調を聞いた白人女性は「あら、意外と怒らないのね」  
と、本当に意外そうな顔をしながら話しを続けた。

どうでも良いが、この場では桜だけが雰囲気呑まれず、何時も  
通りの反応で顔を赤らめていた。

「あなたが、あのチャイニーズだかコリアンだか分からないデブを  
半殺しにした辺りからよ。どう？ 私って、なかなか尾行が上手い  
と思わない？」

「そんなに前から……う、迂闊でした」

自分の警戒心の無さに、桜が嘆いていると、亮平がそそくさと先  
程選んだこの空間の中央へと歩いて行ってしまった。

「あ、待ってください亮兄！」

桜はそれに追いつがる様にして、自身もこの空間の中央へと移動  
して行った。

桜が突然走り出してしまったせいで、白人女性が突きつけていた  
銃口は桜から離れていってしまう。だが、白人女性はその事につい  
てこれと言ったリアクションは取らず、そのまま中央へと移動して

いく兄弟を見つめながら、何やら銃を握っていた反対の腕である右手を挙げ、一度だけ挙げた右手で軽く手を振った。

すると、白人女性が立つ、この空間の入り口である後ろの闇からこの空間を取り囲む、雑居ビルの非常口から、数人の黒いSPのようなスーツを着た体格の良い男達が、中央で佇む亮平と桜を取り囲むようにして現れた。

その様子を見た亮平は「全員外人か……」と呟いた後、自身と桜を取り囲んだ男達をゆっくりと見回し始めた。

「……あんたを入れて六人か」

「ま、本当ならこんなに必要なだけけどね……一応の警戒の現れよ。この世界には、達人とか言うデタラメな存在が居るからね」

亮平と桜を取り囲んだ男達の手には、それぞれ違う自動拳銃が握られてはいたが、取っている行動は全員一緒に、取り囲んだ亮平と桜に銃口を向けている。

だが銃口を向けられてはいるものの、当の亮平達には恐怖どころか焦りと言った感情の起伏が見受けられない……簡単に言ってしまうえば、ファーストコンタクト落ち着いているのだ。それも、先程の第一接触など、当の昔の出来事を感じられるほどに……。

「で？ 俺たちに聞きたい事ってのは何だ？」

「あら、意外とさつきよりも落ち着いているのね？ つまらないの……」

その兄弟が醸し出す雰囲気は白人女性も気付いたようで、口調はふざけているものの、拳銃を一度握りなおし、整った顔立ちの表情を真剣なものへと変えて行きながら、再び兄弟達に言葉を続けた。

「私達が聞きたいのは、この歌舞伎町に今居座っている、あなた達

“東堂会”の主要幹部が誰なのか？ そんな話よ……”

白人女性の質問に、桜は一瞬驚いてしまつも、亮平は気にした様子すら見せずに口を軽く開いてしまった。

「そんなもん、歌舞伎町に居る裏の連中なら誰でも知ってるぞ？」

「亮兄！？」

「あら、それは誰かしら？ よければお姉さん達に教えてくれないかな？ 手間が省けるわ」

「“鬼島組若頭、金城組々長、金城銀二”だ」

「亮兄！ どうして……！」

余りにも簡単に吐いてしまった自身の兄に、桜は信じられないものを見るかのような視線を、亮平に向けた。

「なるほど、なかなか賢い子だったのね、キミは。……じゃあ次の質問よ」

「そのまえに……」

「……うん？ 何かしら？」

急に話しを止められた白人女性は、一瞬警戒心を高めるもそれを却下してしまつたら、折角聞き出せそうな情報を梃子搦らせる事になつてしまいそうだったので、取り合えず相手にも喋らせる事にした。

「あんた達は何者だ？」

「ああ、その事ね」

亮平の言葉に白人女性は「これは失礼」と言ってから、何やら自身の胸ポケットを探り始めた。

どうでも良いがこの時、亮平は緊張感漂う現場という事を一瞬忘れながら、白人女性が胸ポケットを探っている事で揺れている、または形が変わっていく豊満なバストを凝視していた。

すると白人女性は目当ての物を見つけたらしく、懐の胸ポケットからある物を取り出した。

取り出した物は、所謂警察手帳の様な物で、書いてある文字は亮平には読めない、英語の様な文字であった。

「私達はInternational Criminal Police Organization、日本語で言えば国際刑事警察機構というものよ」

「いや、ワザとだろ？　ワザと俺らに分かんない様に……」

「ICPO!？　何故、世界の警察であるあなた方が、私達極道なんかに……」

自身の身元を明かすために、白人女性は艶やかな発音で亮平には分からない英語を発した。

だが亮平の隣り居た桜は確りと理解した様で、驚きの声を白人女性に向けて発した。

自分の妹が理解しているのに、兄である自分が理解できなかったのが恥ずかしかったのか。亮平は途中まで動かしていた口をゴニョゴニョと紡ぎながら、取り合えずこれ以上の恥を晒さないためにも話しを進めようとした。

「で？　その世界の警察様が、俺たちなんか何の用だ？」

「サービスよ、流してあげるわ」

「……な、何の事かな？　俺にはさっぱりだよ」

「亮兄……」

「私達は、ある男の事を追っているんだけど……」

女狐の様な微笑みを亮平に向けながら、白人女性は話しを続けた。

「その男が今夜、あなた達“東堂会”の誰かと、ここ歌舞伎町で接触するみたいなのよ」

「そいつの名前は？ あんたらに追われてるって事は、相当にヤバイ事件を起こした奴なんだろう？」

「ええ、それはもう……。あなた達に内容は言えないけど、ある意味で国に反逆を起こした馬鹿野郎よ」

「国に？ そいつは物騒な奴だな……。テロリストか何かか？」

「いえ、元は愛国心溢れる軍人だったみたい。それに、とても正義感溢れる人格者だったらしいわよ」

「へへ、世の中分らないものだな」

「そうね」

「なに世間話でもするかのように会話してるんですか！！ 亮兄！！」

六つの銃口に囲まれていると言うのに、あまりにも和やかな雰囲気です。話を続ける二人に、桜も場違いな程、確りした突っ込みを入れてしまった。

桜に突っ込みを入れられた二人は同時に「おほんっ」と一度だけ咳払いをした後、本題に戻った。

「その男の名前は“イワン・モロゾフ”、格闘技が好きなら、一度は聞いたことがあるんじゃない？」

「いや、俺は格闘技って言ったら、プロレスと柔道ぐらいしか見ないから……」

「イワン・モロゾフ……思い出しました、亮兄！」

「そうか、お前確か格闘技とか見るの好きだったもんな」

本題に出て来た男の名前を聞いた瞬間、桜が声を響かせた。

「確か、ロシア出身の現役軍人レスラーで。“シベリアが生んだ最強の生物”や“レスリング界の皇帝”とまで、数々の異名を持っていた伝説の選手だった筈です。戦績はデビューした年にオリンピック出場、その試合で全てフオール勝ちを収め金メダル獲得。それを弾みに、以降15年間無敗を誇った、伝説というより、レスリング界では神話とも言われた選手です」

「すげえな、それ……」

「修正としては、まず既に引退して2年が経ってて。それに、既に現役の軍人では無いわ……」

桜の説明に修正を加えた後、白人女性は亮平に視線を送った。

「その男が今夜、どこで“東堂会”の人間と接触するか聞きたいのだけど……その様子じゃ知らない様ね」

白人女性の言葉に、亮平は「まあね」と言ってから、白人女性に視線を返した。

「俺は正確に言えば“渡世人”じゃないからな、知らなくて当然だ。だが、どうしてそこまで俺たちに情報を与える？俺たちが東堂会の人間なら、まず上に報告すると思うんだが……」

「ああ、それね」白人女性は軽く微笑んでから「特に流すなって言われて無い情報だからよ」とだけ、亮平に告げた。

「どうしてだ？」

「それは教えられないわ、そっちの方が重要……」

白人女性が言葉を続けようとする、何やら連絡が入ったのか。突然、いつの間にか耳に着いていたイヤホンに指を当てながら、通



信機の向こう側にいるであろう人物と話し始めた。

暫くの間、話しは続いていたが、話しが済むと同時に白人女性はこちらに視線を向き直し、肩をすくめながら「そろそろ終わりにするだつてさ」と、うるさい上司の愚痴でも言うかのようにおどけて見せた。

気付けば空の状況は、先程までの茜色から完全に色を黒くさせてしまっていて。歌舞伎町から漏れ出る明かりが無ければ、ここも真っ暗闇になってしまふほどの闇を帯びていた。

「そうか、ならその前に、アンタの名前ぐらい教えてもらったって良いだろ？」

「別に構わないわよ、私の名前はレベッカ。レベッカ・チェンバーズよ、あなたは？」

「俺は鬼島亮平。で、こつちが妹の鬼島桜」

「そう、サクラって言うんだその娘。可愛い娘じゃない、私が欲しいくらいだわ」

「はは、そうか」

二人は再度、まる世間話でもするかのように自己紹介を済ませた。すると、自己紹介を済ませた直後、亮平が最後の言葉を放った……。

「六人は、少なすぎるぞ？」

「ッ!？」

言葉と同時に、亮平が地面を踏み抜き、アスファルトの破片を飛び散らせながら、まずは前方にいたレベッカに突貫した。

以前の時は、学生相手だったおかげで、亮平の姿を捉えられたものは居なかったが、この場は違う。

亮平が接近を果たし、右の拳を振り上げると、レベッカと亮平の

間に一人の男が割って入って来た。

男は割って入って来たと同時に、両手で自動拳銃を構え、銃口を亮平の胴体に向けながら3発の弾丸を発砲した……。

パンパンパンという、乾いた発砲音と共に、亮平の胸部に3発全ての弾丸が命中する。

だが、ここで異変が起きた……。

「ふん、初めて撃たれたが……」

「shittツ!？」

亮平の胸には、白スーツを穢すようにして、三箇所の血の跡がハッキリと滲み出ている。

だが……“それだけだった”。

胸を三箇所撃たれた筈の亮平は、まるで何事も無かったかのようにして胸をポンポンと片手で払った。その動作は、まるで体についてしまった埃を打ち払うかのような、そんな日常でも見られそうな動作であった。しかし、払われたのは埃ではなく、先程銃口から発砲された“三発の鉛球”だ……。

その鉛球のどれもが血に汚れてはいたが、三発とも、まるで硬くぶ厚い何かに衝突したかのような潰れ方をしていたので。

「意外と生きてるものだな」

撃たれた筈の亮平が、まるで何事も無かったかのように体を捻り、相手に背中を向け、右拳をまるで円盤投げの様にして振りかぶり……そして、振りかぶっていた右拳を、目の前で驚いている一人の男の顔面に

グシャアツ!!!!!!

まるで破城槌のようになった拳を叩き込んだのであった……。

## 第四十二話 始まりの銃声（後書き）

本当なら、今回の話で、この戦闘は終わる筈だったのですが。書いていたら、キリがよくなってしまっ……すみません。

前回のアンケート（オリジナル小説の）は、今年一杯受け付けております。

まあ、多分、一度両方書いてみると思いますが……。皆さんの意見も聞きたいので、意見を書いてくれる人がおりましたら、気軽にお申し付けください。

今回の話しを書いていて思ったのですが……。

ICPOがどれほどの活動範囲を誇っているのかが分からない！！  
教えて！ 神の様な慈悲を持っている方！！

拳銃の扱いかたが分からない！！

教えて！ ガンマニアの人！！（いるかな？）

すみません、調子こきました……。

あと、レベッカの武器は、今回のが本命ではありません。

女ガンマンですからね、もちろん……

ちなみに、ゲレグレはピースメーカー（銃のほうだよ）を愛読しています。

それしか知識がありません。

ここからは悩みです。

最近、自分で言うのも難ですが。

文章力が少しだけ上がったような気がするんですね。

ですが、長い地の文を書いていると……

「これって、上手く伝わってるかな？」だとか。

「うわ、気付いたらここだけでこんなに文字数が」だとか。

正直、分からなくなってきたるんですけど、色々。

ですので、今回の分かなり辛い箇所があったら、少しだけ意見をもらえると思います。

では、最近一話一話が長い、もしくは、なかなか進まなくなってきたりゲレゲレですが。ここらで今回の後書きを締めさせて貰いたいと思います。

ノシ

後書きも長くなってきたな……。

第四十三話 ゆっくりと、そして静かに（前書き）

はい、久しぶりに戦闘を書いたので、少しだけ自信が無いとです

## 第四十三話　　ゆっくりと、そして静かに

亮平の右拳を顔面に叩き込まれた男は、身長差のせいで上から振り下ろされた拳の軌道を沿うようにして拳が顔面に直撃した瞬間に、地面に向けて頭を弾けさせ、まるで鉄棒の逆上がりの様に一瞬にして死に体となつてしまった体を宙に舞わせた……。

その光景は、人が風車の様に宙を舞うという、なんとも滑稽な光景だったのだが……。

周囲の人間は、この事象を起こした拳に、そして、胸部に銃弾を3発受けたにも係わらず、未だ何事も無かったかのように、普通に“喧嘩”をしている鬼島亮平という男に、恐怖した。

亮平に殴られた男が、いまだに宙を舞うなか、右拳を突き出した状態の亮平が再び動き出した。

動き出した先は、最初に狙いをつけていたレベツカだ……。

「何なのよ！　この男は！？」

正面から迫ってくる亮平は、今度は反対の腕である左腕をレベツカの細い首目掛けて突き出した。

その手の形は、以前キサラと戦った際に見せた“喉輪”の形……。つまり、レベツカの細首を鷲掴みにしようと言うのだが、それをレベツカは亮平の突き出された左腕の外側、つまり小指側を沿うようにして、まるで闘牛士が如く、亮平の前進をいなして魅せた。

これでサイドを取れた……。

およそ格闘技にて、攻撃直後のサイドを取られるというのは、それだけで勝敗に結するほど危険な状況なのだ。当然だ……攻撃直後という事は、現在の亮平の様に腕を突き出した状態となっている。考えても見て欲しい、通常の状態、つまり正面と正面で向かい合っている状態でさえ、ガード、つまり両腕を顔の前に縦で並べるブロ

ツクが、相手の攻撃の速さに間に合わない時があるのだ……。それを、ただでさえ反応し辛い、ほぼ死角に近いサイドから攻撃されたら……。

それを、ただでさえ反応がし辛いのに、腕を突き出した状態という、明らかにガードが間に合わない状況で攻撃を加えられたら……。

パンパンパン！！

レベツカは、片手で構えた小型のワルサーPPKから空薬莖を吐き出させると共に、サイドを取られた亮平の横っ面に向けて三発の銃弾を撃ち放った。

その乾いた銃声は、まるで爆竹でも鳴らしたかの様な、どこにも面白みが無い音だったのだが。撃ち放たれたのは人の顔だ、通常ならただでは済まない。

だが撃たれたのは、通常ではない……異常の者なのだ。

「全く、本当に馬鹿げてるわね……」

レベツカは、そう忌々しげに呟いた……。

レベツカの視線の先には、三発の銃弾を肩や上腕の裏側、つまり上腕三等筋で受け止めた亮平の姿があった……。

身長差のせいで、下から撃つ事となっていたレベツカの銃弾は、亮平が突き出したままの左腕の肩を上げる事によって顔だけは防がれていた。

そして先程の様に、白スーツに三箇所血痕が滲み出てきた……だが、滲み出てきたただけだ。

「まさか、人撃ち殺すのに、本当に“銃の大きさ”が関係してくるなんて……」



「予想はしてたけど……」と、レベツカは亮平から見て左サイドで銃を構えたまま、信じられないと言った表情で呟いた……。そして、肩を撃たれた亮平がゆっくりと、横で未だに銃を構え続けているレベツカに、上げていた左肩を降ろしながら振り向いた。

「まあ、俺も驚いてるところだから……」

レベツカと向き直った亮平は、そう言いながら撃たれた左腕に「ふん！」と息を止めながら力を込めた。すると……亮平の左肩や、上腕三等筋から、先程と同じく三発の“鉛弾”が弾け飛んできた。弾けとんだ三発の鉛弾は、綺麗な放物線を描きながら、そのまま地面へと転がっていた。

「あなた気付いてる？ 撃った本人からすれば軽くホラーよ？ あなた」

「そつだな、俺もそう思うが……」

「これが現実リアルって事なのよね……避ける人なら何度も見たときがあるけど、真っ向から受けきるなんて変質者ストレンジャーは初めてみたわ」

「変質者は無いだろ……」

軽口を叩く二人だが、その表情は対照的だ……。

亮平の体には既に、六つの血糊ちのりが出来上がっている、だが、それほどダメージが無いのか、表情には一片の焦りすら浮かんではいない。

対蹠的にレベツカの方は、その額に汗をかき、背中には既に嫌な汗が大量に浮き出ているのを自分で認識をしていた。構えている拳銃のグリップは既に、レベツカの掌から滲み出る汗のせいで濡れている状態だ……。

レベツカの構えは、確りと自動拳銃の照準を合わせるためにアイアンサイトを覗ける、両手で拳銃のグリップを抑え、相手に体の正

面を晒す構えだ……本来、彼女の構えはこの様なガチガチのものではないのだが、今回使っている銃に合わせる為に、馴れない構えを取っているのだ。

また、亮平の構えは何時も通り、まるで目の前には敵が居ないかのような、そんなただ突っ立っているだけの、構えともいえない立ち方だった。

「小さいとは言え、銃弾を六発もくらって立ってる人間をどう呼べばいいのよ？」

レベツカ言葉に亮平は苦笑しながら「確かに」と、まるで他人事のように反応したが、次の瞬間には表情を真剣なものへと変えて行った……。

その変化に気付いたレベツカは、今度は銃口を亮平の喉に向け始めた、すると……。

『何をやっているレベツカ！？ 終わらせるとは言ったが、殺し合えとは言っていないぞ！』

レベツカの耳に取り付けられていたイヤホンから、上司である人間の声が響いてきた。

だがその瞬間、レベツカは「ちッ！」と苦虫を潰したかのような険しい表情をしながら、イヤホンを耳から取り外し。

「うるさいわね、いま大変な所なんだから邪魔しないで!!」

『お、ちよッ！ おい……』

上司の言葉を無視しながら、耳に着けていたイヤホンを握り潰したのだった。

その光景を見て、亮平は再び苦笑を漏らした。

「なんだ今の？」

「上司よ、今回のお仕事の指揮を取ってる人なんだけど……机上の空論しか言わないから、私キライなのよね」

“机上の空論”なんて、外人なのに良く知ってるな？」

「あら？ あなた達でいう最近の外人は、日本語をある程度知ってるものよ？ まあ、あなた達と同じ、意味も分からなかったり、語呂がよければカツコイイ的な感覚だけど」

「ふくん、そうなのか」

「まあでも、たまにその机上の空論も役に立つんだけどね。ただ、私はそういうの嫌いな……」

「なんだ、意外と感情に身を任せるタイプなんだな、あんた」

「私はなんでも熱いのが好きなの……日常でも、交わりでも、そして戦いでも」

会話が軽くとも、二人は一切構えを乱さない……亮平は全く構えを取っていないが。

するとそんな二人に、ある人物から言葉が掛けられた……。

「まだお遊びになられていたのですか？ 亮兄……」

「なんだ桜、もう終わったのか？」

「なッ!？」

そう言いながら近づいてきたのは桜だ……。

だがその桜が纏っていた空気が、先程までと違っていたのは、レベッカの見間違いではない。

近づいてくる桜は、鞘と柄が白木でできた、鍔の無い小太刀のような短刀を手にしており、こちらに近づきながら、“カチン”と音を立て、胸元で鞘に刃を納めていたところだった。

そして、その桜の後ろでは、先程亮平が倒した男以外の男達が、

手首に切り傷を付けられ、指を数本切り落とされ、両目を横一文字に切り裂かれ……各自、別々の怪我を負いながら地べたを這い蹲っていた。

「これを、あなた一人で……」

レベッカの問いに、一切の返り血すら浴びていない桜が口を開いたのは、いまだ碌に構えも取らず、ただ突っ立っているだけの亮平の隣りに到着した時であった……。

「あの程度でしたら、私一人で十分です。亮兄が出るまでもありません……」

「いや、あなたのお兄さん、もう六発もらってるんだけど？」

「……」

目を瞑り、なかなか様になっていた仕草で決めた桜だが、レベッカの言葉を聞き、亮平のことを確認した瞬間。

「どうして避けないのですか！！ 亮兄なら、ちゃんとやれば一発も当たらないでしょうに！！」

まるで出来の悪い兄を叱り付けるように、先程まで研ぎ澄まされた空気を保っていた桜が、その空気を自分で崩壊させながら亮平に詰め寄った……。

その桜の叱責に亮平は「いや、だって当たっちゃったものはしょうがない……」と言いかけたのだが、この言い訳は桜に「当たる前以前に、撃たれる前に対処するのが基本でしょ！」と、更なる叱責を亮平に与える事となった。

そして、独走していく兄弟を眺めていたレベッカは……。

「あなた達？ 少し気を抜きすぎじゃない？」

そう言って、緊張感の欠片すらない兄弟に言葉を投げかけた。

亮平と桜の二人は、レベッカの言葉を聞いた瞬間、何事も無かったかの様に再度、レベッカと向き合った。

「いや、別に気を抜いてるわけじゃないし」

「そうです、気を抜いてるわけじゃありません」

あくまでも気を抜いて無いと言い張る兄弟に、レベッカは呆れながら前髪をかきあげ「まあ、どうでもいいけど……」と、眩きを漏らした。

「取り合えず、二人で来るならさっさとしなさい？ お姉さん、そ

こまで待てるほうじゃないから」

「分かった、なら桜は下がってる」

「はい……」

亮平の命令とも取れる言葉に、桜はレベッカを睨みつけるように一瞥したのち、直ぐに亮平に向き直り、丁寧に一礼をしながら従った。

桜を後ろに下げさせ、再びレベッカと対峙した亮平は、先程と何ら変わらない、ただ突っ立て居るだけの“構え”だ……。

対するレベッカも、先程と何ら変わらない、アイアンサイトを確りと亮平に合わせている構えだ。

まず最初に動いたのは、当然遠距離での攻撃方法を持つレベッカだ……。

レベッカはなるべく亮平に的を絞らせ無いように、この正方形の広い空間を、亮平を軸にして周り始めた……周りはじめたと言っても別に走っている訳ではなく、ゆっくりと、しかし確実に反応が出来

るように、亮平に銃口を向けながら、横歩きで移動しているのだ。相手がパワータイプなら、正面は不味い……レベッカは、この基本方針を忠実に実行していた。

自身の周りをゆっくりと歩き始めたレベッカに、亮平は眉を顰めた。

「どうしたんだ？ そんなまどろっこしい事してないで、早く撃つて来たらどうなんだ？」

亮平の質問に、レベッカは動きを止めずに答えた。

「あんだ、撃つても効かないでしょ？ 言つのも馬鹿げてるけど……」

答えはしたが、肝心な事は言わないレベッカ……。

そんなレベッカに、亮平は溜息を一つ吐き出しながら、面倒臭そうに自身の周りを周り、既に後ろを取っていたレベッカに振り返った。

「だったら諦めれば良いじゃないか？」

「私は諦めるのも、何もしてないのに負けを認めるのも嫌なの」

「……我侭だね」

「アナタもでしょ、見てれば分かるわ」

その会話のやり取りを最後に、レベッカの眼が細まっていった……。

勝負時……。

亮平とレベッカの二人は、このとき同時に、同じ事を考えていた。そして動いたのは亮平だ

「ッ！」

亮平はレベツカとの間に存在する間合いなど気にせず、そのまま左半身をレベツカに向け、右拳を後ろに構えるという、明らかに相手に次の攻撃を知らせる行動を取っていた。

だが、そんな愚行を行っていても、亮平がレベツカに接近する速度は馬鹿には出来ない。

ゆえに、レベツカは既に亮平に向けて2発の弾丸を発砲している。パンパンッ！ と、小気味良く発砲された弾丸は、亮平が前に出していた“左肩”に命中した。

「shit！」

本来なら亮平の顔面を狙った筈だったのだが、レベツカはその結果に毒を吐いた。

そしてとうとう、亮平がレベツカへと接近を果たした。

接近を果たした瞬間、亮平は前に出していた左足を突っ張る事で今までの前進にブレーキを掛け、それによって生まれた力の流れを、突っ張った事で横を向いていた足の爪先を、相手に向けることで膝へと流し、突っ張った膝を少し前に屈ませる事で流れを上を迫り上げ、股関節を回し、腰を回し、右脇腹を突き出すようにして回し、胸を伝わせ、左肩甲骨を引く事で、右半身を更に前へと突き出し、更に力の流れを右肩に乗せて、肘、手首、そして右の拳面へと力を流して行き……そして。

バウンッ！！

暴風を生み出しながら振り抜いた……。

だが、レベツカには掠りもしない……あえて言えば、髪の毛をボサボサにさせたぐらいか。

当然だ、流石にここまで大きな拳動があつたのなら、落ち着いた人間なら誰にでも避けられる。

避けたレベツカは、再び亮平のサイドを取っていた。

レベツカのポジションは、右拳を振り抜いた亮平の右側。亮平は振り抜いた勢いで、後ろ足であつた右足まで前に出している、つまり、レベツカは完全に亮平の背中を取つた事となっていた。

そしてレベツカは、銃口を今度は亮平の“左膝”に向け……。

パンパンッ！！

と、2発の弾丸を打ち放つた……が。

「ッ！？」

既にそこには、亮平の左足は無かつた。

そして次の瞬間、レベツカが握っていた拳銃が、物凄い衝撃を左側から受け、その銃身を、金属片やスプリングなどを飛び散らせながら粉々にさせていた……暴発しなかつたのは、残弾が既に尽きていたからだ。

見れば、目の前で拳を振り抜いていた亮平が、いつの間にかこちらを振り向き、その“左膝”を蹴つた後のように上げていた。

亮平が取つた行動は至つてシンプルなものだった……。

確かに亮平は、レベツカに背を向けた状態であつたが、この状態から後ろの敵に攻撃を加える方法を、亮平はとある幼馴染から既に“盗んでいた”。

その方法とは、軸足である右足の踵を相手の方向へと向け、その後体の正面を相手に振り向かせ、この回転で得られた力を蹴り足である左足に乗せて蹴り出す。蹴り出す足で、相手と衝突させる部分は足の裏である“踵”……つまり亮平は、レベツカが発砲する前に相手に振り向き、その左足で“後ろ廻し蹴り”を放つたのだ。



弾切れを起こしていたものの、得物を失ったレベツカは肩を竦めながら「ギブアップ……」と、若干の呆れが混ざった仕草で負けを認めた。

「さて、色々と話してもらおうか」

負けを認めたレベツカに、亮平は上げていた左膝を下ろしながら言葉を投げかけた。

その亮平の言葉に、レベツカは一度溜息をついてから話し始めた。

「別に、私達の今回の目的は。その“イワン・モロゾフ”を逮捕するだけ、他意は無いわよ？」

「なら何で、私達を消そうと？」

レベツカの言葉に、桜が反応する。

「ま、そこなただけどね。私達も特に聞かされてないのよ、機密事項だとか何とかで」

「良くそれで納得出来ますね」

「お仕事だつて割り切ってるから、お姉さん達は気にしないのよ。でも、今回の仕事は、ICPOと言うより、どっちかって言えば工員のような気がするけどね」

「というと、日本警察にバレると不味い仕事って事ですか？」

「どちらかと言えば工員寄り……」。

この意味深な発言に、桜は眉を顰める。

だがレベツカ自身は、特に気にした様子もなく話しを続けた。

「確かにバレると不味いけど、多分上が何かしらの手段を取る筈だから、ハッキリ言つて私達に実害は出ないと思うわ」

「はあ……これじゃ埒が明きません、いい加減に話した方が身のためですよ？　あなたに抵抗する手段なんて、もはや残されていないのですから」

そう言いながら桜は、再び懐から白木で出来た柄を取り出し、ゆつくりと抜くように握り始めた。

だがそれは、次に亮平が取った行動によって止められてしまう。亮平は軽い足取りで、もはや何の抵抗も出来なくなったレベッカへと近づいていく。

「あら、良いの？　あなたが尋問をしても、私は何も吐かないと思うけど？」

「別に尋問をする必要なんて、はなっからない……」

微笑交じりの表情で、亮平はレベッカの前に立ち、そしてレベッカを見下ろした。

「どうしてかしら？」

「知った所で、俺に出来る事は無いし、ましてや“東堂会”に被害は出なくなるんだ。未然にトラブルを防げただけでも、なかなかの収穫さ」

「なるほどね……自分は関係ない、だから知った所で何もしない。なかなか賢い生き方じゃない？」

レベッカが小馬鹿にしたような口調で喋った瞬間、亮平が一瞬にしてレベッカの首を右手で鷲掴みにした。

「なアッ!？」

「最後に一つだけ聞く」

自身の首を鷲掴みにされたレベツカは、亮平の大ざっぱな力加減によつて、喋れるか喋れないかギリギリの状態です首を絞められていた。

そしてレベツカは、何とかこの状態を脱出しようと、手で亮平の右手を剥がそうとしてみたり、足で亮平の膝や腿を蹴飛ばしたりと、様々な抵抗をしていたが、いずれも亮平の表情を動かす材料にはならなかった。

あらかた抵抗を試みたあと、諦めたのか、レベツカは苦しそうな表情を隠せてはいないが、目の前の亮平に軽い笑みを浮かべながら口を動かした。

「強引なの……ねッ、お姉さん……くッ…そういう男……嫌いじゃないわよ？」

だが亮平は、そのレベツカの強がりとも取れる挑発を無視した。

「その“イワン・モロゾフ”とか言うのは、困ったらヤバイ奴なのか？」

レベツカの言葉は無視した亮平は、これが最後の質問だということを強調するために、込める言気に威圧感を込めた……。その意思を察したのか、レベツカは一度、今まで浮かべていた軽い笑みを静かに消すと、ゆっくりと左手を亮平の前に出しながら“不敵な笑み”を亮平に向け。亮平の前に出された手の形は、手の甲を表に向け、“中指だけを立てた”ジェスチャーを示していた。

「童貞にはまだ早いわよ……このッ」

レベツカが言い終える前に、亮平は鷲掴みにしていた相手の頸動脈を軽く絞めた……。

瞬間、まるで糸で吊るされた人形のようにレベツカの四肢は死に体となり、目が覚めぬ限り動かぬ者となってしまうた……。

「亮兄、この方はどうしますか？」

すると、今までの出来事が何も無かったかのように、亮平の後ろから桜が話しかけてきた。

亮平はゆっくりと、自身が“落とした”レベツカを地面に寝かせると、後ろにいる桜に振り向いた。

その表情は、どこか真剣味を帯びていた……。

「別に構う事はないさ、縛って後から金城さんに頼めば何とかしてくれる」

「ですが、この方々はこちらの命まで取りに来たのですよ？　ここでケジメをつけなければ、後々厄介な事になりそうなんです」

桜の言葉に、亮平は「確かに一理あるがな」と言ってから言葉を続けた。

「警察つてのは、身内が殺されればいくら重い腰だろうと、一般人が殺された時より動こうとするもんだ。ましてや、こいつ等は世界の警察……俺たち極道の餓鬼どもが、勝手に手を下していい相手じゃない……」

いくら日本を統括している極道集団だと言っても、相手が世界となれば話しは別だ……。

もしも世界が相手となれば、極東の小さな島国を占めている“程度”の組織など、像が蟻を踏み潰すが如く、容易く踏み潰されてしまふであろう……。

「……そうですね、仕方ありません。亮兄が見逃すと仰るのなら見逃しましょう」

「そうしてくれ、これ以上外と揉めるのは流石に不味い……」

「ですが、せめて一太刀だけ……」

「だめだ、行くぞ。もう時間も迫ってるんだ、早いところ金城さんの所に行くぞ……聞かなきゃいけない事もあるからな」

亮平の言葉に、桜は「ちえ」と静かに舌打ちすると、寝ているレベッカのストッキングや、ジャケットを脱がした時に見つけた、体に着けられていたガンベルトを使って、レベッカの手や足を縛り上げていった。

桜がレベッカのストッキングを脱がしている際、亮平がまじまじとレベッカの下半身を覗いていたのは、幸いにも桜には気付かれていなかった。

そしてレベッカを縛り上げた後、桜はゆっくりと亮平の後ろへと体を移して行った。

自身より上の人間と歩く時は、その人間の後ろに必ず着いて行く……これは、桜が勝手に自分で決めた、いわば自分ルールなのだが、この時ばかりは、どこか形式めいた、そんな重い雰囲気を作り出していた。

「今日はちよつとだけ厄介な事になりそうだな……」

「そうですね、亮兄……」

亮平の言葉に対応しながら、桜は自身の着物の袖から携帯電話を取り出し、この現場の後始末を頼むように、金城が抱える部下の人間に連絡を入れた。

連絡を入れ終わった後、桜は「連絡も入れましたし、行きましよう亮兄」と、前に立っている亮平に完了の報告をした。

その桜の言葉を聞いた後、亮平は桜に横顔だけ後ろに向けて「分

かった」と答え。

後ろに続く桜と共に、この広い空間を後にした……。

「そうか……分かった、坊ちゃんが到着したらもう一度連絡しろ」

金城はそう言って、耳元に当てていた携帯電話の電源を切ってから、胸ポケットにそっと仕舞った。

「誰からだ？」

「部下からですよ、御気になさらず……」

携帯を仕舞った金城に、この部屋の中心に置いてあるソファーに腰を沈めている大男が声を掛けてきた。

現在、金城が居る場所は……。

ここ歌舞伎町で一番高い建物、“歌舞伎町ヒルズ”の最上階……つまりは歌舞伎町でもっとも高い場所に、金城は居た。

「坊ちゃん」とか言っていたな？ それが貴様が言っていた……」

「ええ、“極道最強の男の息子”です」

歌舞伎町の夜景が一望できる、一面ガラス張りの窓の前で、金城は夜の歌舞伎町を見下ろしながら大男からの質問に答えた。

その答えを聞いた瞬間、大男は不敵な笑みを浮かべた。

「その男は、貴様の“計画”に賛同してくれるのか？」

大男から出た“計画”と言う言葉……。

それを聴いた金城は、若干の苦笑を浮かべながら口を開いた。

「分かりません、いや……多分、最初は反対されるでしょうね」

「多分か……貴様にしては、随分と曖昧な答えじゃないか？」

「仕方ないですよ。何分、親に似て気まぐれな所がありますからね

……」

「そうか……」

そう言つて大男はこれ以降、金城には言葉を掛けなかった。

そして、夜の歌舞伎町を静かに見下ろしていた金城は……。

「（私の計画は、坊ちゃん……アナタが会長の跡を継いだ後、必ず  
実を結ぶ事になるでしょう）」

静かに、静かに金城は黙考しながら……。

「（）ですので、これから起こる出来事にアナタは“ご退場”願いま  
す……）」

第四十三話　　ゆっくりと、そして静かに（後書き）

早く、亮平対レスリングが書きたい……。

ネタバレ？　いや、ゲレゲレの性格を捉えている方なら、もう既に気付いていたでしょう（笑）

ですが、その衝動のせいで、今回の話しが若干やっつけ気味になってしまいました……矛盾ていうか、おかしなところがあればお申し付けください。

では、今回はこの辺でノシ

はは、信じられるかい？

俺、今日彼女に振られたんだぜ……



## 第四十四話 金城の絵（前書き）

最近、読者の方々にチェックを頼ってしまっているゲレゲレです。

あと、今回の話しを読む前に、前話のレベルカの対応を読む直す事を推薦します。簡単に言えば、あのあと修正して、レベルカを連れ去った事にしたので、その事についてだけです。書かせてもらいました。

また、今回も悪い所があれば、何でも良いのでお申し付けください。

（なるべく、良い点も書いて！！ ゲレゲレは既に衰弱状態よ！）

また、オリジナル小説をサンプルとして、一話だけ投稿させてもらいますので。

そちらの方も宜しく御願います。

## 第四十四話 金城の絵

「……ここは」

レベツカが目を覚ました時、最初に確認した事は。ただ地面に敷き詰められた赤い絨毯と、全面大理石で出来た壁以外、時に目に付く物もない殺風景な部屋の中心で、何やら豪華な椅子に括り付けられた自身の危機的状況であった。ついでに言えば、やたら明るいシヤンデリアのせいで、目を開けた瞬間に若干怯んだ事も確認した。

「……そうか、捕まっちゃったか」

椅子の背もたれの裏に腕を拘束され、椅子の前方二脚に両足を拘束された状態を見れば、誰でも分かる事なのだが。この時、レベツカは呟いてでもないと言ってられないと言った表情をしていた。

そして流石にいつまでもダレてはられないと感じたレベツカは、すぐさま自身が置かれている現状よりも、この後の事に思考を切り替えていた。

「（通信手段は無いとして……はあ、当然よね）」

嫌になる衝動を抑えつつも、レベツカは自分が現在している格好を確認するために視線を落とした。

視線の先には、欲情的な紫の下着に抑え付けられた、自身が保有する二つの巨山が露となっており、さらに視線を落とすために、巨山を避けながら前のめりになると、やはり下の方も紫の下着のみといった格好になっていた。

「（体の感じからするに、手は出されて無いみたいだけど……ただ

で済む感じじゃ無いわよね、これ）」

視線を正面に戻し、今までの人生で一番深い気がする溜息を吐き出しながら、レベツカは思考を戻した。

「（発信機は、最初にリヨウヘイって子とぶつかった時に着けたから良いとして。問題は救援が来てくれるかどうかよね……）」

実はこの女性、最初に亮平と接触した際に小型の発信機を取り付けていたのだ……。

抜け目無いと思うが、現在の格好を見れば大してプラスの印象にはならないだろう。

「（しかし迂闊だったわ……あの子が“少なすぎる”って言ったのは、別にあの子だけの話じゃなくて、妹の方も頭数に入れた数字だったなんて。……ま、でも過ぎた事は仕方ないか。今の状況を脱するなら、尋問の人間がここに入って来たときか、それが自力で出るか……あとは味方が来てくれた時って感じかな）」

そう考えながらも、レベツカは既に拘束された手首や親指、腰や足などを少しづつではあるが動かしていく。……その際、細く引き締まったウエストのお陰で強調された双丘が、青少年には見せられないとんでもない揺れ方をしていたのは言うまでも無い。

「（ま、でも私は、常に何かして無いと落ち着かない性格だからね）。出来る限りの抵抗はさせてもらっわよ……）」

レベツカが拘束から脱するために身動きしていると、不意にこの部屋の扉がゆっくりと開かれた……。

その扉の外には、一人の男が立っていた。

「あ、あなたは……」

突然現れた男を見た瞬間、レベツカは信じられないといった言葉を漏らすのであった……。

「それで坊ちゃん、あのICPOの女は、私に任せてもらっても宜しいので？」

「べつに構わんよ、俺じゃ判断がしづらいからな」

現在、亮平と桜の二人は、地面も壁も、おそらく天井も大理石で作られた豪華な部屋の中央で、長い黒革のソファーに腰掛けていた。

この部屋は、新しく出来た金城組の組長室で、中央に置かれているソファー以外には、高そうな机や家具など、様々な物が並べられており、まさに社長室然と言ったところであった。

だが金城個人が使うといっても、かなりの広さを有しており、家具が置いてあったとしても子供が満足に走り回れるぐらいの広さを誇っていた。

そして、突出すべきは歌舞伎町の夜景を独り占め出来る、一面ガラス張りの一角だ。

これには先程、桜も食いつき、かなり御気に召していたようであった……。

その後、レベツカを拘束して迎える車に乗った亮平と桜の二人は、車での移動途中、流石に血糊ちのりが多数付着しているジャケットを着たままでは不味いと判断し。亮平が着ていたジャケットを車内に脱ぎ捨て、あいにく予備のシャツは無かったので、上半身を血糊がついた紫のワイシャツ一枚という格好にしたのだった。

ちなみに、車内では桜が応急処置と称して亮平のシャツを脱がし

たのだが、桜はそこで目を見開いた。

なんと先程出来たばかりの銃痕が、既に塞がり始めていたのだ……。

これに驚いた桜が恐る恐る亮平の傷口をハンカチで拭ってみると……どうやら血の方も完全に止まっていたようで、続けて流れ出てくる血は無くなっていった。

現在では、金城の計らいで紫のワイシャツは新しいのに変えたのだが、ジャケットの方はどうにもならず、亮平の上半身の格好はワイシャツ一枚と変わらなかった。変わったといえば、前腕の上辺りまで、腕まくりをしているぐらいか……。

「はは、毎度の事ながら、坊ちゃんも面倒臭がりのようで」

「金城さん、亮兄は面倒臭がりの他に、いい加減な性格でもあるんですよ」

「桜、お前は少し黙ってる」

亮平・桜・金城の三人は、向かい合うようにして、一つのテープルを挟みながら談笑している。

内容はレツベカの事についてなのだが、どうやら亮平自身がやる気を見せず、全てを金城に丸投げしているようであった。

雰囲気は普通に談笑している様子だったのだが……突然金城の声色が変わったのを皮切りに、この場の空気が一変した。

「しかし、ICPOが直接仕掛けてくる……ですか」

「ああ、理由自体は少しだけ聞いた」

「理由自体？　というと……」

金城が空気を変えた事で、亮平と桜の表情も真剣なものへと変わる。

そして、亮平がゆっくりと、この場の空気に沿うようにして口を

開いた。

「今晚、この街のどこかで“東堂会”の誰かが、ICPOの連中が追っている誰かと接触をするようなんだ」

「ほう、なるほど」

亮平の言葉を聞いた瞬間、金城は特に気にした様子もなく反応した。

その反応の仕方は、言外に“知っていた”とでも語っている様であった……。

亮平は金城の様子を見ながらも、ゆっくりと話しを続けていく……。

「ICPOに追われてる奴の名前は“イワン・モロゾフ”。元ロシア軍人らしい……」

「また、レスリング界では大層有名な選手だった者です」

亮平の言葉に、桜が補足を入れた。

一方の金城は、その二人の話しを静かに聞いている。

「……金城、俺はそこまで頭を使う人間じゃねえから、単刀直入に言う」

そして、亮平が本題とも言える内容の話しに入った。

「そのロシア人に会う奴ってのは、お前じゃねえのか……金城？」

この言葉に、金城は「ふっ」と笑いながら、口を開いた。

「どうして……とは言いません、これくらいの事は分かってもらわ

なければ困ります」

「お前、俺のこと舐めてんだろ？」

「そうじゃありません、坊ちゃんは既に立派な漢ですから……」

怒ったかのように見えた亮平だが、実際には怒ってなどおらず、ただ冗談交じりの口調で金城の言葉に答えた。すると、金城の表情が真剣……または、視線が亮平を射抜くようなものへと変わっていた。

「誤魔化すつもりはありません、必要が無いことですし……」

「この街に東堂会の人間で、それほど面倒な奴と接触出来る奴なんてのはお前しかいない。てか、この街で東堂会の名前を好き勝手使えるのは、お前しかいないしな」

「その通りです……」

金城の反応を確認しながら、亮平は「それで、だ……」

「お前はどついつつもりなんだ？ 東堂会は、日本人以外の組員をあまり好まない……というか、居ない」

「そうですね……」

「だがお前は、困うのも面倒なロシア人と接触しようとしている。もう一度言っぞ……どついつつもりだ？」

金城は一度亮平から視線を外し、座っていたソファから席を立ち、向かい側に座っていた亮平達から離れるようにして、ゆっくりとした足取りで夜の歌舞伎町を一望出来る、一面ガラス張りの窓の近くへと歩いて行った。その間、亮平と桜の二人は黙ったまま、金城の行動を見守っていた……。

そして金城は、亮平達に背を向けたまま口を動かした……。

「どついつつもりだ……と、聞かれれば。私が答えられるのは……」  
「答えられるのは？」

金城は一度、下に見える歌舞伎町を一瞥した後、背中を向けていた亮平達に振り返った。

振り返ったとき金城がしていた表情は、悲しそうな、それでもどこか決意というものが見て取れるものであった。

「……この関東から、これから東堂会の脅威となるであろう外国人マフィアの連中、または、その他の脅威を一掃する事です……」

金城の宣言とも言える言葉に、亮平ではなく桜が驚きの表情を見せたが、亮平はそれを無視し、話しを続けた。

「お前、それ本気で言ってるのか？」

亮平の言葉に、金城は一度頷きながら「ええ、本気です」とだけ答えた。

その返答に、亮平は「なんでだ？」とだけ返した。

「この街には、既に会長が昔に手を下してくれたお陰で、外国人が入ったとしても、集団を築くという事は無くなりました……」

「……それで？」

「ですが、他の“縄張”は違います……本来なら私達が昔から治めていた場所が、いまでは外国人が入り浸り、ましてや集団まで築いているのです」

金城の話しを、亮平と驚きから立ち直った桜は、静かに聞いていた……。



「その種類も様々ですが、あまりに多い人数が相手方に揃ってしまったせいで、既に我々では手の付けられないぐらいにマフィアの数は各地で増えていきます。……おかしいと感じませんか？ 本来なら私達が治めていた筈の“日本”が、御上の政策のせいで、今や外国人どもが自由に蔓延る様になってしまったのですよ？」

「それがただの外国人なら、私は文句など付けません」と、金城は付けたし……。

「蔓延っているのは寄生虫の様に、まさに我が物顔で元々私達“極道”が治めていた“縄張”を、好き勝手に荒らしている連中どもだ！」

口調や手振りが熱くなつて来た金城を見て、亮平はピクリと眉端を上げる。

「現に……横浜を取り仕切っている横浜は、中華街の連中に何度も襲撃を受けています！ その時は何とかりましたが、横浜の組員が三人殺されているんです。……それだけじゃない、榑橋が胸に鉛弾ぶち込まれたのも、西と東が組む事を恐れた外国人マフィアの連中がやった事なんですよ？ これは流石に会長が直々に出て行きましたが……次に起こった時も、多分私達が後手に回るでしょう。……それじゃあ、いつか私達の重鎮の一人二人、あいつらの勝手に消されてしまうかもしれないのですよ？ 組を失う悲しみは、誰でも分かる筈です……坊ちゃん、分かって頂けたでしょうか？」

黙っていれば、こちらが損害を常に出し続けるだけだ……それも、組という損害だ。

金城は、もうそれには耐えられないと、いまだ自身の話しを黙って聞いている亮平に言った。

そして、金城に問いかけられた亮平は、ゆっくりとソファから腰を上げ、窓際に立つ金城と正面から見据え合った。

「俺に言えるのは、確かに気にいらねえ……って事だ」

「……では、分かってくれたのですか？」

亮平は首を軽く振りながら「ある程度はな……」と答え、「だが金城？」と言葉を続けた。

「マフィアやギャングを一掃するとして、親父が許可したのか？」  
「……」

その問いに、金城は無言という返答をした……。それは、“していない”と言外で語っているも同然であった……。

「らしくねえな……組の人間じゃない俺が言うまでも無いが、極道つてのは“親”の命令を厳守するもんだ。それが、これだけの大きな“事”起こそうつてのに、話しすら付けてねえつてのはどうかと思っが……違つか？」

「……違います、これは私の独断ですから」

「なら、今から親父に許可を得て来な……話はそれからじゃねえのか？」

本来、金城はここ新宿を任された男だ……。

だが、それ以外の地域に干渉するとなると、東堂会を代表する“組”の許可がいる……即ち、亮平の父親である鬼島平八の許可が要するという事なのだが、金城はそれを取ってはいないと言外に語った。故に、亮平は金城に“許可を取れ”と言ったのだが、金城はそれを聞こうとはせず、ゆっくりと亮平に口を開いた。

「許可を得られる筈がありません……もし会長が許可を出したとなれば、それこそ日本極道対外国の“戦争”が始まってしまいます」「だったら何で、“事”を起こそうとしてんだ？」

日本極道のトップが外国との抗争を許可したとなれば、それを火種に全面戦争に陥る事は、いくらあまり考える事をしない亮平だとしても、分かっている事であった。

それでは何故に金城が“事”を起こす事を決断したのか、亮平には分からなかったが。次に金城が言った言葉で、亮平は漸く理解出来た……。

「坊ちゃんを知る筈ありませんが、最近、中華街のマフィア共が腕利きの“達人”を雇ったという情報を掴みました……。それに、他にも武器の売買や人員の増強にも力を入れてる様ですし、更には近いうちに、本国から違うマフィアの集団が居付くかも知れないと言う情報もあります……」

「困いを強くしてるって事か……」

「ええ、このままでは益々手が出せない状況に陥ってしまいます……」

……“私達の土地”であるにも関わらず」

「それで、お前が選んだのは……」

亮平の言葉に、金城が「はい……」と続いて。

「私“個人が独断”で動く事で、襲撃の事実には会長は関係が無いという事にします。もちろん、こちらの不手際と言われてしまいますが、そこは檜橋や横岸が居ますから大丈夫でしょう……」

組織の一部が勝手に暴走をしてしまった……言い訳には少し弱い  
が、金城が抱く檜橋と横岸への信頼が、問題なく解決してくれると  
いう確信を生んでいた。

だが、ここで亮平が言葉を割って入れた。

「お前……それは無責任じゃねえのか？　いくら檣橋や横岸だろうと、何も無い状態の組織から暴走者が出た事をでっち上げるのは、難しいんじゃないのか？」

「ええ……“何も無い状態”なら」

亮平と向き合っていた金城が、徐に懐から携帯電話を取り出した……。

その様子に、亮平は訝しげな表情をしながら「何のつもりだ？」と、携帯電話を弄くり出した金城に問いかけた。

問いかけられた金城は、用が済んだのか……携帯電話を再び懐に仕舞い直し、再び亮平へと視線を向け、そして口を開いた。

「一応聞いておきます……坊ちゃん、私と一緒に、中華街に来る気はありますか？」

その金城の問いかけに、亮平は「行く気は無いし、お前を行かせるつもりも無い」と答えた。

この亮平の答えに、金城は一度顔を俯かせながら軽く「ふっ」と笑い、顔を上げた……。

「なら、私は“事”を起こすのに邪魔な存在を排除するだけです……」

瞬間、亮平の表情が鬼気迫るものへと変わって行った……。

「金城……親父の代わりに、俺が“ケジメ”つけてやる」

そう言いながら、亮平は窓際に立つ金城へゆっくりと迫って行く。

亮平と金城の間には、一つの大きな執務机が存在していた……。だが前を進む亮平は、その執務机の下へと辿り着くと、机端の中心を右手で掴み取り、そのまま片手で“持ち上げ”、まるでゴミ袋を捨てるかのような気軽な動作で、大きな執務机を左側にある大理石の壁へと放り投げた……。

放り投げられた机は亮平の軽い動作とは反比例して、風を爆ぜながら大理石の壁へと衝突した瞬間、その木製で出来た造型を一瞬で粉々に分解させてしまった……。

それを見た金城は「あらら、今の机、結構高かったですよ？」と、軽口を叩く余裕を見せていた。

そして、亮平が机とセットで置いてあった社長椅子を退かした所で、亮平が金城の目の前に到達した。

亮平と金城の身長差は頭一個分ぐらい開いていおり、亮平が金城を見下ろす形となっていて。また、亮平の鬼気迫る表情と醸し出す空気が相まって、普通の人間なら亮平のことを直視出来ないほどの威圧感を放っていた。

「歯、食い縛れよ……」

そして亮平が腕を力ませながら、金城に言葉を吐いた……。

しかし金城の表情に恐怖はない、むしろ上等だとばかりに挑発的な目を亮平に送っていた。

だがここで、この部屋に一人の男と、その男に担がれた女が入って来た……。

「パンツ！」と開かれた両開きの扉……そこから現れたのは、紫の欲情的な下着姿の、スタイルも見事と言うほか無い美女を背負った、熊の様な巨軀を誇る大男……。

その肉体は、着ているスーツがはちきれんばかりに発達しており、岬越寺の矯正を受ける前の亮平よりも大きな肉体をしていた。

顎はどんな攻撃にでも耐えられそうな、四角く角ばった強靭な形

をしており、また、それを補助するかのように、丸太の様に太い首がその頭を支えていた。頭の付け根から三角筋がある肩まで、まるで撫で肩の様に下り坂を描いていた僧帽筋だが、良く見れば鎖骨との間に大きな“くぼみ”が存在しており、これが異常に発達した筋肉だという事を証明していた。胸はもはや形容し難いほどに発達していて、たとえ銃で射抜かれても心臓には達せない、そんな想像を彷彿させてしまう程、厚い胸板を誇っている。腹筋はスーツのボタンが絞めれなかったのか、腹部の箇所だけボタンが外されているが、スーツのタレ具合からいって、腹が出ている体系ではないのが伺える。腕は成人女性のウエストよりも太く、スーツ越しからでも、その力強い“カット”が浮き出していた。

大男の体系は、正面から見ても逆三角形なのだが、あまりにも大きな肉体のせいで、その事実を忘れそうになってしまふ程であった。髪型は金髪のサイドが完全に刈り取られ、中央だけが残された、毛先を均等に切り揃えられた厳ついモヒカンをしていて。顔のパーツはどれも濃く、特に目元だとかは彫が深く、睨まれたのなら相当な威圧感を発するであろう、影を作り出していた。

扉が開けられた音に、亮平と、先程から静かに黙り続けていた桜が振り向くと、その大男が発する威圧感に、桜は頬に嫌な汗が伝ったのを感じ、亮平は少しだけ楽しそうに口端を釣り上げた。

「あれが、“イワン・モロゾフ”か？」

「ええ、モロゾフが来てしまつては、坊ちゃんの相手をするのは残念ですが私ではなく、あちらのモロゾフの方になります」

「私は、ここで坊ちゃんと戦う以前に、倒れる訳にはいきませんから」と金城は言葉を続けた。

そして、部屋中の視線を集めたモロゾフは、肩から背負っていた下着姿のレベツカを地面に降ろし、正面にいる者達を見据えた。

「金城、私が戦う相手はその男か？」

モロゾフはその太い指で亮平を指しながら、窓際にいる金城に問いかけた。

そのモロゾフの問いに、金城は「そうだ」とだけ答え、そのまま窓際に居座った。

「桜、お前は下がってる……」

亮平も、いまだソファーに座り続けていた桜に下がる様に言いながら、歩を今度はモロゾフの方へと向かわせて行った。その間、桜はソファーから立ち上がり、そのまま亮平の邪魔になら無い様に部屋の隅へと下がっていく……この桜の姿は、言外に「兄がする喧嘩の邪魔はしない」と語っている様であった。

そして、亮平がモロゾフの下へと接近を果たした瞬間  
人は動いた

亮平はモロゾフの顔面をぶん殴ろうと、力み、固めた右拳を歩いていた状態から飛び掛るように、ノーモーションで放って行った

モロゾフはその亮平の右拳を、下に屈む事でやり過ぐすと、そのまま両腕を軽く開きながら、亮平のから空きとなっている懐へと突貫していった

第四十四話 金城の絵（後書き）

どうでしたか？

次回から、本格的に亮平対モロゾフが始まります。

分かり辛かった点や、意見などが御座いましたらお申し付けください。

では、前書きに書いた通り、サンプルとして二つのオリジナル小説を投稿しましたので、どうぞそちらも見ていただいて、出来れば感想……またはアンケートにご協力して下さいと幸いです（最近、チェックがかなり甘くなってしまうので……精神的に疲れてしまっ）。

では次回、お楽しみに下さいノシ



第四十五話 亮平VSモロゾフ(前書き)

あけおめ(いえーい!ー!)

どうも、新年一発目の更新です!!

今回は、ゲレゲレの主観と、趣味が織り交ざった戦いとなってます!!

楽しんでくれたのなら幸いです!!

## 第四十五話 亮平VSモロゾフ

“古代”格闘技から、近代格闘技へと伝承されていったものは、伝承されていく際に、失われた技術や知識などが“確かに”存在している……。

だが、物事とは大抵“進化”または“進歩”していくものだ……。こと格闘技においては、スポーツ化が進み、現在では安全面が考慮された上での戦いが繰り広げられている。この“安全面”について、なかなか玄人染みた人々は“疑問”を浮かべている。

本来、武術とは人を“壊し合う”ものだと言う者もいたり、さらには“殺し合う”ものだと言う者もいる……。確かに、それぞれの武術には危険な技が多々あるものだ。その“技”を封印した事によって、玄人達は大抵こう言う……。

リアル  
現実では、試合の戦い方は通用しない

もつともな意見だ……確かに、もつともな意見だ。

だがここで思い出して欲しい、物事とは大抵“進化”したり“進歩”していくものだと言う事を。

近代に至って、安全面を考慮する上で、グローブなどの防具の着用が義務付けられている。

これによって、格段に選手たちの負傷率が下がったのは言うまでも無いだろう……。

また、レスリングなどの組み技・寝技を主体とする格闘技でも、叩き付けられても大丈夫なように、地面にはマットが敷かれている。

“古代”格闘技では、グローブなどの概念が無かったために、拳の握りを特殊なものへと変えて、相手の弱点をピンポイントで突いたり、相手をなるだけ“壊す”という概念が主流であった。また、投げ技も土などの“柔らかい”地面に相手を叩き付けると言うより

も、相手を組み倒したりして、危険な関節技に持って行くものが主流であった……これも、相手を“壊す”ための技だ。

だが、近代格闘技では、厚いグローブをはめた状態で、“壊す古代”とは違い、相手をいかに上手く“倒す”かに概念が置かれている。

グローブをはめた状態で、如何に上手く相手の顎を打ち抜けるか……如何に上手く、相手の米神テンブルを打ち抜けるか……如何に上手く、相手の肝臓レバを貫けるか。

近代格闘技では、競技として、その様な概念に沿って鍛錬が行われている。

相手の顔面を上手く打ち抜けるために、小さなのであるパンチミットをひたすらに叩き続けたり。いかに相手を誘導できるかを養うために、鏡の前でシャドーボクシングを行ったり。自分のリズムで如何に戦えるかを鍛えるために、ロープやパンチングボールを使ったり……。

また、相手のボディーを強く打ち貫くために、大きなのであるサンドバックをひたすらに叩き続けたりと……これ程までに、現代格闘技は打ち抜く事に貪欲なのだ。

だが、それ程までに貪欲だとしても、人間の“顔”という小さな的を打ち抜くのは、プロの世界ともなると困難を極めるのだ……。

例えば、ボクシングの話しをしよう。

ボクシングとは、互いが互いに、二つの拳ナックルを駆使して戦う格闘技だ。

その技術は様々で、特に相手の攻撃から身を守るための手段が豊富だ。

ブロック・ウェービング・ダッキング・クリンチ……挙げればキリが無いが、ボクシングと戦う際に厄介なのが、“頭を動かすのが上手い”ということだ。

“頭を動かす”……これは単純に、相手に小さな“顔”と言つたを絞らせないための技術なのだ。

だが、それだけではない……。

考えて欲しいのは、停止した状態で急発進した相手を止めるのと、ステップやリズムを取って急発進した相手を止めるのと、どちらが止め易いか、または反応し易いかだ。人によってまちまちだが、一般常識では後者のほうが反応し易く、止め易いのだ。

つまり何が言いたいのか……それは、“頭を振る”という動作は相手のパンチを動く中の流れで避けやすくするための技術だということだ。

この技術は、“古代”格闘技には無い技術だ……なぜか？

それは簡単だ……ボクシングとは、如何に相手のパンチを避け、如何に相手にパンチを多く当てられるかを競う格闘技だ。

だが“古代”は違う……“古代”には、“連打”という概念が希薄なのだ。というより、“古代”は一撃という“幻想”に浸っているのだ。

“古代”の様に、一本拳や平手の目潰しなどの、“小さい”を正確に射抜き、相手を“壊す”ような技は、現実では通用しない。理由は簡単だ、ボクシングの試合で、12R、つまり36分間の間に、どれだけのクリーンヒットが出るであろうか？ 実力に差があれば、それはそれは出るかもしれない。だが、実力が拮抗した場合、相手のディフェンスが上手かった場合……最悪、一発もクリーンヒットが出ない試合もあるのだ。

それは、これまで説明してきた技術による成果とも言えよう。

ではここで想定してみよう、古代の格闘家と、近代の格闘家が戦った場合だ……。

古代はガチガチの軸を確り通し、重心を落とし、背筋が伸び、胸を張った、威圧感のあるガッチリした構えだ……また、地面に根を張ったように足裏は全て付けている。

対するは近代格闘技代表のボクシングだ……ボクシングは、相手の攻撃に反応するために肩でリズムを取り、的を絞らせないために頭を振り、軽かろうが重かろうが何時でも攻撃を出せるように膝で

モリズムを取っている……また、どんな攻撃だろうが対応できるように、地面に踵だけは付けていない。

最初に出るのは、やはり近代の方だ……。

近代は普段のグローブとは違い、剥き出しの裸拳を使って、左ジヤブを古代の顎目掛けて打ち放った。

普段重いグローブなどで枷を付けていた近代の拳は、古代の反応を上回るスピードで、古代の顎を打ち抜いた。だが、それだけでは古代は倒れない……古代は、近代が突き出した拳が何であれ、とにかく一撃か、それとも突き出された拳を取るかの判断を迫られていた。

古代が取った行動は、打ち終った近代の顔面目掛けて、当たれば八卦の平手による目潰しを放った。

だが、その目潰しは近代が前に屈んだ事によって避けられてしまう……ダッキングだ。

当たり前だ、つねに相手の攻撃に対応出来るように備えていたからだ。

ここで異変が起きる、古代が放った目潰しが引かれるよりも早く、近代が古代のから空きになった顎目掛けて、ダッキングからによる右アッパーを力チ挙げた。

だが、これは間一髪、古代が状態を反らした事によって避けられてしまう。

しかし、一撃という概念を持たない近代は、返しの刀、コンビネーションで避けた古代の顔面目掛けて、左のストレートを突き出した。

避けた直後の古代は、それに反応が出来ず、まともに貰ってしまった。だが、古代も戦場と言う場で培われた意識の強さで、なんとかそのダメージを耐え切った……だが、耐え切ったとしても、近代の攻撃は止む事は無い。

近代はそのまま右ボディーを……これは、古代が左腕で守った事により防がれた。

近代はそのまま左フックを……これは、古代の顎を掠め、古代を“一瞬”であるがふら付かせた。

だが、現実リアルと言う場で、一瞬のふら付きは、致命的な命取りになると言っても過言では無い。

その後は一方的だ……なぜなら、ふら付いた相手にすることは、攻撃を積み掛ける他無いのだから。

故に、古代はまともな攻撃を近代に対して一撃も入れる事無く敗れ去ったのだ。

これはあくまで想定の話しだ……実際には、もっと違っていたかもしれないが、顔面攻撃を避ける技術に長けた相手に対して、顔面攻撃を避けるではなく合わせようとする古代は、あまりにも脆いのだ。

これは、近代が古代よりも“進化”した上で出来た技術なのだから、当然と言えるだろう。

確かに、相手を“壊す技術”なら、古代の方が数段上だ。

だが、相手を“倒すだけの技術”なら、KOを狙うだけの技術なら、近代は古代の遙か先に居るだろう。ルールに守られた戦いで勝敗を決めるのは、相手をどう“倒す”かだ、決して“壊す”かではない。

故に、近代は古代よりも、相手を“倒す”という技術が優れていると言えるのだ。

一瞬の隙が、一生の敗北を生み出す……よく出来た言葉だ、確かに現実リアルではそうだと言えよう。

だが、あえて言わせてもらおう……一瞬の隙とは、相手を“倒した”だけでは不足なのか？

更に言えば、相手を“壊す”のなら、“倒した”後では遅いのかと……。

また、古代の様に複雑な一撃を狙うより、ただ相手の顔面を素早く殴った方が速いのでは無いかと。

そして、ここまで記した事を踏まえて、作者の考えを述べれば……

…。

路上<sup>リアル</sup>では、試合<sup>かそつ</sup>の戦いは通用するということだ……。

そして現在……。

近代格闘技の代表格とも言えるレスリングと戦っている亮平は、そのレスリングの“進化”を身に持って痛感していた。

「おっツ!?!」

亮平の右ストレートを、下に屈む事で避けたモロゾフは。

そのまま、両腕を肩幅に開きながら、亮平のから空きになった腹部に向けて、地面を蹴りだし、己の右肩を突貫させた。

モロゾフの右肩が亮平の腹部にめり込んだ瞬間、ぶつかつた衝撃で勝ったモロゾフは、そのまま亮平の腹回りに、その丸太の様に太い両腕を回す事で亮平の体をクラッチし（掴み取つたという事）、そのままの勢いで亮平の体をかち挙げた。

子供の様に持ち上げられてしまった亮平は、何とかこの後に来るであろう衝撃を避けるために、モロゾフの背中のスーツを両手で掴み取る……。

瞬間　　亮平の内臓という内臓が、先程まで亮平が持ち上げられていた高さに取り残された。

「フンツ!?!」

亮平を持ち上げたモロゾフは、亮平の背中に回していた両手を、今度は両方とも亮平の裏腿辺りに移動させ、亮平の腹部に当てている右肩を基点にさせながら、裏腿を押さえている両腕を思いつき引き、その巨体をまるで頭から地面に叩き付けるように、地面へと前のめりで突っ込ませていった。

すると、亮平の体がモロゾフの右肩を基点にしながら“くの字”に折れ曲がり、その背中をモロゾフ同様、地面へと落下させ始める。だが亮平は、この時のためにモロゾフの背中のスーツを掴み取っている。

しかし、その行為はモロゾフが突っ込ませていた上半身を、地面スレスレで急停止させる事で無効にさせてしまった。

ビリビリビリ！！！！

「ッ！？」

高速で落下させていた亮平の体をモロゾフが急停止する事で、今まで働いていた慣性の法則が止まり、それによって起きた爆発的なインパクトのせいで、亮平が掴み取っていたモロゾフのスーツが限界を迎えたのだ。

そして、掴む場所を失った亮平を待つのは、下に構える大理石のテーブルと、同じく硬い大理石の地面だ……。

バガア！！！！！！

まずはテーブルだ、モロゾフに背中から激突させられた亮平は、硬い大理石製のテーブルを容易に砕きながら、更なる衝撃を迎えた。一旦テーブルを挟んだ程度では、亮平が背中から地面に落下する速度を弱めるには至らず、亮平はそのままのスピードでテーブルと同じ大理石で出来た地面へと衝突した。

ドオオオン！！！！！！

「はうッ！？」

亮平の背中が地面に衝突した瞬間、部屋中に亮平と地面が衝突した衝撃が響き渡った……。



亮平の背中が衝突した地面は、亮平の背中そのままのくぼみを作り出し、周囲に散らばっていたテーブルの残骸を飛び散らせていた。

そして、地面に衝突した瞬間、頭に至っては、まるでバスケットボールのように、地面に後頭部を激突させた瞬間に“バウンド”していた……。

襲い掛かる重力の反動による胸部への圧迫感のせいで、骨を軋ませ、また、背中から強い衝撃を受けた事で、肺に溜まっていた空気が一気に抜け出していった。頭には後頭部から伝わった……形容し難い衝撃。亮平の視界は一瞬ブラックアウトを起こし、次に目を覚ました時には、周囲に冗談ではなく閃光のような火花が散っていた……。

閃光が瞬く視界の先に、自身を見下げるモロゾフの姿があった。

このままでは不味い……亮平の勘がそう訴えかける。

現在、亮平とモロゾフの体制は。亮平を地面に叩きつけた状態でモロゾフが足を立ったまま、前屈みの状態で亮平を見下ろしている。対する亮平は、両足をモロゾフに取られたまま、背中を地面に寝かせている状態だ。

このポジションは、圧倒的に亮平が不利だ……。

故に、モロゾフが動き出す。

モロゾフは亮平の右足を捉えていた左手を、今度は亮平の顔面へと押し付けた。その間、亮平も抵抗しようとはしたが、先程の衝撃が尾を引いてしまい、反応と言う反応が出来ないでいた。

そしてモロゾフは、地面に背中を預けている亮平の顔面を抑えた左腕を足の様にして、亮平の顔面に全体重を押し付けた……。

「ぐっツ！？」

モロゾフの体重は約150kg……その巨躯で顔面を押さえ込まれれば、流石の亮平も歯を食いしばる他無い。

だが亮平には、この左手を退かす術がある……自身の顔面を押さえ込む相手の左腕の前腕部を、亮平は自身の右手で鷲掴みにした。だが掴んだ瞬間、モロゾフの左腕が突然相手側に引かれた……すると。

ゴシヤツッ！

「ッッ！！」

左腕を引かれたのと同時にモロゾフの前腕部を掴んでいた亮平の体は、強制的に掴んでいた右手もろとも引つ張られ、体と地面の間に僅かな空間が出来た瞬間に、その顔面にモロゾフの巨大な右拳を打ち下ろされた……。

モロゾフの拳をモロに貰ってしまった亮平は、地面から僅かに浮いていた後頭部を、再び硬い地面へと激突させ、顔面にモロゾフの巨拳をめり込ませた。

モロゾフの拳を受けた顔面からは、夥しい量の鼻血が噴出し。モロゾフの拳が引かれるのと同時に、再び頭を地面に“バウンド”させた。

これほどの光景を、まだ戦い始めて一分と経っていない時間で作り上げたモロゾフは……。

この時、焦りを感じていた……。

故に、何度も何度も、その“右”の巨拳を亮平の顔面に打ち付ける。

「（この男ッ！ 先程から打っていると言うのに、右手の力が緩まないだど！？）」

モロゾフが巨拳を打ち付けるたびに、亮平の頭は地面から“バウンド”し、顔からは既に切った目尻や鼻から血を飛び散らせている。だが、それでも尚……亮平はモロゾフの左前腕から、己の右手を

放そうとはしない。

そしてそれに痺れを切らしたモロゾフが、先程から立っていた亮平の股下から、左足を亮平の股から右脇腹付近へと送り込んでいった……その時、だ。

モロゾフが両手を使い始めたことでフリーとなっていた亮平の左足が、モロゾフの鳩尾付近へと添えられた……。

瞬間　モロゾフの体が浮き、裕に5mの距離を後ろへと“弾かれていった”。

「!?!」

ダメージこそ無いものの、モロゾフの表情は驚愕に染まっていた。モロゾフを亮平の下から弾いたのは、鳩尾に添えられていた亮平の左足だ。

証拠に、いまだ地面に背中を預けている亮平の左足は、モロゾフに足裏を向けながら突っ張っている。

モロゾフが驚愕に浸る中、亮平がゆっくりと体を起こしていき、大してダメージが無かったかのように立ち上がって行った。

「なるほど……これがレスリングか」

既にボロボロの地面の上に立ち上がった亮平は、夥しい量の血を流す鼻をどうにかするため、まずは鼻筋を片手で整え、その後、片鼻を指で塞ぎながら「フンッ!」と鼻から鼻液交じりの血液を噴出した。

「大した者だな、あれほどやられれば、普通はそこで終わってるものだが……」

「うたれ強さは結構自信があるが……正直効いてるっちゃ効いてる」

何事も無かったかのように立ち上がった亮平であったが。

いまだに視界の中では火花がスパークしていて、頭は頭痛の様な痛みを訴えながら眠気を誘ってくる。

効いている……それも、なかなか酷い脳震盪を起こしたようだ。だが立っている、それだけが両者の間では必要な事であった。

「初めて地面に叩きつけられたが、これは効くな……」

「ふん、なるほど。だから受身もまともに取れなかったのか」

亮平は話しを続けながらも、鼻血で汚れたワイシャツを破り捨てた。

それにより、亮平は上半身裸の上体となったのだが、既にそれはモロゾフも同じ事だ。

「なかなかビビったぞ？ 何せ、咄嗟にアンタのスーツを掴んじまったぐらいだからな」

亮平の言葉に、モロゾフは「それが普通だ」と答えた。

軽い会話を続ける二人は、各々別々の意味で相手に驚いていた。

「（不味いな……野朗がぼやけて見える）」

亮平は自身が思っていた以上にダメージを受けていた事に、歯噛みした。

前記した通り、格闘技とは“進化”していくものだ……。

それは何も技術だけではなく、環境も“進化”していくのだ。

その環境という項目に至っては、レスリング程、現代の環境がもたらした恩恵を受けている格闘技は無い……。何故なら、戦う主戦場が古代の土という地面から、現代のアスファルト、またはコンクリートに変わったからだ。

この地面の硬さが“進化”した事によって、レスリングや投げ技格闘技が受けた恩恵がどれほど大きいのかは、もはや説明不要と言えるであろう。

先程亮平は、硬い琥珀色の大理石の地面やテーブルに、その体を思いつき叩き付けられた。それも、後頭部の強打というオマケ付きで。その後、一瞬ブラックアウトを起こした亮平に、モロゾフが追い討ちとばかりに、亮平の上からパウンドを仕掛けた……普通の人間なら、最初のタックルで事が切れていたであろう。

だが亮平は立っている……本来、ふら付いている足や意識を相手に悟られない様にだ。

「（この男の握力……なるほど、金城の言った通りだな）」

モロゾフは亮平に先程掴まれ、骨に亀裂が入ってしまった左前腕を気にしていた。

先程優位に見えていたあの状況……実は、追い詰められていたのは、ある意味でモロゾフの方であった。

長年の経験から、最初のタックルで勝負が着いたと判断したモロゾフは、不覚にもその予想を裏切られ、いまだ意識を失わない相手に執拗なパウンドを仕掛けた。

最初こそ、今度こそこれで終わりだろうと思っていた……だが、そこでも予想が裏切られた。

相手は無意識の防衛本能であろう……顔を押しさえる自身の左腕を、咄嗟に掴み取ったのだ、そこまでは、今までに何度もあったことだ……世界中には、驚くほどのタフネスを誇る人間も居るのだから。

だが、目の前で不敵に佇む“極道の男”は違った……。

本来なら、後頭部を強打して力が入らない筈の、あの状況でだ。

男はなんと、モロゾフの太腕を片手で鷲掴みにし、頑丈な骨に亀裂を入れるほどの握力を込めてきたのだ。

そしてその後の行動も、モロゾフを驚かせるものであった。  
あのパウンドを仕掛けられた絶望的とも言える状況で、男はなんと左足一本で自身より重い男を跳ね除けたのだ。

目の前の男、鬼島亮平と戦う際に、金城から受けていた注意を今更思い出し、モロゾフは「ふっ」と自傷的な笑みを漏らしてしまっ  
た。

あの時、必死に足掻いていたのは、パウンドを仕掛けていた自分  
の方だと……。

そして誓う……これからは目の前の男と、殺し、殺されるの勝負  
をしよう。

「どうした？ いきなり笑い始めて」

その笑みに気付いたのか、亮平がモロゾフに訝しげな視線を向け  
ながら問うたが。モロゾフはそれを「なんでもない」と返して、視  
線だけで亮平に自身の意思を伝えた……。

「ふん、真面目な眼しちゃって……」

「軽口を叩く亮平だが、モロゾフの視線を察したのか。  
己が纏う空気は無意識の内に張り詰めさせて行く……。」

勝負というのは、いつも唐突だ……。

そして、二人が始めたばかりの戦いも、唐突に第二接触セカンドコンタクトを迎えた。  
亮平はただひたすら、何時も通りに悠然とモロゾフに歩み寄って  
行く。

対するモロゾフは、軽い前傾姿勢を取りながら、脇を絞め、両手  
を亮平に向けながらブラブラとさせている……その威圧感は、いつ  
亮平に牙を剥いても可笑しくは無かった。

亮平が歩み寄ることで、ゆっくりとモロゾフとの間合いが狭まっ  
て行く。

そして、動いた

「ッ！」

亮平の視界から、モロゾフが唐突に消えた

ドンッ！！

そして次に現れたのは、先程と同じ様に亮平の腹部に右肩をめり込ませた時であった。

左足で地面を蹴り、右足と右肩が前に出た瞬間のインパクトを、亮平の腹部に伝える……。

およそタツクルの様な技は、相手との第一接触で当たり勝つ事によつて、その後の展開に繋がられる。

モロゾフの両腕が、亮平の膝裏を取ろうと伸ばされた……。

だがモロゾフの両腕が亮平の膝裏に伸ばされた瞬間、自身の腹部に肩をめり込ませているモロゾフの背中に覆いかぶさるようにして背中から、まるでクワガタのようにモロゾフの腹回りを両腕で挟み込み、タツクルの姿勢を取るモロゾフを地面に押し潰すために、掴まれそうになっていた両足を後ろに引き、全体重をモロゾフの背中に押し付けた。

タツクルディフェンス……これを亮平はレスラー相手に、二度目のタツクルで対応して見せた。

これに、上から亮平に体重を掛けられているモロゾフは驚愕の表情を見せる。

また、この戦いを静観していた金城の表情も驚愕に染まる……。

「（あのステレス・タツクルを初見で止めますか……）」

突然視界から消えるモロゾフの巨躯、そして次に現れた時は、既

にタツクルの姿勢に入っている。

この一連の動作は、全て一挙動で行われ。現役時代のモロゾフは、このタツクルの事を世界にステレス・タツクルと言わしめた……。

ステレス・タツクルの正体……それは、モロゾフの巨軀を活かした“高い姿勢”から、一瞬の内に屈んで“低い姿勢”を作り出し、相手が自身の事を見上げている視界から、一瞬であるが消えるというカラクリだ。だがこのタツクル、ほぼ自然体から一瞬にして地を這うような姿勢に変わるため、柔軟な股関節と、強靱な足腰の強さが無ければ、その状態から強いタツクルを行う事は出来ないのだ。

それを亮平は、タツクル受け二回目で見切った……というより反応して見せたのだ。

モロゾフを潰そうと、相手の背中に全体重を押し付ける亮平……。亮平に本気で腹部を挟み込まれ、想像以上の圧力を上から受けるモロゾフは。とにかくこの状況を脱しようと、亮平の圧力に背筋だけで耐えながら、地面に杭つけていた両足を掻き出し、亮平を壁際へと追いあつていく……。

その間、地面に散らばったテーブルの破片や、部屋に備え付けられていたソファを押しのけながら。猛牛の様に暴れまわるモロゾフを、亮平は地面に押し潰そうと上から掛ける体重を更に強めていった。

だが、その行為も直ぐに終わりを見る……。

亮平が後ろへと突っ張っていた両足が、いつの間にかに大理石で出来た壁際に接触していたのだ。

それを好機と見たモロゾフは、上から圧力を掛ける亮平を捲り剥がそうと、地面を掻く足の回転を上げ、壁際に追いやられた亮平を、更に壁へと縫いつけようとした。

しかし、ここで亮平が動いた……。

本来、確かにこの場では耐え切ろうとするのは愚行とも呼べる行為なのだが、亮平が取った行動は、更なる愚行とも呼べる行為であった。



亮平がモロゾフを押さえつける力を、更に下へと強めた……。これに気付いたモロゾフは、更に足で地面を掻き続ける……。瞬間、モロゾフの右脇腹に亮平の左膝が深々と突き刺さった

「オゴオツ!？」

唐突に膝蹴りを貰ってしまったモロゾフが、亮平の膝蹴りに持ち上げられるようにして地面から両足を浮かせた……。

亮平が取った行動……それは、これまでモロゾフの背中から腹部に回っていた両腕を一度解き、そのままモロゾフに体重を預けるために顎まで置いていた上半身を起こし、モロゾフの猛進を右足一本だけで一瞬ではあるが耐え切り、そこに出来たスペースを見逃さずに左膝を打ち上げたのだ。

あまりの威力に苦悶するモロゾフに、亮平の追撃が迫る……。格闘家として、決して腹を抑えるなどという隙を見せないモロゾフは、自身の後頭部に向けて迫る亮平の右肘を、上半身を“ガバ!”と起こす事で難を逃れた。

そして一度、壁際にいる亮平から距離を取った……。

「正直、押し込まれたのは初めてだわ……」

距離を取ったモロゾフに、まるで世間話でもする気軽さで話しかける亮平。

「（不味いな……）」

対するモロゾフは、先程の一撃で左脇腹の肋骨が逝ってしまった事を確認していた。

しかし亮平の方も、実際には余裕が持てる状況では無かった……。

「(やばい……さつきよりも臉が重くなってきた。それに……)」  
先程のダメージが更に尾を引き、亮平の意識が徐々に薄れ始めて行く……。

そして更に……。「(またこれが……)」ギャガツ！

亮平は意識の内側で、以前感じた事がある“獣”が暴れ出したのを感じていた。

それは、以前よりも強く……そして獰猛な“獣”。

“獣”は枷である“理性”と言う名の鎖を引き千切ろうと、亮平の内側から肉体を引き裂く様に暴れまわっている……おそらく、久しぶりの強者に興奮しているのだらうと、亮平は自身の狂気を鎮めるかのように当たりを付けた。

「(……乱れているのか?)」

佇まいこそ堂々としている亮平だが、相対するモロゾフには異変に気付かれていた。

それは長年の経験キャリアで培ってきた、勝負勘……。

モロゾフはその勝負勘に従って、痛む脇腹を無視しながら、なにやら反応が鈍っている亮平へと突貫して行った……。

壁際で佇む亮平に、モロゾフはこれまで同様、右肩でのタックルを仕掛けていった。

その行動に、やや反応が遅れたものの亮平も動き出す。

亮平の視線は、先程までの経験から低空で迫ってくるモロゾフに合わせている……。

だがここで異変が起きた……。

先程まで、突き出す上半身を地面と平行にして突っ込んでいたモロゾフが、突然亮平のサイドに回るかのように、右肩を開き、まる

でクロールでもするかのように、亮平に向けて胸を開いたのだ。

亮平は、自身の右サイドに回ろつとする巨軀の頭を、その両眼で追った……追ってしまった。

刹那

ゴガッ！！！！！

モロゾフの姿を追った亮平の左米神に、まるで耳元から銅鑼を鳴らされた様な衝撃が走ったのだった。

第四十五話 亮平VSモロゾフ（後書き）

ふっふっふ……たぶん、最後亮平が何を喰らったのか。

総合格闘技が好きなら、一発で見抜けましたよね？

まあ、今回のタツクルの話は、ゲレゲレのラグビー経験と、T  
Vで見た吉田沙織の試合を見て書きました。

ですので、分からない点がございましたら、お申し付け下さい。

あと、近代と古代の話は、完全にゲレゲレの主観ですので、信  
じなくても構いません。

ま、路上で一番戦いたくないのが、柔道とレスリングと……。

そんな考えがゲレゲレの中にはあるもので、気にしないで下さい。

あけおめ（ひゃっふ〜い）

ノシ

第四十六話 鬼島の血（前書き）

今回はかなり更新を遅らせてしまい、まことに申し訳ありませんでした。

どうしても、うまく書けなかったもので……。

では、今回は、少しいままでよりも血生臭い感じですが、楽しんでいただければ幸いです。

## 第四十六話 鬼島の血

イゴール・ボブチャンチン……ウクライナ出身の元総合格闘家だ。彼はもともとミドル級（総合では93?以下）の骨格をしており、統合的に見ればヘビー級の体格では無いのだが。何故か彼は、そのヘビー級で自身よりも大きな選手たちからKOの山を築いていた。

その秘密は、彼独特の軌道を描きながら放たれる強烈なパンチ……『ロシアン・フック』によるものが大きい。

この『ロシアン・フック』とは、タツクルの姿勢から上半身を相手側に開き、まるでクロールの息継ぎの状態から、野球のオーバースローの様に大振りのパンチを打つものだ。

彼はこの空手とも、キックボクシングとも違う従来とは異なった<sup>ナックル</sup>拳で、レスリングのトップアマも、ブラジリアン柔術の一流どころをことごとくマットに沈めて来た……。

ここで踏まえて欲しいのは、彼がもともとミドル級の骨格を持っていた事と、その体格でもヘビー級の巨人たちを、この『ロシアン・フック』で沈めて来たという事だ……。

亮平の左米神に、モロゾフの右拳による“ロシアン・フック”が衝突した……。

この打撃を受けた瞬間、亮平の首は細かい筋線維が千切れる音を発し、骨を軋ませ、脳内では直接銅鑼を鳴らされた様な衝撃が走っていた……亮平の頭が、弾かれた様に壁へと吹き飛んだ。

モロゾフの全体重、約150kgが乗せられた、クロールの様なテレフォンパンチ（大振りなパンチの事）……“ロシアン・フック”。

本来なら、このようなパンチは避けられて然るべきなのだが……こ

のパンチのために、モロゾフは今まで亮平に“餌”を撒いていたのだ。

これまでモロゾフが攻撃を仕掛ける際、または亮平に接近する時はいつも上体を屈ませ、前屈立ちで相手に突っ込むタツクルの姿勢だ。だが今回だけは、タツクルという上半身を地面とほぼ平行にさせる姿勢ではなく、クロールの様に亮平の右横で胸を開けた姿勢だったのだ（亮平から見て、右肩よりも少し外側の位置）。

ここで、今までモロゾフが撒いてきた“餌”に亮平が食いついた……。

これまで亮平は、モロゾフのタツクルを連続で二回受けている……そして、亮平は素人だ。無意識の思考のうちに「次もタツクルだろう」と当たりを付けてしまっていた……これが不味かったのだ。

亮平はモロゾフのタツクルを警戒していた、故に体勢を屈めたモロゾフの頭を目で追ってしまった……。

だが、来たのはモロゾフの全体重の掛かったテレフアントパンチ……不意を突かれた代償としては、あまりにも大き過ぎるものであった。

ゴスツッ！！

モロゾフの“ロシアン・フック”で亮平は、殴られ弾け飛んだ勢いで右側頭部を大理石の壁へと衝突させた、瞬間……部屋中に鈍い音を響かせた。

左の米神を強打された直後の、右側頭部の衝撃……

がくっ

亮平の膝から、力が失われる。

亮平にはこの瞬間が、本当に一瞬に感じていたが……周囲にいたモロゾフや金城、レベツカにそして……桜には。

亮平が壁に右肩を預けながら、体を持たれ掛けるようにズルズルと地面へと沈んで行く様に見えていた……。深く、深く亮平の体が地面へと沈んで行く……。だが、動きは非常にゆっくりだ。

「(やべえ……)」

何故なら亮平の意識は、まだ失われていなかったからだ。

しかし体が、特に下半身がまるで痺れたかのように亮平の命令を受け付けない……。完全に、脳が揺れていた。

意識が失われたのなら、人間は糸の切れた人形のように地面に轟沈する……。

それを知らない筈が無いモロゾフは、この亮平の姿を一瞥したのち

仕留めに掛かった……。

壁に右肩を持たれ掛けながら崩れていく亮平の左側頭部に、モロゾフは奥足であった右膝を、上半身を反らせながら突き出した。

その打ち方は、まるでシーソーの様にモロゾフが上半身を反らしたと同時に、奥足であった右膝が亮平の左側頭部に突き刺さった。

ゴシヤツ!!

硬い膝と、亮平の側頭部が衝突する嫌な音が部屋中に響き渡った……。

その後もモロゾフの猛攻は続く……。

膝で壁に縫い付けられた亮平の頭を、モロゾフは左手で鷲掴みにしながら亮平を壁に押し付け、亮平を無理矢理立たせ、左手を離し、引いたと同時に右の巨拳を亮平の顔面に叩き込んだり……。



顔を殴った直後に、返す刀で右肩を思いつ切り引きながら、腰を捻り、左肩を前に出したと同時に今度は左の巨拳を、亮平の肝臓レバーに突き刺したり……。

そのコンビネーションは留まる事を知らなかった……そして、この惨状にレスリングなどは無く、ただ相手を殲滅するだけの、徹底された打撃が繰り返されただけであった。

「ッ！」

部屋の隅で、自身の兄が殴られ続ける様を、桜は唇を噛み締めながら耐えていた……既に、噛む力を入れすぎたせいで、少量の出血が見らる程に。

「よく耐えてますね、坊ちゃんもお嬢も……」

「金城ッ！」

そこに近づいて来た金城に、桜は相手を噛み千切らんとするほどの殺気を込めた睨みを向けた。その睨みは、桜の端正な顔立ちが、憎悪に歪む程のものであった……。

「坊ちゃんに“下がれ”と言われてただけで、全てを察してしまうお嬢は……今の状況をどうお考えで？」

桜の睨みを物ともせず、金城はいまだ暴力の渦に飲まれている亮平を視線で指し示しながら、若干の微笑混じりに言葉を、桜に投げた。

「亮兄が直々に“ケジメ”を付けると仰っていないければ、私は今からでも、お前を切り刻んでやりたいよ……」

あまりの怒りに桜の口調が変わっていく……その口調は、極道の世界で生きる女そのものであった。

それを金城は「いい娘過ぎるのも、考え物ですね……」と、少しだけの思案顔を浮かばせながら、桜から離れて行った……。

金城が歩いて行った先は、扉付近でいまだ手足を縛られ、芋虫の様に転がっていた下着姿のレベッカ・チェンバースの下だ……レベッカは、この亮平とモロゾフの戦いに背を向けながら、頭を開いている扉へと向けていた。

「なかなか、しぶとい方の様だ……」

「目を覚ましたら、いきなり暑苦しい男二人が喧嘩してるのよ？ 私はこんな格好だし、普通の女だったら逃げたくもなるわよ……」

顔だけを金城に向けるレベッカは、相変わらずの口調で金城に、そう言葉を吐いた。

金城は「確かに……」と呟きながら、有無も言わずに地面に転がる、下着姿のレベッカを肩に担ぎ上げた……。

「あら、私はこれからどうなるのかしら？」

「散らばって観戦するより、纏まって観戦したほうが楽しいでしょうっ？」

「確かに言ってるけど……この場合、そういう事言う奴って、映画じゃ大抵最後に、主人公ヒロイにやられるのよね」

肩に担がれても尚、軽口を叩くレベッカに、金城は「その可能性がある遺伝子を、継いでる男ですからね……」思い耽る様に呟いた……。

亮平を壁に張り付けながら猛攻を強いるモロゾフは、底知れぬ不安と異変に気付いていた……。

モロゾフの右拳が、亮平の顎を捉えた……。

既に亮平は、壁に背を預けながら辛うじて立っている状態だ。

こんな状態で、不安も何も無いと言い切れるのは……極少数だろう。

「（何なのだ、このタフさは！？）」

先程から、体重差およそ40kgはある自身の拳や蹴りを、目の前の男はノーガードで“受けきっている”……。

最初は、もう既に、意識が事切れたのかと思った“ノーガード”。

だが、様子がおかしいと気付いたのは、殴り続けてからおよそ“二分”が経過した先程であった。

「（この男、先程よりも“硬く”なっているッ！？）」

モロゾフの左フックが、亮平の顎を打ち抜く……いや、打ち抜けず、顎に衝突したものの、亮平の顎は一瞬モロゾフから見て右に弾かれるだけで直ぐに元の位置に戻ってしまう。

そして、再びのノーガード……。

もともと亮平のスタイルはガードなどを上げず、両手を普通に垂らしている……もつと言えば、ただ突っ立っているだけの構えなのだが。これは、それとは違った……。

そもそも、亮平は相手の攻撃を受けるか、それとも避けるか、この二択を気分で判断し反応する、あまりにも気分屋なやりかたなのだが……こと今に至っては、その“反応”すらしない完全な“ノーガード”。

そして更に、モロゾフの不安を掻き立てる異変が、亮平の体に起きていた。

モロゾフが150kgの肉体を総動員しても打ち抜けなかった亮平の顎……。

「（何だ……この首はッ！）」

その顎への衝撃を吸収した亮平の首と僧帽筋に、まるで網の様な血管群が浮き出ていたのだ。

尋常ではない血管の浮き出方……更に、その血管の網に抑えつけられるようにして、亮平の首や僧帽筋の筋肉が、今この場で“バルクアップ（筋肉増加）”していた。

「ドーピング……」

「違いますね……」

この光景を地面に転がりながら見ていたレベッカは、あまりの驚きにそう呟いてしまったが、その呟きに金城が答えた……。

金城の視線は、一心に亮平へと向けられ、そして確信していたかのように言葉を吐いた。

あれが、鬼島の血です

そして、金城が話しを続ける……。

「物事というものに、“進化”や“進歩”というものは着き物だ……」

金城が話しを続ける中、壁際にもたれ掛かっていた亮平が、体を壁からゆっくりと離れた。

この様子にモロゾフは警戒し、両腕を上げ、前足である左足の膝を少しだけ曲げ、後ろ足である右足の膝も少しだけ曲げながら、右足の踵を少しだけ地面から浮かせた……いわゆるファイティングポーズというものだ。

「キリンは高い場所の餌を得るために、その首の長さを“進化”させていき。ライオンや豹といった肉食獣は、狩を確実なものとするために爪や牙を“進化”させ、そしてスピードをも“進化”させていった」

ゆっくりと、そして確実に、確りと佇んでいる目の前の……自身  
の猛攻をひたすら受け続けた敵に。今までの常識を照らし合わせて  
しまったモロゾフは、最大限の警戒を持ってしまったせいで、動け  
ないでいた。

「もちろん、それは人間も同じです。人間は食料を確保するために  
“火”という偉大な発見をし、さらには周りある脅威と対峙するた  
めに、その知恵を“進化”させていった。この“進化”によって、  
世界が地球からして、ほぼ一瞬に様変わりした。その中には兵器も、  
このコンクリートジャングルも、そして“闘争”も含まれています」

あまりの不信感にモロゾフが無意識のうちに後退ると、亮平がゆ  
っくりと動き出した……まるで、先程までのダメージなど無かつた  
かのように、ゆっくりと、そして確りと歩いていった。

「人は単体ではあまりにも脆い……それも、同族である人間に容易  
く殺されてしまう程に。だが人は、自身の身を守るために“武術”  
を編み出した。……その武術とは、最初こそ喧嘩の延長みたいなお  
粗末なものでしたが。年月を越えるに連れて、その技術は“進歩”  
していき、更には己の肉体を一般の者とは違う肉体にする鍛錬法ま  
で編み出してしまった。これは単純に、武道家達による“進化”と  
言っても良いのではないだろうか？ だがその進化も、その進歩  
も……弱者が一生懸命に背伸びしたに過ぎないものだとしたら？」

そう語りながら、金城は亮平の威圧感に後退りするモロゾフを指

差した……。

金城がさした指に、あまりの出来事に呆然としていたレベツカと、自身の兄に起こった事が理解出来ない桜が視線を向けた。

「先程までモロゾフが行っていた打撃は、最初の“ロシアン・フック”以外、全てボクシングのもので。ボクシングというのは、小さなパンチの削りあいという人もいますが……そうじゃない、ボクシングにもちゃんとあるんですよ“決め”のパンチというものが」

金城がさしていた指を下ろし、そのまま右手で握り拳を作り始めた。

「ボクシングの試合を削り合いと言うなら、それは完全に客観的に見た連中の意見だ。……小さなパンチを打ち続ける理由、それは“餌”を撒いているのですよ。つまり、パンチで駆け引きを行っているのです」

「捨てパンチというのが、その良い例ですね」と、金城は亮平とモロゾフから眼を離さぬまま、語りを続けた……。

「捨てパンチから“決め”の全力を出すために、ボクサーは戦っている最中、相手に“決め”のパンチを悟られないように捨てパンチで“餌”を撒き続けるんです。その“決め”のパンチは、グローブを着けた状態の拳からでも、相手を一撃でナックダウンさせるほどの威力を誇ります」

「ですが……」と続け、「先程までのモロゾフは、全ての打撃が“決め”のパンチだった」と付け加えた……この言葉に、レベツカが食いついた。

「ありえないわ、150kgの肉体を誇る拳ナックルよ？ それをひたすら受け続けて、無事なんて筈が……」

「ですが、現に坊ちゃんは立っている。……言った筈ですよ？ 武術の進化や進歩なんて、弱者の背伸びかもしれないと……」

「じゃあ、今立っている坊やは何だつて言うの？」

「モロゾフが使った技術は、所詮弱者が強者と戦うために築き上げてきた物に過ぎない。ですが、もともと強者である坊ちゃんには、そのような築き上げも……進歩も必要ない」

「馬鹿馬鹿しい……なら、武術が進歩してきた意味は……」

「そう、真の強者の前では何の役にも立たないという事です」

完全なる断言……それも金城は、武術界を完全に否定する内容の言葉を断言した。

この断言に、レベツカは「呆れたわ……」と匙を投げた……。

だが今度は、先程まで重く、そして静かに口を噤んでいた桜が口を開いた。

「お前が言いたいののは、弱者が一生懸命進化していく事など、強者が本気で進化をした時の脅威に比べれば、微々たる物ではないということだろ？」

概ね、その通りです……金城は静かに答えた。

「そして鬼島の血とは……その弱者達が何千年もかけた進化を“一瞬”にして覆す程の“進化”を遂げる、シンプルにして、そして異常な血なのです」

「そんな事が、ありえる訳……」

「外人のアナタには理解が出来ないでしょう、こんなオカルト染みた血なんて……ですが、坊ちゃんは今、完全に“枷”を外した。以前は梁山泊の逆鬼に、中途半端な形で止められたようですが……こ

ここには、そのような達人級マスタークラスはいない。坊ちゃんが持つ“動の気”は、そこら辺の雑魚どもとは一線を画した……本当の“獣”そのものなのです」

動物の進化には眼を見張るものがある……。

いままで海でしか生活出来なかった生物が、陸に上がった途端順応しようとし、これまで培ってきた機能を様変わりさせたり。先程のキリンのように首を伸ばしたり。空を飛ぶために翼と大胸筋を発達させたり……挙げれば切が無いであろう。

だがこの間、尊大な時間が流れている事を誰もが知っている。

しかし、物事には必ず例外というものがあるものだ……そして、その例外を、時に人は異常と呼ぶ。

金城は、亮平の現在の状況を“進化”と称した。

現在の亮平の様子を観察してみれば、力強い彫刻の様な肉体、その一部である、首と僧帽筋が、血管の網に抑えつけられる様にして、バルク・アップ筋肉増加している。人の肉体は、度重なる筋肉の使用により、筋線維を少しづつ壊していき、大なり小なりの筋肉痛を経て、筋肉痛になる以前よりも強い筋肉を作り、ようやく少しだけ太くなる様になっている……だが亮平はそれを、このひと時、この戦闘の最中に成し遂げて見せた。

本来ならば、100%と断言できるほどに、ありえない現象……。

「獣の順応能力は、私達人間からすれば、かなりの高さを誇っています……自らが生きるために、体の構造を“進化”させていく程には、それは人には無い能力なのかと聞かれれば、誰だって“有る”と答えるでしょう。人にも、獣同様に、環境に合わせる能力が、いまだに備わっている……」

つまり、人もまた動物、獣の野性を、未だに引き継いでいるのですよ……それも、誰もが。



人にも“進化”がある、それはどれでも良い……他の連中よりも背が高い、頭が良い、筋肉が発達している、肌の色が違う、まさにどれでも良い。金城は、この事を人の“進化”と称しているのだ。ならば、目の前で150kgの巨軀と戦っている、十六歳の“獣”が成した“進化”とは、なんなのだろうか……見れば分かるであろう、異常な……いや、もはや奇跡とも言える早さの筋肉増加だ。バルク・アップ

「鬼島の血とは……その環境、いや……闘争に順応する能力が、奇跡と称して良いほどに高いのです」

「そんなバカな話が……」

「なら、あれはどう説明するのですか？ アメリカの方は？」

金城が微笑交じりに、亮平の方へと視線で指差した。

既に亮平は、その瞳に底知れぬ何かを光らせながら、ファイティング・ポーズを取る、モロゾフの一步手前まで、ゆっくりと近づいていた。

モロゾフの背には、額には、嫌な冷や汗が大量に浮き出ている……。

「（何なのだ、一体何なのだ……この男は）」

タツクルで地面に後頭部から叩きつけられ、寝た状態で、顔面にパウンドを浴びせられ、全体重の乗った“ロシアン・フック”をまともに貰い、側頭部に膝蹴りを突き刺され、二分間に渡る暴力の渦に巻き込まれた筈の人間が……今、目の前で普通に歩いている、それも、異常な現象を起こしながらだ。

だがそれよりも、モロゾフは亮平の目に恐怖していた……。

「（そもそも、この男は人間なのか？ 瞳孔の狭まり方が、普通じゃないぞ……）」

モロゾフが亮平の目に注視していた時、それは突然動いた……。

「ッ！？」

いままで普通に歩いていた亮平が、誰が見ても分かるぐらいに、その右腕を振り上げ、ファイティング・ポーズを取るモロゾフに右拳を向けている……その振り上げ方は、まさに全身を総動員した、全力の振り上げ方であった。

そして……何の予告も無しに、その右拳がモロゾフに向けて、打ち放たれた。

腰を捻り、左肩甲骨を引き、右胸を前に出し、右肩甲骨を限界まで稼働させ、振り上げていた右腕を前に出し、肘を真っ直ぐにして、モロゾフに打ち出された右拳……およそ上半身だけで放たれた、その手打ちとも言える拳はしかし、亮平が誇るパワーによって、それだけで剛拳とも称せる代物であった。

なによりスピードが、パンチスピードが尋常では無い……それも、周囲に拳圧を撒き散らすほどののだ。

だが、それ程のスピードを誇っても尚、モロゾフは難なくそれを避けて見せた。

そして、右拳を振り抜いた亮平は、そのまま前のめりでバランスを崩してしまう……それにモロゾフが反応し、亮平の体に吸い付くようにして、バランスを崩した亮平の背後を取った。

「流石レスリング……素人の背後を取ることなど、児戯に等しいとも言える動きですね」

吸い付くように、亮平の背後を取ったモロゾフは、一瞬にして亮平の胴回りに、その自身の両巨腕を回し、後ろから亮平の腹部付近で、確りと両手をクラッチさせた……そのクラッチの仕方は、電車

の連結部を彷彿とさせる形であった。

刹那　　亮平の体が、地面から引っこ抜かれたように、持ち上げられた。

宙に持ち上げられた亮平の視界が、秒速何キロかも分からないスピードで、部屋の壁から、天井へと移されていき、終いには、近くで亮平とモロゾフの戦いを観戦していた金城の姿が、レベツカの姿が、桜の姿が、亮平の視界では、“天井に立っている様に見える”た”。

ドガアアッ！！！！

まさに刹那……亮平の背中が、後頭部が、大理石の地面に叩きつけられた。

バック投げ……柔道で言えば、裏投げと呼ばれるものなのだが、モロゾフの投げ方は、綺麗なアーチを描いた橋で、クラッチした相手を地面に叩き付ける、どちらかと言えば、プロレスのジャーマン・スープレックスの様であった。

モロゾフにクラッチされた腹部を基点に、亮平の体が、上半身を地面に預けながら、折りたたまれた布団のように、下半身を上半身と同じ方向に投げ出している……動きが、止まっていた。

ガバッと身を捻りながら、モロゾフが素早い動きで、クラッチした両腕はそのまま、動きの止まった亮平のサイドポジション（柔道の横四方固め）を取った。

亮平にまだ、動きは見られない……モロゾフは確信した。

瞬間、モロゾフはサイドポジションから移行し、今度は仰向けになった亮平の腹部に跨り、両膝を亮平の両脇下に置いた……馬乗り（マウントポジション）だ。

「亮兄ッ！！！」

この意味を知っている桜が、遂に耐えかね、いまだ動きの見られない亮平に叫んでしまった……。

マウントポジション……その姿は、まるで子供の喧嘩の様な成り。だが一見、なんの技術も見えないこの馬乗り（マウントポジション）は

グシャアッ！！

こと格闘界では、難攻不落のポジションとされていた……。

モロゾフの巨拳が、亮平の顔面に打ち下ろされた。

亮平の頭が、再びボールの様に地面からバウンドし　モロゾフの頭突きが、亮平の鼻っ柱に衝突し　亮平の頭が、今度はバウンドせず、地面に縫い付けられ　モロゾフが亮平の両肩を、両手で抑えながら、再び頭突きを繰り返し　亮平の鼻の形が、歪に変形していき

「亮兄！！　起きてください！！　亮兄ッ！！」

この単純な馬乗りにも、何も出来ない亮平に向って、桜が涙を流しながら、必死に亮平に起きるように訴えかける……。

既に、亮平の頭部付近には、亮平の鼻や口から飛び散った血で、地面を赤く汚していた。

何の抵抗もしてこない亮平に、モロゾフは両肩を掴んでいた手を放し、亮平の腹部に跨った状態で、再び背筋を真っ直ぐにした……。

「（終わりか……？）」

流石に、ここまでやれば抵抗もクソもない……。

それを確認するために、モロゾフは亮平の、血や腫れで変形し始めていた表情を伺った……。

だが、この一拍の間が、全てをひっくり返す間となった……。

「プツ」

「ツ！？」

突然、いままで動きを見せなかつた亮平が、口の中から何かを吐き出した……。

その吐き出された何かは、モロゾフの右目に飛んでいき、あまりの不意打ちに驚いたモロゾフの右目に、ベチャッと、嫌な音を鳴らしながら付着した。

何かと思ひ、モロゾフが焦りながらも、右目に付着した何かを手で払つた……。

払われたものは、再び地面にベチャッと音を鳴らしながら、地面にだらしなく打ち捨てられた。

そして、亮平が吐き出したものが何なのか……それをこの時、初めて周囲の人間が認識した。

「（肉ツ！？ この男、まさかツ！！）」

亮平が吐き出したもの、それは亮平が自分で噛み千切つた“頬肉”……。

それをモロゾフが確認した途端、いままで動きを見せなかつた亮平が、突然頭と足でブリッジをしながら、暴れ牛の様に、モロゾフの馬乗りを振り落とそうと、ロデオの様にモロゾフを腹部に乗せながら暴れ始めた……。

「なツ！？」

突然の出来事に、モロゾフは“口を開いて”驚きの声を漏らしてしまつた……。

瞬間、モロゾフの開かれた口の右頬を、亮平の右手が鷲掴みにした。

「あごっ!？」

下からモロゾフの口内に右手の甲を突っ込み、唯一外に出ている親指も使って、モロゾフの右頬を鷲掴みにする亮平は、暴れていた状態から、首を左に回し、腰も左に回し、右足を思いっきり左に振り、掴んでいた右手で、モロゾフの右頬を引っ張りながら、自身の腹部に跨っていたモロゾフを、掴んでいた右頬と同時に、右側頭部から地面に激突させた……。

「あがッ!」

難攻不落のポジションを、強引な力技で解かれ、ましてや逆に頭を地面に衝突させられたモロゾフは、いまだ掴まれている右頬のせいで閉じれない口で、苦痛の声を漏らした……。

既に、モロゾフの腰は亮平の腹部から離れ、地面に体を預けている状態だ……。

逆に亮平は、いつの間にかに立ち上がっていて、鷲掴みにしていたモロゾフの右頬を“引き千切りながら”うつ伏せで地面に寝ているモロゾフの左横から、その剛脚とも言える左足で、モロゾフの顔面を蹴り飛ばした。

バシャッ!!!!!

「ッ!？」

完璧に振り抜かれた亮平の左足は、顔面を蹴られたモロゾフの150kgの巨軀を、寝ていた筈の地面から浮かせ、今度はモロゾフをうつ伏せ状態から、仰向け状態へとひっくり返した……。

そして、仰向けになった事で、天井を仰ぐ形となった、頬や歯や鼻がボロボロになったモロゾフの顔面に、亮平は無慈悲とも言える右足を、硬い靴底を誇る革靴を履いた、その右足の踵を、何の躊躇もなく、無言で踏み落とした

第四十六話 鬼島の血（後書き）

どうでしたか？

本当は、このままもう少し進めたかったのですが、テスト期間という事も有り、あまり無茶は出来ませんでした。

テストが終わったら、就職活動の合間を縫って、勉強の息抜きで、またダラダラと進めて行きますので、ご了承ください。

はあ、……いつになったら、兼一達の方を書けるのだろうか。

心配で仕方がないっす（汗）ノシ



## 第四十七話 敗北（前書き）

既に総合ポイントが2200を越えていた事に、開いた口が塞がらなくなった、ゲレゲレです……。

今回書いてて、やはり戦闘以外での理由付けが下手くそだなと、痛感させられました。

## 第四十七話 敗北

ネチャ……と、粘つくく付着していたものが、生々しく伸ばされていく音が、静かに部屋中に発せられた。

亮平が履いていた、鱷皮の白い革靴……その靴底の踵付近に、先ほど“踏み抜いた”モロゾフの鼻や口から出る、粘つくい血液が付着しながら、離れて行く動作と一緒に糸を引いていた。

赤い糸……この場面では、決してロマンティックな表現ではなかった。

モロゾフの顔面を踏み抜いた亮平は、大理石の地面に、靴底に付着した相手の血液を擦り付けながら、踏み抜いた相手を確認した……。

頬肉は綺麗に“引き剥がされ”、その無くなった右頬から口内を外に露出させている……潰された鼻は、陥没した様に内側へと凹み……左目付近は、異常に膨れ上がった状態で腫れていた、おそらく眼球を守っていた骨のどこかがイカれたのである……無くなった右頬から見る事が出来る口内は、数十本の歯が無くなり、ところどころから出血が見られる、とても無残なものであった……。

同時に亮平は気付いた……そう言えば、まだ千切った肉、握ったままだった。

気付けば行動は速い、亮平は右手で握っていたモロゾフの頬肉を、その辺にゴミでも捨てるかのような気軽さで放り投げた……頬肉が地面にベチャッと付着した瞬間、その周辺に少量のモロゾフの血液が飛び散った。

「あ……」

なにやら呻きながら、次に亮平は、自分の歪に折れ曲がった鼻の

片穴を親指で塞ぎ、「ふんツ！」と残っていた血液交じりの鼻液を噴出した後、鼻筋を丁寧に自分の手で整えて行った……その最中にゴリッと嫌な音が鳴ったのは、言うまでも無い。

次に来た感覚は、途方も無い虚脱感と、首辺りに通っていた、異常なまでの血液が下に落ちていく感覚……同時に、亮平は眉間に皺を寄せながら「う……」と、立ちくらみの様な感覚を味わっていた。そして次に来たのは、立ちくらみとほぼ同時に訪れた、耐え難いほどの“吐き気”。

「オボオオツ!?」と、喉の奥からやってくる、消化し切れなかった大量の残飯と胃液が、亮平の口から吐き物として吐き出された……。

亮平の口から吐き出された吐き物は、亮平が吐嗟の機転を利かせてモロゾフから振り返ったことで、幸い倒れ付しているモロゾフには掛からなかったが、亮平はそのまま、力なく膝を着き、四つん這いになる格好で、大量の吐き物を大理石の地面に撒き散らした……。

「亮……兄？」

兄は素手喧嘩に勝利を収めた筈であった……だが当の兄は、力なく、その場で四つん這いになり、情けない格好など顧みずに、嗚咽を漏らしながら頂垂れている。

その様子に、何が起こったのか理解出来ない桜は、胸の前で心配そうに手を組みながら、自身の兄である亮平を見つめていた。そんな彼女に気付いたのか、隣に立っていた金城が口を開いた……。

「急激な筋肉増加を、<sup>バルク・アップ</sup>奇跡とも言える速度でやってのける……そんな異常が、リスク無しで出来るわけがないんですよ」

「……金城？」

「筋肉を増やすと言う事は、単純に言えば、筋肉に通う血管の量を

増やすという事……つまり、血液の流れを増やす事に直結するんです。……考えてみてください、立ちくらみを。寝た状態から、急に立ち上がった事で生じる、頭部からの血液の急落下……たったそれだけで、人はふら付いたり、酷い時は意識を失ったりもします」

簡単に言えば、長時間鉄棒で逆さになっていた状態で、急に頭の位置を戻した時の、あの感覚だ。

「人は血流一つで、重大な状況にも陥る……では、短時間で大量の血管を作り出し、異常なまでの血流を生み出した坊ちゃんは、今どのような状況なのでしょう？」

「まさか……」

とてつもない不安感を感じ、桜は四つん這いで力なく頂垂れる亮平に注視した……。

やはり、そういうこと……桜が抱いた危機感は、やはり正しかった。

先程まで、異常なまでに筋肉増加していた亮平の首や僧帽筋は、当初よりも発達した様にも見えるが、既に浮き出ている血管が元通りの状態に戻っている……だが、その為す意味を、桜は理解してしまった。

「そう、今坊ちゃんの体内では、先程まで首付近に通っていた大量の血液が、下へ下へと流れていってます……また、坊ちゃんが先ほど行った筋肉増加は、同時に大量の血液を作り出す効果もあるのです」

「つまり、その異常なまでの体内の変化に、あの坊やが耐え切れていないと言う事ね？」

芋虫の様に、地面に豊かな胸を潰しているレベッカが、金城を見

上げながら口を開いた……。

金城はそれに「そうです」と答え、同時に懐から一本の白木で出来た“ドス”を取り出し「これが、私の狙っていた瞬間です」一息でドスを白木の鞘から抜き放った。

カランと、簡素な音を響かせながら、大理石の地面へと放り捨てられた、白木で出来た鞘……。

金城はそれを一瞥もせずに、口にドスをくわえ込み、四つん這いで頂垂れる亮平に歩み寄りながら、懐から取り出した黒い手袋を両手に嵌めた……。

「坊ちゃん、次は私が直接お相手しましょう……」

「……そうか」

「亮兄ッ!？」

四つん這いで頂垂れる亮平の前に、金城が手袋を嵌めた右手でドスを握りながら、まるで亮平が立ち上がって来るのを待つかのように立っている……亮平は、小さく返事をしながらも、何とか膝に手を突きながら立ち上がった。その様子に、桜が悲痛な声を上げたが、亮平が「気にするな」とだけ言っつて、桜を黙らせた。

「お嬢の手は借りなくて良いのですか？ でないと、勝ち目がありませんよ？」

「……分かってんだろ？」

立ち上がった亮平が、汚れた口下を手で拭い、見下ろす格好で金城に声を発した。

「少しだけ微笑みながら、金城は「そうですか……」とだけ答えた。

「なら、御覚悟は宜しいですか？」

「……」

無言の肯定……同時に、亮平が金城に向って、ぶん殴るように右拳を振り抜いた。

シュパッ

「……？」

亮平は確かに、周囲に風をぶち抜く轟音を轟かせながら、その右拳を振り抜いた……。

だがそこは、既に金城が“いなくなつた”、虚空の空間であつた瞬間、右拳を振り抜いた状態の亮平に、致命的な異変が起きた……。

「坊ちゃん、あなたの肉体は、確かに強靱な肉体です……銃弾を防ぐ程に」

亮平の右腕……正確に言えば、人体で致命的な出血にいたる九急所の一つ、上腕動脈がある上腕部に、いつの間にか、金城のドスによる“裂傷”が見られたのだ。

瞬間、亮平の右上腕部から、赤い花が咲くような……大量の出血が、噴水のように噴出し始めた。

「そんな……亮兄？」

あまりに突然な事で、状況を理解出来ない桜……。  
自分が敬愛する兄が、目の前で大量の血を噴出している……普段の聡明な彼女なら、瞬時に気付けたであろう、この出来事。だが、あまりに衝撃的なシーンを見せられた人間は、その大抵が思考を遅れさせてしまう……。

それは、亮平も同じであった……。

「熱イ……」

自分の右上腕部から噴き出る、生暖かく熱の籠った、赤い液体……。  
それは見る見るうちに、周囲の地面を赤く染め上げていく……。

「ですが、あなたの肉体は、その自分のパワーに、スピードに耐えられない……」

いつの間にも移動していたのか…… 呆然とする亮平の直ぐ後ろで、亮平に背中を向けている金城がいた。

「どうやら、すれ違い様に何かをされたらしい…… が、現在の状況を見れば、金城がドスを使って、亮平の上腕部を切り裂いたのは明白であろう。」

「あなたと刃物で戦うなら、その振り抜かれる場所に刃を添えるだけで、簡単にその強靭な肉体を“擦り切る”事が出来る…… 私は、それをすれ違い様にやって見せただけです」

言いながら、金城は亮平の血液が付着したドスを振って、血を振り払い、背中を向けていた亮平に振り返った……。

亮平は、いまだ噴出す血を呆然と眺めているだけだ……。

「そして今のあなたは、本来なら私と一対一<sup>タイム</sup>を張れるコンディションじゃない……」

モロゾフとの戦い……それは本来なら、亮平が事切れるかのよう

に、地面に体を沈めていつても可笑しくは無いダメージが、何度も、何度も与えられた戦いであった。

その状態で、金城とのタイムン一対一……張れと言うほうが、無理と言うものである。

「もう寝ていてください……子供はもう、寝る時間だ」

金城の勝利宣言とも取れる言葉に、亮平がゆっくりと振り返った……。

噴出す血を押さえ付ける事もせず、亮平はゆっくりと、ゆっくりと金城へと近づいていく……。

だが、その目には、既に力という光が籠ってはいなかった……。

そして、亮平は無言で、その場に出来た自身の血溜まりにバシヤアと飛沫を上げながら、力なく、膝から崩れ落ちていったのだった……。

「金城オオツ！！」

同時に、その端正な顔立ちを鬼の形相にしながら、ドスを構えた桜が、倒れ付した亮平を見下ろす金城に飛び掛ってきた。

腰辺りにドスを突き立て、柄頭に片手を添えた、ヤクザ映画で良く見られる、ドスで相手に特攻を仕掛ける突撃体勢……。

一見避けやすいこの突撃だが、実は違う……。

この状態は、常なら相手にドスを刺した瞬間に、ドスの柄を手が滑らないように固定する構えなのだが。厄介なのは、相手が横に避けようと、カウンターを仕掛けてこようと、常に反応が出来るように、体を前に向けている所だ……。

この突撃が横にかわされれば、瞬時にドスを持ち直し、横に移動した相手を、体を捻る事で切りつけることが出来る……相手がカウンターを仕掛けてこようものなら、その一撃をあえて受けながら特



攻を仕掛けたり、構えたドスで対応する事も出来る……。

実に仕掛けられる側には、厄介極まりない突撃なのだが、金城は迫り来る桜に対し、有ろう事か、黒手袋を嵌めている、ドスを持った手とは反対の左手で、桜が突き立てているドスの刃を掴み取ったのだった。

「ちッ!？」

「お嬢、あなたにも、これから少しの間は、この舞台から降りてもらうことにします……」

金城の手袋を嵌めている左手から、大量の血が、桜が握っているドスの刃を伝って流れ落ちていく。

「貴様あッ!！」

桜が強引に、金城に掴まれた刃を引き抜こうとした瞬間……。

金城の掌打が桜の横顎を、上から下に打ち抜いた……。

「あ……」

「すみません、お嬢……私にはそこまで、起用に相手を止める方法が無かったもので」

「なるべく、そのお顔に傷がつかないやり方で……」金城が言い終わる前に、金城に顎を打ち抜かれた桜は……その白木のドスを地面に落としながら、自身の兄が作り出した血溜まりに、そのまま意識を落としていった……。

桜の綺麗な黒髪に、亮平の血が染み込んで行く……。

それを「申し訳御座いません……」と、本当に悔いるように見つめる金城に突然、先ほどから開いていたドア付近から「大変です！金城のオジキッ!！」と、野太い声が掛けられた……。

「どうした？」

「どうしたも……て、本当にやっちまったんですね」

部屋に入ってきた金城組の構成員は、血溜まりに倒れ付す、鬼島の兄妹を見つけた後、決意の籠った目を金城に向けた……。

「ああ、もう後戻りは出来ねえ……」

「“二代目”とお嬢は、本当に生きてるの？」

「坊ちゃんは、この程度で死ぬ命たまじゃねえ……必ず生きて、東堂会を継いでくれる」

「……分かりやした、なら、急ぎやしよう。その女の組織が、ここを嗅ぎつけやした……来るのは時間の問題かと思えます」

「分かった、ならそこに倒れている、モロゾフも連れて行く」と、部下の男に指示を出しながら「俺はこのまま、屋上のへりに乗り込む、お前等は各自車で“横浜中華街”まで向え」と言い残し、そのまま亮平達が倒れ付す部屋を後にしようとした……。

「おっと、そのICPO？」

「何かしら？」

「どこから連絡を取っていた？」

既に金城の部下は、手際よく携帯で仲間内と連絡を取り合いながら、倒れ付すモロゾフを部屋の外へと引き摺っていった後だった。

そんな中、扉付近で思い出したかの様に立ち止まった金城が、部屋の隅で未だ芋虫の様に転がっているレベツカに問いかけた。するとレベツカは、挑発的な笑みを浮かべながら、金城に言葉を吐いた。

「最初からよ……下着に着けてあるの、盗聴器」

「なるほど……全部剥けなかった、こちらの落ち度という事ですか」  
「そう言う事よ。私としては、このまま大人しくモロゾフをこちらに渡して欲しいんだけど？」

「そいつは出来ない相談です……あの男には、まだ働いてもらわないといけませんから」

「……可哀相に、あの状態じゃあ、労働法もクソも無いわね」

心配そうに呟くレベツカだが、明らかに皮肉交じりの視線を金城に向けていた「あんな状態じゃ、使い物にならないわよ？」と、言外で語るようにして……。

その視線に、金城は「可哀相と思うのなら……」と、言葉を切り出した。

「この二人を、そちらで手当てしてもらえませんか？ 私達はもう、行かなければならないので」

「ただで要求を聞くと、本気で思ってるの？」

「モロゾフがこれから向う場所は、“横浜中華街”です。……事を起こすには、流石に日にちを少しだけ空けますが、確実に、そこに私達は向うでしょう」

「……保障は？」

「さあ？ 誓うものが何も無いので、保障はしかねますが……」

「はあ〜」と呆れたような溜息を吐きながら、レベツカは「それ以前に、この二人は既に被害者……もしくは、私をこんな目に逢わせた加害者よ？ こっちで手厚く保護してあげるわよ」

「感謝します」

「そう、なら大人しく捕まって……」

「では、急いでますので」

レベツカが冗談交じりに何か言おうとした瞬間、金城は踵を返して、そのまま迷い無く、この部屋を出て行ってしまった……。

取り残されたレベツカは、血溜まりに倒れ付す二人の兄妹を見つめながら、今日起こったことを遡っていた……が、自分が碌な目に逢っていないことに、大きな溜息を吐いた。

その後、金城と、亮平にやられたモロゾフは、屋上に待機させていたヘリで直接横浜まで飛んで行く。また金城組の構成員達も、上手く援軍として来たICPOの追跡を逃れながら、各自車で指定された場所へと、無事辿り着いた。

部屋で下着姿のまま縛られていたレベツカは、同じ女性捜査官に保護されながら、金城が言い残した情報と要求を上司に伝え、確りと亮平と桜の二人をICPO側で確保した。

そして、騒動は一端の間を置く事となる……。

金城は思い描いた“事”を起こすために、目的の場所“横浜中華街”へ……。

レベツカは、再度モロゾフを捕えるために、情報の裏付けなどを行うため、一度極秘の活動拠点である、神奈川県“厚木基地”へと戻っていく。

亮平・桜の二人は、レベツカが言った通り、手厚い手当てを受けながら、レベツカと同じ“厚木基地”へと搬送されていった……。

後日。

この金城が起こした事が、東堂会本部にも知れ渡った事は、言うまでも無い事であった……。

第四十七話 敗北（後書き）

次回から、ケンイチ達の方へと移行します……。

亮平、初めての深刻な敗北…… 上手く書いてたでしょうか？

ちなみに、次回からのケンイチサイドは…… やっぱ止めよう、予告が変わってしまったら、皆さんが混乱するでしょうしね。

では、もしかしたら色々修正を加えるかもしれませんが、今後とも、この二次小説を宜しく御願いますノシ

第四十八話 鬼のいぬまに(前書き)

今回から第五十六話まで、“亮平が会話ぐらいでしか出てこない兼一サイドで話しを進めて行きます。”  
” 上手く書いていけるか分かりませんが、よろしく御願います。

## 第四十八話 鬼のいぬまに

「ちツ、繋がらないか……」

悪態を付きながら、折り畳み式の携帯電話を閉じる少女……。赤いTシャツにハンチングキャップ、左足の付け根部分からゴツソリと切り取られた、片足だけ露出させているジーパン……。さらに学校内だと言うのに、上履きではなく、外用であるブーツを履いている、赤み掛かった茶色い跳ね毛のベリーショートが印象的な、大きな猫目が特徴の小柄な少女。

ここまで説明すれば、もうお解かりであろう……。そう、亮平の幼馴染である南條キサラだ。

キサラは現在、“何故か”亮平が所属するクラスである一年E組の前で、窓際に背を預けながら、苛立った様子で、折り畳み式の携帯電話を、何度も開閉したりしていた……。

「あの……」

「うん？ なんだい？」

そんなキサラに、呆れた様子で話しかける女性徒が一人……。長く、少しだけ癖毛が跳ねている黒髪の頭にカチューシャを着け、活発そうな目に、確りしている性格が見て取れる、運動部特有の締まった輪郭、体系は細身で小柄、幸いにもキサラには、申し訳程度で勝っている胸を有しており、キサラとは違い、普通の学校指定の制服を身に纏っている女生徒……。

姫野真琴、薙刀部所属の亮平・兼一・美羽・泉と同じクラスメイ  
トの人間だ。

「何してるんですか？ こんなところで……」

現在は、昼食も終わった、中だるみを迎え始めた昼休みの時間だ……。  
周りには、廊下で話しこんでいる生徒や、この合間を縫って、付き合っている女性や男性とイチャイチャしている勝ち組も居る。

そんな中で、一年ではない二年のキサラが、下級生のクラス前の廊下で悪態を付いていたのだ。

だが、周りにいる生徒たちは、そんな悪態を付くキサラとはなるべく視線を合わせたがらないため、キサラが背を預ける壁から、半径5m以内に、周囲にいる生徒達は入るうとはしない奇妙な状況が出来上がっていた。

何故なら彼女は以前まで、この荒涼高校を占めていたラグナレクの“拳豪”という地位に立っていた女なのだ。それがいくら亮平に敗れ、部下共々ラグナレクを脱会し、“元”が付く様になったとは言っても、普通の一般生徒には、不良も不良の不良中の不良扱いされてしまうのだ……。

それを何事かと思った姫野が、一応は知り合いとして、皆のために声を掛けたのだが……。

「見て分かんないのかい？ 連絡が繋がらないんだよ」  
「……いや、だから誰とですか？」

姫野に声を掛けられても、再び耳元に携帯電話を近づけるキサラ……。  
それに再び疑問を投げかける姫野…… 状況は、硬直の一途を辿っていた。

「……亮平だよ」という訳でもなく、キサラは携帯を当てた状態で『チラリ』と姫野を見ながら、面倒臭そうに言葉を吐いた……。



「ああ、そう言う事ですか……」  
「たつく、あの馬鹿……期末前だったのに、何やってんだよ、まったく」

キサラの言う通り、現在は期末テスト“前日”の、高校生にとっては非常に重要な日でもあった。

そんな中、いつもの様に昼食と一緒に食べようとしたキサラが、先ほど一年E組に来てみれば、肝心の弟分である幼馴染が“欠席”と来たものだ……。

最初は「（そう言えばあいつ、実家に行くとか言ってたな……）」と、先週に伝えられていた事を思い出したのだが、流石にテスト前日に帰ってきてないのは不思議だと思い、先程まで連絡を取ろうとしていたのだが……どうやら一向に繋がらなかったようであった。

「私も朝、メールとか送ってみましたけど、未だに返信ありませんし。私が電話しても出ませんでしたし……確かに、心配っちゃ心配ですよ」

「別に心配って事は無いんだけどね……ただ、アイツって、変な所で抜けてるからさ……」

まさか来ていない理由が『実家の極道騒動に頭を突っ込み、致命傷を負って米軍基地である厚木基地に搬送されたから』だとは夢にも思わない二人は、呆れた表情で『はあ』と力なく溜息を吐くのであった。

「あれ、キサラさん？」

「こんにちわですわ、キサラさん」

するとそこに、今まで屋上で昼食を取っていた、冴えない顔の左目尻に絆創膏を張った白浜兼一と、いつも通り学校専用的一本三つ

編みに丸眼鏡姿のグラマー女子高生、風林寺美羽が、教室に戻る道のり最中に近づいて来た。

「なんだ、坊やと風林寺か……昼飯も一緒になんて仲が良いな、お前ら」

「そ、そそそんな事ないですよ！ 僕と美羽さんは、ただ友達っただけで」

「はい、兼一さんとは仲の良い“お友達”同士ですわ」  
「……」

キサラのちよつとしたからかいに、兼一はうるたえるが、当の美羽は特に気にする事も無く、普段通りの微笑みでキサラに言葉を返した……その美羽の言葉に、何とも言えない表情になった兼一を見て、姫野は少しだけ不憫な気持ちになった。

「ところで、お二人とも何の話をしていたのですか？」

「うん？ ああ……」

「亮平の馬鹿のことで、ちよつとな……」と、キサラは美羽に返すと、美羽は少しだけ喜々とした表情になりながら「（まさか、姫野さんとの三角関係について……）」などと、勘違いをしだしたのだが、それは次に姫野が口を動かした事で解消された。

「今日つてテスト前日だろ……なのにあいつ、いくら連絡しても返してこないんだよ」

「そう言えば、安永先生も“無断欠席”だって、確か今日の朝に言っただな……」

兼一は少しだけ心配そうな思案顔で、この場にはいない友人について考えを巡らせ始めた……。

実は亮平、意外にも今まで遅刻は大量に溜まっていたが、欠席自体は一度も無かったのだ。

それがいきなり、テスト前日に“無断欠席”と来たものだ……これが普通の不良生徒なら、ただ急に面倒臭くなって学校に来るのを止めたと考えられるのだが、あいにくと、喧嘩こそすれ、鬼島亮平と言う男は非行少年ではない。

さらに言えば、姫野真琴と南條キサラという仲の良い異性からの連絡を、朝から無視し続ける性格を、あの友人がしているとは思えない……これは、確かに気になっても仕方が無いかもしれない。

兼一が思案顔で考えを巡らせていると、兼一と美羽の後ろから、何者かが近づいて来た。

「おい風林寺、今日の部活について何だけど……あら？」

「あ、鷹島先輩、こんにちわです」

美羽に“後ろから声を掛けた”のは、細い輪郭に勝気なつり眼が印象的な、胸の大きさは負けているが、グラマーな美羽に勝るとも劣らない肢体を持つ、長い黒髪を後ろで軽く括っている女生徒……。

鷹島千尋たかしま ちひろ、キサラと同じ学年で、荒涼高校新体操部の“元”エースだ。

彼女は最初こそ、同じ新体操部である後輩に声を掛けたのだが、そこに居た意外な人物を見て、少し不思議そうな表情を浮かべた……。

「キサラじゃない、どうしたの？ こんな所にいるなんて？ 珍しいんじゃない？」

「鷹島か……何処に居ようが、別に私の勝手だろ？」

「ふん……」

何か引っかけたのか、鷹島は壁に背中を預けるキサラを見つめ

ながら、少しの間だけ思案顔で、腰に両手を当てながら、何かを考  
えていた……すると。

「あ、そっか……」

「なんだよ？」

「鬼島君に用があつたんじゃない？ あんたがこんな所に来る理由  
なんて、それぐらいしか無いんじゃないの？」

鷹島の問いに、キサラは一瞬だけ頬を引くつかせるも「……ま、  
まあな、ちよつと用があつたから、来てみただけだ」と、若干の無  
理をしながら、何とか取り乱さずに返した。

「そう、まあ私も、“後輩”の風林寺に用があつたから来ただけな  
んだけどね」

“後輩”と言う部分に、妙な強調を入れながら、鷹島は当初の目  
的であつた、本日の部活の話を、兼一の隣りにいた美羽と話し始め  
た……。

「おい、坊や……」

「……はい？」

すると、隣にいた美羽が話しこみ始めてしまったために、少々手  
持ち無沙汰となつてしまった兼一に、壁に寄りかかった状態のまま、  
キサラが“小声”で兼一を呼び出した。

その行動を不審に思ったのか、キサラへと近づいていく兼一を眺  
めながら、姫野が訝しげな表情で聞き耳を立て始めた……。

そして、兼一がキサラへと近づいたとき、キサラは兼一に耳打ち  
する様な近さで、兼一に囁くような小声で話し始めた。同時に、あ  
まりこの様な事に免疫が無い兼一は、キサラの吐息が耳に掛かるの

を感じながら、その顔を赤くさせていった……。

「（坊や、亮平から鷹島について、何か聞いた事はあるかい？）」

「（え？ 何かって、何ですか……？）」

「（何でも良い…… “男同士のバカなエロ話”でも “何も分かってないアホみたい恋愛”でも、何でも良いから、何か聞いた事があるなら話しな……）」

「（え……？）」

そのキサラの言葉に、兼一は一瞬戸惑うも、取り合えず過去に行った、友人である鬼島亮平との会話を断片的に思い出していく……。

『そう言えば昨日のテレビ』 『あの禿頭め……』 『大丈夫か兼一』

？ 顔が疲れてるぞ？』 『あ……彼女出来ないかな』 『うっわ、この人工口すぎだろ……』（雑誌鑑賞中）』 『恋して……』 『ああ、キサラ姉ちゃんなら、かなりの猫好きだぞ？（美羽さんが、かなり嬉しそうだった）』 『姫野には、いつかちゃんと、御礼しなきゃいけないからな……』 『新体操部で一番綺麗な人？ 決まってるだろ、鷹島千尋先輩だ』 …… あった。

鷹島千尋先輩だ』 …… あった。

「（……たしか、あれは僕と亮平君とで、美羽さんが入ってる新体操部について話してる時でした）」

「（……それで？）」

「（その……僕が “一度見に行った時、美羽さんが一番上手かった” って言ったら、亮平君が “確かに上手いかもしれないが……”

” って言ったので、僕が “じゃあ、亮平君は誰が一番良いと思うの？”

” って聞いたんです）」

「（ほう……）」

「（そしたら亮平君が “新体操部で一番綺麗な人？ 決まってるだろ、鷹島千尋先輩だ” って答えたんです。その後は、延々と鷹島先輩について、熱弁してましたけど……）」

「（……内容は？）」

内容自体、兼一は確かに思い出したのだが……。

あの人の、あの厳しくも優しい性格が……あの人の、大人っぽい女性の魅力が……佇まいが綺麗な人……演技中の鷹島先輩は、誰よりも輝いている……まあ、この様な“話していても恥ずかしい”台詞を、自身の友人が熱弁していたもので、それを教えるのかどうか、少々迷った兼一であったのだが。

「（早く言いな、さもないと、風林寺に坊やの話を、“悪い方に”捏造して話してやるよ……）」

この言葉に、兼一は一瞬にして屈したのであった……。

それから暫くして、兼一は耳打ちで、キサラに全てを話し終えた……。  
するとどうだろう……南條キサラと言う、勝気ながらも整った顔をした美少女の表情が、みるみる内に影に覆われ始め、その視線を射抜くようなものへと変えて行った……。

「キ、キサラさん……？」

最近良く関わる事になった事で、下の名前で呼ぶのを許してもらった兼一は、突然醸し出す空気を変えたキサラに身動きしながら、そのキサラが一心に、射抜くような視線を向けている方向に目をやった。

「（た、鷹島先輩？）」

その視線の先には、美羽と今も話中である、鷹島千尋の姿があった……確かに、こうして見ると、自身の友人が言っていた様に、

美羽に負けるとも劣らない容姿をしているのが分かった。

だがそこで、“ビクッ！”と兼一が身を強張らせた……。

その原因は、後ろから来た、戦いの最中でも感じたことが無い、鋭く、そして重苦しいプレッシャーだ……兼一は、恐る恐るといった感じで、ゆっくりと振り向いた。

そこには、先ほどのキサラ同様……普段の彼女からは考えられないほどの黒い空気を身に纏った、同じクラスメイトの、姫野真琴の姿があった……。

同時に、兼一は思った……「あ、もう僕は、ここじゃあ置いてけぼりなんだ……」と。

薄暗い、壊れかけのランプだけが明かりとして照らされている、ただ広いだけの廃墟の中で現在、三人の男達が、各々好きな格好で向き合っていた……。

壁に亀裂があるほど廃れている廃墟の中心に、“コ”の字型に設置してある、所々革が破けたソファがある。

「何故だオーディーン！？ 何故、俺だけが謹慎処分になるんだ！」

“コ”の字型のソファから立ち上がりながら、興奮した面持ちで、“コ”の字型の中心に座っている男に対して声を荒げる、網眼鏡で顔を隠した、厚手のコートを着ている男……手にはローマ数字で？と、金属で装飾された、黒手袋を着けている、ラグナレク第四拳豪、通称戦う参謀口キ。

「今回の作戦は、君が発案、そして君自身が実行したものだろう？ 私の名前を勝手に使った事は、この際どうでも良い……だが、発

案者として、それなりの“ケジメ”を取ってもらわなければいけない。それが分からない君じゃないだろう？」

「俺が言ってるのは、あの場には少なくとも俺以外に、そこに座ってる“隠者”<sup>ハーミット</sup>やフレイヤ、そして新参者のヴァルキリーの、三人の拳豪が居た！！　なのに何故、俺だけが処分を受けなければならぬんだ！！」

ロキは、オーディーンと呼んだ、白スーツにローマ数字の？という金属の装飾がされた黒手袋を嵌めている、眼鏡を掛けた黒髪の少年から、対面に座っている、黒いローブで全身を隠した、金属でローマ数字の？を装飾した黒手袋を嵌めている、第六拳豪、通称隠者<sup>ハーミット</sup>に、声の矛先を示した。

だがオーディーン、本名“<sup>あさみやうりゅうと</sup>朝宮龍斗”は、ロキの言葉を、さも気にした様子も無く返した。

「ハーミットは直接的な戦闘は行っていないし、フレイヤは自主的に謹慎を申し出てきた。ヴァルキリーに至っては、既に脱会の表明がされている……脱会の儀式は、まだだがな。だが、あの大掛かりな作戦を計画し、他の拳豪達を招集したのは君だ、その作戦で出た組織の損害の責任を取るのは、当然君になると思うのだが……違うのかい？」

「くっ！」

「それに、君の隊からは一人の逮捕者が出た。それも、君お抱えの影武者集団からだ……これは、流石に看過できるものではない」

オーディーンの言葉に、ロキは苦虫を噛み殺しながらも、“コ”の字型のソファアーにドスつと腰掛けた。

「故の謹慎処分だ、かなり軽い処分だと思うのだが？」

「ちっ……」



「分かってくれて、何よりだ……」

格好相応の座り方で、悪態を付くロキを見つめるオーディーンは、次に腕を組みながら、着ているローブのフードのせいで顔が伺えない、不気味な空気を醸し出すハーミットへと視線を向けた……。

「それで、なぜ君は戦わなかったのかな？」

「……」

ハーミットは、醸し出す雰囲気だけで、一度思案する様子を見せながら……。

「気に食わなかったただけだ……」

オーディーンの言葉に、素っ気ない言葉を返した。

その言葉に気を悪くする事無く、オーディーンは話しを続ける「何に？」

「鬼島自体は、別に俺は興味が無かった……だが、その後に来た、援軍の奴らに、気に食わないのがいた」

「なら、その場で叩き潰せば良いだろうに？」

「あの男は、今なら簡単に倒せる……だが、奴に武術を教えているのは、おそらく達人級マスタークラス」

「では、強くなるのを待っている？」

「そう言う事だ……」

「なるほど、良く分かったよ……」

「私の話しはここまでだが、ここからは……」オーディーンは、眼鏡のアーチに手を添えながら「新白連合と、脱会したキサラ隊しんぱくれんごうについての話しだ」と告げた……。

「新白連合についてだが、ハーミット、気に入らないのが居るのだらう？ 君に全てを任せる。キサラについては、フレイヤが謹慎を終えた後、自分で“ケジメ”を付けに行くと思卷いている……正直、特に伝える内容もないのだが……入ってきてくれ」

ロキとハーミットが、特に興味も無さそうに聞いていると、オーディーンが突然、この部屋の扉に向けて声を発した……。

その声に、二人は同時に、入り口の廃れた扉に視線を向ける……すると、扉がゆっくりと開かれた。

「あんたは……」

「……」

「昨日付けで退院した様でね、彼には今後、直ぐに復帰してもらおう事になっている」

現れたのは、短い金の短髪を逆立て、鋭い目を無気力に開いた、背の高い、筋骨隆々の体格の良い男……。着ているシャツやベスト、ジーンズは彼の肉体のせいで張り詰めており、彼の力強い印象を更に際立たせている。手にはローマ数字での装飾がされた黒手袋、少し痩せこけた口には、噛んでいたガムで風船を作り出している……。

「君達も久しぶりだろう……今日は彼の復帰を、君たち二人に伝えようと思ったので、君たちを呼びつけたんだ」

軽く微笑みながら、ロキとハーミットに告げるオーディーン……それをロキは「そ、そうか……」と、驚いたように、現れた人物を見やり。ハーミットは無言で反応していた。

「“バーサーカー”、君も久しぶりの挨拶をしたらどうだい？」  
「別に、必要ないだろう？」

バーサーカーと呼ばれた男は、軽い足取りで、入って来た入り口から、オーディーンの下へと一直線に歩いてくる……。

「それよりも、鬼島の奴はどこに居る？」  
「会って、どうしたいんだい？」

オーディーンは座った状態で、バーサーカーに背を向けたまま答えた……。

瞬間、バーサーカーの纏う空気が、張り詰めたものへと変わっていくのが、部屋にいた三人の人間には、敏感に感じ取る事が出来た……。

「確めてえ……」

「何をだい？」

「アイツがあの時、何で俺に“手加減”をしたのか？ それと……」

「俺と、本当に共感し合える男なのか……」と、バーサーカーはオーディーンの問いに答えた。

そのバーサーカーの言葉に、オーディーンは「そうか、なら……」と切り出し。

「確めてきたら良い……」

「分かった、なら俺は勝手に動かせてもらおう……」

「と、言いたい所だが……」

「なんだ？ 何かあるのか？」

「ふっ」と、軽く噴出すように微笑みながら、オーディーンは意

気込むバーサーカーに、少し気まずげな口調で伝えた。

「生憎と、当の鬼島は今、実家に帰っていて、ここには居ないらしいんだ……」

「そうか、なら、いつ帰ってくる？」

どこで調べたのか分からない情報だが、オーディーンはとうやら亮平が現在いる場所、というより、現在どこに行っているのかわかっているようであった……。

「いつ帰ってくるのかは分からないが、それまでの間は、ハーミットと共に新しく出て来た“新白連合”の方を頼む」

その突然出て来た指令に、バーサーカーは少しの間だけ思案した後「分かった、興味が沸いたらな……」とだけ答えた……。

平和な日常と言うものは、どこで綻んでいくのか、予測など着きはない……。

そして知らぬ間に、兼一達の平和な日常というものは、どこかで崩れていくのであった。

## 第四十八話 鬼のいぬまに（後書き）

テストが終わった！！

単位取れるといいいな！！

そして就職活動が本格化！！

人事部の連中に、目に物見せに行きます！！

待っているよ、人事部！！

はい、調子に乗りました、すみません……。

今回から兼一サイドの御話です。

バーサーカーの復帰、ハーミットに原作通り狙われる兼一。

ロキ一回休み、フレイヤ良い子。

どうなるか、分かりませんが、頑張って行きたいと思います！！

原作41巻は、フレイヤのサービショットがよかでした。

ですが、米軍を一般人呼ばわりするのは、流石に違うと思いましたが。

何分、フルメタやラグーン、ヨルムンガルドを呼んでいるもので

そして、戦場カメラマンの人の話しも、ニコニコの有料チャンネルで聞いたもので。

正直、米軍には、というより、各国の軍にも強い人が一人や二人いてもおかしくないと思うんですね。なので、っすだけ原作批判を“後書き”でさせてもらいました。

では、今回はこの辺で〜ノシ〜

書いてみた、鬼島亮平 注意・スキャナが壊れていたので、写メです（汗）

>i17533—2379<

ちゃんと載ってるかな？

一応説明文通りにやったんだけど……。

スキャナが使えなかったので、写メです、かなり見づらいです。

そして、シャーペンで書いたせいで薄いです。

顔デカくなっちゃいました……。

肉体は、もう少し増やしても良いかな？

何分、かなり久しぶりに絵を描いたので、感想など頂けると嬉しいです（写メで、すみません）

一応、URL書いときます。

http://2379.mitemin.net/i1753  
3/

トラックバックって、何？

http://trackback.mitemin.net/  
send/image/icode/17533/

一応載せとききました（汗）

第四十九話 谷本夏（前書き）

まずはお詫びを……すみません、皆様のイメージを崩すような絵を描いてしまって……反省しております。

なにぶん、肉体の方が上手く書いてしまったもので（写メで分かりづらいですが）、そのせいで、顔も厳つくなってしまう……。

ですので、肉体はあのまま（もしくは、もう少し筋肉を増やして）、顔は皆様の自由といった感じにさせてもらいます……すみません、ご迷惑をお掛けして。

あ、あと、もし絵の上手い方がいらっしゃったら、顔の方を書いて欲しいんですけど……すみません、調子扱きました。

## 第四十九話 谷本夏

学校生活というものは、現役にとって、その殆どが友人と過ごす時間ではないだろうか？

だが例外もあると言えば、ある……しかし、それを言うては、物語が一向に進まない危険性もある。

この場合、物語とは、その人物の人生を意味している……人生、なるほど、確かに生きているならば、一人よりも二人、二人よりも三人の方が賑やかで楽しい。

そしてここに、人生でも稀にしか出来ない“宇宙人”と“極道息子”、“無敵超人の娘”という、世にも珍しい友人を持った一人の少年がいる……。

「なあなあ兼一、お願いだから“新白連合”一緒にやろうぜ？」  
「うるさい！ 僕は今、読書をしているんだから、態々（わざわざ）人のクラスに入ってきてまで邪魔をするな！！」

「そげなこと言わないで、な？ 一緒にトップ目指そうぜ？ 今ならキサラの奴も、他の事で忙しいみてえだからさ」

「トップなんて目指す必要は無い！！ だいたい、お前は……他の事？」

先ほどから、教室の机に座りながら、悪友である宇宙人……新島春男に読書の邪魔をされていた、『梁山泊一番弟子』の白浜兼一は、宇宙人から出て来た、一つの言葉に引っかかりを覚えた。

ちなみに、兼一はいつも通りの荒涼高校の夏服、半そでのワイシヤツに黒のズボンと言った格好で、右目尻には、もはやトレードマークとなった絆創膏が張られている。

兼一の机の前で、気取った様な仕草をする宇宙人は……お河童な



髪型以外、いつNASAに連れて行かれても可笑しくは無い姿をしている。

「おうよ、今この学校には、期末試験中とは言え、あの鬼島亮平が不在状態！ さらには、これまで荒涼高校を占めて来た、“元八拳豪”の南條キサラまで、別件のお陰で、手前の足元の手を焼いている暇は無いと来たものだ！」

「さて宇宙人、とりあえず、キサラさんが別件で忙しいって、どういう事なんだ？」

兼一は、自分が聞きたい事を目の前の宇宙人が無視しながら、自分だけで盛り上がっていく姿を見て、とりあえず止めとかなければ、いつまで経っても話が聞けないと感じ、宇宙人の独白を止めた。

宇宙人は「うん？ ああ、そう言えば言っただけな」と、良い子には見せられない邪悪な笑みを浮かべながら、机に座る兼一に迫り始めた、心なしか、出している舌が、蛇の様な二枚舌になっている様な気がする……。

「あいつ鬼島が居ない間に、独立したばかりの“キサラ隊”を使って、古巣のラグナレクと一戦交えようって腹のつもりらしい……」  
「えッ!？」

「そんな無茶な！」兼一は、宇宙人から出て来た情報に困惑する……。  
いくら彼女が、そこら辺の不良よりもダントツに強い人間だとしても、ここらの最大勢力とまで言われている“ラグナレク”と一戦を交えるのは、正直言って不可能な事だからだ……。

「まあ無茶だろうな……だが、あいつはまず、いきなり全軍に向って戦うんじゃないって、拳豪の一人を潰してから、徐々に戦力を削っ

「ていこうって作戦を取るみたいだ」  
「それでも無茶じゃないかな……」

ラグナレクにとって、幹部である“拳豪”とは、ある意味で強さの象徴とも言える存在なのだ。

人は、戦いの最中では、最も強い人間を象徴と置き、自身の精神面での支えにする……。

『この人がいれば、俺等は大丈夫だ』 『この人がいれば、この戦いは勝てる』 『他の奴等が、この人に勝てるわけが無い』 ……それはある意味で、宗教的な精神状態にもなりえるかもしれない強者への依存。だがそれを逆手に取れば、依存されている強者を倒した瞬間に、絶大な戦果が挙げられるという事でも有る。キサラは、相手と比べて少数なこちらの戦力を鑑みて、乾坤一擲の第一接触ファーストコンタクトを計るうとしていたのだ。

「確かに俺様から見ても、かなりの無茶だと思うぜ……何せ、相手は……」

「相手……?」

どうやら宇宙人は、キサラが狙っている拳豪が誰なのかを知っているらしい……。

次に出てくる話を待つ、兼一の手にも、既に緊張の色が見られた……そして、宇宙人がもったいぶりながらも口を開いた。

「相手はなんと、第七拳豪、通称ツール……“実戦相撲”を武器としている、100?オーバーの巨漢さ」

「“実戦相撲”?」

「ああ、何やらそのツールとか言う巨漢、夜な夜な“喧嘩賭博”とか開いて、自分の技を磨いているらしい……ま、たぶんキサラの奴は、一番手っ取り早く会える奴を選んだだけだと思うがな」

兼一は考える……キサラの体重は、多く見積もっても50kgに行くか行かないかの重さであろう。

対するターゲットとして選んだ相手、ツールは100kgを超す巨漢だと言っ……。

これは、勝負にならないんじゃないか……？

兼一は率直に、自身の頭の中でそう考えた。

「そんな事はありませんわ、兼一さん」

「……美羽さん！ いつからそこに!？」

思考に耽る兼一の真後ろから、長く豊かな金髪を一本の三つ編みに纏め、その端正な顔のせいで、擬装用の丸眼鏡が全く役に立っていない、無敵超人のグラマー娘が現れた。

兼一の後ろから、突然現れた美羽は、何故かは知らないが、満面の笑みで座っている兼一を見下ろしていた……。

「兼一さんは、キサラさんが、その100kgを超える相手に勝てないと思っ……ているんですね？」

「基本、いつからはスルーなんです……まあ、はい。だって、体重差以前に、筋肉の量が違いますし、ましてや相手は相撲取りなんですよ？」

「勝てるわけが無いじゃないですか」兼一は断言する……。

およそ素手同士の戦いにおいて、体重差とは時に、あまりにも残酷な結果を巻き起こす……。

体重が重ければ重いほど、人間の体で比較的重い比率を誇る頭を、確りと支えるために首が強くなっ……故に、体重が軽い人間の攻撃で、頭が揺れ辛くなる。体重が増えれば、肉厚が増え、胴回りの大きさが広がる……故に、体重の軽い相手の打撃を、内臓まで

浸透させ辛くなる。その全体重を支えるために、足に筋肉が歩いているだけで鍛えられる……故に、体重の軽い人間が、いくら一生懸命に蹴ったとしても、まともな箇所に入らなければ、効果的なダメージは見込めなくなる。

故の断言……兼一の頭の中では、そう結論付けられていた。

だが美羽は、兼一に対して、まるでキサラが勝つ方法があると言った……。

「美羽さんは、キサラさんが勝てると考えているんですか？」

「まあ、傍目から見れば、勝ち目の薄い勝負にも見えますが……ええ、勝てますわ。」

笑顔で言い切る美羽に対して、兼一は疑問の念をぶつけようと、口を開こうとした……その時。

「キヤーツ！ 谷本さま〜！」

「キヤー〜！」

「わ〜！」

「ぶるうあああああ〜！」

「な、なんだツ！？」

急に騒がしくなった教室入り口に、兼一・美羽・宇宙人の三人は一斉に振り向いた……。

そこには、女子・女子・女子の人だけ……とてもじゃないが、もし、あの場に好きな女子が居たのならば、どんなロマンティックな一目惚れでも、文字通り“百年の恋も冷める”というものである。

幸いにも、兼一や美羽が親しい人間は、そこには集ってはいなかったが……。

するとその人だからから、自身を囲う女子達を掻き分けながら、

一人の爽やかイケメンが躍り出てきた……。

流れるような金髪を、肩に掛からない程度に伸ばし、ハッキリとした二重瞼に、全てを見透かすような透明感が感じられる瞳、細い輪郭に確りと通った鼻筋……正直、他の国の人ではないかと、この時の兼一は思ったほどであった。身長は兼一よりも少し高い程度だが、スタイルは良く、決して細身ではない、丁度良い肉付きをしており。更には足も長いという……。もはや普通の学生にとって、その辺で爆死して欲しいぐらいのイケメンであった。着ている衣服はハインツクのロングTシャツに、スラックスという、荒涼高校特有の、制服でなくとも良いという校則を有意義に実行していた。

「ああ、あいつは確かB組の……」

「知ってるのか新島？」

入り口から現れたイケメンを確認すると、新島が徐に自作の電子手帳を弄り始めた……。そこには、『学ラン』という、この荒涼高校でのランキングがデータとして入っているのだ。

「あつたぞ、俺様の学ラン良い男部門の常連で、たにもとなつ谷本夏、一年だ」  
「へ〜……て、なんか、こっちに來てるぞ？」

兼一と宇宙人が話していると、件の谷本夏が、こちらへと近づいて来た……。

その足取りは、もはやそれだけで絵になるような、そんな優雅な歩調であった。

そして、谷本夏は、兼一と新島の前まで近づくと……。

「やあ、君が風林寺さんで良いんだよね？」

「……ほえ？」

兼一と新島の存在をスルーして、その後ろに立っていた風林寺美羽に、谷本夏は声を掛けた。

「美羽さん？」

「君は確か……白浜兼一さんですね、初めまして、僕は谷本夏。噂は聞いていたけど、もっと怖そうな感じの人だと思ってたよ……」

一瞬、自分を無視されたかと思った兼一であったが、谷本がすぐさま兼一に視線を向けたことで、それは無かったようであった……。

「はあ、あ！」と、兼一は気付いた様に……。

「白浜兼一です……多分、谷本君が聞いていた噂は全て……」

「この宇宙人の仕業です」と、兼一は一応の紹介を、隣荷にいた新島春男に行った……が、当の新島は、どこか疑うような視線を、目の前の男、谷本夏に送っていた。

「どうしたんだ？ そんな品定めでもする、邪悪な眼で……」

「悪い兼一、俺様は少しだけ急用が出来た、教室に戻らせてもらおうぜ？」

「ああ……？」

新島はそう言つと、そのまま兼一達の教室をそそくさと出て行ってしまった。

「どうしたんだろう？ あいつ急に……」

「えーっと、良いかな？」

不思議な物でも見たかのような視線で、去っていく新島は見送っている、一時であったが置いてきぼりを食らった谷本が、気まず

げな声で兼一に話しかけた。兼一も、その声に「あ、ごめんね」と誤りながら振り向いた。

「で、私に何か御用ですか？」

漸く話せる状況になったことを美羽が確認すると、そのまま谷本に何用かを尋ねた。

その問いに、谷本は軽く微笑みながら、漸く本題に入れると言った風に話し始めた。

「初めまして、風林寺さん」

「ええ、初めまして、風林寺美羽と申します」

「初めて会ったばかりでんですけど、折り入って頼みごとがあるんだ……」

微笑みながら挨拶を交わしたのも束の間、突然谷本の表情が暗くなっていく……。

それに気付いた美羽と兼一の二人は、心配そうな顔で、谷本の言葉を待った。

そして、谷本が口を開く……。

「風林寺さん、君に、演劇部の助っ人になって欲しいんだ！」

「……へ？」

「……はい？」

谷本から出た言葉に、二人は一瞬戸惑いの声を上げるが、とりあえず事情を聞いてみようと思ひ、美羽が谷本に聞いた。

「それは、何故ですか？」

「いま、演劇部は『ロミオとジュリエット』の公演のために練習を

重ねているんだけど、ヒロイン役の娘がどうしても見つからないんだ……」

「演劇部内の方では、いけませんの？」

「最初はそうだったんだけど、ヒロイン役の娘が『私じゃ、あなたとは釣り合えない！』と行ってしまったって、そのままヒロイン役を降りてしまったんだ……」

なんとも呆れた理由なのだが、事實はこうだ……。

最初は演劇だけの関係だと思っていた……だが、練習を重ねるにつれて、役に入り込んでいってしまい、遂には自分と谷本が付き合っているなどと、錯覚を起こし始めてしまったのだ……。

当然ヒロイン役の娘は混乱した……。「私は谷本君とは付き合っていないのよ……なのはどうして！」まあ良く分からないのだが、彼女はとにかく混乱していたのだ……。

それから練習は重なっていき、遂にはクライマックスまでの練習にまで行き着いてしまった……。

「どうしよう……私、演技中に、本気で自分を刺してしまうかも知れない」荒涼高校の『ロミオとジュリエット』のクライマックスは、まあ普通に死んだ男の後を追って、女も自殺してしまうという、何ともいえないBADなENDなのだが……そこで彼女は、本気で感情移入をしてしまって、クライマックスの練習の時、本当に骨董屋で購入した西洋の短剣を学校に持ち込んでしまったのだ……もはや、訳が分からないを通り越して、誰かに保護してもらった方が良いレベルだと思う。

だが彼女は踏みとどまった……そう、妄想の中とはいえ、付き合い続けていた谷本という『ロミオ』と別れる、身が裂けそうな思いをする選択を選んだのだ。

彼女は奇人ではなかった、勇敢な妄想人間やしいちだったのだ……。

だがそんな人間ドラマなど知らない三人は、何とも言えない微妙な空気にさえなまねながら、なんとか話しを進めようとした。



「それで、美羽さんをヒロイン役に？」

「はい……無理にとは言いません、出来ればで良いんですが……」

「とても嬉しいお誘いなので……困りましたわ」

言葉とは裏腹に、美羽は喜々とした表情で、片手を頬に添えなが

ら 全く見えないのだが 悩んでいる素振りを見せ始

めた……。

「（もし美羽さんが承諾したら、美羽さんがジュリエットで……谷本君が恋人役の……）」

兼一はこの時思った……「（どうしよう……この二人、物凄くお似合いだ！）」

もはや、どうするもこうするもない……選択権は、そこで明らかに嬉しそうにしている美羽にあるのだから。

多分、彼女は人が良いから受けるであろう……そうだ、彼女は優しいのだ。

だから彼女は『同情』という感情で……いかん、危つく現実を見逃す所だった。

彼女は明らかに、身をくねらせながら喜んでいる……どうみても、自身の意思でやりたがっている、そう『ヒロイン役』を！

だめだ、どう考えても彼女は谷本君と『ロミオとジュリエット』という愛の悲劇を演じてしまう……。多分、そのまま、その時の関係が続く事は間違いない……。そうすると、他人に流されやすいお方のことだ、確実に……「でも、すみません……とても嬉しいのですが、今は他の事で忙しくって……え？」

「そうかい、それは残念だよ……」

「すみません、態々お越し頂いたのに……」

「美羽さん？」

兼一が片思いの辛い感情に悩まされていると、美羽が本当に残念そうにしながら、谷本の誘いに頭を下げた……当然、断られた谷本も残念そうにしていた。

だが兼一には分からなかった……彼女は喜んでいたので、それも普通では考えられない仕事で。

だからこそなのだろう……兼一は、頼んだ本人よりも先に、なぜかを美羽に尋ねた。

「どうしてですか美羽さん？」

「先約がありますの、キサラさんの」

「キサラさんの？」

笑顔で返してくる美羽に、兼一は何かが突っ掛るような感覚を覚えた。

それが何かは分からないが、とにかく、いつもの彼女がする笑顔とはまた別の……どこか無理をしているような笑顔だったのだ。

「はい、ですので、すみません谷本さん……」

「……分かったよ、でも、気が変わったら演劇部に来てくれないかい？」

「はい、もしその時がありましたら、よろしくお願いします……」

「うん、一応、待っているよ……」そう言って、谷本は残念そうにしながら、兼一達の教室を後にした……その背中が、どこか寂しげな雰囲気醸し出していた。

「美羽さん……」

「こればかりは仕方が無いのです……キサラさんとの約束が先でし

たので」

「その、キサラさんとの約束って……?」

この言葉が出てきたときから気になっていたので、兼一はその事を美羽に問うたが。当の美羽は「それは、今日の稽古までの秘密です」と人差し指を立てながら、兼一に笑顔を見せるだけであった。

第四十九話 谷本夏（後書き）

キサラV S トール……相撲最強説を壊させて頂きます。

今回の更新は、これから少し忙しくなりそうだったので、このく  
らいの文字数になってしまいました……すみません。

なんだか、兼一サイドの話しが長くなりそうです……何とか、早  
く進めなければ。

何分、いまだ序盤も序盤という亀速度で物語が進んでいるもので  
……ラグナレク終われば、あとはスイスイなんだけどな。

では、いつになるかは分かりませんが、どうにかして頑張っ  
て行きたいと思いますノシ

第五十話 サービスを練習してみたぜ！（by作者）（前書き）

今回、動のタイプについて、持論を述べたので、かなり説明がゴツチャしてます。ですので、ゆっくり読んでもらえると嬉しいです。

あと、更新遅れてすみませんでした。

第五十話 サービスを練習してみたぜ！（by作者）

「シッ！」

ハンチングキャップを被った、赤いTシャツと、片方の生地がゴツソリと切り取られたジーパンが特徴的な少女……南條キサラ。

そのキサラが今、目の前の相手に対して、爪先で打ち込む、右足による前蹴りを放った。

前蹴りというものは、蹴りだしの拳動を極力抑える事で、初めて相手の反応を鈍らせる事が出来る……キサラが行った前蹴りも、左肩を前に出した左構えの状態から、相手に極力バレぬよう、上半身を動かす事無く、右膝を抱えるように上げてから蹴り出した、ほぼ無拳動イモーションと言える前蹴りだ。

その前蹴りの爪先は、寸分変わらず、目の前で構える相手の鳩尾みそおちへと吸い込まれる様に迫っていく……『当たる』そう判断したキサラは、今まで相手にバレない様に動かさなかった上半身を、初めて後ろへと反らさせた。

前へと蹴り出されるキサラの右足に対して、後ろへと反らされるキサラの上半身……その相対する動きは、必然とも言える結果を生み出した。

それは“伸び”、今まで地面と垂直で位置していた股関節が、上半身を反らさせた事によって、腰が後ろへと傾き、下の方が前へと動いたのだ……その結果、股関節の可動域がさらに広がったのだ。だが相手も大したものだ……その押し迫っていたキサラの前蹴りを、“上へと飛び上がる事で避けて見せたのだから”。

「（ちッ……やっぱりか！）」

しかし、その相手の奇抜な動きを読んでいたキサラは、空を切った前蹴りを、バランスを崩す事無く元の位置へと戻すと、今度は宙へと舞った相手に対して、右上半身を後ろに捻り、同時に奥足であった右足を膝から上げて、背中向きの状態で宙を舞う相手へと視線を向けた。

「シッ！！」

視線で相手を見つけたと同時に、キサラは抱えていた右足で、空の相手を打ち落とす様な一直線の“後ろ蹴り”を蹴り放った……が、それすらも相手は“空中で”反応し、キサラが打ち上げた蹴り足の裏に、自身の左足の足裏を合わせる様にして踏み台にし、また更に高く宙へと舞い上がった。

「（たくツ！ 毎度毎度、人間離れた動きだねえ！！）」

自身の蹴り足を踏み台にされたキサラは、否応無くバランスを崩してしまふ……当然だ、宙へと一直線に蹴り上げた足を踏み台にされる衝撃を、いくら柔軟性とバランス感覚に富んだ女性の体だとしても、軸足一本で支えきれぬ筈も無い。

だが、この状況には慣れて……そう言外に語るかのように、キサラはバランスを崩した状態に“逆らう事無く”、正面から畳に崩れる体を、腕立て伏せの様に両手で止めた後、身を翻し、宙を舞う相手を、仰向けで迎え撃つ体勢を取った。

「ッ！？」

この意外な行動に、宙を舞う相手も“感覚”を揺さぶられたのか、一瞬の戸惑いが生まれる……だが現在は、その一瞬の戸惑いが大きなミスに繋がる戦いの最中だ。

その事を私生活に染み付くほど知っている相手は、地面である畳に仰向けで身を預けるキサラに対して、地面に突き刺す鉄杭の様な無慈悲なまでの“飛び蹴り落とし”とでも表そうか……を、打ち下ろした。

「（来たなッ！）」

この瞬間を望んでいたかの様に、キサラの瞳に勝機を掴み取ろうとする光が宿る。

自身の胴体に向けて迫ってくる蹴り足……その蹴り足に対して、キサラは臆する事無く、足から体を畳むようにして下半身を持ち上げ、まるでこれから寝た状態の体を跳ね起こさせようとする“跳ね起き飛び”の状態に、一瞬にして持つて行き始めた。

そして刹那

ドパアアン！！

相手の蹴り足が“畳”を蹴り抜いた音が、この“道場”中に響き渡った……。

「そこまでッ！！」

そして同時に、戦っていた二人とは別の、第三者の“止めの声”も道場中に響いた。

戦っていた二人の最終的な結果は、上空から振り落とされる蹴り足に対して、あるう事が“カウンター”を狙いにいったキサラが、倒立の様な姿勢で、両腕を足代わりにし、両足を揃えた状態のまま、直立で相手の顎を下から打ち貫こうとしたのだったが……どうやら相手の方が一枚以上上手だった様で、キサラの蹴り足を上空で捌きながら、自身が地面に向けて蹴り出した足一本で着地し、無理な体



勢のキサラが持ち直す前に、反対の足でキサラの顔面を“寸止め”で蹴っていたのだ。

「私の勝ちですわね、キサラちゃん？」

「……そうだな、くそッ！」

キサラが倒立の姿勢から崩れる前に、跳ね上がるように戻ると、これまで自身と組み手を行っていた、半そで短丈のボディスパッツを着た風林寺美羽が、笑顔でそう聞いてきた。

もちろん、元々勝気な性格のキサラは、この勝利宣言に良い顔はせず、悪態を付くようにであるが、一応の負けを認めた。

キサラは今、白浜兼一という、今ここには居ない幼馴染の友人が、短期間で強くなった場所“梁山泊”の道場にいる。

そこは、一流ではあるが、風変わりな武術の達人達が集う、常人では理解できない特殊な場所で……。

「こらアパチャイ！！勝手に俺のつまみを食うんじゃねえ！！！」

「アパパバ」

少し見渡せば、浅黒い肌をした、白い短髪の身長2mを越す筋肉巨人が……栓を開けるのではなく、飲み口を“手刀”で“切った”瓶酒を飲む、ジーパンに、筋肉で固められた胴体を晒すかのように、前の方を開けた一張羅を着る、顔に横一文字の傷痕が目立つ日本人の男から、酒のつまみを文字通りつまみ食いしている姿が見られたり。

「……」

壁際に視線を移してみれば、真面目に汗を流しながら練習する女子高生の前で、堂々とエロ本を熟読している、帽子を被った小さな

中国人のオツサンがいたり……。

「あ……こら闘忠丸、勝手に動いちゃだ……め」

視線を天井の方へと移して見れば、長い黒髪をポニーテールで括った、ピンクのミニス力着物を身に纏う、不思議な雰囲気醸し出す牛乳が、ペットなのだろうか……妙に賢そうなネズミの毛並みの手入れを、梃子摺りながらも行っていたり……しかも、天井の木組みで。

そんな、もう説明する方ですら訳が分からなくなってくる場所で、キサラと美羽は組み手をしていたのだ……が、そんな奇妙な場所でも、常識人っぽい人間はいるもので。

「キサラ君は、もう少し自分のペースで戦った方が良いね」

組み手を終えた、美羽とキサラの下に、袴姿をした、一人の男が近づいて来た。

その男は、ダンディなちよび髭と、不思議な瞳が特徴的な男性で、身長も、この不思議な道場に居る中では、そこまで大きな方ではないのだが……佇まいが、ただ者ではないことを語っていた。

名前を岬越寺秋雨と言う……。

行っている武術は、彼独自のアレンジを加えた柔術で……あの元いじめられっ子であった白浜兼一を、この道場で短期間のうちに成長させた一人者でもある。

そして、先ほど二人の組み手に“止め”を掛けたのも、彼である。

「自分のペース、ですか……」

「そうだ、先ほどの組み手は、少々後手に回るシーンが多かったからね」

岬越寺のアドバイスに、キサラも思い当たった節があつたのか、少しの時間、先程までの美羽との組み手を、岬越寺と共に振り返ることにした。

「君は確かに、先手を取ろうと、先に手を出していたが。実際には、美羽に上手く誘導されていたというのは気付いたかな？」

「そうなのか？」と、キサラは隣りで、黙って岬越寺の話しを一緒に聞いていた美羽に聞く。

すると美羽は、少々気まずげではあるが「ええ、そうですわ……」と、真面目に意見を求めるキサラに、素直に答えた。

「もともと、鬼島君から聞いていた話しでは、君は“動”のタイプらしいからね、ペース……つまり、流れを作りやすい反面、その流れを乱されやすいタイプでもあるから、今回の様に、美羽に上手く誘導されてしまっていたんだよ」

岬越寺の説明に、キサラは「誘導ですか……」と考えるように呟くと、「具体的に、どんな感じで誘導したんだ？」と、隣りにいる美羽に尋ねた。

キサラに聞かれた美羽は「そうですわね……例えば、ワザと相手が打ち易いように、構えの一部分を空けてみたり。相手が仕掛けようとした時に、間合いを詰めてみたり……挙げれば色々ありますが、さっきやっていたのは、これくらいですわね」と、なかなか具体的に答えてくれた。

そして、美羽の言葉に、岬越寺が続く……。

「“動”のタイプとは、いわば線路を走る、止まる事のない電車のようなものだ、私は考えているんだ」

「電車……ですか？」

「そう、それも停車駅のない電車だ」

岬越寺はなるべくキサラが混乱しないように、この後、簡潔に説明したのだが……。

一応。ここで詳しく説明すると……。

停車駅の無い、止まる事のない電車とは、いわば流れに身を任せた状態という意味で、岬越寺は“動”の事を、そう例えてみせたのだ。

“動”のタイプとは、感覚、つまり自身の身体能力や、元々備わっていた“当て勘（打撃系の格闘技などで、ヒッティング技術の先天的な才能の事）”、直感的な行動などで戦う、いわばセンスの良い者の事なのだ。

その様な者の場合、戦いの主導権を握るという事は、ある意味で最重要事項にもなってくる。

何故かと言えば、“静”の場合、戦いの流れを“コントロール”することが重要となってくる……当然だ、“静”の場合、自分が集中できる環境を作れなければ、相手にリズムを乱される事となり、自分と相手の間合い形成や、自分の流れを上手く作れなくなってくるからだ。

そして“動”の場合は、その逆……戦いの流れを“コントロール”するのではなく、戦いの流れに、相手よりも早く“乗る”事に重点を置く。

もともと、自分の意思ではなく、体を無意識で動かす様な人間に流れを形成し、コントロールするような緻密な戦い方は向いていない……それよりも、先に攻め、先に相手のペースを崩し、最終的にいつの間にか自分の流れになっていたという方が、センスで戦う様な人間には合っているのだ。

故に、流れに“乗る”という事なのだが……では、なぜ岬越寺は“動”のタイプの事を『止まる事のない電車』と称したのか……。

“動”のタイプとは、自分の潜在的な力を、リミッターを解除す

る事で、現在有している実力を底上げして戦う、つまり考える事を放棄した、純粋な実力のみで戦う、野性的な人間の事を言うのだが、その状態だと、どうしても直感的な戦い方になってしまったために、自分の命令を受け付けなくなる事が多々あるのだ……その良い例が、以前の亮平とキサラの戦いであろう。

流れに、感情に身を任せてしまった人間は、自分が取っている行動に抑制が効きづらくなって来る……当たり前だ、冷静さを失った人間が取る行動は、後々、本人ですら何故あのような行動を取ったのか、理解出来なくなるのだから。

つまり、岬越寺が“動”のタイプを『止まる事のない電車』と称したのは、この様な暴走列車的な思考で戦うからなのだ……だがしかし岬越寺は、他にも、例えば電車を使った理由があると言う。

それは、抑制の仕方についてだ……。

止まる事の出来ない暴走列車をコントロールする方法は、一つしかない……そう、走っているレールを別の方向に、予め切り替えておく事だ。

例えばだ、一人の男が何も考えずにキックのシャドーボクシングをしていたとしよう。

その男の得意な攻撃は、パンチ系統のもので、蹴りはそこまで得意ではない……。

この場合、何も考えていないというのがミソであり、得意な攻撃がパンチ……つまり上半身を使う攻撃という事がヒントである。

人間は特別な訓練……例えば、箸を持つ手を、左手から右手に矯正されたりしない限り、利き腕である方の腕を、無意識のうちに良く使う傾向がある。

思い出して欲しいのは、筆箱から自然に取り出したペンを、どっちの手で持っているかという事なのだが……おそらく、大半が利き腕で、無意識のうちに書く準備をしている事であろう。

それと一緒に、無意識のシャドーボクシングというのは、何かの矯正を入れない限り、自然と得意な部位、または技しか使わないも

のとなってしまうのだ。

それでは、いつまで経っても同じ事しか出来ないファイターになっ  
てしまうと、男は考えた……じゃあ、どうする？

考え抜いた結果、男が導き出した答えは、“先に蹴りを出すと意  
識しておく事”だ。

すると、どうだろう……今まで単調だった、彼のシャドーが、突  
然、まだ種類は少ないが、蹴りなどを織り交ぜる、幅の広いシャド  
ーになったではないか。

これは、無意識下……つまり、何も考えていない状態に“蹴りを  
出す”という追加項目を入れた事によって、起きた現象なのだが。

実はこれが“動”の戦いの制御方法なのだ。

戦いの流れに、無意識の状態に乗ってしまった者は、止まる事は  
許されず、ただ単調な攻撃を仕掛けるだけになってしまうのだが……  
その無意識の動きのルールに、切り替えポイントを早期の段階で  
作るとしよう。そうすると、少ない選択肢ではあるが、一択以上の  
選択肢が生まれる事になる……そして、無意識状態の体が行動を起  
こす前にルールを切り替ると、いままで単調であった行動に、新た  
な行動が生まれる事になる。

これが、戦いの最中に“動”のタイプの人間が行っている、自身  
の御し方なのだと、岬越寺はキサラに説明した。

「つまり、流れを自分で切り替えられなければ、単調な動きのまま、  
相手に行動を読まれやすくなるという事なのだけど……分かってく  
れたかい？」

「ええ、まあ大体は……つまり、動きが単調になってて、風林寺に  
動きを盗まれていたって事ですよね？」

「そうだね」

結構な数、試合を組んできた者同士が試合をすると、良くなかな  
か手を出さない、見ている者が退屈になってしまう事がある。

その代表例が、2003年に行われた、マイク・ベルナルド対フ  
ランシスコ・フィリオの、キックボクシングの試合だ。

この試合は、両者のスタイルが、典型的なパワータイプのインス  
タイルと、典型的なテクニクタイプのカウンタースタイルといっ  
た、噛み合いそうで噛み合わない、正に典型的な一戦で。当初の予  
想は、様々な専門家達が、ベルナルドのフックでKOだとか、フィ  
リオのブラジリアン・キック、または一撃必殺のカウンターでKO  
だとか、本当に魅力的な予想が飛び交っていたのだが……。

蓋を開けてみれば、何て事のない……相手の長所を恐れた両者が、  
共に一定の間合いを保ったまま試合は動かず、結局何もせずに判定  
ドロ―へとなくなってしまった試合だったのだ。

この試合は、相手の長所を知っていたという事に理由がある……  
当然だ、相手の情報がなければ、無闇な警戒など取る必要がないの  
だから。

だがこれももし、一方だけが相手の事を良く知っていたのなら、  
どうだろうか？

相手は自分の行動を知っていて、自分は流れだけで、情報のない  
戦いをするという……つまり、そういう事なのだ。

「確かに“動”のタイプは流れに乗りやすい……だが反面、制御で  
きなければ相手に動きを読まれやすい、もしくはコントロールされ  
やすいタイプとも言える。だから、君は今後、自分のセンスをどれ  
だけ上手く、流れに乗せられるかを考えた方が良いね」

「はい！ ありがとうございます！」

岬越寺の今までのアドバイスに、キサラは被っている帽子が落ち  
ない程度に、気をつけの姿勢で一礼をする。

どうやら、今のアドバイスでキサラの練習は終わったらしく、美  
羽が「ではキサラちゃん、休憩がてらに、梁山泊の温泉にでも入り  
ませんか？」と、練習終わりで汗を掻いたキサラに、“温泉”とい

う言葉をちらつかせ始めた。

「温泉って、お前ちん家、そんなのあるのか？」

「はい、あちらにいる、アパチャイさんが掘り当てたのですわ。」

美羽が指した方向には、先程まで筋骨隆々の日本人からつまみを奪っていた、浅黒い、こちらも筋骨隆々の外国人……名前からしてどうやらベトナムとか、タイとか、その辺の人間のだろうと、キサラは当たりを付けていた。

「ふ〜ん……まあ、そんなのがあんなら、入ろっかな」

「分かりました、では、着替えの準備が出来次第、行きましようか」

妙に嬉しそうな口調で、美羽はキサラから振り返り、言葉通り着替えを取りに行くために、この畳の道場をスタスタと出て行った。

キサラも、汗を掻いた服の匂いを確めたあと、これはダメだと判断し、道場隅に置いてあった、自分のバツクから、タオルや着替えといった物を取り出した。

その際、先程までエロ本を熟読していた中国人の小さいオッサンが、ミニスカ着物の女に“鎖鎌”で捕えらるという事件が発生したが、キサラが焦る前に、一張羅を着た、逆鬼さかきと名乗る男が。

「いつもの事だから、そう驚く事もねえよ、安心しな」と、見かけによらず、意外と周りのことを見ているという、意外な一面を客人であるキサラに見せていた。

美羽が言った梁山泊の温泉とは、広い敷地を誇る、梁山泊の庭の一番奥に存在している……。



だが、この温泉に辿り着くためには、一定のルート、つまり美羽達が普段使っている道を使わなければ、“あらゆる中国拳法の遣い手”馬劍星ばけんせい用に、“剣と兵器の申し子”香坂かうさかしぐれが作り出した、様々なトラップの犠牲になってしまふという、なんとも初めての人間には優しくない仕様になっていた……。

「ふう〜……生き返るねえ」

「そうですねえ〜」

しかし、行きで踏み外せば地獄だが、何事も無く辿り着けたのなら、体の芯から心の芯まで、ありとあらゆる疲れを癒してくれる、極上の温泉が待っているのだ。

そして何より、一般が所有する天然の温泉露天風呂とは思えぬ、雰囲気を付けてくれる燈籠の灯火や、人の手が加えられた石庭温泉とは違う、天然の石造り感が、更なる極楽気分に入る者に味あわせてくれる。

「しっかし、学校帰って、思いつきり練習した後に温泉だなんて……  
……どんだけ贅沢なんだよ、あんたら」

「これも、アパチャイさんが掘り当ててくれたお陰ですわ〜」

湯気を舞わせる温水のお陰で、疲れが溶けていく感覚を味わう美羽とキサラは、普段よりも数段、緩んだ口調で会話を交わす。

二人とも、天を仰ぎ、背もたれである天然の岩に、背を預けながら会話をしているので、温泉の効果も相まって、リラックス効果は尋常じゃないぐらいに発揮されていた……。

だが、この緩んだ雰囲気のなか、キサラがふと視線を美羽へと向けた……。

「……………」

「……………うん？」

キサラが突然黙り込んだ事に、美羽も気付いたようで、美羽も視線をキサラに向ける……………。

見れば、キサラの視点は一点で固定されていた……………そう、美羽自身の豊乳へと固定されていたのだ。

「ど、どうしましたかですわ、キサラちゃん？」

いくら同性とは言え、ここまで黙して凝視されると、自然と両手で隠してしまうものだ……………さらに、キサラの元々特徴的である勝気な眼も、警戒させる要因になっていた事は否めない。

だがしかし、大きな胸というのは、ここまで挑発的な物なのか……………。

美羽が両手で隠せば、その豊乳は、腕の形を吸収するかのようにももとの形を変えさせ、美羽が押さえている腕から余剰分がはみ出していたのだ。

また、温泉の水滴が胸の谷間や細い肩を伝っていたり、その長く綺麗な金髪が濡れて、美羽の肌に密着している姿は、とても高校生とは思えない、欲情的な色気を醸し出していた。

その姿は、小さな胸にコンプレックスを持っているキサラにとって、許容できるものでは無かったらしく。

「おい、牛乳……………？」

「は、はい？」

美羽が答えた瞬間、キサラがまるで片手間の様に右手を伸ばし、美羽が押さえている豊乳の右側を、ぞんざいに驚掴みにし始めた。

「ぎゃッ!?!」

当然、このキサラの行動に驚いた美羽は、体を“ビクッ！”と跳ねさせてしまう。

だが、それでもキサラの動きは止まらず、美羽の右胸の感触を確める様に、鷲掴みした右手で揉みしだき続ける……それはもう、グニグニと形が変わっていく程にだ。

「ちょ、キサラちゃんやめてください！」

「うるせえ！！　なんだこりゃ！　指の隙間から、“脂肪”がはみ出てるじゃねえか！！」

「訳が分かりませんか？　あッ……！！」

バシヤバシヤと温泉の飛沫を上げながら、美羽はキサラに胸を揉まれ続けてしまう……。

本来なら、美羽ほどの実力があれば、これぐらいの事、難無く退けられるのだが……これは一種の、女同士だけのスキンシップみたいなものだと、無意識に割り切っている、その様な行動は起こさないのだ。しかし、それにしてもキサラの行動が、どんどんエスカレートしていつていると、美羽は感じ始めていた……。

「本当に！　これ以上はッ！　うんッ？」

「これ以上が、何だってんだい！」

言いながら、キサラは更に反対の手で、美羽の左胸を鷲掴みにし始めた。

これで両方の双丘は、全て正面のキサラに掴まれてしまった事になる……。

だが、美羽も武術家として、負けず嫌いな一面も多少なりとてあるのだ……故に、今度は美羽が反撃に出た。

「いい加減に！」  
「うん？」

美羽の言葉に一瞬の停止をしたキサラに「しなさいですわ！」と、今度は美羽も、キサラの虚乳きょにゅうを両手で掴もうとした……が。

ペタ

「……………あれ？」  
「……………」

美羽は確かにキサラの胸を掴んだ筈であった……が、どうやら“掴める程の量が無かった”らしく、両手でキサラの胴体を下から支えている様な格好となってしまった。

この妙な現象に、キサラが「……………」わなわなと震え始め、美羽の両胸を掴みながら表情に暗い影を落とし「そんなにデカイのが偉いのかよ！！ ええッ!？」と、一気に憤怒を爆発させ始めた。

そしてここに、再び温泉内での“くんずほぐれず”が開始された……。

もしここに、男の観戦者がいたのなら、その者はとても幸せな奴だ……。

美羽のメリハリのあるプロポーションに、キサラのしなやかで引き締まった体……その二人が、体や髪の毛を温泉で濡らしながら、女だけのスキンシップを取っているのだ……見たくないという者がいれば、それは女性が、二丁目を筆頭にしてお姉さん達ぐらいであるう。

しかし、この場には一人だけ、この羨ましい光景を観賞している者がいたのだ……。

「(いいネ！ やっぱり、ここまで来て正解だったネ!!)」

露天風呂の近くにある草むらで、一人の小さなオッサンが、大きなカメラ片手に、腹ばい状態で潜んでいた……そう、梁山泊が誇る工口親父、馬剣星だ！！

剣星は、先程まで、しぐれに鎖鎌で道場に捕らえられていた筈だったのだが……流石、達人級マスタークラスと言うべきか、いつの間にかに鎖の拘束から抜け出し、様々なトラップを難無く潜り抜け、ここまでカメラ片手に爆走して来たのだ。

「（流石亮ちゃんの幼馴染ネ、やる事が全てGJネ！）」

剣星は、心の中でキサラに“サムズアップ”をしながら、その草むらで構えたカメラのシャッターを切ろうとした……が。

ザスンツ！

「ツ！？」

それを、突然眼前に現れた、一振りの日本刀が阻止した……。眼前に現れた日本刀は、剣星の被っている帽子のツバを貫き、さらに剣星が構えていたカメラまでも、下の地面ごと貫いていた……。どう考えても、上から降ってきた様な刺さり方に、剣星は恐る恐る、腹ばいの状態で後ろを振り返った。

「捕らえていた筈、なの……に」

そこには既に、地面に突き刺した刀以外の武器、トンファーやクナイを構えた“剣と兵器の申し子”香坂しぐれが、普段よりも眼に力を籠めた状態で立っていた……。

これは本気で拙いと、剣星はこの時、直感的に感じたのだった……。

なんだか草むらの方が騒がしいと二人が感じたのは、ごく一瞬の事であった……。

そして、草木のざわめきが止んだと気付いた時、そこから出てきたのは、美羽よりも体の凹凸が悩ましいほどにハッキリしている人物、香坂しぐれであった……。

「しぐれさんも、ご一緒しますか？」

「う……ん」

返事と同時に、しぐれは着ていた全ての衣服を脱ぎ始め、その本人は自覚がないが、日本中を探してみても稀では無いかと感じてしまっ程の裸体を、美羽を押し倒した状態のキサラに魅せつけた……。で……。でかい……。

キサラは現在掴んでいる最中の美羽の胸と目視で比べてみても、断言できるほどに、向こうの女のほうがデカイという衝撃を受けながら……。こいつらは、同じ人間なのかという疑問を、凶らずも抱いてしまった。

キサラが衝撃を受け、ポカーンと放心状態になっていると、服を全て脱ぎ、ポニーテールにしていた髪を解いたしぐれが、温泉へとゆっくり入って来た。

「なにしてる……の？」

「いえ、これは……」

「あははは」と気まずげな微笑で、しぐれの質問に答えようとす美羽であったが、しぐれには意図が全く伝わらず、美羽の上で、美羽の両乳を揉んでいるキサラを見て「私も、や……る」と、何を考えたのか、おかしな悪乗りを美羽に仕掛け始めたのだった……。

温泉に浸かっている筈であったのに、何故か余計に疲れた表情をしている美羽は、悪乗りをやめた、しぐれに「どうして、先ほどは草むらから出てきたのですか？」と、質問を投げかけた。

「剣星が、お前らの事を覗いてい……た」

このしぐれの言葉に、先ほどの騒動から漸く落ち着いたキサラであったが、温泉に浸かっている筈なのに“ビク！”と背筋に悪寒が走るのを感じた。

「でも、カメラは壊した……し、兼一が帰って来た事も伝えたから、もう大丈夫だ……ろう」

「そ、そうですよ……ありがとうございます」

美羽の言葉に、しぐれはムフーと鼻息を鳴らしながら、“Vサイン”で答えた……どうやら、褒められたのが余程嬉しかったようである。

「そつえば風林寺？ 今日の練習の事なんだけどさ？」

「はい？」

「どうだったんだ？ あれで、デカイ相手は倒れそうか？」

今までの和気藹々としていた会話から、美羽とキサラの二人は、至極真面目な話しへと、温泉に浸かりながら変えていく……。

キサラの質問に、美羽が人差し指と親指を、その細い顎に当てながら「狙い方自体は間違っていないませんが、あの箇所では難しいかもしれませんね……」と、答えた。

その答えに、キサラは頭に乗せたタオルのズレを直しながら「じやあ、どこを狙えば良いんだ？ 一応、あらかたは決めてはいるんだ」と、更なる質問を重ねた。

「基本、大きな相手と対峙する時は、なるべく肉付きの薄い場所を狙うのが定石です……例えば、膝付近の太腿でしたり、顎の付け根、米神や眉間、男性の方でしたら金的などを狙うのが良いかもしれませんが。もちろん、ただの喧嘩という範囲でしたら、金的や恥骨などは後々に影響が出るので、なるだけ手加減はしてもらいたいのですけども……」

「喉や鼻、足の指に目も……狙おうと思えば、狙える箇所……だ」

「しぐれさん？」突然、美羽とキサラの会話に入って来たしぐれに、美羽は少々の驚きを見せたが……そういえば最近、彼女はまだ無口の方ではあるが、人と良く接するようになったのだと、美羽は心の中で思い出していた。

「それに、相手の戦い方によって、狙える箇所も変わっていく……どうというタイプなん……だ？ そのデカイ相手と……は」

眼は無関心な感じで、そこまで抑揚のある色はしていないが、どうやらキサラの質問に、真面目に答えてくれるようなので、達人級の人間に教えてもらえる機会など滅多にないと感じたキサラは、迷わず、共に温泉に浸かるしぐれに質問を投げかけた。

「実践的に相撲を鍛えてる奴なんですけど……体格は、脂肪も筋肉もかなり乗ってる感じですよ」

「相撲……か。だったら、来た時か、構えている時を狙えばいい」

「来た時と、構えている時……ですか？」



「そう……だ」

その後、しぐれはキサラに思いつく限りのアドバイスを、温泉に肩まで浸かりながら与え続けた。

どうやら、先ほどまでのじゃれ合いで心を許したらしく、彼女に  
しては、かなり積極的に教えていると、傍目で見ていた美羽は感じていた。

練習も温泉も終え、さて帰路に着こうと、道場に置いてある荷物を取りに来たキサラの前に、白帯道着姿の白浜兼一（しらはまけんいち）が、浜辺に打ち上げられた魚の様な体勢で、畳の上に倒れていた。

「大変だねえ、坊やも……」

その姿に、もはや苦笑いしか出ないキサラは、道場隅に置いてあったポストンバックを肩に掛けながら、兼一を労わるかのように呟いた……。

だが、もう動かないと思われていた、畳に打ち上げられていた兼一は、キサラの姿に気が付くと、ボロボロの体を震わせながら何とか立ち上がり、その姿にたじろいでいるキサラの下へと歩いてきた。

「こ、こんにちわ……キサラさん。どうして……こ、ここにいますか？」

「あ、ああ……風林寺の奴に、組み手の相手してもらってたんだ。てか、大丈夫なのかい、坊や？」

プルプルと今にも倒れそうな立ち方で、兼一はキサラと話しをしようとしているのだが……誰が見ても、今は休んだほうが良いと思

つてしまう状態なので、キサラは若干頬を引き攣らせながら聞いたのだが、「大丈夫です……慣れてますんで」と、兼一は力の籠っていない眼で答えた。

その様子に、キサラは「（なるほどね……あの馬鹿が、この坊やを放っておけない気持ちだが、少しだけ分かったよ）」と、今ここにはいない幼馴染に、多少の理解を示したのだった。

「それよりも、どうして美羽さんと、組み手をしていた……のですか？」

「ああ、それは私が頼んだんだよ。今度喧嘩する相手が、結構面倒臭そうな奴なんだけど……今の私のチームに、私とまともに練習できる奴がないからな」

「そう……なんですか」

兼一は、今日の学校で美羽が言っていた事を、ここで理解した……。

「……。」

「そうか、これが、美羽さんがキサラさんと交わした約束だったんだと……。」

優しい彼女の事だ、いくら喧嘩のためとはいえ、自己の向上を望む友人を、放っておけなかったのだろう……だが、それは自分のやりたい事を、折角訪れた、稀に見るチャンスを我慢する程に、優先しなければならぬ事なのかと、兼一は同時に思っていた。

「まあ本当は、対クソ馬鹿用に、何か思いつかないかな」とか考えてたんだけどねえ……」

「ははは……」

「冗談交じりではなく、割と本気で亮平の事を言うキサラに、兼一は苦笑いしか返せない。

しかし……どうしたものかと、兼一は疲れきった頭で思考を巡ら

せる。

あの人は、いつも梁山泊の家事やら部活やらで、本当に自分のやりたい事を制限している節があると、常々思ってきた……だが、このキサラさんとの組み手の約束も、あの人にすれば大事なのだろう。どうするか……日頃世話になっただけ、ますます何とかしたいと考える兼一であつたが、何も思いつかないでいた。

「うん？ どうしたんだい、坊や？」

「え？」

「いや、いきなり黙って、何か考え始めた様だから……」

どうやら自身が思考の世界へと入っていた事に、目の前のキサラは気付いたらしく、疑問顔で絶賛ボロボロの兼一に聞いてきた。

「え……ああ、ちょっと考え事をしていたんですよ」

「ふん、何を考えてたんだい、そんな状態だったのにな？」

あれ……もしかしたら今、悩みを解決する、かなりのチャンスが巡ってきたのでは？

兼一は、この状況に、普段は危険な事にしか働かない直感が反応するのを感じた……。

美羽はあの時、自分がやりたい事を、先決があつたために遠慮したのだ……そして今、目の前には、その先に約束をした人物がいる。これは、あの人のために、自分が出るしかないだろうと、兼一は珍しく、男らしい決断をした。

「いえ……その、美羽さんの事で、ちょっと」

「なるほど、惚れてる女の事を考えていた訳だ」

ニヤニヤとからかうキサラに、兼一は「ち、ちがいますけど！

近いと言えば近いですけど！！」と、焦りを隠せていない反応をしてしまった……この様な弄りに初心な反応を返すとは、流石、元いじめられっ子である。

だが、そんな事に時間を掛けてはいられない……何故なら、もう立つのも限界に近いからだ。

さすが梁山泊……弟子に余力を与えないとは、恐れ入る。

「じゃあ、何だっつてんだい？」

「その……キサラさんは、次に戦う人のために、美羽さんと組み手をしているんですよね？」

「まあ、そうだけど……それがどうかしたのかい？」

「それって、美羽さんじゃないとダメなんですか？ 僕とじゃ、難しいですか？」

その言葉に、キサラは一瞬驚くも「別に、アイツじゃないとダメって訳じゃないが……」と前置きし、「逆に坊やは大丈夫なのかい？ 確か、女には手を出さないとか、甘ったるいこと言ってたよな？」と、若干の挑発を籠めた口調で言い返した。

「組み手なら、ほぼ毎日、美羽さんで行っているので、大丈夫です……やれます」

力無い声色であったが、目を見れば本気である事は分かる……故にキサラも「何が目的かは分からないけど、一応、何でそこまで私とやりたいのか、理由を聞いてやるよ」と、兼一に、仕方ないなという雰囲気醸し出しながら、尋ねたのだった。

だが後に、理由を聞いたキサラが爆笑＆『ジュリエット』役をやる、美羽の“胸”に嫉妬を抱いたのは、言うまでも無い事であった……。



第五十話 サービスを練習してみたぜ！（by作者）（後書き）

あくまで持論ですので、分かりづらかったら言うてください、なるだけ説明しますので。

結構、原作じゃあ動と静と、完全に分かれていますが……。  
実際、指導者の中で、動と静の練習を別けて行う人がいるんですよ。

例えば“タントウ”ただ立っているようにも見えますが、呼吸法や、意識の差で、かなりの汗を掻ける練習ですが、これは静の練習に部類されてます。

逆にウェイトトレーニングは、完全に動の練習ですね、言わずもがな。

ですがランニングは、やり方によっては動にも静にもなり得る練習です。

興味が御座いましたら、気軽に感想で聞いてくださいね？

で、現実のファイターで動と静を別けるのなら……。

アーネスト・ホースとは静、内藤大輔は動、柔道時代の石井は静だめだ、挙げるとキリが無い……。なので断念します。

まあ、どんな人でも、相手がぐらついてたら、大抵は動に切り変わるんですけどね？

・重要

今後の更新は、この兼一たちの話しが書き終わるまでしない事にしました。

ちよっと、原作愛が薄れてきた時期もあったので、自分のペース

を再び取り戻そうと考えた結果、そうさせて頂きます。

期間としては、4月の半ばには更新したいと思っていますので、どうぞご了承くださいませよう、よろしく願います……。

感想は受け付けます、大丈夫です、何でも下さい。

この辺に、最近肉が溜まってきたから、どうやって鍛えるのですかだとか。

最近、ムラムラするんですとか……。

なんでも大丈夫ですので、気軽に書いていってくださいね。

個人的な、格闘技の話しがしたいのであれば、ゲレゲレにメッセージを下さい。

分かり辛いかもしれませんが、大抵はお答えしますので。

では、もしかしたら早くなるかもしれないし、遅くなるかもしれませんが、また次の更新でお会いしましょうノシ

募金したかい！ 俺はもうしたぜ！！！！ 皆で支えれば、復旧も早くなる！

第五十一話 バレテール（前書き）

待たせたな！



## 第五十一話 バレテール

兼一がキサラの、組み手パートナーを買ってから、数日が過ぎていた……。

この間はラグナレクに、これといった動きは無く、新島春男が設立した“新白連合”と、元ラグナレク幹部が所有していた部隊“キサラ隊”が。この地区最大組織のチームであるラグナレクと対抗するために、着々と友好関係を結んでいたのだが……。

どこを間違えたのか……キサラ隊の面々が気付いた時には、周辺に地域に『ラグナレクと対抗するために、キサラ隊は新白連合の傘下に入った』という誤報が流されていたのだ。

もちろん、当事者であるキサラ隊は、これを否定し、一応周辺地域には“確実な情報”としてではなく“嘘か本当か、未だ確証が持てない情報”として流れるようになっていた。

ちなみに、この妙な情報は……いや、説明するまでもなく新島春男にいじまはるおの仕業しわざだった。

三竦みのチーム抗争としては、これくらいの動きしか無かったのだが……大きな動きがあったのは、兼一や美羽にキサラといった個々の方だ。

まず兼一についてだが……新しい組み手相手が見つかったという事で、梁山泊の師匠達の無茶振りがエスカレートし、今までの修行+テコンドー対策や、変則的な蹴りの防ぎ方、または習得……更に、キサラが満足いくまでの組み手稽古といった、もはや、これ以上付け足ししようが無いのではと、やっている本人が思うほどの練習量が用意されたのだ。しかし、この練習であったとしても、梁山泊一の常識人、岬越寺秋雨いづつしあきあめによれば『美羽の芝居も見なくてはいけな  
いからね、かなり軽くした方だよ』だそうだ。

次に、美羽についてだ……。

美羽については、岬越寺が言っていたように、キサラの相手が兼一に代わってくれたお陰で、騙し騙しでやりたがっていた演劇部の『ロミオとジュリエット』に参加することが出来るようになった。やってみると大根役者ではあったが、ここ数日、学校では谷本が自宅では岬越寺が教えについた事で、着実に本番に通用する実力を付けていっていた。

次はキサラだ……。

キサラは当初、兼一が意外に自分と戦えている事に驚きを見せていたが、回数を重ねるにつれて、次第に兼一の成長が自身の実力にももの凄いスピードで追いついてきている事に気付いた。

秘密は探るまでも無く、常軌を逸した梁山泊の稽古が為した結果なのだが……釈然としないキサラは、自分も同じくらい稽古をするのと、兼一に持ちかけたのだが。

「絶対にダメです！！ いいですか！？ この道場は……。」と、延々と梁山泊の地獄について並べられた上、絶対にやろうと思っただけはダメだとまで言われてしまったので、この件に関しては、また次の機会に先送りされた。

だが、確実に体格差のある相手と戦う術は身に着けてきたと、キサラは感じている……。

理由は前記した事以外にも、空手の達人である逆鬼さかきから、気まぐれで学んだ蹴り技や、アパチャイの親切心から教えてもらった、ムエタイの蹴り技が、キサラの成長に拍車をかけさせた。

もともと、テコンドーに帯、つまり腰から下を蹴る技は、形以外では存在しないのだが、この二人の技術を吸収した事で、キサラが使う蹴り技に、更なる進化を遂げさせる要因となったのだ。

ここまでは、兼一がキサラの組み手相手を買った日からの数日間の話だ。

土地の無駄遣い

この言葉がしつくり来るのは、廃れた廃ビルなどが無駄に威を構えているときだろう。

そして、キサラが自身のチームの拠点として使っている場所も、無駄に大きな廃ビルであり、不良達の溜まり場になっていることから、土地の無駄遣いと言えるであろう。

だが、本人たちには、その様な事情は関係が無いし、また、この廃ビル自体がキサラの親の所有物なので、問題は無いのだろう。

「キサラ様」

そんな廃ビルのとある一室で、黒革のソファーに寝そべったキサラに声を掛ける者がいた。

その者は白鳥という男で、男性にしては長く豊かな金髪が特徴的な、季節問わず厚手のコートを着ている。

ソファーの後ろから声をかけられたキサラは、若干面倒臭そうにしながら、寝そべった状態のまま口を開いた。

「ああ、なんだ？」

声にいつもの張りが無い……疑問に思った白鳥であったが、表情には出さず、ただ平常通りに話を続ける。

「今しがた“新白連合”の総督、新島春男が、第六拳豪の隠者ハイミットと接触をしたとの情報がありました」

「そいつは良かったな、で？ その新島とか言う、馬鹿はどうしたんだ？」

力無い口調であるが、若干の“ざまあみろ”という負の感情が見え隠れするキサラの問いに、白鳥は「残念ながら」と前置きをしな

がら。

「無傷で逃げ延びた様です」

「そうか、出来れば潰して欲しかったんだがな、あのホラ吹き野朗

……」

「まあ、お気持ちは分かりますが……」

苦笑をしながら、白鳥は「こほん」と咳払いをした。

「また、ハーミットが新島と接触をした際、何やらハーミットが『白浜兼一は、どこで武術を習っている』と、新島に質問をしたそうです」

「……それで？」

現在の組み手相手兼、今現在消息が掴めていない幼馴染の友人でもある男の名前を聞いた瞬間、キサラの纏う空気と口調が真剣なものへと変わった。

「聞かれた新島は、幸い何も喋らずにハーミットから逃げ延びた様です……やはり、いくら外道とは言え、武田たけだ一基いっきとのツートップを担う人材ですから、そう易々とは売らない様ですね」

「そうか……なら良い、私も、あの坊やには、まだ相手してもらわないと困るからな」

ほっと安心した様に、寝そべりながらもキサラは肩で息を付く……。

どうやら、キサラなりに兼一の事を気にかけている様で、白鳥もその様子を見て、どこか新鮮な気持ちに浸った。

「私からの報告は以上ですが……キサラ様、少々お疲れ気味なので

は？」

話しを終えた白鳥が、心配そうに、ソファーに寝そべるキサラに聞いた。

その問いに、キサラは被っていたハンチングキャップを手に取り、ソファーの背もたれが影になって見えない白鳥に向けて、ヒラヒラと手に取ったハンチングキャップを振り始めた。

帽子を振っているキサラの細腕には、痛々しい痣や、湿布などが見られた。

当然、白鳥は驚く。

「どうしたのですかキサラ様！？ その腕は……」

狼狽する白鳥であったが、ソファーに寝そべるキサラには駆け寄ろうとしない……。

なぜなら、キサラ自身が、まだ来いとは言っていないから……もあるが、それ以上に、ソファーの背もたれを廃れた入り口の方向に向けているからだ。

長い間、キサラと過ごしてきた白鳥には、これだけの事で全てが理解出来た。

つまり、今は姿を誰にも見られたくないという、暗のサインなのだ。

しかし、腕は見せたという事は、説明はしてもらえるのだろう。

「あの坊やさ……正直、今でも信じられないよ」

「白浜兼一が？」

「そうさ……あの坊や、とんでもない男だよ」

キサラは、本当に信じられないものを見てきたかのように話しました。

「最初は大体、私より少し弱いくらいだったんだ。まあ、それにも驚いたが……組み手の回数、というより、日を挟むに連れて、少しづつ、また少しづつ確実に強くなっていったってやがるんだ」

「……それは、つまり？」

「才能……もあるが、何より、吸収能力が半端じゃない。だけど、これはあのボロ道場での稽古が原因だな……何回か見たが、一つの事にかける量が尋常じゃないし、全体にかける密度も尋常じゃない」

見てきたものが、常軌を逸していた事を、キサラは白鳥に語っていく。

実際、一般人から見れば、あの“梁山泊”で行われている兼一の稽古は、もはや“死刑”の域にまで達している事であろう。

そして、それを見てきた者だからこそ、感じれた事がある。

「何より、その練習量をこなし、10ではないにしろ、5は学べる集中力や胆力、そしてスタミナが異常なんだ、あの坊やは……正直、スタミナだけで言うなら、拳豪達よりも上かもしれないな」

このキサラの言葉に、聞いていた白鳥は「それ程のものなのですか……」と、驚愕の声を上げてしまう。

「実際、私も最初は勝てたけど、今じゃギリギリ……もしくは、長引いて引き分けて言うのもあったくらいさ」

「信じられない……あの男が……」

「事実さ、いずれ抜かれるだろうね……ま、私が万が一にも“気を抜いたら”だけどね」

釈然としない……正直、白鳥はそう感じていた。

当然だ……なにせ、自身が部下として下に付いている、または絶

対的な存在として置いてある人物が、以前まで弱者の立場にいた人間に“勝てなくなるかもしれない”と言ったからだ。

だが、口には出さない。

だが、忠心は揺らがない。

何故なら、どんなことになったとしても、白鳥は自身が絶対的な存在として置いてあるキサラを信じているからだ。

故に、何も言わない、何も揺らがない。

現在、既に日も暮れ夕食の時間へと入ろうかと言う時刻。

梁山泊では内弟子、つまり兼一の“死刑”とも言える地獄の稽古を終え、居間である広い畳の部屋で、それぞれの武術を極めた者たちが、一つの長い食卓を囲むという光景が見られた。

「アパパパパ」

「ああ！！ 僕のおかずがぁ！！」

そして当然、兼一の夕飯のおかずが、隣りに胡坐をかいて座るアパチャイに瞬速を超える箸使いで奪われている（ちなみに、おかずはサクツと美羽の腕で狐色に上げられたトンカツだ）。

なぜ奪われてしまうのか……それは、以前兼一が梁山泊の内弟子になったばかりの話しで。

兼一が始めて梁山泊の面々と食事を共にした際、“内弟子”という道場に住み込みで、師匠と寝食を共にするイメージを、某ジャツキーなチェンさんが主演した、酔うと強くなるらしいよみたいな映画で例えた事に原因がある。『食事も修行の一環だーっ』……口は災いの元と言うが、兼一は梁山泊の“悪乗りが大好きな師匠達”に、この言葉を言ってしまったのだ。

その後は当然、“悪乗りが大好きな師匠達”に、皮肉かな……今

回と同じおかずである、美羽が揚げてくれた狐色のトンカツを、全て奪われるという結果に至ってしまった。

まあ、このどうでも良い兼一の苦勞話はさて置いて……。

「美羽、劇の練習はどうなんだよ？」

兼一とアパチャイを無視しながら、逆鬼はビール片手に、長老の居ない上座で食事を取る美羽に、何気ない質問を投げかけた。

「はい 秋雨さんや、演劇部の谷本さんのお陰で、何とか順調に進んでますわ」当然、逆鬼の問いかけに、美羽は行儀良く、口に含んだ物を飲み込んだ後に返した。

「美羽は、確かにまだ役を掴みきれていないが、安心したまえ、私が当日までに何とかしてみせるよ」

「ま、秋雨に任せれば何とかなるのは確実だしな」

言いながら逆鬼は、ぐいっとコップに入ったビールを飲み干す。

そしてふと、逆鬼はある方向に目を向けた……。

そこには、楽しい夕飯の時間だと言うのに、まるで黙考をするかの様に、夕刊の新聞をひたすらに広げ、眺めている、夕食という事で普段被っている帽子を脱いでいる馬剣星ばけんせいの姿があった、剣星はまだ夕食に手をつけていない様であった。

「どうしたんだ剣星？ ポーっとしてるとアパチャイに食われちまうぞっ？」

剣星の様子が気になった逆鬼は、飲み干したコップに更なるビールを注ぎながら声をかける。

しかし、逆鬼の体はどうなっているのか？

筋肉にとって、アルコールとは最大級に危険なものだというのに、



これほど飲んでも、何一つ変わらなければ、常人では理解できない程の見栄え、そして運動量を誇っている……本当に、どうなっているのか謎であるが、今は話を戻そう。

「……」

逆鬼に問いかけられても、剣星は何やら黙考したまま、ジッと新聞を眺めている。

流石に、普段はうるさいのか常識人なのか分からない行動を取る人物が、こつも静か、または人の問いかけを無視していると、周りも異変に気付いてくる。

「うん？ 剣星……」

異変に気付いた秋雨が、持っていた茶碗と箸を置き、新聞で殆ど姿が見えない剣星に視線を向ける。

やはり、剣星には動きが見られない……が、実は、秋雨が視線を向けているのは、新聞を広げている剣星ではなく、その後ろ。

「『横浜中華街で暴力団抗争』……？」

「おわッ！？ し、しぐれどん、驚かさないでネ！！」

天井の木組みから、いつの間にかに“逆さに垂れ下がっていた”香坂しぐれだ。

しぐれは、逆さの頭に疑問符が浮かぶ表情で、驚く剣星に首を傾げながら聞く。

だが、しぐれから出て来たワードに逸早く反応を示したのは、当の本人ではなく、既に何杯目か分からなくなったコップを空けた逆鬼であった。

「へえ、そりゃ何やら楽しそうな事になってんじゃねえか？ 確か、お前の知り合いが居る場所だよな、横浜中華街って？」

へっへっへつと、ほろ酔い気味に赤く染まった顔で、不敵に笑う逆鬼。

剣星は突然、自身の後ろに現れた衝撃から、難なく立ち直ると、広げていた新聞を閉じながら、逆鬼の問いに答えた……どうでも良いが、しぐれは未だに天井の木組みにぶら下ったままだ。

「確かにそうネ。だけど心配はする必要はないネ……」

「じゃあ、何であんなに考え込んだ感じだったんだよ？」中国でもトップと呼ばれる程の実力を持つ剣星が、太鼓判を押す知り合いは気になるが。剣星の少し言いよどむ仕草に、逆鬼はコップにビールを注ぎながら聞く……が、注ごうとしたビールの瓶は「少し飲みすぎですわ」と、エプロンを着けた美羽に素早く取り上げられてしまった。抵抗しない辺り、一応の常識人である事が見られる。

その様子を一瞥しながら、剣星は逆鬼と秋雨に、これまでと違った真剣な視線を送る……。

アイコンタクト。

気付けば二人の行動は早い。

二人は各々、食卓の席から立ち上がり、他の兼一などの「え、どうかなさったんですか？」という反応を無視しながら、剣星の方へと歩いて行った。

剣星に近づいた二人は、互いに周囲に何も漏れないよう、剣星に耳を傾ける。

「で、何なんだよ剣星？」

「気になったのは、これネ」

言いながら、剣星は閉じていた新聞の見出しを二人に見せた。すると秋雨が「なるほど、そう言う事か」と、納得の声を漏らす。逆鬼は「そういえば、最近亮平の奴も見ねえしな……。」と、どこか心配そうな面持ちであった。

「新聞には“金城組”と書いてあるネ、けど、確かこの“金城組”は……」

「ああ、間違いねえ、東堂会の鬼島組若頭、金城銀二かねしろ ぎんじの組だ」「やはりね……」

深刻そうに俯く剣星……。

“鬼島組”……このワードが出て来たと言う事は、もしかしたら現在、クラスメイトである美羽や兼一、または幼馴染であるキサラですら消息が未だ掴めていない、あの男が関係しているかもしれない。

優しく、そして面倒見も良い剣星は、この問題を先程まで考え込んでいたという事だ。

すると逆鬼が、深刻そうに考える剣星に、いたって陽気な口調で「それにしても、良く調べてんだな、お前？」と剣星に聞いた。

「日本の裏事情は、梁山泊に来る前から、ある程度は調べてたネ」

「しかし“鬼島組”か……」

「ああ、だが新聞には“金城組”としか書かれていねえ……。確か、見たときはねえが、金城銀二かねしろ ぎんじって野朗は、頭も切れて、かなり親である鬼島平八おにじま へいはちに忠心を置いているらしい」

「なら何故、この様に“単独”で書かれているんだ？」

荒事なら、秋雨よりも警察にパイプを持つ逆鬼の方が詳しい。故に、逆鬼は考えながら一拍の間を空け……。

「……多分、“独断”で動いてんだろ。聞いた話じゃ、その金城はメディアにも警察にも浅くは無いコネを持つてるらしいからな」  
「なら、これは……」

「ああ、もしかしたら、一枚岩だった東堂会で何かがあったのかもしれないねえな……こりゃ、俺の方にも久しぶりに仕事が来るかもな」

口調自体は穏やかであったが、表情はどこか好戦的に楽しそうに笑っている。

だが、剣星は口を開く。

「だけど心配ネ……兼ちゃんの話じゃ亮ちゃんは、ちょうどこの新聞に書いてある日に学校を休んでるネ」

「巻き込まれているという事か？」

「可能性はあるな……」

三人の達人は、団子の様に固まりながら話し合いを続ける。

その光景は、どこかというより確実に不審で、高校生である兼一の興味を引くには十分であった。

故に、兼一は「何を話してるんですか、師匠達？」と、食卓の席を立ち上がるが……。

瞬間、逆鬼が振り向き、美羽の方に鋭いアイコンタクトを取る。

はっと、察しの良い美羽は逆鬼のアイコンタクトに気付き「兼一さん、食事中に席を立つのは行儀が悪いですよ」

「え、だって師匠達が……」

「兼一さん？」

「……すみません」

美羽の言葉に、兼一はトボトボと自分の席へと戻っていく。

その様子を見ていた逆鬼は、再び顔を二人の達人へと向けた。

「はあ〜……たく、亮平の奴もメンドクせえ事してるよな」

「仕方が無いだろう……実際、ヤクザの息子であると知れば、学校では過ごし辛い筈だ」

「まあ、おいちゃん達には、結構最初の方からバレてたけどネ」

これは、何と行って良いのやら……。

亮平が今まで、なるべく他者に知られないようにしていた事が、梁山泊の面々には既にバレていたみたいだ。しかし、これはある意味で当然とも言える……。

なぜなら、逆鬼は警察の方にパイプを持ち、剣星は中国でもトップの実力者……この様に、梁山泊には日本の裏を知る機会があった者、そして調べなくてはならなかった者がいるのだ。

亮平の実家、鬼島組や東堂会は、この日本全体の渡世者達からは絶対の存在として君臨している。

それは財政面でもそうだが、何より亮平の父親、鬼島平八の力リスマ性によるものが大きい。

実は、日本の裏を知る者たちにとって、もはや鬼島平八とは生ける伝説とまで呼ばれる存在なのだ。

若い頃から五代目東堂会々長に気に入られ、その異常なまでの強さや家族思いの性格から、周囲の同期、または後輩から慕われ、集まってきた舎弟たちや五代目からの提案で、若くして自身の組を持ち、その組を一代で成り上がらせ、東西南北に有無も言わさぬ躍進を見せ付けた。

また、平八には他にも様々な逸話があり……あの“無敵超人”の全力を無防備で18発耐え切り、一撃で無敵超人の膝を“一度だけ”地面に付けさせたとか（勝負には負けている）、港に突っ込んできたタンカーを生身で止めたとか……他にも、自身を殺しに来た殺し屋に一目惚れし、そのまま結ばれてしまったというのもある。一代で成り上がり、他にも様々なストーリーを歩んできた平八は、

ある意味で日本人が大好きなサクセスストーリーを体現したヒーローとも表せるであろう……ヤクザではあるが。

故に、これだけ裏で目立つ人物を、同じく裏でも異彩を放つ梁山泊の面々が知らぬ筈は無いのだ。

そして、同時に子息の情報も、少し調べてしまえば出てきてしまうという事だ。

「だがよお、剣星？ 実際、俺らが気にしたところで、どうにかなるようなもんでも無いだろう？ もう中華街と“金城組”の抗争は始まつちまつてるんだ……たとえ俺の予想が当たって、金城組の独断だとしても、日本の裏の混乱は避けられねえぞ？」

「確かに、逆鬼の言う通りだ……いくら独断だろうが、その予想や真実を知るものが、この日本にどれだけいるのか。そして金城という男が、あの鬼島組の若頭だったのなら、勘違いした者たちは“遂に東堂会が中国に戦争をしかけた”と思い込んでしまつかもしれない」

「そこね……この問題にもし、亮ちゃんが関わっていたとしても、下手においちゃんたちが首を突っ込めば、それこそ日本対中国の話が出てきても可笑しくはないネ」

単に梁山泊と言っても、剣星やアパチャイの様に違う国籍の者もいる……が、戸籍を置いている場所は日本なのだ。つまり、対外勢力からは、梁山泊とは日本が“所有”する少数精鋭の超戦力と見られても不思議ではないという事だ。

マスタークラス 達人級の力は、一人のA級がいただけで、銃撃戦やミサイルが飛んでくる一つの戦場の戦況を完全に支配できるレベルなのだ……故に、この世界では、国が所有する軍の規模だけではなく、国に戸籍を置いている達人たちの数も戦力の規模として認識されている。

その戦場すらも凌駕してしまうA級のさらに上、“特A級”の達人達が合わせて6人……内一人が、世界でも1・2を争う実力を持

つ “無敵超人” 風林寺隼人。

もはや核以上の破壊力を生み出せる戦力……この戦力がもし、安易にヤクザとマフィア、または“裏”の抗争に介入してしまったのなら？

それは、裏世界の住人たちにとって、ベルリンの壁が崩壊したときのニューヨークが悪夢に見えてしまう様な、これまで保ってきた均衡が崩れる様な大ニューヨークなのだ。

故に出られない、下手には出られない……。

だが三人を悩ます種は、その筈なのだ……。

「それよりも、この事をどうやって兼一にバレずに収めるかだよな。依頼とか、亮平が関わってるっていう確りとした情報があれば、俺が行ってやらない事もないんだがな」

「兼一君には、私が何とか誤魔化しておくが……まあ、いずれはバれてしまう事だ、その辺は気にしてもしょうがないだろう」

「それもそうネ」

この様に、梁山泊の達人に掛ければ、ヤクザとマフィアの抗争よりも、自身の弟子と亮平の関係をどう保つかに話し合いの重点を置けてしまうのだ。

最初の深刻そうな雰囲気はどこにいったと、傍目から見たら言われてしまいそうな変わりよう。

そして、その空気の変化を周りも感じ取り、話し合いは、ほとんど終わったという空気が流れていた。

「で、結局どうするん……だ？」

「別に、いつも通りだよ」と、実は今までずっと、三人の会話を後ろで“逆さづりのまま”聞いていた、しぐれに逆鬼が笑いながら返す。

しぐれは逆鬼の答えを聞くと「そうか、分かっ……た」ただけ言  
つて、そのまま天井の方へと消えて行った……どうやらしぐれは、  
夕食を他の者たちとは別に食べているらしく、天井の木組みの影か  
ら、しぐれの友人である鬪忠丸が尻尾を覗かせていた。

「たく、たまには一緒に食わねえのかよ……」と、逆鬼はしぐれ  
の行動に呟いたのだった。



## 第五十一話 バレテラ（後書き）

今回から、一日の間を空けながら、一話ずつ更新していきたいと思っております。

しかし、その更新速度は、亮平が出てくるまで限定です。

理由は、活動報告で四月中に書いてしまったので、これから頑張って書いていく事も踏まえて、これくらいの速度にしました。

現在、これの他に三話分のストックがあるので、見直しとかしながら更新していきます。

では、次回にまたお会いしましょうノシ

第五十二話 将を射んとすれば、まず馬から（前書き）

今回、結構強引な感じになって、自分でも思ってます。

そして、申し訳程度に入れた戦闘描写も、ちょっとだけ不安な感じですが、ご了承ください。

## 第五十二話 将を射んとすれば、まず馬から

荒涼高校一年E組。

何の変哲も無い高校の教室に、現在、未確認生物と思われるシルエットがあった。

だが、その様な異常事態でも周囲の人間に動揺などは見られない……つまり、これが普段の光景だというのだろう。

また、驚く事に、その未確認生物と普通に会話をし、未成年特有のじゃれ合いなどのスキンシップを取っている少年までいる。

我々は、この日常風景に溶け込む、謎の未確認生物を確認すべく、視点を近くにいる少年に置かなければならない。

「だから、僕は何を言われようと、お前のチームになんかには入らないと言ってるだろうッ!!」

「てめえは何度言えば分かるんだ、このボケ!! 昨日俺様たちは“ラグナレク”の第六拳豪に襲われたんだ、そんな時わざわざ掛かってくる前に、お前について聞かれたんだよ!!」

冒頭の文は、どうやら兼一の友人、おかつぱ頭に先の尖りきった鼻、もはや人外としか思えぬ耳を持った、新島春男の事であった様だ。

だが、普段は悪巧みしかない彼が、今日はやけに真剣な表情で兼一に“掴みかかっている”。

対する兼一も、周囲に並ぶの机を上手く避けながら、新島の掴みかかりに怒ったように応戦している。

これは、どういう状況なのか？

時間は既に放課後、兼一がいつも一緒にいる美羽は演劇部の助っ人へと既に行ったあとで、泉も真琴も教室にはいない。いるとすれ

ば、HRを終わっても、いまだダラダラと会話を続ける帰宅部の生徒達だけだ。

そんな中で、二人は取っ組み合いの言い合いをしている。

「第六拳豪に聞かれたからって、何だって言うんだ！ 別に、ラグナレクに狙われるのは今に始まった事じゃないだろう！！」

「お前はちゃんと人の話を聞け！ 俺様が聞かれたのは、確かにお前の事だが、内容は“お前がどこで武術を習っているかだ”！居場所でも弱点でも何でもねえって言うてんだろ、このスカタン！！」

「どこで武術を……？」取っ組み合いの言い合いをしていた兼一が、新島の言葉に動きを止める。

「ようやく聞き取ったか……」と、新島は動きを止めた兼一を確認して、苦労したと一息ついた。

そして新島は、兼一の両肩にポンと手を置き、諭すように口を開いた。

「いいか兼一、よく聞けよ？」

「あ、ああ……分かった」

新島の真剣な眼差しに、兼一はいつもと違うと息を呑む……。

「第六拳豪つてのはな、以前、鬼島の奴がキサラと一悶着起こした廃病院に居た拳豪なんだが、実際には戦わず、そのまま帰っちゃまった奴なんだよ」

「え？ それって、あまり凄くないって事じゃないの？」新島の説明に、兼一は意外そうに反応するも「良いから黙って聞け！」と、怒鳴られてしまう。

「お前、あの場にいたラグナレクの兵隊達の数……覚えてるか？」

「……かなり多かったとしか」

「そうだ、ただの不良集団にしては、異常な数が集まってたよな？」

「うん……」

「あれは、あの場にいた第四拳豪や第三拳豪、そして元拳豪のキサラたちの兵隊たちだった訳だが……分かるか、兼一？」

「……それって」もともと小説や本などを愛読する、文系にも秀でた兼一は、今の新島の言葉に疑問点がある事を理解できた。

「そうだ、あの場には“三隊”の兵隊しかいなかった。つまり……」  
「第六拳豪っていう人は、たった“一人”で？」

「正解だ」と、新島は兼一の目を見ながら頷く……。  
だが、このことの意味が良く理解できなかった兼一は、新島に「  
」  
ただ、それが一体どうしたって言うんだよ？」と頭に疑問符を浮かべながら問うた。

その兼一の問いに、新島は「兼一、ラグナレクにとって“拳豪”  
って何だ？」と問い返した。

「……幹部って言うか、下を纏め上げるために用意された役職かな？」

「あと象徴や抑止力つてのもあるな……兼一、考えても見る」

「何を？」

「あれだけデカイ組織で、重要な役職についてる人間が、護衛または兵隊の一人も連れないで、あの鬼島に近づけると思つか？」

「ッ！！」

兼一の肩を掴む手に、新島はさらに力を込める。

「護衛がない、必要ないって事は、それだけ組織のトップに信頼されているからこそ許される我俣だ。俺が知ってる中で、ラグナレク内で部下や兵隊がないのは、第二拳豪と謎の多い第五拳豪、そして第六拳豪だけだ……内、俺が知りえた情報では、部下を持たない第二拳豪バーサーカーは言わずもがな、第六拳豪のハーミットも、個人の実力が他の面子よりも秀でた奴なんだよ」

「つまり……」

「ああ、お前が前に倒した辻や武田、そして今練習相手として戦ってるキサラよりも、数段強いって事だよ」

「……」

あまりの事実に、兼一は黙り込んでしまう……。

これまで、兼一にとって楽な戦いと言えば、二・三回目の辻新之助しか無かった。

だがこれは、偶然の不意打ちや、練習で身に着けた事が、素人である相手を上回っただけの事だ。

それ以外では、武田の時は、亮平や美羽、そしてアパチャイのアドバイスが無ければ苦戦をしていた。

キサラに至っては、練習量が増えても、未だに勝てないでいる……。

新島は言う……今回、兼一を付け狙っている相手は、この三人よりも強いという事を。

故に、この事実に黙り込んでしまった兼一に、新島はあえて言う

「兼一、新白連合に入れ」

しかし、兼一の答えは……。

「……すまない新島、それは出来ない」

「何んでだよ兼一！？ お前、いま自分が置かれてる状況を理解してんのか!？」

申し訳無さそうに、兼一は新島の提案を断った。

実際、新島の提案は悪くは無かった筈だ。

これまでよりも強い敵、さらに言えば、これまでの事が比にならないほど兼一はラグナレクにマークされ始めたのだ。それによって、兼一を取り巻く周辺はもちろん、兼一自身の危険も跳ね上がった。

亮平や美羽がいれば、少しは話が変わってくるのだが……現状、美羽は演劇部で忙しく、兼一とはなかなか一緒に帰れず、亮平に至っては、連絡すら取れない状況なのだ。

これらの事を踏まえて、新島は、今の兼一の実力では、この状況に対処しきれないと判断し、今回の様な提案を改めてぶつけたのだ。しかしと……兼一にも、新島の提案を受け入れられない理由がある。

「状況は、お前のお陰で理解できたけど……僕は、あいつらの様に集団は作りたくないんだ。もし作ってしまったのなら、僕はあいつらと同じになってしまうから」

「集団は作りたくないだと？ 甘ったれるんじゃないか！ もし、お前が誰も知らないところでやられたり、お前と親しい人物が人質に取られたりしたとき。お前は一人で何でも解決できるってか？ あの少し前までフヌケンだった、お前が？ ヒーローになりたいって夢は別に構わねえがな、もう少し器用に考えたらどうだ？」

「甘ったれるも何も、僕はそう決めているんだ。それを曲げてしまつたら、応援してくれる人に申し訳が立たないから……器用に考えろって言われても、僕にはまだ、出来そうに無いよ」

兼一の理由に、新島は「お前つてやつは、とことん馬鹿でお人好しだな……」と、合わせていた目を伏せながら呟いた。

そして、新島は兼一から両手を放し、後ろへと振り返ってしまう。

「新島？」

「これだけ言っても、考えを曲げようとしなないんじゃ、時間の無駄だ。俺様は俺様の軍団、新白連合の戦力補強に努めなきゃならないからな……お前みたいに、暇じゃねえんだよ」

言いながら、新島は片手を振って兼一から離れていってしまっ……。

その際、兼一は小さな声で「すまない、新島……」と、自身の心配をしてくれた悪友に謝ったのだが。

その、悪友はと言うと……（本人に言っても、突っ撥ねられるんじゃないだろうがねえよな……こりゃ、外から攻めてみるか）と、邪悪な微笑みを、後ろで寂しそうに佇む兼一に見えぬように浮かべていた。

荒涼高校ボクシング部。

そこは校内の一室を、丸々ボクシング専用の施設に作られた場所で、鉄製の引き戸を開くと、ワセリンやら男の汗などの、実に暑苦しい臭いが漂っていた。

だが、そんな中でも、一際爽やかな汗を掻いている人物がいた。

武田一基……浅黒い肌に、白い長髪を後ろに括った、体格の良い男子高校生だ。

彼は、ロープの張られた四角いリングの上で、キャンパスと履いているシューズが擦れ合う、キュキュっといった小気味良い音を華麗に鳴らしながらステップを踏んでいる。

手につけた赤いグローブは16オンス、サイズだけ見ればミット打ちかと思う物だが、武田が行っている練習は“スパーリング”だ。対する相手は、本来の練習用よりも小さな“8オンス”……試合に近い大きさで武田と相対している。



「シッ！」

対戦相手の男が、ガードを下げ、サウスポーのスタイルで、相手に半身の姿を見せる“デトロイトスタイル”の構えを取っている武田に、直線的な踏み込みも交えた左の鋭いジャブを突き出す。

8オンスで守られた拳……しかし、8オンスというのは慣れた者にとつて、もはや障害にもならないレベルの重りだ。

故に、相手のジャブの速さは馬鹿には出来ない……なぜなら常人なら、一瞬でも瞬きをしたら、相手の男が取った行動が一切認識できないスピードだったからだ。

ジャブを出した際に、相手の左肩は動かず、まるで一本の棒の様に突き出される。

だが、この無挙動ノーモーションとも言えるジャブを、武田は難なく体で取つていたリズムを崩す事無く、首を傾けただけで避けてしまう。

相手の左拳の親指側が、武田の右頬を掠める……。

ここで、一つの状況が出来上がった。

相手は“踏み込み交じり”で武田にジャブを放っていたがために、自身の懐への侵入を武田に許してしまったのだ。

「シッ！」

しかし相手もなかなか……いつの間にか懐に、ガードを下げ、身を屈めながら進入してきた武田の顎を迎え撃つかのように、右のシヨートアッパー、つまりアッパーカットを振り上げたのだ。

一瞬半身になるジャブ打ちで出来た体の溜めを、右足の爪先や腰を左に捻る事で開放し、流れるように繰り出された相手のアッパーは、最短距離のラインで、武田の顎を捕らえた“筈”だった。

ブン　相手の決まり手になる筈だった、右のアッパーが、武田に掠る事も無く空を切った。

なぜ外れた……そう思い、相手は武田を見た。  
だが既に、そこに武田の姿は無かった。  
相手の男の視点では、武田は捕らえられない。  
なぜなら、武田は既に、相手が振り抜いたアッパーの外側。  
つまり、相手から見て、右側の死角にいたからだ。  
あまりにも素早いサイドステップ……。  
そして、次の瞬間には……。

ドパンツッ!!

武田のデトロイトスタイルから放たれた“左ストレート”が、相手のがら空きとなった右米神を、まるでミットでクリーンヒットを出したかの様な気持ちの良い音を出しながら打ち抜いていた。

当然、相手の男は、ほとんど不意打ちの様な打撃に、意識を失わせ、その場に膝からグニャッと崩れ落ちてしまう……。

「あらら」

しかし、相手のKOした筈の武田は、この結果が信じられないといった表情をする。

だが、その間に、武田の足元では崩れ落ちた相手の男を心配する者達が集まってきた。

当然だ……いくら格闘技だとは言え、失神してしまった者を心配するのは当たり前なのだ。

「お〜リハビリは順調みたいだな？」

「うん？」

失神者が出た事に忙しくなるリングの上ではなく、ボクシング部の入り口からかけられた声。

その声に、コーナーに寄りかかろうとしていた武田は、なんだろうと反応する。

そこにいたのは、学ランを着た宇宙人、新島春男であった。

新島の姿に、武田は「やあ、久しぶりじゃない？」と陽気な声をかける。

声をかけられた新島は「ずいぶんと、でかいハンデを着けてんな？」と、武田がかけるコーナーへと歩いていく。

「これかい？ これは確かにハンデもあるけど、僕のリハビリでもあるんだ。ちゃんと岬越寺先生からは許可を貰っているよ」

言いながら、武田はグローブで新島に手を振ってみせる。

「相手は強かったのか？」

「ああ、そういえば」

武田は向けていた視線を新島から、失神した相手を介抱する部員たちに向けて。

「悪いんだけど、誰か彼に『アッパーを打つときは、視線を上げちゃダメだよ』って伝えてくれるかい？」

この伝言に、一人の部員が「分かりました」と返事を返す。

武田は返事が帰って来たのと同時に「よし、で………なんだっかな？」と新島に再度視線を向ける。

「相手が強かったかどうかだよ」

「うーん………才能はある方じゃない？ ジャブも早いし、反応も良い方だったからね」

「そうか」

いつもながらの爽やかな微笑みで、相手の事を評価する武田に、新島は不敵な微笑みで「調子は良いみたいだな」と聞いた。

「まあね〜 さっきのは小さく打ったつもりだったけど、16才  
ンスでも気持ち良い音が出たから、調子は良い筈じゃないかな」  
「そうかそうか」

武田の嬉しそうな返答に、新島も嬉しそくに不敵な笑みのまま相槌を打った。

すると、武田が「で、わざわざ何の用だい？」  
新島は、この武田の切り替えしに、表情を真剣なものへと変える。  
武田も、その新島の変化に何かを感じ取り、表情に微笑みが無くなつた。

「単刀直入に言う、兼一の奴が“第六拳豪”に狙われ始めた」  
「ッ!？」

第六拳豪というワードに、武田が驚いたように反応する。

ハイミット  
「隠者にかい？」

「ああ、俺様は昨日、その隠者と遭遇して、実際に兼一のことを聞かれた」

「何て聞かれたんだい？」

「兼一のやつが、どこで武術を習っているかって事だったが……狙われているのは確かだったな」

「兼一君が、あの隠者に狙われている……」

深刻な表情で、武田は恩人である兼一のこと心配する……。  
その反応に、新島は心の中で（かかったな）と、ちよろい相手を

引つ掛けた笑みを零す。

ここから、新島の武田洗脳計画が始まる……。

植物は良い物だと……園芸を嗜む者達は言う。

だが実際、興味の無い者には、本当に観賞するだけの物、あるいはただ生えているだけの物と思われてしまつかもしれない。しかし、その様な物でも、育てる事に生きがいを感じる者もいるのだ。

「ああ、やつぱり、この時間が、一番気が休まるよ〜」

現在、兼一は園芸部の花壇で、植えられた植物たちに如雨露で水を与えている。

如雨露の先端に開けられた細かい穴から漏れ出すように、様々な曲線を描きながら水が植えられた植物へと降り注いでいく。

上から降り注ぐ水のお陰で、植物たちは葉を揺らしながら瑞々しさを取り戻していく。

その様子を、兼一は笑顔で如雨露を持ちながら眺めている……。

そして更に、その兼一の様子を「白浜くん、今日はなんだか、いつもより機嫌が良いみたい」と、クラスメイトである眼鏡娘、泉優香いずみゆうかが、何やら嬉しそうに眺めている。

だが泉は勘違いをしている……兼一は、決して機嫌が良いのではない。

「あんな話しされた後だと、尚更だよ……」

兼一は、先ほど新島に言われた事を、植物を愛でることで、必死に気を紛らわそうとしているのだ。

「（第六拳豪かあ……あゝあ、何でこう、ひたすらに絡まれなきやならないんだらうか？）」

後ろから同じく花壇に水を与えている泉に見つめられていても、涙目の状態で一切気づきもし無い兼一は、心中で悲壮感に打ちひしがれていても、花壇に与える水は適量で済ませている……この辺は、流石のベテラン臭を匂わせている。

だが兼一は、ふと、以前梁山泊で逆鬼が言っていたことを思い出した。

「（そう言えば……前に逆鬼師匠が言ってたっけ。学校で強くなっ  
ていけば、さらに強い人が現れて、その人を倒せばまたって感じの、  
堂々巡りなことを……うわゝ正に、その通りの展開になってるよお）  
」

もともといじめられっ子であったチキンハート兼一にとって、現在の状況は最悪と言って良いほどのもので……今でも抱いている夢の体現に燃えるならまだしも、平和な生活という当たり前な環境が遠ざかっていくのが手に取る様に分かってしまうので、悲壮感に打ちひしがれる他に、心中に浮かんできくる感情は無かった。

すると、そこに「白浜君、今日は……風林寺さんとは帰らないのかな？」と、泉が声をかけてきた。

「……え？ ああ、美羽さんなら演劇部の助っ人で忙しそうだから、今日は来れないんじゃないかな？」

「へゝそうなんだ……」

自身の呼びかけに振り向きながら答えた兼一に、泉はかけている眼鏡を光らせながら、心の中で（チャンスよ優香！ここでもう少し踏み出せば！）と奮起し始めるが。

「兼一くん！ 少し良いかい！」

「うん？」

「だったら、今日は私と帰らない……？」

そこに校舎二階の窓から、兼一を呼ぶ声が聞こえて来た。

兼一は、呼びかけられた声に聞き覚えがあったので、何事かと校舎二階の窓を振り仰いだ。

一方、せっかく勇気を出した泉の誘いは、声が小さい事もあって、タイミング悪く兼一の耳には届かず、あえなくスルーされてしまった。

結果、涙目になる泉に気付けなかった兼一は「あ、武田さん！」と、二階の窓から手を振っていた人物に意識を集中させてしまう。

本当に、間が悪い少女である……。

「部活中に悪いね！ 少し話しをしたいんだ！」

「話しをですか？ はい、分かりました！」

返事を返したのなら、行動は早い。

兼一は、近くで何故か落ち込んでいた泉に「ごめんね泉さん、武田先輩が呼んでるから、少しだけ外すね？」と謝りを入れる。

その兼一の言葉に、泉は特に抑揚のない口調で「うん、わかったよ」と無気力で返すのだった。

持っていた如雨露を、園芸部の置き場へと置いてきた兼一は、校舎の渡り廊下まで来ると、既にそこには武田の姿があった……どうやら、武田も兼一がいた花壇へと二階から向っていたらしい。

「どうかしたんですか？」

詰襟の制服姿の兼一が、白のタンクトップにジャージを履いた武田に歩み寄った。

武田も兼一の声に気が付き、地面に置こうとしていた外履きを手に持ち直しながら「おっと、入れ違いになるところだったね」と微笑んだ。

その笑顔に、兼一は本当に爽やかな人だなとも思ったが、別に今に始まった事でも無いので、特に気に留めなかった。

「それより、僕も部活を抜け出た身だから、さっそく本題に入っても良いかい？」

「はい、別に構いませんが……」

兼一の返事を聞くと、武田の雰囲気が一変した。

普段の彼の雰囲気は、非常に気さくで爽やかな好青年のイメージだが、今の雰囲気は危機迫るというか……どこか、深刻な場面と対峙しているかのようであった。

この変化に、兼一も聞く姿勢を真剣な物へと変える。

そして、武田が口を開いた。

「さつき、新島から聞いたんだが……兼一君は、どうやら拳豪に狙われているようじゃないか？」

武田から出た言葉の内容に、兼一は一瞬驚きの表情を見せるも、すぐに表情を戻し、相手を諭す様な口調で武田と向き合った。

「はい……ですけど僕自身は、これまでと同じで大丈夫だと考えてますから」



口調じたいは普段と変わりなく穏やかだが、表情には若干の苦笑  
いが見える……。

実際、兼一自身、先ほどの新島の忠告で、現状がどれだけ危険な  
のかを、ある程度理解しているのだ。

故に、口調は落ち着いてても、その不安を隠し切れない。

そこは、武田も『脱会リンチ』の際に、似たような経験があるの  
で理解が出来た……。

だからこそ、武田が兼一に向ける眼差しは真剣そのものだ。

「兼一君、それは勘違いだと、僕は思うよ……」

「な、何故ですか？ だって、狙われるのは、これが初めてじゃな  
いですし……変に意識し過ぎても、無駄だと思うんです」

「僕や新島が言っているのは、“今は、これまでとは違う”という  
ことだよ」

兼一は、武田の深刻そうな表情に、一瞬押し黙ってしまった……。

「兼一君は、“拳豪”の事を、どこまで知っているかい？」

「……ラグナレクの幹部で、象徴的な存在ですか？」

「そうだけど……それだけじゃない。拳豪とは、ラグナレクの幹部  
の中でも、特にその実力を買われた者だけがなれる、特別な存在な  
んだ」

「……」

「そしてラグナレク全体を、その実力だけの恐怖で束ねる精鋭でも  
ある……まあ、あとは拳聖けんせいって言う、居るか居ないか分からないリ  
ーダーの私兵でもあるそうだよ？」

「はい……それは以前、新島に聞いた事があります」

拳豪についての説明は、以前、新島から亮平がなぜ“掌鬼”と呼  
ばれるかの理由について聞かされた時に、しっかりと説明されてい

る。

故に、兼一は拳豪がどれだけラグナレクにとって重要な立場なのかを知っている……だが、米神に汗を一滴流しながら、深刻そうに頷く兼一に、武田は「なら、なぜ君は一人でやるうとするんだい？」

「それは、集団を組んでしまつたら、あいつらと同じに……」

「僕から言わせれば、それは違う」

「……？」

「集団を組んで、周囲にいらぬ威を発している拳豪は、僕が知っている中じゃ一人いるかいなかだよ……？」

「ですが、現にラグナレクの奴等は、亮平君に集団で挑んでいましたし、武田さんにも『脱会リンチ』と称して仕掛けようとしていたじゃないですか！？」

「僕の場合は、通例行事つてやつだから仕方ないよ……不良の世界なら、良くあることさ。それに鬼島君に関しては、僕はロキの独断だと思っっているんだ」

ロキの独断……兼一は、以前亮平が廃病院で対峙した人物の名前を、悪友である新島から教えられていた。

確か、第四拳豪の『戦う参謀』と呼ばれている人物……。

あの騒動の最後に、電流が流れている長い警棒の様な物で、夜闇の中にも係わらず周囲のライトを消し、自分も含めた、あそこに駆けつけた全ての人間に対して、本人ではなく影武者で仕掛けてきたラグナレクの拳豪。また、騒動が鎮火したかと思つた瞬間に、廃病院に最大積載量三トのトラックを突っ込ませてきた、異常とも言える思考の持ち主。

幸い、あの場で騒動の中心にいた亮平によつて、トラックは止められたものの、もし亮平が止めていなかったらと思うと、ゾッとする結果が待っていたと、兼一は今でも思っている。

その一連の出来事が、武田は第四拳豪の独断だと言う……。

「独断つて……あれだけの事を、拳豪一人で実行させてしまえるものなんですか？」

廃病院を占拠し、他の拳豪を数人集め、様々な器具を揃えられるだけの権力を一個人が持っているという事に、兼一は疑問に思ったが……「程度の差はあれ、拳豪が一人、声をかければ、非常識なくらいの兵隊が集まるだろうね」と、訳も無いと言った表情で、武田に返されてしまった。

そして……と、武田は話しを続ける。

「あの場には、ロキ以外にも拳豪が数人いたけど……その中で、“兵隊を一人も連れていなかったのが”、今回、君の事を狙っている第六拳豪だよ」

「はい、それはさつき新島にも聞かされました……」

「なら、これのどこがヤバイのか……兼一君も理解しているんだね？」

「……はい」

真剣な面持ちで、兼一は一度頷く……。

拳豪とは、さきほどから新島や武田が言っているように、ラグナレクにとつて主力とも言える象徴的な存在なのだ……それほど的人物が、敗れてしまえば、一瞬にして周囲に負の情報が出回ってしまう程の存在が、護衛の兵を一人も連れずに、“あの”鬼島亮平と対峙しようとしていたのだ。

それが、ただの自信だけなら話しは簡単なのだが、ラグナレクには頭の切れる人間も多く居る……その中でも、“護衛を連れなくてもいい”と許されている人物なのだ。

「第六拳豪ハーミットは、拳豪達の中でもズバ抜けた実力者だと僕

は聞いているし、あの時、護衛の兵を連れてこなかった、連れな  
事を許されていた事からも、ラグナレク内での信頼が伺える……」  
「はい、理解しています」

「なら……」と、武田は一拍の間を空け……拒否は許さないとい  
った視線を、兼一に向けなおしながら「兼一君、悪い事は言わない。  
君も、一つの集団に属するべきだ」と、言い放った。

「……ですが」

「君が決めかねる事は、僕も理解しているつもりさ……だけど、こ  
れは君を守るためでもあるし、同時に君の周りにいる人達も、ラグ  
ナレクから守る事に繋がるんだよ？」

「……それは、さっき僕が言った、集団の威を借る事に」

「それとこれとは話が別さ……だって、威を借るって言うのは、  
その辺のチンピラが、チームの名前を使って相手を威圧する事だろ  
？ 僕が兼一君に言っているのは、君の身だけじゃなく、君の回り  
にいる人達も守れる様に、一つの集団に属するべきだと言う事さ」  
「意味が若干似ている様な……」

「なら、君は“一人で全て抱え込む気”かい？」

「え？」

瞬間、武田の回りに漂っていた緊張感が、一瞬にして辺りに霧散  
していくのを兼一は感じた……。

「以前、君は僕に言ったじゃないか……友情は取引じゃないって」  
「ッ!？」

それは、兼一と武田が、学校の屋上でやりあった時に、兼一が武  
田に対して言い放った言葉。

「あの言葉で、僕は変わったんだ……なのに、言った本人である君が、何もかも一人で抱え込もうとする」

「それは……」

「違うのかい？ 僕には、そう見えてしまうのだけど？」

「だって、これは僕の問題ですし……」

兼一が、そう言った瞬間……「見くびらないでくれるかな？」

“ シュパツ！” と、兼一の左頬に、空気を切り裂く鋭い音が駆け抜けた……。

空気を切り裂き、兼一の左頬に、まるで剃刀を掠めたかの様な、浅い“ 裂傷” を生み出した物の正体……。

「武田さん……」

それは、武田の無拳動ノイモーションで放たれた、左のジャブであった。

武田は、兼一の左頬に掠らせた左の拳をゆっくりと引いていく……。

いくら緊張感が霧散し、油断しきっていたところに放たれたジャブとは言え、兼一は、この白のバンテージを巻きつけた武田の左拳が打ち終わった時、漸く打たれたという事を自覚した。

「左腕、治ったんですね？」

浅く切り裂かれた左頬を撫でながら、兼一は困ったように武田に聞く……。

武田は、その問いかけに、なるべく相手に気付かれぬよう、腰や足は使わない“ 手打ち” で放った左の調子を確めながら、何事もなかったかの様に答えた。

「ああ、この通り、“ 君を不意打ちできる” ぐらいには治ったよ」

「ははは……」と乾いた苦笑を漏らしながら、兼一は武田の言葉に反応する。

すると、武田が再び霧散させていた緊張感を元に戻すのではなく、相手を諭すような、相手に感謝でもする様な、優しく、真剣な面持ちで兼一と向き直った。

「君は前に……僕が『脱会リンチ』に怯えていた時に、わざわざ自分から首を突っ込もうとしていたね」

「……」

兼一と出会う前……武田が昔、ボクシングのママで活躍していた頃。

武田はアマの試合が控えているのだというのに、地元で仲の良かったジム仲間が不良に絡まれているのを助けに行った事がある。

その際、武田は不運にも左肩に後遺症が残るほどの怪我を負ってしまう。

この経験が、以前の『脱会リンチ』騒動の際、武田が兼一や他の人間に助けを求められなかった理由でもあったのだが、兼一はそれでも武田の問題に首を突っ込んでいった。

「あの時は、結果的に鬼島君のお陰で、『脱会リンチ』自体が有耶無耶になってしまったけど。本当に助かったし、嬉しかったよ……友達を、再び信じられる様になったんだからね？」

「……」

左頬を押さえながら、黙して自身の話しに耳を傾ける兼一に、武田は語りかけていき……そして。

「だからこそ、僕は君に何度だって言うよ？ 新島が作った、新白

連合に入るんだ」

「武田さん……」

力強く放たれた言葉は、兼一に向って一直線にぶつかった。

そして気付かされる……兼一も、今の状況が、以前の武田と自分に重なっている事を。

以前、武田に言った事が今、自分に向けられている事を……。

兼一の表情で、漸く気付いてくれたと察した武田は、表情を一変させ、どこか緩んだ、いつも通りの爽やかな微笑みを浮かべ始めた。

「実際、僕も、あの騒動の時から流れている新島の嘘情報のせいで、いつの間にかに入っている事になっているし、兼一君も勝手に入っている事になっているんだから、状況はそこまで変わらないと思うよ?」

「……あの宇宙人め」

恨めしそうに、自身の悪友の名前を呟く兼一……。

だが、もうその表情には拒絶の色は見えない……。

故に聞く、武田は兼一に聞く。

最後の確認だと、雰囲気で訴えるかの様に、兼一に確認をする。

「それで、兼一君はどうするんだい? 入ってくれるのかい? それとも、今まで通り、一人でなんでも背負うのかい?」

口調は爽やかでも、込められた思いは、これまでの説得と同じく、らしいの気持ちが入められている。

それを感じ取った兼一は、一瞬渋るような表情をするも、直ぐに真剣な表情に戻し、武田と真正面で向き合いながら口を開いた。

「アイツの悪巧みに協力する気はありませんが、そうですね……こ

れからの事を考えると、名前だけでも貸しといた方が、何かと安全  
そうですから。武田さんの言う通り、名前だけでも、アイツに貸し  
てやります」

「そうかい。なら、これからは仲間どうしじゃない」

言いながら、武田は兼一に開いた右手を差し出す……。

その意図を察した兼一も「はい！」と元気のいい返事を返しなが  
ら、差し出された手と同じ右手で、武田の手を握った。

その様子を、状況証拠である写真を隠し撮りしながら、誰にも気  
付かれない物陰に潜んでいた人物は……。

「（ひっひっひ……あの野郎の証言も取ったし、決定的な写真も収  
めた。やはり、武田に説得させたのは正解だったようだな……ちょ  
ろいもんさ）」

やる事は済ませた……。

今回入手したネタたちを、大事に電子手帳に保存していきながら、  
武田を兼一に囁かせた張本人である新島春男は。もともと隠れ潜  
んでいた物陰から、音も無く、ひっそりと兼一たちに気付かれぬよ  
う消えていった。

後日、状況証拠を取られた兼一が、大々的に“新白連合に加入し  
た”と、学校新聞で報じられた事は、言うまでも無い事であった……。



第五十二話 将を射んとすれば、まず馬から（後書き）

すみません、ちょっとしたアンケートにご協力下さい。

これから挙げる番号を、感想のところに書いてくれるとありがたいです。

特に重要な事でもありません、ただゲレゲレが知りたいだけです、出来ればって感じで良いです。

- 1) 原作が大好きで、この二次小説を読んでいる。
- 2) 原作はちょっと知っている程度で、この二次小説を読んでいる。
- 3) 原作は名前しか聞いたことないけど、この二次小説を読んでいる。
- 4) 原作知らない、だけど読んでいる。

本当に、出来ればで良いんで、よろしく願いしますノシ

第五十三話 裏と表（前書き）

さて……前回取ったアンケートでは、やはり一番が多かった様です  
ね。

実は、あのアンケート。

もし、皆さんが原作を詳しく知っていたなら、端折るところ端折  
ちやおうかな？ と、読者頼りな妥協をしまをうという下心の  
下、尋ねたものなのです。

しかし、端折ろうとしてみたところ。

あれ？ 辻褄が合わないぞ？ だったり、これはひどいだったり  
……。

ゲレゲレの性格的に許せない物しか書けなかったので、妥協をす  
るのは止めました。

## 第五十三話 裏と表

荒涼高校、日本史教師の安永福次郎<sup>やすながふくじろう</sup>。

彼は兼一や美羽、亮平のクラス担任であり、53歳という年齢を感じさせない教育者としての風格と、生徒達からの厚い信頼や多大な警戒心を持たれている人物だ……いわば、学校に必ず一人はいる、元気で面倒臭いベテラン教員だ。

そんな高校教育の最前線で戦い続ける老兵は現在、学校内で多々ある問題の中でも、なかなか世間でも知られたメジャーな問題に悩まされていた……。

「どつしたものが……」

故に、職員室の自分のデスクの上で、一人の生徒の個人情報に記載されている書類を見ながら、思わず溜息交じりの呟きを漏らしてしまう……。

時刻は既に放課後……荒涼高校の校舎やグラウンド、体育館などでは様々な部活動を行っており、昼時の校内よりも騒がしくも爽やかな雑音が辺りから聞こえてくる。だが安永先生は、その眩いばかりにスツキリとした秀頭に片手を添えながら、椅子の背もたれに背を預けている。

非常に悩んでいるという雰囲気<sup>きぶん</sup>が漂う光景だ……。  
証拠に、職員室にいる周りの教員達も、心配そうに悩む安永先生を見つめている。

（無断欠席ならまだしも、連絡もつかんし、自宅にもいないと来た……）

安永先生が手に持っている書類には、生徒の顔写真や住所・氏名・電話番号など、様々なものが記載されている……。

そして、その顔写真に載っている生徒の顔は、厳つい風貌ながらも、輪郭は普通に整っていて、眼も見るものが見れば威圧されそうな眼をしているが、どこか優しそうな印象を持たせる眼をしている。髪型は短髪の黒髪を後ろに流し、軽いオールバックでセットし、写真から切れていない首回りの筋肉は、とても当時中学生であった事を感じさせない、常軌を逸した発達のしかたをしていた。

顔写真の隣り……その欄には、“鬼島亮平”おにじまやうへいと書かれていた。

「たく、アイツは何をやってるんだ……」

思いつめるように、再びの呟き……どうやら相当参っている様だ。だがそこに、一人の小さな女性が近づいて来た。

「安永先生、どうしましたか？」

間延びした、どこか間抜けそうな女性の声……。

安永先生が「はい？」と、疲れた表情を隠しながら振り向けば……。

「小野先生ですか」

そこには、安永先生が受け持つクラスの副担任、国語教師の小野おの京子きょうこの姿があった。

彼女は28歳と、そろそろ結婚などが危なくなってきた歳だといふのに、ショートに切り揃えた黒髪を真ん中別けにし、愛らしい童顔に縁の無い眼鏡をかけている。身長は、この学校の生徒達と比べてもかなり低い方で、スタイルも華奢ではあるのだが、どこか残念な感じだ。

もともと性格的に、おっとりとした性格でもあり、自身の容姿と、その性格がまずい具合に相まって、不良が多い荒涼高校では、かなり舐められている教員の一人でもある。

そんな小野先生は、普段怒られてばかりの関係なのに、珍しく安永先生に向けて心配そうな眼を向けている……その眼に、安永先生は（はあくましか小野先生にまで、心配されるようになるとは）と心の中で嘆きつつも、副担任である彼女にも、現在のクラスの悩みを説明する事にした。

「鬼島ですよ……」

「ああ、鬼島君ですか……」

安永先生が椅子を回転させ悩みの種を教えた瞬間、小野先生は何時を通り間延びした声ではあったが、どこか寂しそうな、心配そうな雰囲気を感じることもしず露にしながら相槌をうった。

安永先生は、その小野先生の“シユン”とした態度に溜息を吐きながらも話しを続けた。

「実家にも連絡はしたのですが、社員の方が出てくるだけで、母親や父親とは一切連絡も取れていません……」

「はい、私の時も、厳しい声の人が出て来たただけでした……」

普通に考えれば、複雑な家庭環境だと予想するのだが、ベテラン教師である安永には、どうも引つかかる事がある様なのだ……が、安永本人も、まだ確信ではなく感じたただけなので、憶測で他人に話そうとはしない。

故に、胸に残るもやもやを抱えたまま、視線を小野先生から、手に持っている書類に落とした。

「ただの不登校なら、連絡や自宅に行った時点で、なにかしらの会

話が出るはずなんですが。会話どころか会えてもいない……それに、鬼島は期末試験をすっぽかしてます」

「……心配ですよ〜」

「ですね……連絡さえ着けば、補習の話しも出来るんですが」

「成績自体は、アイツはちゃんとしているんですがね……」と、安永先生は言葉を漏らす。

眉間に皺を寄せ、普段よりも老けて見える安永先生の姿に、小野先生は再び心配そうな視線を向ける。

すると、そんな職員室に「失礼します」というハキハキとした声が、入り口の引き戸を開く音と同時に聞えて来た。

まず、その声に対応したのは、職員室入り口付近でコーヒーを淹れていた男性職員だ。

男性職員から「どうした？」とフランクに尋ねられた素朴な顔の男子生徒は、「安永先生はいらっしゃいますか？」と質問を返す……すると、コーヒークップを片手に持った男性職員は「安永先生！生徒さんが呼んでますよ〜！」と、職員室中に響き渡る大きな声で、悩みに暮れている安永先生を呼んだ。

呼ばれた安永先生は、「は〜い」と返事を返しながら「ちよつと、すみませんね」と、隣りに立っていた小野先生に断りをいれ、椅子から立ち上がった。

立ち上がった事で、教員デスクの仕切りがわりになっている、様々な資料の上から、入り口で待っている生徒の姿を確認することが出来る……入り口で待っていたのは、服装自由の荒涼高校で、律儀に夏服を着用している、一見目立たない、その辺にいくらでも転がっているような男子生徒、白浜兼一であった。

兼一は安永先生の太陽……もとい禿頭を見つけると「安永先生、日誌を持ってきました」と声をかけた。

「おお、ちゃんと書いたのか？」

生徒の前という事で、先程までの疲れた表情を隠しながら、務めて何時も通りに振舞う安永先生。

聞かれた兼一は「はい、ちゃんと書きました」と素直に返しながら、安永先生がいるところまで歩いていく。

「お花に水はあげたかな？」

「はい、泉さんとやって、今さつき終わったところです」

安永先生のデスクまで近づくと、近くにいた小野先生が、園芸部の顧問として兼一に間延びした声をかけた。

それに笑顔で返事を返しながら、兼一は日直の義務である日誌を、無事、安永先生の下に届けた。

兼一から日誌を渡された安永先生は、さっそく日誌を開き、パラパラとページをめくっていく……。

「……ふん、なるほど、ちゃんと書けているな」

「はい」

今日の日誌のページで、兼一が書いた内容を確認すると共に、安永先生は兼一を優しい口調で褒めた。

だが一点だけ、この時の安永先生が、どうしても目に止まってしまっ箇所があった事を、兼一は生徒故に気付かなかった……。

「じゃあ、これで僕は失礼します」と、要件を済ませた兼一は、さっそく踵を返そうとする……が、それは「ちよつと待ってくれなしか」安永先生に止められてしまった。

「なんででしょうか？」

呼び止められた兼一は、何か言われるのかと思いつつも、返した

踵を元に戻した。

兼一と視線を合わせた事を確認した安永先生は、一度「こほん」と咳払いをしながら、口を開いた。

「お前は確か、鬼島と仲が良かったな？」

「え、はあ……まあ」

突然聞かれた内容に、兼一は一瞬不思議そうに思いつつも、力の無い返事を返した。

「なら、鬼島のやつが何で休んでるのか、聞いて無いか？」

電話もダメ、自宅訪問もダメ、実家に連絡もダメ……となれば、親しい間柄の人間に聞きこむのは自然の流れと言えよう。だが、これも「言え、僕も聞いてません……」と難しい表情をした兼一によって、無駄になってしまった……。

「そうか……なら、他にアイツと仲の良い連中はいないのか？」

残念そうに言いながら、持っていた日誌をデスクに置き、椅子に座りなおした安永先生の質問に、兼一は「そうですね……」と考え込みながら。

「うちのクラスだと……姫野さんですかね？ 良く、お弁当とか作ってきてもらってましたし」

この兼一の発言に、乙女でロマンティックな恋愛が夢である残念な28歳、小野京子が「まあ！」と嬉しそうに赤らめた両頬を押さえながら、過敏に反応した。

しかし、二人はそんな小野先生を無視しながら話しを進めていく



……。

「姫野か、あの二人は、そんな仲だったのか……」

「え、安永先生知らなかつたんですか？ 結構、一年じゃ有名な話ですよ？」

「そうなのか……で、姫野は鬼島が何で休んでるのか、知らないのか？」

「はい……確か連絡が着かないって、たまに怒ってました」

「なら、他には？」

「他だと……」

兼一は、五指を順に倒しながら「美羽さんに、キサラさん……確か鷹島先輩って人もそうだったし、たまに武田さんとも話してたましたね。あとは……泉さん？ いや、泉さんには怖がられてたな……」

「意外と少ないな……と言うより、ふり幅が広い友人関係だな？」

確かに、キサラ・武田の不良組みに、美羽・鷹島の優等生組み……この事実兼一は「ははは」と苦笑いしか返せなかった。

「そのなかで、知ってそうなやつは居るのか？」

「いえ、皆、連絡が着かないって、姫野さんと同じ感じでした」

「そうか……」

残念そうに言葉を吐く安永先生を眺めながら、兼一は気まずそうに「じゃ、じゃあ、僕はこの辺で良いですか？」と、再び聞くが……。

「いや、ついでに、もう一つ用事を頼まれてくれ。風林寺に、この

プリントを渡しておいて欲しいんだ」

言っと、安永先生はガラガラとデスクの引き出しから、一枚のプリントを取り出した。

出されたプリントを、兼一が受け取ると……「新聞部のインタビュ―？」

「そうだ、今回の劇で、急遽ヒロイン役に選ばれたから、新聞部の生徒が私に頼んできたんだ」

「なるほど……そうですか、分かりました。なら、今から渡してきますね」

プリントを手に持った兼一が、そう言って再度、踵を返すと、今度は「ああ、よろしく頼む」という声が背中越しに返って来た。

どうやら今度は、ちゃんとこのまま帰してくれると判断した兼一は、そのまま職員室の扉付近まで歩いていくと「失礼しました」と元気良く断りを入れてから、引き戸のドアを閉めた。

その様子を座った状態で、耳だけ傾けながら聞いていた安永先生は、綺麗に片付いたデスク上で開いたままの日誌に、再度視線を落とした。

「……やはり、ことう何度も同じ欄に、同じ名前が書かれるのは、正直気が滅入るな」

安永先生が視線を落としている箇所は、日誌の本日の欠席者欄だ。そこには、一番上の……つまり一番初めの欄に、鬼島亮平という名前が記載されていた。

その事実を、安永先生は再び「はあ」と疲れた溜息を漏らした……。

ちなみに28歳独身の、童顔女教師は、いまだ学生同士の関係に

顔を赤らめながら、疲れる安永先生を他所に妄想を膨らませていた……おそらく、いくらメルヘンな思考の持ち主でも、大人の妄想なので、かなり過激な妄想が繰り広げられていると予想される。

だが、妄想の主は……（以下略）

本来なら、風林寺美羽が放課後にいる場所と言えば、新体操部の活動場なのだが、今の状況は、それとは違う……。

その理由を知っている兼一は、自らの足を進ませながら、ある場所へと向っていた。

そこは、とある教室……。

引き戸のドア付近で、ふと見上げれば、そこには“演劇部”という表札が、クラス名の代わりに壁に取り付けられていた。

この教室が、どの様な場所かを確認した兼一は、引き戸の取っ手に手を沿え、そのままドアをガラッと開いた。

「すみませ〜ん、失礼しま〜す」

ドアを開いた兼一の目に、まず飛び込んできたのは、演劇部が舞台で使うであろう張りぼてのセットと、黒板の下に置かれた、長い木製の二台の踏み台だ……他には、演劇の練習のために下げられた机や椅子などが、黒板とは反対側に集められていた。

そして、兼一の声に、一人の青年が「は〜い？」と応答する。

応答した青年が、ドアを開いた場所で待っている兼一の下へと、教室中央から駆け寄ってくる……どうやら、部室には、この青年以外の人物は居ないようであった。

駆け寄って来た青年が、兼一と視線を合わせると……「あれ？ 白浜君？ 珍しいね」と、嬉しそうに微笑んだ。

兼一は、その爽やかな微笑みを浮かべる青年の名を知っている……

…谷本夏、荒涼高校の中でも指折りな有名人でもあり、モテ男である。

「こんにちわ、良く覚えてたね、谷本君」

「ああ、白浜君も僕の事を覚えていてくれたんだね」

谷本は先ほどまで稽古をしていたのか、肩口まで伸ばした金髪に汗を染み込ませた状態だ。

だが、それでも筋の通った鼻や、細い顎、切れ目ではあるが、ハッキリとした瞳に、均等の取れた体系という、完璧に近いルックスのお陰で、全くもって相手に暑苦しい印象は持たせず、むしろ光に反射する汗が清涼感を漂わせる程であった……これが、“王子”と女子たちに言わ占める所以なのか　もし、これが亮平であったのなら、むさいと言うより、近づいたら本当の意味で火傷しそうな印象を持たせていたであろう。

入り口で兼一を出迎えた谷本は「ごめんね、今、自分の稽古が終わったところなんだ」と、汗の染み付いたトレーナーなどの衣服を気にする仕草をする。

「別に構わないよ、急に来たのは僕の方なんだし……それで、ちょっと美羽さんに用事があったんだけど、今いるかな？」

谷本を前にすると、どこか気まずそうな感覚に陥る兼一であったが、とりあえず早く安永先生から頼まれた用事を済まそうと、額に着いた前髪を掻き揚げた谷本に言う。

「風林寺さんなら、まだ新体操部の練習が終わってないみたいだから、来てないよ？」

「あ、そうなの？」

そういえばと、兼一は思い出した……。

演劇部の助っ人を頼まれた美羽は、確かに優先順位を演劇の稽古に置いたが、もともと生真面目な性格であったがために、新体操部の練習をやり終えてから演劇の稽古に入るのだった。

あつと、兼一は心の中で頂垂れる……。

だが、それも仕方が無いことだ……最近では兼一も、キサラとの組み手や、梁山泊での練習量増などがあり、心身ともに余裕が無い状態であったのだ、更に言えば、友人である亮平が音信不通なのも一つの要因と言える。

兼一が胸中で、思い人の近況を把握できなかった事に、割と本気で頂垂れていると、目の前にいた谷本が「どうかしたの？」と心配そうに尋ねてきた……どうやら、胸内だけではなく、外側にも兼一の嘆きが漏れていたようである。

「え、いや、何でもないよ、うん……」

「そうかい？ どこか元気が無いようにも見えるけど……」

「うん、別に大丈夫だよ。それより、美羽さんは、あとどれくらいで来るのかな？」

「うん……分からないよ、ごめんね？ 何分、他の部活の事だから」

「そっか、なら仕方ないかな」

兼一と谷本が演劇部の教室で話していると、兼一の後ろ……廊下の奥から、なにやらケラケラとした、騒がしい男達の話し声が聞こえて来た。

その声が聞こえて来た瞬間、目の前の谷本の表情が、どこか陰りのあるものへと変わっていった。

当然、その変化に、同じく目の前で会話をしていた兼一が「谷本君？」と反応する……すると、これまで接しやすい口調で会話をしていた谷本が、困ったような雰囲気醸し出しながら口を開いた。

「格闘技研究会だ……」

「格闘技研究会？」

「うん……でも、そんなの名ばかりの連中だよ。ただの不良の集まりって感じの人達だ」

ただの不良なら、荒涼高校では珍しくも無い……だが、谷本の表情は、まるでこれから何か嫌な事でも起きるかのようには浮かない。故に、兼一は聞く。

「なにか、不味いことでもあるの？」

この問いに、谷本は気まずげに微笑んでから。

「ちょっと、ね……内心は、噂に聞く白浜君に頼みたいんだけど、こればかりは他の部外者には関わらせたく無いんだ、だから白浜君、少しの間だけ、ここか離れていた方が良いでしょう」

どこか含みのある言葉……それに、正義感が馬鹿の様に強い兼一が反応しない筈が無い。

なぜなら、兼一は既に、友人やクラスメイト、果ては梁山泊の師匠達に、自分の夢を、目標を宣言しているからだ。

だからこそ、谷本の言葉には従わず、声のする方へと視線を向ける……。

「どんな事情なのか、聞かせてもらっても良いかな？」

「白浜君……？」

さっきまでの雰囲気とは違った、兼一の力強い口調に、谷本は一瞬驚きを見せる。

だが、男達の笑い声などが入り混じった騒がしい声は、もうすぐそこに聞こえてきている……というより、谷本とは違って、廊下に出ている兼一には既に三人の男達が視認出来ていた。

もう何を言っても、目の前の白浜兼一という男は動かないと感じた谷本は、演劇で鍛えた滑舌を駆使して、今向かってきている格闘技研究会のことを説明し始めた。

「奴等は、自分達の部室が無いとかで、この演劇部の部室を強引に奪おうとしている連中なんだ！ そのせいで、部活用具とか、劇で使う小道具だとかが奴等の嫌がらせて壊され、本来ならもつと充実していた筈の劇の規模が小さくなったりした事もあったんだ。風林寺さんが来るようになってからは、マシになった方だけ……だけど、そのせいで部員が辞めたりしているんだ！」

「お〜う、谷本く〜ん……何を馬鹿みたいな事を言ってるのかなあ？」

谷本が兼一に説明し終わると同時に、三人の男達が、ニヤニヤと小気味の悪い笑みを浮かべながら、演劇部の入り口前へと立ち並んだ。

「大体、お前等がいけないんだろう？ 何度も出て行かないと痛い目見るよって、わざわざ俺等が忠告してやってんの……出て行かないんだもお〜ん、こつちもやつちやうしかないだらう？」

間にいる兼一が、まるで見えていないかのように、三人の男達を中心に立つ、髪型がオールバックで、ニヤニヤと目を座らせながら、歯茎が見えるくらいに不気味な笑みを浮かべる男が、人を小馬鹿にしながら、谷本に嫌悪感が出てしまう程の嫌な視線を向ける……体格は兼一や谷本に比べれば、なかなか大きく、間にいる兼一を視界に入れずに谷本を見下ろしている。服装は柄物のTシャツに学校指

定のズボンといったラフな格好。さきほどの言動と態度、外見から見て、いわゆる不良と一言で言った方がシツクリ来る様な人物であった。

「勝手な事を言うな！ この部室は、伝統ある演劇部のものだ！ 暴力と脅しで、何でも思い通りになると思っうな！！」

普段の爽やかな彼からは珍しく、怒気の孕んだ口調で格闘技研究会の男達に言う谷本。

だが、三人の中心にいる男は「おゝ流石は演劇部の……なんだっけ？」と、どうでもいいかのように頭をボリボリと掻きながら「二枚目俳優？ うん？ 違うな……」とお茶らけながら、考え込む様な仕草をし始めた。

「うゝん……メンド、思い浮かばねえゝわあ。まあ、とにかく、早く部室から出てってくれないかな？ 俺等も迷惑してるんだよお」

「ふざけるな！！」

「ふざけてなんかねえよゝつと、じゃあ、入らせてもらっうぜ？」

言つと男は、目の前でただ背を向けていた兼一を、鬱陶しそうにどかしながら、ズカズカと演劇部の教室へと、他の男も連れて入つて来た。

当然、谷本がその行為を許すはずが無く。

「おい！ 何を勝手に入っっているんだ！！」

三人の男達の前に立つ。

だが、再び真ん中にいた男が口を開いた……。

「別にいゝ？ だって、ここ俺等の部室だもんよ。勝手に入って来



てるのは、おたくの方でないの？」

「でしょ〜？」と、ふざけるように谷本の目の前まで近づくと、

そして、次の瞬間には、谷本の胸倉が体格で勝る男の右手によって掴まれてしまった。

「大体さ〜うざいんだよね？ 演劇部とか……俺の中学校じゃ、気持ち悪い根暗な奴しかいなかったし？ てか、もう面倒臭いんだけど？ ボコつて良い？ そっちの方が早そうなんだけどさあ！」

「ああッ！！」と、今度は両手で胸倉と捻り上げながら凄む男……そのせい、身長で劣る谷本の足が地面から数ミリほど浮き上がった。

「俺等もさ〜、ね？ キサラの奴が大人しくなったりだとか、鬼島の糞野郎が居なくなったりで、折角機嫌が良かった訳よ。それが何？ 喧嘩も碌に出来ない様な、ただの坊ちゃんが言うこと聞いてくれないせいで、こんなに機嫌が悪くなっちゃった訳よ？」

「そんな勝手な事は知らない！！」

瞬間、男は両手で擦り上げていた谷本の襟から、利き手なのでろろ……右手を放し、まるで弓を引くように後ろへと振りかぶった。体勢は真半身、左手は相手の襟首、左足は相手の股下に、右足は足先を斜め後ろに向けながら溜めを作っている……これはいわゆる“ナックルアロー”というプロレス技であろう。

だがプロレス技だからと言って、侮ってはいけない。

谷本と男の体格差は、ちょうど一回りぐらい違うし、いくら不良に毛が生えた程度の実力だとしても、男は体を鍛えている……この差がある限り、谷本が男の振りかぶった拳を喰らった瞬間、彼の整

った顔は、一部分が見るも無残な事になってしまつてあつた。

そして、谷本の反抗的な態度に激情した男は「さつきから舐めてんじゃねえよ?」と、ニタついた表情を、眉間に皺を寄せる凄みのあるものへと変え、谷本を掴んでいる左手を一瞬、自分の方へと引き付けた。

「ひっ!?!」

男の左手による引きつけによつて、足が地面から浮いていた谷本の体が“グツ!”と男の方へと引つ張られる……そして、引きつけられている一瞬の間、谷本は咄嗟に両目を瞑つてしまふ。

男が作り出した状況は、首相撲からの膝蹴りなどでよく見られる、引きつけを利用したカウンターであつた。

引つ張る事で、自分が思いつき振りかぶっている拳の射線上に、相手の顔を拳とは逆方向に無理矢理走らせる……単純で、乱暴な技術であるが、相手に多大な被害を生ませるには有効的な技術だ。

故に、既に発射されてしまった相手の拳を前に、情けなくも目を瞑つてしまった谷本には、この後、大きな痛みが、大きな衝撃が訪れる……筈であつた。

パァンツ!! 目を瞑つていた谷本の耳に、鋭く小気味のよい音が響いてきた。

同時に、自身を恐怖という鎖で縛っていた相手の左手が襟首から離れたのを谷本は感じ、そして、目を瞑つたまま、浮いていた場所から地面へと尻餅を付いてしまった。

一体何が起きたのか?

来る筈であつた、相手の全身を使った右拳が顔に衝突するどころか、自身を宙に上げていた左手の拘束が、突然無くなったのだから、谷本が混乱するのも無理は無い。

故に、谷本はオドオドとしながらも、閉じていた目をゆっくりと開いた……。

そこには 「白浜君！！」

高い位置で真横に振り抜いた右足を地面に下ろした、普段の冴えない顔とは違う、引き締まった面構えを見せる兼一の姿があった。どうやら、相手の後ろから右上段廻し蹴りを振り抜いたらしく……蹴られた格闘技研究会の男は、後ろから蹴り抜かれた右米神に赤く熱を持たせながら、教室の地面にグニヤリと膝から崩れ落ちていた。

谷本の歓喜の呼び声に、ふーっと、己を落ち着かせるために深呼吸を吐いていた兼一が反応し、教室入り口の方へと振り返った。

そこには、仲間が一瞬のうちに倒された事に意識が着いていけない、呆けた顔をする残り二人の格闘技研究会の姿があった。

「お前達、早くこの倒れている人を保健室に運んで、さっさとここから立ち去れ！！」

呆けている残り二人に向けて、膝をグニヤリと折り曲げながら、仰向けに意識を失っている男にビシッと指を差す……その兼一の張り上げた声に、ハツとしながら、漸く停止していた思考を取り戻した二人の男が怒声を上げる。

「ふざけんなテメえ！！」

「いきなり何しやがんだ！！ やんのか、ああッ！？」

いくら素早く一撃で倒したとは言え、後ろから、しかも不意打ち気味に仲間をやられた男達は、各々間合いが遠いとはいえ、警戒のため構えを取った。

「だいたいテメえ！ 演劇部の部員じゃねえだろ！？」

構えを取った二人のうち一人が、直立不動でこちらを見つめてい

る兼一に怒りの籠った口調で問うた……その問いに、兼一は眼に込める力を更に強めながら「僕の名は白浜兼一だ！」

「し、白浜だと!？」

兼一の名を聞いた瞬間、格闘技研究会の二人の表情が、冷や汗交じりに強張った。

その反応に、兼一は頭上に“？”を浮かべ、首を傾げる……。

だが格闘技研究会の二人は、首を傾げる兼一を無視しながら、明らかな動揺を露にしていた。

「ど、どうする!？」

「馬鹿言うんじゃないやねえ! どうするも何も、ラグナレクと互角張るようなチームの切り込み隊長だぞ!? それに噂じゃ、鬼島の奴とラグナレクに殴り込みに行った時、あのキサラ隊相手に片手しか使わなかったらしい!」

「そんなのがどうして演劇部なんか居るんだよ!？」

「お、俺が知る訳ねえだろ!？」

この異常なまでの動揺の仕方……兼一は、これに少し、というよりかなり心当たりがあった。

「(新島の仕業か……)」「昨日、新白連合に名前だけ貸す事を許したばかりだと言うのに、この認知のされかた……相当、あの宇宙人が情報に手を加えたに違いないと、兼一は疲れた様に確信した。

だが、その新島が流した加工された情報が功を相したのか、二人の男達は血相を掻いて「は、早くあの伸びてるの連れて来いよ!」だとか「じよ、冗談じゃねえ!」などと喚きながら、兼一と尻餅を付いた谷本の間転がっていた男を、そそくさと回収し、演劇部の教室から出て行ったのであった。

「す、凄い効果だな……新島の情報は」

血相を掻いて、意識を失っている一人の男を介抱しながら立ち去っていく格闘技研究会を、半ば呆れた様子で眺めていた兼一に、先程まで尻餅を付いていた谷本が「凄い！ やっぱり噂通り強いんだね！」と、意気揚々と近づいて来た……。

「噂って……」

「しかし、凄い“蹴り”だったね。高い位置だというのに、横に薙ぎ払うみたいなの……」

「うん、空手の蹴りで、膝を外から内に廻す様な蹴りだから、蹴り足を高い位置にキープし易いんだ」

「という事は、相手の防御の上からでも？」

「やろうと思えばだけどね」

先ほどの蹴りを、谷本が賞賛し、興味有り気に、喜々として兼一に質問攻めをする。

どうやら、これまで苦しめられ続けた格闘技研究会に対して、他者の力ではあつたが、一矢報いた事が相当嬉しかったようだ。

「僕は分からないんだけど、実戦とかでは使えるのかい？ 実戦でハイキックみたいなの、隙が多い技を使うと危ないって、以前誰かから聞いた事があるんだけど？」

「確かに慣れている人が相手だと危ないけど、さっきやった蹴りは、初見の人には蹴る軌道が個性的で受け辛いから、たまにつてぐらいなら使えるんだよ……というより、後ろからだつたら誰だつて同じだよ」

「なるほど……つまり、相手を見極めながら使つて事なんだね？」  
「な、なんかそう言われると、大袈裟に聞こえるから照れるな……」

「ハハハ」と頬を指でポリポリと搔きながら照れ笑いをする兼一に、谷本は「そんな事ないよ、実際、僕は今それに助けられたんだから」と、照れる兼一を更に赤くさせる。

「でも、噂に聞いたとおり、相当戦い慣れてるみたいだね？ 実践的な武術とか習ってるんでしょ？」

「え、あ、うん」

兼一は、この時一瞬だけ、疑問に感じる点が一つ浮かんだのを、心の中で感じた。

普通、素人である筈の人間が、格闘技や武道の事を“武術”と言うだろうか……？

だが、その浮かんできた疑問も、谷本に聞かれた質問に答えようという意識のせいで、直ぐに思考の奥底へと沈んでいつてしまった。

「習ってるって言うか……ほぼ、毎日が地獄で踊らされている気分だよ」

兼一の答えるトーンが、徐々に落ち込んだものへと変わっていく……。

当然だ、“あんな環境”で毎日を過ごしていれば、実践的な練習という言葉が、むしろ可愛く見えてしまう程であろう……故に、これまでの短くも濃すぎる格闘人生を、兼一は走馬灯の様に頭で巡らせ始めた。

その兼一の無気力な……むしろ精気すら感じられなくなった眼に、秀囲気に耐えられなくなった谷本が、どんな理由で落ち込んでいるのかは知らないが、落ち込んでいる兼一を慰めるために、若干の焦りを交えながら口を開いた。

「で、でも凄いな〜！ だって、あんなに体格差のあった相手を一

撃で倒しちゃうんだから！ やっぱり、武術の才能がある人は良いなー」

「武術の才能だと……？」

谷本から出た言葉に、兼一はピクリと反応しながら、精気が無かった顔に今度は怒気を孕ませ、キーキー！ と擬音が聞こえて来そうな勢いで「才能だとーッ！！」と怒声に近い奇声を発し始めた。

「え、え？」

「才能だなんて、そんな簡単な言葉で片付けなくてくれ！！ すごく、すごく辛いんだぞ！！」

「え、あ、うん、なんかごめん？」

ズビシッと指差したり、反対の手をブンブンと駄々っ子の様に振り回したりと、騒がしく取り乱す兼一……終いには、眼に涙を浮かべているぐらいだ。

本当に、本当に辛いのであろう、あの“非”常識人達の稽古は……。

だが、その時、格闘技研究会が出て行った教室入り口の方から「おそくなりました！！」という、兼一にとって聞きなれた、少し焦っている女子の声が聞こえて来た。

その女子は、急いで来たのであろう……着崩れたワイシャツから、豊かな谷間を覗かせながら、襟首に掛けているだけのタイと、穿いているスカート、一本の三つ編みに纏めた日光を反射させる金髪を揺らし、演劇部の教室へと駆け込んできた。

そして、駆け込んできた女子は、まず教室内に居る兼一へと不思議そうな視線を向けた。

「あれ、兼一さん？ なぜここに？」

「み、美羽さん！？」

教室に汗を滲ませながら駆け込んだのは、風林寺美羽、兼一の思い人だ……。

その思い人は、なぜか演劇部に関係が無い兼一が、この部室でもある教室に居るのかと、不思議そうな視線を向ける。

「い、いや、ただ安永先生に、このプリントを美羽さんに渡しとくようにって言われたから!!」

捲くし立てる様に言いながら、兼一は後ろポケットに入れていたプリントを「ほえ?」と首を傾げている美羽の手に無理矢理握らせながら「じゃ、じゃあ僕はこれで! 二人とも頑張つて!」と、そくさと教室から出て行つてしまった……。

何かなんだか分からない美羽は、呆然と兼一が出て行つた入り口を眺めながら、ただ「変な兼一さん」と呟くだけであつた……。

疾風の如く走り抜けるとは、正にこの事であろう……。

演劇部の部室から駆け出た兼一は、吹奏楽部の演奏がどこからか漏れ出ている校舎の廊下を、上履きのゴムで地面を蹴りだす接触音を響かせながら、まるで風の様に駆けて行く……。

その梁山泊仕込みのスピードは、すれ違う男子生徒のセツトした髪を衝撃波に似た風でグシャグシャにしたり、すれ違った女生徒のスカートを捲りに捲つたりしていた……まさに、疾ときこと風の如くだ。

だが、その脅威のランに追走してくる者がいる……。

その存在に兼一が気付いたのは、数分間走りに走って、校舎の屋上に辿り着いた時であつた。



「つ、つい勢いで、こんな所まで来てしまった……」

目の前に広がる、茜色に染まった屋上の風景に、兼一は苦笑を漏らす……。

既に時間もなかなか経っており、屋上から校庭を見下ろせば、サッカー部などが追い込みの練習のために、走るペースやチームでの複雑な動きなどを強化するために、難易度の高い練習を行っていた。

兼一は、屋上にある柵から校庭に見下ろしていた視線を、ちょうど背後である屋上入り口へと振り向けた。

そこには“学ラン”という荒涼高校でのランキングなど、様々な情報が入った電子手帳を持った兼一の悪友、新島春男にいしまはるおの姿があった……。

「よ……よう兼一。お前、足速いんだな……」

ただし、全身汗でビショビショに濡らし、膝に両手を乗せ、つかえ棒にしている、なんとも格好の付かない格好であったが……。

「お前、そんなになるんだったら、何で無理して着いて来たんだ？」

兼一の問いに、新島は「べ、別に無理してなんかないさ」とガクガクに笑っている足を必死に隠そうとしながら、膝につけていた手を離し「それよりも、お前に伝えておきたい事があってだな……」と、フラフラの状態ながらも、屋上の柵近くにいる兼一の所まで歩いてきた……その姿は、傍目から見れば生まれたての小鹿の様であった。

「伝えておきたい事？」

「お、おう。お前はもう、名前だけとは言え、正式に新白連合の一

員だからな……総裁である俺様が、わざわざ直接情報の提供に来てやっただけだ」

一つのチームのトップと言う事で、偉そうにのたまう新島であったが、兼一からは、どうしても弱りに弱ったグレイにしか見えてはいなかった……当然だ、ただでさえ宇宙人の様な外見だと言うのに、兼一を割りとは本気で追走してしまったがためにプルプルと震える足や、立っているのも限界と言外に語るように、屋上の防護柵を両手で掴みながら、必死に立っている姿を見せられれば、誰でも気味が悪いと思ってしまうであろう。

だが新島は、そんな無様な格好など、初めからしていないかのようには振る舞いながら、手に持っていた電子手帳を開いた。

「お前さつき、演劇部の方から出てきたよな？」

「え、あ、うん」

どこか真面目な空気を、新島が無様な格好ながらも放ってきたので。

兼一は新島の無様な格好にはノータッチでいく事にした。

「今回お前に伝えておきたい情報ってのは、その演劇部の谷本夏についてだ」

「谷本君について？」

「ああ、まあ、ありがたく聞いておくんだな」

言いながら、新島は電子手帳をタッチペンで操作していく……。

「俺様が谷本について調べた結果、ある一点について、もの凄く怪しい箇所を見つけたんだ」

「ある一点の怪しい箇所？」

首を不思議そうに傾げる兼一に、新島は話しを続ける。

「それはな、奴があまりにも完璧だって事さ……」  
「……は？」

新島から出た言葉に「何言ってたんだ、コイツ？」のニュアンスが詰まった「……は？」の反応をして見せた兼一であったが、新島は至って大真面目に電子手帳に表示された情報を兼一に伝えていく。

「演劇部の部長として、部内でリーダーシップを発揮したり。学業優秀で、それをひけらかす事無く周りと接し、時には勉強を教えたりもしてるから、教師達からのウケも良い」

「なんだ、別に見た目通りの完璧な二枚目じゃん」

「ちえ」と新島の情報に、残念そうに舌打ちする兼一であったが……「それがおかしいんだ！ そんな人間は存在しねえ！」と、新島にキツパリ否定されてしまった。

「いいか兼一？ 人間てのはなあ、叩けばか・な・ら・ず……何かしらの“ほこり”が出るもんなのよ。他人の情報を集めてきた俺様が言うんだから、間違いねえ！」

「……そうなのか？」

力説する新島に、兼一は押され気味に返事を返す……。

そして新島は「あいつ絶対怪しいね」と、自分の頭頂部を指差しながら「俺様の“曲者センサー”もバリサンだ」と某妖怪に良く見られる、頭頂部に角の様に逆立った髪の毛を兼一に示し、自慢気に言い放った。

「だけど、さつき話した感じじゃあ、怪しい所なんて無かったぞ？」  
「単純馬鹿のお前が、あそこまで完璧に装ってる奴のボロなんて見抜けるかよ……」

兼一の疑問に答えた後、新島はもう話しは終わりだと、電子手帳を置く事で示し、兼一から背を向け、ガクガクと笑っている膝を必死に鼓舞させながら、屋上から立ち去ろうとした。

だが新島は、なぜか屋上の入り口付近で立ち止まると、反対にいる兼一に振り返った。

「最後に、もう一回いつとくが！ 完璧な人間なんか、いやしねえから！ お前も人を疑う事を覚えるよ！」

大声で言い残すと、新島はこれで本当に話しは終わりだと背中まで語りながら、屋上のドアを開け、そのまま屋上から姿を消してしまったのだった……。

「……と、そんな話しを、昨日新島にされたんです」  
「まあ」

日にち変わり、現在は次の日の朝……。

兼一と美羽の二人は、学校へと登校するために、民家が立ち並ぶ自動車ちようど二台分しかない道を一緒に歩いていた。

歩きながら交わしている会話の話題は、昨日の出来事と、新島に言われたことだ……。

「正直、僕も白状しちゃうと、初めは完璧な彼に、少なからず嫉妬していたんだと思います……」

「そうなのですか？」

美羽の聞き返しに、兼一は「ハハハ」と乾いた笑みしか返せなかった。

二人はそのまま、車二台分しか通れなかった住宅街の路地から、四車線の交通量の多い道路へと歩み出た。

「でも、昨日の出来事で、彼も彼なりに努力して、今の彼があるんだなと気づく事ができましたし。不良達に向って一步も引かない姿は、昔の僕に少しだけ似ているような気がして……なんか、嫌えなくなっちゃったんですよ」

兼一の自照染みた雰囲気を、美羽は微笑ましそうに見つめながら「なんだか兼一さんと同じで、鬼島さんも谷本さんと仲が良くなれそうな感じですよわね」と、小学生や社会人がちらほらと見られる歩道橋の階段を上りながら言った。

「亮平君が？ それはどうしてですか？」

美羽の言葉に、疑問顔で尋ねる兼一。

「別に深い理由はありませんが……ただ、そう感じただけですわ」「ふ〜ん……でもまあ、確かにそうかもしれませんがね。亮平君って、ああ見えて他人には、かなりの心配性ですからね……僕も、今回の亮平君が僕に向けていた気持ち、なんとなく理解できたような気がしますし」

「あの方も、兼一さんには甘いですからね」

「確かに言えてますね。僕が梁山泊に入りたての頃なんて、いつも心配そうでしたし……僕が、谷本君に感じている気持ちも、あの時の亮平君が抱いていた気持ちと同じだと思っんですよ」

「空手部の方に負けてしまった時も、そうでしたね」

「はい、だから僕も、谷本君のために出来る範囲で不良達から演劇部を守っていききたいと思ってます」

「だから」とつけて「美羽さんもジュリエット役、頑張ってください！！」と美羽を激励する兼一。

「ええ」その姿に、その姿勢に、その横顔に……美羽は「（本当に、強くなっても、根の部分は変わらないお人ですわ）」と、心内で兼一の優しさに、小さな喜びを感じていた。

だが、兼一から激励を受けた美羽であったが、渡っていた歩道橋を降りる際、その細い顎に人差し指を当てながら、突然思案顔を始めた。

「……でも、私も実は少しだけ、気になることがあるんですの」

「え？」

思案顔から美羽が言うと、兼一が少し不意をつかれた様に声を漏らす。

「いえ、谷本さんは確かに、演劇がお上手なんですけど、なぜか楽しくなさそうなんですの……演劇をすることが」

「え、そうなんですか？」

その言葉に、兼一は意外そうな顔をする。

確かに兼一は、谷本と確り話したのは昨日が初めてであったが……稽古終わり直後の、あの汗の量や、不良達に言い寄られても、一歩も引こうとしなかった姿勢を見れば、相手がどれだけ演劇部を大切にしているのかが分かる様なものだ。

それが、美羽によれば、谷本は演劇をすることが楽しそうではないという……。

「別に私個人が感じた事なのですが……谷本さんって、演じている時、瞳の奥の方に、とても悲しそうな光がくすぶって見えますの」「悲しそうな光、ですか？」

「はい、そんな感じがしました……まるで、兼一さんがいつも襟元に着けてらっしゃる、その太陰大極図たいいんたいきよくずの様な感じですよ」

「太陰大極図？」と、兼一が夏服の襟元に着けている白と黒の勾玉たしいんたいきよくずが合わさったような、綺麗な円形を描いたバッジに触れる……「これって、そんな名前だったんですか？」

「太陰大極図とは、中国の陰陽五行説おんみょうごうぎょうせつの陰陽説のもので、簡単に説明すれば、世界は陰と陽の二つでなりたっているという事ですよ。」

“陽”は光・ポジティブ・全を表し、“陰”は闇・ネガティブ・悪という風に表す事ができます」

「ふーん……でも、黒い所にも白い所にも、其々違う、白と黒の小さな円がありますよね？」

「はい、それはつまり、悪の中にも“陽”があり、善の中にも“陰”があるという事です……私は、谷本さんの瞳から、その様な雰囲気を感じ取ったのですが。世界には、完全に善の者や、陰の者などいません。谷本さんにも、昨日新島さんが言ったように、何か陰の部分があるのでしょうか……」

「このバッジって、そんな意味があったんですね……」

美羽の説明に、思うところはあった兼一であったが、それよりも自分が着けていたバッジについての方が興味の質で勝った様で……。

「このバッジって、小さな時に近所の駄菓子やで、猫のバッジと交換した物なんですよ……それ以来、着け続けているんですが、美羽さんのお陰で、初めて意味を知りましたよ」

「へ、渋いバッジですわね」

説明していた美羽も、兼一の話題転換に特に気にした様子は見せず。

兼一が着けているバッジに対して、素直な感想を漏らす。

気付けば既に、荒涼高校が見える場所まで、兼一たちは来ていたようで、周囲には兼一たち同様に、荒涼高校の生徒達が、其々騒がしく登校をしていた。

「ですがまあ、谷本君にも悩みとかあるだろうし、本番も近いですからね、美羽さんは気にせず、演劇を頑張ってください！」

「応援ありがとうございますわ」



第五十三話 裏と表（後書き）

あと少し……あと少しで、奴を出せる。

第五十四話 ミックスアップ（前書き）

今回、展開的に飛ばし過ぎた感がありますが、早く話しを進めたため、目を瞑ってもらえると助かります。

## 第五十四話 ミックスアップ

演劇本番前日……。

今日は久しぶりに、休日という事もあって、美羽は学校での部活を早めに切り上げ、梁山泊での家事に勤しんでいた。

時刻は既に昼時……梁山泊の面々に出す昼食を作り終えた美羽は、兼一が稽古を続ける道場の外で、ぼーっと青空を箒を握りながら、青空を見上げていた。

「はあ……」

昼時と言えども、道場では岬越寺による柔術の稽古が行われており、兼一の体を畳に落とす破裂音の様な音だったり、兼一の肺から空気が漏れ、口から形容し難い声が叫ばれたりしていた……空はこんなに静かで雄大だと言うのに、全く騒がしい限りである。

「……はあ」

しかし、そんな晴天の天気だと言うのに、梁山泊の女房役である美羽の表情に、明るさは無い……。

一体どうしたのだろうか？

まさか、あの人の好意に鈍感そうな娘が恋……など、する筈も無く、別に虚空に向って潤んだ瞳を向けていたりだとか、花を摘んで好き・嫌いをやっている訳でもない。

なら、本当にどうしたのだろうか……？

美羽が元気無さそうに溜息を何度かついていると、不意に、道場の方から聞こえてくる阿鼻叫喚が止まった、死んだか？

いや、そうではない、美羽は知っている、兼一の午前の稽古が、

岬越寺の号令で終わりを告げたのだ。

なら、早く昼食を皆に振舞わねば……が、どうにも陰気な感情しか沸かないために、足がなかなか進まない、というより、動こうという気力すら沸かない。

「……………はあ〜」

そして、本日何度目か分からない溜息を、再度ついてしまった……。

そんな時、道場の引き戸が、ガラッと開かれる。

出てきたのは、稽古終わりという事で、さきほどまで着崩れていた道着を直した、梁山泊が一番弟子、白浜兼一であった。

兼一は、畳に叩き付けられ続けた体を、ダラダラと動かしながら、昼食を取るために、道場から居間のある母屋へと向おうとしていた……が、そこである光景に気付く。

「……………美羽さん？」

道場近くの庭で、掃き箒を握りながら、ぼーっと空を眺めている美羽の姿に兼一が気付いた。

あれ、待てよ……と、兼一は疑問に思った。

今の時間帯は、ちょうどお昼時……そんな時間帯に、梁山泊で家事をこなし続けてくれている美羽が、道場近くの庭でぼーっと突っ立っている。

これは、なにか美羽さんにあつたのかなと、兼一は直感的に察した。

気付けば行動は早い。

兼一は、道場から庭へと出るために外履きを履くと、そのまま美羽の方へと道着姿のまま駆けて行った。

「美羽さん、どうかしたんですか？」

「あ、兼一さん……」

兼一の声をかけられた美羽は、一回で反応したものの、振り向いた表情は、どこか暗そうだ。

「なんだか緊張してそうですね、明日の本番にですか？」

「はい……それもあるんですが、実は……」

帰って来たのは案の定の答え、だが、どうやら他にも、美羽の表情を曇らせる要因があるようで……。

「演劇部の皆さんは当日、家族の方が見学にこられるんですって……」

美羽の表情が、曇っていくというより、どこか諦めた様な、力の無いものへと落ち込んでいく。

「でも私は……おじい様が二・三日前にふらっと旅に出てしまいましたし。また、小学生の時の授業参観の様に、私だけ独りぼっちなのかしらって……」

言いながら、自分で“しゅん”としてしまう……。

風林寺美羽という女の子は、かなり特殊な家庭で育ってきた。

風林寺隼人という、世界でも1・2を争う武術の達人を親とし、幼少の頃より隼人と共に世直しの旅と称して、世界中の危険地帯や安全地帯の双方を周って来た……。

その生活自体は既に、美羽は学校などの事もあって終えているのだが、隼人自身は、いまだにふらっと世直しの旅に出してしまう時があるのだ。

故に、小学校や中学校時代は、親御関係の行事に、美羽は独りぼっちになる事が多かったのだ。

それを理解している兼一は、隣りで話しを聞きながら、何か無いものかと“一瞬だけ”考えた後。

「僕がいるじゃないですか！！」と、美羽の沈んだ横顔に、どこか開き直った様な声をかけた。

「えっ？」

兼一の声に、美羽が少し驚いた表情で、横に振り向く。

そこには、友人として頼もしくも、見ているだけで勇気が貰える様な、自信に満ちた兼一の顔があった。

「明日は、家族1ダース分の応援を、僕一人ですてみせますよ！！」

言いながら、グッと力強く左手の拳を握ってみせる兼一。

その宣言に、美羽は本当に嬉しそうに口を開いた手で覆いながら「まあ！！」という声を漏らす。

そして、どうやら、この兼一の宣言で、美羽の表情に明るさが完全に戻った様であった。

「そうですわね、ありがとうございます」

取り戻した微笑で、兼一にお礼を言う美羽。

「いえ、当然の事じゃないですか！」

「でも、劇中に大声は出さないでくださいよ？」  
「あ！ そうか、ごめん！」

道場近くの庭で、二人して仲良く声を上げながら微笑む。

これで、明日の本番に、美羽が独りぼっちにならなくて済んだ……が、その二人の話しを、道場の瓦屋根で寝ていた人物、もとい、外見の割に優しい漢、逆鬼<sup>さかき</sup>至緒<sup>しお</sup>が聞いていた事を、二人は知らなかった。

翌日の演劇本番……。

荒涼高校体育館では、演劇部主催の『ロミオとジュリエット』を見るために、生徒や親御さん達が、着々と集まっていた。

受付の方も、体育館に並べられたパイプ椅子の数だけ用意したパンフレットが、予想以上に人が集まってきてしまったせいで、既に在庫が無くなってしまふという事態に見舞われ、現在では忙しなくご来賓の方々に説明しながら、追加の席を用意している状態だ。

これは単に、演劇部部長の谷本効果だけではない。

最近では、容姿端麗の美羽が、谷本が演じるロミオ役の恋人役を演じているので、校内では『パーフェクトカップル』だとかいう仇名が付いてしまつたぐらいなのだ。

この様な、これまでいなかった谷本と対成すヒロイン役の登場により。今回の異常なまでの集客率は、男女比合わせても、歴代演劇部が行ってきた劇でも最高を誇っていた。

広い体育館に、人の活気が充満してきた事を、舞台上の幕越<sup>カーテン</sup>しに感じていた美羽は、両肩が出ている純白のドレスに身を包んだ姿で、胸元に両手を当てながら目を瞑り、これから始まる演劇に向けて集中力を高めていた。

美羽の姿は、普段学校では三つ編みで纏めている金髪をストレートにし、かけている伊達眼鏡も、今はかけていない……それ故に、彼女が持つ本来の魅力が引き出され、身に纏っている純白のドレスも相まって、本当に“お姫様”と形容する以外に、今の彼女を表す言葉が無いくらいであった。

そしてふと、美羽は集中のために瞑っていた目を開ける……。

そこには、冒頭のシーンで使う張りぼてのセットや植物などが舞台上に設置されていて、周りでは役者も裏方も、それぞれ緊張した面持ちで本番までの最後のチェックをしている光景が見られた。

こんなプレッシャーのかかる状況で、緊張した面持ちながらも、確りと役割をこなしていく演劇部の部員を見ると、美羽は本当に良いチームなのだなと感じると同時に、助っ人である自分は、ただ見ているだけしかないのだなという事を感じた。

だから、だろうか……？

美羽は、昨日兼一に言われた事を思い出した。

「明日は、家族1ダース分の応援を、僕一人ですてみせますよ！」……嘘でなければ、いや、あの優しい人が、嘘など付く筈も無い。

そう思い、美羽は忙しく動いている他の面子は尻目に、幕の向こう側 既に席も無いくらいに集まっているであろう

観客席の方を、幕の端を捲って、確認した。

「……！」

美羽は己が目を見開いた。

パイプ椅子が並べられた最前列……そこには、普段の道着袴とは違った、カジュアルなスーツ姿の岬越寺秋雨が「まあ、風林寺さんのお父様なんですか!？」隣りに座るマダムを持ち前のダンディズムで虜にし「はい、娘がいつもお世話になっております。隣りが兄で、次に妻です」と、岬越寺の言葉通りに、視線を動かしてみれば、

「おめー刀は置いてこいよ、刀は……大体、なんで俺まで」  
「袋に入れた……る？」

岬越寺の隣りに、パイプ椅子にふんぞり返りながら、後頭部両手



を回している逆鬼の姿があり、その隣りには、普段とは違って、確りと化粧までしてきている香坂しぐれの姿があった。

逆鬼はジーパンこそ履いているものの、ワイシャツにジャケット、ネクタイと一応の格好をし、しぐれも普段のミニスカ着物ではなく、黒のタイトスカートにストッキング、上はどこかのOLの様なジャケットとワイシャツで決めてきた……ちなみに、しぐれの親友である鬨忠丸も首元に蝶ネクタイをしていて、あの長物も袋にちやんと仕舞ってある様だ。

そして更に視線を横へと動かせば……。

「やあ、アパチャイだよ」

いつもの格好に、“ア”と中心に大きくプリントされたTシャツを着ているアパチャイの姿があり、彼は近くにいた見知らぬオジサンに軽い挨拶を交わしていた。

その普段と全く変わらぬアパチャイの姿勢に、美羽は「ぷ」と少しだけ笑みを漏らし、更に最前列一番端へと視線を向ければ……。「早く来て良かったね、特等席ね」と、いつも通りの格好で、高そうなカメラを手に持っている馬剣星の姿があった。

「（みなさん……!）」

独りだと思っていた演劇の舞台……だが、蓋を開ければ梁山泊の達人たちが、最前列という舞台から最も近い場所で見守ってくれている。

こんなに嬉しい事は無いと、美羽の胸中に頼もしさと嬉しさが広がっていく……心なしか、笑顔の筈なのに、目頭が熱くなってきた。美羽は感じていた。

「風林寺さん、そろそろだよ!」

その時、後ろから谷本の声が聞こえて来た。「は、はい！」

美羽はそれに返事を返すと、梁山泊の面々がいる観客席から踵を返し、本番開始に向けて、自分が待機する場所へと走り出した。

だが、美羽には一つだけ疑問に思ったことがあった。

「（そういえば……あの中に兼一さんの姿が無かったような？）」

美羽が疑問に感じた事は、全く持って、その通りであった……。

ここは荒涼高校の校門。

開かれている校門は、重厚感漂う鉄柵のスライド式の物……その校門付近の外壁に「ハア……」と頂垂れる兼一の姿が見られた。

「なにやってんだ？ こんなところで？」

すると、そんなどこか情けない雰囲気漂わせる兼一の後ろから、割と聞きなれた声がかげられた。

突然声をかけられた兼一は、“ビクッ！”と体を震わせると、驚いた様に後ろへと振り返った。

そこにいたのは、自身のチーム拡大のために、背中に看板を、胸には襷を、手にはプラカードを持った、宇宙人こと新島春男であった……ちなみに、それぞれの道具には“新白連合団員募集”と書かれている。

兼一は、その悪友の姿を確認すると、自信なさ気に……というより、意気消沈した様な消え入りそうな声で口を開いた。

「実は……どうしても見るのが辛くて、ウロウロしてた」

「根性無いどころか、途方も無くケツの穴が小せえ奴だな！！ 約

束したんだろ！ 見てこいよ！！」

新島の若干面倒臭い奴を相手にするような、どこか投げやりな檄に、兼一の声のトーンが、自棄になったように上がった。

「お前、知ってるのか！？ ロミオとジュリエットって、キスシーンあるんだぞ！！」

「んなもん演技だろ？」

「それでも耐えられないんだー！ いつそ、劇なんか中止になればいいのにー！！」

「それを本気で言ってたたら、坊やは本気で風林寺の事、あきらめた方が良いな」

恋する少年、白浜兼一が自棄になって叫んだ言葉に、校門の外から、うんざりと言った表現がとても似合う声が返って来た。

当然、叫んだ張本人は「え？」と不思議そうな声を漏らし、声が返って来た方へと視線を向ける。

「好きな相手の晴れ舞台を、つまらない嫉妬で見られないんじゃないかな」  
然だな」

そこにいたのは、ハンチングキャップと、足の付け根から片方だけゴツソリと切り取られたジーンズが特徴的な、赤みがかった茶髪のショートヘアーの少女「キサラさん？」……南條キサラであった。キサラは、先程から弱音ばかり吐いている兼一を、もともと気の強そうな猫目を更に鋭くさせながら睨みつけている……。

「坊や、お前、あの風林寺の事が好きなんじゃないのかよ？」

言いながら、キサラは履いているブーツで歩を進め、兼一の目の

前に対峙した。

兼一は、「好きなのか？」と聞かれた瞬間、あたふたと面白い反応を見せたが、キサラが目の前に来ると、相手の真剣な眼差しに押しされ、何も言えなくなってしまうた。

「ぼ、僕は……」

「……はあ、ハッキリ言わねえと分かんないだろ？」

口ごもる兼一に、溜息交じりに呆れるキサラ。

だがいくら待っても、一向に答えが兼一から返ってこなかったの  
で、いきなりだったし仕方ないと感じたキサラは「少なくとも、日頃感謝してんだろ？」

「は、はい」

「だったら、その相手が一生懸命練習した舞台ぐらい、観に行つてやれるだろ？」

「ですが……」

オズオズと反論しようとした兼一に、キサラは「つべこべ言つてないで、劇ぐらい堂々と見てりや良いんだよ！！ 男だろ！！」と言い終わると同時に、兼一の右肩に向つて、あまり腰は入れない左廻し蹴りを蹴り込んだ。

当然、いきなり脛で蹴られて、兼一は驚いたものの、戯れ程度の蹴りだったので、少しバランスを崩す程度に収まった……が、この蹴りの意味が、自身を鼓舞してくれているのだと気付き、表情を一変させ、キサラに向き直った。

「お、少しはマシになったな」

その兼一の表情に、キサラは感心感心と声を漏らした。

「すみませんキサラさん……そうですね、いくら見るのが辛いシーンがあるからって、観に行かないのは美羽さんに対して失礼ですもんね」

「当たり前だ、分かったらさっさと行きな、坊や！」

「はい！　ありがとうございます、キサラさん！」

決心が付けば、兼一という男の行動は早い……。

なかば発破を掛けられた形となった兼一は、キサラに吹っ切れた様な返事とお礼を返すと、そのままキサラから踵を返し、体育館の方へと走り去っていつてしまった。

そして、残されるキサラと新島の二人……。

「さて、今、目の前に、以前ふざけた情報を流したチームの頭トットがいるとする……」

「へ、へへへ……（やべえ、兼一があまりにも哀れすぎて、逃げるタイミングを逃しちまった）」

さつきまでの雰囲気とは違う、キサラの不敵な笑みに、看板などを掲げ、愚かにも逃げ遅れてしまった新島は、足がガクガクと震え始め、地面と自身の足に釘を刺されたような感覚を味わっていた。

蛇に睨まれた蛙……まさに、言葉通りの光景であった。

「そうになると、ふざけた情報を流された側のトップである、私はどういう行動を取るべきなんだろうねえ？」

「い、いえ……べ、別に何もしなくても良いのではないのでしょうか？」

もはやガクブル状態の新島に、キサラが危険な空気を醸し出しながら歩み寄っていく……。

既に間合いは、キサラの得意とする蹴り技の射程範囲内だ。

これは……と、あとちょっとすれば腰が抜けてしまいそんな新島は感じた。

運悪く、周囲には部下達の姿は無い……理由は、今回は勧誘のみ  
の活動という事で、集団で来ると、いらぬ威圧感を相手に与えてしま  
う可能性があるがあるので、口の上手い新島一人で活動していたのだ。

本当に運が悪いと言っか、間が悪いと言っか……。

だが、新島がキサラの蹴りを、“若干”覚悟した時、予想外の事  
が起きた……近づいて来たキサラが、ガクブルの新島を“素通り”  
したので。

「あ、あれ？」

当然、肩透かしを喰らった新島は、きょとんとしてしまう。

一体なぜ？

答えは、新島を素通りしたキサラが振り向かず、背中越しに返っ  
て来た。

「まあ、お前が流したデマは気に食わなかったが……ある意味で役  
に立ったから、許してやるよ」

「へ？」

許しはもらったが、いまだ恐怖に縛られる新島は振り向けないで  
いた。

「実際、私のチームだけじゃ“ラグナレク”に力押しされて、今頃  
全滅してたかもしれないからね」

「……そ、そうですか、お役に立てたなら結構です」

“ラグナレク”は強大だ、それこそ数でも質でもね……今はトッ  
プも出てきてないが、敵対する限りは、いずれ必ず出てくる。その

時まで、お互い潰されないようにしないとな」  
「……」

キサラは「じゃあな」と言っ、そのまま新島の返事を待たずに、体育館の方向へと歩いていってしまった……。

取り残された新島は、助かったという安堵の反面、自身も危惧していた今後の不安も真剣に考えるのであった。

結果的に言えば、演劇は大盛況のうちに幕を下ろした……。

キサラの発破掛けで、美羽の演劇を見る決心が付いた兼一は、逆鬼が用意していた、正面から舞台を見やすい席に座り、劇の中頃であつたが、美羽の晴れ舞台を観ることが出来た。

その時、美羽のドレス姿に本気で見惚れてしまったり、これまでの努力が実った瞬間を観て、劇の最後には逆鬼と共に泣けてしまったりと、本当に兼一は、劇を見る決心をつけてくれたキサラに、内心で感謝しっぱなしだったそう……。ちなみに、劇中は殆ど美羽しか見ていなかったと、後に闘忠丸がしぐれに語ったらしい。

演目の全てが終われば、後は来客の退場を待ち、片付けに入るだけだ。

「見事だったよ、美羽！」

「お疲れ様です、美羽さん！」

現在、体育館内では、並べられたパイプ椅子を片付けたり、舞台に設置されていたセットを演劇部の皆で片付けている……。

そんな中、今回の助っ人ヒロインである美羽は、肩を露出したドレス姿のまま、梁山泊の面々の賛美を受け取っていた。

「みなさん来てくださって、ありがとうございますですわ」

岬越寺と兼一の労いの言葉に、美羽は少し照れながらも、今回の劇のために来てくれた事に感謝の言葉を返す……美羽の後ろでは、しぐれが「ドレス……いいな」と、いつも通りの無表情で、女の子らしい感想を漏らしていた。

「でも、演技が上手くいったのは、谷本さんが引つ張ってくれたからですわ」

「あれ？ 白浜君に、風林寺さんのお知り合いの方？」

すると梁山泊の面々で固められた場所に、今回の劇のロミオ役である谷本が、舞台衣装を着たまま近づいて来た。

「え、ええ、あの………親戚ですわ」

美羽の紹介に、谷本は「それはわざわざ………谷本です」と、好青年らしい礼儀正しさで、頭を軽く下げた。

「谷本君も、凄かったよ！」

「ハハハ、それは嬉しいな」

舞台衣装姿の谷本に、兼一が美羽に対して送ったように、手放しで賛辞を送る。

周辺は片付けなどで騒がしいが、この場では今回のヒロインと主役が揃っているのです、誰も文句を付けようと思者はいない……いや、むしろいる方が可笑しいのかもしれない。

そんな中、美羽の保護者役という事で、今回の演劇を観に来た岬越寺が、兼一や美羽と楽しそうに談笑する谷本へと歩み寄った。



「谷本君、君の演技も見事だったよ……」

近づいて来た岬越寺の賛美に、谷本が「はい、ありがとうございます  
ます」と素直に喜ぶと……「少々、おしいがね」

「え？」

相手の労うような微笑から出た言葉に、谷本は不意を突かれた様な顔をする。

それも当たり前だ……いくらヒロイン役の親戚だからといって、  
初対面の人間に、賛美と共にダメだしをされるとは誰が思うだろう  
か？

すると岬越寺が、顎に手を当てながら、本当に勿体無かったと言  
うかのように、戸惑う谷本に話を続けた。

「君がもっと、演じることを憎んでいなければ完璧な公演だったよ。  
いやあ、実におしい……」

「岬越寺さん!？」

二人の会話を近くで聞いていた兼一が、“師匠”と呼ぶのを気を  
付けながら、谷本にダメだしをした岬越寺に言い寄り始めた。

「折角演劇が成功して、皆がいい気分だったのに、空気を読んでく  
ださいよ!!」

「え? いや、私は一観客として、素直な感想を彼に……」

「その素直な感想が、空気を読んで無いんですよ!!」

この人……やりやがった。

兼一の素直な感想である。

自身の師匠へと言い寄った兼一は、一般人として、空気が読めな

い行動をした岬越寺から、一旦視線を振り向かせ、「ごめんね谷本君？　ちよつとこの人、言い付けるから」と、断りを入れてから、突然自分の弟子から注意を受けてしまった事で、不思議そうな表情をする岬越寺に、普段の関係からは考えられない説教を横行し始めた……その光景に、ドレス姿の美羽は困ったような表情をしていた。

「谷本君！　これ受け取って！」

谷本が兼一たち御一行の騒がしさにたじろいでいると、突然後ろから、黄色い歓声をあげる女生徒が、手に持っていた赤い花の花束を差し出してきた。

それに気付いた谷本は振り向き様に、さきほどの動揺など嘘かのように、爽やかな笑顔を花を差し出してきた女性とに向けた。

「うわあ、ありがとう、コスモスだね！」

「あ、うん、今日の公演、とっても格好良かったよ！」

「ありがとう、そう言ってもらえると嬉しいよ！　この花、妹が大好きなんだ、大事にするね！」

さつきまでの劇で、額に汗を滲ませた谷本であったが。

その笑顔は、清涼感漂うものであり、花を差し出した女生徒の頬を朱色に染めるには十分過ぎるものであった……。

花を受け取り、女生徒と他愛の無い会話をしていた谷本であったが、視線を先程まで兼一たちが居た場所へとずらすと、そこには既に兼一たちの姿が無かった事に気が付いた。

多分、谷本がファンの女生徒と話しをする光景に傾合を感じ、空気を読んで皆で引き上げたのだろう。

だがこの時、ファンの相手をする谷本の心に、影の様な黒い感情が、誰にも気付かれずに広がっていったのは、さしものダメだしをした岬越寺にも見破れなかっただろう……。

「そういえば、キサラさんも観に来てたんですよ!」

「まあ、キサラちゃんがですか!？」

現在、校門前には兼一や美羽といった梁山泊の面子が、劇を観に来た来客に紛れながらも、通行の妨げにならぬように、校門の端っこに寄り、劇の余韻を楽しんでいた。

既に外の風景は茜色に染まっている……そろそろ美羽も、梁山泊に戻って夕飯の仕度をせねばならない時間帯だ。だが、まだ梁山泊の面々は、ある人物のせいで足止めを喰らっていた。

「逆鬼どん、まだアパチャイを見つけれないみたいネ」

「ふむ、そうみたいだな……」

剣星と岬越寺が、夕焼け色の染まった校舎を眺めながら、各々で呟く……。

そう、梁山泊の面々が足止めを喰らっていた理由は、劇後、忽然とトイレに行つたきり姿を消した、2mを越える褐色の巨人、アパチャイ・ホパチャイを待っているからだ。また、それを捜しに行つた逆鬼も待っている状況だ。

「二人とも、ここには慣れてないな……い」

校門近くにある花壇に腰掛けながら、長物を入れた袋で鬪忠丸と遊んでいた香坂しぐれが、心配そうな視線を岬越寺に向けた。

岬越寺は「まあ、二人とも大人だから、直ぐに戻ってくるだろう」と、しぐれの言葉に気楽に答えた。

すると、今まで美羽と談笑を楽しんでいた兼一が「あの、それだ

「だったら僕が捜しましょうか？」と、どこか仕方ないといったニユア  
ンスが含まれた口調で、岬越寺に提案を持ちかけた。

「そうだね……本当なら、入れ違いになりそうで心配なんだが、二  
人とも、この学校には慣れていないからね、お願いできるかい？」

「大丈夫です、あれだけ目立つ人達ですから、人に聞けば直ぐに分  
かると思いますから」

「なら、行ってきたくれ」

「はい、行ってきます」

お願いされれば、兼一は直ぐに振り返り、美羽に「じゃあ直ぐ戻  
ってくるんで」と微笑み混じりに言ってから、アパチャイと逆鬼を  
捜しに駆けていった……その駆けていった兼一の後ろ姿は、どこか  
喜々とした感情が漏れ出る様な、軽快な雰囲気を出していた。

おそらく、美羽の演劇を見て、内心浮かれているのだろうと、  
梁山泊の師匠達は当たりを付けた。

人づてに聞いていけば、直ぐに、あの様な目立つ人達は見つかる  
と思っていた兼一であったが。

「そっか……休日で、しかも殆ど下校時刻みたいなもんだから、  
他の人自体が見つげづらいのか」

兼一は今、とりあえず校舎内を捜す前に、外にいる人達から二人  
の目撃情報を掴もうとしていたのだが……それはどうやら、兼一の  
言った通りの結果しか生まなかった様だ。

現在位置は、校舎の周りから聞き込みを行おうとしていたために、  
夕焼け空から照らされる太陽の光を遮り、大きな影を作り出してい

る校舎裏付近だ。

そこは、学校の敷地と外を区切るコンクリートの外壁と、数台の室外機が目立つ校舎裏の威圧感のせいで、実際の幅よりも狭く見え、差し込んでくる影も相まって、どこか陰湿な雰囲気や漂う場所でもあった。だが、陰湿な雰囲気と言っても、雑草などの遮蔽物は殆ど無く、土の地面がただ閑散と広がっているだけだ。

故に……だろうか？

「あれ？」

遮蔽物の無い校舎裏を覗き込んだ兼一は、そこである人物を発見する。

その人物は、左胸の位置で縦横のラインがちょうどクロスしている、少し特徴的なトレーナー以外、ジーンズや学校指定の上履きといった地味な格好をしているのだが……目に掛かるぐらいに伸ばされた金髪に、細い顎、筋の通った鼻に、ハッキリとした二重瞼が目立つ、確りと見開かれた切れ長の目が、かの人物を非凡の容姿としていた。

兼一は、この人物を知っている……だが、その人物は今、両手にコスモスの花束を持ちながら、夕焼け色に染まる空を、どこか力無い憂いのある瞳で仰ぎ、ぼーっと閑散とする校舎裏で佇んでいる。

その人物とは、先程まで演劇部の劇で、主役として活躍していた男……谷本夏だ。

「……谷本君？」

普段の爽やかなイメージとは違った、少し暗い雰囲気、兼一は何事かと、しばらく黙って眺めていたのだが……次の瞬間、谷本が手に持っていたコスモスの花束を地面に落とし、そのまま履いている上履きで、ファンからもらった筈の花束を踏みつけた事によって、

兼一の目が驚きに見開かれる事となった。

「ッ!!!?!」

あまりに唐突な行動に、兼一が声にならない驚きの声を発した。それにビクリと気付いた谷本が、目に掛かるほどに伸びた金髪を揺らしながら、兼一が立っている方へと鋭い視線を向けた……。

「見られたか……」

「た、谷本君？」

目が合った二人は、それぞれ別の反応を示した。

目撃してしまった兼一は、あまりに突然の事に戸惑う様な問いかけをし、目撃されてしまった谷本は、いつもと違った影の掛かった表情で、見られたにも関わらず、特に問題ではなかったと言う様な呟きを漏らした。

兼一は事態が上手く飲み込めない……当然だ、先程までの公演や、これまでの彼のイメージを知っていた者なら、この光景に戸惑いを覚えない者はいないだろう。

故に、なのか……？

事態が飲み込めず、戸惑う兼一は「なぜ、そんな事を？ 花が可哀相だよ」と、いまだ潰した花から足をどけない谷本に聞いた。

だが、返って来た答えは「嫌いなんだよ」

「花つてのは直ぐに枯れるからな……」

いつもと違った、どこか棘のある口調に、鋭い視線……。

この様子に、流石の兼一も、谷本の様子がおかしい事に気付いた。

「そして……」と、谷本が言葉を続け 「演技するのも大

嫌いだ！」

「え!？」

谷本から出て来た言葉に、兼一は驚愕の声を漏らす。

演劇部の部長が……あれ程、汗を掻くぐらい、真剣に稽古に取り組んでいた人物が、演技をすることをハッキリと否定したのだ、兼一が驚くのも無理は無い。だが谷本は、先程から驚きに染まっている兼一など気にしていないかの様に、話しを勝手に進めていく。

「君もそうだろ？ 正義の味方を演じてはいるが、内心疲れきっている筈だ……」

「ぼ、僕は演技なんかしていないよ？」

「それは嘘だ……君は、大勢の人間から賞賛を得ようと、必死に目立とうとしているじゃないか？ 新白連合に正式に入ったっていうのも、その一環だろ？」

「別に、嘘なんか付いてないし、人目なんか関係ないよ？」

瞬間、谷本の目が強張った。

「嘘をつくなと言っている！ 人間はみんな、誰かを演じて生きているんだよ!!！」

「ッ!!！」

突然声を張り上げた谷本に、兼一は自身の体が一瞬固まったのを感じた……。

何か、重たい空気が周囲に広がると同時に、ピンポイントで内面にぶつけられた感覚……兼一が、一瞬固まったのと同じに感じた、嫌な感覚だ。

それは圧迫感、緊迫感、圧力といった、様々な感覚が混合したもので……兼一は、この嫌な感覚を、武術に関わるようになった事で、

理解出来るようになっていた。

敵意

「なんのつもりかしらないが、僕は僕だ！！ 君の言っている様な人間じゃない！」

敵意と言うものは、一度放てば周囲に嫌な空気を生み出し、相手にも嫌な感覚を与えるものだ。

そしてこれは、放つ相手によって、相手に与える感覚や周囲に与える感覚の質が変わってくる……谷本の場合、周囲には緊迫感を……相手には“<sup>プレッシャー</sup>圧力と、近づいたら打たれるという危機感”を与えるものであった。

このような敵意の出し方をする人種は限られている……それは、戦いという血生臭い世界に身を置く者たちだけだ。

それを理解していた兼一の口調が、自然と強いものへと変わってしまう。

当然だ、自分の身に危機が迫っているのなら、誰だって言気を強めずにはいられないのだから。

「いけすかねえ……」

兼一の言葉を聞いた谷本が、奥歯を噛み締めながら、忌々しそうに内なる嫌悪を吐き出した。

明らかかな変化……確かに、先程から谷本の様子は普段とは違う。

だが、今の嫌悪を吐き出した瞬間が一番、谷本が己を覆わせた何かをかなぐり捨てた様に見えた。

すると谷本は、己が履いているジーンズの後ろポケットから、一雙の黒い手袋を取り出した……。

「？」兼一の表情が疑問に染まるが、谷本は一雙の手袋を取り出し、そのまま己が両手に、その黒い手袋をゆっくりとはめ始めた。



「本当に、いけすかねえ……貴様って野朗は！」  
「その手袋ッ!?」

明け透けの嫌悪をつきながら、谷本が両手にはめた一雙の手袋……。

その手袋には、手の甲にローマ数字で?と刻まれた円形の金属が着けられており、全体的に漆黒の色と相まって、かなり特徴的な手袋であった。

兼一は、この谷本が両手にはめた手袋を見た事がある。

「正直、この後にも潰そうかと思っただが……貴様は、ここで潰す！」

「第六拳豪」……!?」

「ああそつだ、俺が“第六拳豪”の隠者だ！」

拳豪……ラグナレクでも有数の実力を持ち、その存在感と実力で内外を恐怖で震え上がらせる、チームの象徴的存在。また、幹部としての役割もあり、ラグナレクの中樞を担う者たちでもある……。

その拳豪……第六拳豪が、いま兼一の目の前で、こちらを敵意の眼差しで睨みつけている。

すると、隠者がゆるりと構えを取り始めた……。

それは相手に向って、完全に右肩を向ける真半身の構えで、手刀の様に開いた両手を逆手にし、まるで両翼を開くように、両腕を肩の位置より少し上に広げている……。

独特な構え……だが、放たれている圧力は、並みの者など軽く凌駕している。

レベルの高い柔道家は、組んただけで相手がどれほど強いのか分かるといわれている……そして、打撃系の格闘家の場合、相手と対峙した瞬間に、相手が只者では無いと分かる時がある。

目の前で独特な構えを取る隠者は、その後者だ……。  
そして兼一は、相手から向けられる圧力から、この場からは逃れられない事を、一瞬で理解した。

理解した武術家の取る行動は一つしかない。  
己も、相手と対峙するために構えを取る事だ……。

兼一が取った構えは、左肩を前に出し、右足を奥足として置くオードックスな構えで、開いた両手を相手に向けて、脇を絞めながら腕を“ハの字”に開く構え……空手という、前羽まえはの構えだ。

両者が構えを取ると、この閑散とした校舎裏の空間に、武術家同士の間合いが形成される。

距離自体は、まだ両者の蹴りすら届かない距離ではあるが、周囲に漏れている緊張感、既に闘っているも同然であった。

「口が聞けるうちに答えろ、貴様の師父の名は“馬槍月”だな？」

まだ序盤の緊張感を保ち続けているなか、自然立ちのまま真半身に構えている谷本が、兼一にそう尋ねた……。

「“槍月”？ いや、確かに僕の師父の中に“馬”って人はいるけど……“槍月”じゃない、“剣星”だ！」

「馬剣星だと……なるほど、通りで」

兼一の答えを聞いた瞬間、谷本がどこか納得を得たように呟いた……が、その仕草は、ほんの一瞬だけで、すぐに纏う空気を臨戦態勢へと戻してしまう。

そして……。

「ッ！？」

相手の不意を突くかのように、谷本が前へと突貫する……。

だが、間合いはいまだ、蹴りすら届かぬ距離……いくら前へと出たとしても、相手に攻撃が上手く当たる距離ではない。つまり、谷本は兼一に対して、不用意に突貫を仕掛けたことになる。

しかし、その判断は間違いであった……そもそも前提事態が、だ。前羽の構えを取る兼一に突貫する谷本は、体の軸をぶらさないまま、体の中心から捻りを入れるように左回りに回転し、両腕に脱力を加える事で、回転するプロペラの様な遠心力を両腕に与えた。

突然、背中を向けながら、こちらに突貫を仕掛ける予想外な相手に、兼一は無駄な警戒心を持ってしまふ……そしてこの時、兼一がもし、視線を谷本の足へと移っていたのなら、状況は変わったであろう。

谷本の足は、回る前までは前足であった右足の足先が、谷本から見て外側に向き、反対の左足は、股関節に捻れを加えるようにしながら、相手に踵を向けていた……つまり、突貫すると同時に、上半身だけではなく、下半身でも捻れと言う名の溜めを作っていたのだ。そして、その溜めが、谷本の間合いに入った瞬間、一斉に開放された。

谷本が回転中に左腕を、肩甲骨を起点にしながら思いっきり引く様に振り抜くと、兼一が構えている方向へと、胸が開かれた……既に足の捻れは、完全に解き放たれ、左の足先は相手へと、右の足先も、ほぼ相手へと向けられている。

そして、この一連の動作の大本命が、体の捻れや全身のバネを使った最大の遠心力を得ながら、突貫している勢いと共に、構えを取っている兼一へと振り抜かれた。

バァチィィィイツッ！！  
という、破裂音に似た、凄まじい音が、辺りにこだました……。

同時に、兼一の体が、一気に凹凸のある校舎の壁へと、横薙ぎに振り抜かれた、谷本の“右腕”に持っていかれるように吹き飛ばされた。

「ふッ!?」

校舎の壁に、右の背中を打ちつけた兼一は、衝突した衝撃のせいで、肺から息を漏らしてしまう。

幸い、相手が振り抜いた“右腕”の打撃は、ムエタイのブロックの様に、左腕で顔面を庇う事によって防いだが……。

「ッ!?」

兼一が校舎の壁に背中を預けながら体勢を整えようと構え直すと、視界がぼんやりと霞がかり揺れているのに気付いた……否、正確には“今ようやく”気付いた、だ。

「ふん、頑丈だな」

「(そんな……ちゃんと防いだのに、頭が揺れているなんて)」

谷本が兼一に振り抜いた技、それは空手でいう腕刀わんとうを、さらに威力だけを遠心力を高める事で向上させた技だ。

その威力は、ただの手技など比べ物にならない威力で、下手をすれば、体全身を使った遠心力の分、蹴り技よりも高い威力を誇っていた。

「今のは、一体……!?」

視界のもやが引き出した兼一は、一瞬よろめくも、再び前羽の構えを、校舎の壁を背にしながら構えた。

「俺の武術は臂掛拳ひかけんと言つてな、今みたいに相手を潰すには持つて来いの武術なんだよ……それも判断できず、馬鹿正直に受けるとは、所詮、貴様の武術は未完成だな!」

言いながら、谷本は構えを取った……。

今度は、開いた左手を逆手にしながら相手に向って突き出し、反対の右腕は、真半身の体勢のまま、肩の位置まで上げ、手を開き、肘を曲げた状態で停止させる。

また、兼一の見たことの無い独特な構え……一見、真半身の状態で腹をがら空きにさせているせいで、左のミドルキックなどが有効そうな構えではあるのだが、先程の相手が行った、長距離からの、鞭の様な腕刀を見せられれば、自ずと蹴り辛くなるというものだ……。

「（強い！ 今まで戦ってきた、どの敵よりも……）」

相手の大きな圧力に、兼一の心が揺らぐ……。

だが、この時、兼一はふと以前、亮平が自分に向けて言っていたアドバイスを思い出した。

それは確か、まだラグナレクに所属していた武田と闘う直前の事であった。

確かあの時、亮平はこう言っていた……「喧嘩っていうのはな、最初に相手をビビらせた方が勝つんだ」それと「ボクサーってのは、その技の“痛み”ってのを知らないんだろ？ だったら、一番最初っからその技を出して、相手に恐怖心を与えれば終わりだよ」……と。

これは、もしかしたら今の状況に似ているのではないか……？

あの時は相手の武田に、ローキックの痛みを与え、それを皮切りに、一気に勝利をもぎ取った。

だが今は、その逆……自分が、相手の未知の技に、少なからず恐怖心を抱いてしまった。

気付けば兼一の行動は早い。

「……………うん？」

兼一が、突然両手を自分の両頬へと近づけた……………その光景に、谷本は構えを取ったまま、訝しげな視線を向ける。

そして、次の瞬間……………パンツッ！！

兼一が、自分の両手で両頬を叩き付けた。

「何をしている？」

「うるさい！　これで、もう大丈夫！」

両頬を叩いたあと、兼一は再び谷本に向って同じ構えを取った。

心なしか、両頬が赤い……………だが、再び取り直した構えに、相手に向けている視線に、先程の揺らぎは見られなくなった。

どうやら、恐怖心を持ち始めた自分に、少々きつめの湯を入れたようであった。

「ぶん……………」

向き直った兼一を見て、谷本は鼻で笑った。

そして、再び土の地面を蹴りだし、校舎の壁を背にしている兼一に向けて、野球のオーバースローの様に、右腕を振りかぶり始めた……………。

また、体の捻れや遠心力、前進の勢いを利用した、鞭のような打撃が来る……………。

それに気付いた兼一は、なんと己も“前”へと、奥足である右足で地面を蹴り抜き躍り出た。

「ッ！？」

突如、さきほどとは打って違って、迷いの無い行動を取り始めた

兼一に、谷本は一瞬驚くも、体勢に入った右腕の“打鞭”と称しても差異は無い打撃は止まらない。

いや、止めなくとも、この打撃は前進してくる相手すら押し潰す、真の中国拳法だ。

故に、谷本は先程と同じ様に、鞭の様に撓らせた右腕を、野球のオーバースローを投げ込むようにして、前進してくる兼一に振り抜いた……。

ガゴツ！！ という、鈍い音が辺りに響く。

同時に、地面に片膝を付く音もした……。

「あ……んな……」

地面に膝を付いた者は、信じられないといった表情のまま、相手を見上げる……。

見上げた先にいたのは、“蹴り抜いた右膝を引いた”、自分でも信じられないといった表情をしている兼一の姿であった。

「（当たったよ……）」

兼一は、一応の構えを取り、右側面をこちらに向けながら、地面に片膝を付いている谷本を見る……谷本は、自身が気付かぬ間に兼一が何をしたのか、それが分からないと言った表情で、口下から一筋の血を流しながら、こちらに焦点は定まっではないが、まだ力が込められている眼を向けている。

一体、何が起こったのか……？

その謎は、谷本が行った野球の様なオーバースローの打撃と、両者が“前”へと出ていた事に秘密が隠されている。

谷本の打撃は、その威力は脅威に値するが、同時に、打つ際の“隙”を犠牲にしていると言える。

彼の打ち方は、全身を柔らかく使い、捻りや遠心力などを使った、

言わば“攻撃特化”の打撃方法なのだ。

打つ際に、両手の遠心力や体の捻り、足の運びを駆使しなければならぬために、どうしても瞬間的にはあるが、一度構えを解き、相手に“開いた体”を見せなくてはならない……これは、現代格闘技において、最も危険とされる瞬間を犠牲にした打ち方なのだ。

打撃を打つ際に、体を“開いてしまう”……そう、例えばボクシングなど言えば、フックなどが解りやすいだろう。

フックというのは、肘を九十度に曲げながら、相手の横つ面や横腹などを、足を回転させ体重移動シフトウェイトさせたり、腰を回して遠心力をつけたり、打つ際に開いた大胸筋を、一瞬にして閉じる動作を駆使したりして打ち抜くパンチだ。

だが、この時、もしも胸を開いた状態のまま、反対の腕で顔のガードもせずに打込んでしまったのなら、絶好のカウンターを打ち込めるスペースを、相手に晒す事となってしまうのだ。

実際、この様な小さな事ですら、ボクシングでもキックボクシングでも総合格闘技でも、勝敗に直結してしまう事があるのだ。

確かに、谷本の打撃は、それほどのリスクがあったとしても、魅力的な威力を誇っている。

だが兼一は、そのリスクを得るために、前へと出てくる谷本との間合いを潰しながら、相手が右腕を“頭の自重すら乗せ”振り降ろそうとした瞬間を狙って、右の膝蹴りを合わせたのだ。

“頭の自重すら乗せて振り下ろす”……つまり、頭を上半身ごと、下に降ろしたという事だ。

その最大限に増幅された右腕の威力は、確かに凄まじかったであろう……だが、兼一はそれを逆手に取り、自分から頭を下げてくる相手に対して、振り下ろされる右腕を背中を反らす事でクリーンヒットを避け、同時に“合わせる様にして”蹴り出した右の膝蹴りを、相手の勝手に下りてくる顎にカウンターで当てたのだ。

実際、兼一自身、上手く合わせられたからといって、この結果には驚いている所なのだ。



「（ただ直感で出しただけなのに……）」

そうかと、兼一は気付いた。

兼一のムエタイの師匠、アパチャイは普段から兼一に、“前に出てくる相手は、右膝によるテンカオ（膝蹴りのカウンター）”で倒せみたいなニュアンスの言葉を、散々教えてきているのだ。

それは、ミット打ちの際でも実戦され、既に体の一つの自然な動作として教え込まれているぐらいであった……だからこそ、今回の様な絶妙なカウンターを決められたのだらう。

この一撃は、普段は謙虚な兼一ですら、勝敗を決める打撃だと分かるものであった……が。

「貴様……ッ！」

「ッ!？」

目の前で膝を付いていた谷本が、フラフラとした足取りであったが、突然立ち上がって見せたのだ。

これに驚く兼一……当然だ、どんな格闘技でも、カウンターの膝を顎にもらえば、意識は愚か、顎の骨が砕けていても不思議ではないからだ。

だが、立ち上がって見せた谷本は、再び、先程と同じ構えを取り始めた。

その姿に、一瞬であったが狼狽する兼一は、フラフラの相手をに向って口を開いた。

「もうやめろ！ 綺麗に入ったのは、僕でも分かる！ これ以上は危ないぞ!？」

「うるせえッ！」

そう悪態を付くように言葉を吐いた谷本は、いまだ揺れる頭の中に渴を入れるために、一度頭を振り、再び兼一に鋭い視線を向けた。ダメージは、確かに残っている……だが、負けを認める程でもない！

谷本は自らを鼓舞するかのように、胸中でそう言い聞かせると、いまだ言う事を、なかなか受け付けてくれない足で、地面を蹴りだした。

前へと出るスピードは、先程までとは違う……理由は、確かにダメージのせいでもあるが、実際にはそうではない。

致命的なダメージを負った筈の谷本が向ってくる事に驚いていた兼一であったが、それどころではないと一瞬で頭を切り替え、先程同様、向ってくる谷本を迎え撃つために“前へと出る”。

だが今度は、この兼一の行動が裏目に出てしまった。

大振りの打撃が来る……そう無意識に当たりを付けてしまった兼一は、動作モーションのでかい相手の攻撃を狙う準備をしていた。

しかし来たのは、兼一の付けていた当たりとは真逆の“小さく鋭い右の突きであった”。

「なッ!?!」

谷本から投げ出されるように放たれた右の突きは、前に出ていた兼一の反応を軽く凌駕し、兼一の顔正面へと一直線に飛んでいった。ゴッ!!

と、兼一の鼻に、谷本の右拳が突き刺さる。

小さな突き……それでいて、全身を大きく使わない、先程とは違った無拳動ノイモーションの突きに、兼一は反応できなかった。

そして、その一撃を皮切りに、谷本の攻勢が始まる……。

小さく打たれた右の拳を引いたかと思えば、今度はその引きの強さを使って、左の鞭の様に振り回された腕刀が、遠心力をつけて飛んでくる。

この、どの格闘技とも違ったタイミングのコンビネーションを、

兼一は初撃のせいで噴出した鼻血を無視しながら、“ハの字”に構えていた腕を、空手の上段受けの様に少し上に挙げる事で防いで見せた。

谷本の左の前腕が、兼一の右の前腕に防がれる。

威力は動作を減らしたからといって、言わずもがな、相変わらず馬鹿げたものであったが、防げない事は無い……が、谷本のコンビネーションは、そこで終わりではなかった。

「むん！」

「！！！」

谷本が、兼一に打ち込んだ左の腕刀を、思いつきり弧を描く様に下から自身の後ろへと振り戻し、続くように右腕を大きく回しながら振りかぶった　　デカイのが来る！！

察知した瞬間、兼一はまともに受けるのは不味いと感じ、飛び退る様に後ろへと間合いを空けた。

だが、それを見越していたか……谷本も奥足を前へと送り出す様に地面を蹴りだしながら、前へと飛び込んできた。

間合いは潰された……故に兼一は、不本意であったが、両腕を頭の前でクロスさせ、上段の十字受けを慣行した。

谷本が振りかぶっていた右腕が、奥足であった右足が前に送られてくるのと同時に振り下ろされた。

ガッ！！　と、受け止めた筈の兼一であったが。

その上に掲げられた十字受けは、谷本が先程と同様、上半身だけではなく、頭の自重すら乗せた右の腕刀によって、無理矢理崩され……ズパアアアアアンツ！！！！

兼一の脳天に、谷本の全体重、全身の動き、全遠心力がかけられた“掌打”が打ち下ろされた。

脳天に直撃した、谷本の固めた右掌は、集束された打撃の衝撃を、兼一の頭頂部から背骨にかけてまで余す事無く伝えた。

右掌で兼一の脳天を打ち抜き、ほぼ左足を付けながらではあるが、前後開脚の様に地面に伏せる谷本……それほどの決めを生む、この異常とも言える勢いをつけた打撃は“鳥龍盤打”うりゅうばんだ。これを受けながらであったが、まともに喰らってしまった兼一は、頭を“前に鞭打つ”様に弾ませながら、地面に仰向けで倒れ付してしまった。

「……ちッ！」

追撃を……と思った谷本であったが、ほぼ前後開脚の様に伏せていた体を起こそうとした瞬間、ガクリと膝を折ってしまう。

どうやら、先程のダメージは、谷本に相当な無理を強いていたようであった……。

ともあれ、目の前で転がっている、いけすかない男は倒した。

後は、武術家として止めを刺すだけだ……。

しかし

「……つうく響いたあ」

「なにッ!？」

地面に仰向けで倒れ付していた筈の兼一が、打たれた脳天を摩りながら、ゆっくりとした動作で立ち上がったのだ……。

これに驚愕した谷本は、再び自分の体に鞭を入れながら、急いで構えを取った。

その様子に気付いた兼一が、構えを取り直しながら視線を谷本に向ける。

「とんでもなく重い一撃だったよ……くそ」

「(なんなんだコイツは、打たれ強いにも程があるぞ)」

たとえば、打撃を当てた回数が少ないとしても、自身が誇る打撃をまともに浴びて、ノーダメージとまではいかなくとも立ち上がってきた相手に、谷本は改めて警戒心を強めた。

されど、再び立ち上がってきた相手に、追撃をしないのは愚の骨頂。

故に、谷本は再び兼一へと飛び出していった。

「ッー！」

脳天に響くダメージは残っているものの、兼一は向ってくる相手に対して、集中力を緩める事はしない……それは、梁山泊の修行である意味で一番学んだ事でもあるからだ。

そして、本来なら既に倒れていても可笑しくはない、二人の激しい攻防が始まった。

谷本が、これまでの流れに逆らい、機先を制そうと出した蹴り技を兼一が防げば。

兼一が、谷本の特徴的な動きの隙を突いて出した、直線の軌道で弓を引く様に打つ中国拳法の直突きを、谷本は鞭の様な動きの流れで、その直突きを防ぎ、そのままの流れで攻撃に転じて見せた。

コマ送りではなく、一つの自然な流れとして行われていく攻防……それは、見るものが見れば、“かみ合った闘いをする”二人と感ずる事であろう。

すると兼一が、谷本の内から外に振り回す左の腕刀を、勢いに乗る前に右手で防ぎ、対の拳を、谷本の顔面にストレートで放った時、動きがあった。

自身に向って来る兼一の左の拳、谷本はそれを、防がれた腕とは反対の右手で、相手の打撃の外側に添える様にながら捌き、半身だった体を足を入れ替えながら、兼一の方へと向くように入れ替えた。

そして、入れ替わったままの勢いで、奥足である左足を相手側へ

と滑らせながら、兼一の打撃を捌いた右腕共々、体を回転させる。左のストレートを流されるように捌かれてしまった兼一は、体勢を前へと崩してしまふ……そこが、谷本の狙いであった。

谷本は、捌いたのと同時に、回転しながら前に出る事で得た遠心力と勢いを左の腕刀に乗せ、前へと体勢を崩した兼一の“後頭部”目掛け、その前腕を振り落した。

ガッ！ と、兼一の後頭部に谷本の左前腕が打ち込まれる。だが、これが本命では無かった……。

「死ね！！」

谷本が、兼一の後頭部に打ち込んだ左の腕を思いつきり後ろに引き、更なる回転を付けながら、後頭部を打たれた事で一瞬の停止を見せる兼一に、再び同じ後頭部に向けて、最大の遠心力を味方につけた右の“手刀”を打ち込む。

ガンッ！！ と、人の後頭部を手刀で打ち込む鈍い音が、校舎裏に響き渡った。

終わった……この一連の流れのような技は“倒発烏雷撃後脳”とつはつちようらいげきこうのうという名前で、相手の後頭部を遠心力をつけた打撃で強打するもので、常人なら、下手をすれば悲惨な結果を迎えてしまふ程の技なのだが、その決まり手とも言える筈の打撃を、兼一はたたらを踏みながらも、地面に足をつ張りながら耐え切つて見せた。

「つ……てえくくッ！」

耐え切つて見せた兼一に、“倒発烏雷撃後脳”とつはつちようらいげきこうのうを、体を入れ替えるように打ち込んだ谷本の表情が、先程同様、驚愕の色へと染まる。打たれた場所を手で摩りながら、兼一は再び谷本と向き直った。

「まさか、今の一撃を耐えるなんてな……強く柔軟に鍛えられた、

その首。鍛えてくれた師に感謝するんだな!!」

「打たれ強さなら、誰にも負けない!! でもなぜだ!? 今の一撃、僕を本気で殺す気だったな!？」

「ふん……」

「君は、ラグナレクの命令というだけで、人を殺すのか!？」

兼一の問いかけに、谷本はさもあらんと口を開いた。

「なら、お前は闘ってる最中に、相手の事を気遣いながら闘うのか? その程度の考えで武術を続けるなら、早々に辞める事だな」

言いながら、谷本は再び黙して構え直してしまう……。

取り付きようも無い……そう感じた兼一も、これ以上の会話は危険だと判断し、構えを正した。

再び、二人の間には大きな間合いが開いてしまう……。

ダメージ的に言えば、五分五分だが、もらった手数の方では兼一の方が上だ。

それは一目見てもハッキリと分かる程で、兼一の顔や受けのために使っていた前腕などは、痣や鼻血が見てとれていた。

だが二人には、何故か疲労の色は見えない……それどころか、こうして対峙する事によって、己の力量が底上げされていくかのようを感じるぐらいだ。

つまり……と、二人は胸の奥で同時に、この状況に答えを出した。コイツにだけは、負けたくない……。

二人は、この戦いで初めてジリジリと慎重に間合いの測り合いを始めた。

これまでとは違った、静かな展開……いつ何が、突然起きてしまつか分からない状況。

「兼一君!」

「…………えっ？」

そんな張り詰めた空気に、兼一と谷本以外の第三者の声が聞こえて来た。

兼一と谷本が、何かと視線を向ければ、そこには、浅黒い体にタンクトップとジャージのズボンを着た、白い長髪が特徴的な男…  
…武田一基が、校舎二階の窓から颯爽と飛び降りている所であった。

「武田さん！？」

「兼一君、来るのが遅れてしまつて、すまないね」

兼一と谷本の中に、何の問題も無く着地した武田は、兼一には振り返らず、得意の“デトロイトスタイル”を構えながら、谷本と相対した……。

「なぜ、ここに？」

突如現れた武田に、兼一が驚きながらも問いかける。

すると武田は、視線を谷本に向けたまま「部室で自習錬をしてたら、新島の奴が駆け込んできてね」と、軽く微笑みながら答えた。

「しかし、<sup>ハートミ</sup>隠者も兼一君には苦戦した様だね。折角のイケメンが、顎が少し腫れてるせいで台無しじゃない」

「……………」

軽口を叩きながら、挑発染みた言葉を吐く武田に、谷本は一瞬眼を強張らせるも、次の瞬間には、スツと構えを解いてしまった……。

「あれ、どうしたんだい？」

「…………興が削がれた」



そう吐き捨てるように言って、谷本は突然、兼一たちに背を向けてしまった……そして、そのまま、この場を立ち去ろうとする。

「待て！」

手袋を外しながら立ち去ろうとする谷本に、兼一が叫ぶように呼び止めようとするも、谷本はそのまま振り返りもせず、校舎裏から立ち去って行ってしまった。

「谷本君……」

谷本が去って行った方向を、兼一は、どこか思いつめる様な表情で、見つめるのであった。

ここは、数あるラグナレクのアジトの一つ……。

そこは、とある港の使われていない倉庫を、勝手に使用している場所で、薄暗いランプの明かりと、数箱の木箱が寂しく置かれていた。

外は既に日も落ち、夜闇と静かな波の音が相まって、とても涼しげな情景をなしていた。

だが、ラグナレクがアジトとして使っている倉庫の中では、二人の男が向き合っていた。

一人は、網眼鏡に厚手のコートが特徴的な、第四拳豪のロキ。

ロキは、倉庫に寂しく置かれた一つの木箱に腰をかける、もう一人の男に口を開く。

「まどろっこしいねえ……」

ロキは何とも言えない、相手を馬鹿にした様な口ぶり、木箱に腰をかける男に言葉を吐いた。

木箱に座っている男……それは、全身を覆う黒のローブで顔を隠した男。

手には黒い手袋をはめており、装飾としてローマ数字の？と刻まれた円形の金属が着けられている……第六拳豪の隠者、<sup>ハーミット</sup>谷本夏だ。

谷本は、兼一との戦いの直後、そのままラグナレクのアジトまで、直接足を運んでいたのだ。

「新白連合のツートップが着たからって、おたくだったら、すぐに片付けられたでしょうに？」

「……」

「なあ、聞いてんの？」

言いながら、ロキは薄暗い照明ランプで照らされた、<sup>ハーミット</sup>隠者のローブを避ける様に、顔を覗き込もうとする……そこで、隠者が今回負った顎の腫れを発見すると、ロキの口元がいやらしく吊り上った。

「まあ、苦戦したのは意外だったがな。次は本気で行ってくれるんだろう？」

「……」

どんなに喋りかけても、頭を俯かせたまま無言で座り続ける隠者に、ロキは「おーい、無視するなよ」と、相手を小馬鹿にするかの様に、相手の反応を楽しんでいた……。

「だけどさあ〜おたく、今回の件はやたらと中途半端だったんじゃない？」

「……」

「その辺のチンピラ使って、あんな見ても恥ずかしい芝居打ったのに、当初の予定を実行しようとしなかったし。白浜とかいう男も、引っ張った割に仕留め損なうし……何考えてたの、おたく？」

「……」

「あのさあ、“格闘マニア”なのもいいが、遊んで足元すくわれてちや、格好悪いにも程があるでしょ、ねえ？」

「……」

ひたすらに、茶化す様なロキの戯言を、黙しながら聞いている隠者は、ふと、視線を被っているフードの影越しであったが、倉庫の出入り口へと向けた。隠者が突然、俯かせていた頭を上げたことで、ロキもつられる様に視線を倉庫の出入り口へと向ける。

そこには、開かれた倉庫の出入り口で、夜闇を照らす月明かりを、身に纏っている白いスーツで反射させながら、一人の眼鏡をかけた黒髪の男が立っていた。

眼鏡をかけた黒髪の男が、二人の視線に気付くと、そのまま「ふ」と静かに笑いながら、歩を倉庫内へと進めていった。

男の手には、隠者がはめている手袋と同じ物のはめられている……だが、装飾された金属には、ローマ数字で？と刻まれていた。

その者は第一拳豪、朝宮龍斗あさみやりゅうと、通称オーディーンと呼ばれる、ラグナレクのトップを担う男だ。

オーディーンは、倉庫のほぼ真ん中に屯していた二人まで歩み寄ると、まずは隠者に向けて口を開いた。

「まずは、お疲れとっておこうか……」

「ああ」

先程までロキの戯言に無視を決め込んでいた隠者が、オーディーンの労いの言葉に、素っ気ないものであったが返事を返した……だが、その様子に、ロキは別に気にした様子は見せない。

何故なら、こんなどうでも良い事は、別に分かりきっていた事だからだ。

「それで、新白連合はどうなった？」

「……仕留め損ねた」

「そうか、なら、君にも謹慎処分を下すでしょう。その腫れた顎を見れば、君が苦戦をしてしまったのは火を見るよりも明らかだ」

「分かった」

何とも簡潔なやりとりには、夜の潮風で冷めていた倉庫内が、さらに冷え込みを増した……だが、そんなものは、この場にいる三人にとって、そこまで珍しい事でもない。

故に、伝える事だけを伝えて、オーディーンは視線を隠者から口キへと移した。

ハイミット  
「隠者が抜ける代わりに、ロキ、君の謹慎処分を解く事にする」

「へへ、そうかい」

「その代わりにと言っては何だが。バーサーカー第二拳豪の奴を少しだけ動かす、君は、その様子を見ている」

オーディーンの命令に、ロキはあからさまに嫌そうな態度で「はあ？俺がアイツのお守りをするのか？」と、コートのポケットに手をつっ込みながら、面倒臭そうに言葉を吐いた。

そのロキのふざけた様子に、オーディーンは、これと言って注意するなどの事はせず、ただ端的に、眼鏡越しの鋭い視線を向けるだけで、言外にロキを黙らせた。

オーディーンの無言の圧力プレッシャーに当てられたロキは、バンドナのせいで外からは見えないが、額に熱くも無いのに汗をかき、背筋には嫌な悪寒が走るのを感じた……実力が違いすぎる、ロキがこの時感じたのものは、この一言に集約できるくらいであった。

「君はただ起こった事を伝えれば、それで良いんだ、簡単な役割だろ？」

「……ちッ！」

先程までの余裕が嘘かの様に、ロキがオーディーンの命令に悪態を付きながら、無言の了承をした。

「なら、今日はこれで解散だ」……オーディーンはそう言う踵を返し、そのまま倉庫の出入り口から、悠々とアジトを後にした。残された二人も、その後続く形でアジトを後にする……。

その後、ハーミット隠者が無断でラグナレクから姿を消したのは。

この、次の日の事であった……。

## 第五十四話 ミックスアップ（後書き）

谷本の闘い方は難しい……今でも、上手く書けたか自身がありません。

詳しく書くこうとする度に、ゴツチャゴチャになっていくのが分かってしまって、かなり大変でした。

今回兼一が使ったテンカオは、ゲレゲレが良く、キックの方で練習するときに使っ得意技でもあります……まあ、若干描写は強引な感じでしたが。

あれって、前蹴り蹴るみたいにやると、真っ直ぐ入って気持ち良いんですね……あの腹筋や鳩尾、上手く入れれば脇腹などを打ち抜く感覚と来たらもう、病み付きになってしまう技ですよ。

まあ、この話しはこの辺にして……。

今回はキサラ対ツール戦の前編です。

今、後編を書いている真っ最中なんですが、正直間に合うか分かりません。

ですので、活動報告で書いた、まとめて投稿って言うのは、もしかしたら無理かもしれませ……ですが、やれるところまで頑張ってみます。

そして、そのキサラ対ツールが終われば、漸く、奴を書くことが出来ます。

長かった……ノシ

第五十五話　キサラ対ツール（前編）（前書き）

後編は、二万八千文字ちょいあるため、今日の12時に投稿します。  
予約って便利だね。

## 第五十五話 キサラ対トール（前編）

梁山泊が誇る、重厚な威圧感漂う門構えを……。  
今、一人の超人が、ゆるりと潜り抜けた

昨日、第六拳豪の隠者<sup>ハリーミット</sup>こと、谷本夏と、倒し倒されの接戦を繰り広げた兼一は、皆が良く寛ぐ広い居間で、美羽が入れてきたお茶を正座で啜っていた。

顔には痛々しい痣や腫れが未だ残ってはいるが、ダメージ自体は、岬越寺や馬剣星の治療のお陰で、後を引かずに済んでいた。

稽古は既に終わっている……。ちなみに、今日は先程まで兼一と共に組み手を行っていたキサラも、練習終わりの熱を冷まそうと、仲の良い美羽や兼一と共に、同じ場所で寛いでいる。

「なるほどねえ……。まさか、あの優男<sup>ハリーミット</sup>が隠者<sup>ハリーミット</sup>だったなんてね、私も初めて知ったよ」

「はい、僕も最初は信じられませんでしたから、仕方ないですよ」

いつもの格好で足を崩し、正座で座る兼一とお茶を啜りながら話を聞いているキサラ。

今は稽古で掻いた汗を引かせるために、トレードマークでもあるハンチングキャップは被っておらず、代わりに、白いタオルを首に掛けている。

向かいに座る兼一は、驚愕する訳でもなく、ただ意外そうに話を聞いているキサラに話を続ける。



「それに、昨日の夜、新島から教えてもらった内容では、演劇部に不良達をけしかけたのも、谷本君の自演だったみたいですし……」  
「ふ〜ん……ま、私がラグナレクに居た時も、あまり喋らないで何考えてんのか分かんない奴だったから、興味も無かったけど。随分とまどろっこしい奴だったみたいだね」

言いながら、キサラは美羽の淹れてきたお茶を、一気に飲み干す  
……「苦ッ……」

「でも、実力は完全に僕よりも上でした……あの時、武田さんが割り込んでこなかったら、きつと僕はやられていたと思います」  
「坊やよりも強い奴か、厄介だね……私ならまだしも、うちの面子で対抗出来る奴が見当たらないな。こりゃ、ちよつと補強を入れた方がいいか？」

深刻そうに話をする兼一に対して、キサラは「あ〜」と唸りながら、ラグナレクに対抗する手段に悩む……そんな中、台所からエプロンを外した美羽が「お二人して、何を話してるんですか？」と不思議そうな表情で近づいて来た。

現在、この居間には梁山泊の面々が、長老以外勢ぞろいしている……。  
岬越寺は一人で囲碁を、剣星はいつも通り大人の艶本を、アパチヤイとしぐれは共にオセロを、逆鬼は庭を眺めながら酒を引掻けていた。

兼一たちが座っている場所は、居間の中心……つまり、他の師匠たちにも話しは聞こえているという事なのだが、少し物騒な話しの割に、皆ひょうひょうと自分のリズムで、この時を過ごしている。  
つまり、達人達にとって、その程度の話しは特に食いつくものでもないのという事なのであろう。

兼一は、不思議そうに尋ねてきて、スッと自身とキサラが見える

位置に背筋の正して正座した美羽に、「いえ、昨日の事について、ちよつと……」と、どこか気まずそうに答えた。

「谷本さんの事ですか……」

美羽も、兼一の言葉を聞くと、どこか沈んだ面持ちになってしまふ。

まあ、当然と言えば当然かもしれない……これまで短期間とは言え、共に演劇の練習に汗を流した仲間が、突然、自身の親しい人間に対して牙を向き、実は敵だったという事が分かったのだ。

もともと心優しい彼女にとっては、裏切られたというよりも、“何故？”という疑問が先に出るのである。

「はい……彼は、僕を本当に殺す気で闘っていました。あんな強いプレッシャー威圧感は初めてでした……」

昨日、谷本に打ち込まれた後頭部に、再びあの時の感触を思い出させながら。

兼一は額に汗を掻くほど真剣な面持ちで、美羽に昨日の事を振り返ろうとする……だが、その時。

ス……と、居間の戸を開ける静かな音が、部屋に聞こえて来た。

瞬間

「武術家は己の命を本気で狙う者が出来て一人前じゃあああ……！！……！！」

地鳴りがする程の野太い豪声！！

その爆音とも称して良い大声に、部屋中の人間が、各々居間の入り口の方へ視線を向ける。

そこにいたのは“待たせたのう……！！”と言わんばかりに威圧感を

発する、金髪金髭の偉丈夫……いや、むしろ怪物と言っても過言では無いであろう。

緩く着こなす筈の着物は、己が鍛え上げた肉体を押さえきれずに肉体の筋を浮き彫りにさせ、まるで着込んだ道着の様にボロボロになっている。腕にはバンテージの代わりに包帯を巻き、その上には頑丈そうな籠手が嵌められ、もはや巨木のように太く発達した両脚にも、同じ様に包帯が巻かれていた。

そして、そのアパチャイにも劣らない大きさを誇る怪物は、部屋に入ってきて早々、太い金色の眉毛に隠された眼光を力強く光らせながら、豪快に部屋の者たちに向かって口を開いた。

「ハッ！！ ちょっと旅をしているうちに、いろいろあったようじやのうー！！」

居間の入り口で、ガハハと高笑いしそうな程に暑苦しい偉丈夫に、美羽は「あっ、おじいさま！！」と嬉しそうに目を見開かせた。

美羽のおじいさま……当然、この偉丈夫の名は“無敵超人”風林寺隼人である。

隼人の豪勢な登場に驚いた兼一は、逆鬼の後ろに隠れ、まだ隼人の事を数回しか見ていなかったキサラは、驚いた拍子に、そのまま猫のように身を屈めながら、部屋の隅で「フシャー！！」と相手を威嚇していた。しかし、この二人以外は“別に慣れている”と言外に語るように、皆、それぞれ旅から帰宅した隼人に対して口々に“おかえり”のニュアンスが含まれた言葉を送っていた。

「おや、長老、戻られましたか」

「おかえりなさいませ」

「なんでい、今ごろ旅から戻りやがって……」

「じじい、おみやげはー？」

皆の言葉に、隼人は力強く「うむ！！」と答えた。

「南の方は、どうでしたか？」

いつの間にか、隼人の後ろにいた美羽が。

隼人の着ていたボロボロの着物を脱がしていく……どうやら、この後、洗濯か捨てるか、どちらか決め手から処理するようであった。美羽から尋ねられた隼人が、キラキラと満足げに微笑みながら「なかなか手ごわかったわい！！」と、嬉しそうに答えた。

その様子に、神強な肉体に刻まれた傷跡に、逆鬼の後ろに隠れていた兼一は「（手強いつて、何をしてきたんだろ……？）」と、思っても、とても怖くて聞けない事を考えていた……キサラは、いまだに部屋の隅で「ゴロゴロゴロゴロ」と、隼人を威嚇していた。

その後、美羽が持ってきた、新しい着物を隼人は受け取り、素早く着替えると同時に、自分がいなかった間の話の話を聞こうと、兼一の対面に“ズシン”と胡坐を搔いた……。

兼一は、目の前に座る、無駄に揺ら揺らと鬨気のようなオーラを発している隼人に、巧拙丁寧に、これまでの出来事を話して行った

「ハハハハ！！」

話しを聞き終えた隼人が、また再び、居間中の空間が地鳴りを起こす程の高笑いを発し始めた。

「はい、おじいさま」

「ふむ、すまぬな」

だが、孫娘である美羽は、その高笑いなど気にもせず、胡坐を掻きながら、無駄に兼一に向けて威圧感を放ち続けている隼人に、兼一やキサラ同様、お茶の入った湯飲みを手渡す。  
手渡された湯飲みを、ズズズ……と啜りながら、隼人は喋り出した。

「そうかそうか、つまり、ついに兼ちゃんにも好敵手ライバルが出来たってわけじゃのう」

嬉しそうな筈のだが、周囲に放っている威圧感で、ただ敵つくしか見えない隼人に、兼一は「はあ……」と、困ったように返事をした。

「ライバルは良い！ うん、ライバルは己を高めてくれる！」

「ライバルは己の殻を破る棘！ 好敵手ライバルあつての武術家よ！」熱く語る隼人を他所に、兼一は隣りに正座で座っていた美羽に小声で「いつになくテンションが高いですね……？」と、尋ねると「旅から帰ってくると、暫くの間はこうですわ」という答えが帰って来た……一体、彼の旅に、どれほど胸が躍る体験があるのか、普通は興味が沸く所ではあるが、相手が相手なだけに、兼一はイマイチ、若い探究心というものが沸かなかつた。

すると、今まで無駄に暑苦しかった隼人が、突然“二カ！”と屈託の無い笑顔を浮かべ、湯飲みを持った手で、兼一に力強く指を指した。

「兼ちゃんよ！ これで漸く、お前さんも武術家の仲間入りという訳じゃ……！」

この良く分からない理屈に、兼一は「な、なんだってーっ!!」と大袈裟に驚いて見せた。

しかし、ただ驚いて見せただけなので、直ぐに表情をケロツと戻し、近くでビールを飲んでいた逆鬼に「逆鬼師匠？ 命を狙われるようなライバルっていますか？」と尋ねた……。

すると、逆鬼がビールを飲むのをやめ、その頑丈そうな顎に生えている無精髭を指でなぞりながら「うーくん」と、考え込む様子にして唸り始めた。

その光景に、兼一は多少ながらに不安を感じながら、大人しく答えを待っている……。「ひい・ふう……」突然、逆鬼が指折りに数を数え始めた。

「おいちゃんなんか、ざっと数えて五十人はいるネ」

「私は恨みを残さないように“うまくやってきた”が……まあ、何人かはいるな」

「23・24・25……あ、あいつは死んだっけ？」

それに続くように、他の師匠たちも口々に自分の命を狙う好敵手の数を、兼一に教え始めた……アパチャイなど、しぐれに足りない“指”を補ってもらっているぐらいだ。

まさに暗い世界の危険な話し……兼一は、その恐ろしさに耐え切れず「いやああ!!」と、武術家たちの世界に恐怖した。

「しかし命を狙われているとなると……」すると、今まで“上手くやって来た”岬越寺が、怯える兼一に……。「少し、修行を厳しくしなくては!!」と、更なる追い討ちをかけ始めた。

「そっいえば兼一君、たしかそろそろ夏休みだったよねえ？」

“ビクリ!”と、兼一の背筋ではなく、全身に悪寒が走った。

「ここは一つ、私が良い所に連れて行ってあげようではないか」

ニヤリと、不気味に微笑む岬越寺に、兼一は「い、いえ!! 僕、まだキサラさんと組み手をする約束がありますし!!」と、苦し紛れの“命乞い”をする……だが、その命乞いをする兼一を葬つたのは、意外にも、今まで部屋の隅で猫の様に怯えていたキサラであった。

「別に私の事は気にするなよ？」

あけらかんと言いう、いつの間にか兼一の後ろに“復帰”していたキサラに。

兼一は「そ、そんな事は出来ませんよ!? 約束を無下には出来ませんから!!」と、もはやキサラの足に縋りつく様な勢いを見せる。

「約束はもういいって、私もそろそろ頃合だと感じてた頃だし」

「……頃合？」

キサラの言葉に、兼一は頭上に“?”のマークを浮かべる。

「ここでの練習で十分力もつけたし、100kgオーバーの相手に対する対策も練れた……だから私は、明日の夜にでも、第七拳豪をボコしに行く。だから坊やも、気にせず岬越寺先生が言う良い所に行くといいさ」

そう言えば、彼女はそのため、梁山泊で稽古を積んでいたのだつたと、兼一は今更思い出した……無理も無い、そのせいで、兼一は更に必死で稽古に望まなくてはならなかったのだから。

そして兼一は、頼もしく、そして強気に微笑むキサラの言葉に感

動を覚えるのではなく、絶望という感情を抱くのであった。

時間が経つのは早いものだ……。

特に、“これをやる”と決めた時は、尚更早く感じるもの……。昨日、梁山泊で岬越寺が言う良い所に行くといっていた兼一を“見捨てた”キサラは、現在、自身がアジトとして使っている廃ビルの前で、キサラ隊の面々が集まるのを待っていた。

時刻は日が沈んだばかりの、街灯がつき始めた時間帯。

そんな中、廃ビルの前の広い空き地には、キサラが所有する隊の人間たちが、あらかた集まり、各々で好き勝手に談笑などをしていく……いよいよ、今日なのだ。

廃病院で亮平に敗れ、ラグナレクを脱会し、再スタートを切ってから、それほど時間も経っていないが、いよいよ、本格的に古巣のチームに対して牙を向くときが来たのだ……これは、奮わずにはいられないであろう。

故に、集まっているメンバーには、異様とも思える意気込みや熱気が感じられた。

それは宇喜田や古賀や白鳥といった、主力となるメンバーにも言えることで……さらに言えば、黙して空のドラム缶に腰掛けるキサラも、静かではあるが、人一倍の熱を帯びていた。

すると、廃ビル前の空き地に、キサラ隊のメンバーが終結し終わった。

「キサラ様、部隊の準備が整いました……」

「そうか」

メンバーの集合が完了すると、ドラム缶の上に腰掛けるキサラに對して、白鳥が畏まった態度で一礼をしながら、準備を終えた事を



報告する。

するとキサラは、腰掛けていたドラム缶の上から降り、着地音をほぼ発せずに、雑草などが入り混じる土の地面に両足を着けると、不規則に集まっているキサラ隊の面々に向って、口を開いた。

「お前達、これから言う事を、よく聞いておけ!!」

キサラの呼びかけに、キサラ隊の多くの男達は、一斉に雑談を止め、視線を廃ビルの入り口を背にしているキサラに向けた。

「こらから私らは、第七拳豪、トールの“喧嘩賭博場”へと殴り込みをかける!!」

檄のような号令を飛ばすようなキサラに、宇喜田などを中心とした激つい男達が続くように「応!!」と気合の入った相の声を、己を鼓舞するために入れてく。

「これは今までの小さな喧嘩とは違う!! ラグナレクに本気で喧嘩を売る行動だ!!」

『応!!』

「やる気のねえ奴は今すぐに隊を抜ける!! ある奴は、相手の人生を奪うほど徹底的に壊す気構えを持って!!」

その言葉で、もちろん隊の抜け出す者などいない……いるのは、後者の気構えを初めから持っていた『応!!』と答える、威勢のいい男達だけだ。

男達の気合のこもった返事を聞くと、キサラは「ふっ」と不敵に微笑み「よし!! なら出掛けるぞテムエら!!」と、出発の号令を掛けた。

もちろん、この号令にも男達は『応!!』と答え、そのまま片方

の裾をホットパンツの様にゴツソリと切り取ったジーンズのポケットに、両手を突っ込みながら、履いているブーツで地面を歩き出したキサラの直ぐ後ろに、ゾロゾロと行列を成しながら着いていく……。

廃ビルの空き地から道路へと、キサラが出ようとする……すると突然、空き地を囲っていたブロック塀の物陰から、人影が音も無く出て来た。

キサラは突然、出入り口付近を陣取った、その人影を見て、始めたばかりの隊の行進を片手で制した。

そしてキサラは、当然目の前で、自身と対峙する人影に視線を向ける……。

「何か用かい？ ハッキリ言っ、今お前に構っている暇はねえんだ、とつとと失せな」

「そう言っなつて、俺様が来たのは、別にお前達と事を構えようつて訳じゃねえんだからよう？」

「はあ……メンドい、お前のくだらない戯言なんて聞く気はねえよ、“新島”」

疲れたように、溜息を吐きながら、片手で帽子を押さえる仕草をするキサラは、そのまま後ろを振り返らず「行くよ！」と、目の前で入り口を偉そうに陣取る宇宙人、新島春男を無視しながら、空き地から道路へと出ようとする。

しかし、歩を進めようとしたキサラは、再び歩みを止めてしまった……。

すると、偉そうに不気味な微笑みを浮かべる新島の後ろに、多くの足音を鳴らしながら、先程の新島と同様、入り口の物陰から、団旗などを持った複数の男達が現れた。

掲げられた団旗には、新白連合の文字が大きく書かれていた。

その突然現れた新白連合の集団を見て、キサラを含め、隊の男達

も訝しげな視線を送った。

「なんだい？ やっぱり、やる気なのかい？」

既に新白連合の集団が現れた時点で、その鋭く夜目が利きそうな猫目で敵意を露にしていたキサラは、今にも目の前にいる新島に飛びかかって行きそうな張り詰めた空気を、周囲に漂わせ始めた。

だが「おいおい、別に事を構えるつもりは無いつて言ったじゃねえか？」と、キサラと対峙している新島は、おどける様にして手を振って見せた。

「じゃあ何だつてんだい？ 私らは、これから第七拳豪のところに行かなきゃならないんだ。つまらない理由だったら、容赦なく潰すよ？」

「へへへ、そんな怖いこと言うなって……俺様がここに来た理由は、お前等をお願いしに来たのさ、“俺様達も、その件に嘔ませろ”ってな」

「ああ？」と、キサラは若干キレていそうな態度を取りながら、不気味というより、もはや邪悪な笑みを浮かべる新島を上から目線で見下ろした……。

「だからようゝ俺様たちも、その第七拳豪のところに行くって言っ  
てんだよ。数は多い方が良いだろ？」

「お前は何を勘違いしてんだ？ 私たち……いや、私は、拳豪に一  
対一<sup>イマン</sup>仕掛けに行くんだぞ？ 数が多くたって、意味ねえだろ」

このキサラの言葉に、新島は「へ？」と驚いた様な表情を見せる。

「なら、なんで自分の部下全員を連れて行くんだよ？」

「これは立会人兼、折角のタイマン一対一を邪魔されないようにする保健だ。別にデカイ乱闘仕掛けようって訳じゃねえよ」

「だって、さつき殴り込みに行くって……」

「実質、変わんねえだろ？ 一対一タイマンも殴り込みも」

新島の表情から、落胆の色が漏れ出て来た……。

どうやら、今回のキサラたちの動きに、何らかの理由で便乗しようとしていたらしい……だが、それはキサラ本人から出て来た言葉で……いや、無駄にはならなかったようだ。

新島が誇る脳ブレインの回転力は他の追隨を許さない……故に、新島の表情に出ていた落胆の色は一瞬にして払拭され、次の思惑を実行しようとして動き出した。

「だったら俺様たちも、その保健になつてやるよ」

「はあ？ いらねえよ」

「そんなこと言うなつて……実際、ラグナレクにはロキつて言う、頭の切れる奴も居るんだ。もしかしたら、今回の事は察知されてるかもしれないだろ？ そんな時、第七拳豪の他に拳豪を送り込まれたら、自分の兵隊達だけで何とか出来ると思うか？」

「別に気にしないよ、来るなら私が潰すだけさ」

絶対的な自信……というより、もはや当たり前前の様に豪語するキサラ。

そして、そんなキサラを信じる、後ろに控えているメンバー達も、無言でキサラの言葉に同意していた。

これは、取り付きようも無いか……揺るがない相手を見て、新島の脳に、一瞬諦めの文字が過ぎった。

だが、その時、新白連合の陣営から一人の男が、キサラと新島の間に割って入る様にして現れた。

その者は、浅黒い肌、白の長髪が特徴的な、体格の良い青年で。

詰襟の上着に、ジーンズを履き、両手には準備万端と言外で語る様に、既に白のバンテージが巻かれていた……その青年は、やや垂れ目ではあるが整った顔立ちで爽やかに微笑んでいる。

元ラグナレクでキサラ隊の技の三人衆、“突きの武田”と呼ばれた男、武田一基だ。

「まゝまあ、別に邪険にしなくてもいいじゃないかい？　こちらは素直に加勢するって言ってるんだし」

「武田か……お前、よくもまあ抜け抜けと、私の前に出てこれたものだねえ」

武田の顔を見た瞬間、キサラが纏う空気が張り詰めたものへと変わっていく……。

既にやる気だ……キサラの変化を逸早く察知した武田は、頬に一筋の冷や汗を流しながらも、務めて平静を保ちながら、元古巣の上司である相手と対峙した。

「そんなにピリピリしなくても、もうお互いにラグナレクからは脱会した身じゃない？」

「勝手に私の部隊から出といて良く言う……それで？　今は裏切つて、新白連合にいるお前が何の用だ？」

「何の用も何も、さっき新島の奴が言った通りさ、僕達も加勢するよ」

「ざけてんのか……？」

そう言うと、キサラは後ろに控えるメンバーに向って、振り向かずに手を振るだけのサインを出す。

すると、多くの男達の中から、二人の対照的な体格の男達が出て来た。

一人はツーブロックの金髪に、サングラスをかけた、ボクサーで

ある武田よりも、一回り以上は体格の良い男……もう一人は、細身で背は小さいが、この中では一番表情に余裕の笑みを浮かべている青年で、短髪の黒髪には柄物のバンドナが巻かれている。

前者の男の名前は宇喜田孝造、投げの宇喜田と呼ばれていた男で、後者は古賀太一、蹴りの古賀と呼ばれていた、子供の様な笑みを浮かべる青年だ。

二人が武田からキサラを遮るようにして立つと、まずは宇喜田が口を開いた。

「久しぶりだなあ、武田？ まあ、まだあれから少ししか経っていないがな……」

「そういう君こそ、鬼島にやられた鼻は、もう治った様だね？」

「まあな、“あそこ”の剣星とか言うオッサンの薬がどう出来てるのか知らねえが、見ての通りよ」

「へへへ」と、昔の同僚に向って笑みを浮かべる宇喜田であったが、そのサングラス越しに見える視線は、既にキサラ同様、一瞬で相手を潰そうとしている眼をしていた。

そして、今度はハーフパンツ姿の古賀が口を開いた。

「悪いけど僕は別に、お前なんか好きでもなかったから、今すぐに喧嘩しても構わないよ」

「君も怪我は、もう治っている様だね……」

ストレートに無邪気な笑みを浮かべながら挑発してくる古賀に、武田は苦笑を漏らさずにはいられなかった。だが古賀は、そんな武田など無視しながら「ねえキサラ様、早く武田なんかやつちやいましようよ〜！」と、後ろを振り向き、武田を指差しながらキサラに指示を仰いでいた。

すると、雲行きが怪しくなってきたのを察知した新島が、武田の

後ろから「ちょ、ちょっと待った！」と焦った風に声を発した。

「今、俺様たちがやりあっても、何のメリットも無いだろう？ お前らも、これから第七拳豪の所に行くわけだからさあー！」

その新島の言葉に、チームの頭であるキサラが答えようとすると、キサラの後ろから「キサラ様、失礼します」と言って、自身の右腕でもある白鳥が、静かに耳打ちをしてきた。

「私は、気は進みませんが、あの者の言う通りかと思っています……」

「なに？」白鳥の小声に、キサラも小声で答えるが、どうやら元々機嫌が悪かったのを、更に損ねてしまった様だ。

だが、白鳥も手馴れたもの……そんなキサラの雰囲気など気にしないかの様に、自分の考えを述べていく。

「キサラ様……今回の件、私達が第七拳豪の下へ向う情報が漏れているのは、目の前に嗅ぎ付けてきた奴もいる事から、既に確実と云えます。ここはロキの手口などからすると、何らかの罠が、これから向う場所に仕掛けられていると察するのが妥当でしょう」

「よって、私は新白連合との共闘をお勧めします……実際、口惜しいですが、私達だけでは、拳豪には対処できません。戦力も、鬼島との戦いで出た怪我人のせいで、だいぶ弱まっていますし……」

白鳥の進言に、機嫌の悪かったキサラが考え込む仕草を取る……。事実、自分の部隊の戦力低下は目に見えて露骨だ……。幸い脱会者は、奇跡的にいまだゼロだが、怪我人の方がネックになっているせいで、人数的には当時の半分にも満たない。

そして、確りと対峙すれば、拳豪の一人や二人、連戦しても渡り合えるとキサラは自信を持って言えるのだが、もし、本当に他の拳豪が来ていたせいで、これ以上の怪我人が出る事は望ましくない。考えれば考えるほど、選択の余地が無くなっていく状況に、キサラは苛々を募らせていく……。

そして、黙考し続けること数分……キサラが徐に歩を進め始めた。「うん？」

その様子に、三人の男を挟んではあるが、様子を観察していた新島が訝しげな視線を向け、焦ったように口を開いた。

「おい！ まだ話しがついてねえだろ？」

新島の呼び止めの声に、キサラは返事を返さない……。既にキサラは新島を素通りし、入り口を出ている……つまり、新白連合の面子の前に立っているという事だ。

すると、新白連合の旗持ちの男が、多くの男達を前にするキサラの前へと立った。

「まだ総督の話が終わってないじゃろ？」

昔ながらの学生帽をザンバラな黒髪の上に被り、詰襟の学ランの首下を開けた、どこか古い感じのする旗持ちは、目の前に立つ、キサラを見下ろしながら、顎で新島がいる方を指す……。

瞬間、旗持ちが両手で大事そうに持っていた新白連合の旗がへし折れ、旗持ちの男の首が“くの字に折れ曲がった”。

「ッ！？」



この光景に、事態を黙って見ていた周囲の人間が、一斉に息を呑みながら眼を見開いた。

団旗をへし折られ、地面へと体を硬直させながら、横倒しにアスファルトの地面へと倒れる旗持ちの男……見れば、いつの間にかにキサラは“振り抜いていた左足”を地面に何事も無かった様に着地させていた。

いつ蹴った……そして、いつ引いた？

古賀・宇喜田・武田ですら、今キサラが、いつ旗持ちの男を蹴り抜いたのか確認出来ないでいた。

倒れ方から察するに、おそらく“左の廻し蹴り”なのだが……ブツという、凶器にもなる重りを履いていて、そこまで速く蹴れるものなのか？

だが、現実にはキサラは、不意をついたとは言え、周囲の人間に気づかれる事無く、左廻し蹴りを、旗持ちの男の首へと蹴り込んでいく……証拠に、旗持ちの男の左側の首には、キサラが蹴り込んだ跡だと思える、赤くなった打撃痕が見えた。

おそらく、足の甲を当てたのではなく、脛で蹴り抜いたのだろうと、この場にいた者達の中で唯一、武田が当たりを付けていた。

「お、おい……松井が」

「ど、どうなってるんだ……？」

仲間をやられた新白連合陣営から、どよめきにも似た戸惑いの声が聞こえて来た。

仲間をやられた……だが、現状を把握するどころか、目の前の一人の女に、かかって行く気が起きない。

新白連合の面々は、その圧倒的な元拳豪であるキサラの実力に、足を動かさないでいた……。

「（キサラの奴……前よりも格段に強くなってやがる）」

「（ヒュ〜、やるねえ）」

この状況に逸早く戻った、新島と武田が、キサラの実力に改めて舌を巻く……。

すると、松井と呼ばれた旗持ちの男を蹴り飛ばしたキサラが、再び徐に歩を進め始めた。

多くの男達に構わず、前へと直進するキサラ……そして、キサラが進む道を開けようと、焦りながらも左右に道を譲る新白連合の男達。

ここに、動かし難い格の差が生まれた……。

集団の中頃まで進むと、キサラが急に足を止めた……。

「何をしているんだい！！ さっさと行くぞ、お前達！！」

その言葉は、いまだ廃ビルの入り口から出てこなかった、自身の部隊に向けられていた。

キサラから発せられた指示に、キサラ隊の面々は、さも当たり前のように、新白連合を無視しながら、前へと進む頭へリーダーと着いていく……武田と対峙していた二人も、武田に一言かけながら、通り過ぎて行った。

キサラ隊の面々が全員、新白連合の連中を通り過ぎた時、再びキサラが進めていた足を止めた。

そして、キサラは振り向かず前を向いたまま、後ろで立ちすくんでいる新白連合に向って、声を張り上げた。

「お前らも来るんだろ、だったら勝手について来い！！ ただし、余計な真似したら、その旗持ちみたいに蹴り潰す！！」

言つと、キサラはそのまま歩を進めるのを再開する………続いて、キサラ隊の面々も歩き出した。

キサラの言葉に、最初は戸惑っていた新白連合の男達であったが、次第にキサラ隊の後に着いて行く様に、ゾロゾロと歩を進め始めた。

「あれ……あれ？」

その光景に、自分の部隊を取られた様な気分には陥る新島……。すると、新島を追い越した武田が、すれ違い様に声をかけた。

「どうやら、仲間心がキサラちゃんに傾いているみたいじゃない  
い」

そのまま、武田も軽快な足取りで、男達の集団へと着いて行った……。

一人取り残された新島は……。「まずい……非常にまずいぞ！  
これは、何とか切欠を掴まねば、部隊を取られかねない！！何か、  
何か策を練らねば！！」と、新白連合始まって以来の危機に、  
脳<sup>ブレイン</sup>をフル稼働させるのであった。

第五十五話 キサラ対トール（前編）（後書き）

今日の12時に、後編を投稿します。

第五十六話

キサラ対トール(後編)(前書き)

後編です、どうぞ。

## 第五十六話　キサラ対トール（後編）

雑居ビルが立ち並ぶ細い路地に、その入り口はある……。

“喧嘩賭博場”、第七拳豪が仕切っているとされる、若者達の過激な娯楽場に入るためには、このビルとビルの間にある、隙間の様な道を通らなければならない。

その場所は、夜の暗さも相まって、とても女性一人を歩かせてはいけない雰囲気、露骨に漂っていた……いわば都会の隙間と言っやつだ。

「辛気臭いとこだこと……」

しかし、その様な暗い空間でも、女性である筈のキサラは物怖じ一つしない……まあ、彼女の場合は、既に慣れっこな空間でもあるから、特に問題でもないのだろう。

現在、キサラは多くの部下や新白連合の男達を後ろに、この細く暗い空間の空気を懐かしむように眺めていた。

キサラの見据える視線には、当然、雑居ビルの隙間に出来た道が映っている。

このまま真っ直ぐ進むと、触りたくも無い程に錆や汚れが目立つ室外機が置かれてある突き当たりやぶち当たり、左に曲がれば交通量や人だかりの多い、夜闇すら照らす明るさのある道路へと出られる……だが、キサラの目的地は、その視線の直線状途中の左手にある脇道だ。

そこからは、薄っすらと照明器具による人工的な明かりが漏れている……そして、恐らく相当盛り上がっているであろう、暴力に餓えた男達の怒声に似た声も。

それだけなら別に構わない……喧嘩の様な荒事は、キサラにとっ

て大好物とも言えるものなのだから。

だがキサラは、自身の前に広がる光景に、鼻を摘みたくなくなる程の嫌悪感しか抱けなかった。

ギリギリ、ひと二人分が肩を並べて歩けるぐらいしかない、狭い幅の道……その地面には、様々なゴミや、キサラが言葉に出したくない物などが、所々に散乱しており。

飲みかけのペットボトルや、食べかけのお菓子などは当たり前……他にはキサラが目を通した事も無いポルノ雑誌や、暴走族御用達の一部の者にしか需要の無い雑誌、週刊誌などが雨などに濡れてロボロの状態で捨てられていた。

しかし……しかしだ、まだそれだけなら、キサラでも「こんなもんは普通だよ」と、余裕のある態度を取れる。

なら、なぜ嫌悪感を抱いているのか……？

それは、道端にどけられた様に、壁際に追いやられていた物で……ちよつと特殊な形の、風船にしては薄く細長い、先端が少しだけポツコリと出たゴムであった。それも使用済みの。

おそらく、ここを通る若者ではなく、向かいの窓から捨てられた物だとは思うが、それにしても、意外と初心な性格であるキサラにとっては、鼻をつんざく様な嫌悪感を抱くには十分な物であった。

「たく……」

ここに来る前の一件で、既に機嫌が悪かったキサラの機嫌が、もはや手の着けられない所まで沈んでいく……。

すると、馬鹿丸出しの処理をする無責任な男に対して、更なる嫌悪感を抱いていたキサラの前に、どこから入ってきたのか……一匹の三毛猫が現れた。

こんな汚い空間で、おそらくメスであろう一匹の三毛猫が、トコトコと一直線に、ある所へと歩いていく。

自他に認める無類の猫好きであるキサラは、その一匹の三毛猫の

出現に、手の着けようが無かった機嫌が少しだけ上向きに上昇したのを、心の奥底で感じていた。

可愛いなあ……もう。

後ろに控えさせていたお陰で、キサラの綻んだ表情は部下に見られずに済んだが、次の瞬間には、その綻んだ表情が驚愕の色へと変わっていた。

なんと、一匹で四足を進めていたメスの三毛猫が、先程キサラが嫌悪感を抱いていた物が落ちていた場所へと、鼻をひくつかせながら近づいていたのだ。

瞬間、今までポケットに両手を突っ込み、ただダルそうに立っていたキサラが動いた。

そのスピードは、後ろに控えていた部下たちも驚いたぐらいで、一瞬の内に、大人の風船へと近づいていた猫を両手で捕縛していた。

「コラッ！ 変なゴミに近づいちゃダメだろ！」

両手で三毛猫の脇を抱えるキサラは、躡を与えるように、三毛猫の夜目が利いた眼を見つめた。

だが、首輪の無い野良の三毛猫にしては、おとなしく自身に抱えられている姿に、キサラの勝気な顔立ちが綻びそうになる……が、それは寸でのところで抑えられた様だ。

本来なら、この猫を空き地などに連れて行って、餌などで釣りながら、心行くまで可愛がるのだが、今はそれどころではない……踏ん切りを付けたキサラは、その抱えていた猫を、部下の一人に手渡すと「どっかに置いて来い」と、務めて冷たい指示を出した。

心の中で、部下に連れて行かれる猫に後ろ髪を引かれながらも、キサラは再度、これから向う“喧嘩賭博場”の入り口を見た。

「やっ……」



相変わらず、品の無い罵声や怒声が聞こえてくる道幅の狭い通路……。  
そこから漏れ出る明かりや、門番の様な見張り二人を見つけると、先程まで不機嫌であったキサラの口端が、不敵に吊り上る……。

「楽しい楽しい……喧嘩賭博の始まりってか？」

後ろに控えている部下に聞こえるか聞こえないかで呟かれた言葉は、とても愉しそうで、この薄暗くアンダーグラウンドな空間には、とても相応しい言葉であった。

そして、集団の先頭であるキサラは、これから始まる刺激的な出来事に胸を躍らせながら、両手をポケットに入れて、ゆっくりと歩を進め始める……。

先程から人工的な明かりを漏れ出させていた脇道は、思いのほか明るく、入った瞬間に、門番である見張り役の二人に、姿を確認される程であった。

「……うん？ 女か」

「そこで止まれ、誰の紹介だ？」

“喧嘩賭博場”の入り口へと入って来たばかりのキサラに、門番の二人の男が、手に持っていた棒を互いにクロスさせ、会場の入り口を塞ぐ。

すると、それに構わず歩を進めていたキサラが、ポケットから右手を出し、被っているハンチングキャップを上には掻き揚げる様にして、不敵に……愉しそうに微笑んでいる妖艶な表情を、門番の二人に向けた。

「紹介？ んなメンドイ制度があるのか、この遊び場は……」

「な、何だとツー！」

挑発的なキサラの態度に、一人の門番が憤慨する……しかし、もう一人の門番が、近づいてくるキサラを見ながら、持っている棒を震わせ、体を硬直させていた。

そして、一生懸命に張っていた抑制の糸が、プツリと切られた

「キ、キサラだッ！！ 元拳豪のキサラだああ！！」  
「何だとッ！？」

爆ぜるように叫び出した仲間に、もう一人の門番は驚いた様に気を取られてしまう……。

すると、悠然と歩みを止めないキサラの背後から、二つの影が飛び出してきた。

その影は、元拳豪という畏怖の存在に気を取られている門番二人に素早く接近すると、一つの影が一人を担当するように分かれた。

まず、キサラから見て右に立っていた門番が、一つの影が踏み込みと共に振り抜いた右のアップパーに、下から顎を打ち上げられ、そのまま足から地面に沈み込むように意識を手放した。

次に、対の影が怯える門番に向けて、前足である右足で、下から鋭角に蹴り上げる様に振り切ったハイキックの足の甲に、左側の顎を蹴り抜かれ、こちらにもキサラから見て、左斜めに打ち上げられるようにして、隣にあったビルの壁面に右頭頂部を激突させながら、地面へとズルズルと壁に寄りかかりながら意識を手放した。

「へえ〜やるようになったじゃないか、二人とも」  
「まあ、これくらいならアップにもならないね〜」

キサラが感心した様に、二つの影であった、二人の男に口を開く。二つの影の前者であった武田は、既に何事も無かったかのように

キサラへと振り向きながら、爽やかかつ気障な微笑みを浮かべる……後者であった古賀は、倒れ付した門番を見下ろしながら「大したことないな」と、詰まらなそうに両手を後頭部で組んでいた。

その緊張感の無い様子に、キサラは尚、愉しそうな表情を愉快に浮かばせながら「なら、そのまま“遊び場”に遊びにいきな!! 久しぶりの大喧嘩だ、トールの奴が出てくるまで、中にいる奴等全員ぶちのめせ!!」

「りょうか!!」

「久しぶりに、“左”の大盤振る舞いをしようじゃなく!!」

「お、おい待て!! 俺を置いていくな!!」

キサラの号令に、最初に前へと出ていた二人の他にも、後ろから宇喜田を中心としたキサラ隊の面々が、雑居ビルの配置でたまたま出来た広間に開かれた“喧嘩賭博場”へと雪崩れ込んでいった。

当然、突如雪崩れ込んできた敵対勢力に、それまで罵声や怒声などを張り上げていた若者達が、一斉に戦々恐々といった混乱に陥った。

そして、自身の部隊に少し遅れて、キサラが“喧嘩賭博場”へ悠々と足を踏み入れた。

「お〜お〜、久しぶりだから派手に暴れてるねえ」

可笑しそうに笑うキサラ……。

その視線の先には、正方形に広く開いた広間の中央に設置されている、正方形の様な八角形で深く掘り込まれ、周りを鉄板の様な物で加工した、まるで落とし穴の様な特設リングを中心に展開される、自身の部隊+武田の一方的な大乱闘が繰り広げられていた。

中央に設置された特設リングを中心に、四方に設置されたドラム缶を松明代わりに使った炎で照らされる大乱闘は、正に祭りと言っ

ても過言ではない痛快な風景で、キサラの闘争本能をさらに鼓舞させる。

すると……キサラの後ろから、新白連合の総督である新島春男が、眼光鋭く輝かせるキサラに、達観した面持ちで声をかけてきた。

「ずいぶん楽しそうだが、一対一タイムマンじゃなかったのかよ?」

新島の問いかけに、キサラは振り向かずに答える。

「別に、これはただの、トールの奴を炙り出すための余興さ……武田は勝手に行っちまったが、お前らは混ざらないのかい?」

「別に混ざる必要なんてないだろ?」

「もう十分事足りてる」という言葉は、あえて言わなかった……というより、別に分かりきった事など言たつてしようがない。

大混乱が続く喧嘩賭博場へと、新白連合の男達と入って来た新島は、まず、周囲の状況……もとい、この広間を観察した。

中央の特設リングは、別に言わなくても目立つので視界には入れず……まず新島の目に入ったのは、正方形の広間の四方の壁面に取り付けられたランプだ。

このランプが、先程から人工的な明かりを灯していたのだろう……それにしても、電気はビルからパクって居るのか?

疑問に思った新島であったが、視線を次なる物へと移していく。次に見つけたのは、入り口近くの壁際に立てられた、木製の看板だ……その木製の看板には、大きな紙で番付の様なもの書かれており、あれを使って賭博をやっていたのだなど、新島は興味も無く視線を次に移した。

しかし、眼を見渡しても、他にどこも興味を引くものなど無い……あるとすれば、入り口とは対面にある、ビルの壁面に空けられた大きな穴だ。

まあ、これも特には興味は無い……おそらく、この賭博場を仕切っているトールは、あそこに居座っているのであると、新島は一瞬で看破したからだ。

そして、視線を元に戻した……。

賭博場の入り口は、正方形の広間の隅っこにある。

故に新島が向いている方向は、特設リングを向くように、斜めに視線を向けている。

見れども見れども、一方的な大乱闘……それを楽しそうに眺めるキサラ……恐らく、目の前の光景に影響され、自分の番が来るのを、今か今かと待ち構えているのであろう。

良く、これから自分の体重より二倍以上重い相手と闘うというのに、そんな楽しそうな表情が出来る物だと、新島はなかば格闘家というものを呆れながらに再認識した。

「何ごとだ!!」

すると、広間で繰り広げられている大乱闘に漸く気付いたのか、入り口とは対面にあった壁面の穴から、一人の巨漢の男が現れた……。

漸く出てきたかと、新島は視線を巨漢に向けた。

キサラは既に、現れた巨漢の男に、闘志剥き出しの視線を向けていた。

「トールさん!! キサラ隊の連中と、新白連合の連中が突然雪崩れ込んできて!!」

「ええい落ち着け!! キサラ隊と新白連合がどうした!! そんな弱小勢力、俺が全員叩き潰してやる!!」

現れた象徴に縋りつくように、賭博場にいた一人の下っ端が、第七拳豪トールに状況を説明する。

しかし、突然の強襲に憤怒したトールは、勢いそのままに、怒りの矛先を、自身の縄張りを荒らす者達へと向けようとした……が。

「トール！！ お前は私が相手してやるよ！！」  
「む？」

トールが、その履いている雪駄で、重々しい足を進めようとする、どこからか以前聞いた事のある女の声が出てきた。

この大乱闘の中で、わざわざ拳豪相手を指名してきた者を確認してやろうと、トールは視線を声のして来た方へと向ける……。

「ほう……裏切り者のキササか」  
「久しぶりだねえ」

声のして来た方を向けば、中央に設置されている特設リングの前で、ハンチングキャップを被ったキササが、その鋭い猫目をトールに向けながら、不敵に微笑んでいた。

「お前達！！ 一旦攻撃を止めな！！」

キササの号令に、乱闘に参加していた白鳥が即座に反応し「攻撃を一旦止める！！」と、他の者達にも号令を掛けた……。

それに続くように、トールも自身の部下たちに「お前等は下がっている！！」と、野太い声を張らせながら号令を掛けた。

すると、これまでの喧騒が嘘の様に、賭博場の広間がシンと静まり返った……。

皆、トールと、特設リングを背にしているキササの二人に視線を向ける。

「トール、私はアンタと一対一タイムンを張るために、ここに来た……受け

てくれるかい？」

「ふん！ いきなり奇襲を仕掛けてくるような女を、信用できるか！！」

「なんだい、デカイ図体の割に、意外と器がちっちゃいんだねえ」

「言っている……まず、一対一を張りたいのなら、それなりの礼節というものがあるだろう」

「そうかい、なら、これならどうだい？」

「！？」

言つとキサラは、自身が背にしていた落とし穴の様な特設リングに、ツールから振り返りながら飛び込んだ……。

「ふん……入ってみると、案外広いもんだねえ」と、特設リングの中から、若干興味なさげな、キサラの声が聞こえて来た。

するとツールが、特設リングへと自ら入ったキサラを見るために、その自重を支えるために鍛えられた太い足を、特設リングの方へと進め始める……。

「地面も鉄板……壁も鉄板、随分とまあ頑張ったもんだ」

履いているブーツで地面をコツコツと蹴り、片手をポケットに入れたまま、反対の手で角を削った正方形の形をした空間の壁を確認するキサラ。

「キサラよ、お前は何を考えているんだ？」

上から見下ろす形で、リングチェックをしているキサラに、ツールが真剣な顔つきで問いかける。

「さっき言っただろ？ 私と一対一タイムンを張ってくれれば、それで良い」

キサラはトールを見上げる形で、先程までリングチェックのためにウロウロしていた足を止め、リングの中央で、さも当然の様にトールの問いかけに答えた。

この答えに、トールは暫く黙考をする……。

静かに、この空間にいる誰かの息を飲む音が聞こえた……。

キサラを見下ろしながら、黙考を続けるトールを、キサラは黙って見上げ続ける。

すると、意を決したトールが、力士の着物に包まれた自身の大きな腹を“パン！”と叩きながら、口を開いた。

「よし、その喧嘩買った!!！」

瞬間、周囲にいた男達から、どよめきの声が聞こえて来た。

潔く堂々と喧嘩を売ったキサラに、それを男らしく買った巨漢の男トール……聞こえただけなら、清々しいほどの若者達のだが、問題は性別や体格差にある。

「誰か梯子を持って来い!!」トールの命令に、数人の男達が反応し、どこかから大きな梯子を持ち出してきた……。

それを、トールが特設リングに降りるために設置し、まずは突然の事態にどうして良いか分からなくなっていた、先程まで喧嘩賭博に参加していた二人の闘士を先に出させる。

そして、トールがゆっくりと、梯子を体重で壊さぬように、一段一段リングへと降りていった。

トールが特設リングへと降り立つと、周辺にいる男達から発せられていたどよめきが、更に大きくなった。

「おい……流石に、あの差はやばくないか？」

「殆ど倍以上あるぞ……」

「いくら拳豪同士だからって、あれは無茶だろう」



トールを下ろすために架けられていた梯子が、両者の逃亡を防ぐために上へと引き上げられるのを確認すると、トールはそのまま、闘いの場の中央で佇むキサラへと歩を進めた。

「鬼島の奴に負けて、裏切り者になったお前が、まさかワシに一对一を挑んでくるとはのう」

「意外でも無いだろう、敵対してんだ」

「それもそうかのう」

二人が同じ地面で対峙したとしても、その体格差は火を見るよりも明らか……。

見下げるトール、見上げるキサラ、変わらない構図に、周囲の様子はさらに広がる……。

それは、敵味方関係なくだ。

「この鋼鉄の“土俵”に自分から降り、ワシを指名してくるのは、キサラ……貴様が初めてだぞ？」

「だったら、今まで戦ってきた奴等は、相当弱い奴だったんだな」

相手を馬鹿にするような笑み。

だが、トールはそんな挑発には乗らずに、特設リングではなく、鋼鉄の土俵と呼んだ闘う場の壁際へと、キサラから振り返り、歩いて行ってしまった。

対峙する当の本人たちよりも、上から観戦する者達の方が冷や汗をかく状況……。

「おい新島、キサラちゃんは、あの巨体に勝算はあるのかい？」

「いや、知らない……とにかく見てるしか無いだろ、ああなった馬鹿共に付き合ったら、こっちが被害を受けかねからな（それに、あの野郎、こんな乱闘騒ぎや挑発っていう事があったのに、冷静に

物事を考えてやがる)」

「キサラ様……」

「おいおい……大丈夫かよ?」

「うわ〜キサラ様が小人に見えるよ」

キサラ隊と、新白連合の面々が、一箇所にかたまり、鋼鉄の土俵を心配そうに見下ろす。

もはやこの場に、元拳豪と拳豪の衝突を止めようと思う者は一人も居なかった。

雑居ビルが偶然作り出した、都会の隙間を、悠然と夜風に吹かれながら見下ろす二人がいた。

場所は正方形の空間を作り出している雑居ビルの一つ、その屋上。もはや使われていなさそうな、コケなどが生えた居水タンクや、こちらに使われていなさそうな、大きなファンが付いた大量の室外機……それらが立ち並ぶ屋上で、厚手のコートをなびかせている第四拳豪ロキは、屋上から、同じ拳豪のツールが仕切っている喧嘩賭博場を、興味なさげにガムを噛みながら見下ろす、ジーンズに袖なしのジャケットとノースリーブというシンプルな格好の割に、屈強な肉体を誇る男、第二拳豪のバーサーカーを後ろから見張るようにして立っていた。

月の明かりや、街の夜光が雰囲気を作る中、男二人で乱闘見学……。

ロキは若干、復帰したての自分が、何故このような事をしなくてはならないのか考えたが、直ぐに考えても仕方ないという、投げやりな答えしか導き出せず、考える事を放棄した。

屈強な体格で、まるで全ての光景に興味を持たないような力の無い眼をしたバーサーカーは、屋上で受ける夏の夜風に短い短髪の金

髪をなびかせながら、ひたすらに広間へと視線を落とし続ける。

だが、それだけだ……先程からずっと、それだけだ。

その眼は、その姿勢は、その仕草は……全てを換算して、ロキ以外の他の者が鼻屑目に見たとしても、誰もが口を揃えて、バーサーカーは“つまらなそうにしている”と答えるであろう。

つまり、そういう事だ……。

バーサーカーは視線を賭博場に向けていたとしても、何の感情も浮き出てこないという事だ。

鋼鉄の土俵の中央で、キサラはトールを観察している……。

一見、着物を着ているせいか肥満に見えなくも無い体格だが、頑丈そうに膨らんだ胸板や、キサラのウエストくらいありそうな腕……また、顔も太い眉毛が特徴的で、髪型も短くスポーツ刈になっていて、どこか昭和の柔道部を見ているような錯覚に陥りそうな風貌をしていた。

だが、顔などは些細な事で、ほぼ四角くがつしりと頑丈そうな顎に、その頭を支える太い首や僧帽筋は、並大抵の打撃など問題なく返してしまいそうな雰囲気漂わせていた。

すると、トールがキサラと視線を合わしながら、着ていた着物の上半身を脱ぎ始めた。

そこから露となった上半身の肉体は、キサラの想像以上のもので、脂肪は確かに、腹が大きく出るほどにあるのだが、それを補って余りある、大量の脂肪を物ともせず浮き出ている筋肉群は、ラグナレクの中でもトール一人だけのものであろう。

そのトールから発せられる威圧感は、この四方を完全に囲んだ鋼鉄の土俵も相まって、とても大きなものだと感じる……だが。

「（そうか……）」

トールが鋼鉄の土俵の壁際で蹲踞そんきょの姿勢で中腰になり、ローマ数字の？が刻まれた、ラグナレクの黒手袋をはめた両手を大きく左右に広げ、体の前で“パン”と叩き、掌を下に向けた……これは、私は武器を持っていません、正々堂々素手で勝負しますという意味が込められたサインだ。

それを静かに、黙って見ていたキサラは「(大したこと無いな……残念だ)」と、先程までの愉しそうな笑みが嘘の様に冷め切り始めた。

その表情の変化を、トールはキサラが“気構えを組んだ”と判断し、蹲踞そんきょの姿勢から静かに立ち上がり、自身の最高の間合いを作り出すために、前へと歩き出した。

キサラとトールが、ちょうど平均の成人男性が一人寝そべられるぐらいの距離を保ちながら、再び目の前で対峙した。

「では、始める前に、この賭博場の掟に乗っ取り、何か賭けるとしようか」

「……はあ？」

言いながらトールは腰を屈め、相撲の立会いの様に相手を睨みつけながら、両拳を地面に付けずに前に出した。

トールから出た提案に、キサラが理解出来ないといった表情をする。

「だから、何かを賭けねば、この賭博は成立せんだろうに？」

この言葉をキサラは呆れ交じりに「何言っただ馬鹿？んなもんは後で勝った奴が、負けた奴に言えはいんだよ」と、さもありませんと切って捨てた。

股を開き、膝を四股立ちの姿勢に曲げ、上半身を屈ませ、立会い

の低い姿勢を取るツールを、キサラがゆっくりと右半身を前に出し、両腕を軽く構えたサウスポースタイルの構えを取りながら見下ろす。すると、低い姿勢を取るツールは、キサラを見上げながら「ふん……」と鼻で笑い。

「それもそうだ!!」

瞬間、ツールが曲げていた膝を地面を踏み抜く事で伸ばしきり、上半身を屈めた低い姿勢のまま、およそ倍以上の重量差がある相手に向つて、巨大な弾丸の様に額から突っ込んでいった。

“ぶちかまし” 相撲の立会いで相手に向つて、強靱な首と僧帽筋を使った、頭突きにも似た、彼ら相撲取りの瞬発力が総動員されたタツクルだ。

100?を裕にオーバーする岩石の様な巨体が、その半分にも満たない体格のキサラに向つて、迷いの無い一直線の軌道を描きながら、瞬間とも呼べる速度で突貫していく……。

しかし、そのぶちかましは、キサラが軽く、ツールから見ても左にサイドステップした事でいなされる様に避けられてしまう。

だが、それもツールにとっては想定内の事で……前へと突っ込んでいた勢いを、右足を前の地面に突っ張る事で止めたツールは。

その事によつて体が半身になった事を利用して、横に避けたキサラを体の正面で捉えた。

そして再びの奥足である右足を蹴り出した、左足からの突進……ほぼ直角に相手に反応した今度は、頭からでは無く、肘を大きな腹に当て、両手の掌を相手に向けた構えを取りながらの突進だ。

この突進は、先程軽く横に避けただけで、そこまで大きな距離を稼いでいないキサラを一瞬で捉えた。

巨漢の割に速く動き、横へと動く相手の対処も速いツールに、上で見ている者達は驚愕を覚える……だが、相対しているキサラは違つた。

トールが突進の勢いを利用しながら、振り向いた拍子に勢いがついた右肩を、腰を捻る事で前に出し、その大きな右手による“張り手”を、キサラの小さな顔に向って突き出した。

既にサイドステップから構えを取り直したキサラの視界では、トールの巨大な右掌がみるみる内に、自身の顔目掛けて飛んでくる光景が広がっていた。

だが……「（遅え）」

キサラが突き出される張り手を上半身で潜り抜ける様に、今度はトールから見て右側へと、ウェービングを利用したサイドステップを行う。

己の右腕の脇を潜り抜け、再び自身の視界から消えたキサラを追いかけようと、トールが突き出した張り手を引いた勢いで右側面へと体ごと振り返った……だが、そこには既に“キサラの姿は無かった”。

「ッ！？」

その事に、闘いの最中だというのに、トールは一瞬驚きを露にしながら動きを止めてしまった……しかし、これもほんの一瞬の事、この間を実戦で捉えられる者など、そうはいない。

だが、相手はその一瞬の間を捉えられるだけの實力を持った人間であった。

トールの視界から消えていたキサラは、いつの間にかに、トールの後ろを取っていたのだ。

あの時、相手には“サイドステップ”の様に見えた潜り抜け……だが実際には、キサラは“横へと潜り抜けた”のではなく、相手の腹に触れるか触れないかのギリギリの間で、鋭角に“前へと直進するように”トールの右の張り手を潜り抜けたのだ。

これは、圧倒的な体格差、身長差が招いた必然とも呼べる現象で、もし、これが同じくらいの身長なら、視界の端に動きを捉えられ、

後ろへと回られた事を一瞬で看破されてしまう……だが、トールとキサラぐらいの身長差なら、いくらトールが下に視線を向けていたとしても、視界の端に消えていくキサラの姿を捉えられないのだ。

馬鹿の様に、後ろに回りこんでいたキサラに右の横っ面を晒しているトール……。

キサラは、その自身から見て右側を向いているトールの顔面目掛け、サウスポーで構えていた体勢から、地面をスライドさせるように、軸足である奥足で地面を蹴り、トールとの間に出来ていた微妙な間合いを修正する。

そして、キサラは軸足の足先を真後ろに向けるほどに捻り込み、その捻りで生まれた力の流れを下腹部を前に出す事でさらに増大させ、腰を回し、既に地面から蹴り出していた右足を膝から上げる……。

キサラが上げた右膝はトールの顔面に目掛けられている……そこで、キサラは更に上半身を腰とは逆方向に捻る事で、上げられていた足を更に前へと突き出す。

そして、この一連の動作で最高の威力を生み出せるようになった、膝を畳んだキサラの右足は、足を寝かせるのではなく“ブーツの爪先を相手の顔面目掛け立てさせながら”いまだキサラへと振り向かないトールの顔面に向かって、畳んでいた膝を開放する事で、弧を描くように蹴り出させた。

前足による右上段返し蹴り……一見、説明を見れば複雑な動きに見えなくも無いが、こんな物は、蹴りが得意なキサラでなくとも、格闘技に関わる者なら一瞬で出来る芸当だ。

だが、誰にでも出来る事といっても、キサラの蹴り出した“爪先が立てられた右足”は、他の追従を許さない刹那とも呼べるスピードでトールの顔面目掛け飛んでいき、綺麗な弧を描きながら……。

グシャアア!!!!!! と、何かが潰れる様な音を、鋼鉄の土俵に響かせながら、トールの顔面の中心に、立てていた爪先を衝突させた。

「ふむおッ!!?」

硬いブーツの爪先で、不意を疲れたように顔の中心……鼻を強打されたトールは。

衝突した相手の攻撃が、自身の顔面に一瞬だけめり込む感覚を覚えながら、強靱な筋肉で支えられていた頭を、一瞬だけ後ろに仰け反らせた。

トールの顔面に、爪先を立てた右上段廻し蹴りをかましたキサラは、直ぐにその右足をバランス崩さず引き戻すと、捻りから戻っていた上半身を後ろに仰け反らせ、その反動で出来た勢いを使って、奥足であった左足を、露となっているトールの右脇腹に蹴り出した。一直線に飛んでいく、キサラの左足は、寸分違わず、脂肪と筋肉で固められたトールの右脇腹……肋骨の直ぐ下あたりにある肝臓レバーを爪先で蹴り抜いた。

「ふむッ!?!」

確かに蹴り抜き、トールの口から息を吐き出させダメージを与えた……だがトールの胴体は、それだけではキサラの前蹴りをめり込ませず、逆に蹴った方のキサラを弾いてしまう。

蹴りを弾かれたキサラは、一瞬驚いたように後ろへと下がってしまっても、直ぐに平静を取り戻し、再びサウスポールの構えで、“鼻が潰れ、大量の鼻血で顔と胸元を真っ赤に染める”トールを見据えた。この一瞬のうちに起こった光景に、鋼鉄の土俵の上で観戦していた男達は、それぞれの陣営で別々の反応をしていた。

とりわけ、キサラのチームであるキサラ隊の士気は上がりにながっていた。

「凄い!! 流石キサラ様だ!!」



これまで心配そうな表情で戦いを見つめていた白鳥が、飛び上がるように歓喜を露にし。

「ハハハ！ 見た、今の蹴り？ 爪先で廻し蹴り蹴ってたよ！？」

初めて見る蹴り方に、同じ技を得意とする古賀が、無邪気に周囲の部下と共にハシヤギ始め。

「凄えな……てか、エグいな」

血で胴体を染めるトールを見つめながら、宇喜田はキサラの容赦の無さに、若干驚愕していた。

湧き上がるキサラ隊の面々……まだ、キサラとトールの闘いは始まったばかりだというのに、既に自分達のトップの勝利を疑ってはいない雰囲気であった。

一方トール陣営は、大量に出てくるトールの潰れた鼻を見て、もしかしたらという、キサラ隊の陣営とは対照的な雰囲気に含まれている……。

そして、新白連合はと言うと……。

「まさか……キサラの奴が、ここまで強いとはな」

目下の光景が信じられないかの様に、新島は眩くように声を漏らした。

河川敷の五十対一の大喧嘩、廃病院での亮平との闘い……そのどれもが、キサラの計り知れないポテンシャルで新島を驚かせていたが。

この始まったばかりのタイム対一で見た、キサラの強さは、再び新島の計りを狂わせている。

拳豪同士の闘い……始めはどのようなものかと、不安であったが、  
どうやら杞憂であったようだ、新島は、この始まったばかりの攻  
防で確信していた。

そして、その新島の隣りにいた武田は……。

「なるほどね、ただ後ろに下がると、前に出てくるツールを調子  
付かせてしまう………だったら、横に回りこむようにして相手を捌い  
ていく。確かに、僕でも同じ事をするだろうね」

簡単そうに言う武田であったが、内心は違った。

確かに、相撲の様な前へ前へというスタイルの闘い方に、横の動  
き、円の動きは有効だ……。

だが、考えてもみて欲しい……。

四方を隔離された空間で、自身の倍以上ある相手と一対一で向き  
合う<sup>プレッシャー</sup>圧力。

いくら前に出てくるのが分かっていたとしても、いくら横に避け  
れば安全だと理解していても、いくら相手は拳を握ってこない、リ  
ーチの短い張り手しか打ってこないとしても……100kgをオー  
バーする巨漢が、それよりも半分以上小さな自分を、本気で潰しに  
掛かろうと前進してくる<sup>プレッシャー</sup>圧力を受け流し、冷静に攻撃を入れていく  
事が、どれだけ難しい事なのかを。

当たれば一撃、捕らえられてしまえば即終了……よく、小説やア  
ニメ、漫画のキャラクターが『当たらなければ、どうという事は無  
い』と言うが、あれは間違いだ。

当たったら危険という意識を持った中で、相手の風を唸らせるよ  
うな空振りを目の前で見たり、体に掠めてしまったりした時……ど  
んな人間でも“当たってしまった時のイメージが、脳裏を過ぎって  
しまうものだ”。

そのイメージは恐怖に直結し、体の反応を更に鈍らせていく……  
それが、<sup>プレッシャー</sup>圧力に押し潰されていく人間の、格闘家の心理だ。だがし

かし、そんなイメージすら克服し、目の前の圧力と対峙できるのも、また格闘家や武道家、武術家なのだ。

故に、武田は素直に感服する……あの様な体格差を目の前にしながら、冷静に相手と向き合い、あまつさえ攻撃を余裕を持っていなし、相手に致命的なダメージを与えたキサラに。

闘う事の難しさ、怪我をすることの恐怖を理解する武田だからこそ、この事に対しての難しさを誰よりも理解出来たのだ……。

「武田よ、お前は、これからこの闘いが、どう動いていくと思う？」

隣にいた新島が、武田に尋ねた。

その問いに、武田は至って簡単に答えた。

「闘いつていうのは、最後の瞬間まで分からないものじゃない？」

この簡単な答えに、狡猾な頭脳を持つ新島は、心の中で「それもそうか」と呟き、再び鋼鉄の土俵へと意識を集中させた……。

「（抜いたと思ったんだがねえ……思った以上に、あの体は厄介だな）」

倍以上の体格差のあるトール相手に、致命的なダメージを与えたキサラは、先程、不完全に蹴り抜けなかった、肝臓レバーへの前蹴りを惜しんでいた。

「（それにしても、逆鬼先生から教えてもらった、三日月蹴りだったか？ 思った以上に効果があったな）」

それと同時に、トールの鼻を潰した、爪先蹴りによる上段廻し蹴りも振り返っていた。

キサラの言う三日月蹴りとは、正確に言えば間違いだ……三日月蹴りとは本来、相手の守っているガードをワザと蹴り、本来なら寝かせている足を立たせ、ガードの裏を縫う様に、突き立てた爪先で相手の脇腹を差し込む技だ。つまり、蹴る箇所と用途が違うと言う事だ。

だが実際に、キサラが使った爪先蹴りは、逆鬼から教えてもらったものだ。

体重差のある相手とやる場合、まず注意しなければならないのは、無暗やたらに攻めない事だ。

体重差がある……それだけで、普段生活しているだけで、発達する筋肉の量が違うのだ、当たり前と言えば当たり前である。

なら、どこをどう狙えば良いのか？

それは人それぞれだが、一番効果的なのは、下から突き上げる攻撃や、顎や肝臓、鳩尾や金的だったりを的確に打ち抜くことだ……だが、それだけでは足りない。

脛や足の甲、拳や掌低といったものでは、力を伝える面積が広いせいで、厚みのある相手に、上手く威力を伝えられない……故の爪先蹴りなのだ、それも、ブーツを履いているという前提でのだ。

だが、それにはピンポイントで相手の急所を蹴り抜く技術がいる……そこで、キサラがテコンドーで培ったテクニクが役に立つのだ。

足のボクシング、この異名は伊達ではないという事だ。

キサラが、間合いを取った事で出来た余裕を使って、いらぬ考え事をしていると、顔や胸を血で染めたツールが、潰された鼻を気にしながらも、再びキサラに腰を落としながら向き合った。

流石に立会いとまではいなくなるとも、その構えは、膝に十分溜めを作った、今にも再び、前へと突進してきそうな構えであった……が。

「辛そうだねえ」

「フガツ……ほつとけ！」

構えを取ったツールであったが、何故か呼吸をし辛そうにしながら、目の前でサウスポーに構えるキサラを敵意の籠った眼差しで睨みつける。

「まあ、鼻やられれば、誰だってそうなるわな……」

言いながら、キサラは確信した……既に、相手の首根っこを掴んだも同然だという事を。

「ふッ！！」

鼻を潰され、口でしか呼吸の出来なくなったツールが、再びキサラへと突進をしかける。

今度も同じく、両手で張り手を打つ準備をしている……。

故にキサラは、相手が自分の間合いに入ってくると同時に、何も仕掛けず、相手から見て右側へと回り込むようにして距離を取ってしまう。

それに、ワンパターンに食いつくツール……どうやら痛い一撃を貰って、相当頭に血が昇っている様であった。

食いついたツールは、先程同様、左回りに振り向くと同時に、横殴りの右手による張り手を、身長差のあるキサラに向けて、上から振り落した。

普段鉄砲などの稽古で、皮膚が固められたツールの暑い掌が、キサラの左側頭部目掛けて振り下ろされていく……だが、それはキサラが一瞬で頭を下げ、前へと潜り込む様にしてやり過ごした事で、“ブン！”という風きり音を唸らせながら、空を切った。

そして、避けると同時に、キサラが屈む事で得た体重移動を乗せた右のローキックの脛が、ツールの右内腿に“バチィィ！！”とい

う音を爆ぜさせながら、深く突き刺さった。

膝寄りの内腿を、キサラのインローで打ち払われるように蹴られたトールは、振り向いた瞬間・右の張り手を振り抜いた瞬間というものも相まって、その太く鍛えられた右足を打ち払われ、股を開かされる様にしてバランスを崩してしまった……タイミング・威力共にベストな蹴りであった。

バランスを崩したトールであったが、懐にいる筈のキサラを捕らえようと、足を開かされた事によって下がった体勢を利用しながら、その太い両腕を、自身の懐へと覆い被せた……だが。

「ッ！？」

トールが両腕を懐に多い被せる前に、キサラは素早く蹴り出した右足を引き、トールの深い懐からバックステップで脱出していたのだ。

速い……己と、全くスピードの次元が違いすぎる。

ここで、トールは最重量級と、軽量級のスピードの違いを、奥歯をかみ締めるほどに痛感させられた。

だが、終わりではない……蹴られた足は、確かに払われてしまったが、ダメージなど残ってはいない。

先程蹴られた、横腹の痛みも、もともと大した事は無かったので、既に関係は無い。

影響があるとすれば、潰された鼻だが、これは勝負を早く決められるのならば問題は無い。

それだけのパワーを、重さを、圧力を、最重量級である己は、目の前の女よりも持っている。

捕まえさえすれば、一撃さえ当てられれば、それで勝てる！

その心情の下に、トールは再びキサラに特攻を仕掛けるも、結果は上手く横に避けられたり、自身の周りを軽快なステップで回られ、前に出ようにも、焦る気持ちちはやって、狙いを上手くつけられな

いと、どれもこれもが、軽量級である筈のキサラには通用がしなかった。

「く、くそッ……ハア…ハア……」

自分のフィールドである土俵で、ちょこまかと動く相手を捕まえられない事に焦りを抱くトール。

「（なぜだ……この土俵は、ワシが有利になる様に作られている筈なのに何故、ここまで良い様にされているのだ！！）」

確かに狭い空間で、大きな相手が目の前にいれば、逃げ場が無いという心理状況も働き、大きな者にとつて有利に事が進められる。

しかし、それは逆にも言えることなのだ……。

逃げ場が無い、つまり、闘うしかないと言う風に考えを切り替えられる……だが、こんな事では無い。

本来、この喧嘩賭博には、血の気の強い男達や、負けず嫌いの喧嘩屋たちが日夜闘いを繰り返している……そうしたなかで、連勝や仕切りを続けるトールは確かに強い、だが、それは、こんな環境だからこその話なのだ。

例えばだ、血の気の多い男が、喧嘩をするためにトールに挑んだとする、もちろん、この四方を囲まれた鋼鉄の土俵でだ。

男は当然、気合で負けぬように、己を奮い立たせる筈だ……故に、男はトールに向って、気合の籠った攻撃や、動きを魅せていく。

だが、それでは体格差があるトールには勝てない。

何故なら、自分を奮い立たせてしまった男という生物は“自分から攻撃せずにはいられないからだ”、ましてや、血の気が多かつたり、負けず嫌いとしたら当然の事だ。

しかし、それでも、たまには冷静な相手もいる、だが、男である限り、不良の世界に身を置く限り、いずれは自らで攻めるか、アウ

トスタイルなどの動きに淀みが生まれてしまうものなのだ。

トールの様なパワーがあり、体格のある相手には、徹底して、後の先ではなく、掴まる、当てられるといったリスクを避けるために、後の後を通していかななくてはならない……更に、物怖じせず、後るではなく、円を意識した動きも必要だ。

もしかしたら、ラッキーなヒットが出て、一発で形勢が逆転してくれるかもしれないといった欲は、筋力のある、パワーのある男がよく抱くものだ、故に徹底できず、自分から攻めたり、無茶なカウンターを狙いにしてしまうのだ。

だが、そもそも前提が違う、女であるキサラの考えは違う……。いくら勝気な性格だとしても、目の前の巨漢と真正面から闘って勝てるなどと言う幻想は、異性と戦うという、もとから無茶な事をしている時点で持ち合わせていない。

だからこそ迷わず、一択の選択肢を選ぶ事が出来るのだ。

そして、彼女には実戦で己を成長させたり、敵う筈の無い亮平の様な規格外の相手にも挑める度胸と集中力がある。

そんな座った度胸の持ち主が、この様な選択肢を狭められる環境に放り込まれば、持ち前の集中力を総動員して、一つの戦法を徹底して行けることは当然の事だといえる。

それに気付かぬトールは、目の前で自身が動く度に横に逃げたり、間合いを取ったりしてくる相手に、更なる焦りと怒りを抱いてしまふ。

故に、トールが相手に掴みかかろうと、打たれ強さを利用した、反撃上等の特攻を仕掛ける。

だが、その特攻も、キサラがつつかえ棒の様に蹴り出した、右の前蹴りによって、自ら進んで、トールの腹から弾かれ、再び間合いを開かれてしまふ。

つつかえ棒の様に蹴り出した前蹴りは、トールが掴もうとしていた意識を逆手にとって出したものだったので、トールは既に誰もいなくなつた空間に両腕を空振りさせてしまふ。



「ちッ！」

しかし、それでも止まらないトールは、そのまま後ろへと弾かれたキサラに向って、足を走らせる。

だが今度は、キサラは左のミドルキックをトールの空いている右の脇腹へと蹴りだし、それを押し込むようにして、トールから見て右側へと逃げて行ってしまった。

トールは、その押し込まれたキサラの左足を掴もうとするも、一瞬遅く、素早く足を引かれたキサラに逃げられてしまう。

そして再び、先程と同じ様に、追っかけ追いかけられの状況が始まってしまった。

「しかし、よくまあ、あのキサラが、あんな逃げの戦法を徹底で来るもんだな」

「逆に言えば、あれしか無いって事なただけどね……」

いまだ軽やかな身のこなしで、トールの攻撃を尽く避けていくキサラを、鋼鉄の土俵の上で見下ろしていた武田が、深刻そうに言葉を吐いた。

「どういう意味だ？」

その言葉に、頭はいいが、喧嘩には疎い新島が不思議そうな視線を向けた。

「いくらキサラちゃんの鋭い蹴りでも、あのトールの肉体にダメージを与える事は簡単な事じゃない」

武田たちの視線の下で、トールの張り手を避けたキサラが、トール

ルの左足外腿に、右足のローキックを打ち込む。

「今みたいに、ダメージを蓄積しようとしたって、あんな近い距離だと掴まってしまう可能性があるから、そんな何度も出来る事では無いし……」

武田の言う通り、右のローキックを打ち込んだキサラであったが、トールの巨木の様に太い太腿に弾かれ、一瞬であったがバランスを崩してしまふ。

そして、その隙を突こうとしたトールが、キサラに張り手を突き出すも、間一髪といったタイミングで、キサラが何とか、張り手の間合いから遠のいた。

「……かと言って、最初の一撃みたいなダメージは、もう相手も警戒しているから、そうそう与えられなくなってしまった」  
「て、ことはだ……もうキサラに勝ち目は無いって事か？」  
「そういう訳でもない、ほら、見てみなよ」

言いながら、武田はトールの方を指差した。  
その指し示された方向に、新島は「うん？」と不思議そうに視線を向ける……。

「なんだ？ 急に追わなくなったぞ……疲れたのか？」

新島の言葉通り、これまで延々と逃げ回るキサラを追いかけたトールの動きが止まった。

その様子は、目の前でリズムを取り続けるキサラを睨みつつも、ゼイゼイと苦しそうに肩で息をし始め、これまで気にしていた潰れた鼻などには、もはや構っていられないといった雰囲気であった。

心なしか、顔色も悪い……。

「スタミナ切れ……キサラちゃんのスピードに、さつきから無理矢理付いていっていったからね。更に言えば鼻が折れた状態で、ただでさえ呼吸がし辛い状況だから、軽い呼吸困難に陥ってる」

力士の肉体は、そこまで長時間闘うには向いていない構造をしている。

それも当然だ、立会いから勝負が着くまで、むしろ仕切りの方が長い事もある……故に、短期決戦を狙うため無理な増量を図ったり、瞬発力を徹底的に鍛え抜いたり、持久力を犠牲にした鍛え方をしているのだ。証拠に、土俵後の力士を見てみれば、ほとんどの力士が、一分と闘ってもいないのに息切れを起こしている事が良く見られる。

ましてや鼻は潰され、鼻血で口ですら息がし辛い状況に陥っているにも関わらず、未だに追い掛け回している相手に触れられないのだ……苛立ちや、悔しさのせいで、トールの体に無駄な力が込められているのが、ボクサーである武田には良く見て取れた。

「それに、彼は確かに体格は大きいけど、リーチを上手く使いこなせていない」

「リーチを？」

「ボクサーの僕から見れば、腰の回しが足りなさ過ぎて、折角の張り手が手打ちになっっている様に見える……多分、あの大き過ぎる腹回りが邪魔なんだろう」

力士の張り手……。

実は武田が言うように、彼らの張り手は常に腰が回りきっておらず、代わりに前に進む勢いで様々な箇所を補っているのだ。

理由は簡単だ、彼らの大きな腹回りや腰周りが原因で、腰を入れる前に、手の方が早く相手に届いてしまうからだ……だが、腰を上

手く入れる方法は確かにあり、前屈立ちの様に足を前に出せば、腰を入れるスペースや、大きな腹に体勢が前に崩れる事が無くなり、バランス良く打てるようになるのだ。

だが、その様な悠長な事を、もともと他の格闘技よりもスピードでどうしても劣ってしまう彼らが実戦で出来る筈が無い……出来たとしても、相手に誘われた時ぐらいであろう。

そして、腰が入られない、リーチが上手く使えないとなれば、その張り手に“伸び”というものは無くなるのだ。

「リーチが上手く生かせないなら、予想外に張り手が伸びるなんてこともない……冷静に間合いさえ間違えなければ、まず当たらないだろうね、そんな攻撃は」

「ふん、そんなものか……」

新島が武田の解説に軽く相槌を打つと、二人は再度、キサラとトールに視線を向けた。

雑居ビルの屋上で、都会の隙間に出来た、正方形の広間にある賭博場を見下ろしていた、バーサーカーは、もはや味が出なくなってしまうガムを、その辺に吐き捨てながら、懐から新しいガムを取り出し、それを包みから取り出すと、再び口の中に新しいガムを入れた。

相変わらず、闘技場へと向けている視線は力なく座っていて、もはや何故、この様な所で、あんな詰まらない喧嘩を見ているのかと、言外に感じ取れた。

その様子は、後ろでバーサーカーを見張っているロキにも伝わっており、共に、この状況に段々と嫌気が差している所であった。

すると、これまでただボーっとガムを噛みながら、闘技場の方を

見ていたバーサーカーが、徐に口キに対して口を開いた。

「なあ、確か、あの女の方は、鬼島の奴の馴染みなんだよな……」

この雰囲気で、いきなり声をかけられた口キは、一瞬不思議そうな表情をするも、相手が質問してきた事の意図を察すると、面倒臭そうな態度を隠そうともせず「ああ、そうだよ」と答えた。

「そうか」とだけ言って、バーサーカーと呼ばれる拳豪は、口キの態度に特に気を悪くした様子を見せずに、視線を賭博場に下し続けるのであった。

目の前で、もはや残っているスタミナも使い果たし、潰れた鼻から出る出血のせいで、苦しそうに肩で息する相手を見て、キサラは「（頃合か）」と胸中で呟いた……。

既にトールに動きは見られない、ただ休もうとしているのか、誘っているのか……どちらにしても、もう無理にキサラを追おうという気迫は感じられなくなっていた。

無理も無い、なぜならキサラは、これまで取ってきた全ての行動……それが現在の状況に繋がるように、確りとシュミレーションをして動いていたのだから。

最初の一撃は、ほぼ賭けに近かった……。

相手が己の体格と、こちらを体格を見て、心の奥底で、まだ悔っている事が見られる序盤に、相手のスタミナを大幅に奪うために潰した鼻……これは、もしも相手が初めから本気で掛かってくるようなら成功はしなかった博打だ。

その次に放った、肝臓レバーに突き刺すような前蹴りは、ただそこが空いていたのと、一度蹴った感触を確かめるために出した蹴りだ。

あとは相手をなるべく円の中央で躍らせるように、自分が相手の

攻撃を避けながら動いていけばいい。

そうすれば、最初の一撃と次いでの一撃で目を覚ました相手は頭に血が昇り、こちらを追いかけて来るだろうと、キサラは読んでいた……その中に、女に鼻を潰された屈辱という要素もあったのだが、キサラはわざと心には留めておかなかった。

まあ、逃げている最中に、アパチャイから教えてもらった、箇所ごとのローキックの打ち分けだとかを試していたのだが、体重差があり過ぎて、ダメージを与えられなかったという裏話もあるのだが、そうこうしていると、これまで動きを止めていたツールが、鼻の出血や呼吸困難で、若干チアノーゼに見えなくも無い表情で、突然キサラに口を開いた。

「のう、キサラよ……」

「……何だよ？」

突然の呼びかけに、キサラは訝しむ様な表情をする……が。

息苦しそうに搾り出された声に、もはや最初の頃の豪快さは感じられない。

それどころか、今にも倒れそうな弱った声で、苦しそうに「ゼエ……ゼエ」と口で息をしていた。

「一つだけ、貴様に聞きたい事がある……」  
「……」

無言の了承……。

その目の前で油断無く、序盤の時と変わらないサウスポースタイルで、ユサユサと浮かした踵や膝でリズムを取っているキサラに、ツールはありがたいと目礼した後、ゆっくりとキサラに視線を向け直した。

「貴様はどうやって、ラグナレクから抜けた後の短い期間で、ここまで強くなる事が出来た……？」

その問いに、キサラはさも当然の様に……。

「こんな所で油を売ってる奴とは、“見ている場所”が違うだけさ……」

言うとキサラは、もう話しは終わりだと示すように口を噤んだ。

「なるほどな……」と、既に足を動かす事すら億劫になってきてしまったトールが、静かに呟いた……。

もはや、語る口は持たぬと、両者は再び対峙する。

キサラは相も変わらず同じ構えを取りながらトールを見据え、トールも重くなつた足に渴を入れながら、腰を少しだけ落とし、対峙するキサラを、今度は“迎え撃とうと”構えを取った。

別段、今の二人の間合いは、どちらの距離でもなく少しだけ開いている……。

静かな時間が過ぎる中、これまでとは違い、まずはキサラからトールにジリジリと近づいていく。

開いた空間を削るように進んでいく、キサラの慎重な前進は、見る者に息を飲ませる。

すると突然、トールの攻撃が届く間合いの直前で、キサラが徐に構えを解いた。

それも腕を下ろすだけではなく、サウスポーに構えていた半身ですら解くもので、キサラは目の前の巨漢に自然体を晒した……だが、キサラの意表を突く行動も、次の接触に全ての集中力を注ぎ込んだトールには、全く持って影響を与えなかった。

しかし、このキサラの行動は、別に相手の意表を突くものではない……。

「（ここいらで、試してみるかな……）」

構えを解いたキサラが、両手で今にも掴みかかって来そうな、柔道に似た構えを取っているツールに、無防備に近づいていく……。その歩みは、無防備と言うよりも、もはや目の前には何も無いかのような、自然な歩みで……。

「があッ！！」

自身の間合いへと、まるで挑発するかのように歩いて入ってきたキサラに、待ち構えていたツールは、現状を踏まえた一縷の望みを賭け、諸手でキサラの体につぶり四つで寄ろうとした。

しかし、そこでキサラが動いた……。

両手を広げ、掴みかかろうとするツールに対して、自然体で歩いていたキサラは、体を一瞬の動作で右回りに回転させ、回転している途中に、地面から足を蹴りだし、右足の膝を上げながら宙へと飛び上がる……。そして、回転が一周を終えようとしたとき、キサラが背中越しに構えた右足の“踵”が、最後の抵抗を仕掛けてくるツールの“喉”目掛け、槍の様に鋭く一直線に蹴り出され。

ドスッ！！ と、キサラのブーツの踵が、ツールの喉に突き刺さる感触を覚えた。

「アゴおアッ！？」

前へ出ていたツールは、下から天を貫く勢いで蹴り上げられたキサラの“ティミヨ・トラ・ヨプチャ・チルギ（跳び回転横蹴り）”を、もろにカウンターのタイミングでもらってしまう。

鼻を潰された影響で、すでに口でしか息の出来なかったツールは、そのブーツの踵を突き刺された喉の激痛に、悶絶するかのように上半身を前へと屈ませてしまう……。



息が出来ない……しかし、そこでふと、トールは違和感を覚えた。前に屈んだ筈なのに、キサラの蹴り足であった右足が喉につつかえない……というより、目の前には、テコンドー特有の飛び技を使っていたキサラの姿すらない。

だがトールは、その事に気付きながらも、喉を踵で蹴り抜かれた痛み能耐え切れず、眼を細めてしまっ……。

トールの視界から消えたキサラは、既にトールに蹴り出していた足を引き、次の動作に移っていた。

それは、今の飛び技よりも、さらに高く飛び上がった位置……。

「（この連携は、コンビネーションもともと“あの馬鹿”に使うはずだったんだがな……）」

キサラは、先程と同じ様に右回転で体を捻りながら飛び上がったのだが……胴体にくっつくほど柔軟に構えている右足の踵が、今度はトールではなく、夜空の中心へと振り上げられていた。

そして、回転が一周を終えようとした瞬間

キサラが構えていた右足の“踵”が、宙で上半身を後ろに反らす反動を付加され、トールの下げられた頭の“後頭部”へと、垂直に振り落とされた

ガゴツ!!!!!!

空中で振り落とされた右の“ネリヨ・チャギ（かかと落とし）”が、トールの後頭部へと寸分違わず落下し、衝突した……。

喉を蹴り抜かれ、後頭部を真上から強打されてしまったトールは、頭を一瞬鞭打ちの様に下に弾けさせながら、ゆっくりとした動作で、鋼鉄の土俵の地面に膝を付いてしまった……。

その結果を、悠々と着地しながら見下ろすキサラ……。

「まだ、やれるかい？」

そう静かに、目の前で両膝を付き、正座の姿勢で両手共々頂垂れさせているトールに、キサラは問いかける……だが、一向に返事は返ってこない。

キサラが不思議そうに、頂垂れているトールの顔を覗けば。

トールは両目を瞑りながら、喉を蹴り抜かれた事で出してしまった舌を垂れ流し、潰された鼻から血を自分の膝元に滴らせながら、意識を失っていた。

「ふん、やっぱり相撲って言ったって、当たるところに当たれば倒れるんじゃないか」

トールが意識を手放したのを確認すると、キサラは被っていたハUNCHングキャップを片手で被り直し、部下たちが自分の事を見守っていた場所を見上げた。

そこには、既に勝利の歓喜に沸いている部下達の姿があった……近くには、新白連合の面々も、キサラの勝利に驚きを示していた。

どうやら、この騒ぎが聞こえないくらいに、自分も集中力を研ぎ澄ませていた様だと、キサラはここで確認する……。

「（ま、課題の“触れられずに勝つ”をクリアしたし……及第点つてところかな）」

騒ぐ自身の部下達を確認すると、キサラは研ぎ澄ましていた集中を切り、白鳥がいる方向に視線を向けながら、声を張り上げた。

「見ての通り、第七拳豪は私が倒した！！ お前達、さっさとここから撤収するよ！！」

この指示に、騒いでいた宇喜田・古賀・白鳥に何故か武田を交えたキサラ隊の男達が『応！！』と、気合の入った返事を返してきた。

仲間である筈の拳豪であるトールがやられ、見下ろしていた賭博場が騒がしくなったとしてもバーサーカーの表情に変化は見られない。

その不気味さは、何事にも動じない、獲物を狙うハンターの様にも感じられたが、当のバーサーカーに、狙うほどの獲物が下の賭博場にいるとは感じられなかった……。

ただひたすらに静かな空気……騒がしいのは、下の賭博場で、自分達の頭が勝った事に喜ぶ、視界に入れるのも面倒臭い有象の連中だけだ。

すると、勝敗が付いた下の様子を、ただ眺めているだけのバーサーカーに、ロキが後ろから興味なさに声を掛けた。

「第一拳豪の命令通りに行かねえのか？」

「……興味ねえ」

「だけど、命令だよ？」

ロキから出た、第一拳豪からの命令という言葉に、バーサーカーは体をピクリと反応させる。

「流石に復帰直後の命令を無視する訳にはいかないでしょ」

今まで死ぬほど退屈だった反動か、ロキは網眼鏡で隠している表情で、口端を嫌味に吊り上げる事で、バーサーカーにいやらしい笑みを向けた。

しかし、その嫌味な笑みを背中に向けられたバーサーカーは、別段、これといって反応を見せず、屋上で吹きすさぶ夜風にジャケツトや金の短髪を揺らしながら、背中越しに、ロキに向かって口を開い

た。

「なあ、あの女は、鬼島の居場所を知ってると思うか？」

「うん？ いや、分かんねえな、それは……」

ロキの返答に、バーサーカーは「そうか」とだけ答えると、今まで見下ろしていた賭博場を見据えながら、徐に段差に足を乗せ、そのまま自身の肉体を、下に見える賭博所へと、ゆっくりと倒れるように投げ出していった。

落とし穴の様に深さのあった鋼鉄の土俵から、梯子で出て来たキサラは、自身の部下たちから勝利の贅辞を、うつつしいと思えるほどに受け取っていた。

「流石でしたキサラ様！！ この白鳥、感服いたしました！！」

「最後のあれ、狙ってやったのか？」

先程から異常な興奮を見せる白鳥と、柔道家らしい大きな体格で、やたらさっきの闘いの話しを聞きたがる宇喜田に、キサラは億劫そうに溜息をつくが、内心は、たとえ小さな勝利だったとしても、美酒に酔おうと心なしが高揚した気分であった。

だが、この時……鋼鉄の土俵から出て来たキサラの胸に、なぜか嫌なざわめきを感じられた。

そのざわめきに、キサラはとつと帰ろうと入り口に向けていた視線を、鋼鉄の土俵から引き上げられたトールへと向けた。

鋼鉄の土俵から引き上げられたトールは、少しだけ意識が戻ったのか、自身が敗れてしまった事に悔し泣きをする部下達を、少しだけぼーっとする頭でなだめていた。

違う……と、キサラは、自身が感じたざわめきがツールから出たものではないと直感する。

そして、再び視線を巡らせれば、自分達の後ろにいた、新白連合の新島と武田も、同じ様に辺りを過剰なまでに警戒していた。

「（なんだ……この感じは？）」

気味の悪い胸のざわめきに、キサラも新島たちと同じ様に、猫目を細めながら、辺りを無意味に警戒し始める……いつのまにか、額や背中には、冷たい汗が薄つすらと滲んでいた。

すると、一番初めにツールが出て来た壁面のビルから、ガン……ガンという、何かステンレス製の物を踏み抜いた様な音が聞こえて来た。

その音に、先程から謎の警戒を強いられていたキサラ・新島・武田の三人が一斉に振り向いた。

だが、その賭博場の入り口と対面に面した、穴の開いたビルの壁面には、何の影一つも無い……だが、音は続いている。

不気味な感覚、いつの間にか、三人の視線は、その何も無いビルの壁面に注がれていた……が。

「ッ!？」

その虚空とも言える空間に、突然一人の“人間”が、ダン!!

という大きな着地音を発しながら、地面に伏せる一種の肉食獣を思わせるような体勢で現れた……。

この音に、この光景に、賭博場の広場に居た全員の視線が集められた……そして、その突如現れた人間から発せられる野性的な威圧感プレッションに、先程まで騒がしかった全員が息を呑む。

そして、地面に伏せていた人間が、ゆっくりと、面倒臭そうに立ち上がった。

「あ、あいつは……ッ!？」

突如降って現れた人物の顔を見て、これまでキサラ同様に、異常なまでの警戒心を向けていた新島が、驚愕する様に声を漏らした。伏せていた体勢から立ち上がった男は、その力なく座っている視線を、まず入り口手前で、こちらを睨むように警戒しているキサラへと向けた。

「もう、復帰してやがったのか……」

異常なまでの威圧感を持つ男と眼が合った瞬間に、キサラはその人物が誰なのかを確信する。

逆立った短い金髪に、力なく座っている眼……ジーンズやノースリーブ、袖の無いジャケットといったシンプルな格好をしているが、均整の取れた屈強な肉体のせいで、決して非凡な存在ではない雰囲気を感じに漂わせている。

そして何より、男の両手にはめられた、ローマ数字で?と刻まれた円形の装飾が特徴的な黒い手袋は、キサラが確信した通りの人物だと、確定できる証拠であった。

「第二拳豪、バーサーカー!！」

キサラの声には、バーサーカーは特にこれといった反応を見せず、ただ力ない眼をキサラに向け続けていた……。

だが、周りは違った。

「だ、第二拳豪!？」

「鬼島の奴にやられてた筈じゃなかったのかよ!？」

「あ、あそこから飛び降りて来たのか……?？」

キサラ隊、新白連合、ラグナレク第七拳豪トールの部下達。

この三集団全ての人間が例外なく、突然現れたバーサーカーに驚き、彼が別に向けたわけでも無いのに、その存在感に勝手に威圧感プレッシャーを感じていた。

「バ、バーサーカー……」

己がチームの同胞に、部下に介抱されていたトールが、朦朧とする意識の中で呟くも、当のバーサーカーは、先程から一切、敗れたトールに視線を、意識を向けていない……まるで、それは興味が無いかのように、わざとではなく自然と視界から外している様にも見えた。

すると、戦々恐々とする広間の中で、バーサーカーが静かに口を開いた。

「女……キサラとか言ったな？」

その静かな声は、騒然とする周りにしたとしても、何故かハツキリとキサラの耳に届いた。

「それがどうした？」

バーサーカーに声をかけられたキサラは、自身が自分の意志とは関係なく、多くの部下達の向こうにいる筈の相手に恐怖しているのを感じ取った。

だが、そんな相手など関係ないといった雰囲気のまま、バーサーカーがキサラに向けて、徐に歩を進め始めた。

「お前、鬼島亮平がどこにいるか、知ってるか？」

この言葉に、キサラはピクリと反応するも、直ぐに平静を取り戻し、視線を向け直した……相変わらず、なぜか恐怖だけは拭い去れなかったが。

「知らないね……知ってたとしても、お前には教えないで、私がアイツをぶん殴りに行ってるよ！」

虚勢を張るように、キサラはまだ遠くにいるバーサーカーに向けて構えを取った……部下達の向こう側にいる相手にだ。

その自分でも不可解な行動は、周りにも動揺を与えたが、それは仕方が無い事なのかもしれない。

それだけバーサーカーの放つ威圧感プレッシャーが、キサラたちなど眼中に無いかの如く凄まじいものだったのだから……。

悠々と、ポケットに両手を入れながら歩いていたバーサーカーが、まずは新白連合の男達へと近づいていく。

「何をポーっとしてるツ！！ 相手を包囲する様に、各自、扇型に展開しろ！！」

近づいてくるバーサーカーの危険性を、直感と、もともとら得ていた情報で理解した新島は、部隊の男達に急いで指示を飛ばす。

その指示に、思考を止めていた男達がようやく動き出し、新島の指示通り、歩いてくるバーサーカーを扇型に広がって迎え撃とうとした。

「武田は、あの陣形の後ろに控えろ！！」

「りょうか〜い！！」

そして、武田も男達の後ろに控えた。



目の前で展開した男達を見て、バーサーカーの歩みは止まらない……。  
いや、むしろ、そのまま何もアクションも起こさずに、展開している男達の中に入って来たのだ。  
まるで、目の前には初めから何もいらないと言外で語るように、バーサーカーはそのまま、あまりの威圧感に道を譲ってしまった新白連合の男を素通りし、直ぐ後ろに控えていた武田の前で立ち止まった。

「突きの武田か……」

「初めましてだね？ 第二拳豪」

バーサーカーの前にいる武田は、既にいつでも事を構えられるように、普段のデトロイトスタイルではなく、ガードを確りと上げた、サウスポーのオーソドックスで構えを取っている。  
表情こそ、軽口を叩くように笑みをつくっているが、内心は、目の前の男の存在感に、最大限の警報を鳴らしていた。

「両腕なら、拳豪と変わらない実力を持つと聞いたが……」

「ふ〜ん、結構いい評価をもらってるみたいだね」

「だが、お前じゃ足りねえ……」

「ッ!？」

言うと、立ち止まっていたバーサーカーが、またポケットに手を入れながら歩き出した。

「来るか!？」と、胸中で覚悟を決めた武田であったが……。

「なッ!？」

バーサーカーは、そのまま構えを取る武田の横を素通りしていつ

てしまった……。

目の前で対峙していたのに、相手にもされない屈辱……それに腹を立てる武田ではあったが、それよりも“助かった”という感情が浮かんでしまった自分に、腹を立てていた。

すると、武田を素通りしたバーサーカーに、一人の青年が突っ込んできた。

「コイツを倒せばッ!!」

それは、キサラ隊、技の三人衆が一人、蹴りの古賀であった。

古賀はもともと、あの鬼島亮平を何度前にしても、物怖じせず喧嘩を吹っかけられる、ある意味で怖いもの知らずな性格だったが故に、この空気の中で唯一、バーサーカーに向って奇襲を仕掛けられたのだ……が。

ゴスッ!!  
突貫を仕掛けた古賀が、自身の間合いに入り、バーサーカーに蹴りを入れようとした瞬間に、辺りに鈍器で殴ったかのような鈍い音が響き渡った。

「古賀!?!」

その光景に、キサラは叫んだ。

バーサーカーに奇襲をかけていた古賀は、何が自身に向って打たれたのかも理解しないうちに、数本抜けた歯を辺りに飛び散らせ、たった一撃で数箇所を裂傷を作ってしまった口を無様に開けながら、賭博場の地面へと意識を沈めて行った。

「(今、明らかに、アイツはパンチを出した……出した筈なのにッ!)」

見えなかった……倒れ伏す古賀を見送りながら、キサラは齒噛み

する。

バーサーカーを見れば、既に古賀を殴った筈の手はジーンズのポケットに仕舞われており、再び悠々と、目の前のキサラ隊に向って歩を進めている。

たったあれだけの事で、たったあれだけ瞬間で、自分達よりも強い存在を倒されてしまった男達は、先程の新白連合同様、歩いてくるバーサーカーに道を譲っていつてしまう。

以前、キサラ隊の男達は、キサラを守るために、亮平に向って行った事もあった……だが今回は、気構えを組む時間も、覚悟を決める時間もなかったがために、自然と恐怖に体を動かしてしまっただ。

もはや、目の前に道を阻む“背景”はない……。

故にバーサーカーの足は、古賀の奇襲以外に邪魔はされず、何の問題も無く、先程から構えを取っているキサラの前で止まった。

トールとは違った、大きな威圧感を放つ相手に見下ろされるキララであつたが、表情には不敵な笑みが浮かんでいた……おそらく、目の前の明らかに格の違う男の存在に、もともと勝気な性格の彼女は胸を躍らせているのだろう。

だが、好戦的な眼をするキサラとは対照的に、バーサーカーは興味なさげな視線で、相手を見下ろしていた。

「本当に、鬼島の居場所を知らねえんだな？」

「何度も言わせんな、知らねえよ……」

視線を交し合う二人……衝突は時間の問題かと、周りが感じたとき、バーサーカーが先に動き出した。

それに身構えるキサラであつたが、バーサーカーはそのまま、武田同様に、キサラの横を素通りしいつてしまった。

「おいッ！」と急いで振り向き、既に入り口の方へと歩いていたバーサーカーの背中に、キサラは怒りのこもった声をぶつけた。

だが……。

「邪魔して悪かったな……俺は帰らせてもらおう」

「冗談じゃねえ!!! こっちは部下一人やられてるんだ!!!」

面倒臭そうに、振り向かずに行ったバーサーカーに、キサラは憤怒を露にする。

「このまま帰す訳にはいかねえ!」

「なら、やるのか?」

「当たり前だ!!!」

バーサーカーは、一瞬だけ以前亮平に折られたという、自分の右鎖骨に手を当てる仕草を、背中越しに見せながら……。「お前じゃ、何も疼かねえ」と言って、キサラの言葉を無視しながら、賭博場の入り口である出口へと歩いて行ってしまった。

今仕掛ければ、奴を止める事が出来る……だが、キサラにはそれが、何故か出来なかった。

故に、キサラは自身の部下の一人を殴り倒した相手を、そのまま見逃してしまった。

バーサーカーが悠然と消えていった広間に、キサラの悔しきと怒りの入り混じった怒声が響き渡ったのは、それから間も無くの事であった……。

第五十六話　キサラ対ツール（後編）（後書き）

次回、ようやくアイツが帰って来ます……。

本当なら、もっと早くに更新してつて、テンポ良くやろうとしたんですが、どうにも原作で飛ばせない場所でもあったので、こんな形になってしまいました。

まあ、それよりも、次回からは横浜中華街編です。

街並みとかは、リアルじゃなくても良いですよね？

ゲレゲレは、あそこには三回ぐらいしか行ったことないので……しかも、チキンなハートなために、最初に上手いと思った店以外には入っていません。

あゝ……時間があれば周ってみたいな（割と本気）。

では、次回にノシ

第五十七話 横浜中華街編1（前書き）

次回で出る出るとか言っておいて、出るのは次の話です。  
でも、同時投稿だから許して下さい後生ですから。

第五十七話 横浜中華街編 1

晴れ晴れとした青天の中、梁山泊が一番弟子、白浜兼一は。

夏休みに入ると同時に、柔術の師匠である岬越寺に連れていかれた、とある山から梁山泊に帰還した後。半日の休みを挟んで、再び梁山泊での修行を再開させた。

また、帰って来ると同時に、悪友である新島春男から、キサラがトールに時間は掛かったが、ほぼ圧勝で事を済ましたという報告を聞いた。

その事に、とある山の修行に同行していた、美羽とアパチャイと共に、喜びと安心を分かち合おうとしたが、修行の疲れか、兼一は直ぐに床へと付いてしまったのだった……。

そして現在……兼一は、梁山泊の道場近くの庭で、喧嘩100段の異名を持つ空手の師匠、逆鬼至緒と共に、巻き藁わらを突いている最中であつた。

ガンツ……ガンツと、兼一が正拳で、地面に突き立てられた太い角材に巻かれた藁を突く音が、梁山泊の庭に響き渡っている。

「おら、もつと後ろ足を使え！ そうしねえと、腰が回りきらねえぞ！」

「はい！」

兼一の稽古を見守る逆鬼は時折、指導として檄を飛ばしながら、兼一の正拳に変な癖が付かない様に注意を払っている……この辺は、普通の飲んだくれとは違って、確りと指導者をしているのが良く見てとれる。

吐いた息をきらせ、かいた汗を飛び散らせながら、兼一は一定のリズムで、目の前の巻き藁を突き続ける……。

そんな中、ふと逆鬼が、エプロン姿で近づいてくる美羽の姿に気付いた。

「逆鬼さん！ お客さんですわ〜！」

履いているサンダルを鳴らしながら、兼一の稽古を見る逆鬼を、道場から少し離れた母屋から、小走りで近づいて来た美羽が呼ぶ。逆鬼が兼一から少しだけ目を離し、返事を返そうとすると……。

「うん……？」

逆鬼の目に、開かれた梁山泊の門から、一人の男が入ってくるのが見えた……。

その男は、夏の暑さに耐えられなかったのか、本来着ている笹のスイツのジャケットとネクタイを左手にかけ、汗ばんだワイシャツの首下のボタンを第二まで外している……背格好は、なかなか筋肉のついた190cmぐらいの体格で、頑丈そうな顎に潰れた鼻、上に吊り上った太い眉毛に、キツチリと整った角刈りといった、どこか厳つい風貌をなしていた。

だが、男の厳つさは、それだけには留まらず……額と左頬に一筋づつ、どう見ても刃物傷と分かる古傷が刻まれていて、左手首に巻いている純金の時計には、こちらも様々な傷跡が刻まれている。

逆鬼が、その梁山泊の門から堂々と入って来た男を見ていると、男は、小走りでかけていた美羽を、大股の歩きで追い越し、そのまま稽古をしている兼一の横にいる、逆鬼の方へと一直線に向ってきた。

本来なら、こんな厳つい男が勝手に入ってきたら、道場破りか不法侵入で、まずは逆鬼が始末しそうなものだが……なぜか、逆鬼はそれをしようとはしない。

むしろ、相手に負けなくらいに厳つい風貌の顔で、一度驚いた



表情をしたあとに、嬉しそうな笑みを作っていたぐらいだ。

なぜなら逆鬼は、その男の事を知っていたからだ……。

「伊田<sup>いだ</sup>ツ！？ 生きてたのか！！」

「おお逆鬼い！！ この通り、まだ現役でやつとるわい！！」

突然の野太い男達の再開を喜ぶ声に、巻き藁を一心不乱に突き込んでいた流石の兼一も、ビクリと体を震わせ、そちらに目を向けた。逆鬼に伊田と呼ばれた男は、二人がいる場所へ近づくと、まず初めに、こちらを見て驚いた表情をしている、暑さのため、道着の下しか履いていない兼一を見る。

「なんじゃ？ このいかにも弱そうな“中坊”は？」

男はそう言いながら、兼一に対して、不思議そうな視線を向けながら、指を指す……。

すると逆鬼が、どこか自慢げに、男に対して兼一を紹介しはじめた。

「おう、こいつは俺の弟子だ！！」

逆鬼が、その鍛え抜かれた厚い胸板を張りながら「ど、どうも、白浜兼一です……。」と、恐縮し一礼する兼一の背中を、張り手で叩く。

運悪く、兼一は暑さのために上半身を脱いでいたため、逆鬼が“パアアンツ！！”と景気の良い音を鳴らした張り手の痛みに。背中に“紅葉”を作りながら悶絶する……相当痛かった様だ。

だが、兼一の事を紹介された伊田は「ほう、お前さんが弟子を取ったか……。」と、その太くワイシャツの袖を張らす腕を組みながら、感慨深げに何度も頷いていた。

「あの、逆鬼さんのお知り合いですか？」

すると、この男三人の空間に、清涼剤の様な存在の美羽が混ざってきた。

美羽は最初、逆鬼に問いかけたが……そのすぐ隣りで、叩かれた背中を押さえながら悶絶する兼一を見て「クスリ」と意地悪な笑みを作った。

「ああ、こいつは伊田大次郎いただいじろつつって、俺が昔、ある仕事で相棒パートナーを組んだ事のある奴だ！」

「まあ、その仕事つてな。結局コイツ一人で解決しちまったけどな！」

ガツハツハツ！！ と大口を開けて豪快に笑う二人に、美羽は「そうなんですの、とても仲が宜しいのですね」と、優しく微笑んだ。

ひとしきり笑い終えた二人は、再会の喜びを分かち合ったために、今まで何をしてきたのかを話し合い始めた……。

その間、背中にジンジンと来る痛みから少しだけ開放された兼一と、エプロン姿の美羽は、二人が楽しそうにしている会話を聞いて、時に笑ったり……。

時に恐怖したり……。時に泣いたりしていた……。

特に、恐怖の時は兼一が、涙の時は美羽の方がという、反応の大きさの違いが目立った。

二人の話しを聞いていると、どうやら伊田という、浅黒いというより真っ黒に見える肌をした儼つ男は、警察関係の仕事を長年続けていたベテランであった様だ。

聞けば、年齢は60に近いと言うではないか……どう歳を取れば、

ここまで若さや豪快さを維持出来るのか、何とも不思議な偉丈夫であつた。

「しっかし……話しを聞いても、まだ信じられんというか、やっぱりかというか。お前が、まさか弟子を取るとはな……世の中、まだまだ意外な出来事があるもんだ」

言いながら、伊田は、そのベテラン刑事様々の、相手に全てを白させてしまいそうな凶太く厳つい眼光を、稽古途中で、まだ汗が引いていない兼一に向けて……。

下から上まで、まじまじと厳つい眼で観察されている兼一は、どこか恐縮する様な口調で、伊田に口を開いた。

「あ、あの、伊田さんは、刑事さんなんですよね？」

「んお？ おう、そうだが……それがどうした、“中坊”？」

「どんな役職の方なのかな……って……あと、僕は一応“高校生”です」

相手の風貌に怯えている様な兼一に、伊田は「お、そうだったか！ それはすまんかったな」と、再び豪快に笑いながら「ワシの役職は、そうじゃなく組織犯罪部というより……マル暴つつた方が、分かり易いかのう？」と、通じるかどうか不安そうな顔で、兼一を見下ろした。

「マル暴……？」

「あ、やはり知らんか……まあ、興味が無い奴には、大抵伝わらん用語じゃしな」

「すみません……」

「おお、いいんじゃ、いいんじゃッ！ 別に知らんくても……あ、簡単に言えば、暴力団とか組織犯罪、マネーロンダリングに不法滞

在だつたりを担当する、警察の中でも荒事専門の組織じゃよ」

「暴力団つて、つまりヤクザとかですか……？」

目の前の相手が想像以上にマッチョな仕事に就いている事を知った兼一は、オズオズと若干上目遣いで尋ねた……その様子に、隣にいた逆鬼は、想像以上に変なところでチキンな弟子に、小さな溜息をついていた。

「まあ、ヤクザしかりマフィアしかり……他にも色んな奴等を相手にしとるよ」

「はあ……な、何だか凄いですね」

言いながら兼一は苦笑を禁じえなかった……何故なら、むしろ目の前の伊田の方が、その辺のヤクザ達よりも、ヤクザのイメージにピッタリとはまる人物だと思ったからだ。その様子を、長年の経験と勘で見抜いた伊田は「今、ワシの方がヤクザっぽいと思っただろ？」と、意地悪に笑った。

「えッ！？ い、いやッ！ そんなことは……」

両手を体の前で振り、それと同時に頭も振ってみせる兼一に、伊田は「ええんじゃ、ええんじゃ！ そんな事は、ワシ自身が一番分かつとるからもう！」と、もはや、これが彼のスタンスなのだろう……両手を腰に当てながら、豪快にガツハツと笑って見せた。

「まあ、伊田に限らず、こいつの同僚の殆どが、こんな感じだがなへへへと笑いながら、マル暴について補足をつける逆鬼。

「そうじゃな、仕事柄、仕方ない事よ。実際、相手に舐められたり

呑まれたりしたら終わりつちゅう世界じゃからな、ヤクザ者の相手つちゅうのは、それだけ根性を張り合っ行って行かなきゃいかなのじゃよ」

内心で、兼一は「なるほど」と納得の声を出す……。

あらかたの説明を終えると、伊田が突然、これまでとは違った、凄みのある真剣な表情をし、腕を組んでいる逆鬼を見る……その眉間や額に寄っている皺は、これまでの彼が歩んできた年季を感じさせるものであった。

すると、伊田の纏っている空気の変化に気がついた美羽が、何が何やら分からないといった表情をする兼一に「兼一さん、これから逆鬼さんと伊田さんは、大事なお話しをなさるようなので、私達は道場の方に行きましょう」と、微笑みながら言った。

「え？ でも僕、まだ巻き藁を……」

だが、美羽の言葉でも、兼一は未だ終えていない稽古を中断する事を躊躇う……が。

「別に行つていいぞ、後で違うメニュー入れてやるから」と、逆鬼が伊田に視線を向けたまま、兼一に稽古中断の許しを出した。

「いいんですか？」

「構わねえよ、とりあえず、体冷まさねえように柔軟でもしとけ」

取り付く間もない……というより、口調に「さっさといけ」という含みが持たされた逆鬼の態度に、流石の兼一も、少し理解できないという雰囲気ではあったが、空気を読んで、エプロン姿の美羽と共に、道場の方へと消えていった……。

その様子を、静かに見送る二人……。

兼一たちの姿が完全に見えなくなったのを確認すると、「良い弟子

だのう」と付けてから、伊田が話を始めた。

「……まあ、なかなか根性がある方ではあるな」

「そんなもんは、眼を見れば分かる。真っ直ぐとした、純粋な良い目じゃないか」

第三者からの弟子評価に、なぜか逆鬼がこそばゆい気持ちになるも、話を本題に移そうと、逆鬼が「で、そんな事より……アンタが来るって事は、中華街の話しか？」と促した。

その逆鬼の問いに、伊田は「知っているのなら、話は早いのもう」と言いながら、左腕にかけているジャケットの懐から、自身の警察手帳を取り出し、それを逆鬼に開いて見せた。

伊田の警察手帳には、相も変わらずな厳つい風貌で撮られた伊田の証明写真と、伊田の所属する“警視庁組織犯罪対策3課”などが記載されていた。

だが、そんな形式めいたものは伊田もすぐに仕舞ってしまい、逆鬼も特に気にした様子も無く流していた。

「今回、ワシがわざわざ出向いたのは、その中華街で起きている、

“金城組と中国マフィア”の抗争についてじゃ」

「やっぱり、金城組は独断で動いてんのか？」

あの時、新聞の見出しを読んだ時から気になっていた事柄……だが、伊田は「さあの、まだ、確証は得てないがな」と、あっけらかんとした態度で答えた。

逆鬼は、そんな伊田のいい加減な態度に、何か言おうとしたのだが、それよりも早く、伊田が話しを進め始めた。

「じゃが、この事件が始まったと同時に、ワシが歌舞伎町にある金城の事務所に行った時は、既にもぬけのからじゃった……おそらく、

事務所取っ払ってから、中華街にかち込みを掛けたんじゃな」

「事務所をね〜。そうになると、益々独断って線が強くなってくるな」

「まあ、金城っちゅう男は、親である六代目の平八に憧れて、極道の道に入って来た奴じゃからな……。その親から譲り受けたシマの事務所を、本部に連絡もなしに放棄するっちゅうのは、金城の性格からして、まずありえんじやろう……。それに」

「それに？」

「ワシら3課が入ったとき、奴の事務所に大量の血痕が残されていたんじゃ……。」

「血痕？」

ヤクザの事務所に大量の血痕……。どう考えても穏やかでは無い情報に逆鬼は臭ったのか、訝しげな表情をする。

だが、伊田の方は“うー”と唸りが聞こえて来そうな、眉間に皺を寄せた表情で。腕を組みながら、考え込むような仕草をしばらくした。

「おう、それがどうにも腑に落ちん感じでのう……。血痕を残さないように細工した形跡はあるんじやが、金城組の奴等にしては杜撰ずさん過ぎる処理の仕方じゃったんじや」

「杜撰……。？ どういう事だ？」

伊田は、一瞬だけ伝えて良いものか悩む仕草を見せるが……。逆鬼を一度見ると、それを考える事も面倒臭くなった様に喋り出した。

「本当なら、外には漏らすなって口止めをされておるんじやがな」

「アンタが、そんな上の命令を守る玉か？」

「だからのう、喋っちゃおうと思っつんじや」

その風貌に似つかわしくない、お茶目な笑みを漏らす……。だが、

その様な茶目つ気は、今は必要なく、伊田の表情は、すぐにベテラン刑事そのものに戻っていく。

「金城組の事務所に残されていた血痕は、確かに拭き取るうとした痕跡はみられた……じゃが、拭き取り方が中途半端で、どう見ても、止む負えぬ事情で作業を中断させた感じにしか見えんかったのじゃ」「それで？」

「それを気になって、ワシ独自で調べてみたんじゃが、どうやら、この事件には、もう一つ、いや……二つぐらい厄介な事が絡んでいた様なんじゃ」

「二つの厄介ごと？」逆鬼の、驚きと戸惑いの入り混じった問いに、伊田は「そう、それも、かなり面倒臭い類のものじゃ……」と、眉間や額に皺を寄せながら答えた。

「まず一つ目じゃが……金城の事務所に残されていた血液の照合じや」

「それが、どうかしたのか？」

「どうしたもこうしたも、ワシもまだ信じられんのじゃが……あの場にあつた血液を鑑定が照合したところ、なんともまあ、あの平八の息子“鬼島亮平”が持つDNAと一致したらしいんじやよ」「ッー!？」

伊田から出て来た男の名前に、逆鬼の目が驚いたように見開かれる……。

当然だ、なにせ、“大量の血痕が残っていた”と前置きで説明されていたのだ。

その血痕の持ち主が、自身の弟子である兼一の友人だというのなら……もはや、なんらかの大怪我を負って、この事件に巻き込まれたのは明らかで、もとより人が良く、面倒見の良かった逆鬼にとっ



て、弟子の友人が大怪我を負うという事は由々しき事態でもあるのだ。

その様子を見て取った伊田が、逆鬼に「まあ、お前さんが驚くのも無理は無いが……」と、事情を知らないが故の勘違いを起こしながら、話を続けた。

「これは、紛れも無い事実だそうだ……あの忠犬とも称されていた金城が、親の息子に危害を加えたつてのは信じがたいが、場所が場所じゃ。やったのは十中八九、金城本人じゃな」

伊田が言い切るように断言するなか……逆鬼は知り合いをやられた事に、己が胸中を激しく怒りに包まれていくのを感じた。

しかし、ぶつける相手もないのに、怒りに身を任せたのでは、なんの意味も持たない。

故に、逆鬼は腕を組む力を強くしながら、溢れ出ようとする怒りを抑え、冷静に伊田との会話を続ける事にした。

「やったのが金城だとして、やられた方はどうしたんだ？ 血痕が大量に残されてたんだ、ちゃんと処理できなかったんだろ？」

なるべく、マル暴の刑事に、梁山泊と亮平の関係を勘繰られたくなかった逆鬼は、少しだけ曖昧な聞き方で、伊田に亮平の所在を聞く……。

だが、伊田は「それが、今回の一つ目の厄介事の問題なんじゃよ」と、尋ねた逆鬼に、困ったような視線を向けた。

「どづいつことだ？」

「普通、処理が間に合わなかったら、死体も中途半端に放置されている事が多いんじゃないが、なぜか鬼島亮平の体は、その建物の中のごにも無かった……まあ、これだけなら憶測でも推理ができるが」

「できるが？」

「実はのう……血痕の跡や、現場の状況を捜査していくうちに、あの事務所で、なにやら派手な一悶着があったのは確かなんじや。それと、地面に倒れていたのが、鬼島亮平一人だけではない事ものう」

派手な一悶着……当然、あの砕けた大理石のテーブルや、投げ捨てられた執務机などを指しての事であろう。

逆鬼は、その伊田の説明に内心で「まあアイツが、ただやられるなんて事もねえだろうしな」と少しだけ納得を得ると、続きを促すために「一人だけじゃねえだと？」

「おう……鬼島亮平の他に、もう一人、女性だと思われる髪の毛の跡が、血痕の跡に残っておった。おそらく、その女性も、鬼島組の関係者じゃろうな……」

「その女は特定できなかったのか？」

「まあ仕方ないじやろうて。女性の血液も髪の毛も、現場には一切残ってなかったんじやから……分かるのは、その女性は鬼島亮平と共に、あの血溜まりに倒れていたということだけじや」

自身が持つ情報の少なさに齒噛みする伊田であったが、ここで悔しんでも仕方が無い事は、ベテランでなくとも気付くと言うもの。

故に、伊田は逆鬼に更なる事件説明をしていく。

「ここまでが一つ目の厄介ごとだとして、こっからが二つ目の厄介ごとじや」

「ああ」

「これもまあ、まだ憶測の域は出んのだが。ワシが事件現場の捜査を終えた後、ヒルズ内や歌舞伎町周辺の聞き込みをして周ったんじや」

現場の聞き込み……己の足で情報を集めていくというのは、やはりベテランであればこそ、更に重要視されるものだ。

そこで得た情報は、むしろ現場で得られるのと同等の価値があるものもある。

だからこそ、現場に踏み込んだのが速かったのを活用して、伊田はまだ事件が暖かい内に聞き込みをしていったと逆鬼に説明してから。夏の暑さに出て来た汗を、ポケットに入れていたハンカチで拭いながら、伊田は得た情報を逆鬼に伝えていった……。

伊田が得た情報とは。

事件前の夕刻ごろ、とある通りで、ストリップ・パブのキャッチをしていた20代男性が、爆竹を鳴らしたような数十発に渡る銃声を、ビルとビルの間にある路地裏の様な場所から聞いたという……。

そして、その銃声が鳴り止んでから数分経った頃、裏路地の出口を塞ぐように、一台の黒いロールスロイスが突然裏路地の出口に横付けして、何かを待っていた様であった。

そこから更に数分したころ、裏路地から何やら二人の男女が、黒塗りロールスロイスの運転手に迎えられながら現れたという。

そのうち、体格が良く身長の高い男性の方は上半身の数箇所から出血していて、女性の方は長い黒髪の美女であったと20代男性は語ったらしい。

また、二人の対照的な男女が車に乗り込むと、何故か運転手の男が急いで裏路地へと走っていき、戻って来たときには、ストッキングなどで拘束された、外人の美女を担いでいたそうなの……。

運転手は担いできた外人の美女を、車のトランクへと投げ込むとそのまま逃げるように、ロールスロイスを走らせたという……。

伊田が言うには、証言をしてくれた20代男性に、昔の鬼島亮平の顔写真を見せたところ、“確かに面影があったような気がした”という証言も得られたと言う。

しかし、伊田が自ら行った聞き込みの情報は、これだけではなく

……むしろ、ここからが本番といった内容であった。

「他にも、鬼島亮平と、もう一人の女の目撃情報はある……じゃが、そのどれもが荒事ばかりで、調べんでも分かりそうなものばかりじゃった。」

「ふうん、もう一人の女に、路地裏から担がれて出て来た外人女ね」

あの亮平が、新宿歌舞伎町で女人関係の事件に関わっていた……これだけで、少し逆鬼も興味が沸く話題なのだが、どうやら亮平は、歌舞伎町を一日過ごしたただけで、他にも相当ヤンチャしていた様であった。

しかし、問題はそこではないと、伊田は話を続ける。

「じゃが、さつきも言った通り、厄介事は二つある……一つは死んでいるかどうか分らんが、消えた鬼島亮平の体と謎の女。そして、もう一つは、ワシら3課がヒルズに到着する直前の話しじゃ」

「……というと？」

逆鬼が、思案顔で先を促そうとする……しかし、先程まで何に気にする事も無く、事件について説明していた伊田が、突然辺りに視線を回し始めた。

注意深く……そしてすぐに対応できるように、眼光鋭いまま視線を周囲に配っている伊田を見て、逆鬼は「急に、どうしたんだ？」と問いかける。

その声に、伊田は視線を巡らすのを止め、再び口を開いた。

「そうじゃな……この話しは、ここでするものじゃない。逆鬼、少し場所を変えようかの？」

「まあ、構わねえが……」

そう言うと、先程から周囲に気を配っていた伊田は。現在いる、梁山泊の道場前の庭に、何か違和感を覚えながら、伊田に言われた通り、場所を変えるために歩き出した逆鬼の後ろを着いて行った。二人の屈強な男達がいなくなつた庭には、日の光が一心に注がれながら、再び朝特有の静けさが戻っていた……。すると、そんな静かな庭の隅にある草むらから、カサカサと葉の揺れる音が聞こえて来た……。

そして、その草むらから、数枚の葉を散せながら、一人の小さな男が姿を露にした。

「なるほどネ……あの伊田という男、こちらの気配に気付いていた様ネ。並みの刑事ではないということかネ」

木の木陰に包まれた草むらから出て来た人物……特徴的な濃い髭に、兼一よりも小柄な体格をした、中国の老人、馬剣星だ。

彼は、自身が被っていた帽子についた葉を落としながら、草むらからカンフーシューズを履いた足を出しながら、ゆっくりと木陰から出て来た。

「しかし、やはり亮ちゃんが巻き込まれていたみたいネ……」

言いながら剣星は、伊田と逆鬼が歩いて行った、梁山泊の離れがある場所を見据え……。

「（今回は逆鬼どんには悪いが、こちらの私的な問題も出て来たネ……詳しい情報を聞き次第、勝手に中華街へ向わせてもらうネ）」

そして、剣星も梁山泊の離れへと歩を進ませた。

逆鬼に道場で待っていると言われた兼一は、言われた通り、律儀にエプロン姿の美羽と共に、道場で先程まで脱いでいた道着の上を羽織ながら、逆鬼が来るのを待っていた……。

「それにしても、あの伊田って言う人は、逆鬼師匠に何の用なんだろう……」

道場内の畳の上で、体を冷やさないように柔軟を続ける兼一は、隣りで夏の暑さなど感じないかのようには、涼しい顔で正座している美羽に、少々の心配を含んだ呟きを漏らした。

その兼一の呟きに含まれた心配を察した美羽は、「別に心配な事ではありませんよ」と、少し噴出しそうに微笑んだ。

「え？ どういう事ですか？」

「あの方なら、逆鬼さんに“お仕事を依頼”しに来た方ですから、特に気にする事でもありませんわ」

現役でベテランのマル暴からの依頼……しかし、兼一は「逆鬼師匠って、仕事してたんですかっ!？」と、開脚していた足を閉じながら、別の方向で失礼な驚き方をしていた。

兼一の失礼な反応に「兼一さん、それは流石に酷いですわ」と、美羽は苦笑を禁じえなかった。

「だって、あの人！ 空手の稽古以外は毎日お酒飲んで、気が向いたら競馬とかパチンコのギャンブルに行ってしまう様な人ですよ！？」

「ま、まあ否定はしませんが……」

普段の逆鬼の生活を、ありのままに連ねた兼一に、美羽は同意を  
するしかなく。

胸中でフオローできなかった事に、小さく侘びを入れた……だが、  
別に逆鬼という男は、そんなダメ人間なだけではないと、美羽は知  
っているのです、とりあえず、その事を兼一に説明する事にした。

「ですが、あの人は定期の仕事が無い代わりに、今回の様に、他の  
方からの依頼を受ける、いわば助っ人の様な仕事をなさっているの  
ですよ？」

「助っ人？ どういう意味ですか？」

美羽の簡単な説明に、兼一は頭上に“？”を浮かべながら尋ねた。  
その反応に、美羽は「コホン」と咳払いしながら。

「簡単に言えば、依頼主が手に余る様な荒事に、依頼を受けた逆鬼  
さんが手を貸すという事です」

「へ〜……（なんだか、時代劇の“先生”って呼ばれる人みたいだ）  
」

感心したような、少しだけ逆鬼のだらしない生活が理解できた様  
な……そんな微妙な心境に、兼一が囚われていると。

「……………あれ？」

兼一が、道場に夏の熱波を籠らせない様に開けていた雨戸の向こ  
うに見えていた逆鬼と伊田が、いつの間にかに、庭からいなくなっ  
ていた事に気付いた……。

不思議そうな表情で声を出した兼一に、美羽も「どうかしたので  
すか？」と尋ねながら、兼一と同じ方向に眼をやる。

「あら？ 逆鬼さんたちがいませんね……もう話しは終わったのでしようか」

「だったら、もう逆鬼師匠が……うん？ あれは馬師父？」

二人が視線を庭に固定していると、庭の草むらから剣星が出てきたのが見えた……。

普段、エロい事がなければ理性的なオッサンが、特に用も無さそうなのに草むらから出てくる……この不思議な光景に、二人は互いに視線を“意外なものを見た”という雰囲気で合わせる。

すると、草むらから出て来た剣星が、道場にいる兼一と美羽に気付かずに、そのまま梁山泊の離れの方へと歩いていつてしまった……。

「どうしたんだろう……こっちに声もかけないなんて」

「そうですね、普段なら、兼一さんが時間を持て余していたら、稽古に付き合っ下さるのに」

いつもと違う、どこか余裕の無い剣星の様子に、二人は同時に顎に手を当てながら、思索とも困惑ともれない、どこか得体の知れないものを見た感覚に、先程までの逆鬼に対する興味を移してしま

う。  
すると、これまでエプロン姿で正座をしていた美羽が、何かに“ハ”っと気付いたように、畳の床から立ち上がった。

「美羽さん？」

突然立ち上がった美羽を、不思議そうに見上げる。

その視線を向けられた美羽は、焦っているのを隠さずに「そういえば、まだ昼食の仕度をしている最中でしたわ！！」と、口を開いた手を当てながら、うっかりとした可愛い表情をした。



自身のうつかりに気がついた美羽は慌てた様に、道場の兩戸の向こう側に脱いであったサンダルを履きなおし「それでは兼一さん、昼食までもう少しなので、稽古頑張ってください!」と、昼食の仕度に戻るために梁山泊の母屋へと駆けて行った……。

「稽古って言ったって……」

畳の上に取り残された兼一は、稽古を再開しようにも、新たにメニューを与えてくれる筈であった逆鬼も、普段なら暇な時間を使って稽古を見てくれる剣星もない事では再開のしようがないと、途方に暮れてしまう。

自習練をしようにも、そろそろ昼食の時間だし、根を詰めた稽古は望めないだろう……。

故に兼一は、途方に暮れるよりも、先程草むらから出てくるという謎の行動をとっていた、いかにも暇そうな剣星を捕まえようと、畳の床から腰を上げたのだった。

道場近くの庭から場所を移した、逆鬼と伊田の二人は。

現在、他の師匠たちも住んでいる梁山泊の離れ……の、逆鬼の部屋で、“もう一つの厄介事”について話していた……。

逆鬼の部屋というのは、黒革のソファーに、どこかアメリカの映画に良く出てくる、少しヤンチャな若者の部屋といった雰囲気……。

「おつおつ、ずいぶんと汚らしい部屋に住んどるんじゃない……」  
「うるせえよ」

伊田の予想通りといった口調の様に、小さな足の長い丸テーブル

には、数本のボトルと、飲みつ放しのコップが放置されていたり。梁山泊の古築が露骨に出ている壁に貼り付けられた、何やらアメリカンな旗の様な物や、ボトルセラーと化してしまった古い小さな冷蔵庫などが相まって、とてもじゃないが逆鬼の様な良い歳をした男性が住むような部屋ではなかった……ただ、らしいと言えば、らしくもないが。

井田に馬鹿にされた様に言われた逆鬼は、言葉とは裏腹に、特に気にした様子も無く、新たに冷蔵庫から取り出したビール瓶の飲み口を“手刀で割り”、二杯のコップに慣れた手付きで注ぎながら、客人の前だというのに横柄な態度でソファ―に腰掛けた。

「ほれ」

ビールを注いだ二杯のコップのうち、一杯を部屋の窓際に立っている伊田に差し出すが、伊田は右の掌を逆鬼に向けながら「あいにく、医者に止められとるんでな、遠慮する」と、本当に残念そうに断った。

「なんだ、“鬼退治の大二郎”も、歳には勝てないってか？」

茶化すように言う逆鬼に、伊田は……「仕方ないじゃろう、平八の奴が六代目継いでから、ワシも暇になってしまったんじゃから」

「仕事が無くなったからやる事無くなって、酒ばっか飲んでたのか？」

「まあ……そのせいで、妻にも逃げられてしまったわい」

「そいつは、残念だったな」

意外と重い話になってしまいそうだった逆鬼は、すぐに話題を本題に戻そうと、伊田に断られた一杯のコップを、ソファ―近くに置

いてある丸テーブルに置き、さっそく口火を切った。

「で……場所を変えなきゃならねえ話したのは、どんなヤバイ話しなんだ？」

先程までの雰囲気嘘の様に、一杯のビールを持った逆鬼の表情が真剣なものへとなる。

その変化に気付くと、若干ブルーになりかけていた伊田も、纏う空気を「ふん……」と鼻息を噴出して戻しながら、先程の話の続きをする事にした。

「え〜っと……確か、ワシら3課が、ヒルズに到着する直前の話しじゃったか」

「ああ」

「おお、そうじゃったな」

どこから話していいか迷うが、とりあえず事件当日……ワシら3課は、国際指名手配犯のイワン・モロゾフという男が、日本に不法入国しているという情報を密かに掴んでいたんじゃ。また、その男が都内のどこかに潜伏しているという事も、事件当日より前に掴んでいたがな。

相手は少し前まで、レスリング界の帝王とまで呼ばれた男じゃ、ワシら3課の連中も、久しぶりに腕の鳴る馬鹿が出てきて、随分と息巻いておった……。

そして、モロゾフが事件当日の午前にな宿歌舞伎町へと向かった事も、奴が潜伏していた建物の近くに住んでいた、協力者っぽい中国人留学生の餓鬼から、至って巧拙丁寧な聞き方で聞き出した……なんて、潜伏先が分かっていたのに、突入しなかったかだって？

モロゾフと言う男はのう、何も腕っ節だけが強いわけじゃないんじゃ。

奴は本国のロシアが、ソ連から国名が変わる前から現役で軍人をやっていたらしく、当時は“特殊任務部隊”<sup>スベツナス</sup>の隊員と真剣勝負をし<sup>ガチンコ</sup>ても、決して引けは取らない実力を持つていたそうなんじゃ……もちろん、腕っ節だけの話ではなく、工作から隠密、パラシュートの降下技術まで何でもじゃ。

そんな平和ボケした日本からは、かけ離れた技術を持った男じゃ……当然、毎回毎回、どう察知したのか分からないぐらいの危機探知能力で、ワシら3課の張り込みやら何やらから逃れられてしまっていたのじゃ、恥ずかしい話しじやがの。

じゃが、そんな男じゃ、何の目的も無しに行動なんかせんよ。

故にワシらは、モロゾフが向ったという歌舞伎町に急いで向かい、誰か目撃してないか聞き込みをして周っていたんじゃ……まあ、体が他の奴等より何倍もデカイ男の目撃情報じゃ、向った先を探すのに、特に苦労はせんかった。

だがのう、向ったさきが分かったとはしても、場所が金城組の事務所がある歌舞伎町ヒルズなら話は別じゃ……下手に踏み込んで、簡単に追い返されるのが目に見えとる。じゃからワシらは、不本意ながら、一度歌舞伎町から引き返したんじゃ。

「なんで、ヒルズの前で張り込まなかつたんだ？」

「あそこには金城組も使っているヘリポートがある、使われたら張り込みなんて、向った方角を知らせるぐらいにしか役には立たん」

「向った方角だけでも知つといた方がいいだろう？」

「知つたとしても、ヘリから降りて車を使われれば、方角すら見失う事になる。ワシ的に、最近こういう場合に陥った時は、いつも他の課に任せているんじゃ……残念じゃが、最近は情報戦がハイテクになってしまったものでのう、老いばれが必死こいて探すよりも、断然に早いんじゃ」

まあ、情け無い話しは、ここまでにして……。

歌舞伎町から引き返した後、ワシらは特にやる事のないままに、時間を過ごしていたんじゃが……昼頃になって、歌舞伎町にある交番が忙しくなってきたという情報が入ってきたんじゃ。

まあ、その時は『いつもの事』と思っていたが、今思えば、鬼島んとこの坊主が、ヤンチャして周ってたんじゃな……惜しい事をしたわい。

そして、時間も夜になり、待機するのも飽きてきたとき、突然ヒルズの事務から『金城組の事務所、何やら乱闘が起こっているみたいだ』との通報が回ってきたんじゃ。

まあ、現場の様子を見れば、乱闘というより抗争に近かったがのう。

ワシらは、これ幸いと金城組の事務所に駆け込む準備を整え、歌舞伎町に急いで向ったんじゃ。

じゃが、着いてみれば、既に騒動も終わったあと……現場には、さっき説明した通りの状況が残されておった。

「まあ、その辺の話しは分かったが……」

逆鬼が、持っているコップでビールを一口飲み「どの辺が、もう一つの厄介事なんだ？」

「そう急くな……こっからじゃよ」

現場に踏み込み、状況を確認したあと、聞き込みに周ったのはさつき言っただな？

聞き込みを続けるうちに、ワシらの中で、ヒルズ周辺を担当していた仲間から、ある気になる情報が出てきたんじゃ……。

それは、ワシら警察がヒルズに来る前に、あまり見ない救急車が一台と、ヒルズ前の通りには珍しい、TV局が良く使うような、頭にでかいアンテナが着いた角ばったワゴンが停まっていたらしいん

じゃ。

もちろん、周辺の通行人も何事かと、その珍しい車の組み合わせを見ていたらしい……すると、ヒルズの中から患者と思われる人間をストレッチャードで運ぶ“外人”の男達と、赤い汚れが多く見られる着物を着た女性を担いだ、白人女性が出て来たそうなの。

そして、その集団は周りに眼を配る事も無く、急いだ様子で患者をあまり見たことの無い救急車に乗せ、他の人間たちも其々の車に乗り込み、流れるような作業でヒルズ前から消えていったそうなんじゃ。

「……つまり、その“外人連中”が、もう一つの厄介事だったのか？」

伊田の説明で、何と無く理解を得た逆鬼は、持っていたコップのビールを飲み干しながら、そう尋ねた。

「ああ、おそらく、その“外人連中”が、現場にいる筈であった鬼島亮平と、もう一人の女性を持ち去ったのじゃろう」

「だけどうも、そいつらも、もしかしたら金城組の構成員って事はねえのかよ？」

逆鬼の言葉に、伊田は「ないな」と断言する。

「金城組以前に、東堂会は外人を好まんのじゃ……もし金城組の構成員に外人が居たとしても、そんなに多く、あの忠実な金城の奴が、外人を揃えるとは思えん」

「そうか」

日本の極道の事なら、目の前にいるマル暴の人間よりも知っている者はそうはいない……。

故に逆鬼は、キツパリと断言した伊田の言葉を信じる事にしたのだが。

「まあ、これはワシの勘だけでは無いからの。ヒルズから出て来た外人達が、金城組に關係が無いのは確實じゃよ」

「なに？」伊田の言葉に逆鬼が反応する。

ヒルズから出てきて、金城組の事務所で負傷した二人の人間を連れ去っていった者達が。金城組とは關係が無い……なら、何なのか？

普通、事務所で荒事が起こり、処理に手間取ったとしても、全く關係ない者達にやらせるだろうか？

なら、使い捨てにする下っ端に任せた方が、よっぽど安全なのではないか？

そんな逆鬼の疑問も、次の伊田の言葉で解けるが……。

「ヒルズから出て来た連中を、他の課に協力してもらって、街の監視カメラやら何やらで追ってもらったんじゃ……」

「で？ 結局なんなんだ」

「そしたらもう、その外人連中が向った先が、ワシらただの警察じや入り込めない場所じゃったんじゃよ」

逆鬼は訝しげに眉を吊り上げながら「お前らが入り込めない場所？」

その視線を、伊田は歯噛みをした様に受け止めながら「米軍基地じゃよ……横須賀のな」と、悔しそうに言い放った……。

「米軍基地だと!？」

驚愕の色に染まる逆鬼の表情を、伊田は一瞥しながら、視線を窓の外へと向ける。

「ああ、思いつきり治外法権の場所じゃよ。もしかしたら、ワシらが唯一踏み込めない場所かもしれん」

「だが、なぜその外人どもは、米軍基地になんか入れたんだ？」

「知らんよ……ワシらも、上に掛け合ってみたんじゃが、ほぼ門前払いじゃった。きな臭い事にな……」

その頑丈そうな顎に手を当てながら、窓の向こう側を睨みつけるようにして眺める……その仕草を見ただけで逆鬼は、伊田がどうやら相当悔しがっているのを理解した。

だが、窓の外を睨みつけること数秒……伊田がソファーに腰掛けしている逆鬼に、視線を向けなおした。

「これが二つ目の厄介事じゃよ……手掛かりが外国に入り込んだじゃ、どうしようもないからの」

「まあ、そうだよ……だが、俺に依頼をしに来たって事は、他にもあるんだろ？ まさか、米軍基地に殴り込みかけろって訳じゃねえよな？」

「冗談めかしに言う逆鬼に「お前なら出来るじゃろうが、んなもん頼める訳ないじゃろうに……」と、疲労の見える溜息混じりに吐いた。

だがそれなら、荒事を大の得意とする逆鬼に、何を依頼するのか？ 逆鬼が、伊田の話しを聞きながら、そう考えていると……。

「お前に頼むのは、中華街に金城組と共に向ったモロゾフの逮捕協力と、中華街のマフィアに最近雇われたという噂がたっている、“馬槍月”の対処じゃよ」

「馬槍月だと!？」



馬槍月という名前が出て来た瞬間、逆鬼の表情に、先程の米軍基地など比べ物にならないくらいの驚愕が露となった……。

馬槍月……以前、谷本が兼一に対して尋ねた人物の名前だ。

「ああ、マファイア連中とドンパチやつてる姿が目撃されたモロゾフとは違って、明確な目撃情報は無いが……中華街連中の妙に浮き足立った感じを見て、噂の信憑性はかなり高いじゃろうな」

「随分とまあ、ヤバイのが出てきたな……」

「まあ……大陸の方でも1・2を争う達人じゃ、本当に出てきたとしたら、ワシらではとても対処出来んじゃろうな」

達観したように伊田は言う、何やらおもむろに左腕に掛けていたジャケットの胸ポケットから、一枚の紙を取り出し、それを逆鬼に手渡した……。

「梁山泊に直接協力を頼む際の許可書じゃ。一々メンドいがのう、これを渡さぬと上が煩いんじゃよ」

伊田から手渡された書類に目を通すと、簡単な書面に警視庁の印が押された、どこか寂しい書類であったが、確かに現警視庁の長である警視庁長官の名前も記載されており、一応由緒ある物なのが見て取れた。

「お前ら達人連中を動かす場合、慎重に事を進めなきゃいかん……昔から言われている事じゃが、もう大戦のほとぼりも殆ど冷めた時代じゃというのに、上のお偉方は、いつまでも他国の顔色を伺っておる有様じゃよ」

「仕方がねえだろ、実際、俺らが勝手に動くと、他の“裏の連中”も動いちまうんだからよ」

何のけなしに言った逆鬼は、手渡された書類を一張羅の革ジャンに仕舞い込みながら。腰掛けていたソファから腰を上げた。

「で、今から行くのか？」

新たな仕事の内容も理解した事で、不敵に笑いながら伊田に視線を向ける逆鬼……。

その逆鬼の眼に答えるように、伊田も同じ様に笑いながら「おう」と答えた。

「既に、東堂会で横浜（よこはま）を仕切ってる横岸組（よこがし）の組長、横岸港（よこがしみなと）が。早朝、野朗自らロールスロイス運転して横須賀に向ったって言うタレコミも入ってる……動くとしたら確実に今夜だ、ワシの勘がそう言うてる」

「なら、早目に動いた方が良いな」

「ああ、お前さんはバイクで行くんじゃろ？」

「まあな」

傍目から見れば、他愛の無い口調の会話だが、二人はこれからヤクザとマフィアが抗争を続けている火事場へと乗り込むのだ……。

口調も他愛なければ、表情には楽しそうな笑みまで浮かんでいる……だが、この二人には、そんな軽い乗りの方が性に合い、また似合ってもいた。

そして二人は、まるで部屋から近所のコンビニにでも出掛けるような軽い足取りで、様々な疑惑が残っている横浜中華街へと、足を進めるのだった。

時は少しだけ……ほんの少しだけ遡り。

現在は逆鬼と伊田が、梁山泊の離れの部屋で依頼の話しを続けている頃だ。

『馬槍月だと!?!』

「(やはりネ……)」

木製の古い引き戸の向こう側から、逆鬼の驚きの声が聞こえて来た……。

そして、それを部屋の外の廊下で聞き耳を立てている男、馬剣星が聞き逃す筈が無かった。

だが、別に聞き耳を立てていると言っても、ドアに耳をくっつけている訳ではない。

梁山泊の建物は、基本的に古い木製の物ばかりなので、別にドアに耳を当てなくとも、廊下に立っていれば、勝手に聞こえてきてしまふのだ。

故に剣星は、部屋にいる二人にバレぬ様、自身が放つ呼吸や感情の起伏などを極力抑え、気配そのものを絶っている……。

「(こちらが得た情報の裏は、これで取れたネ……あとは、逆鬼さんには悪いけど、こっちで勝手に動かせてもらうネ)」

部屋から聞こえて来た声に、何かを得たように頷きながら、離れの廊下を後にしようとする剣星……例え、目標を達成したとしても、気配は未だ絶つたままだ。

だからこそ、ゆっくりと歩き出したとしても、木の床の軋む音すら響かせない……。

慎重に、されど不自然ではなく歩いていく剣星の気配を、もはや誰も……「師父、どうしたんですか、こんなところで?」普通に玄関から入って来た兼一に、気付かれてしまった。

「な、なんね兼ちゃん！ 逆鬼どんの練習は、どうしたネ!?」

あまりに逆鬼と伊田から気配を消す事に意識を集中させてしまっていたせいか、剣星は突然正面からかけられた声に、普段からは考えられない狼狽を見せる（エロの時は、結構見せている）。

先程までの行動と、それを不審に思った兼一は「まさか、何か隠してるんですか?」と、疑いの眼差しを自身の師匠に向け始めた。

「べ、別に何も隠してないネ、おいちゃんは至って正常ネ」

「そうかな?……だって、さっきも僕と美羽さんが道場に居たのに気付かなかったみたいですし。また、しぐれさんに迷惑でも掛けるつもりですか?」

あくまでも疑りの視線を自身の師匠に向け続ける兼一に、剣星は「そんなことないネ、見ての通り、カメラも何も持ってないネ」と、言葉通りのゼスチャーを兼一に見せた。

「だったら、何でさっきからコソコソとしてるんですか?」

「そ、それはネ……」

おそらく、剣星自身も、己が普段よりも余裕が無いことに気付いているであろう……だが人間というものは、何か一つ、重大な物事に囚われてしまった時は、自分でも信じられないミスをしてしまうものだ。

故に、この日の剣星は、弟子に見つかってしまうだけではなく、更なるミスを、この場で犯してしまう……剣星の後ろから、ガラガラと引き戸が開けられる音が聞こえて来た。

その音に「！」剣星も過敏に反応するが、時すでに遅し……開かれた引き戸の部屋から、二人の大男が、表情こそ普通なもの、雰囲気を楽しそうなものにながら出て来た。

「あれ、どうしたんだ二人とも？」

「あ、逆鬼し……」

兼一が、剣星の後ろから現れた逆鬼に口を開こうとした瞬間……

「兼ちゃん、すまんネ！」

「あ、師父!?」 剣星が突然走り出し、兼一の目にも止まらぬ速さで離れの玄関から外へと飛び出してしまった……。

一瞬の出来事……まさに、そう形容するしかない剣星の俊足の逃走劇に、兼一は取り残され、逆鬼といた伊田は「なんじゃ一体？」と、訳が分からんといった表情をしていた。

「たく……剣星のやつ、バレてんのに気付かないって、相当参ってやがるな」

だが、この離れの玄関で一人だけ、逃走していった剣星の事を理解する者がいた。

「逆鬼師匠は、馬師匠の様子がおかしいのに気付いてたんですか？」 兼一は、廊下から歩いてきて、“しょうがねえな”といった表情をしながら、玄関で靴を履く逆鬼に、そう尋ねた。

すると、靴を履き終えた逆鬼は、兼一の問いに一瞬だけ考える素振りを見せながら……。

「なあ、今回の事件に、こいつも連れてっていいのか？」 後ろでいまだ、剣星の俊足に驚いていた伊田に、逆鬼は聞いた。

「うん？ この坊主をか？」

「そうだ……まあ安心してくれ。別に、前に出そうって訳じゃねえんだ」

言いながら、持っていたバイクのキーをチャラチャラと指で弄ぶ

逆鬼……。

その逆鬼の言を吟味しながら、逆鬼と兼一の両方を何度も見直す……というより見定める伊田。

その間、兼一は何度も伊田に視線を合わされる事になり、若干恐縮したような思いに駆られる。

何度も見定め、何分も悩んだ伊田は、次第に考えるのが面倒になったのか「構わんぞ、お前さんが確りと責任を持つならな！」と、若干投げやりにも聞こえる口調で逆鬼に言い放った。

「へへへ、ありがとよ」

「じゃが、危ないとワシが判断したら、容赦なく帰らせるからな」  
「分かってるって」

言い放つと、伊田はそのままズカズカと離れの玄関から外へと出て行ってしまふ……。

「逆鬼師匠？ 連れてくつて、どこにですか？」

二人のやり取りを理解できなかったのか……兼一は、出て行った伊田を見送りながら逆鬼に困ったような視線を向けた。

だが逆鬼は、どこか不敵に見える楽しそうな笑みを浮かべながら、兼一の視線に答えた。

「別に、ただ今から中華街にでも行くか？ て、話したよ。もちろん行くだろ？」

「え、でも……美羽さんが、もう昼食を作っちゃってますよ？」

「大丈夫だ、それなら全部アパチャイが食うから。俺らは中華街で、上手い飯でも食いに行こうぜ！」

問題は一切無いと、既に“兼一の道着の襟首を持った”逆鬼は、

そのまま兼一に出掛ける仕度をさせようと、離れの二階へと兼一を  
“投げ入れた”。

実は、この離れは二階建てだと言うのに、階段という昇降手段が  
無い……なぜなら以前、逆鬼と剣星が寄った勢いで、その昇降手段  
を綺麗に破壊してしまったからだ。

そして二段ベツトの様に分かれた一階と二階には、申し訳程度の  
昇降手段として、天井から一本の綱が下ろされている。つまり、毎  
回毎回、一階から二階へと上がるには、この綱をレスキューよろし  
くで昇って行かなければならないのだ。だが、今回は逆鬼に投げ入  
れられた事で、出番は無かった。

二階の床に投げ入れられた兼一は、下で笑いながらこちらを見て  
いる逆鬼に向かって「危ないじゃないですか!？」と抗議の叫びを発  
するが。

「ちんたら言っていないで、さっさと仕度してこい!!」

それ以上の怒鳴り声で返されてしまい、何も言えなくなってしま  
った兼一は。

逆鬼のいう事を、渋々受け入れるしかなかったのだ……。

第五十七話 横浜中華街編1（後書き）

少し強引……少し描写不足。

分かってます、最近集中力が続かないんです。



第五十八話 横浜中華街編2（前書き）

文章がおかしい……てか、柔術わかんね。

## 第五十八話 横浜中華街編2

梁山泊から、美羽に昼食はいらないと断りを入れて訪れた港町……。

高層ビルや、港と海を一望できる公園などが観光またはレジャースポットとして有名な街、横浜。

その街でも有数の食欲をそそる匂いや、視向を引かせる赤や金の煌びやかな装飾が特徴的な地区……横浜中華街。

その街に、逆鬼のハーレーダビットソンで連れてこられた兼一は現在、中華街でも屈指の煌びやかな装飾を誇っている門、かんでいひょう関帝廟の前に来ていた。

今の時刻は丁度お昼過ぎ……だが、肉まんなどの美味しい匂いを漂わせる中華街の人通りは、全く持って衰える事を知らない。

故に、世界中の中華街にも見られる、赤や金などで塗装された厚みのある関帝廟の門周辺には、明らかに人の波が生まれていた。

その様子を関帝廟通りの向かい道路で、逆鬼のハーレーダビットソンに着けられたセカンドカーから眺めていた兼一は。

「やっぱり夏休みだと、凄い人ばかりですね」

「まあな、とりあえず、お前は昼でも食って来い。俺と伊田は、少し用事を済ませてから行く」

言いながら、被っていたヘルメットとサングラスを取る逆鬼……。

「え？ なんの用事ですか？」

逆鬼に続き、柄のTシャツにジーンズ姿の兼一も、被っていたヘルメットを脱いだ。

「ああ、ほんの少しだけな。だから、その間に美味しい店でも見つけてる」

ハーレーに跨った状態で、セカンドカーに座っている兼一を笑顔で見下ろす。

すると、二人の後ろから、セダンタイプの覆面パトカーに乗っていた伊田が歩み寄ってきた。

「逆鬼は今時、携帯を持つとらん馬鹿じゃからの。ほれ、坊主の携帯を出してみい」

突然後ろから、二筋の刃物傷が付いた真つ黒な顔が“ぬつ”と出て来たのに、兼一は「うわ！」と心臓の鼓動を跳ね上げるも、すぐにそれも落ち着き、ジーンズのポケットの中に入っていた携帯電話を伊田に差し出した……どうやら、驚かれたことに伊田は、特に傷ついてはいないようだ。

「携帯持つてるからって、何が偉いんだ？ このエセ警察マッポ」

差し出された携帯電話を、その大きく太い手で受け取り、自身の携帯電話の赤外線部分に近づけさせる……。

「ワシは物本の刑事テカじゃよ。なんなら、今まで貴様が犯してきた暴行罪で、その手首に手錠ワッパでも掛けてやろうかの？」

言いながら、意地悪な笑みを逆鬼に向ける……。

すると逆鬼は「へいへい、これだから年寄りの刑事ってのは嫌だよ」と、不貞腐れたようにハーレーのエンジンを止め、キーを抜いた。

そうこうしていると、兼一と伊田のメアド＋番号交換は完了したようだ。

「ほれ、とりあえず、どこか適当な店に落ち着いたら連絡をくれ。  
一応金も渡しておこうかの」

伊田は、自身のポケットから高そうなブランドものの長財布を取り出すと、中から“3万円”取り出し、連絡交換の終えた携帯電話と共に、兼一に渡した。

「え！ 3万円もですか!？」

たかが昼食代の料金にしては、あまりにも高すぎる金額に兼一は眼を見開くが、当の伊田は……。

「若いもんの飯つつたら、どれくらい掛かるか予想も付かんからの。それに梁山泊の弟子なら、これくらいは一食で食って当たり前じゃろうて」

「そ、そんな僕は食べれませんよ……」

兼一の困ったような反応に、“ガハハ!”と大口を開け、伊田は笑いながら「なにを遠慮しとるか！ 別に気にせんでも良い！ 若い内は、飯食って体を強くせんといかんからな!!」と豪快に言い放った。

この元気な爺といった伊田のスタイルに、既に兼一は苦笑いしか出せないでいた。

「それじゃ、そろそろ俺らは行くから、ちゃんと場所探しとけよ？」  
「じゃあの、坊主！ また後での!」

そう言うと、二人はそのまま、関帝廟通りを走る車を避けながら、関帝廟を抜け、中華街へと入っていつてしまった……。

取り残された兼一は、とりあえず脱いだヘルメットをセカンドカ一の座席に置き、逆鬼たちとは違って確りと信号機のある横断歩道まで回りこみながら、中華街の街へと足を踏み入れた。

街の風景に合わせた、黄色い天幕や、どこかまだ訛りの消えない片言な日本語を話す屋台の店員。明らかに高そうな外景をした大きな店もあれば、小ぢんまりとした、外にオススメメニューなどが書かれた看板を置く、小さな飲食店もある。また、屋台や飲食店の他にも、点心やら栗くりやらの匂いで客を釣る、土産店も、様々な人々が行きかう通りを歩いていけば、その辺で見ることが出来る……。

更にその中から、広東料理・上海料理・四川料理・北京料理と、店によって料理の種類が違つたとあつては、どの店で昼食を取ろうか、迷うのも必然の事であろう……。

そして、それは、逆鬼に昼を食するところを探しておけと言われた兼一も例外ではない。

「参つたな、いくらなんでも、こんなに店が多いんじゃ、どこが美味いかなんて見分けがつく訳がない……」

先程の関帝廟を潜り、渡された3万円を自身の財布に入れた兼一は。

まるで行き場を失つた子羊の様に、飲食店が嫌になるほど列挙している中華街の道を彷徨い続けている……。

良い匂いがして、これはと思つた場所でも、ただ副業の様に、どデカイ点心を蒸している土産店だったり、それしか扱っていない屋台の様な店だったり……およそ、あの二人も交えて昼食をするには

不向きな場所しか、中華街には慣れていない兼一には見つけれなかった。

また、昼食が遅れて空腹も限界に来ているし、稽古疲れという精神的にも来る疲労感に悩まされている兼一は。この中華街の、様々な人種が乱れる人通りに、若干の嫌気も差し始めていた。

「（夏休みで遊びに来たって言うのは分かるけど。なにも、こんなに人が密集する様な場所に来なくてもいいじゃないか……てか、あの外人の人、大きいな）」

中華街の通りには、日本人以外にも、地元に住んでいる中国人や、観光で来ている海外の人間もいる……そして、日本の街並みとは違った色の風景も相まって、とても視効的には楽しい風景なのだが。

いかんせん……人通りに反して道も狭ければ、その辺で点心などを蒸したりしているせいで、やたら蒸し暑いのだ。

故に、様々な要因で疲れのある兼一には、少々うんざりする様な状況なのだ。

「（あゝ早く涼しい店見つけて、落ち着きたいな……うん？ あれは）」

兼一が冷房の効いた快適な空間を妄想していると、なにやら視線の先……細いY地路の道で、様々な人々が歩く人込みに、どこか見慣れた風貌の人物を見つけた。

その人物は、普段被っている帽子を眼が隠れているんじゃないかと思うくらいに深く被り、肩に手荷物を掛けて、周囲に目立たないように通りを歩いている。

本当なら、その人物は、自身の存在を周囲に溶け込ませ、目立たないように振舞っていたのだが。その人物を良く知る兼一にとっては、特に意味を成すものでもなかった。

というより、明らかに周囲との身長差で、兼一には浮いている様に見えていた。

「馬師父？」

その人物は、先程梁山泊を出発する前に、兼一たちの前から逃げるように去っていった、あらゆる中国拳法の遣い手、馬剣星であった。

剣星の姿を見つけた兼一は、声を掛けようと、剣星が歩いている方へと駆け出す……が。

突然、Y地路の道の死角から、兼一の前に一人の大男が飛び出してきた。

ドン！ 「あだ！」突然左から、自身の目の前に飛び出してきた大男の左肘に、兼一は顔をぶつけてしまった。

幸い、肘の突起ではなく横から当たっただけなので、怪我には至らなかったが……。

「気をつける！！」

兼一に横からぶつかられた大男は、自身よりも小さな相手を見下ろしながら怒鳴り声を上げる。

「すみません！」

その怒鳴り声に、すかさず頭を下げる兼一……。

「……」

だが、本来続く筈の怒声が聞こえてこない……。不思議に思った兼一が、ゆっくりと頭を上げると「あれ？」

目の前に、先程の大男はいなかった。

奇妙に感じた兼一が、消えた大男を探すために、視線を周囲に回す……。

だが、大男は見当たらない。

何故だろうと、首を捻る兼一であったが、次第に、おそらく相手は急いでいたから、もう走って行ってしまったのだろうと当たりを付けるようになっていった。

怖い思いをしないで済んだ……どこか得をした気分になり、再び、人込みに見えた自分の師匠の下へと向おうとした兼一であったが「ちよつと、そこどいて!!」

「え?」

突然、緊迫した女性の声が、先程大男が走ってきた方向から聞こえて来た。

何事かと、兼一が振り向くと……。

「どいてって言うてんでしょ!!」

もはや怒気の孕んだ声音で、胸元が開いたミニスカチャイナ服を着た女性が、突如、何がどうなっているのか分からないと言った表情をする兼一に向って、怒涛の勢いで走りこんで来ていた。

あまりの速度に反応が遅れた兼一は、走りこんできた女性を避けるタイミングを失ってしまう。

そして女性の方も、周りを他の歩行者などで固められていて、とても兼一を避けるスペースを見つけれない……故に。

「シッ!」

「ッ!？」



ミニスカチャイナ娘が、逃げ遅れた兼一の左脇腹に向つて、突然、“縦拳”で突き出される、中国拳法の形意拳、“崩拳”ほうけんを打ち放つた。

この突きは、背筋を伸ばし、軸がぶれないよう安定した足運びで放たれる突きで。

チャイナ娘は走っていた状態だというのに、兼一の左脇腹を打ち抜くため、地面を蹴り出した左足を、頭的位置を上げないように真っ直ぐに前へと送り出し、硬いアスファルトへとそのカンフーシューズを“ドン！”と踏み込んだ瞬間、これまでの動作の運動エネルギーを一瞬の衝撃インパクトに変えて、左拳を槍で相手の腹を貫く様に打ち放つた。

体も地面に突き立てた様にぶれさせず、前へと送つた左足に続く様に、奥足である右足を前に進め。脇を絞めて、肩甲骨を最大限にまで広げ、肩関節でその広がる動きを前へと無駄なく伝え、全ての動作で生み出した力の流れを漏らす事無く、真っ直ぐ突き出された左縦拳は、当たれば確かに無防備であつた“一般人”の体を“逆くの字”に折り曲げ、衝撃を反対の脇腹まで貫通させて悶絶させた後に、道端へと吹き飛ばしていたであろう……だが、放たれた人物は“一般人”ではない。

まがりなりにも、梁山泊の一番弟子だ

自身の左脇腹に、無駄な力みが無いと一目で分かる、鋭くも良く固められた縦拳が飛んでくる。

だが兼一はそれを、普段の稽古で散々体に染み付いた動きで反応する。

相手が突き出した拳は“左”……故に、兼一はその左拳の手首に、己の左掌を優しく添える様にして受け手に使つた。

そして、相手の真っ直ぐに突き出された左拳を、自然に流す様に添えた左掌を体の内へと動かし捌いた……同時に、相手の拳を流せるだけのスペースを確保するために、左肩を前に出した若干の右回りをしていた兼一は、捌いたそのままの状態で、相手の踏み込みを

利用した懐への進入を行う。

前へと踏み込んでいたミニスカチャイナ娘の胸に、兼一の左の肩裏が当たる形で、二人は昼過ぎの路上で衝突を起こす。

だが相手も侮れない……。

前進の力を利用され、自身の懐に相手を入れてしまったミニスカチャイナ娘は。そのまま兼一の肩に、己の胸をめり込ませてしまうかと思いきや、踏み込んでいた足で、これまで疾走していた運動エネルギーを全て受け止め、兼一の体当たりにも似た入り込みを回避した。

そして、驚いた表情をしながら入り込んできた兼一に対して、ミニスカチャイナ娘は更なる打撃を……。

「ちょ、ちょちょちょよ!？」

「え?」

殆ど無駄の無い動きで、己の間合いを一気に潰した相手が、急に情けなく狼狽し始めた事で、ミニスカチャイナ娘が、次に放とうとしていた“右の足踏み”が急停止する。

そして、いきなり情けなくなった相手が、イソイソと自身から距離を取った。

「ちょっと何なんですか! いきなり襲ってくるなんて!？」

兼一の絆創膏を貼った左頬から、嫌な冷や汗が一筋流れていた。

あまりにも突然に、左の“崩拳”を脇腹に打たれそうになった兼一は。自身の咄嗟の対処に驚き、教えてくれた師匠たちに感謝すると同時に、目の前で訝しげな視線をこちらに送ったまま、落ち着いた構えを取っているミニスカチャイナ娘に戸惑いの怒声を上げる。当然だ、いくら温和な兼一でも、突然襲われれば、怒らずにもいられないであろう。

だが、相手の反応は、兼一の予想の斜め上に行くものであった……。

「アンタも日本人ね……ということは、ヤクザどもの仲間？」

「へ……？」

油断無く、されど鋭い視線で構えを取っているミニスカチャイナ娘から出て来た言葉に、兼一は人生始まって以来、なかなか上位の困惑を示す……（一位は当然、梁山泊関係だ）。

「だから、アンタもヤクザどもの仲間かって聞いてんの！」

「え、僕は違いますよ！ ヤクザな訳ないじゃないですか！」

「油断しないわよ……だって、見た目“かなり貧弱そう”でも、今の動きは確実に武に精通している者の動きだったもの！」

「か、かなり貧弱そう……」

初対面の、更に言えば、着ている赤のミニスカチャイナが体のラインにピッチリとしているおかげで見える、あの美羽と比べても差異は無いくらい優美な曲線や、はっきりとした凹凸を描いたプロポーションをしている美少女に、いきなり“かなり貧弱そうな体”と言われてしまった兼一は、目に見えて分かるくらいに、夏の暑さとは反比例するほどの意気消沈を見せる……。

どんよりとした空気……それを身に纏い始めた兼一を見て、構えを取っていたミニスカチャイナ娘が、両横に括った、二つの短い髪を“ツン”と上に逆立てた。

「確かに、アイツ等とは違うみたいね。何て言うのかこう……凄みが足りなさ過ぎるっていのうのかしら？」

言いながら、ミニスカチャイナ娘は、取っていた構えをゆっくり

と解き。目の前で、コンプレックスを深く削られた兼一を見る。

「だけど、こっちが間違えたのは、そっちが急に出て来たのが悪いんだからね！」

「ええ〜……」

ただでさえブルーな気持ちに陥っているというのに、この超理論……もはや突然、襲われた被害者である筈の兼一には、理解不能といった声を漏らすしかなかった。

しかし、そんな兼一の様子を見ても、ミニスカチャイナ娘の理不尽な超理論は止まらない。

「それに、アンタのせいで、折角の手掛かりを逃がしちゃったんだから、責任取りなさいよ！」

「責任って言ったって、僕には君が何を言ってるのかすら分からないから、どうにも出来ないよ」

「私がいま追ってた。勝手にこの街で、日本のヤクザとドンパチやってる、馬鹿な新参マフィアを捕まえるのを手伝いなさい！！ アンタ、見かけによらず、武術だけは出来るみたいだから」

両手を腰に当て、両横に括ってある髪の下に着けている二つの鈴を鳴らしながら、ミニスカチャイナ娘は兼一に言う……どうでもいいが、先程から二人の奇妙なやり取りを、周りの人々がこれまた奇妙な視線で見ていることは、二人とも気付いていない様であった。

勝気なアーモンド形の眼をしたミニスカチャイナ娘の理不尽な要求に、兼一は再び「ええ〜」と困った声を漏らす……ちなみに、兼一はこの時、目の前のシャープに整った輪郭と美貌を持つ女性を見て、（ああ、黙っていれば美人って、こういう事を言うんだ）と、キャラに似合わない、無駄な悟りを開いていた。

あまりに理不尽な事を言われ続けていた兼一が、現実逃避しよう

と、ふと、目の前のミニスカチヤイナ娘から視線を、先程大男が走り去って行った方向へと振り返った。

当然、その視線の先には、先程の大男の姿などなく、見えるのは美味しそうな匂いを放つ屋台や土産屋、中華街の道を練り歩く一般人などだけだ……。

「ちょっと、聞いてるの!？」

合わせていた眼を、突然後ろへと向けられてしまったミニスカチヤイナ娘は、勝気に吊り上ったアーモンド形の瞳を細めながら、憤慨する様に声を荒げる……。

「聞いてますけど、もう行っちゃったみたいですよ？ さっきの男の人……」

気まずそうに振り向き直しながら、兼一が言う。

「なんですってー!! どうするのよ!? 折角の手掛かりを完全に見失っちゃったじゃない!」

現実を突きつけられたミニスカチヤイナ娘は、アスファルトの地面にカンフーシューズで地団駄を踏みながら、悔しさを露にした。

「あゝもう! ようやく調子に乗ってる新参のマフィアどもを、黙らせる事が出来たのに!!」マフィアを黙らせるとか、相当物騒な事を叫びながら、全身で悔しさを表現するミニスカチヤイナ娘。その様子と口に出している非常識な発言から、兼一は「(ああ、やっぱり、武術をやっている人って、どこか変な人が多いんだな)」と、達観した視線を相手に送っていた。

すると、その遠くを見るような視線に気付いたのか。

「何よ、その眼は？」  
「え？」

突然、眼を座らせながら、ミニスカチャイナ娘が聞いてきた。

「その眼は何って聞いているの」  
「いや、別に……ただ、こんな街中で、マフィアを黙らせるとか女の子が言っちゃ、危ないんじゃないかなって、思ってた」

眼を座らせている相手から、視線を反らしながら誤魔化す兼一。  
だが、ミニスカチャイナ娘は、周囲の反応など気にしないかのよう  
に「勝手に、この街を守ってるなんて勘違いしてる、身の程知ら  
ずの新参マフィアなんか、特に怖くも危なくもないわよ」と、あけ  
らかんと言いつつ放った。

「え………」

普段、常識極まりない武術家連中を見てきている兼一は、目の  
前の女性武術家が言い放った言葉に妙な説得力を覚えながらも、ど  
こか疲れた声を漏らさずには負えなかった。

「それに、マフィアって言っても、相手の格も分からないような、  
チンピラと大差ない連中よ？ それがどうして、私に危害を加えら  
れるっていうのよ」

「ははは………凄い自信があるんだね」  
「まあね」

「だけど、相手は集団で、しかもマフィアなら拳銃とか持ってそう  
だし。危ないには変わらないと思うんだけど」

「拳銃持ってようがダイナマイト持ってようが、青龍刀せいりゅうとう持っていよ  
うが。日本のヤクザ連中に、良い様にやられる様な、弱小も良いと

ころの新参者。どんなに危険な状況に陥っても、そんな連中だったら、私一人で十分倒せるの。悪いけど、初対面のアンタに心配される必要なんて、全く無いわ」

「そうですか……」

ああ…… 武術の世界には、常識というより危機感なんてものは、存在しないのか？

嘆くように胸中で、自分も身を置いている世界の非常識さを認識していた兼一であったが……ふと

機嫌が冷めたのか

目の前のミニスカチャイナ娘が、一度「はあ」と溜息を付いてから、兼一に口を開いた。

「まあ、もう見失ったなら仕方が無いわね……」

「すみません」

申し訳無さそうに謝る兼一。

「ところで、アンタは何者なの？ 私の“崩拳”を、初見で捌いたけど。武術家なんでしょ？」

落ち着いている表情は、とても凛々しく、美羽とはまた違った美貌の持ち主だなくつと、関係ない事を兼一は考えながらも、どこか恐縮したように、彼女の問いに答えた。

「はあ、まあ一応」

「何をやってるの？ 捌き方が、少し特殊だったみたいだけど」

先程の、捌きながら背中を相手に預けるようにして懐に入り込んできた兼一の動きについて、ミニスカチャイナ娘は興味深げに視線を送った。

「えっと、柔術に空手に中国拳法にムエタイを習ってます」  
「は？」

何を訳の分からない事を、もう一度言ってみると、言外で語るような視線と仕草を、ミニスカチャイナ娘は兼一に取った。

「え、だから柔術に空手に中国拳法にムエタイを……『中国拳法を片手間でやるなー!!』」

突然、指を折りながら、習っている武術を口にしていた兼一に、ミニスカチャイナ娘が接近し　「この……」突っ立っていた兼一の右足を、大きく踏み込んだ右足で踏みつけ　「無礼者!!」踏み込んだ前足に体が追いつくと同時に、右の打ち上げの掌うた打を、兼一の下顎に力ち挙げた……力ち挙げると同時に、兼一の足を踏みつけていた右足で、更に地面を踏む抜き、その反動で体を垂直に押し上げていたので、ミニスカチャイナ娘の打ち上げの掌打は、まるで突如、兼一の足元から鋼鉄の杭が突き出してきたような錯覚を生み出す程の威力を誇っていた。

ガチィ!!!　と、下の歯と上の歯が衝突する硬い音を発しながら、下顎をミニスカチャイナ娘の掌の下辺り（手首に近い掌で、掌底とも言つ）で打ち上げられた兼一は。首の骨が逆方向にアーチを描くのを刹那のコマで感じながら、脳と視線を昼下がり空へと打ち上げられるのを体感していた。

掌打を天へと挙げ抜いたミニスカチャイナ娘は、スツと打ち終わりの体勢を引くと、直立不動のまま仰向けで地面に倒れ行く兼一を見下ろしていた。

そして、どさっと、兼一の体が夏場の熱くなったアスファルトの地面に倒れた。



「武術をやるなら一つに絞れ！ この優柔不断男！！」

中国拳法を他の武術と同列で修めようとしていた兼一に、相当おかんむりなミニスカチャイナ娘は、下顎を打ち抜かれ、仰向けで倒れ付す兼一に怒声を浴びせる。

だが……。

「はあ、なんだか申し訳ない……」

確実にクリーンヒットで打ち抜かれ、地面に倒れた兼一が、何事も無かったかのように、むくりと地面から後頭部を押さえながら立ち上がった。

「あら？ 意外と打たれ強いのね」

「ええ、まあ、師匠たちからは、よく褒められています。『お前は、やられる才能があるって』」

「それは褒めてるって言わないわよ」半ば呆れた様に、相手の謎の実力に困惑しながらも言うミニスカチャイナ娘……だが、実際は確かに打たれ強いし、先程の動きもあるので、多少は出来る男なのだろうと、ミニスカチャイナ娘は、初対面の兼一への評価を付けていった。

「ふん。とりあえず、もう目的を見失っちゃったし、私は戻るとしようかな」

会話を続けていくうちに、落ち着きを取り戻していったらしいミニスカチャイナ娘は、軽くその細く筋の通った鼻を鳴らしながら、偶然道端で“殴りかかった”兼一から踵を返そうとした。

また、ミニスカチャイナ娘と共に落ち着きを取り戻した兼一も、

この時、そういえばと、当初の目的を思い出した。

故に「あ、ちょっと待ってください！」と、どこかへ帰ろうとするミニスカチャイナ娘を引き止めた。

「うん？ 何よ」

「あの僕、今ここにはいないんですけど。空手の師匠の人と、その友人の人から、昼食を食べるために美味しい店を探しておけて言われたんです。だけど、僕は中華街に詳しくないので、どこが美味しいお店なのか分からないですよ……どこか知りませんか？ オススメのお店とか」

慣れない場所で美味しい店を探すなら、地元民っぽい人に聞く……それを、兼一は相手がしている格好も踏まえながら実践した。

すると、相手のミニスカチャイナ娘の両側に短く括られた髪が、パタパタと、どこか動物が尻尾を振るかの様な雰囲気動き始めた……表情も、先程までの鋭いものじゃなく、どこか綻んだ嬉しそうなものであった。

「そんなこと？ なら、良い所に連れて行ってあげるから」

「え？」

言いながら、ミニスカチャイナ娘は兼一の手を取り。

「私に着いてきなさい！！」

「え、え？ ちょっと、待ってくださいよ！！」

兼一の抗議の声も聞く事無く、人込みをスイスイと避けながら、昼下がりの中華街を爆走していった。

ミニスカチャイナ娘に連れてこられた場所は“逆鱗飲店”と書いてあるデカイ看板が、中華風で細かく繊細なデザインが施された両開き扉の上に掛けられている、なかなか大きい雰囲気のある店であった。

赤を基調とした色使いで、扉の上にある雨除けの瓦屋根には、数張の灯笼（タンロンと言って、日本で言う提灯の事）が垂れ下がっている……。

昼という事で灯笼には、まだ火は灯っていないが、外見だけで美味しそうな事は、流石の兼一にも理解が出来た。

「ここ、私が働いてる店で、中華街でも美味しいって有名な店なんだから！」

言いながら、ミニスカチャイナ娘は。手を引っ張って、中華街の込んだ道を引きずりまわした兼一に、誇らしげな表情で振り返った。

「ええ、なんだか美味しそうなところですね！」

昼頃まで続いた練習終わり、移動疲れ、先程の軽くはあったが少し効いたダメージと……空腹に襲われる要素満載であった先程までの出来事も相まって、心なしか、兼一の声も上がり調子になっている。

その兼一の反応に気を良くしたのか……ミニスカチャイナ娘は「美味しそうなところじゃなくて、美味しいのよ！」と、機嫌良く、兼一の手を引きながら、自身が働く店への扉を開いた。

「良い匂いだ〜」

ミニスカチャイナ娘が店内に入ると、その後ろに着いていた兼一

の嗅覚に、中華特有の食欲を誘う香しい匂いが漂ってきた……。

その匂いに鼻を引くつかせながら、兼一は目の前に広がる、二階まで吹き抜けになつてゐる店内を見回した。

店内は外装の見た目通り、なかなか広く整つた内装で。

中華料理店特有の回転テーブルが取り付けられた、赤い円テーブルが、正方形の店内に数十脚置かれ、吹き抜けになつてゐる天井からは、店の外に垂れ下がつてゐた灯籠が、落ち着いた照明器具として使われていた。また、吹き抜けになつてゐる二階には、この店の従業員がせつせと忙しそうに働いてゐるが、一階にいる客には、特に迷惑がられてはいない様子であつた。

床が鏡の様に確りと磨かれたタイルだったり、基本的に赤や白しか使つてゐないシンプルな塗装の装飾であつたが、そのシンプルな感じが、とても落ち着いてゐた雰囲気を感じ出していたので、非常に印象の良い店内であつた。

しかし店内を見回してゐた兼一が、ふと、その視線を止めた……。

「（あれ？ あの後姿は……）」

兼一の視線の先……店内のほぼ中央に位置する席で、兼一にとって非常に見覚えのある“後ろ頭”が、同じ席で同じ様な“頭”をしている老人と話してゐる姿が見えた。

誰だろう……と、思いつつも、見覚えのある人物が店内にいたのなら、同じ席に座らない事は無い。

それに、梁山泊を出る前の様子も気になる。

そう思った兼一は、視線は見覚えのある“後ろ頭”に向けながら、前に立つミニスカチャイナ娘に「あの、僕、あそこに知り合いがいるみたいなので、あの席がいいです」と、指を指しながら声を掛けた。

「……………」

「あれ？ あの〜……」

だが、返事は返ってこない……。

先程まで短い時間ではあったが、一緒に行動していた事で、彼女の性格は相手に対して八キ八キと喋り、物事に対して自分なりの考えを持っている、非常に人当たりが良く、ハッキリとした性格だと兼一は理解している。

故に、明らかに聞こえて来たであろう言葉を、彼女があからさまに無視することが、少しだけ不思議に思えたのだ……。

すると、困っている兼一を他所に、ミニスカチャイナ娘が、徐々に歩を進め始めた。

「どうしたんでッ……」

背中越しにも分かる……というより伝わってきた“怒気”に、彼女を呼び止めようとしていた兼一の口が止まった。

彼女が一直線に歩を進めている方向は、先程兼一が見つけた、頭頂部だけ綺麗に毛が抜け落ちた“秀頭”を持つ人物がいる席だ。一歩一歩……傍目からは静かに、流れるような足の進め方でも、兼一から見たら、どこか“ズンズン”と大きな足踏みが聞こえて来そうな歩みであった。

そして、進行方向にあった全ての机や店員などの障害物を、不思議な事に、体を“反らす事もせず”避けながら、ミニスカチャイナ娘は、兼一にとって見慣れた秀頭を持つ、“馬剣星”のすぐ後ろで立ち止まり……。

「よつやく見つけたわ！！ “パパ”！！」

言つと同時に、ミニスカチャイナ娘は。座つた状態の無防備な剣星の後頭部目掛けて、ほぼ貫く勢いの右“足刀そくとう（足を寝かせ横側で、

相手を蹴る蹴り）”による横蹴りを打ち放った

「ええ〜ツ!？」

突然、無防備な客に対して、体を真半身に開き、臀部の筋肉を使って腰を前方へと入れた、本気蹴り<sup>マッ</sup>を、後頭部目掛けて蹴り放ったミニスカチャイナにもだが。その娘が、自身が良く知っている工口師父こと馬剣星に向けて『パパ』と発言したことに、兼一は二重の意味で驚嘆の叫びを上げた。

だが、ミニスカチャイナの横蹴りが、馬剣星の後頭部を蹴り抜くと思いきや……「ツ!？」瞬間、無防備に席に着いていた筈の剣星が、兼一やミニスカチャイナ娘の前から姿を消した。

「いきなり“パパ”とは、どこの誰かは知らないが……」

そして、次に剣星が姿を現したのは、ミニスカチャイナ娘の横蹴りが、虚しく空を切った時であった。

現れた剣星は、奇襲の蹴りを外してしまったミニスカチャイナ娘のすぐ後ろに　　　　どういふ動きをしたのか分からないが  
いつの間にかに、何事も無かったかの声で立っていた。

「なかなか良い筋の蹴りネ、でもおいちゃんを蹴るには……」

気取った言い草で、余裕の仕草として眼を瞑っていた剣星は、言いながら、ゆっくりとその眼を開けていく……すると。

「……いやあああ!！」

眼を開けた瞬間、普段工口が絡まなければ理知的な剣星が、聞くも明らかな驚愕の叫びを発した。

叫んでいる剣星に、突然の奇襲を仕掛けたミニスカチャイナ娘は、“キッ！”というアーモンド形の瞳を鋭く光らせた視線を、振り返りながら向けた。

「な、なにッ！？」剣星の叫び声に体を“ビクリ”と震わせた兼一を他所に、ミニスカチャイナ娘が口を開いた。

「そんなに娘と会うのがショックなの？ パパ」

腰に手を当てながら、彼女は声音に怒気を込めた。

「……」自身をパパと呼ぶ彼女に向って、同様を隠しきれない表情を浮かべる剣星……そこに、後ろから兼一が駆け寄って来た。

「師父！ あなたパパって、援助交際をしていたんですかッ！？」

おそらく、エロ師父が、まさか子持ちだとは思えなかったのだから。

兼一が、なかば絶るような表情で、狼狽する剣星に問いかける……が。

「師父……？ え、師父ですってッ！？」

「え？」

駆け寄って来た兼一の言葉を聞いたミニスカチャイナが、更なる怒りを身に纏った。

「どういうことよ！！ 中国に10万人の門下生を残しておきながら、こんな島国で弟子を持つなんて！！」

「僕は見損ないました！ いくらエロに異常なまでの執着心があるからって、援助交際だなんて……え、10万人？」

兼一は、ミニスカチャイナから出て来たワードに、耳を疑った……。

すると　　これまた、どういう動きをしたのか分からないが

兼一の後ろから、先程まで剣星と一緒に席に着いていた、後頭部の長髪以外、頭頂部が不毛地帯の、小さな丸眼鏡をかけた老人が現れた。

老人は、このような状況にいたっても、至つて冷静な口調で、腕を組み長い袖を重ねながら、狼狽する兼一の後ろから声を掛けた。

「剣星はのう、本国にある鳳凰武侠連盟で、最高責任者を務めておるんじゃよ」

突然後ろから掛けられた声に、兼一は驚きつつも振り返りながら。

「え？　アナタは？」

長く手入れされた髭を蓄えながら、細長く年齢を感じさせる皺を持つ老人に、兼一は尋ねた。

「ワシは馬良<sup>ウマラ</sup>。ここでは“白眉<sup>はくび</sup>”と呼ばれておる」

「どうも、白浜兼一です……」

憤慨するミニスカチャイナを他所に、二人は剣星を見捨てながら向き合った。

「剣星から聞いておるよ、梁山泊の弟子よ」

「そうなんですか？」

「まあ、さつき聞いた話なんじゃがの。それと、剣星は援助交際<sup>はなれ</sup>などしておらんよ。あそこにいるのは真正正銘、剣星の娘である馬連<sup>ま</sup>華<sup>んか</sup>。おぬしと同一年で、まだ本国に妻と二人の子供がおる」



「い、意外だ……」

「あの娘はの。最高責任者である剣星を本国に連れ戻そうと、わざわざ日本の学校に留学してまで、ここで働いておったんじゃ」

信じられない……あの美羽と差異がないほど、完璧なスタイルと凛々しい美貌を持つ彼女が、あんなちつさいおっさんの娘だなんて兼一は、そんな思いの込められた視線を、店内で家族騒動を起こす二人に向けた。

「『なんか面倒臭くなつた』からって、お母さんに門下生全部任せてるんじゃないわよ！ 今日こそ連れて変えるわ、この不良おやじ……」

「パパはまだ、本国に帰る訳にはいかないね」

「なに訳の分からない事、格好付けながら言ってるのよ……！」

遺伝子とは、人類とはかくも不思議な生き物か……。

そう感じていた兼一に「どれ、おぬしもここで飯を食っていくか？」と、白眉が後ろから声を掛けてきた。

「え、あ、はい。元々そのつもりだったので……それより、あの二人は放っておいて大丈夫なんですか？」

「大丈夫じゃよ。それより、おぬしはどれぐらいの量を食べれるのじゃ？」

問われた兼一は「まあ、人並みには食べれますけど」と、どこか戸惑いがちに答えた。

「そうか、なら席に着いているといい。すぐに作らせよう」

「あ、すみません、わざわざ」

「いいんじゃないよ、剣星の弟子なら、他人の子ではないからの」

言いながら、白眉は近くにいた、蓮華と同じ格好をしたウエイトレスを呼びつけ、なにやら色んなメニューを出すように指示を出していた。

その様子を見た兼一は、二人を良く知っというような人物が、これだけ落ち着いているのだから本当に大丈夫なのだろうと当たりを着け、言い争っている二人の親子を他所に、赤い円テーブルに向って行った。

実際、二人の言い争いも、そこまで危ない所には進展せず。

現在は、兼一と白眉共々、様々な香ばしい匂いを漂わせる料理を囲みながら、一つの円テーブルの席に腰掛けている……ちなみに、既に兼一は逆鬼と伊田の二人を呼んで、その旨を剣星に伝達済みだ。「で、剣星よ……今回の事、弟子や仲間には教えないのか？」

剣星の向かい側に座る、白く太い眉毛が特徴的な白眉が、世間話でも切り出すような軽い声音で、尋ねた。

「……」その問いに剣星は、一拍の間、思考に眉間を寄せてから、ゆっくりと口を開いた。

「兼ちゃん」

「はふ？」

既に目の前の料理へと手を伸ばし、口に入れていた兼一は突然、剣星に視線を向けられた事に不思議そうな顔をするも、すぐに口に入れていた料理を飲み込むと、改めて師父である剣星に向き合った。

「はい、なんででしょう?」

店内ということでは帽子を脱いでいる剣星は、普段よりも表情の露出が多いように見える……。

故に、兼一に向けられた剣星の表情は、師父の責務を負った者の真剣な表情そのものであった。

心なしか、兼一も背筋を伸ばさなくてはならないと、確りとした聞く体制を自然と取ってしまった。

「今回は、おいちゃんについてくると、確実に危険ネ。確かに、逆鬼どんが付いてきてくれるなら安全かもしれないけど……今回の事は、おいちゃんは他の者に手出しをさせるつもりはないネ。だから今日は、この食事を食べたなら、兼ちゃんは帰るネ」

声音ならいつも通り……だが、込められた意味は何となく兼一にも理解ができた。

普段、非常識を体現したかのような強さや行動を見せる師父が、『今回は危険』と、ハッキリと言ったのだ。それほど、これから己が師父である剣星が挑もうとしている事柄は、兼一にとって命の危機にすら値するのだらう……。

「……………」

「大丈夫、おいちゃんは用事を済ませば、ちゃんと梁山泊に帰るネ。だから、頼むから帰るネ」ウォーデイス「我弟子」

例えば朝から様子のおかしかった師父、そして今も、自身のことを“兼ちゃん”と呼ばずに、本気の頼みを出す師父……これだけ見せられれば、いくら鈍い兼一でも、剣星が何を考えているのかが分かるというものだ。

師父は、確実に命をかけて、今回の事に望もうとしている……。

故に兼一は「いやです！」ハッキリと言い放ち、相手に気構えを組んだ視線を向け返した。

「寝食、鍛錬を共にするのが内弟子なら、悩みや境地も師と共にしたい…… お供します、師父！」

力強く言い放たれた兼一の言葉に、剣星は心中で「（最初の頃は、ビックリするほど成長したネ……）」と師としての感慨に耽りながら。ならばと、こちらも覚悟の籠った視線を兼一に向けた。

「どうなつても知らんよ」

「ええ!!」

二人のやり取りを見ていた白眉と蓮華の二人は、正直、目の前にいる、傍目から見れば優男にしか見えぬ兼一が、まさか、ここまで真っ直ぐに剣星と向き合うとは思ってもみなかった様で。

「（意外と、男らしいところもあるんじゃない……）」

「（良い弟子を持ったのう、剣星）」

二人とも、兼一という真っ直ぐで愚直な男を、確りと認識したようであった……。

弟子の覚悟を見届けた剣星は、なら、話を聞かせようと、兼一に並べられた料理を進めながら、口を開いた。

「前に、兼ちゃんは谷本という同級生と闘ったとき、“馬槍月”はそつげつという名前を聞かれたと言っていたね？」

「はい」

以前、兼一は谷本との闘いが終わったあと、相手が使っていた武

術の事を、同じ中国拳法家である剣星に尋ねた事がある……その際、師の名前を聞かれた時のことも、ついでに話していたのだ。

「その馬槍月とは、おいちゃんの生き別れの兄ネ」

「え！？ 師父つて、お兄さんがいたんですか？」

「似てはいないけど、ちゃんというネ」

確かに、馬剣星に馬槍月は、馬ばつながりで何か関係しているのかと、兼一も予想はしていた。

それに本人から兄だと説明を受ければ、衝撃の事実……とまでは行かなくとも、兼一は自身の師父の家族構成など聞いた事が無かったので、素直に驚いたというのが本音だ。

驚く兼一を他所に、剣星が話しを進める……。

「おいちゃんは、今回。その兄に会いに来たネ……」

「なら、そこまで危ない事でもないんじゃないですか？」

自身の肉親に会いに来た……言葉だけを聞けば、穏やか過ぎる話題だ。

だが、剣星は臉を深刻そうに伏せながら。

「白眉伯父はくびじょうふの話しによれば、近頃この辺で、日本のヤクザと事を構えているマフィアに雇われているそうネ」

“マフィア”という言葉聞いた瞬間、兼一はごくりと息を呑んだ……。

それも当然だろう、普通の人間、普通の常識を持った者なら、マフィアという物騒な連中に抱くイメージは碌なものではない……だが、そんな兼一の反応など気にしないかのように、兼一の対面に座る連華が「マフィアの用心棒なんて、一族の面汚しにも程があるわ

ね」と吐き捨てるように言い放った。

「パパはつまり、槍月そうげつ伯父おじい上を殺しに来たんでしょ？ だったら、さっさと行きましょよ。いくら本国でパパと双壁を成す存在でも、“殺人拳”に堕ちた肉親を放っておくわけないもの」

兼一はこの時、簡単に人を、ましてや肉親を殺しにいかうと言う連華を、本当に住む世界の違う人間なんだなと感じた……そして、それと同時に、自分もその内、同じ様な場所に住むかもしれないという不安にも駆られた。

だが、剣星が連華の言葉に、なだめるような口調で答えた。

「だから言ってるネ、兄さんと闘うのは、パパ一人ネ。そこに連華や兼ちゃんがいたら、正直足手まといネ」

なだめるようで、しかしハッキリと言われた連華は。実際、自分が達人級と渡り合えるとは考えられなかったので「ぐ……」と歯噛みしながら、近くに置いてあった点心を手に取り、機嫌悪そうにかぶりつき始めた。

「それに兄さんは、パパが確り、この手で武術家として決着を着けるネ。もともと、一人で行く予定でもあったからネ」

「ですけど、僕は師父に着いて行きますよ」

話を聞くうちに、殺す殺さないという話題に尻込みしそうな兼一であったが、最初に言った事を曲げたくないという気持ちを込めながら、瞼を閉じたままの剣星に言った。

すると、剣星はゆっくりと瞼を開けながら、兼一に向き直った。

「それは分かっているネ。でも兼ちゃんには、まだ危ない橋は渡ら

せないネ。着いて来るときは、常に連華と一緒に、おいちゃんの後ろに着いているネ」

折角覚悟を決めたのに、少しだけ納得のいかない兼一であったが、実際、自分が今回の“マフィア”だの“ヤクザ”だのといった物騒な騒動で、先人を切つて駆けて行く想像が出来なかつたので「……分かりました」と、渋々といった返事を返した。

「分かつてくれたなら、それで別にいいネ」と、そんな兼一の内心を呼んでか、剣星が優しく兼一に微笑んだ。

「話しは戻すけど、兄さんの居場所も、行動範囲も、既に白眉伯父から聞いているネ。あとは、その兄さんが用心棒をしているマフィアの事務所に乗り込むだけネ」

言いながら、目の前に置いてあつたお茶を啜る……。

どうやら、剣星の話しは、これで終わりの用であつた。

話しを聞き終わった兼一は、朝から剣星の様子がおかしかった理由が理解できた。

確かに、理由は分からないが、自分の肉親を殺していくという大事を控えた状態で、まともな行動を取れというのが難しいことなのかもしれない……さらに言えば、その事を梁山泊にいる人の良い達人達に相談もできず、察知もされてはいけない状況なら、尚更まともな平常心は保てないであろう。

そして、この四人が囲むテーブルに、束の間の静寂が訪れた。

その間は、お腹の空いていた兼一が、目の前にあつた料理に再び手を伸ばしていったり、機嫌の悪い蓮華が、ひたすらに点心を機嫌悪そうに食べているだけであつた。

すると突然、店の入り口である両開きの扉が“バン！”と音を立てて開かれた

店内にいた人間が騒然としながら、一斉に入り口の方へと意識と

視線を向けた。

「白眉さん！！ また日本のヤクザ連中が、地久門に集結して来ますー！！」

瞬間、店内に緊迫した空気が漂い始めた。

なぜなら、すでに店内のみならず、日本でニュースを見ている者なら、現在、日本のヤクザと中国のマフィアが、中華街を舞台に抗争をしていることは知っているからだ。

入り口の扉を開けて入って来た男を見ながら、白眉が席からゆっくりと立ち上がった。

「落ち着け、今までヤクザ連中は、一般人には手を出していない…  
…あくまで“マフィア”が相手という事なんじゃろつて」  
「ですが、奴らは……ッ！」

次の言を吐こうと、男が焦るように口を動かそうとするも……それは、いつの間にかに“自身の目の前まで移動していた白眉”によって止められた。

見れば、その瞬間移動にすら思える動きに、店内の皆は、先程とは違った意味で騒然としていた。

すると、白眉が小声で男に口を開いた。

「ここには普通に食事を楽しむために来た一般人もいるんじゃない？  
少しは考えて喋らんか」

「す、すみません……ですがッ」

「よい、もう既に、向った者がある。お前さんは、店の裏手で休んで下さい」

妙な威圧感を発しながら、冷静さを失った男に言う白眉……。



だが、もう向った者とは誰なのか？

男がそう感じて、店内を見回してみると……「ちよつと、どいて！！」突然、自身を押し退いて、この店の看板娘で有名な馬連華が、店内から外へと駆け出していった。

そして、それに続く様に「すみません、お金はテーブルに置いておいたので、ごちそうさまでした！」と、律儀にお礼を言いながら、男にとって見覚えの無い、右の頬に絆創膏を貼った冴えない男が、連華に続く様にして店内から出て行った。

店から出て、そろそろ16時頃という時間帯の中華街を全力疾走する、兼一と連華の二人……。

既に夕刻も近い時間帯ということで、中華街の人通りも、お昼時よりかはだいぶ減っている様であった。だが、まあ人はいることはいるので、二人は器用に障害物となつている人々を避けながら、既に剣星が向つたであろう、中華街の西に位置する地久門を目指していた。

「連華さん！ 地久門まで、あとどれくらいで到着できますか！？」  
「別に、そこまで掛からないわよ！ それにパパが、もう一人で向つちゃったから、私達が着いた頃には、日本のヤクザ連中なんて片付いてるわよ！」

「え、なら何で、僕たちまで走ってるんですか！？」人通りを避けるのが面倒になったのか、蓮華が近道である小道に入ったのを確認すると、兼一もそれに合わせ、細い路地を減速せずに二人で右に曲がりながら、兼一は先を走る連華の背中に向つて尋ねた。

「にぶいわね、少しは考えなさい！ 日本のヤクザ連中は、なぜか

は分からないけどマフィアだけしか狙ってこないし、新参のマフィアたちも、今まで良い様にやられて来た鬱憤を晴らそうと、必ずヤクザが集まっている場所に向うわ！」

「あ、そうか、なるほど」

近道である細い路地を抜け、二人は地久門へと続く道である長安通りへと躍り出た。

あとは、一直線に長安通りを地久門に向けて駆け抜けていくだけだ。

すると、突然、前を走っていた連華がカンフーシューズを、歩道であるコンクリートに滑らせながら急停止した。それに驚きはしたが、すぐに連動するようにして、兼一も履いているスニーカーを鳴らしながら急停止した。

「どうしたんですか連華さん？」

「運がいいわ……見なさい、マフィアの一人が、あそこの店の屋上で、ヤクザ達を偵察しに来てる」

雨よけ用の天幕がある店に背を預けながら、連華が“ス……”と、兼一にも分かるように、静かに指を、同じ歩道側に建っている建物の屋上へと指した……。

「あ……」見上げるとそこには、四階の屋上の手摺りに掴まりながら、撮影をしているのだろう……地久門の方へと携帯電話を向けている、オレンジといった、おかしな色に髪を染めたスーツ姿の男がいた。

「アンタはちょっと待ってなさい、すぐにアイツを掴まえて、槍月伯父上の居場所を吐かせて来るから」

言いながら、兼一を置いて、四階建ての建物の非常階段へと向お

うとする連華。

だが「待つてください！」連華の足が、兼一に呼び止められた。

「何？」

「僕も行きます」

兼一が言うと、連華が真剣な面持ちで、こちらに振り返った。

「一応言っておくけど、建物の中には十中八九、マフィアの連中が数人いる筈よ……その中には、もしかしたら拳銃を持っている奴もいるかもしれない。いい？ここからは、あなたが居る様な場所とは全く違った“武侠”の世界なの。いくら、あなたが少しは出来る実力を持っていたとしても、経験が無いんじゃないよ……下手したら、命だつて落とすかもしれないのよ？」

言葉自体は厳しいものであったが、連華は諭すように、兼一に自分が住んでいる世界の危険性を語っていった……だが、そんなもので言う事を聞いてしまう人間なら、白浜兼一という男は、ここまで強くなったりはしなかっただろう。

「連華さんは、行くんですよね？」

「そんなの当たり前じゃない」

「なら、僕も行きます。そんな危ないところに、女の子一人で行かせるわけにはいかないでしょう！」

真つ直ぐな眼で、さも当然と言った様に、連華を見る兼一……。

瞬間、「（なんなの、この男？）」「連華は胸に熱い何かが籠ったのを感じたが、すぐにその何かを打ち払い、兼一に背を向けてしまった。

「連華さん？」怒らせたかな……と、そういえばキサラの様に、

女の子扱いされるのを嫌う女性もいるということを出した兼一は、不安そうに連華に声をかける。

すると、背中を向けている連華が、一拍の間を開けた後に、声を発した。

「……なに格好つけてるんだか。いいわ、着いてくるなら勝手にしなさい……ただし、危なくなっても、私は助けないからね？ そうなったら、勝手に死んでなさい」

言つと、連華は黙ってついて来いと言外で語るように、四階建ての建物と、隣りの建物の隙間に出来ている小道へと入っていった。それに、兼一も、一度気構えを組み直すように頷いてから、続いていった。

建物の間にある小道は、コンクリートに囲まれているせいか、どこか陰湿な空気を醸し出していたが、別に、二人はそんな場所には用は無い。用があるのは、四階建ての建物の非常階段だ。

左右をコンクリートに挟まれ、空と前方の抜け道以外に空きの無道であったがために、目的の非常階段は、小道に入り込んだ時点ですぐに見つけられた。

前方の、二人から見えて右手……そこに、ようやく一人が通れそうなの、狭い非常階段があった。

だが、その前には、非常階段を見張る、二人の黒服の男が立っていた。

屋上にマフィアがいるということは、この二人の黒服もマフィアの仲間なのだろう。

その二人のマフィアが、小道に走りこんできた兼一と連華に気付いた。

「おい！ 止まれ！」  
「てめえら、なんの用だ！！」

言いながら、二人の黒服は同時に懐へと、各々の利き手を入れる……。  
しかし、それよりも早く、兼一の前方を走っていた連華が、疾走していた勢いそのままに、コンクリートの地面から飛び上がった

飛び上がった連華は、前方へと体を弾丸の様に飛ばしながら、二人の黒服のうち 体格の良い、非常階段を体で塞いでいる男へと、一直線に突貫していき。

「シッ！！」

グシャツ！ という、前方へと飛んだ勢いと、自身の脚力や体重を乗せた、一本の槍の様に鋭く伸ばしきった飛び蹴りを、相手の顔面へと、何かが潰れる嫌な音を発させながらめり込ませた。  
体格の良い黒服の男は、蓮華のあまりに容赦のない奇襲に、懐に入れた手を出す事無く、後ろへと吹き飛び、非常階段の段差に後頭部をぶつけ、沈黙した。

しかし、この小道にはもう一人、黒服の男がいる……その男は、既に懐から型の分からない9ミリオートの拳銃を取り出し、飛び蹴りから着地した連華へと、小さな銃口を向けていた。

だが、こちらも別に一人ではない……。  
9ミリオートの引鉄に指を掛けようとしていた黒服の男に「やあ ああ！！」と、己を鼓舞する雄叫びを上げる兼一が、先程の連華同様、走りこんできた勢いそのままに、とび蹴りをかましてきた。

最初の、あまりに鮮やかな奇襲に気を取られていた黒服の男は、連華に視線を向けたまま、兼一の飛び蹴りによって、右側頭部と首

に強い衝撃が走ったのを感じた……が、感じたときには、黒服の男は持っていた9ミリオートを手放し、蹴られた衝撃に沿って、横飛びで地面へと体を投げ出していき、意識も暗闇へと手放していった。「さっさと行くわよ！」

兼一が着地するのを見もせず、連華は狭い非常階段を一気に駆け上がったいく。

それに続いて、兼一も非常階段の始めに倒れ付している、体格の良い黒服の男を飛び越えながら、非常階段を駆け上がったいく……。すると、今の一瞬の騒ぎを聞きつけたのか、三階の非常階段へと出る扉から、また二人の黒服が飛び出してきた。

だが、今度の二人は様子が違う……。

「トンファーに青龍刀ツ!？」

先に行く連華よりも、兼一の顔が驚きに染まる。

しかし、既に三階へと辿り着きそうであった蓮華に、一切の迷いは無かった。

相手も狭い非常階段のせいで、複数人いたとしても、結局は一对一をせざる負えない……。

故に、蓮華は相手が武器の間合いを計ろうとする前に、一気に接近していったのだ。

だが、ここは段差のある環境……当然、上から狙う方が、相手のことを良く観察出来るし、一撃でやられてしまう可能性のある頭が相手の手が届かない高い位置にあるのだ。

武器持ち相手に、この状況は圧倒的に不利だ。

兼一が、そう思うよりも前に、トンファーを両手に持った男が、三階の階段を駆け上ってきた蓮華の左頭頂部に向けて、右逆手で持っていたトンファーを回し、棒の様にリーチを長くしながら、斜め

に振り下ろしてきた。

当たるッ！？　　そう階段を駆け上がった兼一が感じた瞬間、蓮華が階段を一気に上りきり、上体を屈ませながら相手の懐へと潜り込んでいた。

蓮華の背中の上を、斜めに振り下ろされたトンファーが虚しく空を切る……同時に、男の懐へと潜り込んでいた蓮華が、前進する速度を緩める事無く、右の拳を左の手で押し込む、一直線に飛ばす右肘鉄で、男の鳩尾を貫いていた。

トンファーを振る際に回す筈であった腰を、回す前に止められ、開ききっていた体の隙を突かれた男は、そのまま蓮華にもたれかかる様に、前のめりで体を沈ませていく……しかし、蓮華は倒れてくる男を支えようとはしない、する必要が無い。

前のめりで倒れ掛かってくる男を、鬱陶しそうに右手で払い除けると、目の前には青龍刀を両手で振り上げた、巨漢の男が立っていた……もう、懐には間に合わない！！　　もはや感覚で判断した蓮華は、相手が重い青龍刀を振り下ろすと同時に、非常階段の手摺りに背中を反らせながら、ギリギリのタイミングで振り下ろされた青龍刀をやり過ごした。

だが、向かいの建物へと頭頂部を向けるほど、大きく反らせてしまった体を戻すには、それなりの時間がかかる……そして、蓮華が胸を張るほどに反らしていた体を戻した時には、目の前の巨漢の男は、振り下ろしていた青龍刀を引き戻し、体を戻したばかりの蓮華の体を、横薙ぎにぶった切ろうと、既に二の太刀を構えていた。

まずい……蓮華が、“ゾクリ”とする嫌な寒気を感じた瞬間、自身の視界に、階段を一気に駆け上がってきた兼一が現れた。

そして、巨漢の男が、突然入って来た兼一もろとも、重たい青龍刀を、蓮華から見ても、左から横薙ぎに振り放った　　しかし。

兼一が、青龍刀を振るう相手の懐に対して、階段を上ってきたスビードそのままに突っ込み、相手が両手で握っている青龍刀の柄部分を、下から思いつきり両手で掴み、前へと押し込んだ。

瞬間、相手が振るっていた青龍刀の軌道が、一気に上へと反れ、連華の頭の上を、ギリギリの間で通り過ぎた。

重い青龍刀を、軌道が上に反らされたとはいえ、振り切ってしまった巨漢の男は、兼一に青龍刀を握っている柄を、下から前に押し込まれていたことも相まって、バランスを一瞬だけ崩してしまう。

だが、柔術を習っている兼一にとって、この一瞬の“崩し”は

相手の柄を握っていた右の手首と手を両手で取り、肩の関節を決めるようにして捻り上げ、相手を後ろへと振り返りさせ。

勝負を決める、決定的なチャンスとなる

肩を上げながら振り返った相手の右腕を、両手と自身の重心を下に切り落とすようにして、兼一は下に叩き付けた。

ドンッ！！ と、巨漢の男の後頭部と背中が、非常階段の地面に衝突する音が、周囲に響き渡った。

複雑かつ繊細な、更に言えば、どんな原理で投げているのか分からない技に助けられた連華は、一瞬呆けたような顔をするも「……あ、ありがとう」と、顔を赤らめながら、一応の礼を、気を失った巨漢の右手を放した兼一に述べた。

だが、兼一は、先程の蓮華の素早い判断を真似してか「早く行きましょう！ 連華さん！」と、先に屋上へと続く非常階段を駆け上がっていつてしまった。

「もう、なんなのよ……」

駆け上がっていく兼一に続きながら、連華は、周囲には確実に聞こえない、どこか不貞腐れたような呟きを漏らした。

屋上へと辿り着いた兼一は、既に開いていた鉄格子の扉を素通り



しながら、先程、突入する前に見つけたオレンジ色の長髪をしたマフィアの男を見た。

続いて、連華も、緑の塗装の地面が鬱陶しい屋上へと辿り着いた。先程見つけたマフィアの男は、既に地久門へと向けていた携帯電話を戻し、今はディスプレイをひたすらに覗き込んできた。

「その男、黙ってこっちの言う事を聞きなさい。建物を見張っていた四人の仲間は、もう私達が倒したから、味方なんて頼りにしない事ね」

軽いカマ掛け……これで、余裕そうな顔をするなら、まだ建物のなかに仲間が居て、非常階段から登ってくる可能性がある。だが、逆に焦ったような顔をするなら、そいつは馬鹿な奴だと決定する。

そして、相手の男が取った行動は……。

「うるせえんだよ!! 大体、なんなんだてめえらは!？」

後者の馬鹿な奴に決定のようだ。

どうやら、駆け引きも出来ない、ただの小物……そう判断した連華は、前にいた兼一を追い越しながら、オレンジ色の長髪をしたマフィアの男へと近づいていった。

「アンタ、馬槍月を知ってるわね？」

「そ、それがどうしたんだよッ!？」

男が格好付けでかけていた、黒いサングラスごしからでも分かる程に、連華の言葉を聞いた瞬間、動揺の色が男の顔から滲み出ていた。

「そう、知っているのね」連華は、自身の間合いにマフィアの男がちょうど入ったところで、歩みを止めた。

「し、しし知ってたら、どうするってんだ！」  
「別に、縛り上げて、居場所吐いてもらうだけよ」

連華から放たれる威圧感に、既に味方を失ったマフィアの男は、見るからに狼狽していく……。

すると突然、マフィアの男が、今まで大事そうに持っていた携帯電話から、着信音のデジタル音が鳴り始めた。

その携帯の着信音に、マフィアの男の表情が、どこか助かったと言つかのように綻び始める……しかし、ディスプレイに表示された番号を確認した途端、表情を一変させて、「ちくしょう！！」と怒りを露にした。

「どうでもいいけど、さっさと出なさい」  
「くッ！」

冷たく言い放つ連華……実際、ここで電話に出させれば、大なり小なり、中華街を騒がすうちの一つの要因、新参者のマフィアの情報を得られるかもしれないのだ。出させない手はない。

連華に促された男は、齒噛みした顔をしながら、携帯電話に「ハズフリーにしなさい」出た。

「何だ！ 今、てめえの話しを聞ける耳はねえんだ！！ 下手な報告だったら、いらねえから今すぐ帰って来い！！」

『あ、お前だれよ？』

報告……そして、この言葉遣い。

おそらく、部下からの電話だったのだろう……だが、ハズフリーにしてある状態の携帯電話から聞こえて来たのは、男にとって全く聞き覚えの無い声であった。

むしろ、連華の後ろに控えていた兼一が「あれ……？」と、何かに気付いたかの様に反応していた。

しかし、聞き覚えが無くとも、頭に血が昇っている男は、話しを続けていく。

「誰って、てめえ！ 口の聞き方もわかんねえのか、この糞野郎！ とにかく、どうせ横須賀から帰って来る、ヤクザの幹部を仕留めそこなっただろ！ いいから早く帰って来い！！」

『いや、だから誰よアンタ？ 間違い電話じゃない？ てか日本語話せよ』

「てめえから掛けてきたんだろっが！！？ とうとう頭も沸いちまいやがったか、この猿野郎！ 日本のチンピラ崩れの teme を、わざわざうちに入れてやった恩を忘れたのか！」

電話越しの相手から、面倒臭そうに日本語を話せと要求されたマフィアの男は。汚いツバを撒き散らしながら、憤慨を露にし、相手にも伝わるように、律儀に日本語で怒声を浴びせた。

しかし、それでも相手方の態度は変わらず……むしろ、更に態度を悪くさせていった。

『いや、俺チンピラみたいな柄の悪い人間じゃないし。てか、だから誰だよお前？』

「てめえがチンピラ……うん？」

日本語で会話をし始めると、マフィアの男が、漸く、なにやら様子がおかしい事に気付いた……。

いくら部下が大勢いようとも、メンバーの声ぐらいは認識している。というより、電話でのやり取りも多いので、認識していないと不味い。だが、ほとんどのやり取りが日本語ではなく、本国の地方独自の訛りも混ざった中国語だ。

故に、これまで気付けなかった……なにやら、電話越しの音が、認識していたものとは違う事に。

「誰だてめえ……その電話の持ち主はどこにいった」

マフィアの男は、訝しげに携帯越しの相手に向って尋ねた……すると。

『私メリーちゃん、電話の持ち主なら、今、私の視線の向こうで、敵ついマグナム的にされてるよ!』

ふざけた様な、無理矢理作った甲高い声で、電話越しの相手は、マフィアの男を馬鹿にするかのように茶化し始めた。

「てめえッ!」

電話の相手に叫ぼうとした瞬間、電話の向こう側から“ガアアン!!”と、およそ普通の拳銃とは思えない、重量感のある発砲音が響いてきた。

「んなッ!?!」

仲間がやられた、そう直感したマフィアの男が、顔を青ざめさせた……が。

『おゝすげえな。本当に、頭に乗つけた“財布”だけ打ち抜きやがったよ……』

『まね〜 この銃なら、私はあの時、アナタには負けなかったのよっ。』

『てか本当に敵ついな、その銃?』

『S&WM500……そのハンターモデル。猛獣だつて当たればイチコロの、素晴らしい50口径よ』

『はよく撃てるな？ 反動とかつて、凄いつて聞いたことあるぞ？』

『私は特別だから、これぐらい大きな物じゃないと、満足できないのよ』

電話の向こう側から、感心するような男の声と、どこか妖艶な響きを持つ女性の声がしてきた。

仲間をやられたと勘違いしたマフィアの男は、そのこちらの事を全く考えていない相手の態度に、更なる怒りを露にした……そろそろ、米神の血管がやばい具合に浮き出ている。

「てめえ、どこのどいつだ！！ ぶつ殺してやる！！」

『私メリー』

「ぜつてえぶつ殺す！！」

どこまでのふざけた野郎だツ！

もはや目の前に、二人の敵がいる事も忘れて、マフィアの男は、持っていた携帯電話を、緑色の塗装が施された地面に叩きつけようとする……が。

パアアアンツ！

と、男が携帯電話を振り上げたのと同時に、これまで黙って聞いていた連華が、男の横っ面を、軽い右の縦拳で打ちぬいた。

『おお、なんか変な音した！』

ハンズフリーにしてある状態の携帯電話が宙を舞う中、驚いた様な声が聞こえて来た。

それを連華が、倒れ付す男を無視しながら、片手でキャッチする

と。

「で、結局、アンタは誰なの？ こっちも時間が無いの、早く言いなさい！」

どうやら、これまでのやり取りに嫌気が差したのか。気の短い連華が、電話ごしの相手に怒声を浴びせた。

『うん、女か……』

「そうよ、悪い？」

連華が言うと、後ろから兼一が、連華の肩を叩いた。

「何よ？ 今はアンタの出番なんて無いわよ？」

不機嫌そうに振り向きながら、なぜか兼一を睨みつける連華……。しかし、兼一は落ち着いた、というより、むしろ嬉しそうな表情で「大丈夫、多分、僕の知っている人だよ」と、連華に言った。その言葉と表情に、連華は訝しげな視線を向ける……。が、暫くすると、渋々といった感じで、兼一に携帯電話を手渡した。

「もしもし、聞こえてる？」

連華から携帯電話を手渡された兼一は、そのまま、どこか親しい友人に話しかけるように、携帯電話に向けて声を掛けた。

その声に、携帯電話ごしの相手も『うん？』と反応する……。

「久しぶり、多分じゃなくても、亮平君だよな？」

単刀直入に、相手の名前を嬉しそうに言葉にする兼一……。その声

に、電話越しの相手、“鬼島亮平”も『その声……兼一かつ！？』と、驚いたように反応した。

「もう一週間以上かな？　今まで、どうしてたの？　連絡が繋がらないって、皆心配してたよ？」

『いや……まあ、連絡の方は、携帯割れちゃったからしょうがないとして。それより、何で、お前が“マフィア”の近くにいたんだ？』

世間話でもするかのように尋ねられた言葉は、本来、普通に生活していれば異常とも言える事。

故に、電話の向こう側で、今何をしているのかも分からない亮平は、真つ先に兼一に尋ねた。

その問いに、兼一は「ちよつとね」と、困ったように答えた……。

『ちよつとねって……まあ、とりあえず余裕そうだから良いか。で、さつき出た、女の声は誰なんだ？　風林寺さんじゃなかったみたいだが……もしかして、乗り換えたのか？』

「ち、違つよ！？　の、乗り換えるだなんて、そんな……！」

「乗り換える？」

兼一を意地悪に茶化す亮平……それに過剰に顔を赤らめながら反応する兼一。そして、その過剰に反応した兼一に、むすつとした顔で、座った視線を刺す様に向ける連華。

ハンズフリーの携帯電話だけはあるが、その三人が会話する光景は、およそ、マフィアだとかヤクザだとかが関係なくなるほど朗らかな空気で……。

兼一の表情が、優しく微笑んだ。

「でも、本当に良かった……さすがに心配しちゃったからさ」

亮平の声音も、済まなそうに……。

『そいつは悪かったな……まあ、俺はこの通り元気だから安心しとけ』  
「うん」

兼一の返事を聞くと……何の前触れも無く、亮平は兼一との通話を一方的に切った。

兼一との連絡を一方的に切った亮平は、先程、自分達を襲撃してきた、おそらく中華街のマフィア達を一瞥しながら。その右手に持っていた、相手から奪った携帯電話を、精密機器なども含んだ部品をプレス機で押し潰したかの様に握り潰した……まるで空き缶を一瞬にして握り潰すかのように、軽々と、その大きな手で携帯電話を握り潰す様は、正しく、正真正銘、あの“掌鬼”そのものであった。周辺の様子は、マフィア達の黒塗りの車が“短いタイヤ痕だけを残しながら”数台横転して……一台は、国道でもある広い道路のガードレールに“天井をぶつける形”で横転し、また一台は、携帯電話を握り潰した亮平の前で、無様に全てのガラスを押し割りながらひっくり返っている……。

他にも、こちらの車線と反対車線を仕切るための、仕切りの草やガードレールに正面から突っ込んでいる車もあれば、亮平達がいる地点から大きく前に出た所で、ハザードランプを着けっ放しで静かに停車しているマフィアの車もある……スモークガラスを貼った、車の中を覗いてみれば、運転席も含めた四人掛けの座席に座っていた、全ての男達が、各々箇所は違うが“頭を爆ぜさせながら”即死していた。フロントガラスを見れば、何かとてつもない衝撃に襲われたかのように、横楕円形の大きな風穴を開けていた。



既に普段、普通に平和な交通状況しか見せない、この一般人も使う道路で起こった、この惨事に。周辺からは野次馬達が集まり、亮平が見据える方向では、横転した車や、亮平達のせいで小さな渋滞が起き始めていた……。

その様子を冷静に、面倒臭そうな視線で見る亮平の姿は、引き締まった臀部や下腹部、いや……もはや恥部以外全てを晒した“白い六尺ふんどし一丁”という、なんとも奇抜な……というより、大胆な格好であった。だが、別に亮平の表情に、羞恥心はない。むしろ、どこか普段よりも冷静そうな面構えであった。

「もう済みやしたかい？」

そんな、ふんどし姿の亮平の後ろから、まるで漁師の様に黒々とした肌をした、明らかに堅気ではない雰囲気撒き散らす、スキンヘッドの黒服男が、酒焼けした低い声で尋ねてきた。

男の顔は、普段は厚い上に暑苦しい、頑丈そうな顔をしているのだが、この時ばかりは、鋭い眼光で、見るものを黙らせる様な、むしろ寒気すら感じる表情をしていた。

だが、そんな男に、亮平は何の気もなしに「ああ、すぐに出る」と言いながら、振り返った。

「中華街に残つとる、ワシの息子たちから入って来た情報で、金城の奴は既に、地久門で部下集めながら待機しとるようです」

訛りの効いた口調で、振り向いた亮平に言うスキンヘッドの男……。

だが亮平は、その情報を当てにする様子もなく「横岸、お前なら、どう思う？」と、片手を、その鱗の様に筋肉が筋別れしている横腹に当てながら尋ねた。

「まあ、確実に餌でしような……金城の奴が、んな無駄に相手を挑発するような行動を取る筈がありやせん。それに、地久門だと、加賀町警察署に近いですからね……おそらく、反対側の東にある天長門の方から、時間差で出てくるでしょう」

「そうか、なら早く車を出せ。道は、お前の好きにしたらいい」

亮平が、そう言うと、東堂会の幹部として、神奈川、主に横浜を取り仕切っている“6代目東堂会々長、鬼島組舎弟頭、三代目横岸組々長”横岸港は。「へい！」とドスの効いた返事を返し、首につけている金ネツクレスをジャラジャラと鳴らしながら。この惨状の最中、静かに歩道側に横付けされていた、黒塗りのロールスロイスに駆けて行った。

ほとんどリムジンと言っても過言ではない、重厚感溢れるデザインの高級車からは、黒塗りや乗車していった者も相まって、とてもじゃないが一般人……つまり、堅気が関わるような空気は漂ってはならず、周囲の野次馬として集まってきた一般人は、なるべく視界にすら入れないようにしていた。

だが、そんな威圧感すら放つ車の後部座席には、一人の女性が、静かに背筋を正しながら座っていた。

その女性は、物腰や漂わせる香りすら、凜とした印象を周囲に与え……輪郭は細く、眼は可愛いと言うより、綺麗と言った方がしっくり来る大きさで。流れるように伸ばされたストレートの黒髪は、黒曜石の様に見るものを漆黒に引きずり込む美しさを誇っている。また、彼女が身に纏っている着物ごしからでも分かるように、胸はそこそこの大きさで、腰も足も細く、更に170cmという身長の影響で、傍目から見れば、本気で抱いたら壊れてしまいそうな印象すら持たせていた。

華奢な日本美人……こう称しても良いほどの美貌を持つ女性の名は、鬼島桜。

鬼島亮平の妹で、“二つ下の十四歳”だ。

桜は、その優美な曲線を描いた眉毛の端を上げながら、横岸に続いて“裸足”で歩いてきた亮平を、後部座席のガラス越しから見つめていた……。

それに気付いた亮平であったが、ふと振り返り、先程、兼一と連絡を取る前に起こした惨状を見た。

数台の車は全て横転し、他に出て来たマフィアの男達も、アスファルトの道路の上に、各々違う重症を負いながら、倒れ付している…… 歩行者側のガードレールを見れば、コンビニなど普通の店も目に付いたが、それよりも、ガードレールに持たれかかり、白目を向きながら天を仰いでいるマフィアの男が目についた。この者は、先程、亮平が携帯電話を奪う代わりに、もう一人の同伴者の武器を見てみようとするに遊んだ男だ。

「やりすぎたかな……？」

遊んだ男の、無様に開かれた足の中心を見れば、アスファルトの道路に、情けなく放尿をしてしまった跡がある……。

惨状を見つめていた亮平に、後ろから肩を叩くものがいた。

亮平は「うん？」と気付き、自分達の車が停めてある方向を見直した。

そこには、シヨートの金髪をボブカットにし、その元々細かった輪郭や、整った顔立ちを際立たせた。メリハリのある体のラインを、まざまざと見せ付ける様なフォーマルスーツを着た、白人女性が立っていた。

その女性の名は、レベッカ・チェンバース……レベッカは、右手に持っていた、S & amp; W M 500のハンターモデルを弄びながら、魅惑的な膨らみをもつ唇を動かした。どうでもいいが、S & amp; W M 500というマグナムは、もともと凄まじい反動を抑えるために（実際には気休め程度にしかなくていないが）、2?以上の重量を持たせているため、レベッカの様にクルクルと回したり、

弄んだりするには、とても向いていない銃なのだが、どうやら、女性である筈のレベッカには関係が無い様であった。

「行くんでしょ？」

不思議そうな表情を自身に向けていたレベッカを見た亮平は「そうだな……」と、溜息交じりに答えた。

「どうしたの？ 電話してた時とは、エライ違いね」

答え、歩き出した亮平の後ろから、履いているヒールの足音をカツカツと鳴らしながら、レベッカが着いて来る。

そのレベッカに、亮平は車に向いながら、振り返りもせず「さあ？ 起きたばっかだからじゃね？」と、他人事の様に応えた。

そして、二人はそのまま、この道路に広がる惨状を放置しながら、何事も無かったかのように車に乗り込み、再び目的地である横浜中華街を目指した。

第五十八話 横浜中華街編2（後書き）

ラストの方、完全に集中力切れです。

というより、早くオリジナル小説の方を書きたいと思うばかり、かなりいい加減な文章を書いてしまった様な気がします。

おかしいところがあれば、言ってくれればと助かります……。

お知らせ。

一応、亮平を出すまでに漸く至ったので、少し二次小説の方は充電させて頂きます……少し、二次を書くのに疲れてしまったので。

その間は、オリジナル小説の方をキリが良い所まで書いていこうと思っっています。

ですので、大体二ヶ月……いや、忙しくなる事も踏まえて、もう少しの期間、二次は書かないと思います。

大変身勝手ではありますが、申し訳ございません。

オリジナル小説を、どうしても書きたくて……。

ではノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7425n/>

---

史上最強のド素人

2011年5月25日17時00分発行